

# アジア・アフリカ 言語文化研究

JOURNAL OF ASIAN AND AFRICAN STUDIES

No. 63

March, 2002

## 目 次

### 論 文

- |  |                    |    |
|--|--------------------|----|
| 類型分類の再検討—孤立語の視点から .....  | 峰岸 真琴              | 1  |
| On Endoclitics: Some Facts from Degema .....                   | KARI, Ethelbert E. | 37 |
| タージ・マハル・コンプレクスのプランについての新解釈<br>及びアフマド・ヤサヴィー廟における終末的シンボリズム ..... | 山田 篤美              | 55 |
| 「アレクサンドリアの虐殺」再考 .....  | 勝沼 聰               | 81 |

### 資料・研究ノート

- |   |                   |     |
|---|-------------------|-----|
| M. K. ガーンディーと日本人—日中戦争をめぐって— .....   | 内藤 雅雄             | 125 |
| ブルキナファソ・マリ・セネガルにおける学術研究体制の動向<br>—ワガドゥグ大学・マリ大学の学術研究機構、セネガル国立<br>公文書館収蔵資料、およびコートディヴィオワールの政治情<br>勢について ..... | 真島 一郎             | 175 |
| Social Conflicts, Resource Distribution and Social Justice in Nigeria .....                               | UJOMU, Philip Ogo | 197 |
| クリア語動詞アクセント試論 .....   | 湯川 基敏             | 229 |
| アラビア語エジプト方言の未完了形の用法 .....   | 榮谷 温子             | 265 |
| 池端雪浦教授—略歴・研究業績 .....  |                   | 303 |
| 家島彦一教授—略年譜と主な研究業績 .....   |                   | 311 |
| 森幹男助教授—略歴と作品リスト .....   |                   | 319 |
| 内藤雅雄教授—略歴と発表一覧 .....  |                   | 325 |

東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所  
RESEARCH INSTITUTE FOR LANGUAGES  
AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA (ILCAA)



【論 文】

## 類型分類の再検討—孤立語の視点から

峰 岸 真 琴

(アジア・アフリカ言語文化研究所)

### Traditional Typology Revisited: From the Viewpoint of Isolating Languages

MINEGISHI, Makoto

Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

In modern linguistic typology, the notion of inflectional, agglutinative, polysynthetic and isolating languages, which dates back to von Humboldt, is regarded as obsolete. One of the typical criticisms of traditional typology is that of Spencer. The main points of his criticism are: it is incoherent because four types are not discrete but a continuum, it is incoherent in that the same language can be classified differently at different levels of language structure, and it says virtually nothing about the nature of compounding in languages or about the way this relates to syntactic processes.

The purpose of this paper is to re-examine the typology proposed by von Humboldt, modified by Sapir, and then by Kohno. The Characteristics and aims of each proposal are described to show the following points. Von Humboldt's definition of morphological typology reflects his idea that word formation is related to the mental process of forming a logical judgment into a sentence; Sapir's proposal on the typology was based on his classification of the grammatical concepts which are used for forming sentences, Kohno proposed syntactic types, i. e. an Indo-European and an Altaic type. It follows that the above proposals on morphological typology reflect each scholar's view on forming sentences, and that none of them were made without considering syntactic process.

The paper also illustrates how the above scholars see the so-called isolating languages like classic Chinese. It is claimed that in spite of disputes as to the distinction between fusional and agglutinative types, the existence of the isolating type has been secured and has never been seriously questioned. Using the notation which the author proposes, a word can be formalized as L, G, where L stands for lexical property, G for grammatical property, the parentheses for a syntactic domain. Thus, a sentence, which includes more than one word, is represented as a set of Ls and Gs. In this paper, the idea that a sentence must include G (s), i. e.

---

**Keywords:** morphological typology, morphosyntax, isolating language, Humboldt, Sapir  
キーワード：形態類型論、形態統語論、孤立語、フンボルト、サピア

grammatical properties realized as linguistic forms at morphological and/or syntactic level is called ‘morphosyntactic hypothesis’, which is prevalent in modern linguistic theories. It is claimed that according to this hypothesis, a word in the isolating language, which is represented as L, i.e. not having Gs in a word, cannot be properly treated and is out of the scope of most grammatical theories. The problematic issues, which result from the failure of applying morphosyntactic hypothesis to isolating languages are pointed out, such as case-marking, defining grammatical categories, treating the serial verb construction, defining a sentence in relation to a predicate, compounding sentences, modalities and the topic-comment structure. These basic concepts common to modern linguistics are claimed to be reconsidered in view of the existence of isolating languages.

- |                    |                      |
|--------------------|----------------------|
| 1 類型分類について         | 2.4.2 河野の古典中国語・孤立語観  |
| 2 語の形態類型論          | 2.5 コムリーの形態的類型論      |
| 2.1 フンボルトの言語観      | 2.6 スペンサーの批判         |
| 2.1.1 文と類型         | 3 類型論の形式化の試み         |
| 2.1.2 フンボルトの屈折語観   | 4 考察                 |
| 2.1.3 フンボルトの膠着語観   | 4.1 形態類型論のまとめ        |
| 2.2 フンボルトの孤立語観     | 4.2 孤立語分析上の問題点       |
| 2.2.1 中国語の基本語順     | 4.2.1 格表示と格          |
| 2.2.2 中国語の動詞構造     | 4.2.2 文法範疇および語類      |
| 2.2.3 中国語の対句、対比    | 4.2.3 動詞連続と補助動詞、動詞句  |
| 2.3 サピアの言語観        | 4.2.4 文と述語           |
| 2.3.1 サピアの言語類型論    | 4.2.5 文の相互関係：複文と並置   |
| 2.3.2 サピアの孤立語観     | 4.2.6 動詞連続とモダリティー    |
| 2.3.3 サピアの類型の形式化   | 4.2.7 「提言—評言」構造と文の定義 |
| 2.4 河野の形態類型論       | 4.3 終わりに             |
| 2.4.1 屈折語・膠着語と統語原理 |                      |

## 1 類型分類について

いわゆる「屈折（融合）語、膠着語、孤立語」あるいはさらに「抱合語」を加えた古典的言語類型は、近代的言語学が成立する以前の19世紀初頭から論じられてきた。現代の言語学の見地からは、当然これにさまざまな批判を加えることも可能であり、また類型分類の欠点を補うべく修正が加えられてきた。結果として、古典的類型論という言葉で共通に括られながらも、論者によって分類の觀点には様々な違いが存在する。

本論ではまず類型分類とは何かを確認した上で、フンボルト、サピア、河野六郎、コムリーの形態類型論の特徴を明らかにする。同時にこれらの類型論がそれぞれの類型を、中でも孤立語をどう捉えてきたかについて述べる。これによって、語を基盤とする上記の類型分類は、本来それぞれの言語観に基づいた、語の文中における統語機能を考慮したものであったことを論じる。併せて、これらの類型分類間の異同や、近代言語学的見地からの形態類型論に対する批

判にも拘わらず、「孤立語」という類型そのものの存在については、一様に認知されていることを示す。

語の形態に基づく類型論は、語の出現環境としての文をどのように捉えるかという「文」観を反映する。この意味で、形態類型論を文の統語原理の類型化の試みとして捉え直し、さらには言語理論の類型化に発展させることも可能である。河野六郎の印欧型およびアルタイ型という統語類型論はこの意味で注目に値する。本論では、サピアの語の形式化を発展させて、語の形態類型論を形式化することにより、これまで提案された語の形態分類の特徴と問題点を明確化することを試みる。この形式化によると、膠着語、融合語は、ともに語の内部構成要素として、語彙的特質  $L$  および統語的特質  $G$  を含むため、 $\{L, G\}$  と形式化できる。両者の違いは、 $L$  と  $G$  との接合の手法と、語としての統合の度合いによる違いである。これに対し、孤立語は語内部に文法形式を含まないため、 $L$  と形式化できる。

語を  $\{L, G\}$  のように、内部に語彙的特質と統語的特質とを含むものとすると、文はその連続体であるから、文には統語的特質  $G$  が何らかの言語形式（語順を含む）で示されていると仮定できる。このような語および文の捉え方を形態統語論（morphosyntax）的な観点と呼ぶことにする。この形態統語論的観点は、西欧の言語観、文法理論の多くが共有するものであるが、このような言語観に基づく統語理論は、孤立語のように、語に統語的特質  $G$  を含まない言語に無批判に適用することは危険である。本論では、統語原理の類型化の反映としての「文」観と統語理論とが内包する問題点を、孤立語研究の観点から明らかにする。

言語類型を論ずる前に、そもそも人間の行う分類とは何かについて確認しておく。生物は仲間と敵とを見分け、雌雄を判別することで種として存続することができる。つまり人間に限らず、あらゆる外界の事物、事象を分類することは、生物が存続するための不可欠の機能である。

中尾（1990）は、植物分類学の立場から、分類そのものを以下の4種に分類している<sup>1)</sup>。

**類型分類**：判りやすいイメージの分類。自由なイメージを分類基準とすることを特徴とする。判りやすい反面、欠点として分類単位（taxon）の設定に厳密さがかかる。

**規格分類**：「年齢20歳以上は成人とみなす」など、数量や属性による明快な分類。ただし、分類基準をなぜその数量にするか、という基準は恣意的である。

**系譜分類**：過去の歴史的变化の系譜による分類。言語のように、それ自体が歴史的存在である対象には有効である。

**動的分類**：「上位分類単位」のレベルの分類。化学の元素表のように、配置展開法によって複数の上位分類単位が共存しうるような複合分類。

中尾によれば、このような分類を行う場合、結果としてのシステムに固着する必要はない。特に言語のように、それ自体が歴史的存在である場合、単一の分類基準によって、その全てを把握できるはずはない。むしろ目的に応じて自由なイメージを基準とした分類を作りだすべきである。我々の分類の目的は、対象認識を明確なものにすることであるから、分類した結果と

1) なお、議論の展開から外れるが、植物の「系統樹」に代表される系譜分類が、実は植物の類型分類を積み重ねてまとめたものに過ぎず、時間的な進化の跡を示すものではない、という中尾の指摘には注目すべきであろう。中尾自身が言語系統樹を系譜分類の代表として想定していることにも注意を喚起したい。言語系統論は安易に植物分類・系統樹の正当性に依存することはできないのである。

して対象をより的確に認識できたときに、その分類は有意義であると、中尾は言う。言いかえれば、全ての分類は、それに対して人間が何らかの価値を認めうる限りにおいて、道具として有用な分類であるといえよう。

中尾の分類によれば、言語類型論は、文字通り「類型分類」にあたる。類型分類とは、判りやすいイメージを基準(criterion)として分類を行うのだが、「判りやすい」という長所の反面、イメージを分類基準として自由に用いるため、分類単位の設定に厳密さを欠く、という短所を持つ。言語類型に関していえば、語の形式的な側面では、含まれる形態素の数や、形態素の連続のあり方などが、統語的な側面では語順などが、ここでいう分類基準に相当する。

## 2 語の形態類型論

ここで取り上げる形態類型論とは、語の形態と語構成に基づく言語の分類である。この分類の利点は、まず言語において最も具体的な単位である語を基準にしているために、理解しやすいことである。しかし、言語学の関心の推移に伴い、類型分類の根拠となる語や形態に関する考え方も変化しており、形態類型論の定義も論者によってさまざまな相違点が生じている。

そこで、以下では形態類型論に関するフンボルト、サピア、河野六郎、コムリーの議論を取り上げ、分類に際してのそれぞれの関心のあり方を特色づけるとともに、それぞれの枠組みにおいて、各類型がどのように取り扱われるかを明らかにしていくことにする。

### 2.1 フンボルトの言語観

Wilhelm von Humboldt (1767-1835) は18世紀から19世紀前半にかけて活躍した文人、政治家である<sup>2)</sup>。言語学史上はその「言語そのものは、出来上った作品(Werk, Ergon)ではなくて、活動性(Tätigkeit, Energieia)である<sup>3)</sup>」とする言語観と、言語類型と人間の思惟および民族精神の関係を論じた遺稿、Humboldt (1836) とによって知られている。フンボルトの著作を通じて、彼の思想の全容を追うことは極めて興味深い問題であるが、筆者の能力を超えた問題であり、また本論の主題に沿うものではない。そこで、以下ではフンボルトの言語観と、彼の屈折、膠着、孤立、抱合の各類型に関する考えについて、なかでも彼がビルマ語の膠着語性、古典中国語の孤立語性をどう捉えていたかに着目し、明らかにしておく。

古典的な語形態に基づく言語類型といっても、そもそもフンボルトの言語分類の意図は、彼の時代の精神の関心のあり方に依拠しており、歴史的背景を無視してこれを批判しても、当然益するところは少ない。また、著作が完成稿ではなく、遺稿であることも災いし、フンボルト自身の言語観にも、ゆれ、矛盾が散見し、その全貌を把握することは難しい。

例えばフンボルトの「言語と民族精神のあり方」についての言説は、ヨーロッパ中心の差別的世界観として容易に非難されようが、一方で、中国語に関する彼の見解からは、単に西洋語の観点から世界の言語を見るのではなく、言語それ自体を体系として理解しなければならない

2) 以下では参照の便宜上、亀山健吉氏によるフンボルト (1978) の訳文のページ (K. で表す) とフンボルト著作集 (アカデミー版), Leitzmann (ed.) (1907) のページ (A. で表す) を対照して示す。訳文に示されたドイツ語の片仮名表記を原文の綴りに改め、( ) で示す。この他にも必要に応じて、ドイツ語綴りを補い、[ ] で示した。また、Harden & Farrelly (eds.) (1997) の参照ページは HF. で示した。

3) フンボルト (K. p.73=A. p.46)

という彼の記述的姿勢が窺えるのである。

現代の言語学的な観点から見ると、論理的命題、定動詞の機能、命題と法、文の階層構造に関する考え方などに見えるフンボルトの言語觀は、ギリシャ語、ラテン語などの西洋古典語、サンスクリット語、彼自身の母語であるドイツ語などの近代ヨーロッパ諸言語に関する該博な知識に裏付けられたものであるが、結果としてそれが欧米の言語学理論のもつ西欧中心主義の言語觀を代表する、ひとつの典型となっていると考えられる。この点で、フンボルトが屈折語、孤立語、膠着語、抱合語をどのように考えていたかを明らかにすることは、その後の欧米のさまざまな言語理論の共有する、暗黙の前提を明らかにするという意義を持っている。

フンボルトは、中国語に関して主に、当時のフランスの東洋学者である Abel-Rémusat の著作 Abel-Rémusat (1822) を通じて、深い理解を持っていたことが窺える<sup>4)</sup>。以下に見るように、彼はその著作において、中国語に限らず諸言語の用例をほとんどあげていないのであるが、その議論には「範疇」、「動詞連続」、動詞の「補語」のあり方、「Topic — Comment (提題—評言)」など、現代の孤立語研究の問題点の多くが既に意識されている点で、きわめて興味深いものである。

フンボルトの人と業績に関し、文献批判に始まる総合的な研究を行ったものとして、亀山健吉氏の一連の著作がある。ここでは氏の訳によるフンボルト (1984) および亀山 (2000)，および Harden & Farrelly (eds.) (1997) に従って、フンボルトの言語觀をまとめることにする。

## 2.1.1 文と類型

フンボルトは文の中核として論理的命題を考えていた。

(HF. p.98) 「論理的な判断はすべて、2つの概念の一致あるいは不一致の表現、数学的等位式と見なすことができる。この思考の原初的形式が言語固有の衣をまとわされる。言語は二つの概念を合成し、活用した動詞によって、一つの概念を他方の特性として据えるのである。」

これは文を論理的命題とし、動詞がその判断を表現するというフンボルトの、さらに西欧の伝統的言語觀を示している。

この考えに従えば、命題に対応する文の数は定動詞の数に一致する。

(HF. p.99) 「[西欧古典語を含む] 我々の言語においては、句 [文] の統一性は活用した動詞 [定動詞] によって認識される。活用した動詞の数と同じ数の句 [文] があるのである。」

さらに、動詞と、それが持つべき態、時称、話法などが、文の構成にどのような機能を果たすかという議論は、彼が等位式と考えた文の中核的命題部分の定立に果たす、動詞の具体的役割を示している。

4) 本論の執筆に当たっては、Abel-Rémusat (1822) の新版である Abel-Rémusat (1857) を参照した。版は改めたが、前者と同一の内容であることが後者の緒言に記されている。

(K. p.428=A. pp.279-280) 「…そして、このいわゆる動詞が、〔受動、能動などの〕動詞の態 (Genus) とか、時称 (Tempus)、話法 (Modus) を表現することがあるとはいえる、その使い方は全く上記のような〔〈である〉を頭の中で補う〕ものでしかないのである。ここで話法という言葉を用いたが、こういう類の言語 [動詞本来の機能を示す表現を動詞に付与しない言語を指す] では、話法というのは、願望、危惧、可能、必然などの概念が、適用され得るような場合をいうに過ぎない。そして、純粹な接続法・仮定法 (Conjunctivus) は、一般的に言って、こういう言語には無縁なのである。[主題や命題の] 単純で実際的な定立 (Setzen) をするのに、一定の形式的な表現の仕方が認められないような言語においては、実質的な内容を示す副次概念を付け加えずに、接続法だけによって表現され得るような不確実で従属的な定立を、適当に表現するような術はあり得ないのである。」

即ち、論理的命題は、定動詞を中心として態、時称、話法などの定立の様式を付与されて文となる。一方、文の各構成要素はその意義および形態上の特性に基づいて範疇性を獲得する。

(HF. p.96) 「もしも言語が長くて入り組んだ文を形成すれば、それは文法形式のあらゆる細分化を含んだ語の分類を要するであろう。しかし、もし言語が文を非常に単純なもののみに限定するならば、それは主要でもっとも一般的な範疇しか要しないであろう。」

このように、フンボルトは西洋語的な文法範疇を普遍的なものとは考えていない。おそらく中国語などの孤立語を念頭において、以下のように言語の特性に応じた文法範疇、語類を認め、動詞・名詞の両義性を説明しようとしている。

(HF. pp.96-97) 「一群の語はその本質として、それらが実体、性質、動作を示すという点で名詞的、形容詞的、動詞的意義を持つ。言語において同じ語が別の範疇としても用いられる。動詞的意義を持つ語が実詞として、あるいはその逆、というように。…もしこれらの語が特定の形態上の特徴などで特定のひとつのかみ割り当てられたならば、当該言語は純粹な「語類」を持つであろう。しかし、もしもそれらが、なんの話か理解可能な範囲内で、分類されないままであったら、上述の類の語も、真正の語類を形成しないであろう。なぜなら語の分類はそれが何を表すかの結果であるから。類の違いは実質と形相とに基づいている。従って、動詞的意義を持つ語は必ずしも動詞ではない。」

このような文・言語観に基づくフンボルトの言語類型論を、亀山 (2000, pp.35-36) は以下のようにまとめている。

「さて、語と発話ないし文の関わり方を見ると、言語の種類は三つに分類され得る。

サンスクリットのように、語の統一性の中に、文に対する語の関連性がすでに織り込まれている場合で、語の文に対するこの関連性は屈折という形で表現されるもの。

次に中国語のように、幹語を変化させることなく固定したまま言語の中に閉じこめてしまうもので、文中の語はそれぞれが全く孤立しているもの。

更に、文というものを多くの語から成り立っているひとつの全体としては扱わずに、文そのものが一箇の語であるとして扱うもので、メキシコの言語（アステカ）語などの抱合

語がその例である。」

亀山（2000）の見るファンボルトの分類は、まず第一に、語が発話ないし文の統一性とどう関わるかの観点からの分類であるとされている。この観点から膠着語を除いた「屈折語、孤立語、抱合語」の3分類が取り上げられていることが注目される。以下に膠着語について述べるように、ファンボルトにとっては膠着語は屈折語を目指す途上で挫折した不完全な屈折語であった。従って、上記の分類はファンボルトの言語に関する関心が、語構成の技術という近代的な形態論上の問題にあるのではなく、むしろ文、発話という統一体を形成するために、人間精神が表示すべき概念をどのように扱って語とするかという点にあったことを考えると、ファンボルトの分類の本質を反映した的確な把握であると考えられる。このことは、以下のファンボルト自身の文の構成法の分類によっても裏付けられよう。

(K. p.229=A. p.144) 「さて、はじめに述べた三つ [の言語の働き方]、すなわち、[屈折語のように] 語というものを、文章を組み立てるのに適うように十分な注意を払って文法的に然るべき形を取らせる (zurichten) 方法、また、[孤立語のように] 語を結合して文を作る仕組みを、全く間接的に、しかも音声とは無関係にそれとなく示すという方法、それから、[後述するメキシコ語のように] 文を可能な限り一つのまとった形として発音して、文全体を密接に結びつける方法 — 語を結合して文を作るやり方として言語がなし得るのは、この三者に尽きるのである。...」

ここに見られる分類基準は、後に 2.5 で見る Comrie (1989) の「総合の指数」と「融合の指数」と本質的に同じものであると考えられよう。

さらに、ファンボルトにおける言語比較の方法について、亀山 (2000, p.37) は以下のように述べている。

「ファンボルトは、世界の現実の言語は、サンスクリットと中国語とを両極端とする線分の図式上のどこかに、その形式に則って位置づけられるとするが、この位置づけは価値上の位置づけではなく、形式上の分類でしかない。そして、言語の比較は、前に述べたごとく、語彙の比較や文法形式の比較では全く不充分であり、言語を語る民族の精神的個性ないし広義の性格という地平まで掘り下げる要があることを再三再四説くのであるが、民族の精神的特性に迫ってゆく通路として彼が挙げているのは、言語における総合的定立の強さがどのようなものであるかを明らかにすることである。」

この屈折語と孤立語を両極とする言語の分類は、孤立語から膠着語を経由して屈折語に至るという当時の「進化論的言語觀」に真っ向から対立するものであるが、それが「価値上の位置づけではない」とは必ずしも言えない。特にビルマ語、中国語など、非印欧語についての「劣ったもの」という彼の価値判断は、その著作に散見し、彼自身の主張する「記述的態度」ともしばしば矛盾しているのである<sup>5)</sup>。

5) (HF. p.109) 「[語の文法形態という外的表現に煩わされず、思考を概念の連続とその相互規定に集中させることができるという] この優位性にも拘わらず、中国語がこれまで比較してきた言語ノ

### 2.1.2 フンボルトの屈折語観

フンボルトは、「語」を、概念を示す「語根」と、それを「文章を組み立てるのに適うような音声形式」で示すための「接辞」とからなると考える。

(K. p.167=A. p.105) 「さて、語根 (Wurzel) という名で呼び得るものは、結局、すでに意味を持っている他のいかなる音声をもさしはさむことなしに、表示さるべき概念と直接結びつくような基本音声 (Grundlaute) のみに限られる。

語義をこのように厳密に規定すると、語根なるものは、真実の言語に必ずしもそのままの形で含まれていなくてもよいことになる。そして、実際の言語においては、音声形式はこういう語根の基本音声を副次的な音声で包み込むということをするので、語根がそのままの形で用いられることは一般にはほとんどなく、たとえあるとしても、特定の条件の場合に限られるのである。...」

当時の言語観では、語の表示されるべき概念 (Begriff) は、語彙的な意味と同一視されていたと考えてよかろう。フンボルトによれば、この「接辞」は、精神が概念を、有機的に文に結びつけるためには、従属的、副次的なものでなくてはならない。この意味で、副次的概念を音声上融合させて接辞を形成する「屈折語」は、フンボルトにとって理想的な言語の姿であった。

(K. p.477=A. p.313) 「...ところで、接辞がないということの原因は、普通考えられているよりは深いところに潜んでいるものであって、正に、精神の中に見出されるものである。というのは、接辞が主要概念に対してもっている従属関係を、もしも精神が生々と感じ取っているとすれば、接辞のついた語を発音する際に、我々の舌が従属的な接辞に、主要概念と同じだけの音価 (Lautgeltung) を与えることなど、出来ないはずだからである。精神が今述べたようなことを感じ取ったとすれば、そのときは、二つの異なった要素を融合して、一つの語にまで統一するという結果が、直接かつ必然的に得られるものである。」

このような屈折語観は、彼の学んだ古典ギリシャ語、ラテン語、サンスクリット語および彼の母語であるドイツ語に基づく考え方であろう。

### 2.1.3 フンボルトの膠着語観

接辞を従属的な音声で表現する屈折語とは対照的に、それぞれの接辞の独立性の高い膠着語については、フンボルトは以下のように述べている。

(K. p.186=A. p.117) 「この [屈曲 (Beugung) として用いられた] 場合の複合とは、本来の屈折を目差しながらも十分には完成されなかつた屈折 [nicht zur Vollkommenheit ge-diehene Flexion] という意味なのであって、実は機械的な接着 [mechanische Anfügung] にすぎず、純粹な有機的付加形成 [organische Anbildung] ではない。こういうどっちつかずの混血兒は、仲々それと見分けのつくものではないが、近頃では膠着 [Agglutination] という名称で呼ばれているものである。」

---

↘ に比べて劣っているということに私は深い確信を持っている。」

このように、ファンボルトはビルマ語を膠着語の例にとり、これを屈折語を目指しながらも、未完成に終わった中途半端な存在の言語であるとしている。

ビルマ語を例とした、膠着語の述語がどのような構造を持つかについてのファンボルトの議論は、後述する日本語の用言複合体に関する河野六郎の観察とよく一致している点が、極めて興味深い。これはファンボルトがビルマ語について、深い理解を持っていたことを示している。

(K. p.461=A. p.306) 「ビルマ語では、文が、まるで、一直線 [Linie] を成すかのように、次から次へと続いてゆく、という感を禁じ得ないのである。それでいて、ビルマ語の文が、我々ドイツ語の「そして」(und) のような、それぞれの文の独立性を確保する接続詞によって、互いに連なっている場合は、ごく稀である。ビルマ語の文は、その実質的な内容を相互に織り合せるような仕方で結びついてゆくのである。こういう具合に文が連なってゆくとき、それぞれの文の末尾には不変化詞 [Partikel] *thang* がつけられるのが普通であるが、この不変化詞はそれに先立って語られたものを取りまとめると同時に、そのまとめたものを、すぐ次に続くものの理解を助けるために用いるという役割を果すのである。」

## 2.2 ファンボルトの孤立語観

以下ではファンボルトが古典中国語に代表される孤立語をどう捉えていたかを明らかにしておく。ファンボルトにとっての孤立語とは、語根が副次的な音声をまとわず、そのまま語として実現している言語である。

(K. p.119=A. p.75) 「... 語根を持っているとは言い得ない言語が存在しているのは事実である。その理由は、そういう言語では、音声の派生法則も欠けているし、比較的単純な音声結合を行いつつ音声変化を実現することもしないからである。そういう言語では、例えば中国語がその一つであるが、語根と語が一致してしまうことになる。」

語根と語が一致する結果、中国語には形態に顯れる文法範疇は存在しない。

(HF. p.95) 「この [第一印象において中国語が他の言語、特に西欧古典語との間に感じさせる] 違いをひとつの原因に帰するのであれば、「中国語の語は文法範疇に従ってつなげられるのではない、その文法は語の分類に基づくものではない」という事実に帰すべきであろう。」

従って、中国語には文法の下位分類としての形態論は存在せず、統語論だけが存在することになる。

このような言語にあって、屈折語であれば副次的音声によって示される文法関係（精神の働き）は、若干の不変化詞、語順、慣用語法、意味上の脈絡によって示される他はない。

(K. p.416=A. p.271) 「中国語は、若干の不変化詞 (-Partikel) —この不変化詞についても、後に考察するように、中国語は相当な程度まで使わないで済すことができる—を使用することを除けば、文法形式—中国語の場合は、この語を最広義において捉えなくてはならない—を、語の位置、一定の形式を取って確立されている慣用語法、および、意味上の脈絡

によってすべて示そうとする。要するに、中国語は、実際に適用しようとすれば、極度の内面的な緊張や努力を必要とせざるを得ない手段だけに頼っているわけである。....」

ファンボルトによれば、中国語における「接辞」の不在は、単なる「欠如」ではなく、不変化詞、語の位置、慣用語法、および意味上の脈絡という、中国語独自の文法（あるいは語法と呼ぶべきか）システムが機能を果たす限りにおいて、接辞を要しないのである。

(K. p.417=A. pp.271-272) 「中国語においては、形式的なものを理解するためには、意味や関係を明らかにする音声の助けを少しも借りずに、上記のごとく、語順 [Sinne durch Stellung], 慣用語法, 意味上の脈絡 [Zusammenhang des Sinnes] によるという方法を取つたのであるが、そうなると、こういう方法自身の本性に基づいて、さまざまに異なった形式的な関係を厳しく見詰め、体系的に整えるということにならざるを得なかつた。そのために、言語を耳で聞く限りでは、そこには、語義を示す素材としての音声が示されているにすぎず、形式的な関連性の表現は、語の位置とか位置に関する従属関係として、いわば、音声に引っ掛っているだけになつてしまふのであるから、精神にとつては、却つて、語の実質的な意味と形式的な関連性との相違が一層強く、ひとりでに明らかになってくるものなのである。」

上記の議論から、屈折語において、形式的な関連性が接辞として実現し、その集積として範疇をなすのに対し、孤立語である中国語においては、形式ではなく、意味上の脈絡の果たす機能が重要であるとファンボルトが考えていることは明らかであろう。

### 2.2.1 中国語の基本語順

ファンボルトは以下のように、言語はそれ自体の体系として理解しなければならないと主張している。

(K. p.418=A. p.272) 「どんな言語においても、名詞のさまざまに異なった関連性を、何らかの形で区別する方法がなくてはならないということは、それなりに非常によく理解し得るところである。しかし、そういう方法があるからといって、それが直ちに本当の意味での名詞の格 (Casus) であると考えてよい、ということには決してならない。そんな考え方をしたところで、中国語を考える場合には、何の役にも立たないのである。中国語だけに認められる特長は、逆に、レミュザが上掲の書物で的確に指摘しているように、他の言語とは異なった体系を具備しているという点に在るのである。」

このような考えから、ファンボルトが中国語の体系として注目したものに、語順による語の「規定 (bestimmen)」がある。ファンボルトは、規定には「支配」と、意味関係に基づく概念の質的な「補完」との2種類があるとした。

(K. pp.456-457=A. pp.302-303) 「ここで規定 (Bestimmen) という語を用いるときには、そこに二つの場合が含まれていて、その二者を注意深く区別することが大切である。すなわち、規定という一つの意味は、ある語が他の語によって支配されること [das

Regiert-werden eines Wortes durch das andre] であり、もう一つの意味は、何らかの側面で規定されないままでいる概念を、補って完きものとすること [die Vervollständigung eines von gewissen Seiten unbestimmt gebliebenen Begriffs] である。

語というものは、[ここに挙げた後者の場合のように] 質的に語の [概念の] 外延、および語の意味する性質に即して限定 [begrenzen] される必要があるし、[前者の場合のように] 語の文中における因果関係に即して、他の語に依存しているのか、それとも他の語を支配しているのか [als von andren Abhängig oder selbst andre leitend]、相対的な意味で限定される必要があるのである。」

これによると、統語上の限定関係は「支配」(Regieren) と「依存」(Abhängig) つまり被支配の関係であり、支配するものが leitend (主要) な位置にあるとされている。一方、意味上の限定関係は、意味的な外延を質的に限定 (begrenzen) するものと、限定されるものとの関係である。この支配 (主要部) と依存との関係がいかなるものかについての詳しい説明はこれ以上されていないが、これに相当するのは、活用した (定) 動詞が他の項を支配するという点であろう。一方の補完という限定関係には、形容詞が限定用法として名詞を修飾 (限定) する場合を考えてよい。

(K. p.457=A. p.303) 「中国語はこの二つの場合を構造上、峻別しており、各々の場合をそれぞれにふさわしい仕方で使い分けるのである。中国語では、支配する語が支配される語に先行し、主語は動詞の前に、動詞は直接目的語の前にそれぞれ置かれ、間接目的語がある場合には、それは直接目的語の後に置かれる。そうだからといって、先行する語の中に、後の語の概念を補完するようなものが含まれているとは必ずしも言い切れない。」

主語と目的語の中間の位置を占める動詞は、むしろ、その概念に関しては、主語と目的語の両者によって補完されているのであるし、同様に直接目的語は間接目的語によって補完されている。ところが他面から見ると、補完する役割を果す語を、その語の概念によってまだ規定されていない語の前に置くのが、中国語の常である。従って、形容詞は名詞の前、副詞は動詞の前、所有格の名詞は主格名詞の前に置かれることになる。」

(K. p.457=A. p.303) 「こういうわけで、中国語の構成は、二つの大きな普遍的な法則、しかも本質的に異なる二大法則を基盤にして成り立つことになる。そして中国語は、動詞が目的語に対して持っている関連性を、動詞に特別の位置を与えることによって徹底的に際立たせるのに成功していると言ってよい。中国語がそうする理由は、動詞というものが、文中の他のいかなる語よりも、遙かに重要な意味で支配的であると言えるからなのである。さて、[中国語の二大原則のうち、支配する語を被支配の語に先行させるという] 前者 [の原則] を、中国語は文の基本構造に適用し、[補完する語を先行させるという] 後者 [の原則] を、文の副次的部分に適用している。」

この議論は、フンボルトが「提題一評言」構造を想定したものと考えると、きわめて興味深い。すなわち、印欧語においては、動詞が主格 (nominative) を項として支配しているのに対し、中国語では、その基本構造として、「主語」が支配する語として動詞に先行し、同時に動

詞は主語と目的語によって「補完」されているのである。ここでいう主語を「提題」と解釈すると、これは「提題が評言によって補完される」という現代の機能的な言語観と一致する。この意味で、ファンボルトは topic prominent な言語としての中国語の特性を正しく捉えていたとも考えられる。なお、Abel-Rémusat (1857) は、中国語においては修飾語が被修飾語に先行することを述べてはいるが、「主語」が動詞を支配する、あるいは動詞が主語と目的語に補完されるという記述は認められない。従って、これはファンボルト自身による中国語の構文の解釈であると考えられる。残念ながらこの点に関する具体的な例文の引用、提示がないため、彼がどのような文に照らして中国語の構造を考えていたのかは明らかではない。

以下の議論とあわせれば、中国語の動詞が名詞として「主語（主題）」になる、とファンボルトが考えていたことも推測されよう。

(HF. p.100) 「事実、はっきりした文法上の区別という概念を捨ててしまえば、不定法の動詞は名詞と考えられるだろうし、すると主語、主格は属格となる。言語によっては動詞が所有代名詞を用いて活用するのだ。（'I eat' に対する 'my eating' のように。）」

このファンボルトの記述には、Abel-Rémusat (1857, p.69) が対応していると考えられる。

「すべての動詞は、直接補語あるいは間接補語を伴う能動動詞 [verbe actif：動作が他者に及ぶ動詞] でさえも、しばしば不定の意味を取って、今度はそれが他の動詞の主語あるいは補語となる。...」

## 2.2.2 中国語の動詞構造

多くの印欧語の話し手、研究者にとってそうであるように、ファンボルトも動詞こそが文の中心であり、動詞がその特有の働きを接辞として音声化し、衣をまとうことにより、文中での他の要素を支配すると考えていた。

(K. p.427=A. p.279) 「言語によっては、語を結びつける中心となって文を作るという (Satzverknüpfung)，動詞に固有の機能を示すような表現を、動詞に付与することを全く行なわないものもあるし、また、言語によっては、代名詞を縮小したり変化させたりして、それを動詞に結合することによって、辛うじて動詞であることを表現しているものもある。」

(K. p.459=A. p.304) 「中国語の構造を見れば、中国語が動詞の本当の機能、動詞特有のはたらきが何であるかを正しく感じ取っていることを窺い知ることができる。中国語は、動詞を文の中心、すなわち、主語と目的語の間に置くが、このことで、動詞が文を支配しており、動詞こそが構文全体の魂であることを表現しているわけである。」

しかし、中国語の動詞は語順のみでは認定されず、また音声（形式）的な認定の手がかりも持たない。

(HF. p.104) 「主語が動詞に先行し、支配される目的語が動詞に続くということが明らか

ではあるとはいえるが、文が3語で構成されていない限り、この鎖の最初の輪である動詞を認知する方法はない。中国語でいかに語順の制限が厳しくとも、それ自体では全く不十分で、つねに語と文の意味に立ち返らねばならない。語順が文法形式を示すどころか、例えば1つ以上の形式が主語になりうるし、主語だけでなく、副詞句も動詞に先行しうるのであるから。」

中国語については、動詞の持つべき態、時称、話法が文法として存在しない、とフンボルトはいう。例えば、受動態という文法範疇の代りに用いられる「見」が、主動詞に対する一種の限定である、とするのは卓見といえよう。

(K. pp.462-463=A. p.307) 「ところで、中国語では、余り自然なやり方であるとは言い難いが、「見る」(sehen)という動詞を受動態を作るとき、というよりも受動態の代りに用いるのであるが、その場合も、この動詞は主要な概念に先行するのである。例えば、「見・殺 (sehentödten d. i. getötet werden)」というのは、取りもなおさず、「殺される」の意味である。見られ得るものは数多くあるはずであるから、[上に述べたように、より特殊的な規定を与えられるべき語の方が後にくるという中国語の法則に従えば] 本来ならば、「殺す」という語の方が先に出るべきであろう。ところが、そうならずに逆の語順となっているのは、「見」はここでは、次に来る語を限定する [modification des folgenden Wortes] ものと見做されているため、つまり、「殺す」ということの一つの状態として [als ein Zustand des Tödtens] 考えられているためであろう。」

ここに至って、フンボルトは印欧語的な能動態と受動態という態の対立という見方から完全に決別し、中国語独自の語順の規則から、「受動態の代りに用いる」、「殺す」ということの一つの状態としての「見・殺」の機能を考えているのである。フンボルト自身は「見」の具体的な用例を挙げてはいないが、Abel-Rémusat (1857, pp.72-74) は、受け身は曖昧さの生じない限り特にマークする必要はないと言っている。以下のように「見」を受け身マーカーとする例文も掲げている。

(1) 夫子何以知其将見殺 〈夫子何をもって、其の將に殺されんとするを知るか〉『孟子』

フンボルトによれば、中国語における「文」と印欧語の文は、一対一に対応しない。

(HE. p.100) 「中国語において、ある文がどこで終わり、次の文がどこで始まるかということは、必ずしもはっきりしない。翻訳においてひとつの文と見なされているものが、実際は2つかそれ以上の文からなることは確実である。...研究者が中国語において前置詞と呼ぶもののほとんどすべては文構造において二つの別々の文を形成する動詞である。」

これは、一般に動作対象を表す「把構造 (ba construction)」など、印欧語的見地からは前置詞として考えられがちな文構造を、動詞を並列的に構成する「動詞連続 (verb serialization, serial verb construction)」として見る捉え方である。同時に、歐文翻訳におけるひとつの文に対して、中国語では複数の文（命題）が対応することもフンボルトは指摘しているのである。

これに対して、Abel-Rémusat (1857, p.75) は、複数の動詞が結合される場合、最後の動詞が主要動詞で、他はこれを修飾していると考えている。前者は複数の動詞を複数の文の羅列と考え、後者は一つの文に修飾成分としての動詞と、一つの主要動詞があると考えるのである。両者の中国語の文の捉え方は一見大きく異なっているが、いずれも、一つの文には（定）動詞が一つしか存在しない、とする文に対する考え方を共有していると言える。このように、一文にひとつの定動詞が存在するという考え方は、西欧の言語観に深く根付いたものである。本論では、これを**定動詞公理**と呼ぶことにする。

### 2.2.3 中国語の対句、対比

ファンボルトが特に中国語について着目した語形成法として、「並列構成 (parataxis)」あるいは「対句」がある。

(K. p.485=A. p.319) 「中国の近代文を読んでみると、二つの要素概念を複合させて合成語を作り上げるのではあるが、実は、その二つの要素の何れとも異なった第三の概念、しかも単一な概念を形作るのを唯一の目的としてこの合成という方法を選んだと思われる語が、少なからず見出されるものである。」

(K. p.486=A. p.320) 「また、今述べたものと似た合成の仕方ではあるが、打ち見た限りでは不可思議とも思われる別種のやり方が、中国語には見出される。それは、二つの互いに対立し合う概念を統一することによって、この二つの概念を下位概念として持つような、普遍概念を表現しようとするものである。...」

特定の項目 (Artikel) の中にある普遍性 (Universalität) は、その項目における相対する両極を対比させるという方法を用いて、他の方法よりも一層直観的にありありと、しかも、何らの例外も許さぬ仕方で示唆されているわけである。」

(K. pp.487-488=A. p.321) 「つまり、中国語では、上述のような相称概念を意図的に文の中に組み入れようと努めるものであり、そうすることが、中国における修辞法の固有の仕事であると考えられるに至ったのである。それというのも、純粹な対立 (Gegensatz) という関係 [論理学でいう対当の関係] ほど、言語における相称的な概念を列举するのに確実な関係はないからである。」

## 2.3 サピアの言語観

### 2.3.1 サピアの言語類型論

サピアは、語形成の手法に基づく従来の古典的言語類型を不十分なものとして、統語上の特徴を視野に入れた、独自の言語分類を示している<sup>6)</sup>。

サピアの指摘する従来の類型論の問題点は、次のようなものである。(A. pp.211-213=S. pp.122-123)

6) 以下では必要に応じて、安藤貞雄訳、サピア (1998) のページ (A.で表す) と Sapir (1921) のページ (S.で表す) を対照して示す。

**分類基準の選定**：どのような観点に立って分類するか。

**言語の選定**：少數の言語からの一般化は危険である。

**極性による単純化**：例えばラテン語、中国語を両極として他の言語を「過渡的な類型」に納める。

**進化論的偏見**：サンスクリット語、ギリシャ語、ドイツ語のパターンに合致する言語は、すべて「最高の」ものを表し、そこから逸脱するものは「欠陥品」とする。

これらの批判は、フンボルトに代表される当時の類型論に対するサピアの不満を示している。ただし、進化論的偏見については、先に見たように、フンボルト自身は進化論的な見地による分類を否定している。

Sapir (1921, pp.138-146) の類型分類は、文法概念の型、形態上の接合の手法 (technique)、総合の度合いの 3 つの観点からの言語分類として知られている。この分類は統語的、形態的基準をともに用いる総合的なものではあるが、分類の結果はフンボルトの言語類型と同様に、相互に排他的なものではあり得ず、連続的、段階的なものである。

サピアはまず、文法概念 (grammatical concepts) として以下の 4 つを区別し、これを類型分類の基礎に置いた。

**基礎的概念 (basic concepts)**：事物、行為、状態など、表現の実質的素材。独立語または語幹要素で示される。

これは日本語の体言（名詞）などのように、それ自身の中に統語的要素を含まないものを指している。

**派生的概念 (derivational concepts)**：派生語の派生接辞にあたる部分。語幹要素に非語幹要素を接辞する、または語幹要素の内部変容によって示される。

英語の sing-er など。

**具体的関係概念 (concrete relational concepts)**：概念を結びつける文法的関係概念のうち、具体性を含むもの。添加されている特定の語を超える関係を表示する。

文法範疇としての数や性などがここに含まれる。

**純粹関係概念 (pure relational concepts)**：概念を結びつける文法的関係概念のうち、主語、目的語のような明確な統語形式を与えるもの。

このうち、基礎的概念および派生的概念とは、ひとつの語の内部の構成に関わるものであり、具体的関係概念および純粹関係概念とは、それぞれ照応関係、語同士の意味関係を示すなど、複数の語の相互関係に関わるものである。これらの概念を諸言語が文を構成する際に、どのように用いるかによって、以下のような類型分類を行う。

**純粹関係言語 (pure-relational language)**：A 単純 (simple) 上記 1, 4 (基礎的概念および純粹関係概念) を用いる言語 (pure-relational non-deriving language)。  
例：中国語

**純粹関係言語 (pure-relational language)**：B 複合 (complex) 上記 1, 2, 4 (基礎的概念、派生的概念および純粹関係概念) を用いる言語 (pure-relational deriving language)。例：サモア語

**混合関係言語 (mixed-relational language) : C 単純 (simple)** 上記 1. 3 (基礎的概念および具体的な関係概念) を用いる言語 (mixed-relational non-deriving language)。例: フランス語

**混合関係言語 (mixed-relational language) : D 複合 (complex)** 上記 1, 2, 3 (基礎的概念, 派生的概念および具体的な関係概念) を用いる言語 (mixed-relational deriving language)。例: ギリシャ語, ラテン語

さらに古典的類型論を継承して, 語の内部の機械的凝集度 (mechanical cohesiveness), つまり, 形態素同士の融合の度合いという「語形成の技術 (technique)」により「孤立 (isolating), 膠着 (agglutinative), 融合 (fusional), 象徴 (symbolic)」の下位分類を行い, 同時に語がその内部に含む形態素の数の多少という「総合性の度合い (degree of synthesis)」により「分析的, 総合的, 多総合的」の区別を行った。この「語形成の技術」および「総合性の度合い」という分類基準は, 以下に見るコムリーの「融合の指数」および「総合の指数」とにそれぞれ対応すると考えられる。

サピアのこの分類によると, 東アジア, 東南アジアの諸言語に関する限りは, 中国語, ベトナム語 (Annnamite) が「A型 (純粹関係的, 単純) 一分析的一孤立的」に分類され, わずかながら接辞をもつカンボジア語, タイ語, ラオス語は, 「B型 (純粹関係的, 複合) 一孤立的一分析的」に分類されることになる<sup>7)</sup>。また, 派生接辞や格助詞を用いる日本語は, 「B型 (純粹関係的, 複合) 一膠着的一分析的」に分類されよう。

### 2.3.2 サピアの孤立語観

サピアはファンボルトへの直接の言及をしないままに, 以下のように述べている。

(A. p.215=S. p.125) 「あらゆる言語は, たとえ, その語彙のなかに接辞が一つも見いださない場合でも, 根本的な統語関係を表現することができるし, またそうしなければならない。すべての言語は形式言語である, とわれわれは推断する。純粹な関係の表現 (たとえば, 語順) を別にすれば, 言語はもちろん「無形式」な場合があるつまり, 無形式とは, その言語が非語幹要素の使用に煩わされることがないという, 機械的な, しかもかなり皮相的な意味においてである。」

形態論的な観点からは, 以下でいう「外的的」つまり実現形態のレベルと, 「内部形式」, つまり形態素のレベルとを区別できるため, 以下のような議論も成り立つ。

(A. p.216=S. p.125) 「たとえば, 中国語は, 純然たる形式的要素, すなわち, 「外部形式」が一つもないけれども, たとえば, 主語と目的語, 限定語と述語, その他の区別については, 銳い関係の感覚をもっていることを証明している。言いかえれば, 中国語は, ラテン語が「内部形式」を備えているのと同じ意味で, 「内部形式」を具えているのだ。ただし,

7) サピアの原表では, カンボジア語がB (Complex Pure-relational) Fusional-isolating, Analyticの例とされているが, カンボジア語の接頭辞, 接中辞は語形成としては透明度が高く, 分析は容易で, 使用頻度も低く, 現在では生産的ではない。従って fusional-isolating よりも, 「孤立的」とした方がよい。当時サピアの入手した資料の偏りによる誤解かと推測される。

中国語は外面的に「無形式」であるのに対して、ラテン語は外面的に「形式的」である。」

ここでサピアが孤立語の「内部形式」と考えているのは、「厳格な語順」である。

(A. p.113=S. p.64) 「中国語や英語のような言語では、厳格な語順の原理が十分に発達しているので、またしばしば、複合語を発達させる傾向がある。」

以下の部分は、フンボルトがマレー語について述べたことと、およそ一致しており、暗にフンボルトを批判しているかのようである<sup>8)</sup>。

(A. p.216=S. p.125) 「これに対して、根本的な関係を真に理解することなく、具体的な観念を多少ともこまかに表現することで満足し、ときには「外部形式」をやたらに並べ立てながら、純粹な関係は単に文脈から推論するにまかせている諸言語もある、と考えられている〔\*たとえば、マレー語、ポリネシア語〕。〔しかし、〕わたしは、このような、いくつかの言語が、「内部的に無形式」だという想定は錯覚である、と信じたい気持ちが強いのだ。」

ここでいう中国語における内部形式は、語順によってのみ示されるとサピアは考える。この点で、フンボルトや以下に述べる河野が、意味、あるいは「提題—評言」構造の重要性を強調するのとは対照的である。

(A. p.157=S. p.92) 「中国語の「人殺鴨」Man kill duck は、ほぼ、The man kills the duck と等価とみなしてよいものだが、… 三つの具体概念—二つの事物と一つの行為—が、それぞれ同時に語幹要素でもある単音節語で直接に表現されている。二つの関係概念—「主語」と「目的語」—は、行為を表す語の前後にある具体語の位置によってのみ表現されている。それで全部だ。」

サピアは、明確な外部形式が存在しなくとも、言語には名詞と動詞の区別があるとしている。

(A. p.205=S. p.119) 「名詞と動詞の区別がまったくできないような言語は、一つも存在しない（もっとも、特定の場合には、この区別の性質がわかりにくくもある）。その他の品詞については、事情が異なる。他の品詞で言語の生命にとって絶対に必要とされるものは、一つとして存在しない。」

品詞の区別は統語上の分布を手がかりに決定できること、サピアは考えているようである。

8) 以下のフンボルトの言説を参照のこと。(K. p.258=A. p.163) 「更に、言語の何らか的一面だけが異常に生育すると、言語の純粹な原理の働きが阻害されることもあり得るのであって、その実例としては、マレー語を挙げてもよかろう。マレー語では言語構成の形式の中の単なる一つにすぎないところの修飾的接頭辞によって動詞を規定するという形式が支配的になって、他のすべての形式は一律に無視されてしまう結果となっている。」

### 2.3.3 サピアの類型の形式化

サピアの上記の類型分類はそれが相互に排除的ではなく、程度問題であり、分類の実効性の点で問題があるが、ここで興味深いのは、むしろこの分類の前提となっている語の形式化の方である。

サピアによれば、語は以下のように分析、形式化される。(A. pp.47-55=S. pp.26-30)

#### (2) $A+b$

ここで要素 A は、基本的な実質、いわゆる語幹、語基といった “radical element” を表し、要素 b は文法的要素であり、広義の形式 “form” であって、前者に、接辞、語基の反復、母音の変音などのあらゆる手段によって形式上の限定を付加するものである。

この形式化を発展させたものとして、次のような例が挙げられている。

#### (3) $A$ : ヌートカ語の hamot (骨) のように、語の内部に文法性をまったく持たない場合。孤立語や日本語の体言の場合もこれに該当すると考えられる。

#### (4) $A + (0)$ : 英語の sing のような場合。一見して接辞は付加されていないが、他の形式、例えば sings, sang, sung などとの対立により、その文法的意義が示されている場合。

#### (5) $A + (b)$ : 英語の singing のように、付加される要素が単独で生じることができない拘束形式の場合。ここで、( ) は拘束形式を表す。

#### (6) $(A) + (b)$ : ラテン語の cor (心臓), 単数, 中性, 主格あるいは対格) のように、語幹 cord- も付加される要素も、ともに単独で生じることができない拘束形式の場合。

このような形式化を発展させれば、ラテン語の cor (心臓) のような語では、語幹要素 (cord-) に、単数、中性、格 (主格あるいは対格) という 3 つの、別個の形式的概念がまつわりついでいる、と考えることもできる。サピアはこれを以下のように表している (A. p.55=S. p.30)。

#### (7) $A + (0) + (0) + (0)$

東アジアおよび東南アジアの諸言語は、カンボジア語など一部の派生接辞を持つ言語を除けば、この形式化によって、A という、文法要素を欠く形で表すことができる。結果として、孤立語は  $A+b$  などで表される世界の他の諸言語とは異なる形式化をされることになる。

## 2.4 河野の形態類型論

河野六郎は多様な言語についての知識を基に、類型論に強い関心を寄せたことで知られている<sup>9)</sup>。

河野（1980, p.158）「...即ち語或は文の構造の特徴に類型を見出だそうとするのが言語類型論の目的である。此の類型の考察は、単に類型的分類に終始するに止まるのではなく、引いては斯かる類型に基づいて言語の構造一般に関する研究に導かれるものであって、學者によつては更に言語の構造と思惟形式との相関を考えんとする人もある。」

この「言語の構造と思惟形式との相関を考えんとする人」とは、フンボルトを指していると考えられよう。このように、語に基づく言語類型論は、言語構造を視野に入れ、統語原理を明らかにすることを目的とすべきであると、河野は考えている。サピアの言語類型が「統語的関係の表現方法の特殊性」を類型論に取り入れていないと、河野（1979, p.89）が批判するのはこのためである。しかし、当然ながら、統語原理の解明は、語の連続としての文とは何か、あるいは逆に、文を構成する語とは何か、という言語の本質に関する見解と切り離すことができない。類型論の問題点は、従つて言語学の根本的な問題点と結びついたものである。

河野（1980, p.161）「従来類型論の試みられたのは主として語の類型に関してであるが、語そのものの性質を明らかにしない以上、その類型を論じてもその基礎は決して確立されない。語にしても文にしても意味内容の適切なる分析無くしては確立し得ないのであつて、意味論の未だ定立していない今日、類型論がなお試論の程度を出ないのも蓋し已むを得ないものがある。」

河野他（編）（1996）において、古典的類型論は以下のように要約されている。この分類によると、語構成の方法をもとに、言語は「孤立語、膠着語、屈折語」の3つに分類される。これは、語構成法という近代的形態論の見地による分類であると考えられる。

**孤立語**：語は語形変化をせず、語内部に構造をもたない。いわば語根がそのまま語として用いられる。語はその形の上では他の語との関係を示す信号をもっていない。

例：古典中国語

**屈折語**：語は単位としての独立性が強く、一定の文法範疇に応じて語幹と接辞とによる屈折を行うが、両者の接合が緊密で、いわば融合している。接辞は他の語との関係を明示する統語論的機能をもっている。

例：古典ギリシャ語、サンスクリット語

**膠着語**：語は語幹と接辞からなり、接辞の機能が屈折語のように範疇の累積をなさず、概して单一の範疇を示す。両者の接合は弱く、膠でつけたようである。

例：トルコ語、日本語

河野の分類の特徴として、語形態を二段階の基準により分類していることが挙げられる。

第一の基準は、語構成において、語がより小さな単位に分類できるかどうかである。この基

9) 以下、引用部分の漢字表示を一部現代表記に改めた。

準によって、言語はまず語根のみからなる孤立語と、語幹と接辞からなる屈折語および膠着語との二つに分類される。

第二の基準は、語の意味内容を担う語幹と、文法機能を担う接辞とが、どのように結びつかである。両者の接合が緊密なものが屈折語、接合が弱いものが膠着語である。ここで、接辞の機能が一定の文法範疇を構成するかどうかで、屈折語と膠着語とに違いがあるとしていることに注意したい。逆に言えば、この定義は範疇性に基づく屈折を、膠着語に認めていないことになる。この「一定の文法範疇に応じた屈折」、つまり「パラダイム」を持つという定義はファンボルト（1978）には認められず、河野自身の発案であると考えられる。

この分類は、まず語の内部に構造を持たないものとして孤立語を捉え、次に屈折語を、膠着語と同様に接辞を持つが、融合という、膠着語とは異なる語幹と接辞との接合の手法をとる言語として捉えている。

河野によるこの古典的言語類型分類の再定義は、近代の西洋的言語観に基づく標準的なものと考えることができる。このことは、上記の記述と分類に用いられた用語「語幹、接辞、屈折、融合、範疇、語根」が全て印欧語に関する近代の記述言語学の用語であることからも見て取れるであろう。

#### 2.4.1 屈折語・膠着語と統語原理

河野（1989, pp.1574-1588）は、語形態に基づく言語類型と、文の統語原理とは相互に関連し、形態論的特色は究極的には統語的原理に基づいて形成されるものであるとする。そして統語原理による言語類型として範例的言語である印欧型と連辞的言語であるアルタイ型の2種を提案している<sup>10)</sup>。

**印欧型**：語の独立性が強く、語と語との結びつきが両者の間の「照応（congruence）」によって示される「範例的（paradigmatic）」統語原理を持つ言語—印欧語、パントゥー語など。

**アルタイ型**：主要語に修飾語が先行するなどの、「連辞的（syntagmatic）」統語原理を持つ言語—日本語、朝鮮語、チュルク語、モンゴル語、ツングース諸語、ドラヴィダ諸語、チベット語など。

この分類は、語の持つ特質および語と語の関係性の文への現れ方の2点からなされたものである。

ここでいう印欧型の「語の独立性」の強さは、語がその内部構成により、範例（パラダイム）で支えられていることによる。また、パラダイムで示される文法接辞が、同時に照応という、語と語の結びつきを保証するための文構成上の手段となっている。特に主語と動詞の照応は、両肢型という構文上の特徴をなし、多くの言語において重要な機能を持っている。つまり印欧型の語の独立性の強さとは、語がそれ自体で構文上の機能を示すことに依拠している。

一方のアルタイ型には、河野が膠着語と考える言語が例として挙げられている。これらの言語では、一般に語と語の関係性を示す照応が、構文上重要な機能を担うことがない<sup>11)</sup>。例えば

10) 河野六郎（1989）：「日本語の特質」『言語学大辞典』第2巻。

11) 上代日本語の係り結びはこの例外である。

日本語では、体言（名詞）それ自体の独立性が強く、格助詞との接合が弱く、この意味で孤立語に近い。この体言の独立性の強さは、屈折語の場合と異なり、範例の支えに拠らないものであり、「孤立性の強さ」とも呼ぶべきものである。また、語にはパラダイムが存在しないだけでなく、主語と動詞の照応も認められず、体言が文の必須要素とは言えない。これに対して用言はさまざまな接辞と緩く接合し、複合体（complex）として構文上重要な機能を果たす、文の必須要素である。むしろ用言複合体が単独で文にもなりうる点で、句よりも大きな単位であり、**単肢型**という構文上の特徴をなす。

河野は膠着語を以下のように定義している。

河野（1980, p.165）「…接辞が語構成の主要部分即ち語根或は語幹に緩く接合し、その切れ目が明瞭な型の言語を膠着語と呼ぶ。…此の膠着語的性格は我が日本語の、特に用言に於て認められる所であるが、此の性格の最も顕著な言語としてオスマン・トルコ語が挙げられる。」

このような膠着語において、構文の必須要素としての用言に河野は注目し、その構造を**用言複合体**（verb complex）と名づけている。河野（1989, pp.1581-1582）は用言複合体を「語幹に種々なる接辞（助動詞）や助詞が付いたもの」と定義している。また、この複合体は印欧語の語とは異なり、緊密な unity を持たない。

例えば「書カセラレナカッタ」という複合体は、「書カ-セ-ラレ-ナカッ-タ」という4つの接辞が語幹に付いて形成されるが、これは一挙に作られるのではなく、いろいろな文法範疇を示す接辞が漸次累加することによって、次々と派生語幹を作っていくことにその特徴があるという。

河野（1980, p.166）「日本語でもオスマン・トルコ語でもその文の構造に一つの特徴がある。即ち此等の言語に於ては、述語が文の核心となり要となることである。多くの屈折語では主語と述語との照應という事が形の上で現わされるが、此等の膠着語では主語の標示は必ずしも必要でなく、述語の規定として現わされる。」

この主語の表示が必須でないことは、すなわち文における必須要素が述語のみであるという、**単肢型**という特徴となり、これがアルタイ型における述語の重要性を示す特徴とされている。

用言複合体と関係する以下の河野の記述は、2.1.3に挙げたフンボルトがビルマ語の構文の特徴として述べたことと、ほぼ対応している<sup>12)</sup>。

河野（1980, p.168）「規定語と述語の関係は亦限定語と被限定語の関係にも現われ、「赤い花」の如く限定語は被限定語に先行する。又この文の構造はそのまま複合文にも適用せられ、副文章は主文章を規定するものとして主文章に先行する。副文章は副文章で述語は文末に位するから、副文章の述語の取る諸々の形（之を converbum と称する）が接続詞の

12) (K. p.461=A. p.306) を参照のこと。

機能を果たす。...換言すれば、述語に先行する諸々の語は述語へと向かうのであり、一旦述語に来て文を終始してしまうと新たに規定語を付加することは出来ない。」

これは、膠着語においては文の各限定要素がいわば「述語に向かって収束する」こと、その結果として、なぜいわゆる接続詞が用いられないかを説明している。

河野（1989, p.1578）は連辞的統語原理について、「語は、話線の方向に規定され、重要な語または単位は常に後に位し、それを限定するものは、常にそれに先行し、従属する。言いかえれば、語順が決定的な役割を果たす」と述べている。つまり、連辞的とは、先行言語形式による後続形式の限定という、語順および語相互の共起制限を文構成の基本とすることである。この連辞的統語原理を持つアルタイ型の言語としては SOV 型のトルコ語、日本語などに多く見られる「修飾語 + 主要語」という語順をもつ言語が想定されている。これは、「先行する要素 A が選ばれると、後続する B が次に選ばれ、さらに AB という連続に後続する C が選ばれる」という、話線の方向（時間軸）を考慮した「状態遷移モデル」である。

河野のいうアルタイ型統語原理には、主語と述語という「両肢型」文構造ではなく、述語を必須要素とする「单肢型」文構造を基本とすること、また述語が文末におかれるという、基本語順が「SOV」であるという語順に関わる特質と、有限個の文法要素同士によるパラダイムが存在しない、という非範例的な特質との両面が含まれている。また、話線の方向という、時間軸に従った接辞の累加というプロセスを含むことが大きな特徴である<sup>13)</sup>。

#### 2.4.2 河野の古典中国語・孤立語観

ここで河野の孤立語に関する見解を挙げておく。

河野（1980, p.162）「... 中国語の更に特徴的な性格は所謂孤立語的性格である。中国語を構成する要素即ち語は他の言語に見られるが如き名詞とか動詞とかという様な品詞の別を持たない。... 斯様に中国語の語は何ら文法的機能を形の上で示さないのであって、斯かる言語を孤立語と称する。」

河野の上記の定義によれば、語構成に関して、孤立語は語根以外の文法的要素をもっていないない、つまり、語の内部に他の語との関係を示す信号をもっていない、という統語機能上「消極的」な定義を与えられていることになる。では、孤立語の統語機能は一般に考えられているように、また、サピアも言うように、語順や語構成によるのかというと、そうではなく、むしろ意味結合が重要な文の構成原理であるとするのである。

13) 河野のいう話線の方向と心理的プロセスの関係は、類型論に考慮されなかったとはいえるが、サピアも心理的区別として指摘するところである。

(A. p.220 = S. p.127) 「ある語幹要素を発音する前に、その形式的な資格を決定する言語...パントゥー語など...と、語の具体的な核から始めて、この核の資格を次々と制限することで規定し、その都度先行するすべての一般性を少しづつ切りつめていく言語とのあいだには、かなり重要な心理的区別があるようだ。わたしには思われる。前者の方法の精神には、何か図式的、建築的なところがあるのであるのに対して、後者はあと思案で刈りこんでいく方法だ。」

河野（1980, p.163）「大體文法的機能が語形に示されず語序に據つている場合、その機能を果すのは語序よりもむしろ意味の結合が決定的であつて、語序が語序たり得るのも意味結合に基いているからである。」

河野は以下のような例を挙げて、中国語における「提題—評言」構造の優位性と、意味結合の重要性を指摘している。

河野（1980, pp.162-163）「斯様な文法的標識をその内に含まない語が如何にして文法的機能を果し得るのであろうか。ふつう文法的機能は語の排列即ち語序によつて示されると云われる。....

中国語に於ては文の構成は厳密な語序に縛ばられて動きの取れない様なものではないからである。否、時にはかなり自由な構成も可能である。例えば、這本書、我念過了「此ノ本ハ私ハ読ンダ。」の如き例では這本書は目的語であるが、主語なる我に先行している。....即ち這本書は主語でもなければ目的語でもない。」

この場合、主語でもなければ目的語でもない「這本書」は、文法的機能を持たない提題であり、「我念過了」はそれについての評言であると考えられよう。

以下に見るように、中国語の統語機能は、意味、語序による以外に、いわゆる機能語（虚辞）の使用が一定の役割を果たすことを河野は認めている。むしろ言語である限り、機能語は古来から使われてきたと河野は推測するが、古典中国語に機能語の使用が少ないと考えられる。口語との文体上の違いによると考えている。

河野（1980, p.163）「中国語に於て文法的機能の表示は上述の如く意味結合に基づく語序によつて為されるのであるが、又一面では一聯の所謂虚辞即ち助字を挿入することによつても果される。此の虚辞の利用は現代の口語では著しいけれども、古い時代に於ても口語に於ては現代と同様であったと思われる。その好き例證は比較的口語の特徴を反映していると思われる論語に於て認められる。」

従って、「純粹な孤立語は理念として考え得るとしても、言語たりえないだろう（上掲書 p.164）」、と河野は考える。

さらに、ファンボルトが語形成において挙げたのと同様に、河野も構文レベルにおいて、「対句」という、形態に頼らない並列構造の例を挙げている。

河野（1980, p.163）「...君弑賊不誅（君弑セラレ賊誅セラレズ）の如き文では此が日本語で受け身に訳せられるのも、君と賊、弑と誅の意味的結合が受け身を要求するが為であつて、形からすれば能動を示す構造と異なる所は無い。」

上記の例の場合、「弑」（臣が君を、子が親を、のように、下の者が上の者を殺す）および「誅」（罪のある者を殺す）の動詞としての語義と提題（「君」および「賊」）の指示対象との関係が、その意味解釈に重要な役割を果たしていることは明らかであろう。

## 2.5 コムリーの形態的類型論

Comrie (1989, pp.42-52) は古典的類型論を「形態的類型論」として、「語順類型論」と対比して紹介している<sup>14)</sup>。

コムリーの形態的類型論の再定義を以下に要約する。

言語の標準的なタイプとして、孤立型、膠着型、融合型を、さらに多総合型（ないし抱合型）を認める。

**孤立型言語**：形態法を持たず、理想的には単語と形態素の間に 1 対 1 の対応がある。

**膠着型言語**：単語内部の（複数）形態素間の境界が明瞭である。

**融合型言語**：同一の単語内部の種々の範疇が单一の分割不可能な形態に融合している<sup>15)</sup>。

さらに抱合と多総合とを区別し、抱合は複数個の語彙的形態素を单一の多総合的な複合体に結合できる、多総合の特殊な場合である、とする。

**抱合型 (incorporating)**：語彙的形態素を複数個結合して单一の単語（しばしば英語で言えば文全体に対応する）にすることができる。

例：チュクチ語 “tə (1. sg. subj) -meyŋə (大きい) -levtə (頭) -pəyt (痛み) -ərkən (不完了相)”

**多総合 (polysynthetic)**：語彙的、文法的に関わりなく数多くの形態素を結合して单一の単語にすることができる。

例：エスキモー語 angya (ボート) -ghlla (指大辞) -ng (獲得する) -yug (願望) -tuq (3. sg.)

この場合、一つの単語に一つの語彙的形態素 (angya) しか含まれていない。他はすべて文法的形態素である。

また、抱合、多総合を膠着の下位分類とする。これらは単語ごとの形態素の数に関して、孤立型言語とは反対の極を表している。理想的な多総合型言語では、各文がそれぞれ单一の単語で構成され、さらにその単語は、意図された意味を表現するのに必要なだけ多くの形態素からなっている、とする。

コムリーは結局、形態的類型を、総合の指数と融合の指数の 2 つのパラメータに置き換えている。

**総合の指数**：単語ごとの形態素の数：一方の極が孤立型、他方が多総合型である。

**融合の指数**：単語内部の形態素がどの程度容易に分割できるか：一方の極が膠着型、他方が融合型である。

14) 以下では必要に応じ、松本克己他訳、コムリー (1992) のページ (M. で表す) と Comrie (1989) のページ (C. で表す) を対照して示す。

15) コムリー (M. p.46=C. p.45) 「膠着的言語と融合的言語はともに屈折を持っているため、一方だけを指して、「屈折 ((in)flection)」を基にした用語を使うことは誤解を招くおそれがある。」

これによると、膠着型言語は融合の指數が低く、総合の指數は中間的である。多総合型は総合の指數が高い。融合型は融合の指數が高い。ただし、孤立型には融合の指數は高くも低くもなく、無関係で、単に適用されない、としている。

これを表にまとめると以下のようになる。なお、( ) 内は論者が他の型からの類推により補ったものである。

類型	融合の指數	総合の指數
孤立型	—	低い
膠着型	低い	中間的
多総合型	(低い?)	高い
抱合型	(低い?)	高い
融合型	高い	(中間?)

コムリー自身の認めるように、この類型論は、いくつかの理想的タイプを立て、それに従つて世界の諸言語を分類しようというものである。しかし、世界の諸言語は総合および融合という2つの指數に関して、それぞれの極の間のいろいろな位置を占めている。従って、形態類型論からは、明確に区別された類型論は得られないことになる。

コムリー自身は、このような語形態に基づく分類に関して冷淡な印象を受ける。

(M. p.54=C. p.52) 「結局、ここでの全般的な結論は、形態的類型論は言語類型論において安定してはいるけれども限られた位置を占めるにすぎず、また望むらくは、一般言語学の教科書が今後いつまでも、諸言語の類型論的分類にとって、これが唯一の、あるいは、最も洞察力に富んだ方法であるような印象を与えないようにということである。」

以上のコムリーによる形態的類型論の再定義には、以下のような問題を指摘することができる。

第一に、「総合の指數」と「融合の指數」による分類は、理解しやすいが、古典的類型論の持つ、「分類は程度の問題で、明確な区別は得られない」という欠点はそのまま残っている。

第二に、孤立型言語の扱いを見ると、融合の指數は適用されないとする点が問題である。一般に2つの相互に独立したパラメータが連続的な値をとる場合に、それぞれを軸として2次元の軸をもつ座標を描くことができるが、コムリーに従うと、孤立語はこの座標上に表すことができないことになる。さらに、中国語、ベトナム語などの孤立語の場合、複合語の扱いに困る。すなわち、中国語は日本語と同様、(3声+3声が2声+3声になるという変調(tone sandhi)を除いて)「中華人民共和国」のような、形態変化なしに長い複合語を形成することができるが、この複合語を語と認めれば、中国語は「融合の指數」が極めて低いと考えることもできる<sup>16)</sup>。

16) 複合語を考慮すると議論が錯綜することはサピアも指摘している。(A. pp.236-237=S. p.137) 「言語の類型を概観している現在、特別に複合法を考察したりすれば、当面の課題を不当に錯綜させることになるだろう。派生接辞をいっさいもたない言語でも、それにもかかわらず、大半のものは自由に語幹要素(独立語)を複合することができる。このような複合語は、单一語の統一性に似通った固定性をもっていることが多い。」

## 2.6 スペンサーの批判

Spencer (1991, pp.31-39) は、直接ファンボルトの著作に言及していないが、彼の伝統的類型論への批判は、現代の言語学の立場からの批判としては典型的なものである。以下の諸点が問題点として挙げられている。

1. 4 類型ははっきり区別できるものではなく、連続的である。
2. 同一の言語が、言語構造のレベルが異なれば、異なる類型に分類されるため、つじつまがあわなくなる。  
例えば、英語は屈折に関しては孤立語に類似するが、派生に関しては膠着的である。さらに ‘Harriet spends her weekends horseriding’ のような例では、部分的ではあるが多総合的（抱合的）である。
3. 複合に関して、あるいはこの類型が統語的なプロセスとどう関わるかに関しては、この分類は何も語らない。

スペンサーは、結局この分類からは何も興味の持てる結果は生じない、と断定している。ここで批判のそれについて検討してみよう。

第一点は抽象的な「形態素」レベルとその具体的な「形態」レベルでの実現を区別する現代的な形態論の観点からのものである。この 2 つのレベルを区別した上で、それが 1 対 1 の対応を示さないという理論的立場に立てば、抽象的なレベルでの形態素の連続を、どのような具体的実現形に写像するかによって屈折語、膠着語あるいは抱合語という言語の表層的類型を区別することに、現代的な意義を見いだせないのも当然である。

しかし、以下の点は確認しておきたい。即ち上記の批判は、今日の形態論的見地に立てば、融合、膠着、抱合語という区別が無意味になるということであって、相変わらず孤立語という分類に関しては、このような批判は当たらない点である。

第二点は、伝統的類型論が語形成と統語上の屈折のような統語機能を区別していないことへの正当な批判である。確かに、東南アジアの言語を例とすれば、統語レベルでは典型的な孤立語であるカンボジア語にも語形成上では接頭辞 (prefix), 接中辞 (infix) という接辞が存在している。

第三点は、ファンボルト、サピアおよび河野に関する限り、必ずしも正当なものではない。既に見たように、その多くが時代遅れのものとされるにせよ、ファンボルトの議論は語形成、統語上のプロセスだけでなく、人間の思惟と民族精神の形成との関係にまで及んでいる。

また、サピアの類型論はその基礎を統語法と形態的手法の両者に置いている。河野が統語原理に基づく言語類型論を構想していたことは、既に見た通りである。この結果、これらの類型論から何らの興味深い点も引き出せないかどうかは、研究者の見識と学問的想像力に関わることなので、ここでは問題としない。

スペンサーの批判について、むしろ注目すべきは、その批判の拠って立つ言語観の「暗黙の前提」のあり方である。Spencer (1991, p.39) 自身も言うように、類型論に留まらず、現代の形態論、統語論などの言語理論は、その理論構築に際して、ある形態素（基底形）と実現形（表層形）とが 1 対 1 に対応するような「理想的な膠着語」の存在を、暗黙の理念として仮定しているのである。

「伝統的な類型分類がそんなに駄目なら、なぜ言及するのか。それには2つの理由がある。第一に、伝統的類型はしばしば記述研究において、あるいは若干の理論研究の文献で用いられるので、[この本の] 読者は少なくともその用語になじんでおくべきである。さらに重要な点だが、類型論には「膠着こそが語形成の一義的なタイプであり、他のタイプはそこからの「派生」である」という前提が隠されているのである。

特に、膠着と、屈折語に典型的に見られる融合形態論との区別がこの類型論の中核をしており、屈折と形態構造一般に関する理論化の根本にこの区別があるのである。実際、形態素という概念そのものが、すべての形態論は何らかの抽象化のレベルにおいて、膠着的である、と前提する傾向がある。」

語をその内部構成要素として文法形式を含むものと考えると、文は語の連続体であるから、文中に文法形式が何らかの言語形式（語順を含む）として示されていると想定することができる。このような語および文の捉え方を**形態統語論**（morphosyntax）的な観点と呼ぶことにしよう。この観点は、西欧の言語観、文法理論の多くが共有するものである。

例えば、既に述べたように、フンボルトは語根と接辞とが文を構成すると考えていた。ヨーロッパでは、Martinet (1970, pp.16, 111) の monème lexical および monème fonctionnel の区別もこのような言語観の反映である。（7）で見たように、サピアの形式化も同様である。また、Bloomfield (1933) に代表されるアメリカ構造主義の言語学は、統語構造を形態素の連続に還元して記述する。さらに Chomsky (1965, pp.170–174) の屈折接辞に関する分析も、その本質はサピアの形式化と同一であることから、少なくとも生成文法の初期においては、このような形態素相当の基底形の連続からなる統語構造の記述が、屈折パラダイム記述の形式化として想定されていたことが判る。

この形態統語論的な考え方では、語の内部に形態上の構造が存在せず、統語的手がかりとなる文法形式も存在しない孤立語を、現代の言語理論の射程に捉えるには、原理的な困難が予想されるであろう。

### 3 類型論の形式化の試み

語の内部構成という形態に基づく屈折語の伝統的定義には、印欧語の中でも古典語しか当てはまらないかのように見える。現代の印欧語の多くは、語の分析的な傾向を強めているため、文法接辞の「融合」性は低下している。フンボルト、河野の上記の定義によれば、英語はもはや孤立語に近い。

語構成に基づく類型分類だけでなく、基本語順などの類型論的研究によると、タイ語やカンボジア語などの孤立語が、屈折の貧弱化したフランス語や英語と同じカテゴリーに分類されそうである。一見表面的にはその通りなのだが、英語などの歴史的に屈折語に由来する孤立語化した言語と、本来の孤立語との間の本質的な違いが、従来の類型分類には反映されないことになる。孤立語の研究者であれば、現代の英語をもって孤立語の代表例とすることに、直感的に違和感を感じるであろう。

以下では先に 2.3.3 で挙げたサピアの形式化を修正し、発展させることにより、語形態に基づく類型論の特色と問題点を明らかにすることを試みる。

サピアの分類は、古典的類型論のものとは異なり、「形態」より抽象的な「形態素」レベル

でのモデル化と考えられる。サピアは文法的要素を  $b$  という形式で表す際に、それがどのような形態として現れるかを捨象しているからである。

今、 $| + |$  を、形態上有る領域 (domain)，例えば語、句、節などとする。各類型を理想的な言語によって代表させることにし、文 ( $S$ )、あるいは句の中に現れる語 ( $W$ ) において、その語彙的特質を  $L$  で、その統語的特質 (文法的特質) を  $G$  で表すことにする。これはサピアの言う基本的要素  $A$  を  $L$  に、文法的要素  $b$  を  $G$  に置き換える、領域という概念を加えたモデルである<sup>17)</sup>。ただし、サピアが ( ) で示したような、要素が形態上、自由形式か拘束形式かの区別は問題にしない。

この形式化によると、これまで論じてきた、フンボルト、サピア、河野、コムリーの語の形態的特徴に基づく言語類型は、「語幹」を  $L$  で、「接辞」を  $G$  で置き換えると、以下のように表すことができる<sup>18)</sup>。

(8) 孤立語  $W = \{L\}$

一般に語根は動詞、名詞などの文法的範疇を超えた抽象物であり、従って孤立語の語は語彙的特質  $L$  のみで表すことが可能である<sup>19)</sup>。理想的な孤立語においては、全ての語が語彙的特質のみからなり、統語的特質のみからなる語はない。

Cf. フンボルト (K. p.119=A. p.75) 「... 語根と語が一致してしまうことになる。」

(9) 孤立語の複合語  $Compound W = \{L_1, L_2, L_3, \dots\}$

(10) 膠着語  $W = \{L\}$  または  $W = \{G\}$

膠着語においては、語は語彙的特質のみからなるものと、統語的特質からなるものとの 2 種類がある。

(11) 日本語の体言 (句)  $Nominal (Phrase) = \{L\} + \{G_1\} + \{G_2\} + \{G_3\} \dots$

体言  $\{L\}$  の接辞との結合が弱く、独立性が高い。

Cf. フンボルト (K. p.186=A. p.117) 「この〔屈曲として用いられた〕場合の複合とは、... 実は機械的な接着にすぎず、純粹な有機的付加形成ではない。」

(12) 河野の用言複合体  $Verb Complex = \{L_1, L_2, L_3, \dots G_1, G_2, G_3, \dots\}$

17) 本節の以下の形式化の段階では、文法的要素  $G$  として、派生接辞などの語形成レベルの要素と、格接辞などの統語レベルの要素とを未だ区別せずに含んでいることに注意されたい。これは、フンボルト、サピア、河野の類型論で、両者を区別せずに論じているためである。

18) 「語彙的特質  $L$  (Lexical Properties) として、意味的特質  $SemP$  (Semantic Properties) と統語的特質  $SynP$  (Syntactic Properties) との二つを仮定する」という方が、より適切な用語法かもしれないが、記号の煩雑化を避けるため、それぞれ *Lexical*, *Grammatical* の頭文字を記号とした。

19) 現実に存在する中国語、タイ語、カンボジア語では、いわゆる「文法化」された語彙が文中における機能語の役割を果たしていると考えられている。また、文末終助詞のように、明確な語彙的特質を持たない語も存在する。

(13) 多総合語  $S = W = \{L_1, L_2, L_3, \dots, G_1, G_2, G_3, \dots\}$

コムリーによる定義：語彙的、文法的に関わりなく、数多くの形態素を結合して单一の単語にすることができる。

(14) 抱合語  $S = W = \{L_1, L_2, L_3, \dots\}$

コムリーによる定義：語彙的形態素 ( $L$ ) を複数個結合して单一の単語を形成する<sup>20)</sup>。

(15) 屈折語（融合語） $W = \{L, G_1, G_2, G_3, \dots\}$

屈折語においては、語の語彙的特質と統語的特質が融合して1語が成り立っている。

Cf. サピアによるラテン語の形式化 ((7) の再掲)

$A + (0) + (0) + (0)$

この記号化により、語形態による類型分類をより明示的なモデルとして示すことができる。まず、語の特質という観点からは、屈折語および膠着語の語は  $L$  あるいは  $G$  からなるという共通点を持つ。 $L$  または  $G$  の語としての独立性の観点からは、屈折語では  $L$  のみ、あるいは  $G$  のみでは語として成立しないのに対して、膠着語では、 $L, G$  ともに、独立した存在である。さらに膠着語の体言句の例である日本語の体言（句）と、屈折語（融合語）の語を比較すると、両者の違いは領域を示す「」の位置と数の違いとして示されている。この式の近似性が、両者の区別が截然としないという批判の根拠である。一方、孤立語の語は  $L$  のみからなり、それだけで語として独立した存在である。

ここで、孤立語の複合語（9）と抱合語の語（14）とが同一の形式で表されること、同様に、河野の用言複合体（12）と多総合語の語（13）とが同一の形式で表されることに注意されたい。これは、孤立語の複合語は文中の一要素として  $(S \supset W)$  機能するのに対し、抱合語の語はそれ自体が文として  $(S = W)$  機能すること、同様に、用言複合体はそれ自体が文としても句としても  $(S \ni Verb Complex)$  機能するのに対し、多総合語の語はそれ自体が文として  $(S = W)$  機能することによる。本論で領域を示す中括弧記号「」はこのような領域の違いを表示することができないため、これらが一見同一の形式として示されるのである<sup>21)</sup>。

さらに、各類型における、語の連続を文と仮定すると、各類型のなす文はそれ以下のような一次元モデルで表すことができる。

(16) 孤立語の文： $S = W + W + \dots$

$= |L| + |L| + \dots$

(17) 膠着語の文： $S = W + W + \dots$

$= |L| + |G| + |L| + |G| + \dots$

20) 多総合語、抱合語は、コムリーの定義に従って形式化したものである。具体的な言語についての定義の是非および定式化については、さらに検討が必要である。

21) 煩雑であるが、括弧に付加記号をつけ、 $|S|$ 、 $|Verb Complex|$  のように示すことも可能である。

(18) 屈折語の文 :  $S = W + W \dots$

$$= \{L, G_1, G_2, G_3, \dots\} + \{L, G_1, G_2, G_3, \dots\} + \dots$$

これによると、孤立語の文（16）が統語的特質を言語形式として持たないのに対して、膠着語の文（17）および屈折語の文（18）は統語的特質を言語形式として持っている。従って、上記の膠着語、屈折語の文の形式化は、文の形態統語論的観点を形式化したものでもある。2.6において、形態統語論的観点に立つ現代の言語理論が、孤立語を扱うことには原理的困難があるという可能性を指摘したのは、この形式化から明らかであろう。（16）のように、 $\{G\}$  が存在しない場合に、統語論は語順以外の手がかりを持たないのである。以下に河野（1980, p.163）の例を再掲する。

(19) 君弑賊不誅（君弑セラレ賊誅セラレズ）

これは上記の形式化によって以下のように表される。

(20)  $S = \{L_1\} + \{L_2\} + \{L_3\} + \{L_4\} + \{L_5\}$

ここで、 $\{L_1\} \sim \{L_5\}$  はそれぞれ上記の語に対応するものとする。 $G$  が文中に現れないのに、この文の意味解釈が可能なのは、「弑」〈目上の者を殺す〉という動詞の意義からして、「君」が〈目上の者〉を指し、同様に「誅」〈罪のある者を殺す〉という動詞の意義に対して、「賊」が〈罪のある者〉を指すという意味の結合が存在するためである。このように、動詞の意義の一部として、その動作者あるいは動作対象が含まれているため、提題の語義と併せた「意味的結合」により、文において提題の指示対象が果たす機能が了解される。従って構文としての能動、受動の区別の明示は不要となる。

これに対して、文中に何らかの統語的特質  $G$  の存在を前提とする形態統語論的観点に立てば、何らかの抽象レベルにおいて、格のマーカーを仮定し、実現形のレベルに至る過程でこれを削除するなり、格マーカーの代替物としての固定語順を仮定し、例えば「君」を動詞の補語の位置に置くなりした上で、実現レベルで提題の位置に移動するといった分析の方法をとる以外に方法は見あたらないであろう。いずれも、上記の意味的結合以上に非現実的な仮定を積み重ね、さらに古典中国語に本当に必要かどうか判らない「能動一受動」の文法的対立を持ち込む結果となり、不必要に複雑な分析を生み出してしまうことが予測される。

#### 4 考 察

これまで見てきたように、ファンボルト、サピア、河野の類型論は、それぞれの時代の制約はあるとはいえ、世界の諸言語の深い知識に裏付けられた各自の言語観と密接に関わっている。以下では、各人の類型論の特徴をまとめ、さらに孤立語分析にあたって的一般言語学的问题を提起することにする。

#### 4.1 形態類型論のまとめ

**フンボルト：**

フンボルトの形態類型論は、「人間の言語の持つ形式と思惟過程とは対応する」という彼の言語観表明の一環としてなされている。そこから「正しい思惟をなしうる言語形式はどのようなものか」という基準による価値判断が導かれる。この結果、意味される対象と、思考によるその対象の位置づけとを、言語形式の上で明確に区別し、しかも前者が主要なもの、後者が副次的音声として実現する「屈折語」が理想の言語形式と考えた。この対極に「孤立語」がある。

**サピア：**

サピアの言語類型は、文法概念の4型を統語上どのように用いるか、形態上の孤立、膠着、融合、象徴の4接合手法のどれを用いるか、語の内部の形態素の凝集度は「分析的、総合的、多総合的」という3つのどれに該当するかという、統語機能と形態的手法の両者とに基づいた分類である。

**河野：**

河野の類型論の特徴は、語形態に基づく古典的類型論に関する近代言語学的観点からの見直しに留まらず、さらに融合語（範例型）および膠着語（非範例型）の区別に対応するものとして、印欧型およびアルタイ型という統語原理の二類型を考案した点にある。またアルタイ型に関して、話線の方向性に従って複合体が形成されるという時間軸によるプロセスを導入していることも大きな特徴である。

これらの類型論はいずれも、語に基づく類型を考察する際に、語の文における統語的機能を念頭に置いている。従って、現代の言語学の立場からの古典的類型論へのスペンサーの批判は、形骸化した用語の通俗的理解に基づく矮小化された類型論に向けてなされたものであり、それぞれの類型分類と言語観の十分な理解に基づいてなされているものとはいえない。

ここで、融合語、膠着語、孤立語などの古典的類型分類の問題点を簡単にまとめておく。

**融合語：**

「語形変化をする語は、意義を担う語幹部分と文法的関係を担う部分とに分けられる」とする形態統語論的な考え方方は、近代言語学では一般的なものである。フンボルトは前者を語根と呼び、後者を接辞と呼んだ。本論で見たサピアの  $A+b$  の形式化などもこの形態統語論的な考え方の反映である。融合とは、これら語幹要素と文法接辞の接合手法による分類である。この点で、各論者は一致している。

**膠着語：**

膠着とは、語幹要素と文法要素の結合が緩いことである。膠着と上記の融合との区別は単なる手法の違いによる程度問題であるため、両者は截然と区別することはできない。語形態に基づく類型論への批判は、この点に集中しているが、本論で見たように、フンボルト自身も膠着語を「十分には完成されなかった屈折」とし、その価値判断をのぞけば、膠着と屈折とがともに語根と接辞の接合であることを認めている。

なお、フンボルトは膠着語をビルマ語を例として論じているが、これは当時他の膠着語に関して信頼できる資料が入手できなかつたという事情によるものである。フンボルトの膠着語に関する理解は、膠着語というよりもむしろ SOV 型の言語の特徴であるとも考えら

れる。結果として、ファンボルトの膠着語観は、同様に SOV 型言語である日本語を例とした、河野の連辞的統語原理を持つアルタイ型言語にはほぼ一致する。

### 孤立語：

膠着、屈折、抱合語等の分類には常に異論があるが、これはスペンサーのいう、現代の形態論の共有する「膠着語モデルが理想」という暗黙の前提を持つ形態統語論的言語観の反映である。これとは対照的に、語内部に構成が認められないという点から、「孤立語」の存在自体に疑問は持たれていない。いわば、孤立語は類型分類上「孤立」しており、他の分類に対して行われるような批判を免れている。ただし、複合語をどう考えるかという問題とともに、孤立語に関する考察は十分に行われてこなかった。

孤立語の統語原理をどう考えるかについては、ファンボルトが、語順、不变化詞とともに、慣用語法、意味上の脈絡を挙げ、河野が語順とともに意味結合を重視し、その「提題—評言」構造に注目するのに対し、サピア、コムリーはもっぱら語順を孤立語の唯一の統語構造と考えているようである。

## 4.2 孤立語分析上の問題点

これまで検討してきたことから明らかなように、語形態に基づく類型分類は、語の文中における統語機能を念頭に行われてきた。従って形態類型論は、文の統語原理をどう考えるかという言語観を反映する。河野が統語原理の類型を構想したのはこのような動機によるものと思われる。

ここでは、特に孤立語の分析に深く関連する諸問題について、論点を整理し、問題を提起することにする。

### 4.2.1 格表示と格

屈折語に見られるような語形態における格の表示は、西欧語話者の言語観の基礎をなしている。英語やフランス語のように格表示のほとんどを失った言語については、形態素としての格表示の代償として、語の隣接 (juxtaposition) という「位置」をもって文法機能を果たすものとする考え方方が生まれた。つまり、語の内部構成要素である、格を示す形態素の表示手法が、膠着、融合からゼロ表示に代わり、西欧近代語では「位置」によって表現されている、という見方である。この見方は孤立語にも安易に適用されがちである。サピアに見られる、「語順こそが孤立語の統語原理である」とする主張もその例である。

しかし孤立語分析において注意すべき点は、孤立語において格表示がないことは、語の内部構成要素の表示手法の変化を考えるべきではない点である。孤立語の語を  $W = |L|$  と表すことができるよう、孤立語には語の内部構成要素として、そもそも格がなかったのである。この点で、無批判にいわゆる「格」を言語普遍性の一部と仮定することには大きな問題がある。

### 4.2.2 文法範疇および語類

印欧語など、屈折を持つ言語においては、屈折のパターンを語の品詞、統語上の語類の分類の基礎とすることができます。近代英語など、屈折をほぼ失った言語については、格表示の場合と同様、他の要素との共起制限に基づいて語の分類が行われている。生成文法における厳密下位範疇化もそのひとつである。一方孤立語については、どのような基準によって統語上のカテゴリーを決定するかは大きな問題である。これまで孤立語の品詞分類に関しては、河野のよう

に「名詞とか動詞とかいう様な品詞の別を持たない」という極端な考えも主張された。あるいはサピアの「名詞と動詞の区別のまったくできない言語は、一つも存在しない」という言語普遍性の観点からの主張も検討されるべきであろう。

近代の統語的出現環境によるカテゴリー設定は、一見すべての言語に適用できそうに思えるが、実際に孤立語に適用するとなると、孤立語の語順が文脈に強く依存し、かつ先行文脈から理解可能な物事は「省略」されるという原則があるため、容易に循環論に陥ることになる。例えばある場合に動詞が直接補語をとるから他動詞であると認定し、補語がない場合にはこれを文脈による省略と見なして、「他動詞の自動詞的用法」とする、というような論法である。従って、孤立語における語類の認定にはきわめて慎重であるべきである。

#### 4.2.3 動詞連続と補助動詞、動詞句

**2.1.1** で見たように、フンボルトは「定動詞 (finite verb)」を文の必須要素としている。このように、「(完全な) 文あるいは句は、命題をなす主語と述語から構成され、そこに定動詞をひとつ含む」という考え方を暗黙の、あるいは明示的な前提とすることを、本論では定動詞公理と呼ぶことにした。

最近の日本語の分析は、補助動詞と本動詞を別の階層の文にそれぞれ帰属させることが多い。これも定動詞公理を無批判に膠着語に適応したものと考えられる。

東南アジアおよび東アジアの孤立語には、動詞（句）を語形変化なく羅列する「動詞連続 (Serial Verb Construction)」という構造がある。これらの動詞連続を、一つの文に帰属させるか、それとも複数の文に帰属させるかは、文をどのような構成要素からなるか、という言語観と関わってくる。**2.2.2** で見たように、フンボルトがこれを複数の文の連続と考え、また Abel-Rémusat が修飾機能を持つ動詞群と本来の動詞とで構成される単独の文と考えるのは、共にここでいう定動詞公理の反映である。

#### 4.2.4 文と述語

「一述語が文を支配する」という定動詞公理は、印欧語において、パラダイムをなす主語名詞と述語動詞とが互いに照応し（範例的統語原理）、両肢型文構造を形成することと結びつき、言語における文を古典論理学でいう命題と同一視する言語観を形成した。近代の言語学がこの言語観を根強く継承していることは、チョムスキーの初期の句構造規則  $S \rightarrow NP VP$  からも窺える。これは両肢型文構造を言語の普遍的構造として形式化したものである。

このような見方は、これまで見てきた屈折語に基づく言語観からのものである。河野の、膠着語におけるアルタイ型連辞的統語原理の存在、单肢型文構造の重要性の指摘、用言複合体の提唱は、このような見方に対する反論でもある。

ここで仮に、連辞的であることを、有限個の文法形式の対立によるパラダイムが存在しないこと（非範例的）と考えれば、連辞的とは、前後に現れる言語形式の相互規定と見なすことができる。そうすると、連辞的であることと、上述の話が話線の方向に規定される、という SOV 語順（時間軸上の関係）とは、別の統語原理であると考えられるはずである。

例えばタイ語やカンボジア語のように、SVO 言語であり、語を限定するものが常に限定されるものに後続するような言語であっても、非範例的、連辞的であり得る。

語順に関連する時間的方向性と、言語形式の相互規定とを別の統語原理として分離することにより、語順を超えた統語原理を構想することも可能であろう。このようにして初めてアルタ

イ型統語原理を孤立語の統語原理へと拡張する可能性が拓けるであろう。

#### 4.2.5 文の相互関係：複文と並置

定動詞公理により、一つの動詞が一つの文を支配すると考えると、定動詞を含む文は、独立性が高く、接続詞を用いて結ばれ、複文を形成する。このような文結合の見方も、現代の文法理論における複文、重文の分析方法に強い影響を与え続けている。

一方、フンボルトが 2.1.3 でビルマ語について指摘した「述語への収束」や、河野が用言複合体について述べた「副文章の述語の取る諸々の形が接続詞の機能を果たす」ことは、複数の文の形成する構造が、言語によって異なる可能性を示している。

さらに、フンボルト、河野も指摘するように、中国語には、文レベルで構造を持たない羅列である「並置」(juxtaposition) が存在する。これは「善惡」などの語レベルでの複合語だけではなく、対句 (parataxis) という形で、孤立語の談話構成上、きわめて重要な機能を果たしている。言うまでもなく、対句は明示的な接続の言語形式がないままの語、句、文のなす構造である。従って、形態素の連続、あるいはその代償としての語順という構文観では、対句の分析には大きな困難が予想されよう。

#### 4.2.6 動詞連続とモダリティー

文が話法を含む場合、これらをある命題  $P$  に関する話し手の態度  $M$  ( ) という述語であるとする考え方、定動詞公理の拡張である。特に、西洋古典語において動詞の持つ文法範疇であった話法が、英語、フランス語、ドイツ語など西欧近代語の多くにおいて法助動詞として動詞から独立した語になった結果、このような文構造がいっそう明確に把握しやすくなり、西欧近代語話者がこれを言語普遍と考える傾向を助長したのではないだろうかと推測される。

このような述語の階層も、動詞連続のような並列構造を前提とする孤立語にそのまま適用することはできない。また、日本語などのモダリティーにも、安易に適用することはできない。

#### 4.2.7 「提題—評言」構造と文の定義

孤立語の見方として、河野は意味結合の重要性および文の「提題—評言」構造を孤立語の特徴と考えているのに対し、サピア、コムリーは統語構造の手段として、もっぱら語順の重要性に注目している。本論では、後者が形態統語論的な観点に立つものであることを示し、孤立語の分析にあたってはそのような観点が不十分であることを示した。

中国語に代表される孤立語の「提題—評言」構造を理解するためには、言語形式が形成する文構造についての再検討が必要であると思われる。

本論では、フンボルトが中国語の文構造をどう考えていたかに関連して、彼の「支配と依存」、「限定と被限定」という概念を紹介したが、彼がこれらの用語を用いる際に実例の提示をしなかったこともある、その意義は必ずしも明確にできなかった。フンボルトの「依存」関係は、その後 Tesnière (1965) により「再発見」された、という議論もある<sup>22)</sup>。また、河野は連辞的統語原理を論じる際に、先行する限定語が後続する述語を規定すると述べているが、この「限定、被限定」あるいは「規定」の概念も、その意味についてさらに考察する必要がある。

22) Harden & Farrelly (eds.) (1997, p.98)

#### 4.3 終わりに

語に基づく形態類型論は、単に語の観点から世界の諸言語をどう分類するかに留まらない。むしろ、類型分類は統語構造をどう考えるかという観点からなされたものであり、各人の言語観の反映である。本論ではこのような観点に立ち、伝統的な類型分類を代表する者として、フンボルト、サピア、河野六郎を取り上げて、その特徴を明らかにした。その過程で、西欧的言語観の現れとしてのフンボルトに見られる定動詞公理、サピアの形式化に代表される形態統語論的観点、河野の印欧型およびアルタイ型の統語類型を論じた。

さらに、語の類型分類を形式化することにより、それぞれの類型分類のもつ特色と問題点を明確にした。類型分類上問題があるとされた屈折語、膠着語は、この形式化によっても近似した式によって表されることから、分類の実効性の上で問題が生じることは明らかである。また、語の形式化から文の一次元的形式化も可能であるが、それによって現代の言語学のような形態統語論的観点から孤立語を扱うことが原理的に困難であることを示すことができる。

さらに、孤立語研究に於いて、定動詞公理および形態統語論的観点に代表される西欧的言語分析が持つ問題点を列挙した。本論に関連する問題として、類型分類の形式化の応用について、また定動詞公理の存在とその安易な日本語への適用の結果生じる問題については、峰岸（2000）を、格と格表示については Minegishi（2001）で論じているので、参照いただきたい。

#### 参 照 文 献

- Abel-Rémusat. 1822, *Eléments de la grammaire Chinoise*.
- . 1857, *Eléments de la grammaire Chinoise*, nouvelle édition publiée conformément à celle de l'imprimerie royale et augmentée d'une table des principales phonétiques chinoises, par L. Léon de Rosny, Paris.
- Bloomfield. 1933, *Language*, London.
- Chomsky, Noam. 1965, *Aspects of the Theory of Syntax*, Cambridge: The MIT Press.
- チョムスキ 1970, 『文法理論の諸相』安井稔訳、研究社。
- Comrie, B. 1989, *Language Universals and Linguistic Typology-Syntax and Morphology*, 2nd ed. Chicago: The University of Chicago Press.
- Harden, T. & Farrelly, D. (eds.) 1997, *Wilhelm von Humboldt : Essays on Language*, Frankfurt am Main.
- Humboldt, Wilhelm von. 1836, *Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluß auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts*, Hrsg. von Eduard Buschmann, Berlin: Gedruckt in der Druckerei der Königlichen Akademie der Wissenschaften.
- . 1998, *ibid.*, Hrsg. von Donatella Di Cesare, 556pp. Paderborn, München, Wien, Zürich, Schöningh.
- . 1988, *On language: the diversity of human language-structure and its influence on the mental development of mankind*. Trans. Peter Heath, 296pp. Cambridge, New York, New Rochelle, Melbourne, Sydney: Cambridge U. P.
- フンボルト 1984, 『言語と精神—カヴィ語研究序説—』亀山健吉訳、法政大学出版局。
- 亀山健吉 1978, 『フンボルト—文人・政治家・言語学者—』、中公新書。
- . 2000, 『言葉と世界—ヴィルヘルム・フォン・フンボルト研究—』、法政大学出版局。
- 河野六郎 1979, 「朝鮮語の膠着性について」『河野六郎著作集』第1巻, pp.86-95。
- . 1980, 「類型論」『河野六郎著作集』、第3巻, pp.158-182。
- . 1989, 「日本語の特質」『言語学大辞典』、第2巻、世界言語編(中), pp.1574-1588. 三省堂。
- 河野六郎他(編) 1996 『言語学大辞典』第6巻、術語編三省堂。
- Leitzmann, Albert (ed) 1907, *Wilhelm von Humboldt's Werke*, Band VII, Berlin: B. Behr's Verlag.
- Martinet, André. 1970, *Elements de linguistique générale*, Paris.
- 峰岸真琴 2000, 「類型論から見た文法理論」『言語研究』117, pp.101-127。
- Minegishi, M (in printing) "Morphological typology from Southeast Asian viewpoint," *Papers from the Eleventh*

- Annual Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society*, 11.  
中尾佐助 1990, 『分類の発想』朝日選書409。  
Sapir, Edward. 1921, *Language*, 242pp., New York: Harcourt, Brace and World.  
サピア 1998, 『言語—ことばの研究序説』安藤貞雄訳, 岩波書店。  
Spencer, Andrew. 1991, *Morphological Theory*, Oxford, UK and Cambridge, USA.  
Tesniére, Lucien. 1965, *Éléments de syntaxe structurale*, Paris.

## **On Endoclitics: Some Facts from Degema\***

KARI, Ethelbert E.

Graduate School of Tokyo University of Foreign Studies

Whereas there is a consensus among linguists with regard to proclitic and enclitic, as possible clitic types, linguists disagree on endoclitic as a possible clitic type. Reported cases of endoclitics have been reanalyzed as *morph metathesis*, *inflected clitics*, etc. This follows from the general claim that clitics attach externally (sometimes considered as external affixation), and never within a word (cf. Zwicky 1977, Zwicky and Pullum 1983, Klavans 1995, Nevis 1988 & 1989). In this paper, we examine a case of endoclitic in Degema, which results from a metathesis rule that applies after external clitic attachment, and show that this kind of metathesis is somewhat different from the type described in the literature on clitics. Furthermore, we show that the observed case of endoclitic in Degema does not seem to be accounted for by the four possible explanations for surface endoclitics.

1. Introduction
2. Definitions of Metathesis and Endoclitic
  - 2.1. Definition of Metathesis
  - 2.2. Definition of Endoclitic
3. Types of Clitics in Degema
4. Metathesis and Endoclitic in Degema
  - 4.1. Factative Enclitic and Hosts Ending  
in Vowels in Clause-final Position
  - 4.2. Factative Enclitic and Hosts Ending  
in Consonants in Clause-final Position
  - 4.3. Summary of Conditions for Encliticization  
and Endocliticization

---

**Keywords:** clitics, Degema, endoclitics, tone, metathesis

\* Two autonomous communities, on the Degema Island, speak Degema in the Degema Local Government Area of Rivers State of Nigeria. These communities are Usokun-Degema and Degema Town. Each of these communities speaks a variety of Degema that is highly mutually intelligible with the other. The varieties spoken are Usokun and Degema Town (Atala), corresponding to the names of the communities. The order of the names of these communities or dialects is arbitrary and does not suggest the relative importance of either of the communities or the dialects. This study is based on the *Usokun* variety.

Special thanks go to my dissertation supervisor, Shigeki Kaji, for his immense help. My thanks are also due to Arnold M.Zwicky, Joel A.Nevis, and Richard D.Janda for directing my attention to useful materials on clitics. I thank them particularly for making some of their publications and materials on clitics available to me. I also thank the anonymous reviewer for his comments.

- 4.3.1. Conditions for Encliticization
- 4.3.2. Conditions for Endocliticization
- 5. The Four Possible Explanations for Surface Endoclitics
  - 5.1. Morph Metathesis Rule
  - 5.2. Inflected Clitic Analysis
  - 5.3. Reanalysis as Affix View
  - 5.4. Reanalysis of Affix as Clitic View
- 6. Conclusion

## **1. Introduction**

We shall begin this paper with the following quotation from Nevis (1988, p.39f).

Endoclisis<sup>1)</sup> is such a rare phenomenon that it has been argued not to exist at all, except as a result of something else in the grammar. The basic problem with endoclitics is a problem in how clitics get to be located internally. Apparent endoclitics have been reanalysed as other phenomena—notably morph metathesis, an inflected clitic, or unproductive relics from some earlier stage in the language. We can conclude that cliticization is always external attachment of morphemes, never internal attachment....

Nevis's (1988) paper is centred on the comitative in Northern Saame. We take his paper as a starting point for our discussion, for the reason that he examines the case of Northern Saame against a number of approaches that have been utilized by different authors in the analysis of surface endoclitics. In his discussion, he shows the problems with some of these analyses with regard to the Northern Saame data, leading to the conclusion that the comitative in Northern Saame is not an endoclitic. In our discussion on Degema, we shall also show the problems associated with the four different approaches discussed in Nevis (1988) in the light of our data, leading to the conclusion, unlike Northern Saame, that there is an endoclitic in Degema, albeit a surface one. In what follows, we shall attempt to highlight some of the issues discussed in that work.

Nevis (1988) notes an instance in Northern Saame where the possessive suffix occurs before a case suffix in the comitative plural, unlike the regular case suffix + possessive suffix combination. He claims that although the internally located comitative plural appears to be an endoclitic, it is not. He examines the Northern Saame case within Zwicky and Pullum (in progress)<sup>2)</sup> morph metathesis rule, which holds that 'some instances of surface endoclisis

---

1) The words in each of the following pairs are often used interchangeably: *endoclisis/endoclitic*, *proclisis/proclitic*, and *enclisis/enclitic*.

2) I do not have this material, cited by Nevis (1988), at my disposal whether in its unpublished or published form to evaluate some of the arguments in favour of the 'morph metathesis' analysis.

are the result of morph metathesis rules that apply after a clitic is attached externally...' (Nevis 1988, p.40). Consider the metathesis rule, and the Ewe example he claims Zwicky and Pullum (in progress) used as one of the bases for their argument. This rule and the Ewe example are given here as (1) and (2).

(1) STEM + CL + AX ← STEM + AX + CL

(2) wő me dzó ò ← me wő dzó ò  
 PRO NEG1 leave NEG2 NEG1 PRO leave NEG2  
 'They didn't leave yet'

According to Nevis (1988, p. 40), Zwicky and Pullum (in progress) '...derive Ewe endoclitic pronouns from external clitic attachment with subsequent morph metathesis'.

He rejects the metathesis rule, and its derivations for Northern Saame, given here as (3), (4), and (5), on the grounds that the rule is unmotivated, and that it would be applying only to a single morpheme in the language.

(3) STEM + PL + CASE + PX (i. e. STEM + PL + *guim* + PX)

(4) STEM + PL + PX + *guim*

(5) rak'kasi-ida-m -guim ← rakkasi-ida-guim -m  
 love -PL-1SG-COM love -PL-COM-1SG  
 'with my loves (=beloved ones)'

Furthermore, he examines the putative endoclitics in Northern Saame in connection with Klavans's (1979) view, which holds that a clitic can be inflected<sup>3)</sup>, and considers the inflected clitic analysis as undesirable, for the reasons that the possessive suffixes '...are not members of an inflectable word class, and that '...-guim does not behave syntactically as an inflected affix'. See (6) and (7).

(6) STEM + CL + AX ← STEM + [CL + AX]

(7) STEM + [PX + *guim*] where [PX + *guim*] is a Px inflected for comitative

---

3) Klavans's (1979) view that clitics can be inflected argues against endoclitic as a possible clitic type (see also Klavans 1995). Cases of endoclitics are seen as inflected clitics whereby '...the clitic is not really attached between a stem and its affix, but rather, the affix is an inflection on the clitic. Under her view, then, the endoclitic still results from external attachment' (Nevis 1988, p.41).

With facts from conjunction reduction, agreement, and morphophonology in Northern Saame, he argues that syntactically comitative plural *-guim* in the language behaves like a postposition rather than like a case suffix.

In addition to the ‘morph metathesis’ and ‘inflected clitic’ analyses, he notes two other possible explanations for surface endoclitics, namely, the reanalysis of an endoclitic as an affix, and the reanalysis of an affix as a clitic, so that the first clitic is not really an endoclitic. These analyses are thought to be different from the one that directly attaches the clitic internally. Although he does not reanalyze the Px as true affixes, he considers the fourth possibility, that appears to derive from the third, and sees the external affix (Px) as a clitic. According to him, ‘this possibility allows us to retain both the external attachment of clitics and the internal location of affixes’. This appears to follow from the general view that clitics occur externally in relation to affixes. Like the reanalysis of Px as a clitic, he contends that *-guim* is a clitic rather than an affix.

This consideration that Px and *-guim* are clitics does away with any conceived case of endoclitic, as far as the positional relationship between the comitative plural *-guim* and the possessive markers are concerned, as there exists now two enclitics in juxtaposition, Px followed by the clitic postposition *-guim*.

## 2. Definitions of Metathesis and Endoclitic

In this section, we shall briefly consider the definitions of metathesis and endoclitic respectively.

### 2.1. Definition of Metathesis

Spencer (1998, p.138) says of ‘metathesis’ as the reordering of phonemes that often accompanies affixation, and which sometimes gives the impression of being the sole exponent of a morphological property. Metathesis may not be a strictly phonological phenomenon, as it can also involve the reordering of morphemes too. For instance, Hale (1973, p.329) assumes that in Walbiri the basic order of clitics is subject-object but that a metathesis rule shifts a number marker from the subject clitic to the right of an immediately following object clitic (See also Simpson and Withgott 1986, p.163 for metathesis involving clitics in Middle French). This suggests that there are two kinds of metathesis-a *phonological metathesis* and a *morphological metathesis*. What is, however, common to both kinds of metatheses is that there is some reordering of elements. These elements could be phonemes or morphemes. Thus in a phonological metathesis, there is a reordering of phonemes, while in a morphological metathesis, there is a reordering of morphemes. Metathesis in each case does not involve a reordering between phonemes and morphemes, as we shall see in the case of Degema where there is a reordering between the factative morpheme and the final consonant of its host.

## 2.2. Definition of Endoclitic

*Endoclitic* refers to a phenomenon whereby a clitic occurs inside a word. Klavans (1995, p.123) notes that:

In strictly linear terms, there are three types of clitics: those that occur at the beginning of a word are PROCLITICS, those that occur at the end of the word are ENCLITICS, and those that occur within the word are ENDOCLITICS.

Whereas there seems to be a consensus among linguists as regards *proclitic* and *enclitic*, as possible clitic types, linguists disagree on *endoclitic* as a possible clitic type. For example, Zwicky (1977) analyzes the reduplicative morpheme *-pul-* in Madurese, an Austronesian language, as an endoclitic given that the morpheme is not found at the margins of words, as other clitics in the language do, but rather it is found within words. Zwicky (1977, p.8) notes that:

We appear to have a case here of a clitic that is neither a proclitic-preceding the word to which it is attached-not an enclitic-following the word to which it is attached-but rather is an endoclitic..., or ‘infixed clitic’, interrupting the morphemes within the word to which it is attached.

Other languages in which he notes the presence of endoclitics include Turkish, Hua (New Guinea language), and Estonian. Nevis (1984), however, argues that Estonian *-gi* is a derivational suffix rather than an endoclitic as analyzed by Zwicky.

Klavans (1979, 1995) argues against the consideration of endoclitic as a possible clitic type. According to her, ‘...apparent cases of endoclitics are the result of suffixation on clitics’ (Klavans 1995, p.123). The idea of suffixation on enclitics is, perhaps, what informed her designating certain clitics as ‘inflected’.

## 3. Types of Clitics in Degema

Kari (1997, 2001a, and 2001b) discusses two types of clitics in Degema-proclitics and enclitics. Proclitics occur before a verb and/or particle, and refer to the subject noun phrase, as in (8) - (12), while enclitics occur after a verb or object pronoun with a CV(C) structure, as in (11) and (12). Proclitics are marked for person and number. Enclitics are not marked for these features. The vowels of both types of clitics agree with those of the host, i. e. they become expanded if the vowels of the host are expanded, and non-expanded if those of the host are non-expanded. Table 1 shows proclitics and enclitics in Degema.

(8) óhoso    **mó**=kótú<sup>4)</sup>    wó.

Ohoso    3SgPCL=call you  
 ‘Ohoso is calling you (sg.) ’

(9) ivíoso no bijén    **é**=ma                ta.

Ivioso and Binyen 3PIPCL=IMPRT go  
 ‘Ivioso and Binyen have not gone yet’

(10) ma<sub>n</sub> **a**=dá    **má**=gbédé                óβ áj    jɔ.

you 2PIPCL=INIPRT 2PIPCL=sweep house DEF  
 ‘You (pl.) are about to sweep the house’

(11) eni ε=tá=<sup>1</sup>**té**.

we 1P1PCL=go=CE  
 ‘We have gone’

(12) baw    ε=món wo=**muno**.

they 3P1PCL NEG=see you=DE  
 ‘They will not see you (sg.) again’

Table 1. Proclitics and Enclitics<sup>5)</sup>

Proclitics		Enclitics	
1Sg	mE/E, mI/I	Vn	‘factative’
2S	mU/U, E	tE	‘completive’
3Sg	mO/O	tU	‘negative imperative’
1P1	mE/E	β IrE	‘excessive’
2P1	mA/A	AnI	‘request’
3P1	mE/E, mI/I	mUnU	‘discontinuation’

#### 4. Metathesis and Endoclitic in Degema

In this section, we wish to discuss a case of metathesis that results in endoclitic in Degema. Of particular interest is the case of metathesis discussed in Kari (1997). See also Kari (1998). As we noted in section 2, Spencer (1998) considers metathesis as the reordering of phonemes that often accompanies affixation. We also noted the situation in Walbiri (Hale 1973) where there is metathesis involving morphemes rather than phonemes. This is

4) Clitic-host combination is separated with ‘=’, while affix-stem combination is separated with ‘\_’.

5) Capital letters in the forms of clitics represent two phonological alternants, as follows: A=a/a, E=e/ε, I=i/ɪ, O=o/o, and U=u/u. V is an underspecified vowel.

similar to the morph metathesis discussed in Nevis (1988), credited to Zwicky and Pullum (in progress) whereby there is a reordering of morphemes. A case of metathesis that is discussed in Degema does not accompany affixation but cliticization. Kari (1997) observed that encliticization of the factative enclitic to the verb often results in metathesis that yields a surface endoclitic.

In what follows, we shall examine the behaviour of the factative clitic *Vn* in respect of its hosts (verb and pronoun). Subsequently, we shall look at enclitic-host sequences with regard to the *morph metathesis* rule, *inflected clitic* analysis, *reanalysis of endoclitic as affix* view, and the *reanalysis of affix as clitic* view to see how the instances of metathesis and endoclitic in Degema can be analyzed within these approaches.

#### **4.1. Factative Enclitic and Hosts Ending in Vowels in Clause-final Position**

In this subsection, we consider the factative enclitic in relation to its hosts in clause-final position. Also of interest is the phonological structure of the host. Let us consider the following data involving hosts that end in vowels:

(13a) *bf<sup>6)</sup>* ‘be black’

(b) *mi=bí=Vn.*  
1SgPCL=be black=FE

(c) *mi=bí=<sup>1</sup>ín.*  
1SgPCL=be black=FE  
‘I am black’

(14a) *síse* ‘remove’

(b) *mi=síse=Vn.*  
1SgPCL=remove=FE

(c) *mi=síse=<sup>1</sup>én.*  
1SgPCL=remove=FE  
‘I removed (sth.)’

(15a) *wó* ‘you’ (sg. obj)

---

6) There is some discrepancy in the transcription of data in this work and those in Kari (1997). Whereas the data in Kari (1997) are transcribed using orthographic symbols those presented in this work are transcribed using phonetic symbols that have IPA values.

- (b)  $\circ = n\acute{o}$        $w\circ = Vn.$   
       3SgPCL=hit you=FE

- (c)  $\circ = n\acute{o}$        $w\circ = ^1\acute{o}n.$   
       3SgPCL=hit you=FE  
       'S/he hit you'

A look at (13) - (15) reveals that the factative enclitic is attached to a verb host in (13b) and (14b) but in (15b), it is attached to a pronoun host. In (13c), (14c), and (15c), the under-specified vowel of the factative enclitic becomes like the vowel in the last syllable of the host. Examples (13) - (15) show that the enclitic is attached externally to the host.

#### 4.2. Factative Enclitic and Hosts Ending in Consonants in Clause-final Position

Here, let us consider (16) - (18), this time, using hosts that end in consonants in clause-final position.

(16a)  $tám$  'chew'

- (b)  $m\acute{I} = tám = Vn.$   
       1SgPCL=chew=FE
- (c)  $m\acute{I} = táVm = n.$   
       1SgPCL=chew=FE
- (d)  $m\acute{I} = tá = ^1\acute{a} = m.$ <sup>7)</sup>  
       1SgPCL=chew=FE  
       'I chewed (sth.) '

(17a)  $ból$  'hold'

- (b)  $m\acute{I} = ból = Vn.$   
       1SgPCL=hold=FE
- (c)  $m\acute{I} = bóVl = n.$   
       1SgPCL=hold=FE

7) The location of the factative enclitic inside the host interrupts the host so that the verb **tám** 'chew', for instance, becomes...**tá**=<sup>1</sup>**á=m**. The final **m** is part of the host, and so it does not constitute a separate morpheme. The gloss 'chew', therefore, should not be seen as associated with **tá** but with **tá...m**, given that **tá**, by itself, has no meaning in this context without **m**.

(d) mi=bó = 'ó=l.

1SgPCL=hold=FE

'I held (sth.) '

(18a) baw 'them'

(b) o=nó baw=Vn.

3SgPCL=hit them=FE

(c) o=nó báVw=n.

3SgPCL=hit them=FE

(d) o=nó bá= 'á=w.

3SgPCL=hit them=FE

'S/he hit them'

Examples (16) - (18) reveal that the factative enclitic is located within the host, unlike (13) - (15) where the factative enclitic is externally attached to the host. The point to note in respect of the factative enclitic attachment to hosts that end with consonants in clause-final position is that it is not restricted to the data given in (16) - (18). It appears to be a general phenomenon whereby the enclitic occurs inside all hosts ending in consonants in clause-final position in positive factative constructions.

The explanation provided in Kari (1997, 1998), with respect to this case of metathesis, is that first there is a reordering of the final consonant of the host and the underspecified vowel of the enclitic. Second, the underspecified vowel of the factative enclitic copies all the features of the vowel of the final syllable of the host (see (16c), (17c), and (18c) ), with a subsequent deletion of the nasal element of the enclitic, as ((16d), (17d) ), and (18d) show. The reason for the deletion of the nasal element of the factative is not given in Kari (1997, 1998). The deletion, we speculate, results from the fact that since there are no cases of VCC syllables in the language, the presence of the nasal consonant would yield a *V*Cn structure. The nasal, therefore, is deleted to avoid the anomalous *VCC* structure.

However, it is observed that in positive factative constructions where a host ends in a consonant, followed by a word beginning in a vowel, the nasal of the enclitic is retained, while the vocalic part is deleted, as shown in (19) and (20). Now, the question is to which word is the nasal element of the factative morpheme attached, given that a *VCC* sequence is not allowed ? Is it attached to the preceding verb host or to the following word ? If it is attached to the preceding verb, will it not be a violation of the non-permissible *VCC* sequence ? The way out is to assume that the nasal element of the factative morpheme is proclitic to the following word. This assumption is, in fact, correct as the nasal element is pronounced

together with the following word than with the preceding verb that ends in a consonant. In cases where the following word begins with a consonant the factative morpheme is dropped completely, as in (21).

- (19)  $\circ = t\acute{a}m$        $n = \acute{i}n\acute{a}m$   
       3SgPCL=chew FE=meat  
       'S/he chewed meat'

- (20)  $o = b\acute{o}l$        $n = \acute{z}j\acute{r}$   
       3SgPCL=hold FE=him  
       'S/he held him/her'

- (21)  $\circ = s\acute{o}l$        $p\acute{e}l$        $dihile$        $j\circ$   
       3SgPCL=jump go across umbrella-shaped anthill the  
       'S/he jumped across the umbrella-shaped anthill'

The explanation given above describes how the factative enclitic gets to be located word-internally. In Degema it is not a problem at all to explain how the enclitic gets to be located within a word, contrary to what is expressed in Nevis (1988, p.39f.) that 'the basic problem with endoclitics is how the clitics gets to be located internally'.

Now, if metathesis strictly refers to the reordering of phonemes that often accompanies affixation (cf. Spencer 1998), or the reordering of morphemes (cf. Hale 1973, Zwicky and Pullum in progress), then the case of Degema represents another kind of metathesis. For as we can see in our Degema data, there is no reordering of phonemes, or a reordering of morphemes. What we see in Degema that looks like a reordering of phonemes is actually a case involving a reordering between a morpheme (clitic) and a phoneme (consonant). Again, the situation we observe in Degema does not accompany affixation in the true sense of the term 'affixation' -a morphological phenomenon-but a reordering of a phoneme and a morpheme that results from encliticization-a syntactic phenomenon.

What facts from factative enclitic attachment to hosts ending in consonants in clause-final position suggest is that 'metathesis', as conceived by these authors, is too restricted to accommodate the kind of metathesis observed in Degema. Facts from Degema also suggest that there is endoclitic, albeit as a result of a process, in addition to proclitic and enclitic, which do not result from a process. However, let us quickly add that this case of endoclitic does not involve a clitic outside the enclitics that we have already established in the language. The factative morpheme is enclitic in one instance but is endoclitic in another. This behaviour, we must say, is peculiar to the factative enclitic.

Those that argue against endoclitics could argue, alternatively, that what we claim to be an

endoclitic in Degema is just a mere case of lengthening of the vowel in the last syllable of the host. In fact, Kari (1997, p.42) makes reference to metathesis under the heading ‘long vowels in verbs’ as a result of factative enclitic attachment, although he says nothing about endoclitics. One piece of evidence to prove that the factative morpheme is endoclitic, and not a mere lengthening of the vowel of the host, is tone. The tone of host-factative enclitic sequence (i. e. when the factative enclitic attaches after hosts that end with an open syllable) is high-downstep. The high tone is found on the last syllable of the host, and the downstepped high tone on the vowel of the factative enclitic (See examples (13c), (14c), and (15c)). This tone pattern is maintained even in hosts that end with a closed syllable (See (16d), (17d), and (18d)). Here it is observed that the vowel in the last syllable of the host bears a high tone, while the vowel of the factative enclitic that follows that of the host bears a downstepped high tone. This suggests that the vowel that bears the downstepped high tone is actually that of the factative morpheme. If it were a mere case of lengthening of the vowel of the host, we would probably have had a different tone pattern.

As we noted in subsection 2.1., there appears to exist, in Degema, instances of morphological metathesis of the type credited by Nevis (1988) to Zwicky and Pullum (in progress) whereby a morpheme (clitic) swaps its position with another morpheme (suffix) after the clitic is attached externally. Consider examples (22) - (24).

(22a) o=gbóm-ósé= <sup>1</sup>én

3SgPCL=bite-CAS=FE

‘S/he caused (sb./sth.) to bite (sb./sth.)’

(b) \*o=gbóm= <sup>1</sup>én=ósé

3SgPCL=bite=FE=CAS

(c) gbom-os-né

bite-CAS-RES

‘cause to bite oneself’

(d) e=gbóm-ós-né= <sup>1</sup>én

3PlPCL=bite-CAS-RES=FE

‘They caused themselves to be bitten (by sth.)’

(e) \*e=gbóm-osé= <sup>1</sup>é=né

3PlPCL=bite-CAS=FE=RES

(23) o=gbóm-ós-né= <sup>1</sup>é=j

3SgPCL=bite-CAS-RES=FE=HAB

‘S/he caused herself/himself to be bitten many times’

(24) o=gím-éné= <sup>1</sup>é=j

3SgPCL=pin-RES=FE=HAB

'S/he (used a pointed object to) pierce herself/himself many times'

A critical examination of (22) - (24) shows that whereas the factative enclitic attaches externally to the host in (22a) and (22d), the same factative enclitic is sandwiched between the reflexive and habitual suffixes in (23) and (24). Example (22b) is ungrammatical because the factative enclitic occurs between the verb root and a suffix. Example (22e) also is ungrammatical because the factative enclitic occurs between two suffixes, but most importantly it occurs before a suffix whose phonological shape is not one that should occasion a reordering of the factative enclitic and it.

In general, the attachment of the factative in (22a) and (22d) follows that same pattern as (13) - (15), and that in (23) and (24) follows the same pattern as (16) - (18). Given this similarity in behaviour between hosts without suffixes and those with suffixes in terms of factative enclitic attachment, we can say that (23) - (24) are also cases of endocliticism. A point that is worth noting is that unlike *morph metathesis* where there is metathesis between two morphemes, the factative enclitic treats the stem-suffix combination as a unit, and sees the consonant of the habitual suffix as a phoneme rather than as a morpheme.

A lesson that we learn from Degema is that it is not always the case that clitics attach externally,<sup>8)</sup> i. e. outside affixes, as generally believed to hold cross-linguistically. Clitics can attach internally, i. e. inside affixes on the one hand, and inside root morphemes on the other. This makes the distinction between the affix and the clitic even more problematic, given the view that clitics always occur outside affixes.

#### **4.3. Summary of Conditions for Encliticization and Endocliticism**

We noted that the factative clitic is enclitic in one instance but endoclitic in another. In this section we briefly summarize the conditions for encliticization and endocliticism in Degema.

##### **4.3.1. Conditions for Encliticization**

Some conditions for encliticization of the factative morpheme is that (a) the factative morpheme must occur clause-finally; (b) it must occur after an open syllable host, i. e. after a host that ends with a vowel; (c) its vocalic part must not delete, except in the cases where it occurs after a closed syllable host followed by a word that begins with a vowel; (d) the host must occur in positive constructions.

---

8) This may be true if external attachment of clitics is understood as the underlying structural position of clitics.

#### 4.3.2. Conditions for Endocliticization

Some conditions for endocliticization of the factative morpheme is that (a) the factative morpheme must occur clause-finally prior to endocliticization; (b) it must occur after a closed syllable host; (c) its vowel must swap position with the final consonant of the host; (d) its non-vocalic part must delete, (e) it must occur in positive constructions.

### 5. The Four Possible Explanations for Surface Endoclitics

Nevis (1988, p.40) notes that there are four types of possible explanations for surface endoclitics. These are *morph metathesis rule*, *inflected clitic analysis*, *reanalysis of endoclitic as affix view*, and the *reanalysis of affix as clitic view*. We shall examine these possible explanations in the light of facts from Degema. The purpose is to see if our Degema case can be accounted for by these ‘possible explanations’.

#### 5.1. Morph Metathesis Rule

The morph metathesis rule, as given in Nevis (1988, p.40), involves reordering of morphemes, as we saw in examples (1) and (2) repeated here as (25) and (26), where there is a reordering between the pronoun and the first negative morpheme in Ewe. By this reordering of elements, the pronominal clitic comes between the first negative morpheme and the verb.<sup>9)</sup> What we observe in Degema is not a case of morph metathesis because there is no reordering between morphemes (although they have something in common—the reordering of elements). It is essentially a reordering or call it metathesis between a morpheme and a phoneme, which is not what the morph metathesis rule is formulated to explain. The morph metathesis rule, as it is formulated, does not account for what we observe in Degema as regards the behaviour of the factative enclitic.

(25) STEM + CL + AX ← STEM + AX + CL

(26) mē wō dzó ò ← wō mē dzó ò  
 NEG1 PRO leave NEG2      PRO NEG1 leave NEG2  
 ‘they didn't leave yet’

#### 5.2. Inflected Clitic Analysis

This is an analysis advocated for by Klavans (1979, 1995). She analyzes cases of apparent endoclitics in Ngiyambaa and Beja (See Klavans 1995, p.98) as inflection on clitics, by suffixation. Consider (27) and (28) for Ngiyambaa and Beja, respectively.

---

9) The elements in (26) are rearranged (cf. Nevis 1988, p.40).

- (27) bara- bara: y =ndu -gal (Ngiyambaa)

REDUP—quick+ABS=2NOM-pl

‘Put some speed on, all of you ! ’

- (28) dabaloo-aa-b = aa-na (Beja)

small — pl-ACC. masc=be-2nd. pl

‘You are small’

She remarks that the pronominal clitic =**ndu** of Ngiyambaa is inflected for number, while the copular clitic =**aa** of Beja is inflected for person, giving =**ndu-gal** and =**aa-na**, respectively.

Although this analysis is correct for Ngiyambaa and Beja, and does away with the apparent endoclysis in both languages, what we have observed in Degema with respect to the behaviour of the factative enclitic cannot be explained by adopting the *inflected clitic* analysis. First, the factative enclitic reorders itself with what it sees as a phoneme rather than as a morpheme (cf. factative enclitic attachment in hosts ending with consonants). Second, the element with which the factative enclitic reorders itself has nothing inflectional in it, even if the enclitic sees it as a morpheme (suffix).<sup>10)</sup> We, therefore, reject this analysis for Degema.

### 5.3. Reanalysis as Affix View

The approach whereby an endoclytic is reanalyzed as an affix (See Nevis 1984 analysis for Estonian *-gi* in indefinites), like the *morph metathesis* rule (in its present formulation) and the *inflected clitic* analysis, will not work for Degema. The reason is that the factative enclitic that has become endoclytic is not an affix but one of the enclitics established in Kari (1995a, 1995c).

### 5.4. Reanalysis of Affix as Clitic View

The last of these views, which appears to follow from the third, is one where an affix is reanalyzed as a clitic, so that the first clitic is not really an endoclytic. This is, in fact, the approach pursued in Nevis (1988), and which led to his conclusion that comitative *-guim* in Northern Saame is not an endoclytic. Whereas this analysis works for Northern Saame, it does not work for Degema for two reasons. We, therefore, reject the *reanalysis of affix as clitic* view on the following grounds. First, the factative clitic that occurs within the host is not an affix. Second, what follows the factative clitic that is located within the host is not a clitic.

We have examined the four possible explanations for surface endoclysis, as listed in Nevis (1988). Of these, only *morph metathesis* comes close to accounting for what is going on in

10) For the semantics of suffixes in Degema, see Kari (1995b).

Degema, as it has to do with the reordering of elements. Again, metathesis and subsequent endocliticization in Degema seem to agree with the argument credited to Zwicky and Pullum (in progress) that ‘...some instances of surface endoclitics are the result of morph metathesis rules that apply after a clitic is attached externally...’ (Nevis 1988, p.40). However, we have observed that the morph metathesis rule in its present formulation does not fully capture our data in Degema. We, therefore, need to modify the name of the rule and the rule itself to capture the behaviour of the factative in Degema. We refer to *morph metathesis* simply as *metathesis*, since we have essentially a reordering of elements that may not necessarily be morphemes. Similarly, the morph metathesis rule in (25) should be what is given in (29):

$$(29) \text{ STEM} + \text{CL} + \text{X} \leftarrow \text{STEM} + \text{X} + \text{CL}$$

In the reformulated rule **AX**, which appears to stand for *affix* or *word* in (25), is replaced simply with **X** in (29). Thus, **X** could be taken as representing an affix, word, syllable, or even phoneme. The reformulated rule, in fact, agrees with Crystal’s definition of metathesis as:

A term used in linguistics to refer to an alteration in the normal sequence of elements in a sentence-usually of sounds, but sometimes of syllables, words, or other units’ (Crystal 1997, p.240).

The modified rule, as given in (29), accounts for the data in Ewe and Degema. Thus whereas in Ewe, the rule will make reference to a reordering between morphemes, in Degema it will make reference to a reordering between a morpheme and a phoneme. It will also apply to cases where the reordering is between a word and an affix, if such cases exist.

## 6. Conclusion

The rarity of endoclitics, unlike proclitics and enclitics, has led to the conclusion that they do not exist at all. In languages where there is an apparent case of endoclitic, different analyses have been proposed. The apparent endoclitic has either been reanalyzed as an inflected clitic (Klavans 1979, 1995), an affix (Nevis 1984), or a clitic followed by another clitic, so that the first clitic is not really an endoclitic (Nevis 1988). Part of the reanalysis of apparent endoclitics derives from the general claim that clitics are never located within a word, but rather lie outside affixes (cf. Zwicky and Pullum 1983, Nevis 1989).

In the cause of our study, we have examined four possible explanations for surface endoclitics in human language. Of these, only the *morph metathesis* rule comes close to accounting for what we observe in Degema, as it has to do with the reordering of elements. Consequently, the *morph metathesis* rule is modified to accommodate the Degema case.

Degema, thus, provides evidence that in spite of the rarity of endoclitics, they do exist. Facts from Degema also suggest that the claim that clitics are always located externally, i. e. outside affixes does not hold cross-linguistically.

*Some abbreviations used in this paper:*

1Sg = 1st person singular	COM = comitative
2Sg = 2nd person singular	DE = discontinuation enclitic
3Sg = 3rd person singular	DEF = definite article
1Pl = 1st person plural	FE = factative enclitic
2Pl = 2nd person plural	HAB = habitual suffix
3Pl = 3rd person plural	IMPRT = imperfective particle
1SgPCL = 1st person singular proclitic	INIPRT = inceptive non-imperative particle
1PlPCL = 1st person plural proclitic	NEG = negative
3SgPCL = 3rd person singular proclitic	NOM = nominative case
3PlPCL = 3rd person plural proclitic	PL = plural
ACC = Accusative case	PRO = pronoun
ABS = absolute case	PX = possessive suffix
AX = affix	REDUP = reduplication
CAS = causative suffix	RES = reflexive suffix
CE = completive enclitic	SG = singular
CL = clitic	

## References

- Crystal, D. 1997. *A dictionary of linguistics and phonetics*. Fourth edition. Blackwell Publishers.
- Hale, K. 1973. Person marking in Walbiri. In S. R. Anderson and P. Kiparsky (eds.), *A festschrift for Morris Halle*, pp.308-344. Holt, Rinehart and Winston, Inc.
- Kari, E. E. 1995a. *The structure of the Degema verb*. MA thesis, University of Port Harcourt.
- . 1995b. Extensional suffixes in Degema. *Afrikanistische Arbeitspapiere*, 44, pp.149-168.
- . 1995c. Clitics in Degema. *Nigerian Language Studies*, 3, pp.6-12.
- . 1997. *Degema*. (Languages of the World/Materials 180). Munchen-Newcastle: LINCOM EUROPÄA.
- . 1998. Final close vowels in a sequence of vowels in Degema: A reanalysis. *Afrika und Übersee*, Band 81, pp. 113-118.
- . 2001a. On the grammar of clitics in Degema. *Journal of Asian and African Studies*, 61, pp. 179-192.
- . 2001b. Distinguishing between clitics and affixes in Degema. Ms. Tokyo University of Foreign Studies.
- Klavans, J. L. 1979. On clitics as words. In *The elements: Papers from the parasession on linguistic units and levels*, pp. 68-80. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- . 1995. *On clitics and cliticization: The interaction of morphology, phonology and syntax*. New York & London: Garland Publishing, Inc.
- Nevis, J. A. 1984. A non-endoclitic in Estonian. *Lingua* 64, pp.209-224.
- . 1988. A Morphotactic paradox in Northern Saame. *Comitative-guim. Ural-Altaische Jahrdücher*, 8, pp. 38-50.
- . 1989. *How clitic is Finnish -s?* Paper presented at the Seventh Annual Meeting of the Finno-Ugric

- Studies Association of Canada, May 27, 1989, Quebec City.
- Simpson, J. and M. Withgott. 1986. Prenominal clitic clusters and templates. In H. Borer (ed.), *Syntax and semantics 19: The syntax of pronominal clitics*, pp.149-174. Academic Press, Inc.
- Spencer, A. 1998. Morphophonological operations. In A. Spencer and A. M. Zwicky (eds.), *The handbook of morphology*, pp.123-143. Blackwell Publishers.
- Zwicky, A. 1977. *On clitics*. Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
- Zwicky, A. and G. Pullum. 1983. Cliticization vs. inflection: English *n't*. *Language*, 59, 3, pp.502-513.
- . In progress. *The syntax-phonology interface*. Academic Press.



## タージ・マハル・コンプレクスのプランについての新解釈 及びアフマド・ヤサヴィー廟における終末的シンボリズム

山 田 篤 美  
(美術史家)

### A New Perspective on the Layout of the Taj Mahal and the Eschatological Symbolism of the Ahmad Yasawī Shrine

YAMADA, Atsumi  
Art Historian

The unusual layout of the Taj Mahal complex, in which its mausoleum, placed at the north end of a quadripartite garden, is flanked by two identical adjuncts, has been puzzling in Islamic art history. Wayne E. Begley provided a new interpretation, discussing that its layout represents a cosmological topography of Ibn al-'Arabī's diagram used in *al-Futūhāt al-makkiyya*. However, Begley's theory has serious flaws, because the eschatological implication of the diagram has not been discussed in his monographs. The diagram does not represent a paradisiacal configuration, but an apocalyptic topography on the Day of Judgment, in which Paradise and Hell are of equal importance. The problem of Begley's discussion lies in the confusion of eschatological and paradisiacal symbolism.

On the other hand, a careful examination of the Timurid shrine of Ahmad Yasawī shows that its plan corresponds almost perfectly with the apocalyptic configuration of al-'Arabī's diagram, not only in its architectural layout but also in its symbolism. The striking similarities between the two clearly suggest that the plan of the shrine was meant to represent an eschatological setting of the Final Day.

It is noteworthy that several distinguishing features of the Ahmad Yasawī shrine can be seen in the Taj Mahal, including the juxtaposition of mosque and assembly hall, the epigraphic program of Qur'anic chapters and *muqarnas* decoration. The shrine was reconstructed by order of Timur, and Shah Jahan was well known for his strong admiration for his ancestor Timur. In view of these, it is not difficult to suppose that Shah Jahan drew many architectural concepts from this Timurid shrine for the layout of the Taj Mahal. The specific Qur'anic chapters associated with Timur

---

**Keywords:** The Taj Mahal complex, The Ahmad Yasawī shrine, Ibn al-'Arabī, eschatological symbolism, paradisiacal symbolism

**キーワード：**タージ・マハル・コンプレクス, アフマド・ヤサヴィー廟, イブン・アルアラビー, 終末思想に基づく象徴性, 楽園思想に基づく象徴性

are also seen in the inscriptive program of the Mughal mausoleum. This testifies that Shah Jahan's veneration of Timur cannot be overlooked as a vital influence on the design of the complex. It is therefore possible to suppose that the shrine of Aḥmad Yasawī served as a model for the Taj Mahal.

In addition to this, the Mughal tradition of gardens and garden tombs developed on the Indian subcontinent cannot be forgotten in considering the design of the Taj Mahal. Shah Jahan was versed in the construction of a formal quadripartite garden that had strong paradisiacal connotations. Therefore, it is natural that Shah Jahan would have preferred a garden setting for the Taj Mahal rather than a closed setting like that of the Timurid shrine. Thus, as important constituents of the Taj Mahal complex, the large quadripartite garden and its water channels were constructed as references to paradisiacal imagery.

## はじめに

1. イブン・アルアラビーのダイアグラム
2. アフマド・ヤサヴィー廟のプラン
3. アフマド・ヤサヴィー廟のシンボリズム
4. タージ・マハル・コンプレクスのプラン

5. シャー・ジャハーン時代に制作された『ティムール自伝』
  6. タージ・マハル・コンプレクスに見られる楽園のイメージ
- 結論

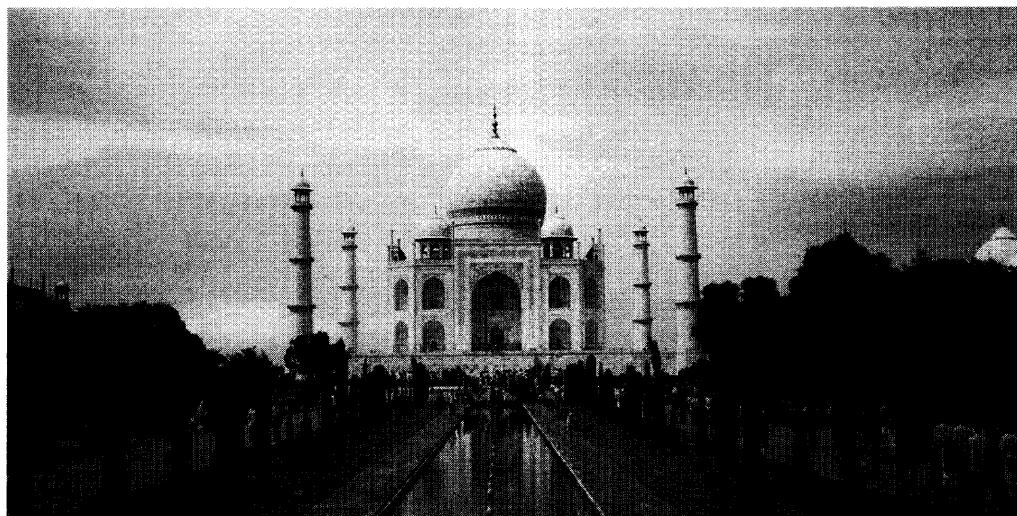
## はじめに

ムガル帝国5代皇帝シャー・ジャハーン(r. 1628-58)の皇后ムムターズ・マハル(d. 1631)の墓廟として建造されたタージ・マハル(1632-43)のプランは、ムガル庭園墓廟の伝統の中では特異である。なぜならフマーユーン廟、アクバル廟などのタージ・マハル以前のムガル庭園墓廟では、墓廟パビリオンが正方形の庭園の中央に置かれ、付属施設を持たないのに対し、タージ・マハルの墓廟パビリオン(図版1)は、正方形の庭園北側に置かれ、その両脇には同型同大のモスク(図版2)と集会ホール(図版3)が併設されて、一大コンプレクス(図版4)を作り上げているからである。この変則的なプランについて、黒大理石の墓廟建造説が語られてきたが、文献史料で裏づけられることもなく、なぜタージ・マハルがこのようなプランを採ったのかについては不明な点が多くあった。

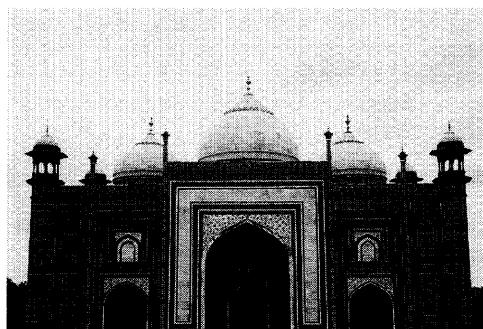
しかし、1979年にW・E・ビーグリーが

“The Myth of the Taj Mahal and a New Theory of Its Symbolic Meaning”を発表するおよび、こうしたタージ・マハルの問題点に一定の解答が与えられた。ビーグリーは17年後の “The Garden of the Taj Mahal: A Case Study of Mughal Architectural Planning and Symbolism”においても同様の説を披露したが、彼によるとタージ・マハル・コンプレクスの独創的なプランは、スーアーイー聖者イブン・アルアラビー(1165-1240)の著作『メッカ啓示』(*al-Futūhāt al-makkiya*)で使われたような「最後の審判の日における楽園を示したコスモロジカルなダイアグラム」に触発されたもので、タージ・マハルの墓廟パビリオンは神の玉座であり、そのプランは楽園の光景を象徴的に再現したものだと主張した(Begley 1979, pp.11-26; 1996, pp.225-231)。彼の説はその大胆な内容にもかかわらず、一定の評価を得て、タージ・マハルを語る際に必ず言及されるようになった<sup>1)</sup>。

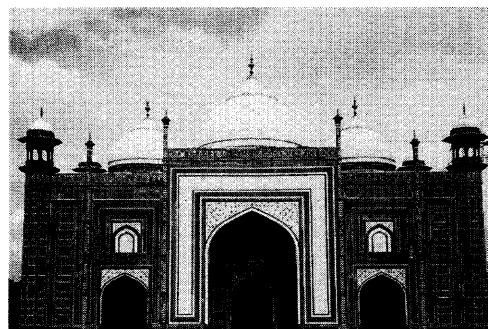
ところが、ビーグリーの二つの論文及び



図版1. アーグラー, タージ・マハル・コンプレクス, 墓廟パビリオン, 庭園, モスク (部分, 左側), 集会ホール (部分, 右側). 写真3点: 山田篤美



図版2. タージ・マハル・コンプレクス, モスク.



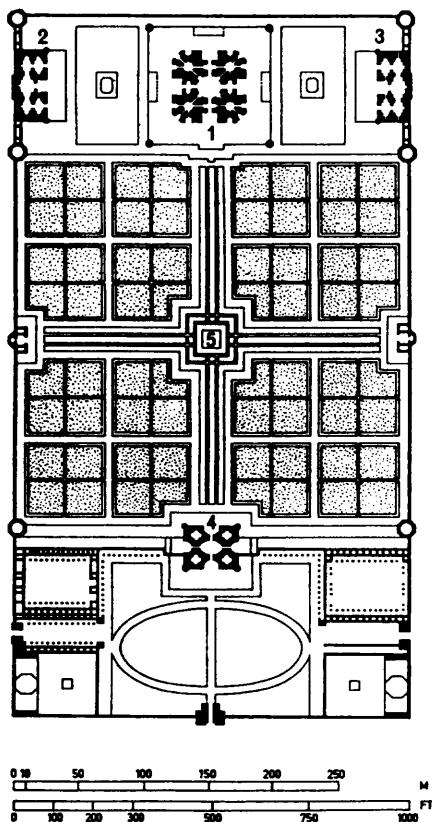
図版3. タージ・マハル・コンプレクス, 集会ホール.

『メッカ啓示』を詳細に検討すると、その議論には幾つかの瑕疵があることが判明する。彼は論文の中で三つのテーマを扱ってきた。楽園に置かれた神の玉座の象徴としてのタージ・マハルの墓廟パビリオン、天上の楽園を象徴したタージ・マハルの四分庭園、そしてイブン・アルアラビーのダイアグラムとタージ・マハル・コンプレクスのプランとの著しい類似性である。しかし、これらのテーマは

一緒に議論されるべき性質のものではない。なぜなら最初の二つのテーマは楽園思想と密接に結びついている一方で、三つ目のイブン・アルアラビーのダイアグラムは、明らかに終末思想を扱っているからである。

繰り返すと、ビーグリーはタージ・マハルのイコノグラフィーを論じる時は、タージ・マハルとその四分庭園は、「天上の楽園を正確に写したレプリカ」であると解釈し

1) ビーグリーの説は学会の共通認識として多くの書物や論文で紹介されている。Asher 1992, pp.209-215; Richards 1993, pp.123-125; Blair & Bloom 1994, pp.279-280 を参照のこと。日本では、山田 1997, pp.205-211 に詳しく紹介されている。



図版4. タージ・マハル・コンプレクスのプラン。 (1)墓廟パビリオン, (2)モスク, (3)集会ホール, (4)南門, (5)庭園の泉水。

出典：Sheila S. Blair and Jonathan M. Bloom, *The Art and Architecture of Islam 1250–1800* (New Haven and London, 1994), fig.349.

(Begley 1996, p.225), 中でも四分庭園は「最後の審判の日における一連の出来事の後に出現する楽園」(Begley 1996, p.231)を象徴しているとして、彼の議論を進めていく。一方、タージ・マハルの変則的なプランを語る時は、アルアラビーのダイアグラムの構図との著しい類似性を強調する。

しかし、イブン・アルアラビーのダイアグラム（図版5）は最後の審判の日の光景を示

したものであり、そこでは神の玉座は楽園に置かれているのではなく、楽園と地獄が玉座の前に等しく並列され、終末の日に人々が集められる「集会の場所」(*ard al-hashr*)の上に置かれていることに留意するべきである (Ibn al-'Arabī, vol.3, pp.425, 438–440)<sup>2)</sup>。もしビーグリーがダイアグラムの構図とタージ・マハルのプランにおける共通性を議論するならば、タージ・マハルのプランに組み入れられた終末思想についても考察するべきであり、またそのプランの中に地獄に対応する建造物も指摘しなければならない。しかし、タージ・マハル・コンプレクスのプランは地獄に対応する建造物を欠き、ビーグリー自身も終末思想に言及することなく、タージ・マハルの楽園としての象徴性を論議する。換言すれば、彼の解説では、アルアラビーのダイアグラムとタージ・マハルのプランとの地勢的な類似性は示唆されているものの、その終末的象徴性は検討されていない。

ビーグリーが終末思想を考慮しないことは、イブン・アルアラビーのダイアグラムの中央に描かれたハウド (*hawd*) の解釈において顕著に見ることができる。*hawd* は「水盤」とか「タンク」、あるいは「池」と訳されるが、ビーグリーはダイアグラムに描かれている *hawd* を、楽園にあると言われる「カウサルのハウド」(*hawd al-kawthar*) と解釈し、タージ・マハルの庭園の中央に置かれた白大理石の泉水と対応させてきた (Begley 1979, p.26; 1996, p.230)。しかし、アルアラビーの『メッカ啓示』のダイアグラムもそのテキストも *hawd al-kawthar* には言及しておらず、ただ *al-hawd* と記しているだけで、この *hawd* はむしろ最後の審判の日における預言者の「ハウド」(*hawd*) として解釈しなければならないものである。なぜならダイアグラムは楽園の光景ではなく、終末の日の光景を明確

2) イブン・アルアラビーのダイアグラム及び『メッカ啓示』のテキスト、次に述べる「カウサルのハウド」(*hawd al-kawthar*) 及び預言者の「ハウド」(*hawd*) については、第1章で詳述する。

に表しているからである。

次に、ビーグリーの議論の問題点は「コスマロジカルな」、「天上の」(celestial)あるいは「天空の」(heavenly)という形容詞を使うことによって楽園思想と終末思想を混交することで、これはタージ・マハルの墓廟パビリオンは、「イスラームの伝統によると楽園のまさにその上に置かれ、復活の日には神が裁きを下すために座し給う天空の(heavenly)玉座のシンボリックなレプリカ」(Begley 1979, p.16; 1996, p.228)であるという解釈において明らかになる。イスラームの伝統が神の玉座をその上に置く「楽園」は楽園思想から来たものであり、復活の日の最後の審判のために神が座る玉座は終末思想のものであるが、ビーグリーの説明では、二つの異なる概念が混同されて扱われている。同様に、ビーグリーはタージ・マハル・コンプレクスのプランは「最後の審判の日における楽園」を象徴していると説明してきたが、彼自身は「楽園」を「最後の審判の日における一連の出来事の後に出現する」と解釈してきたので、この「楽園」は、終末の日に地獄とともに全体の光景の一要素を構成する楽園ではなく、ここでも時系列の異なる二つの光景が混同され、自家撞着に陥っている。楽園思想に基づく楽園と、終末の日に出現する楽園とは、そのシンボリズムの違いにおいて厳密に区別しなければならないが、ビーグリーの議論では至る所で楽園の光景と終末の日の光景の混交が見受けられる。

その一方で、タージ・マハルの象徴性を論じる際に注意しなければならないことは、この白亜の墓廟コンプレクス自体に楽園のイメージと終末の日のイメージという相反するシンボリズムが同時に与えられていることである。タージ・マハルの建造物の壁面及びムムターズ・マハルの棺には全体で22本の異なるコーランの章句(延べ25本)が刻まれているが、そのほとんどは終末の光景をテーマにしている(Begley 1979, pp.12-13, 26-28)。

中でも墓廟パビリオンの南扉、西扉、北扉にそれぞれ記されたコーラン第81章、82章、84章はこの世の終わりのすさまじい地殻変動の光景を物語り、白大理石の美しい墓廟壁面からは想像もできないような激しい内容となっている。しかし、こうしたコーランの碑文装飾とは一転して、シャー・ジャハーン時代の歴史書では、タージ・マハルの墓廟パビリオンやその庭園は地上の楽園としての修辞が捧げられてきた。墓廟パビリオンは「天上の崇高で楽園のような墓廟」(Lāhwārī 1989 [ed.], p.66)であり、その墓廟の基壇も「天上の神の玉座に匹敵する」(Lāhwārī, p.66)ものであると称えられている。また庭園も「楽園のような庭園」と賛美されてきた(Lāhwārī, p.74; Kambū, p.80)。つまり、コーランの碑文に見られる終末性と、ムガル歴史書で見られる楽園のメタファーはタージ・マハルの際立った特徴であり、この墓廟コンプレクス自体が混交したシンボリズムを内包していることを示している。それゆえ、タージ・マハルのシンボリズムを論じる際は、なぜこのような象徴性における食い違いが生じたのかも考察する必要がある。

一方、ビーグリーとは別に、タージ・マハルのプランについて議論してきた学者にM・E・スブトゥルニーやE・コッホ、荒松雄がいる。スブトゥルニーは、ティムール朝時代の *chahār bāgh* (四分庭園)についての記述がある16世紀初めの園芸書に、パビリオンは庭園の中央ではなく、南側の端に建てなければならないと強調されていることから、こうした庭園のプランニングの伝統が、タージ・マハルのプランのモデルになったと主張した(Subtelny 1995, pp.49-50)。また、コッホは、アーラーで発達したヤムナー川沿いのリバーフロントの居住用の宮殿との関係から、タージ・マハルのプランを考察しようとしている(Koch 1991, p.99; 1997, pp.143-144)。一方、荒は、デリー・サルタナット時代のバラ・グンバド・モスク・コンプレクスとの

関連性を指摘している(荒 1997, pp.325-329)。しかし、スプトゥルニーやコッホの説では、タージ・マハルの墓廟パビリオンが庭園の端に置かれていることは説明できても、なぜ墓廟の両脇にモスクと集会ホールが併設されているのか十分に答えきれず<sup>3)</sup>、また3人いずれの説においても、なぜシャー・ジャハーンが従来のムガル墓廟と異なる墓廟形式を取り入れたのか<sup>4)</sup>、なぜコーランの章句がタージ・マハルに採用されたのかという疑問には十分に答えきれない。

本論ではこうした問題点を勘案して、タージ・マハルのプランのモデルになった建築として、ティムール自らが建立を命じたアフマド・ヤサヴィー廟を考察したい。興味深いこ

とに、この聖廟をイブン・アルアラビーのダイアグラムとタージ・マハルの間に立つものと位置づけると、ビーグリーの理論で見られた様々な矛盾点は見事に解決することがわかる。なぜなら、ヤサヴィー廟の個々の部屋の配置やその機能を考察すると、この廟こそが、アルアラビーのダイアグラムの終末日の光景を見事に象徴したものであることが判明するからである。アルアラビーのダイアグラムとの著しい類似性にもかかわらず、この聖廟の象徴性についてはこれまで議論されてこなかった<sup>5)</sup>。それゆえ、本稿では、まず最初にイブン・アルアラビーのダイアグラムを解説した後で、ヤサヴィー廟に組み入れられた象徴性を考察し、この聖廟の特徴がどのように

- 3) スプトゥルニーは16世紀初めの園芸書 *Irshād al-zirā'a* の記述に基づいて *chahār bāgh* を再現したが (Subtelny 1995, pp.41, 59-60), パーブルが語る *chār bāgh* (*chahār bāgh* の省略形) にある階段状のテラスや丘などの土地の起伏は考慮していない。間野英二訳注『パーブル・ナーマ』1998, pp.90, 207-208 及び Pinder-Wilson 1976, pp.80-81 を参照のこと。パーブルの *chār bāgh* と符号していないにもかかわらず、彼女が再現した *chahār bāgh* が、当時の庭園設計のモジュールとして規範になっていたと考えるのは無理がある (Subtelny 1997, p.118)。また、*Irshād al-zirā'a* では、リンゴの木は日陰に当たるパビリオンの「南側」に植えなければならないと書かれているが (Subtelny 1997, p.118), 南側がなぜ日陰になるのかも議論しない上、少なくともこの園芸書が日当たりを斟酌してパビリオンの配置や植樹を決めていると思われるのに、庭園の南側に置くべきであると書かれたパビリオンの位置を、タージ・マハルのプランに対応させるため、コッホのリバーフロント宮殿の説を使って、北側に修正してしまうのは問題がある (Subtelny 1995, p.49)。ましてタージ・マハルの両脇になぜモスクと集会ホールがあるのかということを考察せずに、タージ・マハルのプランは *Irshād al-zirā'a* の庭園を模範にしたものだと主張するのは勇み足である。コッホの説もスプトゥルニーと同様、付属施設の存在を説明できない。
- 4) 荒は墓廟の両脇にモスクと集会ホールが併設された観点からタージ・マハル・コンプレクスのプランのモデルとしてデリー・サルタナット時代のラー・グンバド・モスク・コンプレクスに言及しているが、彼自身も認めているように、その仮説は形態の類似性だけを指摘したもので、根拠については何も言及していない (荒 1997, pp.325-329)。ゴロンベクはコッホやビーグリーの説について、「なぜシャー・ジャハーンが彼やその先代の皇帝たちが造営し、これまで主流であった庭園様式を使わずに、この（変則的な）庭園様式を採用したのか疑問が残る」と述べているが (Golombek 1995, p.137), 同じことはスプトゥルニーの説にも言える。なお、順序が後先になったが、ビーグリーはタージ・マハルのプランに楽園の象徴性が組み入れられた理由について、“The Myth of the Taj Mahal”では、シャー・ジャハーンが対外的なシンボルを持つ絶対的な権力を誇示し、地上の創造者の栄光を不朽にする試みであったとし (1979, p.35), “The Garden of the Taj Mahal”では、当時の神秘主義的思考への傾倒を主要な動機としているが (1996, p.231), いずれの解説も説得力に欠ける。
- 5) ゴロンベクは “From Tamerlane to the Taj Mahal” の中でタージ・マハルの墓廟パビリオンのプランを *hasht bihisht* (8つの楽園) の象徴性から議論したが、その際、ヤサヴィー廟にも言及している。興味深いのは、彼女が早い段階からタージ・マハルとの関連性でティムール朝時代の建築に附加されたシンボリズムの重要性を認識していた点であるが、その議論はタージ・マハルの墓廟パビリオンの構造だけに絞られており、墓廟の両脇のモスクや集会ホールを含むタージ・マハル・コンプレクスのプランについては言及していない (Golombek 1981, pp.43-49)。

タージ・マハルに受け継がれていったのかを議論したい。ここで重要なのは、言うまでもなく、シャー・ジャハーンのティムールへの傾倒であり、それがタージ・マハルの基本設計やそのデザインにおいてどのような形で表明されたのかを検討する。最後に、ムガル朝建築の伝統を考察して、タージ・マハルに与えられた楽園のイメージについて考えてみたい。

### 1. イブン・アルアラビーのダイアグラム

イブン・アルアラビーの『メッカ啓示』(*al-Futūhāt al-makkiyya*) のダイアグラム(図版5)については、ビーグリーがその論文の中で解説してきたが、彼の説明には恣意的に曲解されている部分があるので、本論ではビーグリーとは別に、ダイアグラム及びそのテキストに直接当たって考察する。アルアラビーによると(Ibn al-‘Arabī, vol.3, pp.425, 438-440), 最終の日にはすべての生き物が復活させられた後、地上から連れ出され, *ard al-hasr* と呼ばれる「集会の場所」に一ヵ所に集められるが、その日、神は8人の天使に支えられた神の玉座を擁して降臨し、その玉座を *ard al-hasr* の上に置く。玉座についている後、神は人間に最後の審判を下すことになっているが、神から見ると楽園は右に位置しており、地獄の業火は左となる<sup>6)</sup>。ダイアグラムの右肩の所に *ard al-hasr* と書かれているとおり、このダイアグラムは、終末の日に人々が集められ、神の裁きを受ける最後の審判の光景を示していることが理解できる。

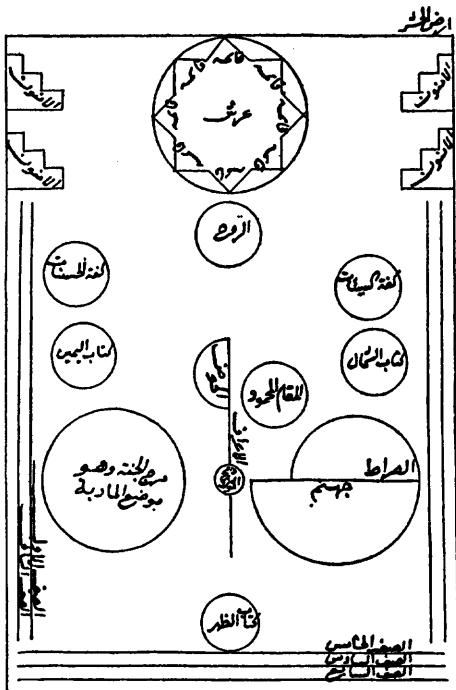
ダイアグラムの上端中央には、8つの頂点を持つ星型を囲む円が描かれているが、その中央には「玉座」('arsh), 星型の8つの頂点にはそれぞれ「直立したもの」(*qa’ima*) という文字が記されて、この円が8人の天使に

支えられた神の玉座であることを示している。玉座の円の両側には「(神によって)守られているもの」(*al-aminūn*) と書かれた同型同大の階段状の三角形が二つづつ描かれて、玉座のすぐ下には、「精」(*al-rūh*) という文字が記された小円がある。

ダイアグラムの中央にはそれぞれ縦に二つづつ並んだ小円が描かれているが、左上の小円には「善行の天秤皿」(*kaffat al-hasanāt*), 右上の小円には「悪行の天秤皿」(*kaffat al-sayyi’āt*), 左下の小円には「右の帳簿」(*kitāb al-yamīn*), 右下の小円には「左の帳簿」(*kitāb al-shimāl*) と各々記され、最後の審判の日に善行悪行が天秤で計られ、信心深い者は帳簿を右手で受け取り、神を信じながらも罪を犯した者は、帳簿を左手で受け取ることを示している。

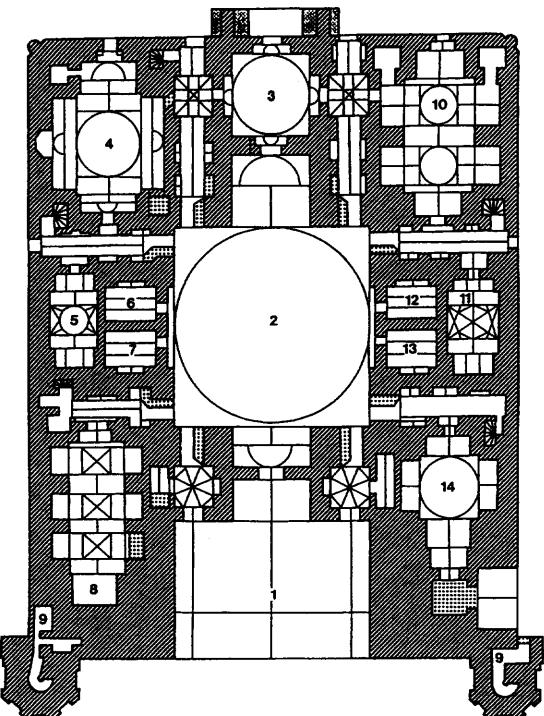
ダイアグラムの下方中央には *al-a’rāf* と書かれた垂直の線が描かれているが、この線が楽園と地獄を隔てる仕切りである。*al-a’rāf* の左には、「宴会が行われる楽園の草原」(*marj al-jannat wahuwa mawdā’ al-ma’adibat*) と記された大きな円があって楽園を示す一方で、*al-a’rāf* の右側にある直径がずれた大きな円には「地獄」(*jahannam*) と書かれている。地獄の中に描かれた水平線は *al-sirāt* と記され、シラート橋を示している。さらに、*al-a’rāf* を示す垂直線の上端に描かれた半円には「ハウド」(*al-hawd*) と記され、その *hawd* のやや右下にある小円には「賛美されるべき場所」(*al-maqām al-mahmūd*) と記載されて、最終の日に預言者ムハンマドが神に罪を犯した信者たちのとりなしをして、彼らが地獄から天国に行けるように尽力する場所を示している。ダイアグラムの下端中央にある小円には「背後からの帳簿」(*kitāb al-zahar*) と記され、邪教徒が彼らの背後から帳簿を受け取る場所を示している。アルアラビーの解説

6) 神の玉座から見ると、楽園は右、地獄は左に位置するので、玉座が上端に置かれたダイアグラムでは楽園は左、地獄は右に描かれることになる。



図版5. イブン・アルアラビー, 最後の審判日のダイアグラム。

出典: Ibn al-'Arabi, *al-Futūhāt al-makkiyā*, (1201/2; Cairo, 1911 [ed.]; rpt. Beirut, 1968), vol.3, p.425.



図版6. トゥルケスタン, アフマド・ヤサヴィー廟の1階のプラン。(1)正門, (2)セントラル・ホール, (3)墓室, (4)モスク, (5)図書室, (6)と(7)瞑想室, (8)台所, (9)階段, (10)集会ホール, (11)部屋, (12)と(13)瞑想室, (14)井戸つきの部屋。

出典: L. Iu. Man'kovskaya; "Towards the Study of Forms in Central Asian Architecture at the End of the Fourteenth Century: The Mausoleum of Khwāja Ahmād Yāsavī," *Iran*, 23 (1985), fig.1.

によると、神は地獄の業火で罪を犯したものを罰しても、後に神の慈悲やムハンマドのとりなしで地獄から救われるが、邪教徒に関しては神の慈悲も預言者の仲裁も与えられず、いつまでも地獄にとどめ置かれることになる。

*hawd* に関しては、*al-a'rāf* 上に位置して描かれ、イブン・アルアラビーは、人々がそこから水を飲むことができるよう、十分な量の水が注ぎ込んでいるが、その水の量は増えることもなければ、減ることもなく、さらに

*hawd* には二つの管がついていて、それぞれ金と銀が流れ込んでいると述べている (Ibn al-'Arabi, vol.3, p.439)。さて、ここで留意しなければならないことは、アルアラビーが語るこうした *hawd* の描写が、実は終末の日の *hawd* に関する伝承を取り込んでいることである。

*Encyclopaedia of Islam* によると、*hawd* とは水盤のこと、万人の復活の日に預言者ムハンマドは信者たちとこの水盤の前で出会い、

ムハンマドは彼らのために神にとりなしをすることになっている (Wensinck 1971, vol.3, p.286)。*hawd* には様々な特徴が付与されてきたが、そのひとつに、楽園から出た二つの管が *hawd* に達し、それぞれ金と銀を注ぎ込んでいるという伝承がある (Wensinck, p.286)。また、ムハンマドは *hawd* の水で信者の喉の渇きを永遠に癒すとも考えられており、この *hawd* は、善行悪行を計ること (*mizān*)、シラート橋 (*şirāt*) とともに、神が裁きを下す終末の日に起こる三つの現実としてイスラーム教徒が信じるべき信仰箇条 ('aqida) のひとつになっている (Watt 1960, vol.1, p.334)。*hawd* の概念は、「われらは、汝に潤沢 (*kawthar*) を与える」と言及しているコーランの第108章「潤沢の章」から派生したと考えられている (Wensinck 1932, p.231)。

一方、イスラームの伝承によれば、*kawthar* は「楽園を流れる川のひとつ」と考えられているが、幾つかの伝承では *kawthar* が *hawd* と同義となって、楽園を流れるすべての川が注ぎ込む *hawd al-kawthar*（楽園の池）と見なされるようになった (Horovitz & Gardet 1978, vol.4, p.806)。しかし、このような解釈は二義的で、また後世になって発生したものであり (Wensinck 1971, vol.3, p.286)，一般には *kawthar* は楽園を流れる川であると解釈してきた (Horovitz & Gardet, p.806)<sup>7)</sup>。

このように *hawd* には、預言者ムハンマドの *hawd* と楽園の *hawd al-kawthar* という二つの異なる概念があり、こうした混同から、A・J・ヴェンジングは *hawd* を最後の審判の日の *hawd* と楽園に関係した *hawd* というように二つに分けて考えようとする議論があると述べているが (Wensinck 1971, vol.3, p.286)，建築におけるイコノグラフィーを議論するにあたっても、象徴性の違いから *hawd* が終末思想によるものか、楽園思想によるものかを考慮する必要がある。

ムガル帝国では、シャー・ジャハーンが建造したカシュミールにあるシャーリマール庭園の初期の方の庭園<sup>8)</sup>は、ムガル帝国の歴史書において「蜜が流れる楽園の川である *kawthar* を模した水路によって灌漑されていた」 (Ināyat Khān 1990 [ed.], p.126) と言及されており、*kawthar* が「楽園の池」ではなく「川」であると考えられていたことを示している。同様に、タージ・マハルの庭園に置かれた白大理石の泉水は「天上の *kawthar* の水で満たされている *hawd*」 (Kambū 1989 [ed.], p.80) という修辞が与えられ、泉水 (*hawd*) そのものが *kawthar* ではなく、むしろ「楽園の川」である *kawthar* の水が注ぎ込む「池」であると解釈されていたことがわかる。

イブン・アルアラビーの *al-hawd* に話を戻すと、*hawd* は楽園と地獄を隔てる仕切りである *al-a'rāf* の上に位置して描かれているの

- 
- 7) Encyclopaedia of Islam の “KAWTHWAR” の項目によると、*kawthar* はムハンマドが昇天して神の玉座を拝謁した時に見た池であると述べているが (Horovitz & Gardet 1978, vol.4, p.806)，同事典の “MIRĀD” によると、池ではなく楽園の川として言及し、またその楽園の川についての記述には矛盾があると語っている (Schriek & Horovitz 1993, vol.7, p.99)。しかし、ビーグリーは、イブン・アルアラビーのダイアグラムの *hawd* を *hawd al-kawthar*（楽園の池）として解釈している (Begley 1979, pp.14, 26; 1996, pp.225-230)。その際、*kawthar* が *hawd al-kawthar* と見なされている例として、18世紀に制作された挿絵とカージャール朝時代に制作された挿絵を引いているが、後世に制作された挿絵をもってシャー・ジャハーン時代に *kawthar* が *hawd al-kawthar* と理解されていたと証明することは不可能である。ビーグリーの議論では、*kawthar* が楽園の川と考えられていたことを一切考慮していないのも問題がある。
- 8) *Bāgh-i farāhbakhsh* 「歓びを与える庭園」のこと。シャー・ジャハーンがカシュミールに建造したシャーリマール庭園は、彼が皇子時代に携わった庭園、*Bāgh-i farāhbakhsh* と、即位してから建造した庭園、*Bāgh-i faydbakhsh* 「恵みを与える庭園」の二つの四分庭園を合わせた名称である。

で、楽園には属していない。金と銀が流れ込む二つの管を持ち、信者が十分な水を飲めるという解釈も、預言者の *hawd* の伝承と一致する。重要なのは、*hawd* の水が増えることもなく、減ることもないという記述で、*hawd* に *kawthar*（潤沢）の性質が与えられており、明らかにアルアラビー自身が終末日の *hawd* の概念の来由についても理解していたことがうかがえる。しかし、*kawthar* という言葉はテキストでもダイアグラムでも使われておらず、また、楽園の川や楽園の川が流れ込む池についても一切言及していない。テキストもダイアグラムも最後の審判の日の光景を語っているので、ダイアグラムに描かれた *al-hawd* は、楽園思想に基づく *hawd al-kawthar* ではなく、最後の審判の日における預言者の *hawd* であることが理解できる。

以上、アルアラビーのダイアグラムについて考察してきたが、最後に注意しなければならないことは、ここで示された最後の審判の日の光景やその解釈が、『メッカ啓示』の中で敷衍される彼の来世の概念においては中核ではないことである (Affifi 1938, pp.164-170; Landau 1959, pp.61-63)。なぜならアルアラビーの思想における最終の目標は神との合一であり、「神的存在と個別的存在との根源的存在次元における連続性の、認識論的回復」(松本 1982, pp.101-102) に基づくからである。ダイアグラムで表現された終末の光景は、正統イスラーム思想であり、それは楽園と地獄についての伝統的解釈を紹介する目的で『メッカ啓示』で述べられている。

## 2. アフマド・ヤサヴィー廟のプラン

前章を要約すると、イブン・アルアラビーのダイアグラムは、正統イスラーム思想に基

づいた終末の光景を視覚的に表したものであり、そこに描かれた *hawd* は審判の日における預言者ムハンマドの *hawd* と解釈するべきものであった。しかし、タージ・マハル・コンプレクスのプランでは、ダイアグラムの地獄に匹敵する建造物は存在しないばかりか、その庭園中央に置かれた白大理石の泉水は「天上の *kawthar* の水で満たされている *hawd*」という楽園を象徴する修辞が与えられてきた。つまり、タージ・マハルのプランとアルアラビーのダイアグラムには、個々の要素の位置関係においても、そのシンボリズムにおいても、大きな乖離があることがわかる。その一方で、アフマド・ヤサヴィー廟のプランをダイアグラムと比較すると、そこには著しい共通性があることが判明する。それゆえ、次の課題はヤサヴィー廟のシンボリズムの考察であるが、この章ではまずこの初期ティムール朝時代を代表する聖廟の特徴を簡単に解説しておきたい。

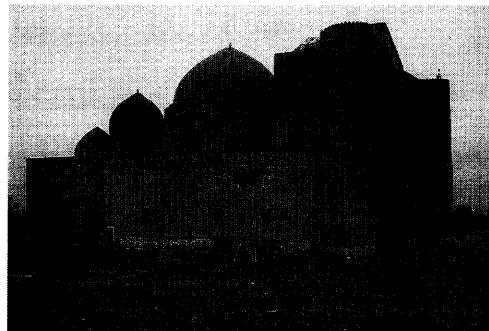
すでに様々な書物で述べられているように<sup>9)</sup>、アフマド・ヤサヴィー廟は、トルコ人のイスラーム改宗に大いに貢献したヤサヴィー教団の創始者である12世紀のスufiー聖者アフマド・ヤサヴィー (d. 1166) の聖廟で、中央アジアのヤス（現在はカザフスタンのトゥルケスタン）に位置している。ヤサヴィーの死後、墓は巡礼地となっていたが、ティムール (r. 1370-1405) がこの墓を詣でた時は一部崩壊しており、彼の命令によって再建され、ティムールの時代の建築を代表する壯麗な建造物となった。聖廟の改築は2年でなされ、おそらく1399年までに完成了と考えられている。

この廟の外観（図版7）は、長方形プラン (65.5m × 46.5m) の壁に囲まれた閉鎖したひとつの建造物となっているが、内部（図版

9) ヤサヴィー廟については、Nourmoukhammedov 1980, pp.26-36; Man'kovskaya 1985, pp.109-127; Golombek & Wilber 1988, vol.1, pp.284-288; Bloom & Blair 1997, pp.165-169; Blair & Bloom 1994, pp.37-39, 55-56; Hoag 1977 p.131 を参照のこと。

6, 62ページに掲載) は二階建てで、数多くの部屋が軸線を中心に左右対称に配置された複雑なプランになっている。一階プランでは、廟の要となるアフマドの墓室(図版6-3)は北側の一番端に置かれ、正方形の部屋の中央にはこの聖者の大理石の墓が置かれている。贊を凝らしたダブルドームはこの墓室の特徴で、外殻ドームには縦溝入りの青い模様のタイルが用いられているが、この模様柄のタイルは当時その使用が厳しく制限されており、後世にはいろいろな建造物に採用されるようになったが、同時代の建造物では、グール・イ・ミール廟でのみ見ることができる(Golombek & Wilber 1988, vol.1, p.207)。一方、内殻ドームには円形の幾何学模様がムカルナス装飾で表され、輝く太陽模様を作り上げているが、ヤサヴィー廟はムカルナス装飾を大規模に使った初期の例のひとつでもあった。また、ダブルドームの内部空間には8つの補強板が使われて、外壁ドームを支える構造になっていた(Man'kovskaia 1985, p.111)。

墓室の西側にはミフラーブが設けられたモスク(図版6-4)が置かれ、墓室の東側には集会ホール(図版6-10)が配置されているが、タージ・マハルと同様に墓室の両脇にモスクと集会ホールが並列されたプランはすでにヤサヴィー廟にも見ることができる。廟の中央は青い無地タイルのドームで覆われたセントラル・ホール(図版6-2)が占めているが、このホールを起点にして多くの部屋が対称的に配置されている。セントラル・ホールの北側には墓室に通じる次の間が設けられ、ホールの西側・東側にはそれぞれ、瞑想室として使われたと思われる二対の暗い小部屋(図版6-6, 7, 12, 13)が置かれている。これらの



図版7. アフマド・ヤサヴィー廟の全景。

出典: Blair and Bloom, *The Art and Architecture of Islam 1250-1800*, fig.46.

瞑想室のさらに西側・東側にそれぞれ奥の部屋が設けられているが(図版6-5, 11), 西側の奥の部屋は図書室(図版6-5)になっていて、多くの書物が所蔵されていた。

セントラル・ホールの南西には儀式用の食事を出した台所(図版6-8), 南東には井戸のある部屋(図版6-14)が置かれ、中央の軸線に沿って東西に対称的に置かれている。廟の南側中央が正門で、両脇に塔を従えている(図版6-1)。正門からセントラル・ホールへの入り口及びホールから墓室の入り口にそれぞれ木製の扉が置かれていたが、これらの扉には金銀が象眼されたブロンズ製のドアノッカーがついており、それには「誠実なる者にこの扉が開かれますように。仲間にはこの扉が開かれ、外敵にはこの扉が閉じられますように」<sup>10)</sup>と書かれた碑文がある。

また、セントラル・ホールの中央には、燭台とともにティムールが寄進したブロンズ製の巨大な円形の水盤が置かれていた<sup>11)</sup>。この水盤は現在はサンクトペテルブルクのエルミタージュ博物館の所蔵となっているが、その高さは1.5メートル、最大部分の直径は2.5

10) ゴロンベクとウィルバーによると、サーディーの『薔薇園』からの章句である(Golombek & Wilber 1988, vol.1, p.287)。

11) この水盤については、次の文献を参照のこと(Nourmoukhammedov 1980, p.32; Komaroff 1992, pp.17-43, 237-239; Golombek & Wilber 1988, vol.1, pp.287-288)。

メートルに達し、現存するペルシア・イスラーム美術の金属器として最大の例の一つになっている。水盤には「神は言われた『巡礼者への給水と聖なる礼拝堂（メッカ）の管理を考えよ』、預言者は言われた『聖なる目的で水を飲む場所を建てる人については、神は彼のために天上に水盤（*hawd*）を建てるだろう』、アミール・ティムール・キュレゲンはシャイフ・アフマド・ヤサヴィーの崇高な墓（*rawda*）のため、この水盤の製作を801年のシャッワール月20日（1399年6月25日）に命じた」<sup>12)</sup>という碑文がついていたが、その前半はコーランの第9章第19節から取られたものである。

水盤ばかりでなく、コーランの章句はヤサヴィー廟の外壁にも採用されていた。現在ではその一部しか残っていないが、A・E・マッソンによるとコーラン第6章の章句のはとんどが外壁の碑文帯に刻印されていたが（Komaroff 1992, p.33），この章は、最後の審判の日に邪宗徒に下る神の懲罰と信心者に与えられる神の慈悲と素晴らしい来世の生活を強調するものである。

こうした具体的な建築的特徴とは別に、アフマド・ヤサヴィー廟に関する特筆すべき事項は、廟の間取りやその大きさなどがティムールの伝記である『勝利の書』に具体的に示されていることである（Man'kovskaya 1985, pp.116-117; Golombek & Wilber 1988, vol.1, pp.138-139）。『勝利の書』とはシャー・ルフの息子であるイブラーヒーム・スルターンの命を受けた当時の名文家シャラフ・アッディーン・アリー・ヤズディーによって書かれ、1424/5年に完成した。今日的な観点から見ると過褒のきらいがあるが、歴代のティ

ムール朝やムガル朝の支配者からは高く評価されてきた（Woods 1987, pp.99-106）。M・アッバーシー校訂による『勝利の書』によると、ティムールがこの墓を訪れた時、すでに一部が崩壊しており、彼は再建を命じたが、そのヤサヴィー廟には「壮大な正門、2つのミナレット、30ガズ（*gaz*）×30ガズの正方形のプランを持つドームつきの部屋、その部屋の奥に聖者の墓のためのもうひとつのドームつきの部屋があり、12ガズ×12ガズで、4つのニッチ壁の形態。（この墓室の）両脇には集会のための4つのニッチ壁の形態の部屋があり、幅13.5ガズ、奥行き16.5ガズ、さらに礼拝や他の用途のための訪問者用の幾つかの部屋」（Yazdi, ed. 'Abbasi 1957, vol.2, p.16）があるよう指示された。一方、A・ウルンバーエフによる『勝利の書』の写本のファクシミール版ではティムールが墓の再建を命じただけは同じであるが、セントラル・ホールの大きさは30ガズではなく41ガズになっていて、その円周の長さも130ガズとして与えられている（Yazdi, ed. Urumbayev 1972, p.608）。この『勝利の書』では墓廟両脇の部屋の具体的な数字は与えられていないが、その一方で、セントラル・ホールに置かれ、金銀を含む7種類の合金でできた水盤（*hawd*）の存在やタブリーズ産の大理石の使用についても言及している<sup>13)</sup>。このように『勝利の書』におけるヤサヴィー廟についての記述は写本や校訂本によって異なるものの、その記載された特徴の多くは現在の建築と一致し、さらにティムール自身がこの聖廟の設計を指揮し、主だった部屋の長さや幅などの具体的な数字が建設に先立ってすでに決定されていたことなどが明らかになる。建造物についてこのよう

12) Golombek & Wilber 1988, vol.1, p.287 を参照。

13) アッバーシーによる『勝利の書』校訂本及びウルンバーエフによる『勝利の書』写本ファクシミール版におけるペルシア語記載の確認・翻訳では京都大学大学院間野英二教授のご協力を得た。記して謝意を表したい。なお、『勝利の書』をはじめとするティムール朝時代の文献解説については、間野 2001, pp.427-453 を参照のこと。

な詳細な仕様が言及されているのは、『勝利の書』の中ではヤサヴィー廟だけであり、一般に言って数字を列挙した詳細な記述は当時の歴史書において例を見ないものであった(Golombek & Wilber 1988, vol.1, p.145)。

### 3. アフマド・ヤサヴィー廟のシンボリズム

アフマド・ヤサヴィー廟は、『勝利の書』の記述から、再建に着工する以前にすでに指示されていたプランに基づいて建造されたことが判明するが、現存する建築を見ても、部屋の間取りが複雑ながらも対称的に配置されて、綿密に計算されたプランが採用されていることは明らかである。このシメトリカルなプランは、ヤサヴィー廟で初めて採用されたもので、従来のイル・ハーン朝時代のスーアーイー聖廟の特徴とは著しく異なるものであった。イル・ハーン朝時代のスーアーイー聖廟は、もともとあった聖者の墓などを中心にモスクやハーンカーなどが増設されて、建築複合体に発展したものであり、そのプランは当初の建造物を包括するため不規則な形態だったが(Golombek 1974, pp.419-430; Blair 1990, pp.35-49)，こうした状況から一転して整然たる幾何学的なプランが使われたのが、ヤサヴィー廟であった。しかし、なぜこのようなプランが使用されたのか、その起源については学者の意見は一致していない(Man'kovskaya 1985, p.125)。美術史的に考えて、ヤサヴィー廟のシメトリカルで複雑なプランへの変化の背景には、何らかの象徴体系が付与されたと推察することができるが、その手がかりになるのが、この聖廟のプランとイブン・アルアラビーのダイアグラムとの著しい類似性である。

まずアフマド・ヤサヴィー廟の墓室(図版6-3)を考察すると、その内殻ドームはムカルナス装飾で円形の幾何学模様が形成されているが、イル・ハーン朝時代やティムール朝時代には墓廟のドーム天井の輝く太陽模様は、

宇宙における神の秩序を示すものとして好まれてきたものであった(Golombek & Wilber 1988, vol.1, pp.206-207)。また、初期イスラームの時代からドームは玉座の間と密接に結びついてきた(Golombek & Wilber, p.206)。一方、外殻ドームは当時はその使用が厳しく制限されていた模様つきの青いドームが使用されている。このように墓室のダブルドームでは、内殻ドーム、外殻ドームとともに、ドームを美しく飾ろうとする建築家の意図は明らかであり、こうしたイスラームの象徴性に則れば、ヤサヴィー廟の墓室のドームは神の存在を示唆する神の秩序の象徴であり、墓室は神の玉座の象徴と考えることができる。墓室は廟の北側中央にあるが、それはイブン・アルアラビーのダイアグラムの上部中央にある神の玉座と対応し、その象徴的意味においても、位置関係においても一致することが判明する。また、ヤサヴィー廟のダブルドームは8つの補強板が使われていたが、これはアルアラビーが語る8人の天使に支えられた神の玉座に符号する。ダイアグラムでは「神の玉座」の両脇には「(神によって) 守られているもの」を示す階段状の二対の三角形が描かれているが、ヤサヴィー廟ではアフマドの墓室の両脇には、同型同大ではないにせよ、モスク(図版6-4)と集会ホール(図版6-10)が配置され、基本的な構図で共通していることがわかる。

次に、ヤサヴィー廟のセントラル・ホール(図版6-2)についてであるが、中央にブロンズ製の水盤が置かれていたことが知られている。水盤の碑文には「神は言われた『巡礼者への給水と聖なる礼拝堂の管理を考えよ』、預言者は言われた『聖なる目的で水を飲む場所を建てる人については、神は彼のために天上に水盤(hawd)を建てるだろう』」と書かれていたが、この「巡礼者への給水と聖なる礼拝堂の管理」(藤本他訳 1979, p.200)という表現は、終末の日をテーマにしたコーランの第9章第19節から取られたものであり、

この碑文から人々の喉の渴きを癒すことが水盤の大きな目的になっていることがわかる。また、水盤を寄進することは天上の *hawd* で報われることになると示唆されているが、水盤の碑文は終末の日を暗示させ、人々の喉の渴きを癒すことが強調されているので、このブロンズ製の水盤は預言者の *hawd* の象徴であることが理解でき、アルアラビーのダイアグラムの中央に描かれた *al-hawd* と、その象徴性においても、その配置においても一致することが明らかになる。

しかし、もっとも我々の関心を誘うのは、セントラル・ホールの西側・東側にそれぞれ二つずつ並ぶ瞑想室（図版6-6, 7, 12, 13）の存在だろう。これらの瞑想室の配置は、ダイアグラム中ほどに垂直に二つずつ並んで描かれ、それぞれ「善行の天秤皿」、「悪行の天秤皿」、「右の帳簿」、「左の帳簿」を示す4つの小円と見事に対応する。また、西側の瞑想室よりさらに西の奥にある縦長の部屋（図版6-5）は、図書室であったが、信心深い者が受け取る「右の帳簿」が保管されていた場所と考えることができ、「右の帳簿」を象徴するダイアグラムの小円と対応する。

同様に、ヤサヴィー廟では、南西の角の台所（図版6-8）と南東の角の井戸つきの部屋（図版6-14）が、軸線に対してほぼ左右対称になるよう配置されているが、これはアルアラビーのダイアグラムで *al-a'rāf* を表す垂直の線をはさんで左と右に位置している「楽園」と「地獄」の配置に符号する。台所では儀式用の食事が準備されたが、「楽園」を示すダイアグラムの大円の中に「宴会が行われる楽園の草原」と記されているように、ヤサヴィー廟の台所は食事の供給というその象徴性においてもダイアグラムの「楽園」と符号する。

これ以外にも、ヤサヴィー廟の南側中央の正門（図版6-1）の扉には「仲間にはこの扉が開かれ、外敵にはこの扉が閉じられますように」と書かれた碑文があり、これはイス

ラームを信じない邪宗の徒である外敵はこの廟の中に入れないことを示しているが、この正門の位置は、ダイアグラムの「背後からの帳簿」を示す小円の位置と一致し、邪宗徒はアッラーを信じなかった大罪のために、背後から帳簿を渡され、神の慈悲もムハンマドのとりなしも与えられずに、永久に地獄にとどまるという象徴性においても一致するのである。

以上、ヤサヴィー廟を検討してきたが、廟の一番北側には「神の玉座」を象徴する墓室が置かれ、その両脇にモスクと集会ホールが配置されていること、セントラル・ホールの中央には預言者の *hawd* を象徴する水盤があり、このホールの西側・東側には二対の瞑想室があり、その西の瞑想室の奥の部屋は図書室になっていたこと、廟の南西、南東には楽園と地獄に対応する部屋があり、廟の南端中央には「背後からの帳簿」を象徴する正門があつたことなど、個々の部屋の位置関係やその象徴性は多くの点においてイブン・アルアラビーのダイアグラムと符号することが判明する。このような著しい共通性を勘案すれば、ヤサヴィー廟のプランには、アルアラビーのダイアグラムに基づく最後の審判の日の光景の象徴体系が組み入れられたと推測することは可能である。そもそもアルアラビーのダイアグラムは、正統イスラームの終末思想を視覚的に表現したきわめてユニークなものであったが、それがティムールやその建築家たちに審判の日の光景のプロトタイプを提供したであろうことは十分に推察できる。要約すれば、イスラームの終末思想を建築に組み込む意図を持って、アフマド・ヤサヴィー廟が建立され、その結果、この墓廟は不規則な発展を遂げてきた従来のスーアーイー聖廟複合体から大きな脱皮を成し遂げたと考え得る。

ヤサヴィー廟に審判の日のシンボリズムが付与されることとは、ティムールがその支配を正当化し、家臣を懷柔するという政治的観点からも推論できる。自らを信心深い指導者と

して演出するのは、イスラーム社会の指導者がよく使う手口であるが、ティムールは審判の日の象徴体系を持つ聖廟を建造することで、このルールをさらに推し進めたものと思われる。前述したように、アフマド・ヤサヴィーは、トルコ民族のイスラーム化に大きく貢献した聖者であり、彼の墓は巡礼地となっていた。この事実に呼応するかのように、ヤサヴィー廟の外壁には、邪教徒に下ることになっている神の懲罰を強調し、イスラームへの改宗を勧め、信心深い者には最後の審判の日に神の慈悲が与えられ、来世で素晴らしい暮らしが待っていることを約束するコーラン第6章が刻印されていた。

多くの人々が訪れる 것을를 望む巡礼地に終末の日のシンボリズムを組み込んだ聖廟を建造することは、ティムール自身のイスラームへの信奉の標榜であり、人々には身の毛のよだつ審判の日の光景を思い出させると同時に、約束された楽園についても思い起こさせるものであった。イスラーム社会では聖戦（ジハード）で殉教した者は楽園に導かれるという信仰があるが、終末の日の光景を表す聖廟は、ティムールについて行くと楽園が保証されていることを人々に知らしめる装置だったと考えられる。ティムールにとって宗教は彼の政策に役に立つかどうかという点において重要であり（久保 1999, p.139），彼自身は宗教のシンボリズムをいかに利用するかをよく知っていた。アフマド・ヤサヴィー廟は、ティムールのイスラームへの帰依を公にして、人々を啓蒙する意図を持って建造されたのである。

#### 4. タージ・マハル・コンプレクスのプラン

前章ではヤサヴィー廟に審判の日の象徴体系が付加される必要性やその文脈を理解してきたが、次に考慮しなければならないのは、このティムール朝最初期の聖廟がタージ・マハルのモデルとして機能したのかどうかである。それゆえこの章では、これら二つの著名な建造物について考察するが、ここで重要な役割を担うのが、タージ・マハルを建造したシャー・ジャハーン自身の性格と嗜好である。

シャー・ジャハーンは即位した日から *sâhib-i qirân-i thâni* 「幸運な星が交わった際に生まれた君主二世」（‘Inâyat Khân 1990 [ed.], p.17）という新しい称号を名乗ったが、これはシャー・ジャハーンの祖先にあたるティムールの称号 *sâhib-i qirân* 「幸運な星が交わった際に生まれた君主」を踏まえたものであった。つまりシャー・ジャハーンは「ティムール二世」と堂々と公称したり、公式の歴史書に書かれている彼の系譜の最初の人物もバーブルではなく、ティムールになっている（‘Inâyat Khân 1990 [ed.], p.4）。このように、このムガル皇帝がティムールに深く心酔していたことはよく知られている事実であり、実際、彼の時代にはティムール朝文化のリバイバルが起きていた<sup>14)</sup>。

さて、話をヤサヴィー廟に戻すと、この廟の際立った建築的特徴が、実はタージ・マハルで見られ、さらにそのタージ・マハルの特徴がムガル歴史書において報告されていることをまず指摘しなければならないだろう。ヤサヴィー廟では、墓室が一番北側に置かれ、

14) シャー・ジャハーン時代に制作され、ティムール朝時代の詩や謡々を美しく彩ったカリグラフィーを含むアルバムは、この時代におけるティムール朝文化のリバイバルの典型的な例であり、Welch, et al. 1987 及び山田 1999, pp.64-66 を参照のこと。また、すでに注5で言及したが、ゴロンベクの “From Tamerlane to the Taj Mahal” はムガル建築におけるティムール朝文化のリバイバルを早くから指摘した論文である (Golombok 1981, pp.43-49)。スブトゥルニーの “Mirak-i Sayyid Ghîyâṣ and the Timurid Tradition of Landscape Architecture” は膨大な史料の中からティムール朝時代のヘラートで活躍した建築家3世代の軌跡を再構築し、ティムール朝時代の建築・庭園文化の伝統がインドに移植された経緯を明らかにしている (Subtelny 1995, pp.19-38)。

その両脇にはモスクと集会ホールの付属の施設が併設されているが、これはタージ・マハルの重要な特徴であり、シャー・ジャハーン時代の歴史書にも記されている（Lāhawrī 1989 [ed.], p.73; Kambū 1989 [ed.], pp.79-80）。ヤサヴィー廟はムカルナス装飾を最も早く取り入れた建造物のひとつであったが、そのムカルナス装飾はタージ・マハルの墓廟の各入り口のヴォールト部分にも用いられ、ムガル史書もその使用を報告している（Lāhawrī, p.66; Kambū, p.78）。また、ヤサヴィー廟の外壁には、終末の日に邪教徒に下ることになる神の懲罰と信者に与えられる神の慈悲を強調したコーラン第6章の章句が刻まれていたが、タージ・マハルでも終末日の天変地異のすさまじさと神の慈悲をテーマにしたコーランの章句を数多く使った碑文装飾が特徴で、事実、ムガル史書は「神の慈悲に言及したコーランの章句」（Kambū, p.79）が使われていると述べている。

このように、ヤサヴィー廟のプランばかりか、その壁面装飾とも共通する意匠がタージ・マハルにおいて採用され、それがムガル歴史書で記されているが、これらの二つの建造物の関係を考察する上で興味深いのは、現実の建築の特徴ばかりでなく、ヤズディーの『勝利の書』におけるヤサヴィー廟の記述の特徴が、シャー・ジャハーン時代の歴史書において繰り返されていることである。『勝利の書』は、その校訂本や写本によって、記述の内容に食い違いが見られるが、ヤサヴィー廟の主立った部屋のサイズがガズ（*gaz*）という単位を用いて具体的な数字を挙げて記録されているのは共通している。このような詳細な記載は『勝利の書』の中ではヤサヴィー廟だけに見ることができ、普通の歴史書では稀有なものであった。しかし、タージ・マハルに関しては、同様の記載をシャー・ジャハーン時代の歴史書で見ることができ、この墓廟コンプレクスの個々の建物の大きさ、幅、高さ、さらにドームの直径や円周までがガズ

（*gaz*）やズィラー（*dhirā'*）という単位を使って非常に細かく記されている（Lāhawrī, pp.65-77; Kambū, pp.77-82）。建造物についてのこのような詳述は、ムガル歴史書においても例がなく、『勝利の書』との著しい類似性を示している。

また、『勝利の書』の校訂本のひとつには、「（ヤサヴィー廟の墓室の）両脇には集会のための4つのニッチ壁の形態の部屋があり、幅13.5ガズ、奥行き16.5ガズ」という記述がある。ヤサヴィー廟の墓室の両脇に併設されたモスクと集会ホールは、実際には同型同大ではないが、この『勝利の書』では同じ大きさが与えられており、タージ・マハルの墓廟に併設された同型同大のモスクと集会ホールに符号する。別の『勝利の書』の写本には「タブリーズ産の大理石の使用」や「セントラル・ホールに置かれた7つの合金からなる*hawd*」の存在などが記されており、タージ・マハルの際立った要素と一致する。つまり、ヤサヴィー廟の実際の特徴ばかりでなく、『勝利の書』におけるヤサヴィー廟の記述などもタージ・マハルで反映されていることがわかる。

そもそもアフマド・ヤサヴィー廟は「沖天の勢いだったティムール朝の隆盛を示すばかりでなく、初期中世建築が達した偉大で複雑な段階の頂点を示すものであり、多くの点で以後の建築のプランニングと建築手法の一層の発展を規定した」（Man'kovskaiia 1985, pp.125-126）と言われ、ティムール朝最初期の建築として重要な意義を持っていた。タージ・マハルの設計には、シャー・ジャハーン自身が積極的に関与したと考えられているので（Begley & Desai 1989, pp.9-10），ティムールに心酔するこのムガル皇帝が、ティムールが建造を命じ、この時代のメルクマールとなっている聖廟をタージ・マハルのモデルにしたと考察することは可能である。ヤサヴィー廟とタージ・マハルとのプランや外壁装飾における類似性に加え、以上のことを勘

案すれば、シャー・ジャハーンが、ヤサヴィー廟からタージ・マハルの基本的な設計のアイデアを引き出したことは十分に推論できる。シャー・ジャハーンはヤスにあった聖廟を実際に訪れた外交団や彼の廷臣から話を聞いたり、『勝利の書』を読むことで、アフマド・ヤサヴィー廟についての詳しい情報を得たに違いない<sup>15)</sup>。つまり、アフマド・ヤサヴィー廟は、墓廟を庭園の北側に置く配置、同型同大のモスクと集会ホールの併設などの建築概念をタージ・マハルに提供したと考え得るのである<sup>16)</sup>。

ただ、ここで留意しなければならないことは、シャー・ジャハーンはアフマド・ヤサヴィー廟とまったく同一の建造物を建設しようとしたのではなく、むしろこのティムールの時代の聖廟で表明された建築概念を自分自身の建築の中で復活させようと試みたことだろう。実際、この皇帝は、ティムールの偉大な建築からヒントを得て、もっと先に進んでしまった。タージ・マハルにおける個々の建造物の長さや高さなどが非常に綿密に記載されていたり、終末の光景を扱うコーランの章句がタージ・マハルの建造物の外壁に刻印されたのはその現われだと思われる。シャー・ジャハーン時代におけるティムール文化のリバイバルの風潮の中で、ティムールの時代の建築言語は見事によみがえったのである<sup>17)</sup>。

さて、最後に考察しなければならないのは、タージ・マハルのプランとイブン・アルアラビーのダイアグラムとの係りであるが、ダイアグラムがどの程度タージ・マハルのプランのモデルとして機能したのかを判断するのは難しいことである。というのは、シャー・ジャハーンはヤサヴィー廟に関心があったので、おそらく彼はこのティムール朝最初期の聖廟のプランが、ダイアグラムで表明された終末的光景のトポグラフィーを象徴していることを知っていたり、それゆえダイアグラムそのものも知っていたに違いない。しかし、ダイアグラムとヤサヴィー廟に見られる類似性及びヤサヴィー廟とタージ・マハルの類似性を比較すると、ダイアグラムとタージ・マハルの類似性はそれほど著しいものでなく、墓廟を一方の端に置くこと、同型同大の付属施設の存在、さらに、もし終末の日の *hawd* か、楽園の *hawd* かというシンボリズムを考慮しなければ、庭園の泉水 (*hawd*) の位置にのみその類似性は限られている。すでに言及したように、ダイアグラムとタージ・マハルではその象徴性において一致しない点がある。それゆえダイアグラムが直接タージ・マハルに建築的コンセプトを提供したというよりも、ダイアグラムとタージ・マハルをつなぐ間接的なモデルとしてヤサヴィー廟が機能したと考えるのが妥当であろう。

- 
- 15) ボルティモアのウォルターズ・アート・ギャラリーにはシャー・ジャハーンのライブラリー・エンブリーのシールがついた『勝利の書』が保存されている。『勝利の書』におけるアフマド・ヤサヴィー廟についての記述からシャー・ジャハーンがどのような情報を得たのかはこの写本を調査する必要があり、今後の研究課題としたい。
- 16) タージ・マハルはムガル史書では *rawda-i munawwara* (輝く墓廟) と言及されているが (Begley & Desai 1989, pp.9-10), アクコユン朝のウズン・ハサンがスーアーイ聖廟に寄進したスタンド式のオイル・ランプにも, *munawwar(a)* という言葉が使われて、「*qabr-i munawwar* (輝く墓廟)」への献上である」と書かれた碑文がついていた (Melikian-Chirvani 1987, pp.127, 130)。そもそもスーアーイズムでは、コーランの第24章「光の章」第35節の章句が好まれ (Melikian-Chirvani, p.118), 「光は神の存在として比喩的な役割を果たしてきた」(Asher 1992, p.214) が、スーアーイ聖廟への修辞と共に通ずる表現をタージ・マハルに見ることができるのは興味深い。
- 17) スブトゥルニーは、ティムール朝ヘラート時代の *chahār bāgh* の記述がタージ・マハル・コンプレックスのプランのモデルになった根拠としてシャー・ジャハーン時代におけるティムール朝文化のリバイバルを使ったが、その議論はティムールが再建したヤサヴィー廟の方に一層よく該当する (Subtelny 1995, p.49)。

## 5. シャー・ジャハーン時代に制作された『ティムール自伝』

シャー・ジャハーンのティムールへの憧憬がタージ・マハルのデザインを決定する上でいかに重要だったかという点については、この白亜の墓廟の壁面に使われた特定のコーランの章句を考察することで一層明らかになる。その章句とはタージ・マハルの墓廟パビリオンの内壁に使われた第67章と、モスクに使われた第91章で、これらの章とティムールとの関係は、いわゆる『ティムール自伝』<sup>18)</sup>という問題のある文献によって示唆されるのである。

『ティムール自伝』とはティムールの自伝としての体裁を取っているが、贋作として知られている文献で、今日のティムール朝時代の研究者からは事実上無視されてきた<sup>19)</sup>。

『自伝』は、チャガタイ・トルコ語で書かれた原本をイエメンで発見し、ペルシア語に翻訳したと主張するアブー・ターリブによって1628年から1637/8年の間に書かれ<sup>20)</sup>、ペルシア語版がシャー・ジャハーンに献上された。しかし、シャー・ジャハーンは、『ティムール自伝』の内容がヤズディーの『勝利の書』の記述と様々な点で食い違うことに気づき、別の廷臣に『ティムール自伝』の記述を改め、『勝利の書』に基づいてきちんと校正するよう命じている。この逸話からシャー・ジャハーン自身も『ティムール自伝』が贋作であ

ることを認識していたと推察されるが、その信憑性に関する疑惑にもかかわらず、興味深いことは、アブー・ターリブの『ティムール自伝』が後世のムガル皇帝によって非常に尊重されたことである。例えば、第15代皇帝のシャー・アーラム2世は『ティムール自伝』の大変美しい写本を貴重書扱いとして所蔵しており<sup>21)</sup>。ラクナウのイスラーム宮廷にもこの自伝の完璧な写本が保存されていた<sup>22)</sup>。これら以外にもアブー・ターリブのオリジナル版や校正版も幾つか知られており、いかにインド亜大陸のイスラーム指導者に尊重されていたか理解できる。

『ティムール自伝』をティムール朝時代の歴史考証に使うことは非常に危険なことであるが、この文献が唯一役に立つとしたら、それはJ·E·ウッズがすでに指摘しているように<sup>23)</sup>、シャー・ジャハーン時代の人々がティムールに対してどういうイメージを構築していたのかを理解できることである。シャー・ジャハーンに献上することを目的に制作されたので、その内容は彼の偉大な先祖であるティムールについてこの皇帝が聞きたかったこと、知りたかったことを反映していると推察できるが、事実、ティムールはこの自伝の中で、子孫の繁栄を願う理想的な君主として描かれている (Abū Ṭālib 1830 [trans.], pp.24-25)。彼はある聖者から子孫が300年榮えることを告げられるが、これはティムールの死去から200年以上が過ぎたシャー・ジャ

18) 正式訳は『ティムールの言葉』(Malfuzāt-i Timūri)。

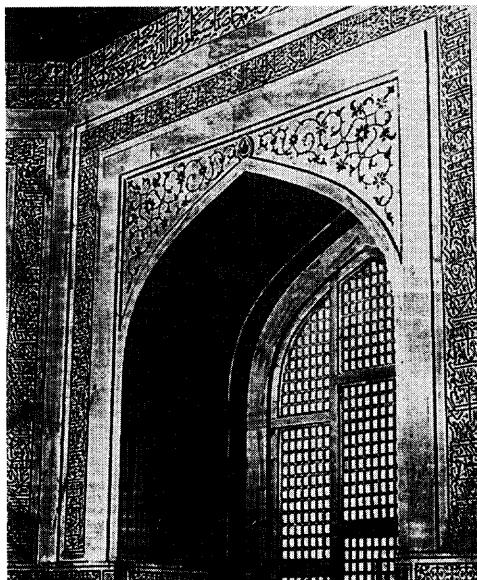
19) 一般に『ティムール自伝』はティムール朝時代に関する文献では言及されることはないが、ウッズ及び間野は、史料編纂学の見地からこの『自伝』に言及している (Woods 1987, p.106; 間野 2001, p.438)。

20) 『ティムール自伝』がどのように「発見」され、そのペルシア語翻訳版がどのようにシャー・ジャハーンに献上されたかについては、アブー・ターリブ自身の序文及びこのムガル皇帝の命を受けてアブー・ターリブのオリジナルの原稿を校正した編集者の序文を参考のこと (The Malfuzāt Timūry, pp.1-2., and pp.10-11 of the appendix)。

21) The Malfuzāt Timūry に掲載されている William Davy の手紙を参照のこと (p.xii)。

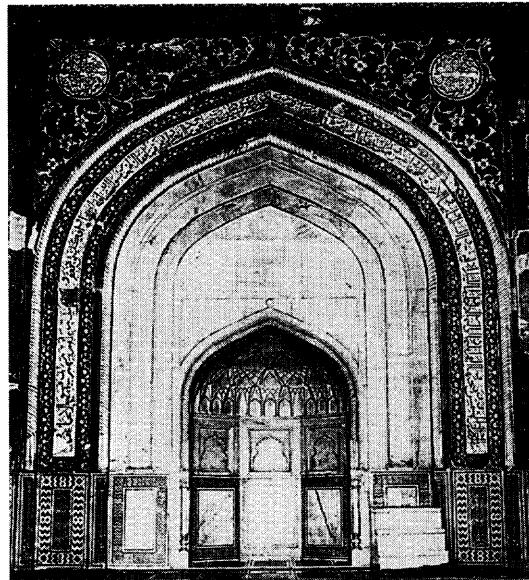
22) エリオットの The History of India as Told by its Own Historians (1871; rpt. 1974) からドウソンが編集した Tuzak-i-Timuri: The Autobiography of Timur の序文を参照のこと (p.4)。

23) ウッズは、『ティムール自伝』は、歴代のムガル皇帝にとって理想的な君主像はティムールであったことを映し出す鏡であると述べている (Woods 1987, p.106)。



図版8. タージ・マハル・コンプレクス、  
墓廟パビリオン内部、西側アーチ。

出典：Wayne E. Begley and Z. A. Desai, *Taj Mahal: The Illumined Tomb* (Cambridge, Mass., 1989), fig.120.



図版10. タージ・マハル・コンプレクス、モスク内部のミフラーブ。

出典：*Taj Mahal*, fig.134.



図版9. 西側アーチ上方のコーランの碑文（拡大部分）。

出典：*Taj Mahal*, fig.114.

ハーン時代の繁栄を暗示している。また、この自伝は、ティムールという名前がコーランの第67章から由来したと語っている。ティムールが生まれると、彼の父はティムールを有名な聖者の所に連れていったが、彼らが到着した時、この聖者はちょうど「おまえたちは、大地が揺れるとき (Tamūru)，天にあらせられるお方がおまえたちを大地に呑みこませたもうことはない」と安心しているの

か」(藤本他訳 1979, p.512)というコーランの章句 (67:16) を読誦していた。そのため、聖者が「大地が揺れる」(Tamūru) というフレーズを取ってティムールと名づけたというのである (Abū Tālib, p.21)<sup>24)</sup>。この第67章第16節

は、またティムールの瑞祥とも関わっていて、『ティムール自伝』によるとティムールがこの章句を修道場で読誦していた時、白髪の聖者が入ってきて、ティムールとその子孫の地上における栄耀栄華を予言している (Abū Tālib, pp.26-27)。別の重要なコーランの章句は第91章で、『自伝』によると、ティムールが9歳の時、彼はモスクで毎日勤行していたが、その時にいつも唱えていたのが、この

24) ティムールという名前の由来について、イブン・アラブシャーは彼が書いたティムール伝の中でトルコ語で「鉄」を意味すると語っており、ロエマーもアラブシャーと同じ見地に立っている ('Arabshāh 1976 [trans. and rpt.], p.1; Roemer 1986, p.43)。

章であった (Abū Ṭālib, p.21)。

タージ・マハルには延べ25本のコーランの碑文があるが、第67章は墓廟パビリオンの内壁の上方部分を一周する水平の碑文帯から内壁の南東アーチの碑文帯にかけて刻印されている (Begley & Desai 1989, pp.216-217)。パビリオン内壁には他にも碑文帯があるが、第67章は幾つものコーランの章句が続けて刻まれた一連の碑文装飾で、最初に登場する章句であるばかりか、その中の「大地が揺れる」(Tamūru) というフレーズは、キブラ側にあたる西側の壁に刻まれており (図版8と9)、この章句の重要性を示唆している。一方、第91章はタージ・マハルのモスクのミフラーブの周囲に記されている (図版10) (Begley & Desai 1989, pp.242-243)。

つまり、『ティムール自伝』でティムールの名前の由来であると見なされ、同時にティムールの吉兆と考えられた第67章がタージ・マハル・コンプレクスの中で最も重要な墓廟内壁の碑文に使われ、またティムールがモスクで読誦していたとされる第91章がタージ・マハルのモスクのミフラーブに使用されている事実を鑑みると、単なる偶然というよりも、ティムールにまつわるこうしたコーランの章句がシャー・ジャハーン時代にはすでに一種の伝説となって広く知られており、シャー・ジャハーン本人もそのことを知っていた上でタージ・マハルの碑文に採用したと推察できる。『ティムール自伝』はその制作された年代からもその信憑性からもシャー・ジャハーンが拠り所にしたと考えることはできないが、シャー・ジャハーン時代に流布していたティ

ムール伝説を考察するには非常に興味深い史料であり、なぜタージ・マハルに特定のコーランの章句が使用されたのかを理解する手がかりを与えてくれるのである。

## 6. タージ・マハル・コンプレクスに見られる楽園のイメージ

以上、論議してきたように、シャー・ジャハーンがティムールに関するものをタージ・マハルに取り込もうとする情熱は、驚くばかりである。アフマド・ヤサヴィー廟がタージ・マハルの基本デザインのモデルとなったのも、ひとえにこのムガル皇帝のティムールに対する心酔からであった。この点においてタージ・マハルは、M・ブランドがいみじくも指摘していたように、従来のムガル墓廟の継続的発展によってついに完成に達したものではなかった (Brand 1993, pp.324, 333)。むしろ、ティムールが建造した聖廟のプランを取り入れて、インドの大地に突然現われた建造物であった。ブランドは、また、タージ・マハルの「完成」に向かって従来のムガル墓廟が徐々に進化していったという多くの人々が信奉している見解は、真剣に考え直さなければならないと述べているが (Brand p. 324)、同時に彼の主張するタージ・マハルは初期のスタイルが意識的に復活されたものであるという見解は、ヤサヴィー廟とタージ・マハルとの関係に見事に当てはめることができるだろう<sup>25)</sup>。

ただ、最後に問題となるのは、このティムールの時代の聖廟とムガル朝の墓廟とでは、

25) ブランドは、ムガル墓廟建築の指針となった建築文化としてティムール朝建築とムガル以前のデリー・サルタナット建築という二つの建築文化の伝統を挙げており (Brand 1993, p.324)，筆者も彼の見解に深く同意しているが、本稿では議論を論理的に展開するため、サルタナット時代の建築文化との係りについては捨象している。ムガル朝の人々がサルタナット時代の建築からいかに造形的なアイデアを引き出したかについては、山田『ムガル美術の旅』1997 pp.27-34 を参照のこと。本書ではインド・イスラーム建築に顕著に見られる赤砂岩と白大理石の建材、特にラージャスター地方で産出された白大理石について、その使用はサルタナット時代からムガル時代に至るまで絶対王政の確立と帝国の版図の拡大に密接にかかわっていたことを指摘している。

その象徴性においても雰囲気においてもあまりにも違うことである。タージ・マハルでは広大な四分庭園の中に独立した建造物が配置されており、すでに言及したように、その庭園はシャー・ジャハーン時代の歴史書では「楽園のような庭園」と称えられている。

一方、アフマド・ヤサヴィー廟ではタージ・マハルとは異なり、ひとつの閉鎖した建物の中に個々の部屋が配置され、終末思想のコスモロジーが組み入れられていたが、何よりもタージ・マハルで重要な構成要素となっている四分庭園がヤサヴィー廟には存在しない。ヤサヴィー廟とタージ・マハルに見られるこうした違いをどのように解釈すればいいだろうか。

まず忘れてはならないのは、タージ・マハ

ル・コンプレクスが抛って立つインド亜大陸で独自の発達を遂げたムガル建築の伝統だろう。16世紀後半にフマーユーン廟が建造され、水路で区切られた広大な庭園<sup>26)</sup>の中央に墓廟が置かれる庭園墓廟形式が確立し、以後のムガル庭園墓廟の基本となってきた。そもそもフマーユーン廟は、ティムール朝時代のヘラートで暮らしていた亡命建築家の息子によって建造されたもので、ティムール朝時代の建築言語を見事に表すとともに、タージ・マハルの墓廟パビリオンの基本的なコンセプトを提供したことでも知られている<sup>27)</sup>。また、ムガル朝の庭園墓廟は楽園と形容されてきたが<sup>28)</sup>、ここで留意しなければならないのは、アクバル時代のファテープル・シークリーの宮殿建築にも楽園のメタファーが使われたの

- 26) パーブルは *chahār bāgh* というティムール朝時代の庭園様式を最初にインドにもちこんだ人物と考えられており、その興味深い経緯については、間野訳注『バーブル・ナーマ』1998, pp.478-479 を参照のこと。バーブルは『バーブル・ナーマ』の中で *chār bāgh* という言葉を頻繁に使っているが（間野の索引によると28回、p.713 参照）、彼が叙述する *chār bāgh* の形状は、注3で述べたように土地の起伏があるもので、インドに残るムガル朝の様式化された四分庭園とは一致しない。また、その *chār bāgh* には楽園としてのメタファーも与えられていない。むしろ、バーブルの描く *chār bāgh* は、彼が下馬したり、滞在する場所としてであり、*chār bāgh* が居住用の庭園コンプレクスだったことを示唆している。その一方で、ムガル朝下のインドでは、様式化された四分庭園形式が好まれたことも事実である。その最初の例はフマーユーン廟で、格子状に水路が引かれたその庭園は、広大なひとつの四分庭園あるいは9つの小四分庭園から成ると考えられてきた。しかし、ムガル朝下で好まれたこうした四分庭園が実際に当時の人々に *chār bāgh* あるいは *chahār bāgh* と呼ばれていたことは筆者の知る限り証明できておらず、疑問が残る。さらに、もしムガル朝下の四分庭園が本当に *chār bāgh* あるいは *chahār bāgh* と呼ばれていたのならば、バーブルがしばしば下馬したり、滞在した *chār bāgh* が、どういう経緯で様式化されるに至ったのか考慮する必要がある（バーブルの *chār bāgh* の例としてしばしば引き合いに出される有名な細密画「忠誠の庭園の造園を監督するバーブル」（ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館所蔵 IM 276-1913）は、すでにムガル朝インドで四分庭園様式の伝統が確立していたアクバル時代に制作されたものであるという事実を忘れてはならない）。実際のところ、バーブルがその日記で描く *chār bāgh* とフマーユーン廟など、ムガル朝下で見られる四分庭園とでは、その形態や機能、さらに象徴性においても大きな乖離が見られる。しかし、このような違いについては、いまだに十分な議論がなされていないのが現状である。従って、本論ではムガル朝時代の四分庭園を *chār bāgh* あるいは *chahār bāgh* と呼ぶことは留保しておきたい。ビーグリーはシャー・ジャハーン時代の人々によってタージ・マハルの四分庭園が *chahār bāgh* と呼ばれていたという事実を提示しないまま、その庭園を *chahār bāgh* と解釈し、*chahār bāgh* であるがゆえにこの庭園の楽園としてのシンボリズムを主張しているが、以上述べてきた点において、彼の議論には無理がある。4本の水路を持つ *chahār bāgh* を、コーランに描かれた4本の川が流れる楽園の象徴と見なす議論についての懷疑は、すでにウェスコート・ジュニアによって提起されている（Wescoat, Jr. 1989, pp.59-79; 1990, pp.106-116; 1992, pp.331-358）。*chahār bāgh* 論争の歴史及びその経緯については、山田 1997, pp.38-99 を参照のこと。
- 27) Asher 1992, pp.46, 213; Blair & Bloom 1994, p.280; Subtelny 1995, pp.31-34; 1997, pp.112-114 を参照。
- 28) Asher 1992, pp.106-107; Blair and Bloom 1994, pp.269-270, 276-278 を参照。

と同様に（Koch 1998, pp.144-146），その樂園は一般的な美辞麗句としての地上の樂園であり，必ずしも4本の川が流れる四分庭園が地上の樂園を表しているというシンボリズムに基づく考え方ではなかったことである。

シャー・ジャハーン自身は，庭園や宮殿に樂園のメタファーを組み入れたムガル建築の伝統を熟知していたが，彼の治世の後半，デリーに新しい王宮シャージャハーナーバードを建造した時，その私的ホールに，「もし地上に樂園があれば，それはここなり，それはここなり，それはここなり」（Asher 1992, p.197）という詩を刻印したように，自らの建造物を称えるのに樂園の修辞を使用するのを最も好んだ皇帝であった。すでに皇子の時代にカシュミールに四分庭園<sup>29)</sup>を建造し，即位後もカシュミールやラホールに四分庭園を作り，この皇帝が造園にも積極的だったことをうかがわせるが，樂園の修辞はこうした庭園ばかりか，彼の愛したカシュミールの地域にまで与えられ，庭園やその地域を樂園として称えることが一般的だったことを示している<sup>30)</sup>。

以上のことを勘案すると，シャー・ジャハーンは，タージ・マハルのプランを置く環境として，アフマド・ヤサヴィー廟のような閉鎖した空間よりも，彼が慣れ親しんだムガル朝の庭園様式の方を好んだと推察することは十分可能である。こうしてヤサヴィー廟のプランをベースにしたタージ・マハル・コンプレクスに，広大な四分庭園が付設され，それにともなって四分庭園は「地上の樂園」として称えられるに至った。同様に，庭園の中

央に設けられた泉水（*hawd*）も「*kawthar* の水で満たされている」と賛美された。タージ・マハルはヤサヴィー廟と同様の終末性が強いコーランの碑文装飾を取り入れながらも，ムガル建築には欠かせない樂園の象徴性も取り入れたのである。

## 結論

ビーグリーがタージ・マハルのプランを解釈する際に使用したイブン・アルアラビーのダイアグラムは，天国と地獄が等しく意味を持つ最後の審判の日の光景を視覚的に示したものであるが，ティムールが建立したアフマド・ヤサヴィー廟では個々の部屋の配置やその象徴性がダイアグラムの構図と著しく符号している。それゆえ，このティムール朝最初期の聖廟のプランには終末の日の象徴性が付与されていると推察できる。

ヤサヴィー廟では，墓室は一番北側の中央に置かれ，その両脇にはモスクと集会ホールが併設され，さらにムカルナス装飾や終末の日をテーマにするコーランの章句を用いた外壁の碑文装飾など，タージ・マハルと共に通ずる様式が見られるが，こうした特徴は従来のムガル庭園墓廟には見られないもので，タージ・マハルならではの「変則的」と見なされていた特徴だった。プランや壁面装飾における類似性に加え，ヤサヴィー廟はティムール自身によって設計された聖廟であり，シャー・ジャハーン自らはティムールに心酔し，またタージ・マハルの設計に深く関与していたので，このムガル皇帝がタージ・マハル・コ

29) コッホは，シャー・ジャハーンによって建造されたシャーリマール庭園の *Bāgh-i farahbakhsh* は現存する独立形式の四分庭園の一一番最初の例であるが，当時の歴史書はこの庭園を *chahār bāgh* とは呼んでいないと指摘している（Koch 1997, p.143）。

30) イナーヤト・ハーンの『シャー・ジャハーン・ナーマ』におけるカシュミールの記述は，その地域や庭園を地上の樂園とたたえる修辞の使用によって特徴づけられるが，これは現実的な観点からその特徴が列挙されているジャハーンギールのカシュミールの記述と著しい対比を成し，シャー・ジャハーンがいかに樂園の修辞を好んだかを示唆している（Ināyat Khān 1990 [ed.], pp.8-9, 124-127, 268, 330, 456; Jahangir 1978 [rppt.], pp.140ff of the second half）。

ンプレクスの建造にあたってヤサヴィー廟から様々な建築的なアイデアを引き出したことは想像に難くない。つまり、ヤサヴィー廟こそがタージ・マハル・コンプレクスの設計において基本的なコンセプトを提供した建造物であったと十分推論できるのである。シャー・ジャハーン時代に流布していたティムール伝説の中で、彼との係りが述べられていた特定のコーランの章句がタージ・マハルの碑文に採用されている事実もまた、シャー・ジャハーンのティムールへの心酔がこの白亜の靈廟の建築デザインを決定する上で大きな動機として看過できないことを示唆している。イスラーム建築史の文脈で見ると、墓廟の両脇にモスクと集会ホールを持つタージ・マハル・コンプレクスのプランは、決して特異ではないし、また独創的でもない。この墓廟コンプレクスにはヤサヴィー廟という先例があったのである。

その一方で、ムガル朝の建築文化の伝統もタージ・マハル・コンプレクスの形成に大きな役割を演じた。庭園もなく閉鎖した建造物

であるヤサヴィー廟のプランから範を取ったタージ・マハルに、四分庭園が導入され、楽園の修辞が与えられたのも、こうしたムガル建築の伝統によるものであった。何よりシャー・ジャハーン自身が、庭園文化を好み、楽園の修辞を愛する皇帝であった。こうしてタージ・マハルには、ヤサヴィー廟から引き継いだ終末思想に加え、ムガル庭園に顕著な楽園のメタファーが与えられることになった。言い換えれば、タージ・マハル・コンプレクスは、シャー・ジャハーンのティムールへの憧憬とムガル庭園に象徴される地上の楽園への憧憬が統合されたきわめて理想的な建物だったと見なすことができる。

多くの学者は、タージ・マハル・コンプレクスにおける庭園と墓廟の位置関係を重視して、この墓廟複合体の規範を探してきたが、墓廟の両脇にモスクと集会ホールが置かれた建築プランを手がかりとすると、異なる視点が開け、庭園の様式からタージ・マハル・コンプレクスの亀鑑を探そうとする学会の動向へのアンチテーゼとなり得るのである。

## 参考文献

- 荒 松雄 1997『インドーイスラム遺蹟研究——中世デリーの「壁モスク」群』未来社。  
 久保一之 1999「ティムール帝国」竺沙雅章監修・間野英二責任編集『アジアの歴史と文化8——中央アジア史』pp.130-149、同朋舎。  
 松本耿郎 1982「イブン・アルアラビー」日本イスラム協会・嶋田襄平・板垣雄三・佐藤次高監修『イスラム事典』pp.101-102、平凡社。  
 間野英二 2001『バーブル・ナーマの研究IV 研究篇——バーブルとその時代』松香堂。  
 山田篤美 1997『ムガル美術の旅』朝日新聞社。  
 ———. 1999「エンペラーズ・アルバム」、『季刊文化遺産』7号、pp.64-66.  
 ———. 2002「タージ・マハル」、日本イスラム協会監修『新イスラム事典』平凡社。  
 Affifi, A. E. 1938; rpt. 1964. *The Mystical Philosophy of Muhyid Din-Ibnul Arabi*. Lahore: Sh. Muhammad Ashraf.  
 Asher, Catherine B. 1992. *The New Cambridge History of India: Architecture of Mughal India*. Cambridge: Cambridge University Press.  
 Begley, Wayne E. 1979. "The Myth of the Taj Mahal and a New Theory of Its Symbolic Meaning." *The Art Bulletin*, 61, pp.7-37.  
 ———. 1996. "The Garden of the Taj Mahal: A Case Study of Mughal Architectural Planning and Symbolism." *Mughal Gardens: Sources, Places, Representations, and Prospects* (James L. Wescoat, Jr. and Joachim Wolschke-Bulmahn, eds.), pp.212-231, Washington, D.C.: Dumbarton Oaks.  
 Begley, W. E., and Z. A. Desai. 1989. *Taj Mahal: The Illumined Tomb*. Cambridge, Mass.: The Aga Khan Program for Islamic Architecture.  
 Blair, Sheila S. 1990. "Sufi Saints and Shrine Architecture in the Early Fourteenth Century." *Mugarnas*, 7,

- pp.35-49.
- Blair, Sheila S., and Jonathan M. Bloom. 1994. *The Art and Architecture of Islam 1250-1800*. New Haven and London: Yale University Press.
- Bloom, Jonathan, and Sheila Blair. 1997. *Islamic Arts*. London: Phaidon Press Limited.
- Brand, Michael. 1993. "Orthodoxy, Innovation, and Revival: Considerations of the Past in Imperial Mughal Tomb Architecture." *Muqarnas*, 10, pp.323-334.
- Golombok, Lisa. 1974. "The Cult of Saints and Shrine Architecture in the Fourteenth Century." *Near Eastern Numismatics, Iconography, Epigraphy and History* (Dickran K. Kouymjian, ed.), pp.419-430, Beirut: The American University of Beirut.
- . 1981. "From Tamerlane to the Taj Mahal." *Essays in Islamic Art and Architecture in Honor of Katharina Otto-Dorn* (Abbas Daneshvari, ed.), pp.43-49, Malibu: Undena Publications.
- . 1995. "The Gardens of Timur: New Perspectives." *Muqarnas*, 12, pp.137-147.
- Golombok, Lisa, and Donald Wilber. 1988. *The Timurid Architecture of Iran and Turan*, 2 vols. Princeton: Princeton University Press.
- Haq, M. Mahfuzul. 1939. "A Valuable Manuscript of the *Futūhāt-al Makkīyya*." *Islamic Culture*, 13, pp.215-221.
- Hoag, John. D. 1975; English version (paperback), 1987. *Islamic Architecture*. New York: Rizzoli.
- Horovitz, J., and L. Gardet. 1978. "KAWTHWAR." *Encyclopaedia of Islam, New Edition*. Leiden: E. J. Brill, vol.4, pp.805-806.
- Koch, Ebba. 1991. *Mughal Architecture: An Outline of Its History and Development*. Munich: Prestel-Verlag.
- . 1997. "The Mughal Waterfront Garden." *Gardens in the Time of the Great Muslim Empires: Theory and Design* (Attilio Petruccioli, ed.), pp.140-160, Leiden: Brill.
- . 1998. "Mughal Palace Gardens From Babur to Shah Jahan." *Muqarnas*, 15, pp.143-165.
- Komaroff, Linda. 1992. *The Golden Disk of Heaven: Metalwork of Timurid Iran*. Costa Mesa: Mazda Publishers.
- Landau, Rom. 1959. *The Philosophy of Ibn 'Arabi*. London: Ruskin House.
- Man'kovskia, L. Iu. 1985. "Towards the Study of Forms in Central Asian Architecture at the End of the Fourteenth Century: The Mausoleum of Khvāja Aḥmad Yasavī," trans. Lisa Golombok. *Iran*, 23, pp.109-127.
- Melikian-Chirvani, A. S. 1987. "The Lights of Sufi Shrines." *Islamic Art*, 2, pp.117-136.
- Nourmoukhammedov, Nagim-Bek. 1980. *The Mausoleum of Hodja Ahmed Yasevi*. Alma-Ata: Oner.
- Pinder-Wilson, Ralph. 1976. "The Persian Garden: *Bagh* and *Chahar Bagh*." *The Islamic Garden* (Elisabeth B. Macdougall and Richard Ettinghausen, eds.), pp.69-85, Washington, D.C.: Dumbarton Oaks.
- Richards, John F. 1993. *The New Cambridge History of India: The Mughal Empire*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Roemer, H. R. 1986. "Timūr in Iran." *The Cambridge History of Iran: The Timurid and Safavid Periods*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schrieke, B., and J. Horovitz. 1993. "MI'RĀDJ." *Encyclopaedia of Islam, New Edition*. Leiden: E. J. Brill, vol.7, pp.97-100.
- Subtelny, Maria E. 1993. "A Medieval Persian Agricultural Manual in Context: The *Irshād al-zirā'a* in Late Timurid and Early Safavid Khorasan." *Studia Iranica*, 22, pp.167-217.
- . 1995. "Mirak-i Sayyid Ghiyāṣ and the Timurid Tradition of Landscape Architecture." *Studia Iranica*, 24, pp.19-60.
- . 1997. "Agriculture and the Timurid *Chahārbāgh*: The Evidence from a Medieval Persian Agricultural Manual." *Gardens in the Time of the Great Muslim Empires: Theory and Design* (Attilio Petruccioli, ed.), pp.110-128, Leiden: Brill.
- Watt, W. Montogomery. 1960. "AKĪDA." *Encyclopaedia of Islam, New Edition*. Leiden: E. J. Brill, vol.1, pp.332-336.
- Welch, Stuart Cary, Annemarie Schimmel, Marie L. Swietochowski, and Wheeler M. Thackston. 1987. *The Emperors' Album: Images of Mughal India*. New York: The Metropolitan Museum of Art.
- Wensinck, A. J. 1932; rpt. 1979. *The Muslim Creed: Its Genesis and Historical Development*. New Delhi: Oriental Books Reprint Corporation.
- . 1971. "HAWD." *Encyclopaedia of Islam, New Edition*. Leiden: E. J. Brill, vol.3, p.286.
- Wescoat, Jr., James L. 1989. "Picturing an Early Mughal Garden." *Asian Art*, 2, 4, pp.59-79.
- . 1990. "Gardens of Invention and Exile: The Precarious Context of Mughal Garden Design

- During the Reign of Humayun (1530–1556)." *Journal of Garden History*, 10, 2, pp.106–116.
- . 1992. "Gardens versus Citadels: The Territorial Context of Early Mughal Gardens." *Garden History: Issues, Approaches, Methods*. (John Dixon Hunt, ed.), pp.331–358, Washington, D.C.: Dumbar-ton Oaks.
- Woods, John E. 1987. "The Rise of Timūrid Historiography." *Journal of Near Eastern Studies*, 46, 2, pp.81–108.

### 一次史料

- ザヒールッ・ディーン・ムハンマド・バーブル/間野英二訳注『バーブル・ナーマの研究Ⅲ 訳注——バー  
ブル・ナーマ』1998 松香堂。
- 藤本勝次責任編集『コーラン』1974 中央公論社。
- 'Abd al-Hamīd Lāhwārī. *Pādshāh-nāma* (Kabīr al-Dīn Aḥmad and 'Abd al-Rahīm, eds.), 2 vols., 1867–1868, Calcutta, extracted in Begley and Desai, *Taj Mahal*.
- Ibn al-'Arabī. *al-Futūhāt al-makkīya*, 4 vols., 1911, Cairo; rpt. 1968, Beirut: Dār Ṣādir.
- Ibn 'Arabshāh (Ahmed Ibn Arabshah). *Tamerlane or Timur the Great Amir* (J. H. Sanders, trans.), 1936; rpt. 1976, Lahore: Progressive Books.
- 'Ināyat Khān ('Inayat Khan). *The Shah Jahan Nama of 'Inayat Khan* (A. R. Fuller, trans; W. E. Begley and Z. A. Desai, eds. and comps.), 1990, Delhi, Oxford and New York: Oxford University Press.
- Jahāngīr. *The Tuzuk-i-Jahāngīr, or Memoirs of Jahāngīr* (Alexander Rogers, trans; Henry Beveridge, ed.), two volumes in one, 1909–1914; 3<sup>rd</sup> rpt. 1978, New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd.
- Mīr Abū Ṭālib Husaynī Turbatī. *The Mulfuzāt Timūrī, or Autobiographical Memoirs of the Moghul Emperor Timūr, written in the Jagtay Tūrkī Language, turned into Persian by Abu Talib Hüssynī, and translated into English by Major Charles Stewart, late Professor of Oriental Languages in the Honourable East India Company's College*. 1830, London; rpt. 1975, Lahore: Sangemeel Publications.
- . *Tuzak-i-Timuri: The Autobiography of Timur* (John Dowson ed. from H. M. Elliot, *The History of India as Told by its Own Historians*), 1871; rpt. 1974, Lahore: Sind Sagar Academy.
- Muhammad Ṣāliḥ Kambū. *'Amal-i ṣāliḥ, Shāh Jahān-nāma* (Ghulām Yazdānī, ed.), 3 vols., 1923–1946, Calcutta, extracted in Begley and Desai, *Taj Mahal*.
- Sharaf al-Dīn 'Ali Yazdī. *Zafar-nāma* (Muhammad 'Abbāsī, ed.), 2 vols., 1336/1957, Tehran: Amīr Kabir.
- Sharaf al-Dīn 'Ali Yazdī (Sharaf ud-Dīn 'Ali Yazdī). *Zafar-nāma* (A. Urubayev, ed.), 1972, Tashkent: Fan Publishing House of the Uzbek SSR.

## 参考——タージ・マハル・コンプレクス碑文におけるコーランの章句一覧

南門	
1. 第89章「夜明けの章」	南側アーチ
2. 第93章「朝の章」	北側アーチ
3. 第94章「拡張の章」	北側アーチ
4. 第95章「いちじくの章」	北側アーチ
墓廟パビリオン外壁	
5. 第36章「ヤー・スイーンの章」	アーチ(南, 西, 北, 東)
6. 第81章「つつみ隠すの章」	南扉
7. 第82章「裂けるの章」	西扉
8. 第84章「割れるの章」	北扉
9. 第98章「明証の章」	東扉
墓廟パビリオン内壁	
10. 第67章「主権の章」	内壁上方部分の水平フリーズ(南東, 東, 北東, 北, 北西, 西, 南西, 南)及びアーチ(南東)
11. 第48章「勝利の章」	アーチ(南東, 東, 北東, 北, 北西, 西)
12. 第76章「運命の章」	アーチ(西, 南西, 南)
13. 第39章「集団の章」第53~54節	アーチ(南)
ムムターズ・マハルの仮棺(墓廟パビリオン内部)	
14. 第41章「説明の章」第30節	上部
15. 第40章「信者の章」第7~8節	上部
16. 第83章「減量者どもの章」第22~28節	東側, 南側
17. 第41章「説明の章」第30節	南側, 西側
18. 第2章「雄牛の章」第286節	西側, 北側
19. 第59章「追放の章」第22節	北側
ムムターズ・マハルの仮棺(地下墓室)	
20. 第39章「集団の章」第53節	上部
21. 第3章「イムラーン家の章」第185節	上部
22. 第23章「信じる人々の章」第118節	上部
23. 第59章「追放の章」第22節	北側
24. ——「99の神の美名」	東側, 西側
モスク	
25. 第91章「太陽の章」	ミフラーブの周囲
26. 第112章「真髓の章」	西側外壁の二つのメダイヨン

(出典: Wayne E. Begley, "The Myth of the Taj Mahal and a New Theory of Its Symbolic Meaning." *The Art Bulletin*, 61, p.36.)

【論 文】

## 「アレクサンドリアの虐殺」再考

勝 沼 聰

(東京大学大学院)

### The “Alexandria Massacre” Reconsidered

KATSUNUMA, Satoshi

Graduate School, the University of Tokyo

The “Alexandria Massacre” is an armed clash between Egyptian natives and Europeans, which occurred in Alexandria on June 11, 1882, during the period of the ‘Urābī movement (1881–1882), the first “nationalistic movement” in modern Egypt.

The incident was exploited by the British government as a pretext for armed intervention against the ‘Urābī Movement. Moreover, for the sake of legitimizing their action, the British government and Khedival government arbitrarily claimed that the incident had been instigated by Ahmad ‘Urābī, the leader of the ‘Urābī Movement, and regarded it as a massacre of Europeans by Egyptian natives. In that time, their view was universally accepted among the public. Later on, Egyptian nationalists and some British sympathizers of the ‘Urābī Movement each stated their own views against it. The former claimed that the instigator of the incident was the British government, and the latter claimed that it was Khedive. But, neither of their views have reasonable grounds.

The main purpose of this paper is to reconsider the “Alexandria Massacre” by analyzing the process. In our reexamination, we have to restrict our analysis to the form of Egyptian natives’ action on account of limitations in the historical sources on which we are based.

All contemporaneous views about the incident regarded it as a massacre. But, was it actually a massacre? Certainly, Europeans shot and killed many Egyptian natives at the place where the incident started, and Egyptian natives also killed many Europeans near the headquarters of the city police. Analyzing the process of the incident, we can classify Egyptian natives’ actions into two types: attacking the Europeans and looting their shops. But, we can conclude that their main purpose was not the former, but the latter. The reasons are as follow: Firstly, the tumult did not spread to the suburbs in which the majority of the Europeans in Alexandria made an excursion on that day. Secondly, Egyptian natives did not attack the Europeans’ houses, but only their shops.

---

**Keywords:** ‘Urābī Movement, Alexandria, Urban riot, Historiography, Popular Movement  
キーワード：オラービー運動，アレクサンドリア，都市騒乱，歴史叙述，民衆運動

Based on these facts, we can conclude that they were hostile to Europeans' political and economic dominance in Alexandria at that time. Certainly, their political consciousness was still primitive, for they did not attack foreign consulates. But, regarding the incident just as a massacre ignores their real motive.

In the course of the incident, the 'asākir al-mustahfażin (Para-military police) played a major role in instigating Egyptian natives. How could the 'asākir al-mustahfażin exert such influence over them? Firstly, they had a close relationship with the army. During the period of the 'Urābi movement, the army was the only representative of the Egyptian people. Egyptian natives regarded them as part of the army. Secondly, they also had strong ties with the Egyptian people in Alexandria. For example, when someone killed a member of the 'asākir al-mustahfażin in the street, many Egyptian people participated in the demonstration led by them to protest this murder.

As a conclusion, we can point out that the Egyptian natives were connected to the 'Urābi Movement through the leadership of the 'asākir al-mustahfażin in the course of the incident.

## はじめに

### 第一節 事件の背景

### 第二節 「調査委員会記録」にみる事件の 経過

### 第三節 「虐殺」言説の形成

## 第四節 「虐殺」言説の再検討

### 第五節 オラービー運動における 6 月 11 日

#### 事件

#### おわりに

## はじめに

エジプトにおける最初の「民族主義運動」とされるオラービー運動 *ath-Thawra al-'Urābiya* のさなかの1882年6月11日（ヒジュラ暦1299年ラジャブ月25日），地中海に面したエジプト第二の都市アレクサンドリアで，現地住民とヨーロッパ系住民との間に騒乱が発生した。この事件で多数のヨーロッパ人が死傷し，エジプト在住の外国人の生命と財産が危険にさらされたことが，インドへの主要航路であるスエズ運河の安全な航行が脅かされていたことと共に，イギリスにエジプトへの軍事介入

を決断させた要因であったと長らく見なされてきた<sup>1)</sup>。

しかし，1970年代以降に発表された，当時のイギリスの対エジプト政策についての諸研究は，イギリスは軍事介入の口実としてこの事件を利用したに過ぎず，エジプトにおける自国の金融上の権益確保がその主な動機であったことを明らかにしている<sup>2)</sup>。

当時，イギリス側はこの事件を「アレクサンドリアの虐殺」(Alexandria Massacre)，あるいは「アレクサンドリア暴動」(Alexandria Riot)と呼び，「エジプト人によるヨーロッパ人の虐殺」であるとした。しかし，上

1) 代表的なものとして，Robinson & Gallagher 1961, pp.76-121を参照のこと。

2) Schölich 1976; Galbraith & Sayyid-Marsot 1978; Hopkins 1986などを参照のこと。これらの諸研究は同時に，当時スエズ運河の航行の安全が脅かされていたわけではないことや，喜望峰経由の航路がインドへの主要な航路として利用されていたことも指摘している。

記のような事実は、この事件に対する新たな解釈の提示を要請するであろう。なぜなら、イギリスがこの事件を口実として利用していたことが明らかになった以上、彼らによる事件についての言説を無批判に受容することはもはや不可能であるからである。もちろん、この事件に関する言説は、イギリス側によるものだけではなく、例えば、エジプト側によるものもある。しかし、彼らによる言説もまたこの事件を呼ぶ際にはイギリス側と同様、「アレクサンドリアの虐殺」(Madhbaha al-Iskandariya)という呼称を採用している。一体、彼らはどのような意味を込めてこの事件を「虐殺」と呼んでいるのであろうか。さらに、彼らの言説には受容しうる妥当性があるだろうか。いずれにせよ、以上のような点を検討したうえでこの事件を再評価する作業は、現在にいたるまで行われていない。

本稿は、事件にまつわる様々な言説の批判的な再検討と、事件の過程の分析を通して、その作業を行おうとする試みである。そのためまず、事件の経過を可能な限り詳細に再現することを試みる。そして、事件に関する諸言説の内容を再検討し、それらが事件を「虐殺」という定義のなかに押し込め、事件に参加した民衆の行動が、自発的かつ彼ら独自の合理性に基づくものであることを否定してきた点を明らかにする。そのうえで、この事件をオラービー運動のなかに位置づけることを試みていく。具体的には、事件に参加した民衆の行動形態や彼らが事件へ参加した経緯の分析を通して、事件とオラービー運動との新たな接点を明らかにしていく。しかし、その前にはまずは従来の研究を回顧する必要があるだろう。

管見の限りでは、この事件はオラービー運

動研究のなかで付隨的に言及されることが多く、それについての専論は数が少ない。さらには、チェンバレン M. E. Chamberlain などによる従来の研究の主な関心は、この「虐殺」の主謀者の特定にあった<sup>3)</sup>。そして、その「容疑者」として、オラービー運動の指導者アフマド・オラービー Ahmad 'Urabi (1840/41-1911年) や当時のヘディーウ khidiw (エジプト副王の称号) であったタウフィーク Tawfiq (位1879-1892年)、イギリス政府などがあげられてきた。また、主謀者の特定にのみ終始していたため、事件自体に詳細な分析が加えられることは少なかった。

そうしたなか、1989年以降にコール J. R. I. Cole によって発表された一連の研究においては<sup>4)</sup>、この事件は中東地域の都市騒乱の過程における名望家 (a'yān, notables) 層の指導的役割を強調するホーラーニー A. Hourani の主張<sup>5)</sup>に対する反論のための一事例として再検討された。コールは事件に関与したとして逮捕された人々の名簿に依拠しながら、この事件に一般の民衆が参加する際に、職能集団や街区内の結合関係が大きな役割を果たしたと結論づけている<sup>6)</sup>。

コールの研究は、主謀者の特定に拘泥していた従来の研究の限界を打破し、本来事件の中心的な存在であるはずの参加者たちに目を向けたという点で画期的なものであった。しかし、その一方で彼の研究もまた事件の経過や参加者の行動形態についての言及が断片的であるうえ、その分析も不十分であり、読者にその全体像の把握を困難なものとしている。また、事件の経過を詳細に再現する必要性自体、彼はあまり認めていないようである<sup>7)</sup>。

さらに、こうした政治的に多大な影響を及ぼした事件を扱った史料には、通常以上に恣

3) Chamberlain 1978.

4) Cole 1989; Cole 1993.

5) これについては、Hourani 1968を参照のこと。

6) Cole 1989, pp.123-127.

7) Cole 1989, p.121.

意的な解釈や事実の歪曲が行われている可能性を考慮しなければならないが、従来の研究と同様、彼はそれにほとんど注意を払うことなく、事件参加者の行動の主体性だけを強調している。しかし、この問題点を看過すれば、自らが依拠する史料自体の主張に無意識のうちに同調してしまいかねず、その危険性は極めて大きい。事件発生当初にイギリス政府がこの事件を「オラービーらが計画したヨーロッパ人の虐殺事件」であると主張したように、主謀者の特定に拘泥し、事件参加者の主体性への認識が欠落していることは、実は学術研究に限ったことではなかった。ある歴史的事実に対する解釈の政治的利用、換言すれば権力による記憶の占有は、彼らが、そして本稿が依拠する史料自体にすでに内在している問題である。そのことを析出し、認識してはじめて、この事件に対する従来とは異なる知見の提出が可能になるものと考える。

最後に、本稿で主に依拠する史料について触れておこう。未刊行史料を除いてもこの事件に言及している史料は実に数が多く、枚挙にいとまがないが、本稿では『エジプト人のためのエジプト』と題したオラービー運動についての記録に主に依拠する<sup>8)</sup>。この記録は、当時アレクサンドリアにおいて演劇や言論の分野で活動していたペイルート出身のマロン

派キリスト教徒であったサリーム・ハリール・アンナッカーシュ Salīm Khalil an-Naqqāsh(1850-1884年)<sup>9)</sup>という人物によって1884年に出版されたものである。彼の当初の計画によれば全9巻構成であったが、結局4-9巻の計6巻のみ出版されたにとどまった。前半3巻は1879年から1884年までのオラービー運動に関する年代記的構成になっているが、本稿で重視するのは、後半3巻に収録されているオラービー運動に関与した人々に対する尋問記録とその報告書である。これらは、現在ではカイロの国立文書館 Dār al-Wathā'iq al-Qawmiyya に所蔵されている公文書から彼が独自に取捨選択して出版したものである<sup>10)</sup>。この部分には、「アレクサンドリアの虐殺」に関する調査委員会<sup>11)</sup>によって主に行われた事件関係者に対する尋問記録や調査報告書（以下では「調査委員会記録」と記す）なども含まれている。その内容から、「アレクサンドリアの虐殺」に関する刊行史料としては第一級のものと呼んでも過言ではないだろう。また、この事件に対するイギリス側の認識や対応については、英國議会資料（British Parliamentary Papers）に主に依拠する<sup>12)</sup>。この史料には、「調査委員会記録」とは別個の事件に関する証言、主に当時イギリスの支配下にあったマルタ人<sup>13)</sup>を中心としたヨーロッパ系住民の証

- 
- 8) Naqqāsh 1884. この史料の性格について詳しくは、Jami'i 1982, pp.199-201; Crabbs 1984, pp.188-191などを参照のこと。
- 9) 彼について詳しくは、以下を参照のこと。The Encyclopaedia of Islam New Edition (abbr. EI<sup>2</sup>), s.v. "SALĪM B.KHALİL AL-NAKKĀSH"; Sadgrove 1996, pp.126-133; Nu'mān n.d., pp.117-122.
- 10) Jami'i 1982, p.199.
- 11) これは、オラービー運動鎮圧後の9月19日（ズー・アルカアダ月6日）付のヘディーウの勅令によって、1882年6月11日および7月11日から16日までの時期にアレクサンドリア港で発生した窃盗、殺人、暴行、略奪、放火などの諸事案について調査し、事実を究明するために設置されたアレクサンドリア特別委員会 (qūmisūn makhṣūs bi-al-Iskandariya) のことである。
- 12) 「英國議会資料」とは、一般的には上院 House of Lords および下院 House of Commons 両院に提出され、会期毎に編集・出版された文書群 (sessional papers) のことを指す。これらの文書には青い表紙が付されて刊行されていたことから、別名ブルーブック (Blue Book) とも称された。本稿では、そのうち下院提出の文書を利用する。詳しくは、マサイアス 2000; 竹島 1989などを参照のこと。
- 13) 1868年にはマルタ島から海外へ移住する人々の7割近くがエジプトへ移住していた。また、1882年当時エジプトに約7千人のマルタ人が居住していたが、彼らの多くがこの事件の後、マルタ島へ向けて出国している。(Price 1954, p.137)

言が収録されている。上記の二つの史料に加えて、同時代人の回想録やシャールービーム Mīkhā'il Shārūbīm (1861-1920年)による同時代のアラビア語年代記<sup>14)</sup>なども補助史料として参照する。

ところで、「調査委員会記録」に収録されている「アレクサンドリアの虐殺」に関する証言の多くは、オラービー運動の指導層を除くと、主に市内の治安維持の関係者によるものである。このこと自体、後述するような調査を行った側の（あるいは、「調査委員会記録」の編者であるナッカーシュ）意図を示しているとも考えられるが、いずれにせよ、この事件に関与した人々の一部による証言しか収録されていないのは事実である。また、そもそもこの記録が、その原本と完全に対応しているかどうかの確証が無いという問題もある<sup>15)</sup>。さらに、ナッカーシュが原本から自著に収録するにあたっての選択基準も不明であり、重要な証言が欠落している可能性もある。以上のような問題点を解決するためには、原本との照合が不可欠であり、これは将来の課題である。

しかし、そうした問題点を抱えてはいるものの、英國議会資料がイギリス側の意図に沿った内容の証言のみを収録しているのに対して、「調査委員会記録」にはその内容が必ずしも調査する側の意図に合致しない証言も収録されており、貴重な史料といえる。換言すれば、裁く側の立場に立つ人々による一方的な事件の記録ではなく、彼らと裁かれる側の人々との間で、時には事実認識において矛盾や緊張関係が生じるような双方向的な記録—もちろん、そこでなされた証言がまったく

無拘束的で純粋な発話の形態ではないことは認めざるをえないが—であることが、「調査委員会記録」がこの事件に関する他の諸史料と異なる決定的な特徴であって、主要な史料として利用するに値するものであると考える。

ところで、ここまでこの事件を「アレクサンドリアの虐殺」と呼んできた。この呼称は現在の学術研究においても採用されている<sup>16)</sup>。しかし、すでに指摘したように、この呼称には、この事件を「エジプト人によるヨーロッパ人の虐殺」であるとする認識が含意されている<sup>17)</sup>。よって、以下ではこの呼称を用いず、代わりに事件が起きた日付をとって「6月11日事件」と呼んでいくことにする。

## 第一節 事件の背景

当初、陸軍大佐オラービーらによる運動は、外来のトルコ・チャルケス系の特権階層であるザワート層 dhawāt が主要ポストを独占していた当時の軍隊内における「エジプト人」将兵の待遇改善を要求する運動として開始された。しかし、1881年9月には彼らの運動は、当時のヘディーウであったタウフィークに対し、内閣の罷免と憲法の制定、軍隊の増員という三つの要求を提示するまでにいたった。その結果、当時の内閣は罷免され、新内閣が発足してさらに代議員議会 majlis ash-shūrā an-nuwwāb も再開され、憲法草案の作成作業が開始されることとなった。ここにいたって、オラービー運動は1876年のエジプト国家財政の破綻以来、英仏両国が二元管理体制を介して行っていた内政干渉と、ヘディーウを頂点とする国内の専制的体制という二重の從

14) Shārūbīm 1898-1900. この史料について詳しくは、Crabbs 1984, pp.130-145を参照のこと。

15) ナッカーシュは、字句を違えずに文書をそのまま収録したと述べている。(Naqqāsh 1884, vol.7, p.3)

16) 例えば、前述のチェンバレンやエジプト人研究者のジャミーイー 'Abd al-Mun'im ad-Dasūqī al-Jamī'i などは、この呼称を使用している。

17) 例えば、エジプト近代史研究者のムハンマド・サーリム Laṭīfa Muḥammad Sālim もこうした危険性を意識してか、この呼称を用いず、代わりに「アレクサンドリア事件」(ḥādītha al-Iskandariya)という呼称を用いている。(Muhammad Sālim 1981, p.223)

属状況に対する抵抗として、全国的規模で展開する運動へと発展することとなった<sup>18)</sup>。一方、オラービー自身は、1882年2月に成立したマフムード・サミー・アルバールーディー *Mahmūd Sāmī al-Bārūdī* を首班とする内閣に、軍事大臣として入閣した。

そうしたなか、エジプト最大の外国人人口を抱えるアレクサンドリアでは、現地住民とヨーロッパ系住民の間で緊張が高まっていた。また、英仏両国が革命政権に圧力をかけるために派遣した艦隊が1882年5月20日にアレクサンドリア沖に到着したこと、こうした状況に拍車をかけていた。しかし、上述の緊張関係はこの時期に初めて表面化したものではなく、19世紀の中葉にまでさかのぼることができる。

アレクサンドリアは、19世紀において急速な発展を遂げた都市であった。6月11日事件当時の1882年には23万人を超える人口を擁していたが、19世紀の初頭にはわずか人口8千人ほどの港町に過ぎず、外国人の人口も百人に満たなかった<sup>19)</sup>。地中海交易上の重要拠点としての地位を完全には喪失していなかったものの、むしろ当時のナイルデルタ西部地域の中心は、その名のとおりナイル河のロゼッタ支流の河口に位置していたロゼッタ *Rashīd* であった。しかし、1807年にアレクサンドリアが当時のエジプト総督 *wāli* であったムハンマド・アリー *Muhammad ‘Ali*（位1806-1848年）の統治下に入ると、同市は対外貿易の窓口として整備され、急速な発展を開始する。そして、これ以降アレクサンドリアには、内外から多くの人口が流入することとなる。

ムハンマド・アリー期におけるアレクサン

ドリアの人口増加の特徴に関しては、1848年に行われたセンサスに詳しい情報がある。それによると、1848年のアレクサンドリアの総人口は10万4189人であったが、そのうち、以前からアレクサンドリアに居住していた者（ahl al-Iskandariya）とされる人口はわずか2万3千人ほどであるのに対し、移住者（aghrib）とされる人口は8万人を超えていた。しかも、そのうち国内からの移住者が6万8千人と、エジプト国内からの流入人口が大きな比率を占めており、地域的には、下エジプトからの流入が多い<sup>20)</sup>。その理由としては、当時はアレクサンドリアの都市建設が進行していた時期であり、建設・交通・運輸といった部門における労働力需要が高まっていたことが指摘できるだろう<sup>21)</sup>。

一方、アレクサンドリアにおけるヨーロッパ系住民およびその庇護民（protégé）の人口も増加傾向にあったが、その数はいまだ5千人ほどにとどまっていた。彼らのほかにオスマン帝国諸地域からの移住者を含めても1万2千人ほどに過ぎず、総人口に占める割合は11%ほどだった。むしろ、ヨーロッパ系住民の増加は、19世紀中葉以降に顕著にみられる現象であった。1848年に5千人足らずであった彼らの人口は、1882年には5万人ほどに増加しており、総人口に占める割合も21%とほぼ倍増している。彼らは、主にこの時期に新たに開発された新興地区のマンシーヤ *al-Manshiya* 区やラッバーン *al-Labbān* 区などに居住し<sup>22)</sup>、特にラッバーン区にはギリシア、イタリア、マルタ系の移民が多く居住していたという<sup>23)</sup>。時期はやや下るが、1897年センサスをもとに作成した表1が示しているように、この二つの区に隣接するアッター

18) 板垣 1963, p.242.

19) Reimer 1988, p.532.

20) Reimer 1997, pp.93-94.

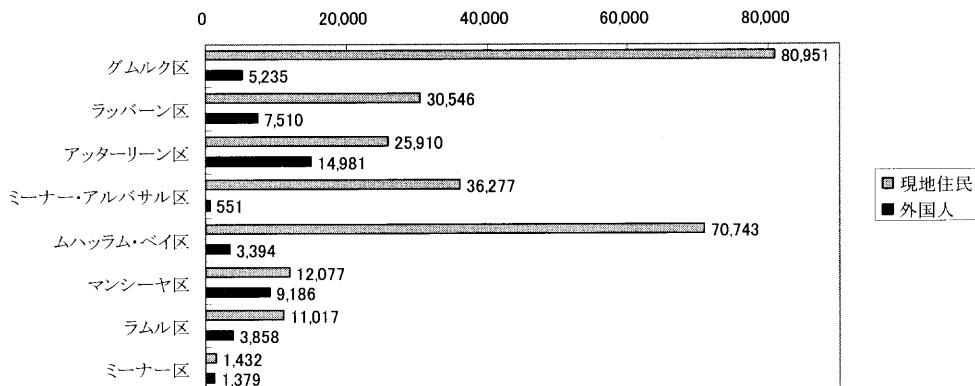
21) Reimer 1997, p.95.

22) 以下、アレクサンドリアの行政単位が頻出するが、「区」は qism の訛語である。

23) Reimer 1997, pp.96-97.

表1：19世紀末のアレクサンドリアにおける現地住民と外国人の人口比率

出典：Gouvernement Égyptien 1898, pp.72-73より筆者作成。



リーン al-Attārin 区を加えた3区が、アレクサンドリアにおいてその居住者に占めるヨーロッパ系住民の割合の特に高い地域であった。

このヨーロッパ系住民の増加の背景には、当時アメリカ南北戦争の影響による世界的な綿花不足に伴うエジプト産綿花の輸出増によるエジプト経済の活性化があった。その好景気に吸い寄せられるかたちで、ヨーロッパ、とくにイタリアなど南欧地域からの人口流入が加速していった。

同時に19世紀中葉以降には、国内からの人口流入の傾向についても変化がみられた。それまでは下エジプトからの出身者が主であったのに対して、上エジプトやスーサン、ヌビアなどからの出身者がその大部分を占めるようになつた<sup>24)</sup>。その背景としては、この時期までに綿花栽培が普及し、それに付随して通年灌漑体系の整備が行われた下エジプトに対

し、その整備が遅れ、依然としてサトウキビなど冬作中心の作付け体系を維持していた上エジプトやスーサン、そしてヌビア地方などが労働力の供給地としての重要性を増していくことが指摘できよう<sup>25)</sup>。さらに、カイロとアレクサンドリアの住民に対しては徴兵免除の特権が与えられていたことも<sup>26)</sup>、人口流入が増加した要因の一つであったろう。

この時期のアレクサンドリアの急激な人口の増加は、現地住民とヨーロッパ系住民が日常的に接触する機会を拡大させ、それまではほとんど観察されなかつた両者の間での深刻な対立が発生するようになる<sup>27)</sup>。しかし、それに対してエジプト側の警察組織は領事裁判権で保護されたヨーロッパ系住民に対処することができなかつた<sup>28)</sup>。一方、各国の領事館も一部の自国民の行動には苦慮しており、ついには1868年、警察組織にヨーロッパ人が参

24) Reimer 1997, pp.159-160.

25) エジプトにおける綿花経済の発展と国内労働市場の再編との関係については、長沢 1992を参照のこと。

26) 両市の住民に徴兵免除の特権が与えられた時期については、ムハンマド・アリー期であるとする説（Reimer 1997, p.95）とイスマーイール Ismā'il（位1863-1879年）期であるとする説（Toledano 1990, p.183）がある。

27) Cole 1993, pp.194-204.

28) Reimer 1997, pp.141-144.

画することになった<sup>29)</sup>。

当時のアレクサンドリアでは、警察(būlis)のほかに憲兵隊('asākir al-mustahfazīn)と呼ばれる組織が治安維持を担当していた<sup>30)</sup>。両者は、直接的にはアレクサンドリア市警察長官(ma'mūr ad-dabīya)の指揮下に置かれていた。また、憲兵隊はカイロにも配備され、兵力は合計で1500人であった<sup>31)</sup>。「調査委員会記録」によれば、「彼らは我々を敵視しており、我々が西欧人たち(ifranj)と通じているとみなしている」という警察の曹長(bāshjāwīsh)<sup>32)</sup>による証言があるように<sup>33)</sup>、共に市内の治安維持を担当していた警察とは敵対していた一面があったことが推測される。このこととも関係すると思われるが、1868年以降は外国人も多く参画していた警察に対して、憲兵隊はエジプト出身者のみで構成されていたようである。また、彼らは市内の巡回を任務としていた巡視隊('asākir ad-dawwārīn)とは異なり、通常は市内の各警察署<sup>34)</sup>内に待機していたという<sup>35)</sup>。おそらく、通常の警察力のみでは対応できない事態に対処することを主な任務とした組織であったと考えられる。

また、彼らは軍隊を人材の供給源とし、軍隊と密接な関係にあった組織であった。「調査委員会記録」に登場する憲兵隊員たちの証言によれば、将校、兵士ともに彼らの多くが軍隊の出身であった<sup>36)</sup>。さらに、両者の関係はそれだけにとどまらず、憲兵隊から軍へ人材が流れることもあった<sup>37)</sup>。そして、それは特別なことではなく、しばしば行われていたようである。また、アレクサンドリアに駐屯していた軍の首脳の一人であるスライマーン・ダーウード Sulaymān Dāwūd という人物は、自らをアレクサンドリアにおけるもう一人のオラービーとみなしていて、軍の連隊に對してだけではなく、憲兵隊にも大きな影響力(sulta)を保持していた、という憲兵隊の大尉(yūzbāshī)による証言もある<sup>38)</sup>。これもまた、両者の強い関係を示す一例であろう。

両者の関係を物語るものとして、以下のような事例もある。英仏両国は、前述した艦隊の到着後の5月25日にバールーディー内閣の罷免とオラービーらの国外追放を要求したが、ヘディーウがこれを受諾したために27日に内閣は総辞職に追い込まれた。それに対し、全

29) Reimer 1997, p.144.

30) 'asākir al-mustahfazīn は英國議会資料中では "gendarmes" と訳されている。 "gendarmes" とは治安維持を担当する軍事組織のことである。後述するように、その組織としての性格上、彼らは "gendarmes" に近い存在ではあるので、とりあえず以下では仮に "gendarmes" の日本語訳である「憲兵隊」と表記する。

31) Cole 1993, p.215.

32) これ以後、文中に軍隊および警察組織の階級名が頻出するが、その訳語は板垣 1963, p.284の階級表に基づいている。

33) Naqqāsh 1884, vol.9, p.701.

34) レイマーによれば、イスマーイールの時代にはアレクサンドリア市内の18ヵ所に警察署が設置されていた。(Reimer 1997, p.142)

35) Naqqāsh 1884, vol.9, p.675.

36) 例えば、憲兵隊に所属する以前に第六歩兵連隊に所属していた少尉(Naqqāsh 1884, vol.7, p.291)や、ギーザ県で徴兵業務を担当していた中佐(Naqqāsh 1884, vol.9, p.919)やスーサン連隊に所属していた高級副官(Naqqāsh 1884, vol.9, p.646)などの例がある。また、6月11日事件の数日前には、アレクサンドリアに駐屯していた第五・第六両歩兵連隊から憲兵隊に対して、兵士が補充されていたという。(Naqqāsh 1884, vol.8, p.421)

37) 例えば、事件後オラービーの指示によって、ロゼッタに駐屯する第七連隊に異動した憲兵隊少佐の例がある(Naqqāsh 1884, vol.9, pp.679-680)。オラービー自身によれば、憲兵隊は軍事大臣の管轄外であったという。(‘Urābi 1953, vol.2, p.67)

38) Naqqāsh 1884, vol.9, p.658.

国的規模でこれに反対する運動が発生するが、アレクサンドリアでも駐屯軍と憲兵隊、さらに警察を加えた三者による反対運動が起きている。彼らは、28日付でオラービーの辞任に反対する電報をカイロのタウフィークに送っているが<sup>39)</sup>、以下がその文面である。

……我々は以下のことを申し上げます。ヘディーウ閣下（hadra al-khidīwiya）によって、[バールーディー] 内閣の辞職と陸海軍の指揮権が〔直接、ヘディーウ〕閣下に属することになったことを表明する電報が発せられました。それに対し我々は、以下のことを電報によって閣下（janāb-hu）と代議員議会議長殿（sa‘āda ra’is an-nuwwāb）に対して申し上げました。我々は、[オラービー] 閣下（sa‘ādat-hu）によって法規とシャリーア（al-qānūn wa ash-shari‘a al-muhammadiya）に反することがなされていないことに基づき、我らが軍事大臣閣下であるアフマド・パシャ・オラービーの辞任を受け入れません。また、我々には彼の辞任によって起こる事態に対し、あらゆる抵抗を行う用意があります。もし12時間以内に〔この要求に対する返答の〕電報を我々が受け取らないときは、

[それによって] 起こるであろうことに対する我々は責任を持ちません。（以下略）<sup>40)</sup>

そして、この電報の末尾には、駐屯軍の幹部らと共に憲兵隊の幹部も署名している。ここからは、憲兵隊が軍隊と単に密接な関係を有していただけでなく、オラービー運動を強く支持していたことがうかがわれる。

ともかく、こうした反対運動が展開された結果、タウフィークは決定をくつがえし、結局28日にオラービーは軍事大臣に再任されることになる。

一方、6月7日にはオラービー派とヘディーウ派が対立している事態を開拓するため、オスマン帝国政府から派遣されたデルヴィッシュ・パシャ Derviṣ Paşa 率いる使節団がアレクサンドリアに到着した<sup>41)</sup>。すでに不穏な状況下にあった同市では、現地住民とヨーロッパ系住民との間で小規模な衝突などが頻発していたため、アレクサンドリア駐在イギリス領事クックソン C. Cookson の提案によってヨーロッパ系住民の武装化が図られ<sup>42)</sup>、彼らに対して火器が供給された<sup>43)</sup>。

こうした状況のなかで、6月11日はやってきた。

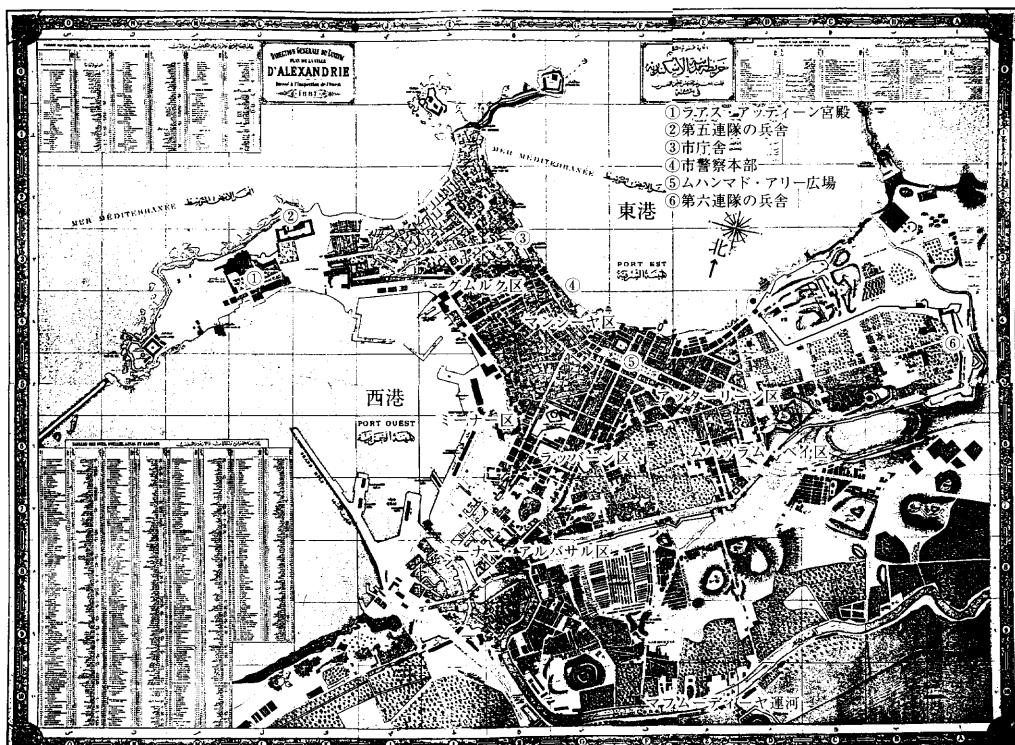
39) Naqqāsh 1884, vol.4, p.276; Mr. Cookson to Sir E. Malet, 28 May 1882, Inclosure 1 in Mr. Cookson to Sir E. Malet, 1 June 1882, no.64, *House of Commons Sessional Papers* (abbr.HCSP), Egypt no.11 (1882), vol.82, Command Paper (abbr.C.) 3295.

40) Naqqāsh 1884, vol.9, pp.922-923.

41) ヘディーウを頂点とするエジプトの現体制を維持すること、宗主国として外国のエジプトへの干渉を排除することが当時のオスマン帝国政府のオラービー運動に対する基本姿勢であった。帝国政府のオラービー運動への対応について詳しくは、Deringil 1988を参照のこと。

42) Consul Cookson to Sir E. Malet, 6 June 1882, Inclosure 4 in Consul Cookson to Earl Granville, 6 June 1882, no.126, HCSP, Egypt no.11 (1882), vol.82, C.3295. 当時のエジプト駐在イギリス総領事マレット E. Malet はその計画の実行に反対していた。(Sir E. Malet to Mr. Cookson, 11 June 1882, Inclosure 2 in Mr. Cookson to Earl Granville, 20 June, 1882, no.22, HCSP, Egypt no.17 (1882), vol.83, C.3391)

43) Chamberlain 1977, p.18.



図：19世紀後半のアレクサンドリア

(Jondet 1921, pl.XLVII をもとに筆者作成。) ※ラムル区は地図外、東方向の海岸沿いに位置

## 第二節 「調査委員会記録」にみる事件の経過

以下では、「調査委員会記録」に依拠しつつ、6月11日事件とその後の経過を可能な限り詳細に再構成する。しかし、「調査委員会記録」では、一つの事象に関して証言者によって見解が異なっていることが多い。よって、ここで叙述される事件の経過は、基本的に諸証言者の間で見解の相違が無い事象のみから

構成されていることを指摘しておきたい。

6月11日の午後、ラッバーン区にあるカフワ・アルキザーズ Qahwa al-Qizáz 地区<sup>44)</sup>で現地住民とマルタ人との間で諍いが起きた。この諍いが、6月11日事件発生の契機となつたとされている。その顛末に関しては異説もあるが<sup>45)</sup>、その諍いの一方の当事者である現地住民のサイイド・サラーム as-Sayyid Salām の供述によれば以下のとおりであった<sup>46)</sup>。

- 44) 1897年センサスではラッバーン区内の地名としてこの名称が示されている。アレクサンドリアの行政区画に関しては、Gouvernement Égyptien 1898, vol.1, pp.64-71を参照のこと。
- 45) Rāfi‘i 1966や Chamberlain 1978や Jamī‘i 1982といった従来の研究では、この事件は現地住民のロバ追いと彼の客であるマルタ人との間で起きた料金をめぐる諍いで、そのマルタ人がロバ追いを刃物で怪我を負わせたのが6月11日事件発生の契機であるとされているが、これには明確な根拠が無い。ただし、「調査委員会記録」において、事件の契機となったのが現地住民のロバ追いとマルタ人の間の諍いであったという噂が事件当時流れていたことは指摘されている。(Naqqāsh 1884, vol.9, p.682)
- 46) Naqqāsh 1884, vol.9, p.763.

彼は、サイイド・サーリム・アルアッジャーン as-Sayyid Sālim al-'Ajān というその通称のとおり、パン粉練り職人 ('ajjān) であった。その彼が、昼過ぎに勤め先のパン焼き釜 (furn) を出て、煙草を半ウーキーヤ (niṣf ūqīya=約19 g) 買うためにカフワ・アルキザーズ地区のあたりまでやって来ると、二人のマルタ人が見知らぬ一人のムスリムに魚を売ろうとしているのを見かけた。しかし、どうやらそのムスリムにはマルタ人たちが持ってきた魚が気に入らなかつたらしく、それを彼らに返そうとした。すると、その二人のマルタ人たちは彼に殴打 (dārb) を加えた。そこで、サイイドは彼らのうちの一人に対しこう言った。「私の懐から一キルシュ (qirsh) 取りなさい。彼を放免するのがいちばんいいですよ。そんなことはしてはいけません (ḥarām 'alaika)。」すると、そのマルタ人はサイイドに対して彼の信仰 (dīn) を罵り、自分の店に入ってナイフ (sakīn) を持ち出すとそれで彼の左腿を刺した。そして彼は意識を失って倒れた。一方、そのマルタ人は近所の他のマルタ人が居住する家屋に逃げ込んだ。

サイイド自身の供述によれば、彼はその後近くのラッバーン区警察署 (qaraqūl al-Labbān) に運ばれ、そこではしばらく意識を失っていた<sup>47)</sup>。よって、その後の経緯については別の人々の供述によって補うことにしよう。サイ

イドには兄弟がおり、彼の名はマリージー・サラーム Maliji Salām といった<sup>48)</sup>。彼はパン焼き職人 (farrān) で、当日はサイイドの勤め先とは別のパン焼き釜にいたが、兄弟が負傷したとの知らせを聞き、諂いの現場に駆けつけた。そして、彼は負傷して倒れているサイイドを見つけ、介抱したが、その間サイイドを負傷させたマルタ人が逃げ込んだ家屋の窓からは、西欧人たちが彼らに対してレンガ (tūb) を投じていた。そこにはすでに多くの現地住民が集まっていたが、警察官などはまだ来てはいなかった。そこで、彼はそこに居合わせた他の人々と共に件のマルタ人を捕まえて役所 (mahall al-hukūma) に連れて行こうと考え、彼が逃げ込んだその家屋に入ろうとした。するとその時、西欧人たちの家屋の窓から発砲が行われ、さらに、騒動の知らせを受けてラッバーン区警察署から警察のイタリア人の軍曹 (jāwīsh) がやって来て、マリージーを殴打した<sup>49)</sup>。それに対して、居合わせた「アラブ人」たち (awlād al-'arab)<sup>50)</sup> がその軍曹や彼と共に現場に来ていたオーストリア人 (nimsāwī) の衛士 (mu'āwin)<sup>51)</sup> に襲いかかった<sup>52)</sup>。イタリア人の軍曹は、銃剣 (singa) を彼らに向けて威嚇したが、マリージーがその銃剣を彼の手から奪いとった。しかし、結局マリージーらは、その後やって来た警察の「アラブ人」の軍曹たちによってラッバーン区警察署に連行された<sup>53)</sup>。

47) 警察の報告によれば、彼らが現場にやって来たときサイイドは意識を失っておらず、マルタ人が近くの家屋に逃げ込んだことを叫んでいたという。(Naqqāsh 1884, vol.9, pp.753-754)

48) 彼の供述については、Naqqāsh 1884, vol.9, pp.761-763を参照のこと。

49) このイタリア人の軍曹の証言によれば、マリージーが彼を殴打したとされる。(Naqqāsh 1884, vol.9, pp.760-761) また、ラッバーン区警察署による事件に関する報告書でも同様である。(Naqqāsh 1884, vol.9, p.753)

50) 「調査委員会記録」においては、「アラブ人」 (awlād al-'arab) とは現地住民のことを指している。

51) この “mu'āwin” という職掌は、板垣 1963, p.284の階級表には見られない。これには独自に「衛士」という訳をあてた。

52) Naqqāsh 1884, vol.9, p.760. この点に関して、オーストリア人の衛士はそのイタリア人の軍曹と「アラブ人」 (ibn al-'arab) の軍曹の三人で現場に向かったと証言しており、イタリア人の証言と食い違う。(Naqqāsh 1884, vol.9, p.756)

53) Naqqāsh 1884, vol.9, p.762.

マリージーらが警察署に連行されると、彼らと共にカフワ・アルキザーズ地区周辺に集まっていた人々も署の方へ移動したのか、騒ぎは警察署の周辺にも拡大した。先のオーストリア人の衛士は騒動を鎮めるために、ラッバーン区警察署に駐屯していた憲兵隊に助力を求めたが、彼らの指揮官が不在だったうえ、兵士たちは彼の求めに応じようとはしなかった<sup>54)</sup>。また、現場に居合わせたフランス人のジャーナリスト (*jurnālī*) の証言によれば、そこでは群衆のあいだから「これはキリスト教徒ら (*naṣrānī*) による殺人 (*maqtūl*) だ。」という発言がなされ、また、憲兵隊の兵士たちもそこにいた人々 (*nās*) に対して、「マルタ人のフランク (*al-ifranj al-mālṭīya*) が彼（警察署に運ばれたサイドのことか？）を殺したのだ。」と言っていたという<sup>55)</sup>。

ラッバーン区警察署にカフワ・アルキザーズ地区での事件発生が伝えられたのは、事件当日付のラッバーン区警察署の報告によれば、アラブ時間 (*'arabi*) の午後 7 時 30 分頃、現場に駆けつけた警官の証言によれば、西欧時間 (*ifranji*) の午後 3 時 30 分頃であったという<sup>56)</sup>。前述のように、当局は現場に人員を派遣したが、その一方で、家屋に逃げこんだ件のマルタ人を逮捕するために、当時のアレク

サンドリア駐在イギリス領事であったクックソンを現場に召喚した。なぜなら、マルタ島は19世紀初頭以来イギリスの植民地であり<sup>57)</sup>、マルタ人たちはイギリスの領事裁判権の保護下にあったため、クックソンの許可無く彼らを逮捕したり、彼らの住居を捜索したりすることはできなかったからである。アレクサンドリアのイギリス系住民の中でマルタ人の占める割合は高く、1897年センサスによれば、8301人のイギリス系住民のうち実に全体のほぼ半数の3989人がマルタ人であった<sup>58)</sup>。

クックソン自身の証言によれば、彼は西欧時間の午後 4 時 30 分か 5 時頃に事件発生の連絡を受けている<sup>59)</sup>。その連絡は、市警察の次官 (*wakil ad-dabīya*) であったハサン・ベイ・サーディク *Hasan Bik Şādiq* によるもので、彼自身はそれより少し前のアラブ時間の午後 8 時頃に市警察本部においてラッバーン区警察署からの連絡を受け、現場におもむいていた<sup>60)</sup>。

また、ほぼ同時に当時のアレクサンドリア市長 (*muhāfiẓ*) であったウマル・パシャ・ルトフィー *'Umar Bāshā Lutfī* も連絡を受けており、彼自身の証言によれば、それはアラブ時間の午後 8 時 30 分頃であった<sup>61)</sup>。ルトフィーはその時には市庁舎で会議に出席して

54) *Naqqāsh* 1884, vol.9, p.756.

55) *Naqqāsh* 1884, vol.9, pp.758-759.

56) *Naqqāsh* 1884, vol.9, pp.753, 760, 765. 「調査委員会記録」のなかでは、西欧時間とアラブ時間という二つの時間が用いられている。ヒジュラ暦は日没を一日の開始とするので、「アラブ時間」はおそらく日没時を午前零時としていると思われるが、そのために西欧時間との時差が判然としない。仮にここで双方の時刻が同じものであると仮定すれば、時差はおよそ 4 時間となる。レイマーによれば、アレクサンドリアでは複数の暦、および時間が用いられていたという。(Reimer 1997, p.3)

57) Berg 1995, s.v. "British Rule".

58) Gouvernement Égyptien 1898, vol.1, p.72.

59) *Naqqāsh* 1884, vol.8, p.606. しかし、これは英國議会資料中のクックソンの証言とは若干食い違う。そこで彼の証言によれば、それ以前の午後 1 時 30 分頃にもすでに一度カフワ・アルキザーズ地区へでむいている。(Mr. Cookson to Sir E. Malet, Inclosure 1 in no.22, 16 June 1882, HCSP, Egypt no.17 (1882), vol.83, C.3391)

60) *Naqqāsh* 1884, vol.8, p.437.

61) *Naqqāsh* 1884, vol.8, pp.607-609.

いたが、連絡を受けると、事の次第を調べて対策を講じるため、市の次官(wakīl al-muḥāfaẓa) フサイン・ベイ・ファフミー Husayn Bik Fahmī を現場に向かわせた。しかし、ほどなくして市警察本部所属の衛士の一人イルヤース・アファンディ・マルハマ Ilyās Afandī Maḥāma から、事態が悪化していることを知らされた。さらに、当時のアレクサンドリア市警察の長官で、憲兵隊の指揮官 (ḥikimdār al-muṣtaḥfażīn wa al-būlīs) も兼ねていたサイド・ベイ・カンディール as-Sayyid Bik Qandil が、病気で外出できないとの報告が彼のもとにもたらされた。その知らせを受けて、ルトフィーは自ら現場に向かった。

件のマルタ人の身柄の拘束は結局、彼が家屋から自主的に出てきたため、クックソンの到着前に行われた。そして、現場にファフミーとクックソンが到着した後に、サーディクが彼ら二人と共に件のマルタ人が逃げこんでいた家屋<sup>62)</sup>に入り、そこから武器を押収した<sup>63)</sup>。一方、ラッバーン区警察署に向かったルトフィーは、マリージーが署に連行されてきた直後にそこに到着した。

その頃、現地住民たちとマルタ人たちの間では、すでに数件のこぜりあい(munāwashāt) が起きていた。また、騒動発生の知らせは市内に広まり、手に杖や棍棒などを持った人々が事件のことを口にしながら現場に向かっていた<sup>64)</sup>。それに対し、当局はカフワ・アルキザーズ地区、およびラッバーン区警察署周辺に集まっていた群衆を解散させようとした。

そして、その後の経緯はラッバーン区警察署の報告によれば以下のとおりであった。

……その時、そこに [サイドを] 殴打した人物 (ad-dārib) が隠れているといわれた家屋の窓から銃の発射 [音] が聞こえた。(中略) そして、大混乱 (faza 'azīm) が発生し、発砲が件の家屋や警察署の西隣の家屋など [近隣] の家屋から続けてなされ、その鎮圧は不可能となった。さらに発砲はサブウ・バナート通り shāri' as-Sab' Banāt やハマーミール通り shāri' al-Hamāmil へと拡大して、「アラブ人」たち (awlād al-'arab) とヨーロッパ人たち (urubbāwiyūn) の暴徒たち (ra'a'a) は [ラッバーン区] 署管轄内およびその他の街路や街区 (ash-shawārī' wa al-hawārī) へと散った<sup>65)</sup>。

これ以降、騒動の規模は拡大し始め、ラッバーン区警察署には数多くの負傷者たちが運び込まれてきた。その数については諸説あり、正確な数字を示すことはできないが、ある証言によればこの地区周辺の騒動だけでヨーロッパ系住民の負傷者が33人出たという<sup>66)</sup>。また、別の証言によれば、多数のアラブ人と少数の西欧人の負傷者がラッバーン区警察署に搬送してきたとされる<sup>67)</sup>。さらに、市警察の次官フサイン・ベイ・サーディクによれば、この地区での死傷者は、ヨーロッパ系住民が死者2名、負傷者8名で、現地住民が死者1名、負傷者12名であった<sup>68)</sup>。

62) ある証言によれば、ラッバーン区警察署の向かいの家屋であったという。(Naqqāsh 1884, vol.9, p.678)

63) Naqqāsh 1884, vol.8, p.437. ここであげた経緯は、市警察次官のフサイン・ベイ・サーディクの証言によるものである。一方、ルトフィーは彼自身もその捜索に参加していたと主張している (Naqqāsh 1884, vol.8, p.608)。食い違うこの両者の証言に関しては、双方の主張を裏づける証言も多くあり、いずれが正しいのか確認できなかった。

64) 例えば、Naqqāsh 1884, vol.9, pp.636-637を参照のこと。

65) Naqqāsh 1884, vol.9, p.753.

66) Naqqāsh 1884, vol.9, p.757.

67) Naqqāsh 1884, vol.9, p.759.

68) Naqqāsh 1884, vol.8, p.438.

こうした状況を受けて<sup>69)</sup>、まず市長はラッバーン区警察署に駐在していた憲兵隊に対し騒乱の鎮定を命じた。しかし、彼らは全くその命令に従おうとせず、逆に市長に対して脅し文句を吐くなど、反抗的な態度を示していくという。

そこでルトフィーは、偶然に現場に居合わせたアレクサンドリア駐屯軍司令官(*qūmandān ‘asākir al-Iskandariya*)のイスマーイール・パシャ・カーミル *Ismā‘il Bāshā Kāmil* 大将(*fariq*)に対して軍の出動を要請した。当時のアレクサンドリアにはカーミルの指揮の下、ラアス・アッティーン *Ra’s at-Tīn* に兵舎をかまえる第五連隊とバーブ・アッシャルキー *Bāb ash-Sharqī* に兵舎をかまえる第六連隊の計二個歩兵連隊(*alāy biyāda*)が駐屯していた<sup>70)</sup>。市長の要請を受けてカーミルは各連隊にそれを伝えたが<sup>71)</sup>、第五連隊長ムスタファー・アブドゥッラヒーム *Muṣṭafā ‘Abdu’r-Rahīm* 大佐(*mīr alāy*)は、文書による指示が無ければ派兵には応じられないと市長に文書の交付を要求した。そこで、市長は文書で再度派兵の要請を行い、第五連隊にはラッバーン区警察署周辺へ、第六連隊にはマンシーヤ区への出動を指示した。また、市

長はその後に現場にやって来た憲兵隊のアリー・ダーウード ‘Ali Dāwūd 中佐(*qā’imaqām*)に対し、歩兵中隊(*bulūk*)を率いてマンシーヤ区に向かうよう命じた。さらに、ミーナー・アルバサル *Mīnā al-Baṣal* 区およびカウム・アッシュカーファ *Kawm ash-shuqāfa* 地区方面での騒動発生の知らせを受けると、その方面には市警察のサアド・アブー・ジャバル *Sa‘d Abū Jabal* 中佐を派遣した<sup>72)</sup>。

一方、すでに現場を離れていたイギリス領事クックソンは、帰途に路上で群衆に襲われて負傷していた<sup>73)</sup>。同じくイタリア領事および副領事も襲撃を受けて負傷したほか、エジプト駐在ギリシア総領事も事件のさなかに負傷した<sup>74)</sup>。クックソンとイタリア領事らはラッバーン区警察署に避難して、署内で医師による手当てを受けた。その後、市長は彼らを送り届けたのち、カーミルやサーディク、ファフミーらをラッバーン区警察署に残し、自らはマンシーヤ区に向かった。市長によれば、ラッバーン区での騒動はこのころまでにはほぼ鎮静化したようである<sup>75)</sup>。

しかし、すでに市内の各地区に騒動は拡大していた。マンシーヤ区やミーナー・アルバサル区、さらにカウム・アッシュカーファ地

- 
- 69) 以下、事件当日の当局の対応に関しても、本稿では「調査委員会記録」に依拠するが、この記録が作成された当時、ウマル・パシャ・ルトフィーは軍事相としてヘディーウ政府の中枢にあった。そのため、彼の当日の対応については、この記録の信頼性に疑問を持たざるをえない。しかし、それをくつがえすだけの情報が他の史料からも見出せない以上、彼の行動に関しても「調査委員会記録」に依拠することにする。
- 70) Royle 1886, vol.1, pp.101-102. その数はロイルによれば、7千人であったとされる。一方、ナッカーシュによればその数は約8千人であった。(Naqqāsh 1884, vol.5, p.12)
- 71) 両連隊長の証言によれば、派兵の要請はカーミルを介してではなく、市長から直接（もちろん使者を通じてだが）指示を伝達されたという。(Naqqāsh 1884, vol.7, p.298, vol.8, p.412)
- 72) アリー・ダーウードの供述については、Naqqāsh 1884, vol.9, pp.676-678を、サアド・アブー・ジャバルの供述については、Naqqāsh 1884, vol.9, pp.678-679を参照のこと。
- 73) ここで描写したように、ルトフィーとサーディクは例のマルタ人の身柄の確保と武器の押収が行われた後に、クックソンが襲撃されたと証言している (Naqqāsh 1884, vol.8, pp.438, 609) が、これはクックソン自身の証言とは食い違う。彼は、その現場に向かう途中で負傷したと証言している (Naqqāsh 1884, vol.8, pp.606-607)。しかし、彼がマルタ人の家屋からの武器の押収に同行した後に襲撃されたとするほうが理に適っているので、ここではルトフィーらの証言を採用する。
- 74) Naqqāsh 1884, vol.8, pp.605-606.
- 75) Naqqāsh 1884, vol.8, p.407.

区に騒動の拡大があったことはすでに触れたが、以下では各地区の状況を断片的にではあるが、「調査委員会記録」に収録されている証言に依拠しつつ叙述してみよう。

ミーナー・アルバサル区に関しては、二人の食料雑貨商（baqqāl）の証言が「調査委員会記録」に収録されている<sup>76)</sup>。彼らは、それぞれ70人あるいは百人ほどの群衆に店舗を襲撃されたうえ、自らも負傷している。しかし、彼らの証言によれば、その群衆は警察署の兵士（‘askarī min al-qaraqūl）あるいは警察官（rijāl ad-dabṭīya）によって撃退されたとのことであり、前述のラッバーン区警察署周辺とは異なり、ここでは治安の維持への努力が行われていたようである。

また、最初にアリー・ダーウードが、後にはルトフィー市長も向かったマンシーヤ区に関しても、店舗の破壊および略奪が行われていた。彼らの証言によれば、この地区では憲兵隊員や警官もそうした行為に関与していたという<sup>77)</sup>。しかし、当時マンシーヤ区警察署の署長（ḥikimdār）であったアフマド・ナジム Ahmad Najm 大尉の証言によれば、マンシーヤ区では店舗の破壊および略奪は起きたが、人に対する殴打や殺人はほとんど起きなかつたという。さらに、マンシーヤ区警察署にはおそらく避難のためであろうか、西欧人たちが集まっていたといふ<sup>78)</sup>。同様のこととは、アリー・ダーウードも証言している<sup>79)</sup>。ただし、マンシーヤ区においても、実際にヨーロッパ系住民に対する暴力の行使が行われていたのだが、一部では治安がある

程度維持されていたということは指摘できるだろう。

その他の地区においても騒動の拡大が看取される。例えば、ミーナー al-Minā 区ではこの区の警察署の署長であったナスル・ムーサー Naṣr Mūsā の証言によれば、下層民ら（awbāsh）がヨーロッパ系住民たちの店舗を破壊（kasr）していたほか、「アラブ人」の下層民たち（awlād al-‘arab al-awbāsh）が居酒屋（khammāra）を襲撃し、店内にいた二人のギリシア正教徒（rūmī）を殴打し、負傷させたという<sup>80)</sup>。また、グムルク al-Gumruk 区においても、居酒屋の店主が「アラブ人」と兵士たちの集団（izdiḥām awlād ‘arab wa ‘asākir）によって暴行を受けている<sup>81)</sup>。

このようにして市内の広い範囲に騒動が拡大していったが、市警察本部（dār ad-dabṭīya）周辺で発生した騒乱状況は、6月11日事件のなかでも最も深刻な事態となった。

これに関するある証言によれば、市警察本部の周辺にはアラブ時間の午後9時頃から手に杖や棍棒を持った人々が集まり始めたといふ<sup>82)</sup>。事件当日は多くのヨーロッパ系住民が西港に停泊していた外国の戦艦を見物するために出かけていたが<sup>83)</sup>、市警察本部は市内と港を結ぶ道の途上にあったため、彼らは帰途にそこに集まっていた現地住民からの襲撃を受けた<sup>84)</sup>。

市警察本部内には、イブラーヒーム・アティーフ Ibrāhim ‘Aṭīḥ 少尉（mulāzim thānī）が率いる憲兵隊やアリー・ムーサー ‘Ali Mūsā 少尉が率いる伝令隊（‘asākir al-murāsala），

76) Naqqāsh 1884, vol.8, p.617.

77) Naqqāsh 1884, vol.8, p.609.

78) Naqqāsh 1884, vol.9, p.689.

79) Naqqāsh 1884, vol.9, p.677.

80) Naqqāsh 1884, vol.9, p.705.

81) Naqqāsh 1884, vol.8, p.623.

82) Naqqāsh 1884, vol.9, p.638.

83) Chamberlain 1977, p.17.

84) Naqqāsh 1884, vol.5, p.6, vol.8, p.468.

そしてムハンマド・アルハンマー Muḥammad al-Ḥammāl 少尉が率いる消防隊 ('asākir aṭ-ṭulumbāt)<sup>85)</sup>が待機していた<sup>86)</sup>。彼らはラッバーン区での騒動発生の報告を受けると、戦闘態勢をとって待機していたが、その後自ら騒乱に参加していった。当時市警察本部に勤務していた衛士の一人であるアフマド・アファンディ・サラーマ Ahmad Afandī Salāma の証言によれば、その経緯は以下のとおりである。

[アラブ時間の午後] 11時頃に負傷者数人と死体数体が市警察本部にやってきて、そのたびに私が彼らを病院へと搬送しました。そして、11時30分頃にはヨーロッパ人の負傷者たちと負傷した一人の騎兵 (ahad 'asākir as-sawāri) がやってきました。その [負傷した] 騎兵がやってくると、憲兵隊と伝令隊による騒動 (hayajān) が起きました。そして、彼らは庁内にいた負傷者たちを襲いました。そして、私が彼らを制止しようとすると、彼らは私に発砲しようとしました。そこで、私は兵士たちにそのような行為を止めさせ、庁舎の内外で彼らのために起きている騒動を鎮めさせるために、イブラーヒーム・アファンディ・アティーフという [憲兵隊の] 少尉に助けを求めました。ところが、彼は私の話に耳を貸さず、彼に課せられた [治安を維持する] という義務の実行を行いませんでした。[それどころか] 彼は私の腕をつかみ、庁舎内に引き入れ、[彼の配下の] 兵士たちに対して、私を [庁舎の] 中庭 (ḥawsh) や外に出さないように指示し

ました。市警察本部の最上階にいる間、私は当直兵士の部屋で伝令隊の少尉であるアリー・アファンディ・ムーサーを見かけたので、彼に対し兵士たちによって行われている人々 (nās) の殺害と彼らに対する略奪を止めさせるよう言いました。しかし、彼は私に向かって「お前には関係ない (mush shughl-ka)。」と答えました。警察官たち ('asākir al-būlis) に関しては、私がいた場所では彼らを一人も見かけませんでした。よって、私は彼らによっては何も行われなかつたと証言します<sup>87)</sup>。

その間、市警察本部の外においては、現地住民らがヨーロッパ系住民の乗っていた馬車を襲撃するなどしていたが、憲兵隊らはそれを制止するどころか、逆に女子供たちに対して、ヨーロッパ系住民を殴打するよう煽っていた様子が目撃されている<sup>88)</sup>。

また、別の証言によれば、伝令隊の一部の兵士たちが、市警察本部の屋上のテラスから現地住民らに対して木片 (akhshāb) を配っていた。そして、現地住民たちはヨーロッパ系住民が通りかかるたびに、伝令隊らと共にそれを使って彼らを殴打していたという<sup>89)</sup>。最終的に、市警察本部周辺だけで40名以上の死者が出た。

そうしたなか、ついに日没前後に第五連隊の一個大隊 (urta) および第六連隊の一個大隊があいついで出動した。さらに、日没時には第六連隊のスライマーン・サーミー中佐も現場に赴いた。そして、軍隊の到着によって騒乱状態はとりあえず収拾された。

その後、カイロでは事件の知らせを受けて、

85) 当時のカイロとアレクサンドリアの警察は消防も担当していた。(Kulliya al-Būlis al-Malakiya 1950, pp.184-185)  
 86) Naqqāsh 1884, vol.9, p.707.  
 87) Naqqāsh 1884, vol.8, p.475.  
 88) Naqqāsh 1884, vol.8, pp.561-562.  
 89) Naqqāsh 1884, vol.8, p.563.

事件当日の夜にヘディーウの上級副官 (*yāwir al-janāb al-khidiwī*) や司法省次官 (*wakil al-ḥaqqāniyya*) のブトルス・パシャ *Buṭrus Bāshā*, デルヴィーシュ・パシャの上級副官, 各国領事の代表および軍事省次官 (*wakil al-jihādiya*) のヤアクーブ・パシャ・サーミー *Ya‘qūb Bāshā Sāmī* らによって構成された委員会が組織され, 調査のためにアレクサンドリアに派遣された<sup>90)</sup>。同時に事件の再発防止のため, ハリール・ベイ・カミル *Khalil Bik Kāmil* 麾下の第二歩兵連隊とイード・ムハンマド *Īd Muḥammad* 麾下の第四歩兵連隊<sup>91)</sup>, およびアフマド・アブド・アルガッファール *Aḥmad ‘Abd al-Ghaffāl* 麾下の二個砲兵中隊 (*battāriya tūbjiyā*) と騎兵連隊 (*alāy as-sawārī*) などがトルバ・パシャ・イスマト *Tulba Bāshā Iṣmat* の指揮の下に派遣され, 駐屯軍の兵力が増強された<sup>92)</sup>。

また, 各国の総領事がデルヴィーシュ・パシャに対して在留外国人の生命と財産の保障を求め, アープディーン宮殿 *Sarāy al-‘Ābdīn* にてヘディーウ同席の下に会議が開かれた。オラービーもそれに対し出席し, そこで彼はヨーロッパ人の生命と財産の安全を保障することを約し, 人々が徒党を組んだり, 集会を開催したりすることを禁止し, 演説者たち (*khuṭabā*) には公衆演説 (*khuṭab al-‘umūmīya*) を行うことを禁じ, また新聞には煽動的な記事の掲載を禁止することを総領事たちに対して約束すると共に, 人々に対して平靜を保つよう呼びかける声明を発した<sup>93)</sup>。

一方, アレクサンドリアでも対策を協議す

るため, 調査のためにカイロから派遣された前述の特別委員会の委員たちとルトфиー市長, 軍隊の上級将校たち, およびアレクサンドリアに居合わせた総領事やアレクサンドリア駐在の領事たちによる会合が12日の午前7時から市庁舎で開かれた<sup>94)</sup>。その会合において, 治安維持のために市内を巡回する人員を増員することや, 軍が警察を補佐すること, ヨーロッパ系住民の居住区で現地住民が徒党を組むのを禁止することなどが決定された。また, 事件においてヨーロッパ系住民が現地住民に発砲したことに関しては, 各国領事たちが共同で各自の保護下にある人々に向けて以後そのような行為を禁止する声明を発することと共に, ヨーロッパ系住民の容疑者の身柄の拘束および家宅捜索の際には, 各国領事が任命した代理人が警察に同行することで合意した。さらに, 各街区や職能集団の長らに対しても, ヨーロッパ人との諍いを避けること, 午後9時以降の外出を禁止すること, 路上にて4人以上の徒党を組むのを禁じること, 路上で放歌しないこと, 自衛のための武器を室内に備えておくことなどを人々に呼びかけるようにとの通達が出された<sup>95)</sup>。

しかし, 軍隊によって治安が回復され, 当局によって以上のような対応がなされた後も人心の動搖は鎮まらなかった。人々は, 沖合に停泊していた英仏艦隊がアレクサンドリアへの砲撃を開始することや, 市内で再び騒乱が発生することを非常に恐れていた<sup>96)</sup>。ナッカーシュは以下のように述べている。

90) *Naqqāsh* 1884, vol.5, p.15.

91) かつて第四歩兵連隊長はオラービー自身であったが, 軍事省次官就任に際し代理を任命していた。  
(Schölich 1981, pp.226-227)

92) ‘Urābī 1953, vol.1, p.146. 第二連隊および第四連隊の派遣に関しては, トルバ・パシャ・イスマトの証言によても確認される。(Naqqāsh 1884, vol.9, p.908)

93) *Naqqāsh* 1884, vol.5, p.13.

94) Mr. Huri to Mr. Cookson, 12 June 1882, Inclosure 4 in Mr. Cookson to Earl Granville, no.22, 20 June 1882, *HCSP*, Egypt no.17 (1882), vol.83, C.3391.

95) Baer 1964, pp.78-79.

96) *Naqqāsh* 1884, vol.5, p.10.

上記の日曜日（6月11日）の後、すべての商店（makhāzin）とパンやその他の食品を扱う商人の店舗（dakākīn al-bā'a）は閉じられ、同様にパン焼き竈（afrān）や工房（ma'āmil）も閉じられた。そのほとんどが何日間もその状態のままであり、ついには人々を激しい窮乏が襲うことになった。そして、社会活動（mu'āmalāt）は止まり、交易活動（ḥaraka al-akhḍh wa al-'atā）も停止した。このまち（al-balad）では、もはやロバ追いや馬車や荷車の御者、貨物船（ṣanādil）や小型船（zawāriq）の所有者、汽車（wābūrāt）と線路（sikka al-ḥadida）の事務所といったもの以外の活動は行われていなかった。このまちの市長（muḥāfiẓ al-balad）であるウマル・パシャ・ルトフィーは、治安の回復に全力を尽くし、人々（nās）に対して彼らの商店を開き、彼らの生業や活動を行うように呼びかけたが、彼の尽力は無駄に終わった。このまち（al-madīna）は何日もこの悲惨な状態のままで、アレクサンドリアとその住民に降りかかった打撃と損失がどれほどのものかはアッラーのみがご存知である<sup>97)</sup>。

事件の翌々日の13日にはエジプト副王タウフィークがオスマン帝国からの特使デルヴィーシュ・パシャと共にアレクサンドリア

に赴いたが、彼らの来訪をアレクサンドリアの人々は知らされていなかったので、その際に打たれた礼砲に入々は非常に怯えたという<sup>98)</sup>。また、市内では人々を不安に陥れるさまざまな噂も飛び交っていた<sup>99)</sup>。

さらに、6月11日事件以前から避難のためにアレクサンドリアにエジプト全土から集まっていた多くの外国人らの国外脱出の動きはこの事件を契機として加速し、ナッカーシュによれば12日だけで出国者の数は1万人以上に達したという<sup>100)</sup>。この数字には多分に誇張もあるだろうが、この事件が彼らに与えた衝撃の大きさをうかがうことはできる。

一方、事件を調査するために設置された委員会では、事件で略奪された物品を隠匿しているとの容疑をかけられた警察関係者<sup>101)</sup>に対する家宅捜索をめぐってエジプト政府代表と各国領事の間での意見の対立が表面化していた。各国領事の代理人たちが捜索の実行を求めたのに対し、サーミーとブルトルスの両次官が引き換えにヨーロッパ系住民の家宅捜索を要求したのがその発端であった<sup>102)</sup>。結局、イギリスは代理人のグロスジーン J. K. Grosjean を委員会から引き上げさせることになった<sup>103)</sup>。フランスもまたそれに追随して代理人を引き上げさせ、この委員会は活動を停止することになる<sup>104)</sup>。

その後、6月20日には新内閣が組閣された。新内閣発足時には恩赦が行われるのが慣例であったが<sup>105)</sup>、首班に指名されたイスマー

97) Naqqāsh 1884, vol.5, pp.11-12.

98) Naqqāsh 1884, vol.5, p.12.

99) Naqqāsh 1884, vol.5, pp.19-20.

100) Naqqāsh 1884, vol.5, p.10.

101) 英国議会資料においては“police”となっているが、「調査委員会記録」によれば、これは憲兵隊を指している。

102) これに関するヤアクーブ・パシャ・サーミーの証言については、Naqqāsh 1884, vol.7, p.97を参照のこと。このなかで彼は調査の妨害を意図していたわけではなく、憲兵隊に対する家宅捜索は、彼らをさらなる暴挙に走らせるだけだと注意を喚起したまでだと述べている。

103) Mr. Cartwright to Earl Granville, no.34, 26 June 1882, HCSP, Egypt no.17 (1882), vol.83, C.3391.

104) Rafī'i 1966, p.274.

105) Schölich 1981, p.254.

イール・ラーギブ・パシャ Ismā‘il Rāghib Bāshā は 6 月 11 日事件の関係者をその対象外とする一方、事件に関する新たな調査委員会の発足を検討した<sup>106)</sup>。しかし、これもまたイギリスの非協力的な姿勢により頓挫した<sup>107)</sup>。結局、6 月 11 日事件について詳細な調査が行われるのは、オラービー運動が鎮圧された後、本稿が主に依拠する「調査委員会記録」を作成した組織が発足するのを待たねばならなかった。

### 第三節 「虐殺」言説の形成

すでに触れたように、6 月 11 日事件に対しては現在にいたるまで「アレクサンドリアの虐殺」という呼称が用いられてきた。以下では、このような呼称が定着するにいたった経緯について検討してみたい。事件が軍事介入を正当化するための口実として利用されていたという事実をふまえたうえで、「虐殺」という評価の裏にある問題を明らかにすることが本節の目的である。

調査委員会側には、6 月 11 日事件が自然発生的なもので、なおかつ事件の参加者らの行動が自発的なものであるとする認識は全く無かった。彼らの事件に対する認識は、以下のような尋問の際の発言によって如実に示される。

このまち (al-balad) の住民や兵士たちの気質 (akhlāq) はよく知られている。このような事件の実行は彼らにとってはよくなしえることではない。そのためには

は、彼らに対する煽動者 (muḥarriq) の存在、あるいは〔煽動者による〕煽動、共謀が不可欠である<sup>108)</sup>。

この発言は、「調査委員会記録」において再三なされている<sup>109)</sup>。一方で、彼らは調査に際して、事件に参加した「民衆」の内部構成に关心を払うことはほとんど無かった。そのため、実際には現地住民側の参加者についての詳細な情報がこの調査が行われた当時すでに収集されていたにもかかわらず、「調査委員会記録」からは彼らに関しての詳しい情報は得られない。彼らは、ほとんどの場合においてヨーロッパ人 (urubbīyūn)、キリスト教徒 (naṣrānī), 外国人 (ajānib), 現地住民 (ahālī), ムスリム (muslimūn), 「アラブ人」 (awlād al-‘arab), 下層民 (awbāsh) などと記述され、わずかに遊牧民 (badawī) やヌビア人 (barābira) の参加が指摘されているのみである。むしろ、前述した尋問内容に如実に示されているように、彼らはむしろ事件の参加者らを煽動した主謀者の特定に重点を置いていた。

そして、彼らによって想定されていた主謀者とは、アフマド・オラービーその人であった。実際、オラービーに対しては 6 月 11 日事件を計画し、実行したという容疑がかけられていた<sup>110)</sup>。この容疑の立証は、イギリス政府と、またその助力によって権力を奪回したヘディーウ政権の双方にとって、自らの行動を正当化するために必要な措置であると考えられていた<sup>111)</sup>。

市内の治安維持を担う地位にあったサイイ

106) 当時の蔵相 (nāzir al-māliya) を委員長とし、エジプト代表（9名）と各国政府代表（9名）の計19名によって合同で調査を行うことになっていた。(Naqqāsh 1884, vol.5, pp.25-26)

107) Mr. Cartwright to Earl Granville, no.41, 27 June 1882, HCSP, Egypt no.17 (1882), vol.83, C.3391; Earl Granville to Mr. Cartwright, no.52, 28 June 1882, HCSP, Egypt no.17 (1882), vol.83, C.3391; Royle 1886, vol.1, pp.110-111.

108) Naqqāsh 1884, vol.9, p.658.

109) 例えば、Naqqāsh 1884, vol.8, pp.423, 465, vol.9, p.650などを参照のこと。

110) Broadley 1884, p.97; Chamberlain 1977, p.25.

111) Galbraith 1979, p.274.

ド・ペイ・カンディールは、事件当日に病気と称して自宅から出なかったが<sup>112)</sup>、ある証言によれば、彼はオラービーに対して忠実で、アレクサンドリアにおけるオラービーの代理人 (*mu'tamadī Aḥmad 'Urābi*) であったという<sup>113)</sup>。そして、調査の過程で事件以前や当日に彼に会った多くの人々が、彼が病気ではなかったと証言したことにより<sup>114)</sup>、当日の彼の病気は仮病ではとの疑惑が浮上した。さらに、事件には彼の指揮下にあった憲兵隊が関与していた。そのためか、調査委員会側はまず彼の事件への関与を立証することによって、オラービーと事件との関係を明らかにしようと考えていたふしがある。そして、イギリス政府もまた同様の見解を示していた。当時のイギリス外相グランヴィル Granville は、同じく当時のエジプト駐在イギリス総領事のマレット E. Malet に対して、カンディールとオラービーの関係について調査するよう指示を送っている<sup>115)</sup>。また、調査委員会はカンディールが事件に関与した可能性があるとの認識の下に、事件発生の契機となった件の諍いの計画性とそれに対する彼の関与についての調査も行っている。

ところが、これらに関しては「調査委員会記録」において見解の異なる証言がなされており、その真相は必ずしも明らかではない。

しかし、少なくともカンディールの事件当日の病状に関しては、仮病であったとする認識でほぼ一致している<sup>116)</sup>。

また、彼がアレクサンドリアの駐屯軍の首脳たちとの間に密接な関係を持っていたとの証言<sup>117)</sup>、さらに事件前日に市警察本部にて彼らが会談していたとの証言や、アレクサンドリア駐屯軍の首脳たちや憲兵隊の将校らが事件当日にカンディールの自宅にいたという証言<sup>118)</sup>などに基づいて、軍の事件への関与についても調査された。そもそも、調査委員会が市長に対して軍の行動の「遅滞」(*ta'akhkhur*) の原因について質問していること<sup>119)</sup>などから判断するに、彼らは軍の対応に問題があったと考えておらず、そうした認識からも軍に対する調査が行われたものと考えられる<sup>120)</sup>。それに対して市長は、軍の出動が遅れた理由を以下のように述べ、軍の、ひいてはオラービーの責任を示唆している。

私には、[軍の出動が遅れた] その眞の理由は分からないが、ラアス・アッティーン [の兵舎] でムスタファー・アブドウッラヒームと共にいたスライマー・サーミーが、アフマド・オラービーと電報によって連絡をとるまでは大隊の派遣に合意しなかったとのみ伝わってい

112) これに関する彼自身の証言については、*Naqqāsh* 1884, vol.7, p.359を参照のこと。また、彼の病状は右半身の麻痺 (*shalal fi al-jiha al-yamni*) であったという。*(Naqqāsh* 1884, vol.8, p.499)

113) *Naqqāsh* 1884, vol.8, p.483, vol.9, p.650.

114) *Naqqāsh* 1884, vol.8, pp.480-481, 486.

115) Earl Granville to Sir E. Malet, no.3, 17 August 1882, *HCSP*, Egypt no.16 (1882), vol.83, C.3390.

116) 調査委員会はエジプト、イギリス、フランス、イタリア、ギリシア、ドイツの5ヵ国、計7名の医師から構成される医師団を結成し、彼らにカンディールの事件当日の病状を確認するための診断を行わせた。その結果、彼らのうちエジプト人医師一人を除く全員が彼は仮病であったとの診断を下している。*(Naqqāsh* 1884, vol.8, pp.506-507)

117) 例えば、*Naqqāsh* 1884, vol.9, p.650を参照のこと。

118) *Naqqāsh* 1884, vol.8, pp.465-466.

119) *Naqqāsh* 1884, vol.8, p.407.

120) 市長の証言によれば、文書による派兵要請から実際に軍が出動するまで2時間ほどの時間を要したとされる (*Naqqāsh* 1884, vol.8, p.407) が、一方で駐屯軍の両連隊長は文書による指示を受領すると直ちに出動したと証言し、両者の主張が食い違う。*(Naqqāsh* 1884, vol.7, p.298, vol.9, p.833)

る<sup>121)</sup>。

同じくイギリス政府側も、事件発生の翌日にマレットがグランヴィルに宛てた私信のなかで、事件の主謀者がエジプト軍であるとする風説が流布していることを紹介しているよう<sup>122)</sup>、軍の関与の可能性を考慮していた。

しかし、実際のオラービーの裁判の過程では、これらの容疑についての審理がなされることは無かった。調査委員会によって収集された「証拠」によっては、事件へのオラービーの関与の立証は困難と判断され、審理の対象から外された<sup>123)</sup>。そして、最終的にはこの見解は放棄されることになる<sup>124)</sup>。これ以後、イギリス政府関係者によって示される6月11日事件に対する見解は、これを自然発生的に起きた事件であるとするものであった<sup>125)</sup>。

ところが、オラービーを事件の主謀者とする説はその後も広く一般に流布しつづけた。例えば、ロイル C. Royle - 彼は、オラービー運動の時期をまたいで10年間エジプトに滞在し、「個人的に（オラービー運動の）諸事件の多くを目撃する機会を得」<sup>126)</sup>たという人物である - は、その著書のなかで6月11日事件の展開とその後について、二章を割いて言及

している<sup>127)</sup>。しかし、事件からすでに4年を経過した1886年に出版されたものであるにもかかわらず、彼は事件をオラービーによって計画的に引き起こされたものとして描き出している。

ロイルは、英國議会資料に収録されている、事件前日に現地住民から事件発生を暗示するような脅迫・警告を受けたヨーロッパ人たちの証言を紹介することによって、6月11日事件の計画性を示唆することから叙述を始める<sup>128)</sup>。

さらに、彼によれば事件前日にオラービーの代理とカンディールの会談が行われたとされ、また事件において「アラブ人」たちの主要な武器となった棍棒が、市警察本部の周辺で彼らのうちで最下層 (the lowest class) の人々に配布されたとされる<sup>129)</sup>。

事件当日については、事件の契機となった件の詳いに関して、「調査委員会記録」とは全く逆に現地住民が先にマルタ人を襲ったとしているほか<sup>130)</sup>、憲兵隊がアレクサンドリア市長の指示に従わずに暴動 (riot) に参加して暴力行為や略奪行為を行ったこと、アレクサンドリア駐屯軍の指揮官が市長の出動要請に対し、オラービーの命令以外には従わないと返答したことなどが記述され、その後に

121) Naqqāsh 1884, vol.8, p.407. この話はしばしば事件に関する叙述のなかで事実として言及されることがある (Naqqāsh 1884, vol.5, p.6; Shārūbim 1898-1900, vol.4, p.299) が、管見の限りでは「調査委員会記録」においては他の関係者に対してこれに関する尋問は行われておらず、信憑性は低い。

122) Malet 1909, pp.407-408.

123) Broadley 1884, pp.297-298.

124) Galbraith 1979, pp.277-278; Chamberlain 1977, pp.25-26.

125) 例えば、マレットの後任として就任し、1907年に辞任するまでエジプト駐在イギリス総領事としてイギリスのエジプト統治に中心的な役割を果たしたイーヴリン・ベアリング Evelyn Baring (後のクローマー卿 Lord Cromer) がそうした見解を示している。(Cromer 2000 (reprint of 1908 ed.), vol.1, p.288)

126) Royle 1886, vol.1, v. ただし、6月11日事件に関しては彼の記述のなかに一人称の表現が無いことから、彼は事件を直接目撃してはいないと考えられる。

127) Royle 1886, vol.1, pp.87-115.

128) Royle 1886, vol.1, pp.87-88.

129) Royle 1886, vol.1, p.89.

130) Royle 1886, vol.1, p.90.

軍隊が出動した際の「まるで魔法のように」速やかな秩序の回復が述べられる。

そして、以下に引用した文章によって、これまで述べられてきた事象が彼の記述の中でどのような機能を果たしているかは明白であろう。

いまや、オラービーにとっての好機がやってきた。(中略) 彼は自らの目的を達した。すなわち、エジプトには支配者はただ一人であり、そしてそれはオラービー・パシャであると示すことである<sup>131)</sup>。

以上のように、ロイルは調査委員会やイギリス政府が当初考えたのと同様に、軍隊や憲兵隊を接点として、オラービーと6月11日事件を関連づけようとしていることが指摘できる。

一方、事件発生の経緯に関しては、別の見解も提出されている。それは、事件の主謀者を当時のヘディーウであったタウフィークであるとするものであった<sup>132)</sup>。この見解は、ムハンマド・アブドゥフ Muḥammad ‘Abduh (1849-1905年)<sup>133)</sup>やオラービーのほか、当時イギリスの保守党所属の下院議員であったチャーチル R. H. S. Churchill<sup>134)</sup>や、オラービー運動を支持し、一時はイギリス政府と運動の指導者たちとの間の仲介役も務めていた

プラント W. S. Blunt (1840-1922年)<sup>135)</sup>によって主張された。しかし、彼らの言説は大筋において共通しているものの、相違点も存在する。以下では、この点について検討を行っていく。

彼らは、タウフィークがアレクサンドリア市長のウマル・パシャ・ルトフィーらと共に謀して事件を引き起こしたという点については意見の一一致をみている。しかし、その根拠としてプラントやチャーチルは憲兵隊の事件への関与—彼らはそれが市長の指揮下にあったと考えていた—を指摘しているのに対し<sup>136)</sup>、オラービーは憲兵隊が事件に関与していたという事実自体、全く言及していない。むしろ、オラービーはクックソンやギリシア領事らによって行われたヨーロッパ系住民の武装化を指摘して、それを事件発生の主な原因であるとしている。さらに彼は、事件発生の契機となった件の諍いの一方の当事者であるマルタ人が、イギリス国民 (ra‘āyā al-biriṭāniyā) でかつイギリス領事館職員の兄弟であったとして、この諍いもまたイギリスによる陰謀の一環であったことを示唆しており、イギリス側の関与を強調する叙述を展開している<sup>137)</sup>。

一方、プラントは、アレクサンドリアのヨーロッパ系住民の武装化と事件との関係を認めておらず、結果として事件に対するイギリス側の責任をほとんど認めていない<sup>138)</sup>。そのため、この点に関しては、彼はイギリス

131) Royle 1886, vol.1, p.102.

132) この言説は、現在とくに欧米の研究において示されることが多い。例えば、Reid 1998などを参照せよ。

133) Blunt 1969, p.505. オラービー運動期間中の彼の行動については、飯塚 1990を参照のこと。

134) 6月11日事件に関する彼の見解とその根拠は、英國議会資料の中に収録されている (“Papers relating to Lord R. Churchill’s Charges against His Highness the Khedive,” HCSP, Egypt no.4 (1884), vol.88, C.4337.)。また、彼自身については *The Dictionary of National Biography CD-ROM Edition* (abbr.DNB), Oxford, 1995, s.v. “Churchill, Randolph Henry Spencer, commonly known as Lord Randolph Churchill 1849-1895”

135) 彼については、栗田1982aを参照のこと。

136) Blunt 1969, pp.313, 499.

137) ‘Urābi 1953, vol.1, p.145; Blunt 1969, pp.486-487.

138) Blunt 1969, pp.315-316.

側の責任を認めるチャーチルとも意見を異にしている<sup>139)</sup>。これは、保守党所属の下院議員であったチャーチルの主な動機が、タウフィークの事件への関与を示すことで、彼を支援した自由党政権の失策を糾弾することであったのに対し<sup>140)</sup>、プラントにはタウфиーク側の責任を強調する意図があったことによるものであろう。さらに、プラントはオラービー側の責任も認めないため、憲兵隊の責任を指摘しているにもかかわらず、その指揮官でオラービーと親密な関係にあったカンディールの責任は認めていない。プラントによればカンディールの当日の仮病は、タウфиーク側の陰謀を事前に察知した彼が、それに荷担しないために行なった方便であったとされている<sup>141)</sup>。オラービーが事件当日のカンディールの行動を怠慢であるとして厳しく非難しているのに対して<sup>142)</sup>、プラントの彼への好意的な評価は、恣意的なものであると言わざるをえない。また、プラントは事件当日の軍の対応の「遅れ」に関する市長によって事件発生の知らせがカイロのオラービーに伝えられるのが妨害され、出動命令の伝達が遅れたためとしている。しかし、アレクサンドリア駐屯軍の首脳が認めているように<sup>143)</sup>、彼らは市長の指揮下にあったのであって、出動に際してオラービーに指示を求める必要は無かった。実際、オラービーの回

想録によれば、彼が軍の出動に関して指示を出したという記述は無い<sup>144)</sup>。プラントのこうした見解には、タウфиークのみを事件の主謀者とすることによって、オラービーとイギリスの双方を事件の責任から解放しようとする意図が示されているといえる。彼が両者の衝突を必然的なものではなく、不幸な偶然であると考えていたことは以前から指摘されているが<sup>145)</sup>、プラントの6月11日事件に対する見解は、その反映であると考えられよう。

ところで、これまで主に当事者やイギリス側の事件に関する言説について述べてきたが、エジプト国内においては、6月11日事件はどのように認識されていたのであろうか。イギリスの軍事占領下と1919年革命までの時期においては、オラービー運動自体に対する否定的な見解が支配的で、現在とは違って民族主義運動の原点とさえみなされてはいなかった。オラービー運動に関する歴史叙述の変遷について論じたマイヤー T. Mayerによれば、当時は民族主義者たちまでがオラービーらはイギリスの軍事占領を招くよう行動していたと考えていたという<sup>146)</sup>。この時期の6月11日事件に対する評価についての情報は入手できなかったが、オラービー運動自体に対するそうした評価を考えれば、それがどのようなものであるかは自ずから明らかであろう<sup>147)</sup>。

しかし、1919年革命を経て、エジプトがま

139) プラントは、チャーチルの主張も自説の根拠としているにもかかわらず、チャーチルがイギリス側の責任を追及した部分は自著に引用していない。

140) 彼の主張は、英國議会資料中の6月11日事件に関する諸記録に大きく依拠しながら展開されているが、イギリス政府当局者によって指摘されているように、自らの主張と一致しない資料中の証言を改変するなどしているため、その信頼性には大いに疑問がある。(Earl Granville to Sir E. Malet 6 August 1883, HCSP, Egypt no.4 (1884), vol.88, C.4337; Chamberlain 1977, pp.27-28)

141) Blunt 1969, p.313. カンディール自身の主張ともプラントの主張は異なることに注意せよ。

142) 'Urābi 1953, vol.1, p.145.

143) 第五連隊長の証言 (Naqqāsh 1884, vol.7, p.299) を参照のこと。

144) 'Urābi 1953, vol.1, pp.144-147.

145) 栗田 1982a, pp.7-8.

146) Mayer 1988, pp.5-9.

147) プラントが6月11日事件に関する自説を展開した『イギリスのエジプト占領秘史』とクローマーの『現代エジプト』が当時あいついでアラビア語に翻訳されたさいに、後者のほうがエジプト国内で好評を博していたこともその証左として指摘できよう (Mayer 1988, p.8)。前述したように、クローマーは6月11日事件を自然発的に起きた事件であるとして、プラントの主張を一蹴している。

がりなりにも独立国家としての体裁を整えると、民族主義的な歴史叙述が現れ始め、それは6月11日事件の叙述にも影響を与えるようになる。この時期の代表的な歴史家としては、その著作が現在においてもエジプト近代史における重要な史料として評価を受けているラーフィイー 'Abdu'r-Rahmān ar-Rāfi'i がいる<sup>148)</sup>。彼は、オラービー運動に関する著作『オラービー革命とイギリスの占領』において、6月11日事件をイギリスによる陰謀であるとし、以下のように述べている。

…… [アレクサンドリア沖合の英仏およびギリシアの] 艦隊の存在、[アレクサンドリア駐在] イギリス領事の煽動 (*tahrīdāt*)、イギリス政治の策謀 (*tadbirāt*)、これらがアレクサンドリアの虐殺 (*madhbaha al-Iskandariya*) に関してその原因となった諸要素である<sup>149)</sup>。

さらに、彼はオラービーと同様に、事件発生の契機となった諍いについてもイギリスによる陰謀の一環であったことを示唆している<sup>150)</sup>。

しかし、その一方で軍隊の出動の遅れに関してはその事実が指摘されるのみで、原因については述べられていない<sup>151)</sup>。また、カン

ディール自身の当日の健康状態についても仮病などではなく、実際に病気であったとされている<sup>152)</sup>。さらに、憲兵隊の事件への関与についても言及せず、市警察本部の周辺で多数の死者が出たことを指摘しているのみで、その行為主体を明示していない<sup>153)</sup>。これらのことからも推測されるように、ラーフィイーは結論としてタウフィーク側の事件への関与も否定し<sup>154)</sup>、エジプト側の責任を一切認めていない。

このように、大戦間期以降のエジプト側の事件に関する叙述の特徴的な点として、イギリス側の責任を強調することに加え<sup>155)</sup>、憲兵隊の事件への関与について言及しないことが指摘できる。この他のエジプト側に同情的な6月11日事件に関する歴史叙述においても、憲兵隊の関与は指摘されることが少ない<sup>156)</sup>。

このような叙述が大戦間期以降のエジプトにおいて行われた背景として、当時の時代状況があったことは否定できない。イギリスの強い影響下に置かれていたとはいえ、ラーフィイーらに独立国家エジプト王国の王 (*malik*) の先祖を批判することが不可能であった、あるいは行う意図が無かったことは容易に想像できる。また、1919年革命以降の民族主義的意識の高揚は、従来のオラービー

148) ラーフィイー 'Abdu'r-Rahmān ar-Rāfi'i (1889-1966年) は、弁護士出身で、国民党 *Ḥizb al-Waṭanī* 所属の貴族院議員であった。民族主義的立場から、エジプト近代史に関する数多くの著作を残している。(Goldschmidt 1994, s.v. "AL-RAFI'I, ABD AL-RAHMAN (1889-1966)")

149) Rāfi'i 1966, p.279.

150) Rāfi'i 1966, p.278.

151) Rāfi'i 1966, p.269.

152) Rāfi'i 1966, p.280.

153) Rāfi'i 1966, p.269.

154) Rāfi'i 1966, p.279.

155) これは、現在のエジプト人研究者による事件の叙述においても散見される特徴である。例えば、Muhammad Sālim 1981, p.223などを参照のこと。ここでムハンマド・サーリムは総領事マレットがアレクサンドリアのヨーロッパ系住民の武装化に大きな役割を果たしたと指摘しているが、前述したようにこれは確認される事実とは反する。

156) 例えば、当時のエジプト駐在アメリカ総領事であったファーマン E. E. Farman は、イギリスの対エジプト政策に批判的な見解を示した自著において、事件の経過に言及しているが、憲兵隊らが事件に関与していたことに言及していない。(Farman 1908, p.305)

運動への評価の修正を迫ったが<sup>157)</sup>、それと同様に6月11日事件についてもその全責任をイギリスに帰する歴史叙述を要求したともいえよう。その際には、エジプト側の組織である憲兵隊の事件への関与を指摘することは当然のことながら障害となるため、彼らの関与についての言及が行われなくなったものと考えられる<sup>158)</sup>。

以上のように、6月11日事件に関してさまざまな立場からなされた叙述を検討してみると、介入の口実として事件を利用したイギリス政府による事件の表象だけでなく、エジプト側の歴史叙述もまた、恣意的なものであったことが明らかになった。

また、公式に否定されたオラービーを主謀者とする言説<sup>159)</sup>はもちろんのこと、他の二つの言説、エジプト側による言説とプラントに代表されるオラービー運動に同情的な人々による言説も、その根拠は曖昧なものであった。なぜなら、エジプト側による言説は憲兵隊が事件に関与した事実を無視したまま主張を展開しており、プラントらによるそれは憲兵隊を軍隊とは全く別個な、市長の指揮下にあった組織としてとらえており、その組織としての性格を誤解しているからである<sup>160)</sup>。

さらに、これらの言説はすべて、6月11日事件を陰謀であったとする「陰謀史観」に立脚していた。すなわち、実際に事件に参加した人々の主体性を完全に無視していることが、共通点として指摘できよう。では、上記のような言説の構築に関与した人々にとって、事件の参加者とはいかななる意味を持つ存在だっ

たのであろうか。

イギリス側の言説から始めよう。事件当日のアレクサンドリア駐在のイギリス副領事は、外相グランヴィルに宛てた報告において、事件の発生を伝えたうえで、この事件をアラブ人とヨーロッパ人の間の「暴動」(riots)と呼び、警察はヨーロッパ人たちを保護するために介入することはなかったと述べている<sup>161)</sup>。ここから、すでにこの時点でイギリス側はこの事件をアラブ人とヨーロッパ人の間で起きた「暴動」だと認識していること、そして、警察が「暴動を鎮圧するために」ではなく、「ヨーロッパ人を保護するため」に介入しなかったという表現が、この「暴動」の主体は「アラブ人」であるというイギリス側の認識を暗に示していることが指摘できよう。

英國議会資料における事件についての証言も<sup>162)</sup>、単に「目撃者」としてだけではなく、「被害者」としての立場から行われている。すなわち、ヨーロッパ系住民は現地住民の暴力の被害者としてのみたちあらわれている。そして、彼らの証言のなかで現地住民たちは、ありとあらゆる否定的な言辞にいろいろとされている。それによれば、彼らは都市の下層階級で、暴徒(mob)であり、狂信主義(fanaticism)にとらわれた、暗殺者(asassin)で、そして麻薬の常習者(hashiash)である。

こうして、イギリス側の叙述においては現地住民側の暴力行使の残虐性のみが強調される一方、ヨーロッパ系住民の「被害者」たちから何らかの暴力が行使される際には、あく

157) このあたりの経緯については、Mayer 1988, pp.10-27を参照のこと。

158) それが意図的に行われているかどうかはともかく、こうした6月11日事件に関する叙述の特徴は、現在のアラブ人研究者による学術研究においても指摘できる。例えば、Isä 1972, pp.414-416を参考のこと。

159) この言説に対する反論については、Chamberlain 1977, p.25を参照のこと。

160) 例えば、プラントは軍隊と彼らとを区別しなければならないことを強く主張している。(Blunt 1969, p.313)

161) Vice-Consul Calvert to Lord Granville, no.97, 11 June 1882, HCSP, Egypt no.11 (1882), vol.82, C.3295; Malet 1909, p.402.

162) Mr. Herbert to Lord Tenterden, no.2, 14 August 1882, HCSP, Egypt no.16 (1882), vol.83, C.3390.

までも自衛のためであったことが強調され<sup>163)</sup>、両者の関係は固定的に把握されている。同様にロイルの叙述においても、実際には行われていたはずのヨーロッパ系住民の武装化の事実は否定され<sup>164)</sup>、ヨーロッパ系住民は現地住民の暴力の対象としてのみ描かれている。

文明化されたか、半ば文明化された国 (civilised or quasi-civilised country) に居住していた多数の無辜の (unoffending) ヨーロッパ人たちが「彼らの側からの」挑発なしに襲撃され虐殺されたということは、あまりにも酷い (bad enough) ことであった<sup>165)</sup>。

さらに、ヘディーウを事件の主謀者とするプラントも同様であった。事件に対するイギリスの責任を認めない以上、彼にとっての事件の主体は現地住民と憲兵隊のみであった。また、彼は事件における死者を200人以上としているが、その大部分、200人ほどがヨーロッパ人の死者であるとし、現地住民による一方的な暴力の行使を示唆している<sup>166)</sup>。すなわち、彼の事件に対する認識もまた、結局のところ「現地住民によるヨーロッパ人の虐殺」というものであり、その意味ではイギリス側の「虐殺」言説の形成に寄与するものであった。

一方、エジプト側ではまったく正反対の、しかし結果として「虐殺」言説を強化するような認識が表明されている。当時、事件の調査のためにアレクサンドリアに派遣したヤア

クーブ・パシャ・サーミーに対する指示のなかで、オラーピーは事件において店舗の略奪に関与したのはヨーロッパ系住民のみであり、現地住民たちは関与していないとの認識を示し、主犯が外国人たちであることを明らかにするようにと指示している<sup>167)</sup>。また、彼は、現地住民たちはヨーロッパ系住民たちの襲撃に対して自衛したに過ぎないと述べ、「暴動」の主体はむしろヨーロッパ系住民の側であると認識していた<sup>168)</sup>。この点に関しては事件直後のアレクサンドリアのアラビア語新聞も同様で、同じくヨーロッパ系住民の側にその責任があるとする論調で事件を伝えていた<sup>169)</sup>。

大戦間期に活躍した歴史家アフマド・シャフィーク Ahmad Shafiq も1930年代に出版した自伝のなかで6月11日事件に言及しているが、彼の記述も同じく事件をヨーロッパ系住民による暴力の行使を中心に描写してみせている。

……ヨーロッパ人たちは [建物の] 窓から [路上にいたエジプト] 国民 (waṭanīyūn) の歩行者 (mārr) 全員に対して発砲し始めた。そして群衆 (mutajamhrūn) の怒りは増し、事態は悪化した。群衆は応戦する術が無かったか、あるいは彼らの劣勢は明らかであった。結局、ヨーロッパ人たちは発砲する際には家屋の中で身を守っていたのである。ついには双方の間での戦闘 (qitāl) は大きいものになった<sup>170)</sup>。

163) Earl Granville to Sir E. Malet, no.3, 17 August 1882, *HCSP*, Egypt no.16 (1882), vol.83, C.3390.

164) Royle 1886, vol.1, p.88fn.

165) Royle 1886, vol.1, p.114.

166) Blunt 1969, p.309.

167) Naqqāsh 1884, vol.7, pp.14–15; ‘Urābī 1953, vol.2, pp.64–66; Sir E. Malet to Earl Granville, no.72, 8 October 1882, *HCSP*, Egypt no.4 (1883), vol.84, C.3468.

168) 彼は後に回想録を執筆する段階でもこうした見解を維持していた。(‘Urābī 1953, vol.1, p.145)

169) Phelps 1978, pp.223–224.

170) Shafiq 1934–1936, vol.1, p.148.

ここでもまた、無差別な暴力を行使する主体が入れ替わっている。イギリス側の叙述において現地住民であったそれは、彼の叙述においてはヨーロッパ系住民であった。彼らの暴力が事態を悪化させた原因であるとされる一方で、現地住民による暴力の行使は具体的には描写されない。

ファーマンの記述も同様の特徴を示している<sup>171)</sup>。彼は、ヨーロッパ系住民の発砲を事態悪化の原因として非難したうえで<sup>172)</sup>、さらに現地住民とヨーロッパ系住民の性格を以下のように対比してみせる。

エジプトのアラブ人たち（The Arabs of Egypt）は数世代にもわたり専横で、概して抑圧的な政府の支配下にあった。仮に元来彼らが異なる気質を持っていたとしても、[現在の]彼らは世界で最も平和的で、従順で、容易に統治できる人々となっている<sup>173)</sup>。

……エジプトのあらゆる地域で人々の間に確かな平和が存在していた。しかし、アレクサンドリア〔駐在〕のイギリス領事が密かにマルタのギリシア人たち（Maltese Greeks）を武装させ、彼の助言に従い、ギリシア領事が彼の〔管轄下にある〕人々に同様の措置を施した。そのため、エジプトにおいて最悪で、最も乱暴かつ危険な階級が、その暴動（riots）に彼らの血なまぐさい性格を付

与することになった<sup>174)</sup>。

そして、彼は両者が使用していた武器の差から、この事件を「ヨーロッパ系住民による現地住民の虐殺」であると結論づけている<sup>175)</sup>。

このように、イギリス側とエジプト側の間では事件の主体に関して、全く正反対の認識が存在していた。しかし、それでも双方ともこの事件を「暴動」あるいは「虐殺」であるとする点では、認識の一一致をみていくことを強調しておきたい。どちらの立場に立つにせよ、事件の参加者たちに対しても単なる「加害者」か「被害者」という役割しか残されていなかったのである。

そのような認識の下では、彼らが事件に参加した動機に意識が向けられることなどほとんど無く、せいぜい彼ら自身や、イスラームの狂信性に基づくものとされるだけであった。その最も露骨な例は、事件発生当時アレクサンドリアに居住し、イギリス紙『タイムズ』*the Times* の特派員を務めていたモバリー＝ベル C. F. Moberly Bell<sup>176)</sup>による、あるムスリムの言動についての描写である。そのムスリムは彼が雇っていたスピア人の小間使い（a Berber servant）であった。

……虐殺の起きる直前に、彼（スピア人の小間使い）は私に彼ら（モバリー＝ベルの子供たち）と私の妻を〔アレクサンドリアから〕立ち退かせた。なぜなら、

171) 彼については、本稿注156を参照のこと。

172) Farman 1908, p.304.

173) Farman 1908, p.304.

174) Farman 1908, p.311.

175) Farman 1908, pp.305-307.

176) モバリー＝ベル C. F. Moberly Bell (1847-1911年) はアレクサンドリア生まれのイギリス人。幼い頃両親を亡くしたため、その後はイギリスのおばのもとで養育される。1865年にエジプトに戻ってアレクサンドリアで職に就くかたわら、まもなく報道に関心を持ち、1890年までタイムズ紙の特派員を務めた。その間、エジプトの英字紙『エジプシャン・ガゼット』*Egyptian Gazette* が創刊された際（1880）に創刊者の一人に名を連ねるなどした後、1890年にイギリスに帰国し、1908年から亡くなる1911年までタイムズ紙の社長を務めた。DNB, s.v. "Bell, Charles Frederic Moberly 1847-1911"

彼は動乱が起きるであろうことを知っていたからである。彼らを立ち退かせると、彼は自分の郷里に行かなければならぬと言った。私は彼に理由を尋ねた。彼は、「アレクサンドリアに」とどまることが恐ろしいと言った。私が彼をからかうと、彼は「我々ムスリムはあなたがたキリスト教徒を殺したいと望むでしょう。私をキリスト教徒のいないところへ行かせて下さい。」と言った。彼は「宗教」が彼に私を殺すことを強いるだろう、とも言い、そして彼は去った<sup>177)</sup>。

このようにして、6月11日事件を「虐殺」とする言説は定着をみた。例えば、20世紀初頭にアレクサンドリアのガイドブックを著したフォースター E. M. Forster は「その日におよそ百五十人のヨーロッパ人が殺害されたといわれている」と記し、さらにオラービーの関与を示唆する記述を残している<sup>178)</sup>。また、事件当時11歳で家族と共にエジプトに居住していた M. Caillard は、後に著した自伝の中で、オラービーは以前から虐殺を計画しており<sup>179)</sup>、6月11日事件の結果、数百人のヨーロッパ人が殺害されたと述べている<sup>180)</sup>。これらの記述が示しているように、すでに公式には否定されたはずのオラービーをその主謀者とする「現地住民によるヨーロッパ系住民の虐殺」という6月11日事件に対する言説は、事件後40年以上の時を経た1920-30年代においても生きつづけていたのである。

#### 第四節 「虐殺」言説の再検討

前節では、6月11日事件に関する従来の言

説がはらんでいる問題点について指摘したが、以下ではそれを克服するための作業を行う。そのためには、事件を虐殺であるとする認識について、参加者たちの事件における行動形態に依拠しながら再検討する必要があるだろう。なぜなら、前述したように「調査委員会記録」には事件の参加者自身による証言が収録されておらず、彼らは常に目撃者によって表象される存在であるため、従来の言説の再検討には彼らの行動形態の分析が必要となるからである。しかし、事件の一方の当事者であるヨーロッパ系住民については検討に値するだけの情報が得られなかったため、ここでの検討対象は現地住民のみに限定する。

事件に参加した現地住民の行動形態は、主に施設への略奪とヨーロッパ系住民に対する襲撃の二つに大別できる。しかし、表2が示しているように、当時の休日（事件当日は西暦では日曜日にあたる）の習慣として、アレクサンドリアのヨーロッパ系住民の多くが散策に出かけていたラムル ar-Raml 区<sup>181)</sup>への騒乱の拡大が確認できることから、彼らがヨーロッパ系住民の殺害を目的としていたとは考えにくい。

一方、しばしば「虐殺」行為の主体であったとされる憲兵隊らに関しても、市警察本部周辺などの一部の地区を除けば、彼らがヨーロッパ系住民の殺害を主目的としていた形跡は存在しない。本来、市内の治安維持を任務としていた彼らは、銃（bunduqīya）や銃剣（singa）で武装しており、かなり強力な武力を有していた。しかし、平時においては銃には弾丸が装填されていなかったようである。そのためであろうか、彼らが銃床（kurnāfa al-bunduqīya）でヨーロッパ系住民を殴打す

177) Moberly Bell 1927, p.61.

178) Forster 1982 (reprint of 1922 ed.), p.100.

179) Caillard 1935, p.36.

180) Caillard 1935, p.38.

181) Naqqāsh 1884, vol.5, p.5. ラムル地区は、主にヨーロッパ系住民のために開発された郊外の保養地であった。(Reimer 1997, pp.131-132)

表2：6月11日事件における負傷者の地区別分類(1882年6月18日現在)

区名	現地住民側	ヨーロッパ系住民側
ラッバーン区	7	6
マンシーヤ区	17	10
アッターリーン区	2	1
グムルク区	1	4
ミナー・アルバサル区	3	0
ミナー区	0	0
ムハッラム・ベイ区	0	0
ラマル区	0	0
不明	5	26
合計	35	41

出典：Naqqāsh 1884, vol.8, pp.613-627より筆者作成。

るのが目撃されている<sup>182)</sup>。また、彼らの当日の行動に関する報告書によれば、彼らの多くは当日、武装せずに路上に出ていたという<sup>183)</sup>。こうした事実は、彼らの行動が少なくとも計画的なものではなかったことを示している。

略奪に関しては、「調査委員会記録」の諸証言によれば、現地住民らがその対象としていたのは“dakākin”であったという。すなわち、「店舗」であった。しかも、事件当日は日曜日であったためにヨーロッパ系住民の店舗の多くは休業中で、無人であった<sup>184)</sup>。そのためか、事件の過程で店舗への略奪が広い範囲で確認されるのに対し、負傷者の中に略奪された店舗の従業員はほとんど含まれていない。また、確認できる限りでは、ヨーロッパ系住民の負傷者が襲撃を受けた場所は路上か、あるいは略奪を受けた店舗内に限定されている。以上のことを考え合わせると、ヨーロッパ系住民の住居への襲撃はほとんど

行われていなかったものと思われる。英國議会資料中の証言においても、ヨーロッパ系住民の住居に対する投石などといった行為は確認できるものの、そこへの侵入は言及されていない<sup>185)</sup>。もちろんそれは、事件を目撃したあるイギリス人が記録しているように、扉の前にバリケードを築く<sup>186)</sup>などの自衛手段によるところも大きかったであろう。しかし、そうした状況下においても店舗に対する襲撃は行われていた。これらの事実からは同時に、やはり現地住民らはヨーロッパ系住民の殺害を意図していたわけではなかったことも分かる。

さらに、これを補強する事実を付け加えるならば、参加者の数の多さに比して、ほとんどの地区でヨーロッパ系住民の死者が出ていないことも指摘できる。「調査委員会記録」の証言では、事件への参加者の数がかなり多かったことを示す、“jumm ghafir” や “izdihām” といった表現が多く用いられている。また、

182) Naqqāsh 1884, vol.9, p.707.

183) Naqqāsh 1884, vol.9, p.706.

184) Mr. Mitchell to the Chief Secretary, Inclosure 5 in Mr. Herbert to Lord Tenterden, no.2, 14 August 1882, HCSP, Egypt no.16 (1882), vol.83, C.3390.

185) “Correspondence respecting the Riots at Alexandria on the 11th June 1882,” HCSP, Egypt no.16 (1882), vol.83, C.3390.

186) Kusel 1915, p.171.

その集団の数について具体的な数字が示されることもあった。少ない数で構成された集団もあったが、ある証言によれば、5千人ほどの大群衆が目撃されている<sup>187)</sup>。あるいは、2万人もの群衆が集まっていたという証言もある<sup>188)</sup>。また、英國議会資料にも、数百人規模の現地住民の集団を目撃したという証言がある<sup>189)</sup>。これらの数には多分に誇張が含まれているとしても、参加者がかなりの数にのぼっていたことだけは事実であろう。しかし、それにもかかわらず、実際には市内の多くの地域で死者の数は少數にとどまった。むしろ、多くの死者を出した市警察本部の周辺で発生した事態は、事件においては例外的なものであった。

以上のことから、参加者の主目的はむしろ店舗に対する略奪であり、ヨーロッパ系住民に対する暴力の行使は、多くの場合は略奪の際に付随的に起きた現象であると結論づけることができる。

しかし、事件の参加者らが単に略奪を目的としているのであれば、ヨーロッパ系住民が経営する店舗以外にも、現地住民の店舗やエジプト政府の施設などへの襲撃が行われていたことが予想されるが、そうした事実は「調査委員会記録」においては確認できない。例えば、ムハンマド・アファンディー・ワファー Muhammad Afandi Wafā という市の会計係の証言によれば、彼は事件当日にアッターリーン通り shāri‘ al-‘Aṭṭārīn にいたが、そこには倉庫 (khazina) があったため襲撃が懸念されていた。しかし、警備がなされていなかったにもかかわらず、結局そのような事

態にはいたらなかったという<sup>190)</sup>。さらに、以前から政府高官らのための高級住宅地として開発されていた半島部の北端の地域<sup>191)</sup>への騒乱の拡大も確認できない。騒乱が拡大した主な範囲は、表2が示すようにヨーロッパ系住民が人口に占める割合が高く、また商業・経済の中心地でもあったラッバーン、マンシーヤ、アッターリーンの3区であった。

では、彼らはヨーロッパ系住民の店舗に関しては無差別に襲撃していたのであろうか。残念ながら「調査委員会記録」には襲撃を受けた店舗の種類に関する言及は少ないものの、言及される店舗には共通する特徴がある。

第二節で指摘したように、「調査委員会記録」からは居酒屋や食料雑貨商が襲撃の対象となっていたことが分かる。この両者に共通しているのは、酒を扱っている商売であるという点である。居酒屋に関してはもちろんのこと、トレダノ E. R. Toledano によれば、食料雑貨商もまた自宅消費用に酒の販売を行っていたという<sup>192)</sup>。居酒屋では当然のことながら酒を提供または販売しており、それがイスラームの教義に反していることから一般的のムスリムからは忌避されていた。さらに、そうした宗教上の理由だけではなく、それが高利貸と共にギリシア人の主要な収入源の一つであったことから、騒乱時にはしばしば襲撃の対象となっていたことが以前から指摘されている<sup>193)</sup>。おそらく6月11日事件発生の背景にも、ヨーロッパ系住民の経済的な支配に対する反発があったものと思われる。また、ロイルによれば、タバコ屋も集中的に襲撃されていたという<sup>194)</sup>。これらの事実から、彼らの略奪行為は選択的なものであったと結論

187) Naqqāsh 1884, vol.8, p.556.

188) Naqqāsh 1884, vol.9, p.679.

189) Earl Granville to Sir E. Malet, 17 August 1882, no.3, HCSP, Egypt no.16 (1882), vol.83, C.3390.

190) Naqqāsh 1884, vol.9, p.666.

191) Reimer 1997, p.102.

192) Toledano 1994, p.244.

193) 加藤 1990, pp.285-287.

194) Royle 1886, vol.1, p.96.

づけることができる。

また、現地住民たちが食料雑貨商やタバコ屋など、彼らが日常的に利用していたと思われる店舗のみ集中的に襲撃していたという事実は、彼らの行動が政治行動としては少なくとも未成熟であったことも示している。外国政府の象徴的存在としての性格が強い各国の領事館が、6月11日事件のさなかにおいては全く襲撃の対象とはならず、むしろヨーロッパ系住民の避難所として機能していたことも<sup>195)</sup>、その証左となろう。例えば、1860年のダマスクスで発生した、ムスリムとキリスト教徒間の衝突事件ではヨーロッパ各国の領事館は襲撃を受け、さらに領事らもそれと認識されて襲撃されているほか<sup>196)</sup>、1858年に紅海沿岸の都市ジッダで発生した、キリスト教徒「虐殺」事件の際にもヨーロッパ諸国の領事館が襲撃されている<sup>197)</sup>。これらの事態と比較すると、6月11日事件における事態は、対照的である。しかも、事件当時のアレクサンドリアのヨーロッパ諸国の領事館は、事件がもっとも激しい展開を示した地域の一つであったマンシーヤ区の中心地、ムハンマド・アリー広場 *midān Muhammad 'Ali* 周辺に集中していたのである。

さらに、事件で殺傷されたヨーロッパ系住民の多くも、食料雑貨商や鍛冶屋(*haddād*)や大工(*najjār*)といった民間人であったうえ、その国籍もイタリア、ギリシア、イギリス、フランスなど多岐にわたっていた<sup>198)</sup>。

当時の政治状況を正確に認識したうえでの行動であるならば、英仏両国の政府関係者に襲撃を集中すると思われるが、そのような事態は起こらなかった。さらに、現地住民らは、ヨーロッパ系住民を襲撃する際には服装や言語などを基準として、相手がヨーロッパ系住民であるかどうかを識別していた。例えば、英國議会資料においては西欧風の服装をしていたために同胞から襲撃を受けた現地住民や、アラビア語が話せたために襲撃を免れたイタリア人の例が確認できる<sup>199)</sup>。すなわち、現地住民らによって外見上ヨーロッパ系住民であると判断された人物は、ただちに彼らの襲撃対象に加えられていた。こうした事実は、略奪を行う際の彼らの選択的な行動とは対照的に、現地住民がヨーロッパ系住民を襲撃する際の基準が非常に曖昧なものであったことを示すものである。こうなると、事件の過程においてヨーロッパ諸国の領事が襲撃を受けたのも、単に彼らがヨーロッパ系住民と認識されたからに過ぎないものと思われる。すなわち、コールが主張しているように<sup>200)</sup>、領事らはエジプトに対して不当な干渉を行う外国政府の代表者として襲撃されたわけではない。

以上のような事実から判断するに、彼らの行動の背景には、むしろ日常生活において生まれていたヨーロッパ系住民に対する敵意があったのではないだろうか。この点についてはコールやレイマーも指摘するように<sup>201)</sup>、

195) Vice-Consul Calvert to Earl Granville, no.104, 12 June 1882, 1 a.m., *HCSP*, Egypt no.11 (1882), vol.82, C.3295; Royle 1886, vol.1, p.103.

196) Fawaz 1994, pp.89–91.

197) Ochsenwald 1984, p.147.

198) Naqqāsh 1884, vol.8, pp.618–625.

199) Earl Granville to Sir E. Malet, 17 August 1882, no.3, *HCSP*, Egypt no.16 (1882), vol.83, C.3390; Kusel 1915, p.170.

200) コールは、イギリス領事クックソンが特に重傷を負ったことを指摘して、参加者の間に政治意識が浸透していたことを示す根拠としているように思われる (Cole 1993, p.255) が、そもそもクックソンの負傷は、それほど重傷ではなかった。これについては、*The Times*, 13 June 1882およびMalet 1909, p.404を参照のこと。

201) Cole 1993, pp.190–212; Reimer 1997, pp.133–134.

19世紀中葉以降のアレクサンドリアではヨーロッパ系住民と現地住民との間に緊張関係が恒常に存在していたのである。

ところで、ここまで現地住民側に限定して議論を進めてきたが、6月11日事件においては、現地住民による一方的なヨーロッパ系住民に対する暴力行為や略奪行為が行われていたわけではないことも指摘しておく必要があるだろう。たしかに、両者の死者数を比較すると、ヨーロッパ系住民の方が多い。エジプト政府によって公式に確認された6月11日事件の死者の数は、事件当日の死亡者が現地住民の側が3人、ヨーロッパ系住民の側が38人であり、さらに病院搬送後に死亡した現地住民4人を加えた計45人である<sup>202)</sup>。その他にも、各国領事館派遣の医師団によるヨーロッパ系病院に対する調査によって、さらにヨーロッパ系住民の遺体が7体確認されており<sup>203)</sup>、6月11日事件の死者数は計52人であった。仮に、もしこの公式記録を認めるならば、「現地住民によるヨーロッパ系住民の虐殺」という主にイギリス側によってなされた事件に対する認識も正しいものであろう<sup>204)</sup>。しかしながら、公式に確認された現地住民側の死者数に関しては、その少なさからイギリス側さえその確度に関して疑問を呈しているように<sup>205)</sup>、その信頼性は低い。

また、前述したように事件発生の直前にはクックソンらアレクサンドリア駐在の各国領事たちが、ヨーロッパ系住民に銃火器を与え

ることによって彼らを武装化していた。そして、実際に事件において彼らが主に使用した武器は銃火器であった。それに対し、現地住民によって武器として使用された道具は主に杖('asan)や棍棒(nabbūt)であった<sup>206)</sup>。その他に彼らが武器として使用したものは、垂木(mūrīnāt)や卓の脚(qawā'īm tarābīzāt)さらには水煙草の鉄製の口金(narābīs ḥadid)などであったという<sup>207)</sup>。現地住民側は火器を使用していない。なぜなら、当時のエジプトでは、遊牧民など一部の例外を除いて、一般人の火器の所持は禁じられていたからである<sup>208)</sup>。

このことを如実に物語っているのが、表3で示した6月11日事件における死傷者の負傷の内容である。それによれば、現地住民の死傷者には銃創が確認されることが多いのに対して、ヨーロッパ系住民の死者の死因はすべて打撲(darb)や裂傷(qat')によるものであり、彼らの負傷者も同様であった。このように両者の武力の差は歴然としており<sup>209)</sup>、公式の死傷者数が現実を反映しているとはとても考えることはできない。すなわち、現地住民たちの行動形態、および騒乱の規模の大きさに比した死傷者数の少なさなどから、事件を「現地住民によるヨーロッパ系住民の虐殺」であったとする認識は否定されなければならない。

202) Naqqāsh 1884, vol.8, pp.611-612. この数字は、1882年6月15日時点のものである。

203) Naqqāsh 1884, vol.5, pp.16-18. この数字は、1882年6月12日時点のものである。

204) 実際に、当時の『タイムズ』紙の特派員はそのような認識を示している。(The Times, 13 June 1882)

205) Vice-Consul Calvert to Earl Granville, no.111, 12 June 1882, HCSP, Egypt no.11 (1882), vol.82, C.3295; Malet 1909, p.404.

206) ファーマンによれば、これらの杖や棍棒は直径がおよそ4-5cmで、長さは150cmほどであるという。(Farman 1908, p.304)

207) Naqqāsh 1884, vol.8, p.466.

208) Farman 1908, p.304; Toledano 1994, pp.163-166.

209) 英国議会資料中にさえ、こうした両者の武力の差についての指摘がなされている。(Earl Granville to Sir E. Malet, 17 August 1882, no.3, HCSP, Egypt no.16 (1882), vol.83, C.3390)

表3：6月11日事件における死傷者の診断結果（1882年6月15日現在）

現地住民側	銃創/打撲・裂傷
エジプト人	18/10
スーダン人	2/1
スピア人	3/0
トルコ人	1/0
ユダヤ教徒(isrā'īlī)	0/1
不明	0/5
ヨーロッパ系住民側	0/38
ヨーロッパ人	0/37
ユダヤ教徒(isrā'īlī)	0/1
分類不能	0/2
arwām ra'iya	0/2

出典：Naqqāsh 1884, vol.8, pp.610-611より筆者作成。

しかし、その一方でファーマンなどが主張するように、両者の武力の差をその根拠として、事件を「ヨーロッパ系住民による現地住民の虐殺」<sup>210)</sup>であるとする認識にもまた問題があることを指摘しないわけにはいかない。

管見の限りでは、ヨーロッパ系住民による銃火器の使用は、騒乱状況が最初に発生したラッバーン、それに隣接するマンシーヤ、アッターリーンの3区に限定されている。なぜなら、銃撃によって負傷した現地住民は、この3区でのみ確認されるからである<sup>211)</sup>。すなわち、両者の武力の差が実際に確認されるのはこの3区においてのみであった。他の区ではそうした事実は確認できず、例えば市警察本部周辺などにおいては、むしろ現地住民側による一方的な暴力が行使されていた。また、しばしばこうした「虐殺」行為の主体は憲兵隊であるとする指摘がなされるが、すでに触れたように、検死報告によれば、殺害されたヨーロッパ系住民の遺体には鋭利な刃

物による傷跡のほか、殴打による打撲の痕跡も多く確認されている。事件において現地住民によって使用された武器の種類や、口々にラッバーン区での事態を噂しながら手に杖や棍棒を持ち、現場に向かう人々の姿が目撃されていることを考え合わせると、殺害行為には憲兵隊らだけではなく、一般の民衆も関与していたと考えられ、彼らだけに責任を帰することはできない。

すなわち、オラービーが考えていたように、現地住民のすべてがその場に偶然居合わせて、そして自衛のためにヨーロッパ系住民に対して反撃したわけではなかった。6月11日事件の全過程においては、現地住民・ヨーロッパ系住民のいずれかが一方的に暴力を行使していたわけではないことをふまえておくべきである。

また、死傷者数については、公式に確認されたもの以外にも、多くの人々がさまざまな数字を示してはいるが、そのいずれも明確な根拠に乏しい。第三節で指摘したように、6月11日事件に関する全ての歴史叙述が有する性格のため、イギリス側の叙述においてはヨーロッパ系住民の死傷者を多く算出し、一方、エジプト側の叙述では現地住民の死傷者を多く数える傾向がある。結局のところ、双方とも自分たちの被害を相手の被害よりも大きいと主張しているに過ぎず、ここでこの論争に参加しても、得るところは少ない。結局のところ、正確な死傷者の数を把握することは困難であり<sup>212)</sup>、死傷者の数のみに基づいて事件に対する評価を下すことは避けるべきである。

210) こうした見解は、現在の欧米の学術研究においても示されている。例えば、Schölich 1981, p.250; Cole 1993, p.281などを参照のこと。

211) Naqqāsh 1884, vol.8, pp.613-617.

212) Consul Cookson to Earl Granville, no.229, 17 June 1882, HCSP, Egypt no.11 (1882), vol.82, C. 3295.

### 第五節 オラービー運動における6月11日事件

前節では、6月11日事件を虐殺事件であるとする言説を、事件に参加した現地住民の行動形態を分析することによって再検討し、その言説の妥当性を否定した。しかし、こうした結論は当然のことながら事件に対する新たな解釈の提示を要請する。それを提示することが、本節の目的である。彼らはどのような意識に基づいてこの事件に参加したのであろうか。仮に、前述したように彼らの行動の主な目的が略奪にあったとしても、やはりオラービー運動との関連を考慮しないわけにはいかないだろう。なぜなら、アレクサンドリアの住民代表によって起草されたオラービーへの支持と英仏両国の内政干渉に反対する文書の存在や<sup>213)</sup>、オラービーがアレクサンドリアを訪問した際の市民の歓迎ぶりが示しているように<sup>214)</sup>、アレクサンドリアにおいてもオラービーは絶大な支持を得ていた。事件発生の原因を、当時アレクサンドリアの沖合に停泊していた英仏およびギリシアの艦隊の存在が現地住民らを刺激したとするにせよ<sup>215)</sup>、またエジプト各地から避難のためにアレクサンドリアに集まっていた数多くの外国人たちの存在が一因であったとするにせよ<sup>216)</sup>、上記のような事実は、この事件に参加した現地住民たちの行動がオラービー運動の文脈のなかで把握されることを求めるであろう。

そのうえで注目すべきは、憲兵隊の存在である。第一節で指摘したように、彼らはオラービー運動を支持していたほか、軍隊とも

密接な関係を持っていた。また、事件の過程においては、彼らが現地住民らと共同行動をとっていたことが確認できる。これについては、例えば以下のよう証言がある。

その騒動のなかで、彼ら（憲兵隊）は現地住民らに「キリスト教徒がお前たちを殺そうとしているぞ。」と叫んでいました。彼らの前後には多数の現地住民がいて、ある者たちは木片を持ち、ある者たちは椅子のあしを持ち、また棍棒を持っている者たちもいました<sup>217)</sup>。

そして、なかでも両者の関係を最もよく示している事例が、市警察本部周辺で発生した事態である。そこでは、彼らは現地住民を煽動する一方で、自ら主体的にヨーロッパ系住民の殺害に関与している。さらには、現地住民に武器を配布することによって、騒乱状態のさらなる拡大を図っている<sup>218)</sup>。また、騒乱の発生地点となったラッバーン区警察署周辺においても、彼らは騒乱の拡大を抑止するどころか、むしろ現地住民を煽動していた。

さらに、「調査委員会記録」に収録されている尋問記録の多くが彼らに対するものであるうえ、この事件における彼らの存在の大きさを示すかのように、調査委員会は彼らの当日の行動に関する詳細な報告書を作成している<sup>219)</sup>。

従来の研究では、彼らの事件への関与について、例えばコールは彼らの治安維持能力の低さが、事件の参加者たちに行動の自由を与えていたと述べ<sup>220)</sup>、彼らの事件への関与を

213) Broadley 1884, p.174

214) Farman 1908, p.302.

215) Gassick (tr. & ed.) 1982, p.27.

216) Naqqāsh 1884, vol.5, p.3.

217) Naqqāsh 1884, vol.8, p.476.

218) 配布された武器とは、前述したように木片であったが、ある証言によれば、杖や棍棒などは平時から市警察本部に保管されており、それらが含まれていた可能性も否定できないであろう。  
(Naqqāsh 1884, vol.8, p.474)

219) Naqqāsh 1884, vol.9, pp.706-721.

220) Cole 1989, p.130.

受動的なものとしてとらえているが、上記のような事実を考えると、むしろ彼らは事件に主体的に関与していたと考えられる。

現地住民らが事件に参加した経緯の解明においても、憲兵隊の存在は重要である。コールは、事件の逮捕者名簿に依拠して、職能集団に基づく結合関係によって現地住民が事件に参加したと主張しているが、彼自身も指摘しているように<sup>221)</sup>、そうした組織化の網にとりこまれていなかった人々も事件に多く参加していたであろうことは想像に難くない。しかも、実際に職能集団による組織化は、アレクサンドリアの労働人口のほぼ半分にしか及んでいなかった<sup>222)</sup>。

また、憲兵隊は、事件に参加して現地住民を煽動しつつ、自らも略奪・殺傷行為に関わっただけでなく、前述したように一部の地域では治安維持にも従事していた。そして、その場合、彼らに対する現地住民らの抵抗は「調査委員会記録」では確認することができない。むしろ、彼らが憲兵隊らに対して非常に従順であったという数多くの証言が行われている。例えば、憲兵隊のアフマド・ハッキー Ahmad Haqqī 少佐 (bikbāshi) は、事件当日マンシーヤ区で現地住民の鎮圧にあたっていたが、彼らは普段どおり非常に従順であったと証言している。そして、彼は10人ほどの現地住民を逮捕したが、その際にも銃やその他の武器を使用する必要には迫られなかったとも述べている<sup>223)</sup>。同様に、事件当時ラッバーン区警察署に勤務していた消防隊員のムハンマド・ハリーファ Muhammad Khalifa も、現地住民らは自らの指示に従順で、彼らを制止するために武器を用いる必要は無かったと証言している<sup>224)</sup>。

こうした彼らの証言をそのまま信用するこ

とはできないにしても、事件の過程において現地住民と治安維持関係者との関係は、少なくとも対立的なものではなかった。このことは、6月11日事件発生の契機となったとされる例の諍いの際に、「アラブ人」の警察官に対しては非常に従順であった反面で、外国人警察官に対しては非常に反抗的であったマリージー・サラームの態度からもうかがわれる。

また、これは現地住民と軍隊との関係においても同様で、軍隊によって秩序が回復された際に、事件の参加者たちと軍隊との間で衝突があったという事実は「調査委員会記録」においては確認されない。しかも、これは鎮圧のために投入された兵力が圧倒的であったからではない。なぜなら、事件当時二個連隊から構成されていたアレクサンドリア駐屯軍のうち、投入された兵力は二個大隊のみであったからである。

このように、憲兵隊や軍は、現地住民に対して強い影響力を行使しえる立場にあった。では、このような両者の関係は、6月11日事件のさなかに急速に形成されたものなのであろうか。この問い合わせるために、以下ではアレクサンドリアにおける三者の関係を示す二つの事例を紹介しよう。第一の事例は、1881年7月25日に、兵士の死亡事故を契機として発生したある騒動である。以下は、シャールビームの記述から引用したこの事件の顛末である。

……城砦 (al-qilā') に駐屯していたある兵士 (jundi) が、マンシーヤのある広場を歩いていた。すると、ある外国人 (ahad an-nuzalā') の〔乗った〕馬車 ('araba) が彼とぶつかって、そして彼は即死した。彼の同僚の何人かが〔死亡

221) Cole 1993, p.256.

222) Reimer 1997, p.161.

223) Naqqāsh 1884, vol.9, p.675.

224) Naqqāsh 1884, vol.9, p.686.

した] 彼を見つけ、そのもとに急ぎ、馬車に乗っていた人物を探したが、地にもぐったか、天にのぼって隠れたかのように見つからなかった。すると、兵士たちの一団は [その兵士の] 遺体を抱え、ラアス・アッティーン宮殿へと向かい、彼らのあとには数多くの市場の民や、騒ぎたてている人々 (*khalq al-kathir min as-sūqa wa al-ghawghā'*) が続いた。彼らは叫び、興奮していた。彼らは外国人 (*ajnabi*) とすれ違うと、彼を口汚くのしり、騒ぎたてる人々の叫びは増した。人々の店舗 (*ḥawānīt an-nās*) の一部が略奪された。人々 (*nās*) は巻き添えをくうのを恐れ、自分たちの店舗を閉め、その知らせが広まった。(中略) [アレクサンドリア市警の] 警察官ら (*nafar min ashāb ash-shurṭa*) が、彼らからその遺体を受け取ろうとしたが、彼らは抵抗し、遺体をヘディーウの御前 (*maqqar al-khidīw*) に捧げるとして、それ以外のことを拒絶した。そして、大衆の叫び (*ṣiyāḥ al-‘āmma*) と女性たちの嘆き (*walwala an-nisā'*) の中を彼らは進み続け、ついにラアス・アッティーン [宮殿] の中庭に入り、例の遺体をヘディーウの居室の窓の前に置き、叫んだ。「アッラーがあなたに勝利をお与え下さいますように (*naṣaraka allāh*)。おお、我らが主人 (*afandīnā*: ヘディーウに対する呼称) よ、あなたの治世においてキリスト教徒たち (*naṣārā*) が我々を殺すがままにしないで下さい。我々に [兵士を撲いた] 馬車の持ち主を引き渡してください。おお、我らが主人よ、アッラーが宗教の敵に対する勝利をあなたにお与え下さいますように (*yā afandīnā naṣaraka allāh ‘alā a‘dā’*)

*ad-dīn*)。」するとヘディーウは即座に [居室の] 窓から [その様子を] 見て、彼らを丁重に扱い、なだめて、約束し、遺体を警察の施設 (*dār ṣāḥib ash-shurṭa*) に運ぶように命じた。すると、彼らはこう叫んだ。「それは認められません。おお、我らが主人よ、キリスト教徒、キリスト教徒、彼らを皆殺しにして下さい。」すると、彼 (ヘディーウ) は彼らの感情をしづめ、なだめるために彼らのところに護衛の将校を何人か派遣した。しかし、彼らは喚いたり、叫んだりするのを止めなかった。その間に [アレクサンドリア市] 警察の長官と彼を補佐する人物がやってきた。そして彼らは力づくで遺体を [彼らから] とりあげ、それと共に去った。彼らに騒ぎたてている人々が続いた。その事件の知らせがカイロに伝わると、[カイロの] 人々はそれを誇張し、混乱し、騒ぎたて、ついにはアレクサンドリアの通りで、軍と西欧人の集団 (*ṭawā’if al-ifranjīya*) の間で戦闘が起きたと語った。そして警察長官は軍隊のその一団を逮捕し、数日投獄し、そして彼らに重い刑を下した。彼らに対する判決の知らせが広まると、アレクサンドリアの軍隊 [の人々] は激高し、彼らは彼らの一団に起きたことに対して不満と反対の意を表した。そして、その日に彼らは大挙して西欧人の集団が居住している路地 (*aziqqa*) や街区 (*ḥārāt*) を動き回った。そして、アレクサンドリアの住民全員に恐怖が広がった<sup>225)</sup>。

また、そのおよそ半年後には、今度は警察官 (*rajl min ash-shurṭa*)<sup>226)</sup> が殺害されたことを契機として騒動が発生している。以下も、

225) *Shārūbim* 1898–1900, vol.4, pp.238–239.

226) 原文では “shurṭa” であるが、「調査委員会記録」でいうところの “būlis” ではなく、憲兵隊のことではないかと思われる。なぜなら、シャールビームは、6月11日事件に関する記述の部分でも憲兵隊のことを “shurṭa” と表記しているからである。*(Shārūbim* 1898–1900, vol.4, p.298)

シャールーピームによる記述からの引用である。

1299年ムハッラム月17日（西暦1881年12月9日）に、ある警察官が〔アレクサンドリアの〕路上で殺害されているのが発見されたという知らせが広まった。その遺体を最初に発見した人物はイタリア人であった。そして彼は市庁舎（maqarr al-muḥāfiẓ al-madīna）へ行き、市長にそのことを知らせた。そして、その知らせが広まり、その警察官の同僚たちはそのことを知ると、彼らはそのイタリア人が殺害の犯人であると考えた。そして、彼らは騒ぎ立てて、激高して、銃（banādiq）を持ってそのイタリア人を追った。彼は市庁舎に身を隠した。すると、彼らは強引に彼〔の身柄の引き渡し〕を求め、内部に乱入した。彼らはひどく激高していて、彼らの一部は殺害現場へ行った。そして彼〔の遺体〕を抱え、市庁舎の前に運ぶと、彼らは叫んだり、喚いたりし、〔件の〕イタリア人に危害を加えるために彼〔の引き渡し〕を要求した。そのかたわらには騒ぎたてている人々（ghawḡāḥ）が集まっており、騒ぎが大きくなつた。人々（nās）は中に入ろうとその門前に殺到した。すると市長が彼らのところにやって来て、丁重に彼らに対応し、そして遺体を運んで埋葬するよう指示した。しかし彼らはそれを拒み、彼に呼び、言った。「これはお前には認められない。おお、ムスリムよ。我らが彼を襲うために、今すぐ我々のもとにそのキリスト教徒（an-naṣrāni）を連れてきてくれ。さもなければ、我々は遺体と共にカイロに向かう。」そして、いがみあいは激しくなり、人々は恐れ、外国人たち（ajānib）は避難し、商店主

たちは自分たちの店舗（ḥawānīt）を閉めた。そこで、市長はこのことを知らせるため、ムハンマド・シャリーフ・パシャ Muhammad Sharif Bāshā 首相（wazīr）に使者を派遣した。彼は、事態を重大であるとみなし、市長に対して事態の收拾を命じた。また、〔アレクサンドリアの〕警察長官（ṣāḥib ash-shurṭa）に対し、彼らが安定を維持するよう書面で指示し、そして彼らに事件を調査するために代表団を派遣するとした。そこで、市長と警察長官は〔秩序の回復に〕全力を尽くし、ついにその群衆（jamā‘a）を解散させた。彼らはその遺体を抱え、夜にそれを埋葬した。そして人々は、恐怖のなかその日の夜を過ごした。翌日、ムハンマド・シャリーフ・パシャ首相の代表団がアレクサンドリアにやって来て、詳細な調査を行った。イタリア人が犯人であるとは認められず、彼はその罪を犯してはいなかった。そこで、彼らは彼を釈放した。〔その後〕例の警察官を殺害した〔真の〕犯人は、彼の同僚であることが証明された。そして、騒乱（fitna）は收拾し、恐怖心は静まった<sup>227)</sup>。

以上の二つの騒動に関して、6月11日事件との関連でもっとも注目すべき点といえば、前者の騒動においては“sūqa”や“ghawḡāḥ”あるいは“‘āmma”や“nisā”という表現によって、後者の騒動においては“ghawḡāḥ”や“nās”という表現によって確認される、事件への民衆の参加である。二つの騒動とも軍隊や警察の関係者が事故によって死亡、あるいは殺害されたことによって起きた事件に過ぎないにもかかわらず、アレクサンドリアの多数の民衆がそれに対する抗議行動や要求行動に自発的に参加していた事実は、アレクサンドリアにおける軍隊や警察と民衆との間

227) Shārūbim 1898–1900, vol.4, p.261.

の連帯意識の存在を示すものといえよう。もちろん、日常生活での兵士や警察官といった官憲に対する一般民衆の認識は、必ずしも一様ではなかったであろう。しかし、この二つの事例からは、確かに両者の間に連帯意識が存在していたことを確認できるのである。また、この二つの事例は、当時のアレクサンドリアにおいては軍隊や警察とヨーロッパ系住民との間にも緊張関係が存在していたことも示しており、これもまた6月11日事件において彼らと現地住民との間の結合関係を強化する要因であったろう。

このように、6月11日事件において示された両者の間の結合関係は、事件以前から形成されていたのである。こうした経緯を考慮すれば、6月11日事件後にヨーロッパ系住民たちが、軍隊が現地住民と共に自分たちを襲撃するかもしれない懸念していた<sup>228)</sup>ことも理解できる。

また、この二つの事例は、現地住民と軍隊や警察などによる集合行動が、必ずしも6月11日事件のような激しい暴力性を帯びるとは限らないことをも示している。その発生の契機において、6月11日事件と共通点を有するこの二つの騒動においては、若干の略奪行為が行われたものの、その参加者たちは問題の解決を自らの実力行使に求めることなく、ヘディーウあるいは市長といった、統治権力の頂点に位置する人物、あるいはそれをアレクサンドリアで代表する人物に対して問題の解決を求める、という行動に出ている。

さらに、上記二つの騒動における直接の当事者は軍隊および警察であって、事件の過程においては間違いなく彼らが指導的な役割を果たしていたことにも注目しておきたい。そして、この二つの騒動に6月11日事件を加えた事件のいずれにおいても現地住民は軍隊や警察あるいは憲兵隊と協調した行動をとっている。何度も指摘しているように、6月11日

事件においても憲兵隊が指導的な役割を担っていた。すなわち、6月11日事件においてみられた現地住民の参加者たちによる一部で過剰ともいえる暴力の行使は、ラッバーン区で起きたようなヨーロッパ系住民の側からの攻撃も一因として指摘できるだろうが、憲兵隊らと現地住民との間の結合関係の存在を考えると、憲兵隊らの煽動もその一因であったと考えるのが妥当であろう。すなわち、現地住民の事件における行動には、憲兵隊らの行動に規定されていた一面があったのである。

軍隊や憲兵隊と現地住民との間に、こうした連帯意識が形成されていた背景としては、両者が共に農村の、それも上エジプトの出身者から主に構成されていたという事実が指摘できる。以下では、6月11日事件の行動主体の内部構成について少し検討を加えてみよう。

すでに指摘したように、「調査委員会記録」の証言においては、参加者らについての詳細な言及が行われることはほとんど無い。また、英國議会資料など他の6月11日事件に関する史料も全く同様で、そのほぼ全てにおいて彼らについての詳細な情報が欠落している。そのなかでも彼らは「アラブ人」(arabs)あるいは「現地住民」(natives), 「ムスリム」(muslims)と表記されるのみであり、これらの叙述から事件の参加者たちがどのような人々であったのかについての情報を引き出すことはほとんど不可能である。ただ、彼らのなかに都市の下層民が含まれていたであろうことは、“sifla”や“the lowest class”という表現などから推測できるのみである。

こうした史料状況の中で、ナッカーシュやシャールービームによる6月11日事件の参加者たちに関する記述は貴重である。彼らの記述からは、事件の行動主体であった都市下層民についてのさらに詳しい情報を引き出すことができる。まず、ナッカーシュによれば、遊牧民(badawi)のほか、出身としては

228) Naqqāsh 1884, vol.5, p.12.

スーダン人(sūdānī), 上エジプト人(sha‘īdī)などが、職業的には港湾労働者(hammālūn), ロバ追い(hammārūn)などが事件に参加していたという<sup>229)</sup>。また、シャールービームによれば、ロバ追い(hammārūn), 荷かつぎ人夫(shayyālūn), 浮浪者(kasil), シャイフ・アルハーラ(mashāykh al-hārāt), タリーカのシャイフ(mashāykh at-turuq), 警察官の一団(jamā‘a min ašhāb ash-shurṭa)<sup>230)</sup>などが事件後に逮捕されている<sup>231)</sup>。

これらの逮捕者の内訳が示しているように、6月11日事件の参加者には、アレクサンドリアに移住してきてまだ間もない人々の占める割合が多かった。なぜなら、ロバ追いや港湾労働者、荷担ぎ人夫といった非熟練労働は、第一節でも触れたように、主に19世紀中葉以降にアレクサンドリアに大挙して流入してきたスーダンや上エジプトからの移住者たちの主な就業先であった。そして、彼らは主にマフムーディーヤ運河沿いの地域、すなわちミーナー・アルバサル、ムハッラム・ベイMuḥarram Bik両区にまたがる地域に集住していたが<sup>232)</sup>、1897年センサスによれば、アレクサンドリアのロバ追いの5割以上が、港湾労働者は6割以上がこの両地区に居住していたのである<sup>233)</sup>。

一方、例えば憲兵隊の隊員たちも、その多くは地方の出身者であった。すでに指摘したように、軍隊が彼らの人材の供給源であった

が、彼らはすべて地方の出身者から構成されていた。「調査委員会記録」から確認できる限りでは、上エジプトの出身者も多い<sup>234)</sup>。この両者の間に存在する親和性も、事件においてその結合関係を強化したと考えられる。

従来からオラービー運動研究においては、運動を指導した軍隊将校の出身階層などの分析を通じて、軍隊という存在が民衆と運動を結合させる役割を果たしていたという指摘がしばしばなされてきた<sup>235)</sup>。その意味で、オラービー運動期における軍隊は、まさに民衆の代表者であった<sup>236)</sup>。そして、これ以降、エジプトにおいて軍隊が「民衆の代表者」という姿勢を示しながら行動する政治文化が成立したという指摘もある<sup>237)</sup>。そして、その軍隊と強い結びつきを有していた憲兵隊は、おそらく現地住民らによって軍隊と同一視されていたものと考えられる。6月11日事件においては、まさに憲兵隊こそがアレクサンドリアの民衆とオラービー運動とを媒介する存在だった。

すなわち、6月11日事件への現地住民らの参加を促した要因として、憲兵隊が彼らの行動を黙認、あるいは自ら事件に積極的に関与したことが指摘できる。それによって、現地住民たちは、自分たちの行動が承認を受けたものと認識したのではないだろうか。

ただ、このように考えてくると、事件に参加した現地住民らに一定の受動性があったこ

229) Naqqāsh 1884, vol.5, p.5.

230) 実際に逮捕されたのは、多くが憲兵隊であった。このことからも、シャールービームのいうところの警察(shurṭa)とは、憲兵隊のことであると考えられる。

231) Shārūbim 1898-1900, vol.4, p.299.

232) Reimer 1997, p.97. こうした傾向は、20世紀の半ばにおいても継続して観察される現象である。(長沢1991, pp.233-237)

233) Gouvernement Égyptien 1898, vol.1, pp.78-81.

234) 「調査委員会記録」において出身地が確認できる28人の憲兵隊員のうち、17人が下エジプト出身者で、11人が上エジプト出身者であった。特に11人の上エジプト出身者のうち9人がミニヤ県以南の出身者であった。

235) 例えは、板垣 1963, pp.281-282における板垣雄三の指摘を参照せよ。

236) それを象徴的に示すものとして、オラービー運動の過程で行われた代表権委任運動がある。これに関しては、栗田 1999を参照のこと。

237) 栗田 1999, p.250.

とは否定できない。しかし、彼らの行動は、憲兵隊らによる意識的な組織化などでは決してなく、むしろ事件以前から両者の間に存在していた結合関係に基づく彼ら自身による主体的な選択であった。

民衆運動の研究においては、「上からの」指導と「下からの」自発的な動きのいずれを重視するかという議論がある。しかし、6月11日事件への民衆の参加は、どちらか一方によってではなく、双方によって実現されたものであった。すなわち、この事件を引き起したのは、日常的にヨーロッパ系住民との間に対立関係を抱えていた現地住民らの意識と、事件においては憲兵隊が代表していた、民衆に対するオラービー運動の影響力であった。

### おわりに

以上まで、6月11日事件について論じてきた。まず、従来の研究では軽視されてきた事件の経過をその当事者たちの証言に基づいて可能な限り詳細に再構成した。そして、事件以後に展開されたイギリス側とエジプト側双方の事件に関する歴史叙述が、事件の主謀者の特定を通じて相手側に事件の責任を帰そうとしつつも、あるいは、まさにそれゆえに「虐殺」という事件に対する歪んだ認識を形成し、共有していたことを明らかにした。そのうえで、事件参加者の行動形態の分析を通じて、従来の言説に対する反論を行いつつ、6月11日事件に対する新たな解釈を提示することを試みた。結果、オラービー運動において指導的役割を担った軍隊と密接な関係を有し、そしてアレクサンドリアの民衆とも強固

な結合関係を形成していた憲兵隊が事件に関与していた事実を鍵として、一般民衆がオラービー運動へと参加していく一過程として6月11日事件を捉えなおした。

しかし、6月11日事件に関してさらなる検討を行うためには、やはり参加者の大部分を構成していた「民衆」自身の証言がどうしても必要になるだろう。これまで再三指摘してきたが、「調査委員会記録」には、彼らの証言は収録されていない。さらに、本稿が依拠した証言は、自らを事件の参加者と認めたうえで発言されたものではない。つまり、その証言からたちあらわれる事件の参加者たちの姿は、いまだ他者によって表象されたものに過ぎないといえる。コールが指摘しているように、事件後には多数の「民衆」が事件に関与したとして逮捕されている。未だ彼らの証言記録の存在は確認されていないが、彼らに対する尋問が行われなかったと考えるほうが不自然である。エジプトの文書管理状況を考えると、こうした史料の開拓には多くの困難が存在すると思われるが、それが実現したならば、事件の参加者の姿とその意識のありようをより具体的に示すことができるだろう。

また、6月11日事件が以後のアレクサンドリア都市社会に残した影響の検討など、近代アレクサンドリア研究とも接合するような問題設定も、今後の課題として残されている。レイマーが言うように「植民地主義の橋頭堡」であった近代アレクサンドリアの文脈に6月11日事件を位置づけることによって、事件への評価がさらなる再検討を迫られることは間違いない。

### 参考文献一覧

#### 一次資料

1. 英国議会資料(慶應義塾大学、東京)  
*House of Commons Sessional Papers* (abbr. HCSP).  
“Correspondence respecting the Affairs of Egypt.” Egypt no.11(1882), Command Paper(C.)3295.

- "Correspondence respecting the Riots at Alexandria on the 11th June 1882." Egypt no.16 (1882), C. 3390.
- "Correspondence respecting the Affairs of Egypt." Egypt no.17(1882), C.3391.
- "Correspondence respecting Indemnity Claims arising out of the Alexandria Riots and Subsequent Events." Egypt no.4(1883), C.3468.
- "Papers relating to Lord R. Churchill's Charges against his Highness the Khedive." Egypt no.4(1884), C.3851.

## 2. その他

- Blunt, W. S. 1969. *Secret History of the English Occupation of Egypt: Being a Personal Narrative of Events*. London: Gregg International.
- Broadley, A. M. 1884. *How We Defended Arabi and His Friends*. London: Chapman and Hall, Limited.
- Caillard, M. 1935. *A Lifetime in Egypt: 1876-1935*. London: Grant Richards.
- Cromer, Earl of(Evelyn Baring). 2000(reprint of 1908 ed). *Modern Egypt*, 2vols., London & New York: Routledge.
- Farman, E. E. 1908. *Egypt and its Betrayal: An Account of the Country during the Periods of Ismail and Tewfik Pashas, and of How England Acquired a New Empire*. New York: The Grafton Press.
- Gassick, T. le(tr. & ed.). 1982. *The Defence Statement of Ahmad Urabi*. Cairo: The American University in Cairo Press.
- Gouvernement Égyptien. 1898. *Recensement Général de l'Égypte 1<sup>er</sup> Juin 1897-1<sup>er</sup> Moharrem 1315*, vol.1, Le Caire: Imprimerie Nationale.
- Kusel, Baron de. 1915. *An Englishman's Recollections of Egypt, 1863 to 1887*. London: John Lane, The Bodley Head.
- Malet, E. 1909. *Egypt: 1879-1883*. London: John Murray.
- Moberly Bell, E. H. C. 1927. *The Life & Letters of C. F. Moberly Bell*. London: The Richards Press Limited.
- Naqqash, Salim Khalil an-. 1884. *Miṣr li al-Miṣriyīn*, vols. 4-9, al-Iskandariya: Maṭba'a Jarīda al-Maḥrūsa.
- Royle, C. 1886. *The Egyptian Campaigns, 1882 to 1885, and the Events which led to them*, 2vols., London: Hurst and Blackett, Publishers.
- Shārūbim, Mikhā'il. 1898-1900. *al-Kāfi fi Ta'rīkh Miṣr al-Qadīm wa al-Hadīth*, 4vols., al-Qāhira: al-Maṭba'a al-Kubrā al-Amīriyya.
- Shafiq, Ahmad. 1934-1936. *Mudhakkirātī fi Nisf Qarn*, 2vols., al-Qāhira: Matba'a Miṣr Sharika Muṣāḥama Miṣriyya.
- 'Urābi, Ahmad. 1953. *Mudhakkirāt 'Urābi: Kashf as-Sitār 'an Sirr al-Asrār fī an-Nahḍa al-Miṣriyya, al-Mashhūra bi-ath-Thawra al-'Urābiyya, fi 'āmi 1297 wa 1299 al-Hijrīyatain, wa fī 1881 wa 1882 al-Milādīyatain*, 2vols., al-Qāhira: Dār al-Hilāl.

## 二次資料

- 'Āshūr, Nu'mān. n.d. *Şuwar min al-Buṭūla wa al-Abṭāl*. al-Qāhira: ad-Dār al-Qawmiya li at-Tibā'a wa an-Nashr.
- Baer, G. 1964. *Egyptian Guilds in Modern Times*. Jerusalem: Israel Oriental Society.
- Berg, W. G. 1995. *Historical Dictionary of Malta*. Lanham & London: The Scarecrow Press.
- Chamberlain, M. E. 1977. "The Alexandria Massacre of 11 June 1882 and the British Occupation of Egypt." *Middle Eastern Studies*, 13/1, pp.14-39.
- Cole, J. R. I. 1989. "Of Crowds and Empires: Afro-Asian Riots and European Expansion, 1857-1882." *Comparative Studies in Society and History*, 31/1, pp.106-133.
- . 1993. *Colonialism and Revolution in the Middle East: Social and Cultural origins of Egypt's Urabi Movement*. Princeton: Princeton University Press.
- Crabbs, J. A., Jr. 1984. *The Writing of History in Nineteenth-Century Egypt: A Study in National Transformation*. Cairo: The American University in Cairo Press.
- Deringil, S. 1988. "The Ottoman Responses to the Egyptian Crisis of 1881-1882." *Middle Eastern Studies*, 24/1, pp.4-24.
- Fawaz, L. T. 1994. *An Occasion for War: Civil Conflict in Lebanon and Damascus in 1860*. London & New York: Centre for Lebanese Studies.
- Forster, E. M. (intro. by L. Durrell) 1982(reprint of 1922 ed.). *Alexandria: A History and A Guide*. London: Michael Haag Ltd.

- Galbraith, J. S. & A. L. as Sayyid-Marsot. 1978. "The British Occupation of Egypt: Another View." *International Journal of Middle Eastern Studies*, 9, pp.471-488.
- Galbraith, J. S. 1979. "The Trial of Arabi Pasha." *Journal of Imperial and Commonwealth History*, 7/3, pp.274-292.
- Goldschmidt, Jr., A. 1994. *Historical Dictionary of Egypt*. Metuchen & London: The Scarecrow Press.
- Hopkins, A. G. 1986. "The Victorians and Africa: A Reconsideration of the Occupation of Egypt, 1882." *Journal of African History*, 27, pp.363-391.
- Hourani, A. 1968. "Ottoman Reforms and Politics of the Notables." *Beginnings of Modernization in the Middle East: The Nineteenth Century*. (W. Polks & R. Chambers, eds.), pp.41-68, Chicago: University of Chicago Press.
- 飯塚正人 1990「オラービー運動期のムハンマド・アブドゥフーシャリーア施行を巡る戦い—」『オリエント』33/2, pp.20-35。
- ‘Isā, Ṣalāḥ. 1972. *ath-Thawra al-‘Urabiya*. Bayrūt: al-Mu’assasa al-‘Arabiya li ad-Dirāsāt wa an-Nashr.
- 板垣雄三 1963「オラービー運動（1979-1882）の性格について」『東京大学東洋文化研究所紀要』31, pp.241-304。
- Jamī‘ī, ‘Abd al-Mun‘im ad-Dasūqī al-. 1982. *ath-Thawra al-‘Urabiya: Buḥūth wa Dirāsāt Wathā’iqiyya, al-Qāhira: Dār al-Kitāb al-Jāmī‘ī*.
- Jondet, G. 1921. *Atlas Historique de la Ville et des Ports d’Alexandrie*. Le Caire: Imprimerie Nationale.
- 加藤 博 1984「エジプト近代史研究動向—オラービー運動研究を題材として—」『オリエント』27/2, pp.108-117。
- . 1987「エジプト・オラービー運動に関する覚書—軍隊・農民・立憲運動—」『歴史評論』452, pp.49-59。
- . 1990「近代エジプト農民運動についての覚書—農民運動からみた近代エジプト社会の変容過程」『東アラブ社会変容の構図』(長沢栄治編), pp.261-297, アジア経済研究所。
- . 1996「近代エジプトにおけるギリシア人とシリア人—エジプトの少数集団に関する覚書—」『一橋論叢』116/4, pp.708-725。
- . 1999「アレクサンドリアの憂愁—近代地中海世界の光と影」『ネットワークのなかの地中海』(歴史学研究会編: 地中海世界史3), pp.202-229, 青木書店。
- Kulliya al-Būlis al-Malakiya 1950. *al-Kitāb adh-Dhahabi li-Kulliya al-Būlis al-Malakiya*. al-Qāhira: al-Matba‘a al-Amīriya bi-al-Qāhira.
- 栗田禎子 1982a「帝国主義の発見—W. S. ブラントによるオラービー革命とマフディ運動の連関把握（上）—」『歴史評論』387, pp.2-21。
- . 1982b「帝国主義の発見—W. S. ブラントによるオラービー革命とマフディ運動の連関把握（下）—」『歴史評論』388, pp.58-66, 91。
- . 1999「オラービー革命のソシアビリティ—19世紀エジプトにおける社会的結合と政治文化」「社会的結合と民衆運動」(歴史学研究会編: 地中海世界史5), pp.221-252, 青木書店。
- マサイアス, P.(久米高史訳)2000「「英國議会資料」の概念」『地域研究論集』3/1, pp.7-15.
- Mayer, T. 1988. *The Changing Past: Egyptian Historiography of the Urabi Revolt, 1882-1983*. Gainesville: University Press of Florida.
- Muhammad Sālim, Laṭīfa. 1981. *al-Qūwa al-Ijtīmā‘īya fi ath-Thawra al-‘Urabiya*. al-Qāhira: al-Hai‘a al-Miṣriyya al-‘Āmma li al-Kitāb.
- 長沢栄治 1991「都市化と社会的連帶—上エジプト農村とアレキサンドリア市港湾労働者社会の事例比較」『中東の民衆と社会意識』(加納弘勝編), pp.211-262, アジア経済研究所。
- . 1992「エジプト綿花経済における「不自由な賃労働」—イズバ型労働制度をめぐって—」『歴史学研究』638, pp.110-121。
- Ochsenwald, W. 1984. *Religion, Society, and the State in Arabia: the Hijaz under Ottoman Control, 1840-1908*. Columbus: Ohio State University Press.
- Phelps, W. R. C. 1978. "Political Journalism and the Urabi Revolt." Ph. D. Dissertation, Michigan University.
- Philipp, Th. 1985. *The Syrians in Egypt, 1725-1975*. Stuttgart: Franz Steiner Verlag Wiesbaden GMBH.
- Price, C. A. 1954. *Malta and Maltese: A Study in Nineteenth Century Migration*. Melbourne: Georgian House.
- Rāfi‘ī, ‘Abdu’r-Rahmān ar-. 1966. *ath-Thawra al-‘Urabiya wa al-Iħtilāl al-Injilī*. al-Qāhira: Dār al-Ma’arif.
- Reid, D. M. 1998. "The Urabi Revolution and the British Conquest, 1879-1882." *The Cambridge History of Egypt*, vol.2(M. W. Daly ed.), pp.217-238, Cambridge & New York: Cambridge University Press.
- Reimer, M. J. 1988. "Colonial Bridgehead: Social and Spatial Change in Alexandria, 1850-1882." *International Journal of Middle Eastern Studies*, 20, pp.363-391.

- tional *Journal of Middle East Studies*, 20, pp.531-553.
- . 1997. *Colonial Bridgehead: Government and Society in Alexandria, 1807-1882*. Cairo: The American University in Cairo Press.
- Sadgrove, P. C. 1996. *The Egyptian Theatre in the Nineteenth Century (1799-1882)*. Reading: Ithaca Press.
- Schölch, A. 1976. "The 'Men on the Spot' and the English Occupation of Egypt in 1882." *The Historical Journal*, 19/3, pp.773-785.
- Schölch, A. 1981. *Egypt for the Egyptians!: The Socio-Political Crisis in Egypt, 1878-1882*. London: Ithaca Press.
- 竹島武郎 1989『イギリス政府・議会文書の調べ方』丸善。
- Tignor, R. L. 1962. "Some Materials for the History of the Arabi Revolution: A Bibliographical Survey" *The Middle East Journal*, 16/2, pp.239-248.
- Toledano, E. R. 1990. *State and Society in Mid-Nineteenth-Century Egypt*. Cambridge & New York: Cambridge University Press.



## M. K. ガーンディーと日本人 — 日中戦争をめぐって —

内 藤 雅 雄

(アジア・アフリカ言語文化研究所)

## M. K. Gandhi, the Japanese and the Sino-Japanese War

NAITO, Masao

Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

In the summer of 1998, a Japanese feature film titled *Pride: Fatal Moment* was screened at cinemas in various cities in Japan. The film deals with the International Military Tribunal for the Far East, commonly known as the Tokyo Tribunal, held from May 1945 to November 1946 to judge the main Japanese prisoners of war, and the hero of the film is Hideki Tojo the supreme commander and Prime Minister at the time of the Pacific War. Tojo, who was sentenced to death by hanging as the result of this trial, tried to justify the invasions of China and other Asian countries in the film. It is only natural that strong and severe criticism for its aim of protecting militarism arose both inside and outside of Japan, especially from East Asian and Southeast Asian countries.

It is noticeable that one of the focal points in this film is on India. At the outset of the film, a scene in which Tojo declared war against the U.S.A. and the U.K. on December 8, 1941 was soon followed by a scene of the independence of India on August 15, 1947. Subhash Chandra Bose, one of the most popular Indian nationalist leaders who acted in concert with the Japanese army since 1943 leading the Indian National Army, played an important role in the film. Watching all these scenes without knowing the historical facts, some of the audience may think that the party concerned with the production of this film proved that Japan's military actions in Asia during World War II resulted in India's independence. Naturally another important Indian character in the film is Dr. Radha Binod Pal, a judge who wrote a minority judgment paper giving all these 25 Japanese prisoners of war a "not guilty" verdict. This "Pal Decision", as it was abbreviated in Japanese, which was welcomed by some of Japan's rightist leaders as proving the innocence of Japan was based on an old idea on war that war as a right of a nation cannot be punished even if it contained invasive actions. Pal himself, who argued about the actions of each of the

---

**Keywords:** Sino-Japanese War, Indian National Movement, Gandhi, Nichidatsu Fujii, Toyohiko Kagawa

キーワード：日中戦争、インド民族運動、ガーンディー、藤井日達、賀川豊彦

prisoners from a purely legalistic viewpoint, never declared Japan itself not guilty. By laying emphasis only on Pal's statement that this trial is a judgment of the defeated by the winners, the film utterly disregards the essence of the "Pal Decision".

Almost at the same time, another film, *Nanking in 1937*, produced in China was screened in a cinema in Yokohama. But after the screening of this film treating atrocities against the Chinese by Japanese soldiers in 1937-38 was disturbed by some rightist organisations, the cinema proprietor had to wind up its screening before the scheduled date. More than half a century has passed since the defeat of Japanese militarism and the independence of many Asian countries, and research work on the history of Asian countries has been carried out on quite a broad basis in Japan. Nevertheless there is no end to the distortion of history and the suppression of historical facts like those examples given above. This suggests that Japan is still not free of the historical experiences of the various invasions and other inhuman activities which the Japanese military, and civilians also in some cases, caused in China, Korea and Southeast Asian and South Asian countries before and during the 15-Year War (1931-45).

In this paper, the author tries to examine the thoughts and activities of some Japanese from different walks of life who were involved and interested in the Asian or Indian questions in some way or other in the 1930s and early 1940s. The selection of persons may seem arbitrary but one thing common to all is that they visited Gandhi at his ashram to interview him during the above-mentioned period, though the purpose of their visits and the nature of their conversations differed. The main characters treated here are Nichidatsu Fujii (1885-1985), a Buddhist monk, Yonejiro Noguchi (1875-1947), a poet who was better known as Yone Noguchi in English-speaking countries, Daisuke Takaoka (1901-1992), a politician, Tomi Kora (1896-1993), an educationist and women's movement leader, and Toyohiko Kagawa (1888-1960), a Christian social worker. Apprehensive about the situation in China and other Asian countries in general and Japanese military activities there in particular, Gandhi was always keen on exchanging opinions on Asian problems with Japanese guests, who in turn wanted to hear his views on the present and future situation of Asia and Japan. In the author's opinion, through these procedures Gandhi played the role of a judge, though not subjectively, to appraise the moral conscience of the Japanese who came to see him during Japan's 15-Year War.

## はじめに

### 1 仏教僧侶＝藤井日達の場合

(1) 藤井日達と仏教

(2) インドにおける藤井日達

(3) 藤井日達と中国問題およびガーンディー

### 2 野口米次郎と高岡大輔の場合

(1) 野口米次郎とインド

### (2) 高岡大輔とインド

### 3 キリスト教社会活動家の場合

(1) 高良とみとインド、ガーンディー

(2) キリスト教徒＝賀川豊彦の活動

(3) 賀川豊彦と世界

(4) 賀川豊彦とインド、ガーンディー

結びにかえて

## はじめに

第2次大戦終了後、日本の「A級戦犯」を裁くために東京で開かれた極東国際軍事裁判（1946年5月～48年11月）の結果、ほとんどの被告が有罪を宣告された。しかし11人の判事のうち、インドのパール（Radha Binod Pal, 1886-1967）は少数意見を提出し、主として「共同謀議」の不在などを根拠に、「私は被告のすべてが起訴状における起訴事実のすべてに関し無罪と見做されなければならず、またそれらの起訴事実のすべてから免除されるべきであると主張する<sup>1)</sup>」との意見を発表した。今日に至るまで、しばしば「日本無罪論」と誤って（あるいは故意に）宣伝される「パール判決書」という膨大な文書の結論である。

パールの議論は、戦勝国が敗戦国を裁く際に「事後法」を適用することの不当性、日本への原子爆弾使用決定の違法性を指摘するなど、極めて重要な内容を含むものである。しかし柳条湖事件に始まる日本の中国への侵略は周到な計画に基づくものであり、「共同謀議」の不在というパールの推測の主要な論拠は意味をなさない点は、家永三郎がすでに明らかにした<sup>2)</sup>。戦争終結直後とはいえ、全体としてパールの議論は事実認識において誤りが多く、例えば「満州事変」が日本の「自衛権」の範囲内のことであるという議論<sup>3)</sup>などは論外のことである。また彼の論述には、当時の日本社会に関して、「世論は大いに活気にあふれていた。社会はその意志を有効たら

しめるためのいかなる手段をも全く奪われてはいなかった<sup>4)</sup>」など不正確な憶測が目立つ。家永が具体的な実例に言及しつつ説明したように、その時期の日本社会では、「権力の欲する方向と異なる方向に国家の進路を誘導させるに足りる、下からの自由な国民意志の表現とそれに基づく有効な政治運動の発展が抑圧されていた<sup>5)</sup>」のが実態であった。

何よりも、侵略を受けた中国に関するパールの無理解と悪意を無視することは出来ない。家永の指摘にもあるように、彼の文章には強烈な反共意識が見られるが、「その〔中国における共産主義の一引用者〕発展は、事实上外国の侵入と同等であり…、中国に権益を持つ他の諸国が、その権益を守るために中国に入りこみ、この〔共産主義の一引用者〕発展と戦う資格をもつかどうかはたしかに適切な問題であり、…端的に言えば、共産主義とは‘國家の枯渴’を意味し、かつそれを試みるものである<sup>6)</sup>」と書くとき、彼の思考には中国および中国人への配慮は全く入り込む余地がない。

この「パール判決」は、彼が当時の新興国としてアジアの第三勢力を代表したインドの法律家であったことから、「あたかも公正无私の見解であるかのような先入主<sup>7)</sup>」を多くの日本人に与え、また保守勢力に最大限に利用され続けてきたが、それは全体としてインド人の見解を代弁するという性格のものでは決してなかった。裁判の判決が出た直後の1948年11月29日、マッカーサーに電報を送るべきかどうかを照会してきた西ベンガル知事

- 
- 1) International Military Tribunal for the Far East, *Dissentient Judgment of Justice R. B. Pal, M.A., LL.B.*, Sanyal & Co., Calcutta, 1953, p.697.
  - 2) 家永三郎「十五年戦争とパール判決書」、『戦争と教育をめぐって』、法政大学出版局、1981年〔新版〕、p.34。
  - 3) International Military Tribunal, *op.cit.*, p.247.
  - 4) *ibid.*, p.698.
  - 5) 家永三郎『太平洋戦争』、岩波書店、1968年、p.122。
  - 6) International Military Tribunal, *op.cit.*, p.122.
  - 7) 家永三郎、前掲論文「十五年戦争とパール判決書」、p.24。

に対し、当時のインド首相ネルー（Jawaharlal Nehru, 1889-1964）は次のような電文を送っている。

この〔パールの一引用者〕判決では、その多くについて我々が同意しない的外れの大雑把な陳述がなされた。インド政府がパールの判決を吹き込んだとする疑惑に鑑みて、我々は関係各政府に対し、非公式に我々が何らの責任をも持たないことを通達せねばならなかつた<sup>8)</sup>。

同年12月6日付で各州首相に宛てた書簡でも、「この段階で戦争指導者たちに死罪が科せられたことを不幸なことと感じ」つつも、「インド政府が同意し得ない多くの見解や理論を表明した」パールは、インド政府の代表としてではなく、「著名な判事として個人の能力で」裁判に参加したという点を改めて強調している<sup>9)</sup>。

パールの議論に異議を唱えたネルーをはじめとするインドの政治指導者たちが、早い時期から日本の中国侵略に多大の疑惑と反対を表明してきたことはよく知られている。20世紀初頭以降、インドが中国に関して同様な立場に置かれた国として関心を寄せていたのに対し、日本は特にインドの民族指導者にとっては、経済的および政治的発展の上でのモデルと考えられていた。しかし1930年代に入つて日本の中国への野心が露骨さを増すと、中国への同情と日本への不信・警戒がインド人の中に広まっていった<sup>10)</sup>。

日本軍は1931年9月に柳条湖での鉄道爆破

により「満州事変」を引き起こし、翌1932年3月1日には「満州国」建国の宣言を行っている。その直後、マハーラーシュトラの女性活動家カンタク（Prema Kantak）に宛てた書簡（1932年3月13日付）で、ガーンディー（Mohandas Karamchand Gandhi, 1869-1948）は日中問題に言及し、「日本と中国に関して、我々の同情は後者の側に向けられざるを得ない」と書いている<sup>11)</sup>。彼は翌月同じ相手に対して宛てた書簡の中でも、

…私は日本の政策が遺憾であると常々感じてきた。たしかに日本はロシアに対する勝利に値する存在であったが、だからといって日本の政策を他が模倣する価値のあるものとするわけではない。…日本の政策を監視するため、幾百万の目をもって常に目覚めている聖なる存在がある<sup>12)</sup>

として、日本の侵略的姿勢に警鐘を鳴らしている。またネルーは、1930年に始まった第2次非暴力的抵抗（サティヤーガラハ＝真理の主張）運動の過程で、禁足令に違反したとして1931年12月に逮捕されたが、獄中から娘インディラー（Indira Priyadarshini Nehru, のちに Indira Gandhi, 1917-1984）に宛てた書簡（1933年6月29日付）において、「満州国」（Manchukuo, 中国東北部）における日本の策謀、上海での虐殺について詳しく語るとともに、中国の義勇兵団（「十九路軍」）の反日抗争を高く評価している<sup>13)</sup>。

中国に対する日本軍の侵略が拡大するにつ

8) *Selected Works of Jawaharlal Nehru, Second Series, Vol.8, Orient Longman, New Delhi, 1989, p.415.*

9) *ibid.*, pp.233-234.

10) Birendra Prasad, *Indian Nationalism and Asia (1900-1947)*, B.P.Publishing Corporation, Delhi, 1979, p.150.

11) Letter to Premabehen Kantak, March 13, 1932, *The Collected Works of Mahatma Gandhi* [hereafter CWMG], Vol.XLIX, Government of India, 1972, p.199.

12) Letter to Premabehen Kantak, April 3, 1932, *ibid.*, p.263.

13) Letter to Indira Nehru, June 29, 1933, J.Nehru, *Glimpses of World History* (Being further letters to his daughter, written in prison, and containing a rambling account of history for young people), Oxford University Press, New Delhi, 1987 (4th impression; First impression in 1982; First edition in 1939), pp.839-841.

れて、インド人の中国への同情と日本への非難の声はさらに高まった。盧溝橋事件を契機として日中間の全面戦争が開始される1937年7月以降、インド国民会議派は9月に中国との連帯を誇示する「中国連帯デー」(China Day)を挙行し、続いて1938年1月にインド人に日本商品のボイコットを呼びかけた。同年4月にはアタル(M. Atal)やコートニース(D. Kotnis)ら5名の医師からなる「国民会議派医療使節団」が中国に派遣された。1939年8月にはネルー自らが中国を訪問している<sup>14)</sup>。

インド人たちが中国と日本の関わりをこのように捉えていたのに対し、当時の日本人はインドあるいはインド人の動きをどう見ていたのであろうか。日本におけるインド関係の著作は第1次大戦後徐々に増え始め、ワシントン会議で日英同盟の終了が確認される1920年代初頭以降、第1次非暴力的抵抗運動で名前が知られるようになったガーンディーの伝記や彼をめぐる論評を中心に、多くのインド論が展開されるようになった。ガーンディーについて言えば、彼の基本的思想を反近代=反西欧あるいは「無抵抗主義」と捉える論調が強く、このガーンディーに関するイメージが戦前・戦中期を通じて日本人のインド理解に大きな影を落すことになる<sup>15)</sup>。

1930年代に入って日本の中中国侵略が急速に進むのとほぼ時を同じくして、訳書を含めて日本語によるインド関係の書物も増えてくる。朝鮮総督府から『英領インドの民族運動』(1930年3月)や『英領インドの民族運動(續編)』(1931年8月)と題する丸秘扱いの「調査資料」などが多数出版されるのも、時勢の

反映であったろう。この時期の日本における数多いインド関係の文章の中で、注目すべきものの一つが大川周明『インド国民運動の由来』(1931年1-2月)である。大川周明(1886-1957)はすでに1916年に『印度に於ける国民運動の現状及び其の由来』を書いて、第1次大戦期に至るまでのインド民族運動の趨勢を分析した。その中で大川は植民地下のインドに対する同情と理解を訴えるが、彼の主張の根本には、「日本をして墮落、沈滯、腐敗に陥らしむる災厄」から脱するために「皇国をして亞細亞の指導者たらしめんとする理想」により「積極的に国民の魂を熱火の如く燃立たらしむる」という「アジア主義」があり、これを実現するための重要な階梯として、「印度乃至自余亞細亞諸国の根本的研究に注ぎ、其の現状を審かにし、其の大勢の趨く所を察し、能く摯実雄渾なる政策を樹立して、君國の大義に拮据せられんことを切望」と明言している<sup>16)</sup>。これ以後の彼のインド=アジア研究は、基本的にはこの目的に沿って行われたと見て間違いないだろう。

講演に基づき1931年に雑誌『月刊日本』に掲載された「インド国民運動の由来」の主題は、「印度に於ける国民運動の勝利の歩みが、吾國の朝鮮統治の上に、面白からぬ影響を与へはせぬか」という世上の危惧を、インドと朝鮮の条件の「相違」を述べることで否定し、それを通じて日本の朝鮮支配を正当化するところにある。彼によれば、イギリスが「純然たる営利を目的として」インドの植民地經營に乗り出したのに対し、「独立の能力なかりし朝鮮が、万一他国の領有に帰する場合、わが国は宛も長槍を胸中に擬せられると同様の

14) B. Prasad, *op.cit.*, pp.151-156.

15) 戦前・戦中期日本におけるガーンディー像を丹念に考察した研究として、石田雄「日本人のガーンディー像一生誕100年に際してその歴史的特徴を顧みる」、『みすず』122、1969年8月が今日なお有用である。特に戦後日本におけるガーンディー研究に関する分析としては、内藤雅雄「日本におけるガーンディー研究の考察」、『インド文化』9、日印文化協会、1969年12月がある。

16) 大川周明「印度に於ける国民運動の現状及び其の由来」、『大川周明全集』第2巻、岩崎書店、1962年、pp.535-537。

脅威を感じるが故に、直接には国防上の止み難き必要から、而して惹いては東亜全局の平和を確保する必要から」日本は朝鮮を併合した。またイギリスがインドに関する認識を持たず、「インドとインド人を法外に劣等視した」が、古くから交流があり、「同文同種」の関係にあるため、「併合当初から、日本は朝鮮及び朝鮮人について、仮令十分でないにしても、相当に精確なる認識を有して居た」。従ってイギリスのインド統治と日本の朝鮮統治は同日には語り得ず、前者を模倣したりすれば「最も恐るべき危険を招くことに」なると警告する<sup>17)</sup>。

大川から見れば、「最後まで英國の友人たりしガーンディーをして、最も恐るべき英國の敵たらしめたのは、他なし英國の印度に対する背信」であり、「世の中には「朝鮮にガンディのやうな人が出たら大変だ」なぞと申す人」があるが、「若し朝鮮にガーンディーのごとき英雄が現れ、日本の理想をわれの理想とし、身命を抛って其の実現に尽くしてくれるならば、日本にとりて是程ありがたいことは」ないとされた<sup>18)</sup>。当時ガーンディーを「聖雄」と称し、その運動の精神的、倫理的側面を強調しがちだった多くの日本の論者と

違って、彼が指導する運動の政治的重要性を明確に評価し得た大川にしても、このように自らが描く「アジア主義」の枠の中でしかガーンディーを捉えきれなかったのである。

インドの歴史や現状に関して多くの著述を行った大川自身は、結局インドに足を踏み入れることはなかった。しかし日中戦争<sup>19)</sup>が始まる1930年代から41年12月の対米英宣戦布告までの時期、商活動などを目的とした長期滞在者を除いてもかなりの日本人がインドを訪れている。そうした人々のうち、藤井日達(1885-1985)、野口米次郎(1875-1947)、高岡大輔(1901-1992)、賀川豊彦(1888-1960)、高良とみ(富子、1896-1993)などの名は戦前および戦後の日本で比較的よく知られており、またガーンディーの当時の秘書マハーデーヴ・デサーイー(Mahadev Desai, 1892-1942)が、彼らに言及する貴重な文章を残してくれている。

本稿はこれら日本人たちのインド体験、滯印中のガーンディーとの対話、彼らのインド観やガーンディー観に焦点を当てて論じるものである。それぞれに仏教僧侶、芸術家、政治家、平和主義的社会活動家など活動分野も違い、また社会的、政治的立場を異にするこ

17) 大川周明「印度国民運動の由来」、『大川周明全集』第2巻、岩崎書店、1962年、pp.508-510。

18) 同上、p.529。

19) 「日中戦争」と言う時、1937年7月の盧溝橋事件を発端とする理解がかなり一般的かと思われるが、専門家の間ではこれに関する異論もあるようである。古屋哲夫著『日中戦争』(岩波新書、1985年)は、「日中戦争を盧溝橋付近での日本軍への発砲事件に始まると考えたのでは」…「日中戦争の全容が見てこない」(pp.13-14)とした上で、とりあえず1931年の「満州事変」まで遡る「15年戦争」という見方が「十分に根拠のあるもの」だが、「それでも、すべてがわかるというわけにはゆか」ず、日本軍が北京郊外に駐留するきっかけとなった1900年の義和団事件にまで遡ってしまう(p.14)として本文の叙述を始めている。上原一慶・桐山昇・高橋孝助・林哲著『東アジア近現代史』(有斐閣、1990年)は、盧溝橋事件が「日中全面戦争」の引き金になった(pp.138-139)と規定しつつも、同時に「「満州事変」は、以後15年間にわたる日本の中国侵略の開始を告げるものであった」(pp.121-122)との表現を用いている。辞書類に目を遣ると、例えば、『平凡社大百科事典』(第11巻、1985年)の「日中戦争」の項(今井清一執筆)は「1937年から45年まで主に中国大陆で戦われた日本と中国との全面戦争」とする。ただし、そこに付された「日中戦争」年表は1930年からの動きをおさえている。一方、ごく最近出版された西川正雄・川北稔・小谷汪之ほか編『角川世界史辞典』(2001年)では、「1931-45年の戦争と37-45年の戦争の二通りの意味で用いられる」(副島昭一執筆)となっている。本稿では、取り上げる人物の中国との対応を1930年代初頭の時点から叙述する関係からも、多少便宜的ではあるが「日中戦争」の時期を1931-45年として考えることなる。

れら5人の人物をここに並べた契機は、多分に恣意的あるいは偶然的なものと言わねばならない。しかし、対中国戦争の泥沼に益々深くはまりこみ、「国民精神総動員」運動、「東亜新秩序の指導者」あるいは「大東亜共栄圏」のかけ声が国中に満ちあふれだした1930年代以降の日本の政治状況が、程度の違いはある、彼らのアジア観にも影を落していたのは事実である。こうした人々がどのように同時代のインドを見つめ、ガーンディーに何を求めるようとしたのかを考察することは、当時の日本知識人の問題としても大いに意味のあることと思われる。

ガーンディー訪問に当って、彼らには当時のインドにおける最高指導者ガーンディーを通じてインドの現状と未来をはかり知ると同時に、自らの社会的、政治的行動への何らかの指針を彼から引き出すという願望があったであろう。あるいはそうした行動に対する正当づけの論理を求めたのかも知れない。一方ガーンディーは日本からの客を前にして、アジアの状況、日本の対中国政策、特に中国での日本の軍事行動について深い関心を示した。先にもふれたように、当時の中国における状況は彼にとって多大な同情の対象となっており、これに関して著名な日本人との率直な意見の交換を望んだ。しかし現実にはこれら両者の考え方の溝は深く、対話にはしばしば大きななずれを残すことになる。客観的に見れば、彼を訪問したこれら日本人知識人の世界観、アジア観に対するいわば「審判者」の役割を、ガーンディーが果すことになったと言えるかも知れない。

## 1 仏教僧侶=藤井日達の場合

### (1) 藤井日達と仏教

最初に取り上げる仏教僧侶の藤井日達(1885-1985)<sup>20)</sup>は中国での行脚・開教のあと、1931(昭和6)年にカルカッタに上陸し、以後8年間をインドとセイロン(スリランカ)で過ごした。

藤井日達は熊本県の農家に生まれ、小学校を終えたあと大分県立臼杵農業学校に入学した。子供の頃から信心深い祖母の影響を受けた彼は、農学校時代に、法華宗の僧侶日蓮の評価で知られるキリスト教思想家の内村鑑三(1861-1930)や評論家の高山樗牛(1871-1902)らの著作から影響を受けて日蓮(1222-82)に強く牽かれた。卒業した1903(明治36)年に両親の激しい反対を押し切って臼杵で出家し、翌年日蓮宗大学(現大正大学)に入学した。大学卒業後、京都の寺に寄留しつつ法華玄義や天台教学などを学び、1909年末から1年3カ月間、志願兵として大分歩兵連隊で過ごし、少尉となって退官した。

そのころ、藤井は中江兆民の『一年有半』や幸徳秋水らが発行していた『平民新聞』などを読んだりしていたが、1910年に起こった「大逆事件」に関しては、幸徳や大杉栄らを「けしからん奴だ」と思ったと「自伝」の中で述べている<sup>21)</sup>。同じ「自伝」において線香で腕を焼く「焼身修行」についてふれているが、その機縁となったのは、明治天皇の死去後、天皇の墓稜付近に土地をもつ信者から、そこに寺を建てるからその住職になって天皇の供養をしないかと持ちかけられた時、果してそれが出家した本旨にかなうかどうか迷って、「天の指図」を仰ごうとしたことだとしている<sup>22)</sup>。天皇および天皇家に対するこうし

20) 日達ははじめ「日勝」と名乗り、インドでもこの名を用いているが、彼の書簡集を見る限りでは、昭和13年11月半ばころ以降はほぼ一貫して「日達」で通している(『藤井日達全集』[以下『日達全集』]第4巻、隆文館、1997年、pp.81-82、pp.126-128)。

21) 山折哲雄編『わが非暴力 藤井日達自伝』(以下、山折哲雄編『自伝』)、春秋社、1992年、pp.24-25。

22) 同上、pp.31-32。

た愛着の感情は、そののちも藤井の言動に強く反映する。

1914年に藤井は、滋賀県堅田に初めて小さな説教所を開き、修行一途の生活を始めた。ここで彼は参禅に身を入れたりしながら、将来の方針を模索するが、2度にわたって、7日間におよぶ滝の中での断食を行ったのちに「自誓受戒」の靈的体験を得たという。この時藤井は初めて「擊鼓宣令」を行うが、「擊鼓」とは金光明教や法華経にある「法鼓を擊って末世を化導する」ということばに由来し、「宣令」とは法を宣揚して衆生を仏道に入らしめるという意味であり、一心にうちわ太鼓を叩くこの「擊鼓宣令」が、その後の彼やその弟子・信徒たち（すなわち日本山妙法寺）の修行や活動の原点となる<sup>23)</sup>。こうして1917年に彼は「衆生教化」の道への一歩を踏み出した。

「自伝」によれば、このころすでに彼の心には日本の仏法をアジア大陸で開教するという覚悟があったという。朝鮮から中国の大連に出て、そこからインドに渡ることを考えていたようであるが、結局は約6年間、当時の満州を中心として布教を続けた。そのころ日本は1915年の対中国21カ条要求をはじめ、中国に対して露骨な侵略行動をすでに開始しており、生前の藤井から聴き取りをしてその『自伝』を編んだ山折哲雄によれば、当時の藤井の布教活動は「主観的立場からすれば日蓮信仰の旗を異国之地に掲げるといった熱狂的な使命感に支えられていたが、日本の官憲と軍部の勢力の及ぶ範囲内で遂行された」とされる<sup>24)</sup>。1917年10月、奉天（現瀋陽）にようやく土地を得た藤井はここに初めて寺を建て、これを日本山妙法寺と名付けた。寺とは

言っても「草ぶきの納屋」同然のものであつたという。このあと、1923年までの間に満州のほか、天津や北京など北支のいくつかの都市にも同様の寺を建てていった<sup>25)</sup>。

藤井は満州からソヴィエト・ロシアにまで入ろうと考えていたようであるが、ちょうどその時期に関東大震災（1923年9月）の報に接した。彼は日蓮の『立正安國論』にいう「自界叛逆難（国内の内乱）」と「他国侵幅難（外国による侵略）」の災難に思いを至し、「日本国の将来に対するご祈念のため」帰国した<sup>26)</sup>。震災による無惨な焦土を見て彼は、「日本国の中心が皇室」であるように日本の国土の中心は富士山であるとの思いを抱き、翌年4月、静岡県の田子の浦に草庵を建てた。これが國內で最初の日本山妙法寺の建物となる。

このあと東京での開教に乗り出しが、その手始めとして、1926年には葉山で療養中の大正天皇の平癒祈願を祈念する擊鼓唱題を行った。この時は警護の警官によって鎌倉の留置所に入れられ、そこで死を覚悟した無期限の断食を始めたが、数日で釈放された。のちに何度か行われる断食のこれが最初であった。当時日本山妙法寺は皇室や日本国の将来を祈念していたと彼はのちに患っているが、これは右翼の思想だという非難を世間から受けた<sup>27)</sup>。同年12月に大正天皇が死去し、昭和天皇がこれを引き継いで即位した。

## (2) インドにおける藤井日達

その後の数年間、日本各地に日本山妙法寺を建立し、かつ辻説法などの活動を行った。しかし、1930年に長く患っていた母が亡くなったのを機に、藤井は「還來帰家（仏法は必ず西天〔インド〕に帰る）」という日蓮の

23) 同上, p.56。

24) 山折哲雄「インド体験型アジア主義の一類型—藤井日達の場合ー」, 『アジア経済』14巻9号, 1973年9月, p.7。

25) 山折哲雄編『自伝』, pp.82-91。

26) 同上, pp.96-97。

27) 同上, p.103。

予言を実現すべく、同年9月に神戸を発ち「西天開教」の途についた。彼のインド行きを動機づけたもう一つの要因は、暴力を用いずにインドの反英独立運動を指導していたガーンディーへの関心であった<sup>28)</sup>。この年1月、ガーンディー指導下で塩専売法の侵犯を以って始まった第2次サティヤーグラハ運動の報は、世界に広く伝えられていた。インドに入る前に藤井は満州や上海にも逗留したが、そこで会った中国公使の重光葵は日本の仏教をインドに返すなどという仕事は無駄であると彼に語った<sup>29)</sup>。香港、シンガポールを経てカルカッタに到着したのは1931年1月初頭であった。しかし知人からカルカッタ(現在コルカタ)での布教は難しいと説かれ、また日本総領事館からは、太鼓を叩き「南無妙法蓮華經」を唱えながら街路を歩き回ることへの苦情が寄せられたりした結果、彼は信徒の助言を受け入れてボンベイ(現在ムンバイ)に赴くことになる。

藤井はボンベイでは当時綿花買い付けで事務所を置いていた日本綿花会社の日本人社員の世話を受け、市内の火葬場近くに草庵を設けて、毎日太鼓を叩きながら町を回った。この時はガーンディーの率いる民族運動の勝利を祈願した。草庵に遊びに来るインド人の子供たちがうろ覚えに「ナムミヨウホウレンゲキヨウ」と唱えるようになり、この噂が当時ワルダーにいたガーンディーの耳に伝わって、夫人のカストゥルバー(Kasturba Gandhi, 1869-1944)がわざわざボンベイまで訪ねてきたこともあると藤井は『自伝』に書いている<sup>30)</sup>。7カ月ほどセイロン(スリランカ)で過ごして、1933年9月にインドに戻るが、この間に妙法寺の弟子興津忠男がブネーでガーンディーに会い、会見したいという藤井の希望を伝えた。

同時に藤井は日本綿花や東洋棉花の社員を通じて、ガーンディーの4人の実子に次ぐ「第5子」として彼から認められ、かつ「ガーンディー主義的資本家(Gandhian Capitalist)」とも呼ばれる最大の財政的支持者の一人、ジャムナーラル・バジャージ(Jamnalal Bajaj, 1889-1942)に紹介された。ガーンディーの拠点の1つである中央インドのワルダー(セーガー)のアーシュラム(実験的共同居住区)も、バジャージの支援で建設されたものである。このバジャージを介してガーンディーに会うことになった藤井は、会見の直前の不安な心理状態をその「藁田(ワルダー)日記」の中で次のように綴っている。

…まだ日本人としては1人も翁〔ガーンディー—引用者〕の門に入っている者はありません。それは翁について識るところのないためでしょうか、時の世を恐れて英國の警察に気兼をするためでしょうか、インド問題に关心を持たないためでしょうか、通商とか利益とかいう経済戦上の味方でないためでしょうか、翁の唱うる真理把持の糸紡ぎに興味がないためでしょうか、炎熱国の中獄の生活に堪えきれないためでしょうか。どう考えてみても私には面白くない理由が幾つも並ぶばかりであります。

…私もインドに来てから既に満3年になります。その間第1に仏蹟の巡礼、第2に寺院の建立、第3にインドの概念を得ることに過ごしました。お題目の擊鼓宣令の外には深く沈黙を守って呪のごとき3年を送りました。しかしながら私の身辺をも英國官憲の猜疑と云い日本総領事館の妄語と云い、第六天の天子魔の党類が伺求する気配も感ぜずにおれなくなりました。私は心の希望と生活の質素なお

28) 同上, pp.127-128。

29) 同上, pp.124-125。

30) 同上, pp.132-133。

陰で色神ともに未だいささかも疲労を覚えません。対英米の外交方針も連盟脱退の頃からどうやら建て直しの様子も見えます。インドの独立運動の今後の方針も一転機に直面したようです。ガンジー翁も幸いに牢獄を出でて静養三昧に僅かの日数を田舎に暮らしております。私も西天開教の第1段としての基礎準備は大概整ったようあります。これから第2段の実行運動に移らねばならない時となりました。そこでガンジー翁に見参してみよう。仏陀の子孫たるインド人の代表としてのガンジー翁に見参しよう。日本仏法の使となってインドの人に告げねばならぬ我が使命の一端を果そう。それがいかなる身の災害を招こうとももはや憚るべき時ではない。幸いにポンペイの領事も外護の信徒の人たちも同意を与えてくれたので、ワルダにガンジー翁を訪ねることに決定したわけであります<sup>31)</sup>。

こうして藤井は1933年10月4日に、興津に伴われてワルダーのアーシュラムにガーンディーを訪ねた。ガーンディーはロンドンでの日印円卓会議から帰国後、1932年1月4日に逮捕、16ヶ月間ブネーのヤラヴァー刑務所に収監され、一度釈放されたものの、再び刑務所に戻され、33年8月23日に再釈放されてから、まだ40日ほどしか経っていなかった。会話は興津の通訳を介して行われた。ガーンディーの関心は、インド市場に氾濫する日本商品のことから、太鼓を打つ藤井の宗派の話に及んだ。毎日ポンペイ市中を太鼓を叩いて回る日本人僧侶のはなしを彼は記憶していたようである。英語を解さない藤井に対し、ヒ

ンディー語の学習を彼は勧めた。ガーンディーには次々に面接者があり、最初の会見は20分ほどで終わった。藤井は日記に、「私は終始合唱瞑目してこの稀有の機会を感謝しておりました。会話によって何を得ようと期するよりも、この会見によってガンジー翁を得ようと期しました。私はこの時何の意見を聞こうとも思わねば、何を了解せしめようとも望みませなんだ」と書いている<sup>32)</sup>。

この日、ガーンディーとの会見を終えた後に藤井はガーンディーに当てた書簡（「呈摩訶臣巖治翁書」）を届けている。会見の場で自分の思いを十分に伝えきれなかったとの思いから筆をとったようで、「塗炭の苦患から解脱せしめるべき道を求めて悩んでいるインド人のために」、仏陀の教法を伝えるためにやってきたという目的を繰り返し伝えようとした。しかし同時に、日本による「満州問題」への取り組みが、軍事や経済のためになく、「仏陀の滅後2千年を過ぎて世界に仏法の真実の福音を宣伝するため」、「世界に日本民族精神の光をもって織り出したる日本仏法を伝えんがため」、「全世界を転変して正常安樂平和の国土となさんがため」であるとして、日本軍の中国侵略を正当化する結果になっている点も見逃せない<sup>33)</sup>。

これに対するガーンディーの返書が10月12日付の『ヒンドゥー』紙（マドラス）に掲載されたが、興味深いのは、その中で中国における日本の行動に関する藤井の訴えについて全くふれられていないことである。ガーンディーは仏教がインドで復興されるようにとの藤井の願いを十分に評価しつつも、同時に釈迦が「ヒンドゥー中のヒンドゥー」として

31) 「藁田日記」、『日達全集』第5巻、1997年、pp.9-10（藤井日達『佛教と世界平和』、日本サルボダヤ交友会、1980年、p.45に要約が掲載されている）。『日達全集』所収「藁田日記」のこの文章は現代仮名遣いに改められている。なお、藤井は「沙門行勝」の名で、『日印協會會報』(58号[1935年12月]、59号[1936年5月]、60号[1936年12月])に「ガンジー翁との会見」(上・中・下)と題する文章を寄せている。

32) 同上「藁田日記」、p.22。

33) 「呈摩訶臣巖治翁書（ガンジー翁に与うるの書）」、同上、pp.132-140。

ヒンドゥー教に新しい方向を与えたこと、彼の教えは究極的にヒンドゥー教に統合されたことを指摘する。またいかなる宗教的復興であれ、それは雄弁や知識によってでなく、自らの生活の純潔さを常に向上させ、宇宙を支える「生きた真理」に敬虔に依存してなされるべきであるという自らの考えの核心を示した。インド住民の間に身を投じようと決心している藤井に対して、ガーンディーは改めてヒンディーあるいはヒンドゥースターニー語の学習を呼びかけた<sup>34)</sup>。おそらくこの時のガーンディーの藤井に対する関心は、何よりも遠路日本からやって来た真摯な宗教者としての彼の存在に向けられていたのであろう。

このとき藤井は約2カ月ワルダーに滞在しているが、その間ガーンディーと茶をともにしたり、チャルカーをして糸を紡いだりして、アーシュラムの雰囲気にすっかりとけ込んだ様子が「藁田(ワルダー)日記」のあちこちから読みとれる。ヒンディー語の学習もここで開始した。これ以後も彼はほかの場所で比較的自由にガーンディーと会い、また文通を行うことが出来たようである。

インドに滞在中の藤井は、当時の在インド日本人社会、とくにその中で大きな発言力を持った日印協会の活動に批判的であった。印度に戻る前の1933年5月にセイロンからある軍人に宛てた書簡で、藤井は協会の性格に関して痛烈な評価を加えている。

日印協会もインドの富を搾取するのみの機関ならばその存在は呪われざる可からず候。日印両国現在将来の問題を利益以外におかば是より漸く協会の運動を必要と致すべく候。英国人が競馬に耽けるも協会が競馬に耽けるも覺醒印度に於ては俱に一掃すべき仇敵なるべく候。イ

ンドに一分の利を求めずして存在しうる日印協会とは恐らく日本山の道場のみなるべく候<sup>35)</sup>。

日印協会に対する藤井の評価は、1931年カルカッタ上陸以来きわめて厳しいものであった。1934年4月にビハールを中心に大地震が起ったとき、藤井と彼の弟子たちは23カ所の被災地に慰問に出かけた。3月には、被災者を慰問し、かつさまざまな震災救済委員会に出席するためにパートナーを訪れたガーンディーに会っている。藤井はまた、被災者の救済に関する助言を求めてポンペイの日本山妙法寺を訪れた会議派指導者のナーライドウ(Sarojini Naidu, 1879-1949)とナリーマン(K. F. Nariman)を日印協会の役員たちに紹介したが、協会側は救済活動に積極的な反応を示さなかった。

こうしたインドにいる日本人側の姿勢に関して、藤井は知人であるアジア主義者笠木良明宛てに次のような怒りをこめた書簡を送っている。

…英國政府としてはインドに日本の同情が集まることを好まざる所が貴下の所謂大国民に似る気なき小規模に成りゆきたる所にて候。更に之より浅間しきは折柄関税問題にて不利の立場におかれたるインド関係の日本の人達は此インドの大震災に対して白眼視し一向同情を表する気合も無之候。

もしもこの震災が関税問題以前に起りしならば駆け引き的に若干の同情金は集まりしものならんなど弁解いたし居り候。日本の関東の大震災には印度より83万ルピーを送りしに今度はその十分の一だけにても与えよかしと望み居り候。…日本人協会〔日印協会—引用者〕の者

34) "Advice to Japanese Buddhist Priests", *The Hindu*, Oct.12, 1933 (CWMG, Vol.LVI, New Delhi, 1973, p.56).

35) 松谷少佐宛書簡、1933年5月22日付、藤井日達「仏蹟巡礼」、『日達全集』第4卷、1997年、pp.298-299。

は会見せし彼らインド人代表を「与太者」と罵り日本山の者も彼ら与太者と交誼を結ぶ事然るべからずなどと申しつけ<sup>36)</sup>。

ここにいう「関税問題」とは、1933年9月に始まり1934年4月に終結した第一次日印会商の会談のことである。会談では英領インド側が強硬な立場に終始し、その成りゆきに対して日本人関係者は強い不満を表明していたことが上ののような状況の背景にあった。

1935年2月には、カルカッタに日本山妙法寺の寺院を創建するという藤井の長年の念願が達成された。この構想は、カルカッタに拠点を置くビルラー財閥の長兄ジュガル・キショール(Jugal Kishore Birla, 1884-1967)が、1933年に寺院建設用地購入のために1万2千ルピーを藤井に寄付したことで可能となった。ビルラー一家は熱心なヒンドゥー教徒として知られ、ガーンディーもこれを高く評価しているが、ジュガル・キショールはとくに敬虔で、ニューデリーのラクシュミーナーラーヤン寺院、通称「ビルラー・マンディル」の建設(1938年)を決定したのも彼であった<sup>37)</sup>。妙法寺の寺院の建設費用には日本人信者や現地インド人からの寄付が充てられたが、ジュガル・キショール(書簡の中で藤井は彼を「ビルラ長者」と呼んでいる)は多額の建設資金を提供した。完成式が盛大に行われたようだ、カルカッタの新聞『ステーツマン』はその模様を次のように伝えている。

…絹の法衣に身を包み、広げた手のひらに花や果物のお供えを持った日本人僧侶たちの一一行が袖の部分から進み出て、寺の前で儀式を遂行した。カルカッタ市長がヴィハーラ(伽藍)の戸を銀色の鍵で開けた。彼に続いて僧たちも堂内に入っ

て祭壇の前に跪き、お祈りと經典である『妙法蓮華經』からのお経を唱えた。こうした宗教的儀礼のあと、市長、寄付者のセート・ジュガル・キショール・ビルラー、B. M. バルーア博士その他の人々が祝辞を述べた<sup>38)</sup>。

このJ. K. ビルラーのことが当時の在印日本人の間でよく知られていたことは、のちにふれる詩人野口米次郎が1935年の訪印に関して次のように書いていることからもうかがえよう。そこに藤井日達の名も見える。

私はカルカッタにおいてこの著名な学者〔植物生理学者ジャグディーシュ・チャンドラ・ボースー引用者〕の外、もう一人魂の据え所を宗教に持っている尊敬すべき人を知った。それはビルラという実業家で、彼の事業と宗教との関係はどうあるかを詳かにしないが、少くとも生活の完成を宗教に期している真摯な印度の大富豪である。彼は巨額の淨財を宗教のため撒いて惜まないことは勿論であって、特に私は彼を印度における親日家の尤もなる存在として諸君に紹介したい。藤井という日蓮宗の僧侶が現にカルカッタに一寺を建設しているが、その九分通りを自分で引受けたさうだ。

彼はヒンズウ教徒であるが、仏教の最高教義は自らの信念を裏書きすると共に、日印両国は宗教を通じて結び付くべきものだといふ信念は盤石の如く堅牢である。特に私が彼に感心するのは彼が毎日2度は缺かさずに藤井師のお寺に参詣するさうで、お寺は妙法寺といっている。日本の三井が岩崎の大旦那が浅草の觀音様に日参すると思って貰ひたい<sup>39)</sup>。

藤井は友人に宛てた書簡で、この日寺院の

36) 笠木良明宛書簡、1934年4月24日付、『日達全集』第6巻(書簡集1), 1997年, pp.115-116。

37) Ram Niwas Jaju, G.D.Birla: A Biography, New Delhi, 1986 (2nd ed., 1st ed. in 1985), p.128.

38) The Sunday Statesman, Feb.17, 1935.

39) 野口米次郎『印度は語る』、第一書房、1936年, p.103。

落成を祝うために、ヒンドゥー教、シク教、仏教の諸団体から約2千人の子供たちがカルカッタのマイダーン（市内の緑地）に参集したと記している<sup>40)</sup>。さらにポンペイでも寺院を建てるために敷地を獲得したが、1937年7月に盧溝橋事件が勃発して日中間の全面戦争へ発展したことで、藤井は弟子たちとともに帰国することになったため、ビルラーの援助で完成したこの寺を自らの目で見るのは戦後になってからであった。彼は1938年2月末にカルカッタを発ち、3月24日に門司へ着いたが、出発前の1937年12月23-24日にニューデリーのビルラー・ハウスでガーンディーに会う機会を得ている。ガーンディーは彼に互いにもっと容易に話し合えるように、よりいつそうヒンディー語の学習に努めるよう語ったという<sup>41)</sup>。帰国の前に藤井は忠実な弟子の丸山行遼をワルダーのアーシュラムに留めることとし、ガーンディーはこれを認めた。丸山はこれ以降、1940年8月にインド政府から国外退去処分に付されるまで、このアーシュラムでガーンディーらと起居をともにした。

### （3）藤井日達と中国問題およびガーンディー

1937年7月に日本軍がひき起こした盧溝橋事件によって、日本は対中国戦争の泥沼に踏み込んでいった。それに追い打ちをかけるように1937年12月には日本軍による南京大虐殺事件が起こった。世界の多くの人々とともにガーンディーを含むインド人たちも、日本の軍事力の下に圧殺されようとする中国に対して深い同情の意を示した。この年にインド国民会議派が中心となって「中国連帯デー」が行われ、日貨ボイコットが展開されたことは前にふれた通りである。藤井は、当時の彼の書簡その他から明らかなように、イギリスに

対するインドの民族闘争を熱烈に支持する一方で、中国に関しては日本（軍）の対中国政策を基本的に是認していた。例えば、「アジア主義者」として知られる笠木良明に宛てた1934年4月24日付の書簡で、日本軍によって「建国」された満州国の「興立發展」を願望しつつ、次のように書いている。

拙子もこの仏事に由って満州建国の淨業に結縁致し候わば多年の宿願の達成にて候。…満州国の国土世間の真実相を開顯して衆生済度の大戒壇場となし、満州国の衆生世間の真実相を開顯して五種の民族十界の衆生平等利益を被って本来尊重の威徳を具せしめ、満州国の種々の五陰世間を造る八識心田に播かれたる自性清淨心の面目を区顯して恭敬信樂の本仏本性本衆生の久遠の淨土に即した娑婆の生活の当相を充ら安穩遊樂の光明三昧たらしめ、かくの如くにして満州国の建国に穢土に仏土を建立し衆生を菩薩行に將導する蓮華藏海蘆舎那仏の廣大無辺の威神力の自在の顯現と相成り候<sup>42)</sup>。

藤井は盧溝橋事件の勃発によって日中戦争が本格化した時には、両国間の戦争の原因はひとえに中国内に満ちあふれる、「日本を排斥し、日本を侮辱し、日本と戦争することに由りてのみ中国の国家も安全を保ち、東洋の平和も招き来らしめ」ようとする気運にあるとの見解を語っている。日本はいわば「已むを得ない位置に」立たされたのであって、仏教徒としては平和が目的であり、そのためには「殺生の大罪」を犯さないことが重要であるが、同時に「悪國、悪時、悪世、悪民、悪見のみ横行して正法正義が滅ぼされる時には戦争もまた起るであろうと云うことを考えねばなりません<sup>43)</sup>」として、戦争への突入を正当化した。

40) 山村行善宛書簡、1934年2月20日付、『日達全集』第6巻、p.335。

41) 石橋鎮雄宛書簡、1937年12月26日付、『日達全集』第9巻（書簡集4）、1995年、pp.111-113。

42) 笠木良明宛書簡、1934年4月24日付、『日達全集』第6巻、p.111。

43) ヒラヤダナ上人宛書簡、1937年9月17日付、『日達全集』第8巻（書簡集3）、1996年、pp.356-358。

従って彼は、インド内で顕著な反日感情を無視することができず、1937年11月にガーンディー宛てに書簡を送っている。この中で彼は、「今度の支那事変に対する我が日本国の大いなる心の誓願を見直していただきたいと希望し」つつ、インド人が中国での抗日意識の高まりを支持し、日本を「文明の敵、侵略の國」と呼んで中国への物質的な支援を行おうとしていることに不満を呈する。そしてインドにおける独立運動の帰趨への多大な関心を表明して、「インドの独立自由の完成のために支那事変に対処せる我が日本国民の一致団結の堅きこと鉄の如く、身命を捨てて困難に殉ずる勇猛の覚悟をインド民族の人々に再検討して頂き度い」と要望した<sup>44)</sup>。「支那事変に対するインド人の再検討を希望した<sup>45)</sup>」この書簡に対するガーンディーの返書がどういう内容のものであったのか、これまでのところ筆者は確認し得ていない。しかし、当時の藤井が述べるような、「日本の使命がわからない間はインドは永遠に渦沈の淵に沈んで居らねばならない」とか「中国事変は日本民族の理想国家実現の信念以外のものではない。剣を執って居るけれども近く云えば國家民族の救済の信念を実現し、遠く云えば娑婆を開拓して浄土を建立する菩薩業である<sup>46)</sup>」などという発想がガーンディーを納得させ得たとはとうてい考えられない。

藤井はインドを離れた後も、ワルダーに残った弟子の丸山行遼らを通じてガーンディーに意見を伝えており、その書簡の内容から彼の意見に対してガーンディーがいかなる反応を示したかが知られる。例えば、1938年8月に滞在地の敦賀から丸山に宛てた書簡では、次のような心境を語っている。

ガンジー翁の御返事一通同複写数通、…東京で落手しました。支那事変に対する翁と貴師との問答は面白く拝見致しましたが非戦論を以て終始された翁に対する支那事変はどう説明しても結局その要領を得せしむることは困難な所以でありますよう、これ以上に弁明をつとむる必要はありますまい<sup>47)</sup>。

この書簡から推しても、ガーンディーが中国における日本の行動をよしとせず、藤井や丸山らの説く「支那事変」擁護論を正面から拒否したであろうことは明白である。また別の人物に対する書簡でも、「私もかねて翁の日本に対する考え方を一層啓蒙せねばならないとは思って居りましたが先日の御返事の粗略さに由つて且つ再論する勇気も失せて居りました、然し結句は翁の探検で無くて私の誠実が無いからの事であります<sup>48)</sup>」として、ガーンディーの姿勢を変えることが不可能であることを認めている。この時点での藤井は、ガーンディーのサティヤーグラハの理念やその反ファシズム観を正しく理解ないし容認し得ていなかつたのであろう。

ところで、この時期の藤井はガーンディーに関しては尊敬と期待を込めつつ言及しているのと対照的に、彼に次ぐ会議派の有力な指導者で、1929年に次いで36年にも会議派議長に選出されているネルーあるいは会議派内のネルー派の動きについてはむしろ否定的な評価を下している。おそらくネルーの合理主義的姿勢、宗教への無関心が宗教者としての藤井には合わず、加えて中国問題をめぐって鋭く日本を批判し、インドにおける反日運動を呼びかける彼の姿勢に不満であったことなどがその理由として挙げられよう。彼はしばし

- 
- 44) 摩訶臣巖治翁（マハートマー・ガーンディー）宛書簡、1937年11月13日付、『日達全集』第9巻、pp.12-13。
- 45) 三木慈教宛書簡、1937年11月15日付、同上、p.16。
- 46) 丸山行遼宛書簡、1937年12月11日付、同上、p.28。
- 47) 丸山行遼宛書簡、1938年8月27日付、同上、p.99。
- 48) 山村行善宛書簡、1938年10月24日付、同上、p.121。

ばネルーを共産主義者と呼んでいる。例えば、会議派が1937年に日貨ボイコット運動を開催した時、その行動が日本の立場の「曲解」であるとして、

インドも今の議長ネール氏は完全に共産主義者のようあります、インドの独立運動がこの人に指導されて完成するならば今日の中国問題が一転して将来のインド問題となることありましょう<sup>49)</sup>とまで書いている。同じころ、会議派についても、その弱点は「所謂西洋カブレをして何々主義と称して国家建設の大事を技巧霸道に由つて遂行せんとすること」であり、議長のネルーはこれに関して「当然引責辞職すべき」との見解を述べている<sup>50)</sup>。

これに対して藤井は、ヒンドゥー・コミュニティの組織化・一体化の強化にこそインドの将来がかかっていると主張するヒンドゥー大連合(Hindu Mahasabha = HM, 1915年創立)の組織(政党)に大きな関心と期待を示す。同組織は創立初期にはラージパト・ライ(Lala Lajpat Rai, 1865-1928), マーラヴィヤ(Madan Mohan Malaviya, 1861-1946)など主だった何人かの会議派指導者も加わっていたが、1937年にサーヴァルカル(Vinayak Damodar Savarkar, 1884-1966)が総裁に就任してからはそのヒンドゥー・コミュナル性をいっそう顯著にし、翌年会議派はムスリム連盟などとともにHMを「コミュナル組織」と規定して、会議派とこれらの組織への同時加盟(dual membership)を公式に禁じた。藤井はすでに1934年4月の書簡の中で「ヒンドゥーマハシャバ〔マ〕の如きは是より西天開教の影響衆として一味同心して往く可き教団に候<sup>51)</sup>」と評価していた。1936年の同党

ラーホール大会(藤井はこれを「インド教徒大会」と称している), 1937年のアムダーワード(アフマダーバード)大会にも弟子を送っている。

藤井のHMへの接近に一つの大きな役割を果たしたのはJ. K. ビルラーとの交流であろう。彼自身HMのメンバーであり、前述したように、妙法寺の寺院建立を含め、藤井たちに対して様々な財政的支援を行った。藤井のみならず、この時期のインド問題に関心を持つ一部の日本人の間で、サーヴァルカルやHMの名はある種の好意をもって語られていたことにも留意すべきであろう。例えば、在印日本人間に影響力を持っていた日印協会の機関誌『日印協會會報』68号(1939年7月)には、代表的著書である『ヒンドウトウヴァア(ヒンドゥーの本質)』などに見られるサーヴァルカルの思想を解説し、彼を「偉大なる政治家」として評価する「デー・パンデー」の筆名(翻訳者名なし)によるかなり長い文が掲載されている<sup>52)</sup>。この他にも同誌は、日印関係やインド政治の動向を伝える巻末の「雑纂」の中で、この組織の年次大会の決議や政策に関する好意的な記事をしばしば載せている。ある記事はその末尾で、「ヒンズー・マハサバ〔マ〕は常に強硬なる反英独立を主張して居る為英國側の強圧を蒙って居るが、最近の目覚しい躍進振りから推して、其将来は決して軽視することが出来ない」と書いている<sup>53)</sup>。しかし現実には、この時期に反英民族運動の中核としてインド人大衆が圧倒的に信頼し、支持したのはHMではなく会議派であった。限定的ながら州自治をもたらすことになる1937年の州議会議員選挙において、HMは惨敗している。

49) 今井行孝宛書簡、1937年11月16日付、同上、p.19。

50) 丸山行遼宛書簡、1938年1月1日付、同上、p.47。

51) 興津忠男宛書簡、1934年4月27日付、『日達全集』第6卷、p.117。

52) デー・パンデー「愛國者サヴァルカル」、『日印協會會報』68号、1939年7月、pp.47-57。

53) 「ヒンズー・マハサバの政策」、『日印協會會報』71号、1940年5月、pp.116-118。あるいはまた、「ヒンズー・マハサバ」、『日印協會會報』67号、1939年4月、pp.129-131。

さて1938年3月にインドから帰国したあと、藤井は布教と「擊鼓唱題行による祈念」、また各地での日本山妙法寺の建立などのため、しばしば中国を訪れるが、同じころから軍人との接触が始まる。その目的は戦争における犠牲者の供養のため、主として軍人に仏舎利塔を献呈し、かつ中国各地に仏舎利塔を建立するための便宜を依頼することにあった。その仲介になったのは、藤井に深く帰依する軍人（松谷中佐）で、彼を通じて松井石根、板垣征四郎、米内光政、寺内寿一、畠俊六など陸海軍の領袖たちに仏舎利塔を献呈している<sup>54)</sup>。

ただ、こうした軍指導部との接触にもかかわらず、藤井は必ずしもこれら軍の指導者たちに大きな信頼を置いていたわけではなく、戦争の推移に関してもかなり批判的な目を持っていました。例えば1940年8月の弟子丸山への書簡で、

現代の日本は戦争最中であるのみならず、前途にお決戦を予期する強大敵国に備うるために自ら軍国となってしまいました、…日本国の前途はかくて土崩瓦解の運命に直面したようあります、大臣も大将も今以て信仰の寸心を改めて速やかに実乗の一善に帰する道がわかりませぬ、これで満州国を指導し更に中国を更正せしめようとするのであります、焦燥するのみで人心とは愈々懸かに隔ててしまいますが<sup>55)</sup>

と述べている。また、「満州国」の存在そのものは否定しないが、現地の状況を無視した日本の政策に対する次のような宗教人らしい

悲憤慷慨を表明している。

最初王道樂土の看板を掲ぐる時に欺瞞が含まれては無かったか、王道樂土建設の理想標準なくして漫然と云いだしたものか、いずれにしても不樂土の責めは日本の人々が負わねばなりますまい、樂土が出来ればその効は必然日本人が受用するのでありましょう、何が故に眞実の樂土建設の菩薩行をなさないのでしょう<sup>56)</sup>。戦後に出された『自伝』の中で当時を振り返りながら、自ら布教する中で民心を得ていかない日本は長い間「満州」に留まることはできないと感じていたこと、日本にとって残された道は「中国人を皆殺しにする」か「それができなければ中国の地を去って日本に帰る」かであると、日本軍の要人に説いたことを記している<sup>57)</sup>。

こうした姿勢を考慮すれば、彼を「軍国主義者」と規定することはもちろん出来ない。彼および妙法寺の僧侶たちの認識において、またその活動において、彼らを突き動かしたものは究極的に宗教的動機であったと言えようし、おそらく信仰を直ちに実践に移そうというところにこれらの宗教者の真骨頂があつたのであろう。この点は藤井がのちに『自伝』の中で語っていることであり<sup>58)</sup>、それを頭から疑ってかかることは出来ない。しかし、戦時中の藤井の思想に天皇崇拝と皇室を中心とする「一国家一家族」観が強く反映していたことは否定できず、アジア諸国侵略のイデオロギーとなった「八紘一宇」「大東亜共栄圏」という考え方を合理化する心理があったことも彼自身の文章から明らかである<sup>59)</sup>。ま

54) 山折哲雄編『自伝』, pp.154-158。

55) 丸山行遼宛書簡、1940年8月15日付、『日達全集』第10巻（書簡集5）、1999年、pp.73-74。

56) 広瀬浩宛書簡、1941年1月22日付、同上、pp.169-170。

57) 山折哲雄編『自伝』, p.157。

58) 同上, p.165。

59) ある文章で藤井は次のように書いている。「八紘一宇の大和合は、異民族を支配し奴隸化することによって完成するものでない所以は、歐米の執り來たった世界旧秩序の破局に照らして分明であります。…円融無碍なる一体的の綜合發展をなさしむることが、將に建設せられんとする、世ノ

た先の山折の指摘にもあったように、彼らの中国各地での布教や仏舎利分授という活動が、日本軍の進軍と歩調を合わせて進められた点も無視できない。

このような思想的背景をもつ藤井の「中国問題」理解が、日本の中国侵略に対する激しい批判と抵抗する中国人への強い同情・連帯を示すガーンディーのそれと大きく異なるのは明らかで、藤井自身もこれを認める発言をしていることは前に述べておいた。奇異に思えるのは、それにもかかわらずこれも前述したように、藤井が1938年にインドを離れた後も、彼の最も身近の弟子である丸山行遼のアーシュラム滞在をガーンディーが認めたことである。丸山はこのあと、日本に帰国した藤井とガーンディーとの文通の仲介に努めている。これらのことから見て、ガーンディーが藤井と絶交したとは考えられない。

丸山に関してのガーンディーの評価は、1942年7月に発表された有名な「すべての日本人に」と題する声明文に見ることが出来る。日本人对中国侵略への反省を求めるこの文において、1915年以来多くの日本人佛教僧が彼のアーシュラムで起居をともにしたと述べ、中でも最も身近だった人物として（それと名前は挙げないが）丸山の存在について相当の字数を割いて、次のような高い評価を与えていている。

彼ら〔日本人僧一引用者〕の一人はセーワーグラーム・アーシュラムの貴重なメンバーとなり、彼の義務への専念、品位ある態度、搖るぎない日常の信仰への献身、あらゆる状況下での優しさと冷静さ、内なる平安を明瞭に証明する自然

な微笑みは、我々すべてを魅了した。そして今、あなた方〔日本人一引用者〕の対英宣戦布告のため彼は我々の元から連れ去られ〔1940年8月。宣戦布告は1941年12月だから、ガーンディーの誤解か一引用者〕、我々は大事な共働者として彼の不在を寂しく感じています。彼は思い出として我々にその日々のお祈り〔ナムミョウホウレンゲキヨウ一引用者〕と小さな太鼓〔うちわ太鼓一引用者〕を残してくれましたが、我々はその太鼓とともに今でも朝夕のお祈りを始めるのです<sup>60)</sup>。

藤井自身に関するこの時期のガーンディーの評価は見ることが出来ないので推測に過ぎないが、彼がここで丸山について書いている時、その念頭には藤井の像が重なり合っていたのではないかと思われてならない。もしそうだとすれば、戦争やアジアの政治状況に関する理解や見解には隔たりがあったにもかかわらず、ガーンディーは藤井や妙法寺の僧たちの中に、自我を棄てて信仰に生きる宗教者としての姿を第一義的に見出していたと言えるかもしれない。

藤井は戦後に、かつて戦時に戦勝祈願を行ったことについて反省懺悔を行い<sup>61)</sup>、それからの日本の前途を救うものはあくまで佛教であるとの考え方から、新たな仏舎利塔建立に従事した<sup>62)</sup>。1950年ころからは仏舎利塔建立とあわせて、日本国憲法における非武装および不殺生の精神を説きつつ行脚する平和行進を続けるようになった。この方向をいっそう進める契機となったのは、1954年4月に宗教者が中心となって日本で開かれた第2回世界

▽ 界新秩序の企図であります。…人類世界に最も親密な和合の実現せられたものは家族であります。人類世界の団体生活の最も発展したるものは国家であります。一国家が一家族として発展することは、最も自然な秩序であり道程であります。万国の中ひとり日本のみは、この自然の秩序にしたがって、ひたすら人類世界発展の道程を辿ってきました」〔布告〕、『日本山妙法寺』〔昭和18年12月〕所収。『日達全集』第1巻、1994年、p.361)。

60) Gandhi, "To Every Japanese", *Harijan*, July 26, 1942, p.240 (声明文の発表は7月18日)。

61) 山折哲雄、前掲論文（「インド体験型アジア主義の一類型—藤井日達の場合—」）、p.11。

62) 山折哲雄編『自伝』、p.181。

平和者会議（第1回は1949年12月にインドで開催）であったようである<sup>63)</sup>。

その後、反戦非武装の立場から砂川米軍基地反対闘争（1956–59年）を初めとして、藤井を核とする日本山妙法寺は、日本国内のみならず国際的規模の、核兵器廃絶・軍備撤廃を掲げる平和活動や人権運動に邁進してゆく。1954年の文章の中で、非武装・非戦を主張するに至った契機について、藤井は次のように書いている。

…広島、長崎に原爆が投下され、幾十万の無辜の婦女幼童が、火あぶりに毒殺をかねたるが如き、人類歴史未曾有の悲劇をうけたるを見、日本が無条件降伏を乞える事に由て、現代戦のいかに罪悪にして狂乱、愚昧、野蛮なる性質なるかを見たるが故である<sup>64)</sup>。

彼はこのすぐ前の文章で、非武装・非戦の主張の契機が必ずしもガーンディーとの出会いではなかったとわざわざ断りを述べている。しかしながら、波乱の時代に自らをインドに置いた宗教人藤井の中で、日本中心のアジア主義的幻想が消滅した後にガーンディー的非暴力の思想が身近かに感じられるのはむしろ自然のことであったろう。その意味で、藤井の『自伝』をまとめた山折哲雄が、戦後における藤井の平和運動が「昭和8年のガンジーとの出会い」にその思想的原点を持つと指摘している<sup>65)</sup>のは正しいと言えよう。

## 2 野口米次郎と高岡大輔の場合

次に、1930年代にガーンディーと会見した日本人として、野口米次郎と高岡大輔についてふれておきたい。それぞれ文学者および政治家として全く異なった分野で活動したこの

二人に共通するのは、1930～40年代という時期に、「大日本帝国」の主導の下にアジアを「解放」して「東亜新秩序建設」（1938年11月近衛文麿首相の声明）を実現するという当時の日本の「使命」を積極的に説いていたことである。詩人である野口の場合でも、日本の新聞に寄せた文章やインド人に向けて語られた言葉は、極めて戦闘的かつ政治的な内容を持っていた。ただ、この二人はガーンディーとの会見で、当時の社会的、政治的状況に関するまとまった議論を行ったわけではなく、また会見時間も極めて短かいものであった。ここでは主として、彼らが1930～40年代の日本の動向に関わらせて、インドの政治状況、あるいはガーンディーの思想・運動をどのように理解し、それを公に語っていたのかについて考えてみたい。

### (1) 野口米次郎とインド

野口米次郎（ヨネ・ノグチ、1875–1947）は英詩の創作によって国際的に有名をなすという、日本人としては稀な活動を行った詩人である。慶應義塾を中退後、渡米して詩を学んだ野口は1896（明治29）年に初めて英詩集『見えるもの、見えざるもの』（*Seen and Unseen*）を出している。1902（明治35）年にイギリスに渡り、翌年『東海より』（*From the Eastern Sea*）を出版して、これよりヨネ・ノグチの名で英語圏において知られるようになる。1904年に帰国したあと、慶應義塾の英文科教授となり、日本語の散文詩を発表し始めた。

このような背景もあり、野口はしばしば「日本人らしくない詩人」と評され、自らも1921（大正10）年に発表した詩集『二重国籍者の詩』の序で、

63) 同上, pp.188–189。

64) 藤井日達「本来の使命」、昭和29年11月（今井行順『アラカンに轟く太鼓—戦場の日本山』、日印サルボダヤ交友会、1986年, p.200から引用）。

65) 山折哲雄編『自伝』、p.273、「初版以後のこと」から。

実際をいふと、  
僕は日本語にも英語にも自信が無い。  
云はば僕は二重国籍者だ……  
日本人にも西洋人にもなりきれない悲しみ……  
不徹底の悲劇……

と書いている。しかし野口が英語で詩作した時期の作品でも、彼の関心が日本および日本の事物にあったことは疑いなく、野口研究者によれば、「彼の日本的特色はすでに初期の英語の著作にも鮮明で、西洋の事物を主題としたものが少く日本的事物への興味や熱愛を歌ったものが圧倒的に多い」<sup>66)</sup>。さらに注目すべきは、「日本語の駆使が自由になった後期（1904年の帰国後—引用者）は彼の日本研究と祖国愛が深化し、益々日本的になり、日本や印度を対象とした」ことであろう<sup>67)</sup>。

野口のインドとの関わりは、この国自体というよりも、「詩人」サロージニー・ナーライドゥとの出会いから始まった。1912年からオックスフォード大学に招かれて訪英したおり、たまたま病氣療養のためロンドンにいたナーライドゥが野口に会いたがり、詩人イエーツ（W. B. Yeats, 1865-1939）の仲介で会ったことである。彼女は当時インドでは著名な詩人としてのみならず、インド国民會議派にも属した女性運動の指導者としても知られ始めていた。1915年の會議派ボンベイ大会では、「目覚めよ」（Awake!）と題する自らの詩を誦読し、「夜は明日への夢に満ちている。何ゆえ汝はなお悲しみの輻の中に眠るのか。目覚めて、我らを縛る苦難を絶ち、我らを呼ぶ勝利のために我らの手を清めよ」と呼びかけ

た<sup>68)</sup>。1917年に彼女は第3詩集『破れた羽翼』（*Broken Wing*）を野口に贈ったが、彼はその中の数詩が献呈されているガーンディーやジンナー（Muhammad Ali Jinnah, 1876-1948）に関して何らの知識・関心を持ち合わせていなかった。のちにこのことにふれて、彼は、

然るにこの頃私の関心はただ詩に集中されていて、印度の存在も1913年倫敦<sup>ロンドン</sup>で私が知った抒情詩人サロジニ・ナイヅウの姿以外何物でもなかったから、ガンジー・ジンナーの名前も私に何等特殊の興味を與へなかった<sup>69)</sup>

と記している。しかし、世界大戦が深刻化する1918年以降のインドの状況が日本の新聞に大きく取り上げられるようになると、ナーライドゥが詩集においてしばしばふれたガーンディーについて再認識し、「英米の新聞や雑誌のなかからガンジーのことを漁って、彼の如何なる人物であるかを知らんとした」<sup>70)</sup>。ナーライドゥとの文通はこれ以後も続き、1935年の渡印の折にはボンベイで再会したが、この間、彼女は1925年に国民會議派カーンプル大会で女性としては最初の議長を務めている。

野口のインドとの関わりで一般により知られているのは、詩人ラビンドラナート・タゴール（Rabindranath Tagore, 1861-1941）との交友と決別であろう。タゴールは1913年にノーベル文学賞を受賞し、1916年に第1回目の訪日をしている。この時に野口は歓迎委員会の一員であったが、タゴールについてあまりよく知らず、ナーライドゥとの出会いのような深い印象を受けなかったという<sup>71)</sup>。

66) 山宮允「野口米次郎論」、外山卯三郎編『論文集ヨネ・ノグチ研究』第1集、造形美術協会出版局、1963年、p.131。

67) 同上。

68) S. Naidu, *Speeches and Writings of Sarojini Naidu*, G. A. Natesan & Co., Madras, 1919 (2nd edition), p.68.

69) 「闘ふ女詩人ナイヅウ」、野口米次郎『想思殿』、春陽堂、1943年、p.309。

70) 同上、pp.312-313。

71) 大江満雄「野口米次郎のタゴールへの公開状と詩にふれて—タゴールの愛国詩・抵抗詩」、外山卯三郎編『論文集ヨネ・ノグチ研究』第2集、造形美術協会出版局、1965年、pp.245-246。

しかし、1924年の再来日のころには、彼のタゴールへの関心は高まっていたようで、「タゴールに與へる」と題する詩によってその高尚な人生観、芸術觀を称揚し、「私はあなたに人生と世界の問題を読むであらう」とまで持ち上げている<sup>72)</sup>。ただ、タゴールの東京到着翌日に宿舎の帝国ホテルで語り合った後に記したという彼の文章は次のようなものであった。

8年前に日本へ来た時は、ずいぶん激烈な言葉で眞実の人間性を毒する現代の文明を呪った。しかし、大声ほど耳に入らずの感があった。なにしろ戦争で成金国にならうとしていた最中であったから、彼の厳肅な正直な批判も、たうぜん得べき反響を得ることができなかつた。ところで、今日は米国の排日法案の実行などで、反西洋熱が高まっている時代であるから、彼の言葉は、尊敬の態度で謹聴されことだろう。タゴールは古いといふのをやめよ。タゴールには新しい哲学がない、詩がない、といふのをやめよ<sup>73)</sup>。ここで彼がタゴールの「近代」批判を見据えていることは理解できる。しかし、1916年の来日の折に慶應義塾（1920年より慶應義塾大学となる）で行った「日本の精神」と題した講演において、彼が当時の日本が目指していた武装力強化や他国の損失を顧みない「盲人のモットー」のもつ危険性を指摘していたこと<sup>74)</sup>、また翌1917年に出版された『民族主義』所収の「日本の民族主義」の中で、日本にとってのより大きな危険が、「西洋の外觀

の模倣にではなく、西洋の民族主義の原動力を自らの原動力として受け入れることに」あり、「道徳的盲目を愛國心の儀式として飽くことなく培う国家」は突然に横死するとして、厳しい警告を与えていたこと<sup>75)</sup>などは野口の念頭にはなかったようである。

野口は1935年11月から翌年1月にかけて、最初で最後の訪印を行っている。タゴールの熱心な勧めに従っての訪印であった。日印協会の『會報』は、野口および1カ月後に出発した高良富子(とみ)の渡印を報ずる「會務記事」を掲載している。

慶應義塾大学教授野口米次郎氏は予て印度甲谷陀大学其他数大学より日本精神に関する講演方に就き交渉を受け居たるが、今回愈々決定を見るに至り去る10月17日神戸出帆の諏訪丸にて渡印の途に就かれたり。又日本女子大学教授高良富子女史は甲谷陀基督教女子青年会に出席の為去る11月24日横浜出帆の照國丸にて同じく渡印せられたり。本会は両氏が印度各地旅行中特別の便宜を得るやう斡旋せり<sup>76)</sup>。

野口はシャーンティニケータンの大学でタゴールと語らい、各地で日本文化、日本精神に関する講演を行った。しかしこの訪印で彼の心により印象深く残ったのは、ガーンディーとの会見であった。彼はインド国内旅行の途中、1935年12月31日に中央インドのワルダー（セーガー）にあるガーンディーのアーシュラムを訪れた<sup>77)</sup>。秘書のデサーイによれば、この時期ガーンディーは病床に

- 
- 72) 最初「某哲人に與へる」と題して、詩集『リンゴ一つ落つ』（1922年）に収められたものをのちに改題した（『野口米次郎・三木露風・千家元麿・日夏耿之助集』、現代日本文學全集73、筑摩書房、1956年、p.36）。
- 73) 野口米次郎『印度の詩人』（大江満雄、前掲論文、p.251より）。
- 74) R.タゴール「日本の精神」（高良富子訳）、『タゴール著作集』VII、アポロン社、1960年、pp.192-194。
- 75) R. Tagore, *Nationalism*, Macmillan and Co., London, 1923 (Reprint, 1st edition in 1917), pp.77-78.
- 76) 『日印協會會報』58号、1935年12月、p.204。
- 77) *The Collected Works of Mahatma Gandhi* [以下 CWMG と略す]、Vol.LXII, Ahmedabad, 1975, ↗

あったが、医者の許可があつて例外的に野口との会見が認められたという。彼はこの時、彼のいう「自然療法」に従い、濡れた泥を包んだタオルを頭に巻いていた。会見時のガーンディーの印象を野口は次のように綴っている。

彼は2、3円で買へる洋銀縁の安もの眼鏡を下りめにかけ、彼の田舎者然たる無装飾が老人臭い心安さで一段と人を魅すると感じた。彼の顔は私にさし延べた腕と同様に、黒いよりはむしろ代赭色、…赤銅色に光っている。顔の形はくりくりとして小さい…彼の悪戯小僧の少年時代が思ひやられる。彼は殆ど裸といった位に腰の廻りに簡単な綿布を1枚巻いているのみで、<sup>かまきり</sup> 蟑螂のやうに痩せた脛をくの字形に曲げ、今素人か商売人か知らないが若い男にそれを按摩させている。私はこの虫も殺せないやうな柔軟な老人を眺めて、これがかつて大イギリスの肝を寒からしめ、21日間の断食を決行してイギリス人の道義心を最後の土壇場まで追

詰めた英雄児であらうかとかつ驚きかつ怪しまざるを得なかつた。私は次の瞬間に稻妻のやうに心に感じた。といふのは彼が同胞を思ふの愛と自由と独立を獲得せんとする熱が駆つて彼を「然らずんばわれ死を與へよ」の英雄児たらしめた…。彼は表面は…確に柔軟だが、なか身は命を鴻毛の軽きに置く硬骨漢だ。私は着印以来沢山の人に遇つたが、このガーンディーのやうに私をして心安く感じさせ、また後光の射すやうに思はせた人はなかつた<sup>78)</sup>。

この頃までに日本で本や新聞を通じて報じられていた平均的ガーンディー像を野口も抱いていたことが分かる。

この日の会見の内容としては、ガーンディーは「彼[野口—引用者]は私と何の議論をしようというのでもない。私はただ喜んで彼の話に耳を傾けることにしよう」とデザイナーに語っていたし<sup>79)</sup>、野口も「私は…もとより政治家ではないから君[ガーンディー—引用者]に政論を吹きかけるつもりで来たの

→ p.178の“Interview to Yone Noguchi”の記事によれば、訪問の日付は‘Before January 11, 1936’となっている。これはこの記事が載った *Harijan* 紙の日付が1936年1月11日だからであろう。また K. P. Goswami, *Mahatma Gandhi: A Chronology*, Government of India, New Delhi, 1971, p.154も会見の日付を1936年1月11日としている。しかし野口自身は、帰国直後出版した『印度は語る』(第一書房, 1936年, p.173) やのちに出した選集『想思殿』(春陽堂, 1943年, p.324)で、それが「1935年12月大晦日」であったとしている。また前者では、ガーンディーが彼に会つたときのことばとして、「詩人よ、私は君がカルカッタに入られて以来の動静をつぶさに新聞紙によって知つた。…君の最初の電報に1月31日とあったので変だなと思っていた所、昨日の電報で君が1ヶ月間違へられたことを知つた」(前出『印度は語る』, p.174)と記されている。野口はその同じ個所で、自分は時間に関しては1ヶ月や1年の間違いをすることさえあるなどと述べているが、ここでは会見の日を、野口の記述に従つて1935年12月31日としておく。

78) 野口、前出『印度は語る』, pp.175-176。しかしながら、それまでに行われてきたガーンディーの運動の意味を野口が正確に把握していたかどうかは、はなはだ疑問である。一つにはガーンディーの方法に関して、彼はくり返し「不抵抗主義」(例えば前出『印度は語る』, p.176) または「無抵抗主義」(例えば『起てよ印度』, 1942年, p.228)と表現しているが、これは彼の運動を正しく評価するものではない。また野口は、インドからの帰国後、インドの状況を題材とした多くの詩を書いて、ガーンディーを賞賛している(例えば「マハトマ・ガンディー」の詩)が、「ガンディーの運動が印度を席巻し非暴力の圧力は英國に匙を投げさせるであらうとまで思はした頃の作」と説明される「鳶」と題する詩では、「印度人は依然として夢を積み重ね、最も弱きは最も強きなるを説明せん」としている、そして彼等は抗議を焰にもやし、祈禱を天空に上らせんとしている」とうたい、これに「筆者はそんなまだるい方法では目的完遂はされないとした」との解説を加えている(前出『起てよ印度』, p.37)。

79) “Interview to Yone Noguchi”, *op.cit.*, p.178.

ではない。…ただ君の身を捨てての奮闘に対し敬意を表しに来たのである」と口にしているように<sup>80)</sup>、何らかの特定の問題が取り上げられたわけではなかった。共通の話題としては、詩人アーノルド(Edwin Arnold, 1832-1904)の日本觀、日本の社会活動家、賀川豊彦のことなどであった。アーノルドの本にふれて、野口が「愛と同情なしにある國民を正しく描くことはできません」と述べたのに対し、ガーンディーは、

確かに。より暗い側面を見ることは最も易しいことです。私どもが日本の交易・通商競争を通じて日本よりも暗い側面を知るように、あなたもわが國のより暗い側面をご覧になったに違いない。しかしより明るい側面を見るのが最良のことであり、日本よりも明るい側面について、私は賀川を通じて知っています<sup>81)</sup>

と答えている。ガーンディーはカルカッタのある友人から賀川の本を贈られたと野口は書いており、イギリス官憲が自分のインド訪問を許可しようとしないという賀川のことばを彼に紹介している<sup>82)</sup>。このことから、当時のガーンディーには賀川に関する関心が生まれていたことが分かるが、賀川については次章でふれることとする。

短い会見を終えて立ち去る前に、何か日本への伝言をと求めた野口に対して、ガーンディーは「私の伝言はあなたがたが我らの詩人タゴールから受け取られた伝言に含まれています。彼の伝言は我々の多くが伝えられるすべての伝言を含んでいます」と答えた<sup>83)</sup>。これに関して野口は、「その言葉の意味が私に明瞭でなかったが、恐らく彼はタゴールが常に抱いている日本の物質主義への反対を意味したのであらう。私はガンディーがへりく

だって老詩人に花を持たせた謙譲の態度を懐かしいものと思った」<sup>84)</sup>と書いている。先に見たように、野口は日本の拡張主義への警告を含むタゴールの発言を歪曲して解釈していたのであり、すでに1930年代初めから日本の中国侵略を憂慮していたガーンディーが別際に語ったことばの意味を読み取ることは出来なかった。野口の去った後、翌年1月7日には後述する高良富子（とみ）が諸外国のキリスト教指導者たちとともに、ガーンディーと会見のためにワルダーを訪れる。

1937年7月に起きた北京郊外盧溝橋での日中両軍の衝突を機に、日本軍が宣戦布告なしで中国への全面侵略を開始し、アジアの緊張はさらに深まった。この時期、インド内に中国への同情と連帶、日本への非難の声や運動が澎湃として起こったことについては本稿の最初でふれたが、こうした状況は野口に1つの舞台を提供することになる。彼は、1938年8月に日本の立場を擁護する書簡をタゴールとガーンディーに宛てて送った。これがその後数回にわたって、書簡交換という形で行われたタゴールとの論争の最初である。

この事情を当時の『東京朝日新聞』は「老詩人・愛国の論陣—タゴール翁に聖戦を説く」と題する4段組の記事を載せ、「インドの詩聖タゴールとわが詩人野口米次郎との間に支那事変をめぐり空前の大論争が行はれる事になった」として次のように報じている。

その発端は支那事変の勃発以来インドにみなぎる支那側のデマ宣伝は日印親善の和やかな気分を搅乱して本年76歳の老詩聖タゴール翁まで日本へ訓告の声を上げるに至ったので1昨日日印交換教授としてインドへ国賓待遇で招かれタゴール翁と25年間の詩友野口氏は63歳の老いた

80) 前出『印度は語る』, p.176。

81) “Interview to Yone Noguchi”, *op.cit.*, p.178.

82) 前出『印度は語る』, p.177。

83) “Interview to Yone Noguchi”, *op.cit.*, p.179.

84) 前出『印度は語る』, p.217。

胸中に青年の熱情をみなぎらせて去る8月「正義日本」を強調、長文の英文の手紙をタゴール及びガンジー両翁へ送ると共にカルカッタ最大の『ステートマン』『アミリタ・バザー』[正確には『アムリタ・バーザール・パトリカー』—引用者]両紙を始め全印13の新聞紙へ「日本詩人ヨネ・ノグチの公開状」として一斉に発表した<sup>85)</sup>。

この書簡は「わが日本の正義と東洋平和のため聖戦の意義」を強調するものであり、当然ながらタゴールはこれに対する反論を返した。その中でタゴールは日本の中国における行動が「近代文化人の人類への裏切り」であり、「自由が蝸牛の殻の中にもぐる時、偉大なる人間性は影をひそめます」として、野口そして日本の基本的姿勢をたしなめるとともに、日本と中国が手を携えてこそ新しいアジアの人間性が再生されるだろうと說いた<sup>86)</sup>。

これに対する返書（1938年9月26日付）で、タゴールの見解を「現実を離れて理想を語る」ものとして斥け、「愛国心を分けあって国旗に対する義務を果したい」という姿勢を崩さない。続いて、

仮に君の言葉を信じ所謂人道擁護の先鋒となり、支那をそのままに打っちゃって置いたならば、どうなる？…事実は明瞭だ。我々は壁一枚隔てて支那大陸にソヴェト・ロシアを持ち、数千年来養ひ来った日本精神の保全を、誰が約束して呉れると君は思ふ？人道主義のから念佛のために、祖先代々あつい恵みを受けて

来た国土を売払って仕舞ひたくない。馬鹿げたことをいってくれるな。軍国主義を罪悪なりとしても、君等の人道主義が人生を骨抜きの軟骨動物にして仕舞ふことを思ふと、誰かその罪悪を前者より軽いといふ？

と書く野口の見方は、当時の日本軍部や政府の発想をそのまま反映している。さらに彼は日本の武士道に言及し、「今日支那の戦場に於ても、日本兵はこの伝統を裏切らないものと僕は信じている。若し日本の軍国主義が西洋のそれと異なった点があらば、僕等には倫理的因素があることを注意せねばならない」として、かえってタゴールを諫めさえしているが<sup>87)</sup>、前年の12月に南京を占領した日本軍が中国軍民を多数虐殺したことがすでにインド人の耳にも達していたことを考えれば、タゴールたちが野口のこの書簡を読んで感じたことは容易に想像がつこう。

このあと野口は「三度びタゴールに與ふ」と題する書簡において、「文化人の裏切り」となっても「日本國の裏切り者」となりたくないと書き、最後には、日本批判を堅持するタゴールに対し、もはや「弁論無用」「万事休す、今何をか云はんやだ」と匙を投げることになる<sup>88)</sup>。この少し後の1939年4月に、日印協会主催の「印度研究会」第1回会合の席で、タゴールとの問題に関して問われるままに答えた次の言葉に、野口の本音があったと言えるだろう。

タゴールが支那を援護するやうな文章などを出して支那の同情を宣伝したから、

- 85) 『東京朝日新聞』、1938（昭和13）年9月27日付。野口もそのように述べているのであるが、例えば1938年8月分のThe Statesman紙（マイクロフィルム）を見ても、野口に関する記事は全く掲載されていない。おそらく同書簡をタゴール自身に対してと同時に、「公開状」としてインドの各新聞社に送ったものの、実際に掲載されたかどうかまでは確認しなかったのではないかと考えられる。因みに、The Sunday Statesman (The Statesmanの日曜版), Sept.4, 1938は、タゴールが野口からの書簡に対して、中国に対する日本の残酷な戦争を正当化するその立場を痛烈に非難する返書を送ったとして、その要約を報じている。
- 86) 同上『東京朝日新聞』。
- 87) 野口、前出『想思殿』, pp.332-335。
- 88) 同上, p.350。

不都合だと思ったのだ。戦争を広義に否定するならば、相手有っての喧嘩だから、何も日本ばかり悪く言ふ理由は無いぢや無いかと云ふ簡単な理解をして貰いたいと云ふ次第で、彼に手紙を送ったのだ<sup>89)</sup>。日本の侵略に反対し、中国への絶大な支持を掲げるタゴールたちと、中国侵略を「喧嘩」と考える野口らとの間に、越え得ぬ溝があつたことは明らかである。

先に見たように、野口はインドからの帰国後にガーンディーを取り上げたいいくつかの詩作や著述を行っている。その成果は1942年の詩集『起てよ印度』と翌1943年の『聖雄ガンジー』である。前者は、インド旅行中に出会った自然、人々、神々や信仰の様、また帰国後にインドの社会や政治を題材にして詠んだ約70編の詩と隨想を集めたものである。その中の「マハトマ・ガンジー」と題する詩は、ガーンディーの運動の失敗を嘆いて、「ああ、神様の正義はどこにある、何故に認められ賞賛されないか？」彼は大地に接近して人生を寂しく歌ふ<sup>90)</sup>」と、彼の姿を表現した。この詩に付した野口自身の解説は、その点をもつと明瞭に語っている。すなわち、

実に 6 年前のガンジーは印度の指導者として最高に達した時で、…「最も弱きは最も強きものなる」を彼は立証した予言者であった。その後世界情勢の変化と印度人心の動搖について、彼の指導力が漸時に衰へ今日に至ったのである。彼は今は国民會議派の実際的領袖ではない。大東亜戦争の推移如何に依っては印度はどうなるか知れないが、もし印度が自治を獲得したという場合、印度は日本の敵と組みすることになる。ガンジーの偉大

な人物であることは誰も否定しないであろう。彼は神の面前で仕事をした。彼は自己を律することに峻厳、自己の完成のみに力を尽した。故に彼は自分の手で独立を故国に與えることができなかった。彼は今日恐らく自分も失敗者の一人であったと思って感慨無量であらう。しかし私の本詩「マハトマ・ガンジー」は彼の挽歌となるであらう<sup>91)</sup>。

この解説の後には続いて、『大阪朝日新聞』の連載論稿「起てよ印度」の第1回目として彼が書いた「ガンジーに與ふ」と題する文章が転載されている。4段組のこの文章は、3月にイギリスが玉璽尚書クリップス(Staf-ford R.Cripps, 1889-1952)を派遣し、戦後に自治を認める条件でインドの戦争協力を求めてきたのに対し、即時独立を主張する会議派がこれを拒否するという強硬な姿勢に出たことを高く評価したものである。しかしこの文もまた、先の詩の解説と同じく、ガーンディーの指導への否定的な評価を下すものであった。ガーンディーや会議派の強硬な姿勢によって、イギリスは「死中に活を見出すことができない立場に追い込まれた」、しかし「君の仕事はもう終った」「今インドが直面している重大な現実は、身を理想に浄めた哲人が非協力と非暴力の提唱だけでは処理できない」と述べて、ガーンディーを「過去の人として」葬り去ろうとしているのである<sup>92)</sup>。

『聖雄ガンジー』の最終章「大東亜戦争と印度」は、「1941年（昭和16年）12月8日、我が天皇は大詔を渙発し給ひ、大東亜戦争は始まった」という文章で始まる。そのあと1942年のインドの状況に関して分析を行い、「今回の大抗争は、同じく自由と解放を本義

89) 「印度研究初会合」、『日印協會會報』68号、1939年7月、p.85。

90) 野口米次郎『起てよ印度』、小学館、1942年、p.41。

91) 同上、pp.43-44。

92) 同上、pp.44-46。『大阪朝日新聞』のこの連載では野口のほかに、日本画家・横山大観（『大阪朝日新聞』1942年4月5日付）、印度学者・高楠順次郎（同4月9日付）、西本願寺宗主・大谷光瑞（同4月13日付）など、インドに関わりのある著名人が登場している。

としてはいるが、背景となるべき東亜の情勢が違っている。即ち我が日本は疾風迅雷の如くに、東亜各地から英米蘭の数百年に亘った暴戾と搾取に終止符を打ち、皇軍は今ビルマにアンダマンに兵を進めて、「起てよ印度」を叫んで、印度を勇気づけている<sup>93)</sup>と位置づけている。ここでいう「今回の大抗争」とは、1942年8月に始まるいわゆる「インドを立ち去れ」(Quit India)運動のことで、それは8月8日の会議派全国大会(ボンベイ)においてガーンディーが反英大衆運動の開始をイギリスに通告した後、彼を含む主だった会議派指導者が即日逮捕されたにもかかわらず、翌日から全国的に様々な形で展開された歴史的な闘争となる。この闘争が、日本軍の東南アジア諸国占領という新たな戦争状況の中から生じた一つの結果であることは否定できない。しかし上に引用した野口の評価は、枢軸側と歩調を合わせようとするスバーシュ・ボース(Subhash Chandra Bose, 1897-1945)たちと異なって、大戦をファシズム(全体主義)対民主主義の戦いと捉え、民主主義=連合軍側を支持するという基本的路線を確認していたガーンディーや会議派指導部の立場を全く無視ないし曲解するものであった。

前章でふれた「すべての日本人に」と題するガーンディーの『ハリジャン』紙(1942年

7月26日付)への文章は、アジアにおける日本の暴虐に対する厳しい弾劾を含んでいた。その冒頭でガーンディーはかつてタゴールが日本を評したように、「高貴な高みから帝国的野望の域に降り立ってしまった」ことで日本はアジアを寸断し、人類の希望である世界連邦の実現を妨げることになるのだと指摘した。そして、会議派が開始しようとしているイギリス支配に対する闘争(「インドを立ち去れ」運動)は、日本が期待するように、日本軍のインド攻撃に合わせた連合軍への妨害などではないし、自分たちはイギリスの植民地支配に対してと同様に、日本軍やナチズム勢力に対しても抵抗するのだから、インドに攻め込む日本軍をインドが進んで歓迎すると信ずるなら大きな幻滅を味わうことになろうと書いて、日本の野望を断固として拒絶している。野口がこの文章を目にしたのかどうかは必ずしも明らかではないが、少なくともガーンディーのこの呼びかけに対する反応は野口のどの文章にも見出せない<sup>94)</sup>。このころの野口の思想は、日本軍の真珠湾攻撃後の1942年に出版された詩集『宣戦布告』の全編にわたって見られるような、日本主義、大東亜共栄圏のイデオロギーに完全に染められていたと言える<sup>95)</sup>。

93) 野口米次郎『聖雄ガンジー』、潮文閣、1943年、p.252。

94) ガーンディー選集の編者は、この呼びかけ文は日本の『東京日日新聞』『讀賣新聞』『都新聞』などに掲載されたとしているが(CWMG, Vol.LXXVI, New Delhi, 1979, p.309 fn.)、これら3紙を国会図書館所蔵のマイクロフィルムで見る限りでは、この年のどの号にも見当たらない。おそらくガーンディーのこの文を送られた各紙は、内容からして掲載を見合せたのであろう。ただ、大川周明が1942(昭和17)年12月15日、16日付『夕刊東京日日新聞』紙上に、このガンディーによる「日本人に対する警告」への返答として、「ガーンディを通して印度人に與ふ」と題する文章を寄稿しているが(大川周明「新亞細亞小論」、『大川周明全集』第2巻、岩崎書店、1962年、pp.925-932に転載。ただし、そこでは掲載紙名が『東京日日新聞』の後身である『毎日新聞』の名称になっている)，これはおそらく大川が何らかの方法で *Harjan* 紙におけるその文章を読んで応えたものではないかと推測される。

95) 野口米次郎『宣戦布告』、道統社、1942年。同じころ、インド人への公開状なるものを『文藝』誌に発表しているが、その基本的な発想は、「今回の大東亜戦争は4年前の日支事変を拡大したものに過ぎない、支那に於ける新秩序の建設が亞細亞全体のものになり、支那を暴戾な米英から解放して共存共栄を確立せんとした努力を、今回は亞細亞全体に及ぼさんとするのだ」(「印度人に憩ふ第一公開状」、前出『起てよ印度』、p.15)、あるいは「印度人よ、君達の国は長い年月の間、ノ

## (2) 高岡大輔とインド

高岡大輔（1901-1992）は、戦前および戦時期のインドに深い関心を持った代議士として興味深い存在であった。日印協会とも親密な関係を保ち、1936（昭和11）年に国民同盟から立候補して当選したのを最初に、その後ほとんど連続して衆議院議員（新潟二区）を務めた。

高岡のインドとの接触は古く、かつ長い。1923（大正12）年に東京外国語学校（東京外国语大学の前身）印度語科を卒業した彼は、「誇張した言葉を用ひるなら、学生時代から印度が好きで…学生時代のノートを繙くと随分印度に憧れていたことが書いてある<sup>96)</sup>」と自ら回想しているように、若い時期からインドへの強い憧憬を抱いていた。卒業後、新潟新聞社、大倉土木株式会社を経て、日印協会に勤務するようになって、インドとの関わりは当然ながら強まった。1927年に初めて渡印した高岡は続けて4年間滞在し、インド各地で様々な見聞を行った。帰国後は『日印協會會報』を中心に、インドに関する新しい情報を様々なタイトルのもとに執筆・掲載している<sup>97)</sup>。

長いインドでの体験に基づいて1933年に執筆し、翌年出版したのが最初の著作『印度の眞相』である。同書は「印度の現勢」「位置と地勢」「氣候風土」「宗教と葬祭」「印度人の奇習」「釈尊の一生」「東印度商会」「旅

行の用意」「印度旅行日誌」などの章を立てた、いわば一般向けのインド概説書兼ガイドブックという体裁をなしている。巻末に約40ページの「印度語独習1箇月」という「附録」が付いているのが、東京外国语学校印度語科卒業の経歴をもつ高岡らしい。「現勢」の章では、ガーンディーが立法議会の議員であった、会議派の総本部がアムダーワード（アフマダーバード）にあったとか、また1927年のサイモン委員会の任命と1928年のネルー報告の年代を逆にするなど、各所に事実の表記に混乱が見えるが、ガーンディーの政治・社会運動を同時代の時点まで詳しく叙述している。日印協会との関わりもあってか、1933年4月の日印通商条約の破棄と、9月からシムラーで開催された日印会商についても、その経過を細かい統計などを挙げて解説している。興味深いのは、高岡がプラッシャーの戦い（1757年）の100年後に大反乱（1857年）が勃発したことを取り上げ、その100年後の1957年に「大事件（=独立）」が起きるとの仮定を下している点である。その時には一と彼は続ける一、ガーンディーはすでにいないであろうが、「死したガンジーのガンディーズムは再び全印度を限なく照らすであらう」と結んでいる。ここに言う「ガンディーズム」とはおそらく政治手段における「非暴力主義」の意味で用いられているものと察せられるが、同じ個所で高岡は、「（インドでは）

▽ 外国の暴戾と圧迫のもとに去勢され武の何物たるかを忘れて仕舞ったかも知れない、然し今日本の「亞細亜を亞細亜のものたらしめよ」の大運道にあたって日々身を以て立証する犠牲を読み、君達は数千年前の英雄時代に復帰して躍然起つことが出来ないか。日本は単に自國だけの安居樂土を考へて居るのではない。日本は亞細亜民族がそれぞれ独立して米英諸国の傲慢無礼を千里の彼方に放逐するために戦っているのだ。戦争は日本だけでやれ独立は貴ひたいとあっては、余りに虫がよすぎる。日本は亞細亜民族各自の協力一致を切望している。またこの協力一致なしに大東亜建設の完遂は望めない」（「印度人に懇ふ第二公開状」、前出『起てよ印度』、pp.23-24）などのことばに如実に示されている。

96) 高岡大輔「印度は果して独立するか」、『日印協會會報』68号、1939年7月、p.22。

97) 例え、「印度人の素描」(51号、1932年6月)、「最近の印度政情」(52号、1932年12月)、「第3次英印円卓会議の前後」(1933年6月)、「印度を視察旅行する人々へ」(54号、1933年12月)。その後も、「甲谷陀生活の思ひ出」(55号、1934年6月)、「印度改正憲法案の検討」(57号、1935年5月)、「印度は果して独立するか」(68号、1939年7月)、「印度人の複雜性」上(70号、1939年12月)・中(71号、1940年5月)・下(70号、1940年7月)など、様々な内容のインド論を掲載している。

少くともガンディーイズム以外の何物かが台頭すると思ふ<sup>98)</sup>』と書き、必ずしもガーンディーの政治哲学に同調していないことを表明した。

1934年には高岡は『素っ裸のガンジー』を出版する。同書は主としてガーンディーの『自伝』に基づき、ロマン・ローランやガーンディーの友人アンドリュース (Charles Freer Andrews, 1871-1940)，その他インド人による様々なガーンディー評をも参照しているが、「その中に筆者が印度滞在中、実際に見聞した印度の人情、風俗、習慣を出来得る限り織り込んだもの<sup>99)</sup>」であると著者は付記している。ガーンディーの『自伝』は1920年の会議派ナーグプール大会まで叙述を終えているが、この高岡の伝記は、ガーンディーが政治活動から隠退を表明した1934年までを扱っていて、正に同時代人によるガーンディー伝と言えよう。高岡は、この時点ではガーンディーが文字通り政治生命に幕を降ろしたものと受け取ったようで、「65歳の老翁ガンジーは、余生を…チャルカとバガヴァット・ギーターとを友として生くるであらう<sup>100)</sup>」との予想まで下している。

このあと高岡は「和製ファッショ」と呼ばれた国民同盟<sup>101)</sup>という政党に参加し、1936年の衆議院選挙に同党から立候補して当選し、政治家としての道を歩み始める。国会議員としての彼の具体的な政治的活動については必ずしも明らかではないが、その間もインドへの強い関心は持ち続けたようである。1938年11月、高岡は8年ぶりでインドを訪れた。彼は以前と比較してインド政治の大きな変化を

目前にし、「印度は正に独立の一歩手前である」と感じた<sup>102)</sup>。インドでは、改訂されたインド統治法（1935年）によって行われた1937年の州立法議会選挙で会議派が大勝し、内部に様々な論議があったが、最終的に11州のうち8州で州政府を樹立した。インド総督に任命されたイギリス人州知事の絶大な権限は残ったが、曲がりなりにも州自治が実現したものであり、「8州に於いて警察権まで有つ州政府を彼等によって組織した国民会議派は白昼堂々と反英抗争、独立運動をやっている<sup>103)</sup>」と高岡が見たのもあながち間違いではなかった。因みに、1938年2月に開催された会議派ハリプラーナ大会でスパーシュ・ボースが議長に選出されているが、ガーンディーと思想的にも運動方針でも相対立するボースとの間に、このあと激しい角逐が続くことになる。

高岡は12月7日の会見という約束に従って、ワルダーのアーシュラムにガーンディーを訪ねた。実はこの時期、のちにふれるように、賀川豊彦も講師として参加する世界キリスト教宣教師大会が12月13日から25日まで南インドで開催されるため、世界各国からの参加者の多くがこれを機にガーンディーを訪ねている。高岡の会見の直前まで、大会の議長を務めることになっているアメリカのY.M.C.A指導者モット博士(John Mott)に率いられる宣教師のグループがガーンディーと会見していた。そこでは世界各地の人道主義的運動のあり方が語り合われたが、その中で中国での日本軍の侵略行為に関する質問が投げかけられた。前年7月の日中全面戦争突入、12月の

98) 高岡大輔『印度の真相』、丸善株式会社、1933年、pp.87-88。

99) 高岡大輔『素っ裸のガンジー』、我観社、1934年、「はしがき」p.v。

100) 同上、p.343。

101) 党は日本で初めて政党としての制服を採用し、イタリアのファッショを模した黒サージ、両胸ポケット、バンド付きのスタイルからその名で呼ばれた。1940年7月には解党し、大政翼賛会に合流した（江口圭一「国民同盟」、『大百科事典』第5巻、平凡社、1984年、p.822）。

102) 高岡、前出「印度は果して独立するか」、pp.23-24。

103) 同上、p.24。

南京大虐殺の報が全世界を駆けめぐり、インドでも「中国連帶デー」や日本商品ボイコットの呼びかけが行われ、1938年4月には会議派によって医療使節団が派遣されていた時期であり、当然出るべき話題であったと言えよう。ついでながら、この年11月に近衛文麿内閣は「東亜新秩序建設」の声明を発表し、それまで日本軍が占領した地域を確保したままに停戦に持ち込もうという方針をとっていた。宣教師たちに対してガーンディーは中国のとる行動は正しいとしながらも、出来得るなら、日本と同様の最新の破壊兵器を用いず、日本軍に対し「あらゆる機械を持ち込みなさい。我々の人口の半分を捧げても、残りの2億人はあなた方に跪かない」という非暴力の原則を貫いてほしいと答えた<sup>104)</sup>。大会後の12月末に中国、アフリカからの宣教師グループ（M.S.村尾という日本人宣教師の名もあった）が訪れたときも日本と中国の問題が議論された。そこではガーンディーは非暴力の原則とともに、日本商品、特に繊維製品のボイコットを強く訴えた。ただ中国代表の一人（Timothy Tingfang Lew）が表明したように、戦線で戦っている中国兵に対して「非暴力的手段で」と説くことで、彼等を混乱させてしまうのではないかという大きな危惧が客たちの間にあったことも疑いない<sup>105)</sup>。

このような時期の訪問であったから、高岡を迎える方でもそれなりに神経を使った様子が、ガーンディーの秘書デサーイーの文章から見て取れる。彼はこれまでアーシュラムにファシストや軍国主義日本の代弁者を迎えたことはなく、「この日本の国会議員高岡氏」もそういう人物ではなさうだとしつつも、「中国と日本の戦争が続行中の今、日本からの客は歓迎されそうにない」ことを恐れているようだと推測する。高岡も直接に戦争の話は出さず、「とにかく、戦争もそいつまで

も続くわけではなく、我々の義務は日本・インド・中国の間の友好がいかに樹立されるべきかを見出すこと」である点に議論を絞り、このことに関する質問をガーンディーに尋ねた。これに対するガーンディーの返答は極めて厳しい内容であった。

それ〔日本とインドの友好—引用者〕は日本が貪欲な目をインドに投げかけるのを止めれば可能です。君達がインドに武器を持ち込まないのは確かですが、時に大変お粗末なものを含む君達の商品でインドを満たすため、比類ない技、真理を隠す能力、およびインド人の弱点に関する知識を活用します。君達は搾取の手段においてインドの支配者〔イギリス—引用者〕を模倣し、それ以上のことをしました。今や君達の見方からすれば、インドから得る数百万ルピーを失うことは出来ません。そしてもし思い通りにそれが得られなければ、武力によってそれが出来ます。しかしそれは日印双方を結びつける方法ではありません。それが出来るのは相互の友情に基づく道徳的紐帯なのです。

しかし今日その友情の基盤はありません。…私は君達の良い点をすべて吸収したいと思います。しかし不幸なことに、だれも日本の良きものをここに運んできてくれません。君達はただ商品を安売りするのを信じているだけです。日本の衣類がいかに繊細で芸術的であれ、どうして私がそれを1ヤードたりとも入手したり出来ますか？それは我々には毒に等しいものなのです。というのもそれはインドの貧者にとって餓死を意味するからです。君達は外交、技術、安価な製品、武力闘争、搾取に関して西洋を遙かに凌駕しました。だとすれば、君達が搾取を

104) Pyarelal, "Non-Violence and World Crisis", *Harijan*, Dec.24, 1938, p.394.

105) Pyarelal, "A World in Agony", *Harijan*, Jan.28, 1939, pp.440-443.

何の悪とも見ない間は、君達と我々の間の友情などどうしてあり得ましようか？<sup>106)</sup>

日印協会に深く関わり、日印会商の行方にも強い危機感をもった国民同盟所属の衆議院議員高岡の耳に、ガーンディーが口にした「搾取」「安売り」などのことばはどのように響いたのであろうか。しかし、ガーンディーとの会見に関する高岡自身の文章にも、デサーイーの手記にも高岡の反論らしきものは残っていない。会見の最後に「アジア人のアジア」を追求する日本の立場について高岡が助言を求めたのに対し、ガーンディーはアジアを「井の中の蛙」としておくことに満足する所以ない限り、反ヨーロッパ的結合を意図するような「アジア人のためのアジア」なる教義に与することは出来ないとして、「大東亜共栄圏」的な発想を頭から拒絶した<sup>107)</sup>。アーシュラムを辞するに際し、高岡は頭山満ほか何人かの知人たちへの土産として、ガーンディーの肖像写真へのサインを頼み、それをもらって退散した<sup>108)</sup>。

この会見でのガーンディーの発言に対する高岡の反論は、上に見たようにほとんど語られなかつたと思われるが、これ以後の彼自身の文章を読むと、少なくともその政治指導者としての役割に関して完全に否定的な評価を公然と下しているのが分かる。帰国後に書いた文章で、ガーンディーを「私心の全くない完全に近い偉人」「最高の敬意を払ふに吝かではない」としながらも、

今日の印度には最早ガンジーの存在は、寧ろ印度独立と云ふ題目の為には、1つの障礙であるとさへ考察せらるるのである。端的に言ふならば、ガンジーの生存

する限り、印度は独立し得ぬのである。何んとなれば、彼は啻に革命に絶対必要な武力、暴力を根本的に排撃するのみならず、彼の闘争武器たる断食は今や英國の印度統治に力を添へることになってゐる。換言すれば、ガンジーの存在は英印間の抗争に対する大きな緩衝地帯と化してしまつてゐる<sup>109)</sup>

として、今やガーンディーがインドの運動にとって無用になったと公言するのである。

ただ問題は、ガーンディーの存在がなくなった時にインドがどういう方向に向うかであるが、高岡は「国民會議派が掌握するところとなれば、その印度は西向きの国となり東洋とは没交渉の国となるであらう」と考える。そこで、會議派に代わる勢力として「将来大發展するであらう」と期待されるのが、藤井日達や野口米次郎のところでもふれたヒンドゥー至上主義組織、ヒンドゥー大連合(HM)である。HMは本来は主として宗教・文化組織という性格を持つものであったが、この時期には政党としての活動も行い、州議会選挙にも参加している。高岡はこの組織のことは余り多くは知らないと断りながらも、「此のヒンズー・マハサバ〔マ〕が印度を掌握するならば、印度は東向きの国となり、東亜共同体の仲間入りをするであらうと想像する。勿論、此のヒンズー・マハサバが印度に君臨する時は、キリスト教と回教とは印度から姿を消さねばならない<sup>110)</sup>」と書いている。高岡は1938年のデリー滞在中、実際に HM の最高指導者であるサーヴァルカルやムンジエー(Balkrushna Shivram Munje, 1872-1948)とも会見している。この年ナーグブルで開催された HM 大会の印象について、

106) Mahadev Desai, "A Japanese Visitor", *Harijan*, Dec.24, 1938, p.404.

107) *ibid*.

108) 高岡大輔『見たままの南方亞細亞』、日印協会、1939年、pp.276-277。

109) 高岡、前出「印度は果して独立するか」、pp.24-25。

110) 同上、pp.28-29。

「全体主義国家日本に対して正面から手をさしのべ」、「一般の恐日病患者が見受けられ、反日空氣なるものが相当あるが、此のヒンズー・マハサバのみは勇敢に日印親善を高調し印度大衆によびかけている<sup>111)</sup>」と記し、HMの姿勢を高く評価した。

同党は「ヒンドゥー民族・国家」(Hindu Rashtra)としてのインドの建設を目指すが、外交的にはいかなる「イズム」にも依存せず、ドイツ、イタリア、日本、ロシアがそれぞれナチズム、ファシズムであれ、またボルシェヴィズムであれ、その国に適したと判断した政策を探るのは当然との立場を表明していた。1938年11月に、総裁サーヴァルカルはブネー(ブーナ)の大集会で次のように述べた。

パンディット・ネルーや会議派を代弁者としない幾千万のヒンドゥー民族主義者(Hindu Sanghatanist)は、自らの民族的連帯と実力に最も適し、かつ最もそれに貢献すると考える政府の形態や政策を選択したという理由のみで、ドイツ、イタリア、日本、あるいは他のいかなる国家に対しても敵意を抱くものではないことが、ドイツ、イタリア、日本の国民の前に明確にされねばならない<sup>112)</sup>。

会議派が強硬な反日姿勢を次第に明確に打ち出す中で、多くの日本人がこうしたHMの立場に好意と共鳴を寄せるようになったのである。高岡は1941年に、「此の世界変革期に

直面した日本、東亜新秩序の建設を高調する日本人に対し、更に一層印度問題に関心を持って頂きたいと希望」して出版した書物の中でも、HMへの強い期待を記している<sup>113)</sup>。

高岡は太平洋戦争勃発後も翼賛政治会、護国同志会などの会派に属して衆議院議員に選出される一方、1941年から日印協会評議員や理事を務めて、インド問題に深い関連を持ち続けた。日本山妙法寺僧侶である今井行順師の回想録には、彼らが1942年の一時期、日本軍の諜報機関である「岩畔機関」とバンコクにおいて行動をともにしていた時、機関の顧問として高岡大輔代議士もそこに来ていたことが記されているが<sup>114)</sup>、高岡のこうした機関との関わりについては詳しいことは分からぬ。

戦後も高岡は、無所属倶楽部、改進党を経て、1955年からは自由民主党から立候補して当選している。

### 3 キリスト教社会活動家の場合

これまで見たように、戦間期の1930年代にガーンディーを訪れた日本人の中で、宗教者の存在が目立った。その思想や運動の背後ににあると考えられる深い宗教性に引かれて彼らはガーンディーとの会見を求めたのであろうが、ガーンディーもまた日本の文化や精神にふれる楽しみを彼らとの出会いから得よう

111) 高岡、前出『見たままの南方亜細亜』、p.241。

112) A.S.Bhide ed., *Whirlwind Propaganda of Veer Savarkar*, Bombay, 1941, pp.50-52.

113) 高岡大輔『印度の全貌』(新東亜風土記叢書4), 岡倉書房, 1941年, pp.271-272。ヒンドゥー大連合の会員数については、上のサーヴァルカルの演説にあるように組織自体の宣伝もあって、日本人の間ではかなり過大な受け取り方が行われていた。高岡も党员の言葉を借りて、「驚く勿れ4千万」している(上記『印度の全貌』、p.271)。野口米次郎に至っては、「ヒンズウ・マハサバといっている印度切っての最大団体で、会員の数驚く勿れ2億万に及ぶといふ」(野口、前出『印度は語る』p.86)とまで書いているが、この数字は当時のインドにおけるヒンドゥー教徒の総数にほぼ相当するものである。現実にはこの組織の正式な会員(党员)数は把握されていない。最大の組織(政党)と考えられる国民会議派の場合で、4,479,579(1938年)である(All-India Congress Committee, *Congress Handbook 1946*, Allahabad, 1946, p.222)。

114) 今井行順、前出『アラカンに轟く太鼓一戦場の日本山』、p.132。

とした。この章では、戦前世界的に名を知られ、ガーンディーや秘書のデサーイーらも大きな関心を寄せたキリスト教社会活動家の賀川豊彦を取り上げたい。その前に、多少時間的に前後するが、1936年にガーンディーをワルダーに訪れたもう1人の著名なキリスト教社会活動家である高良とみのことについておこう。

### (1) 高良とみとインド、ガーンディー

高良とみ（富子ともよばれた。旧姓和田。1896-1993）は、キリスト教の信念に支えられた教育家、生活合理化運動などを指導する婦人運動家、また平和運動家として戦前・戦後を通じて献身的に活動した人物である。彼女の自伝<sup>115)</sup>によってその経歴を簡単に追ってみよう。測量技師だった父の仕事の関係でいくつかの土地を回ったあと、1914（大正3）年に県立神戸女学校を卒業し、日本女子大学英文科に入学した。この間、父母の影響もあり、キリスト教に入信している。大学時期の友人の一人が中条（宮本）百合子で、彼女の小説『伸子』に登場する教育心理学専攻の安川冬子という人物は高良をモデルにしたものだという。1916年夏、軽井沢で女子大の修養会に参加した時に、この年はじめて日本を訪れ、軽井沢に来ていたタゴールの講演を聞き、また同窓生たちとともに彼の身の回りの世話をしてこの詩人に傾倒した。その後、心理学研究を志して1917年にコロンビア大学に留学し、1922年に「飢餓と行動の関係」（Experimental Study of Hunger in Its Relations to Various Behaviours）という論文で博士号を取得した。帰国後、九州帝国大学医学部精神科助手に任せられ、教育者としての道に踏み出した。

タゴールとは在米中にニューヨークで再会

するなど交流が続いていたが、1924年に朝日新聞社に呼びかけて彼の再来日を実現させた。前章でふれたように、この折に詩人野口米次郎とタゴールの交友も深まる。高良（和田）はタゴールの滞在中各地に同行し、講演の通訳を務めた。タゴールの人となりや作品に関する文章を雑誌『家庭週報』などに発表し、「東洋文化と日本の使命」<sup>116)</sup>と題する後に有名になる彼の講演の翻訳も行った。こうしたことことが契機となり、彼女は日本タゴール会の会長に就任することになった。

1926年2月、新渡戸稻造や賀川豊彦らの呼びかけで、日本のキリスト教徒による「日本友和会」が国際的なキリスト者の平和団体「国際友和会」（International Fellowship of Reconciliation = FOR）の日本支部という形で結成され、彼女はこれ以後、この組織に深く関わる。その翌年、九州帝大に新設された法文学科の助教授への昇任問題が浮上したが、美濃部達吉によって「未婚の女性が男子学生に教えるなどもってのほか」という横槍が入って話は流れた<sup>117)</sup>。そのため彼女は九州を去り、母校の日本女子大学に移って教鞭をとることになり、1929年に医学者高良武久と結婚した。1933年には日本女子大学に在籍のまま、求められて帝国女子医学薬学専門学校の教授となり、併せて附属家庭科学研究所の所長に就任して、女子に対する科学的な総合教育に着手した。

一方、中国における日本の軍事行動に関して大きな危機感を抱いた高良は、『東京朝日新聞』（1931年11月18日付）に「非常時に婦人の意見」という記事を寄せ、「平和を願う日本婦人が責任を果たさないうちに日支関係が今日の様な関係になったことは誠に残念だ。今こそ日本が平和と正義の支持者であることを世界にはっきりさせる時だ」との発言を

115) 高良とみ『非戦を生きる 高良とみ自伝』（以下、『自伝』），ドメス出版，1983年。

116) 『タゴール著作集』VII，アポロン社，1960年所収。

117) 高良，前出『自伝』，p.68。

行っている<sup>118)</sup>。1935年、そうした彼女のもとに年末に南インド最南端のコモリン岬(Kanyakumari)で開かれる第1回全インド婦人会議への招待状が届いた。同じころ、国際友和会に属する旧友のイギリス女性レスター(Muriel Lester)の訪問を受け、深刻化する日中問題について語り合った。その結果、婦人会議への参加を兼ね、キリスト者としてガーンディーを訪れ、出来れば彼を日本に招こうということになった。レスターは最初1926年10月に、アムダーワード市内のサーバルマティー・アーシュラム滞在中のガーンディーを訪れたことがあり、また1931年9月、英印円卓会議に出席するためロンドンに到着した直後のガーンディーをイースト・エンドのキングスレー・ホールに招いたのも彼女であった<sup>119)</sup>。

1935年12月にカルカッタに着いた高良は、シャンティニケータンでタゴールと旧交を温めた後、ポンペイではナーラードゥとも会見した。12月27日から1週間は、レスター、およびもう一人の中国女性活動家とともに全インド婦人会議に参加して、翌年1月7日にワルダーのガーンディーを訪れた<sup>120)</sup>。このワルダー訪問についてはむろん戦後に書いた自伝でもふれているが、その元となる文章は帰国後に雑誌『女性展望』に載せているから、当時多くの人々に読まれたものと思われる。それによれば、彼女たちはアーシュラムに数日滞在したようで、その間に高良も一対一でガーンディーと話す機会を持った。

彼女から日本の近況を聞くのを楽しみにしていたと切り出したガーンディーは、「此頃

の日本は、どうなのですか。支那へ行ってはメナース [menace (脅威) —引用者] であり、印度へ来ては搾取するやうに見えますが」と厳しい問いを発した。高良はこれに強い「迫力」を感じ、たじたじしながら、

然し唯、一般的の日本人の生活意識では、必ずしも、さう自覚しては居りません。否寧ろ、私共の接する階級では隣邦支那や、印度の東洋人兄弟と、生活を頗ち度い助け度いと云ふ熱望に燃えて居る人が多いのです。物質も文化も、共にシェアして行き度いと云ふのが、日本人の今の大願ひなのです

と答えると、ガーンディーは意外そうな顔をして暫し沈黙した。次いで、大量に海外に流れる安価な工業製品を生み出す日本の労働者に関する質問には、日本の工場でも近年は賃金・教育・福祉などの改善を行わなければ資本家もやっていけなくなっていると返答した。協同組合については、ガーンディーが賀川豊彦の著書などによりその運動に関心を持っていることを聞いていたとして、高良はカーディー(手織綿布)を中心とするインドの農村手工業に関する話題を取り上げている。

最後にガーンディーの日本訪問を促す会話に移って行く。彼女はガーンディーに対し「(日本の)一般の生活者はまことに純な憧憬を」抱いており、彼の来日が実現し、彼の「精神的指導を賜」ることで「新しい東洋の歩む道を見出す人も決して少なくはない」と強く主張した。ただ、ガーンディーに日本へ来てほしいと訴えた高良は、このとき次のよ

118) 同上, p.82。

119) C. B. Dalal (compiled), *Gandhi: 1915-1948, Detailed Chronology*, Gandhi Peace Foundation, New Delhi, 1971, p.92; D. G. Tendulkar, *Mahatma: Life of Mohandas Karamchand Gandhi*, Publications Division, Government of India, New Delhi, 1969 (Reprint, 1st edition in 1951), pp.114-115. なおレスターにはガーンディーに関する次の著書がある。Muriel Lester, *Gandhi's signature*, Fellowship of Reconciliation, New York, 1949, 31pp.

120) 秘書のデサーイーによれば、翌日8日にはY.M.C.A.世界委員会から3人の代表がガーンディーを訪問しており、その中の一人は斎藤という日本人で、彼はインドにおける日本商品の氾濫、またガーンディーの機械に関する考え方など、様々な問題にわたる質問を呈している (*Harijan*, Feb. 27, 1937, pp.18-19)。

うな思いを心に持ったことを記している。

私はカルカッタ上陸以来、実に多くの日本の過去の姿を印度の生活の中に見つけて、その中から脱け出して歩いて来た今日の日本を見たならば…そして正当な説明を加へたならば…どの位、東洋の先進文明国にして、今は後進国なる印度にとっても、亦日本にとっても学ぶことが多いを考へ続けてきた。

近代日本のあり方を他のアジア諸国のモデルとするこうした発想を高良ほどの人物がもっていたのは意外であるが、会見の中でそのこと自体は話題とならなかった。日本への招待に関してガーンディーは「もし神が許し給ふならば」という言葉で応えたが、彼自身にはイギリス＝植民地当局の方針からして実現可能な計画とは思えなかつたに違いない。

ワルダー滞在を終えた高良はボンベイでナードゥに再会するが、「ガンディイに逢ひましたか？アアさう。あの爺さん、老耄れていますって、頑固で低能で、驢馬のやうに馬鹿気てたでせう」と眞面目に話す彼女の言葉に驚かされた<sup>121)</sup>。ガーンディーに関するナードゥのこうした表現は、インド人の間ではすでによく知られたものであった。彼女は、ガーンディーの姿をミッキーマウスに喩えたこともある。

ところで、ガーンディーとレスター、高良との会見には秘書のデサーイーも同席していたが、彼はそのあと単独で高良と会話をもち、

その内容を『ハリジャン』紙の「週間便り」(Weekly Letter)で報告している。そこには高良自身の文章が伝えていない会話が紹介されている。彼は「彼女と話している間、その謙譲さと深い教養は我々の心を打ち、彼女が貧しく虐げられた人々のことを話すとき、その思い遣りと心広い人間的憐憫の情が彼女の内に満ち溢れる」と、高良の人格を高く評価する。しかし、ガーンディーの日本への招待に関しては、「あなた方は本当にガーンディーを必要とするのですか。日本がガーンディーの何を有用だと言うのですか、インドを搾取し、中国を強奪する日本が？」と問いつめ、日本にとって彼の何が必要なのか納得できないと否定的であった。高良は日本軍の中国での行為を恥ずかしいとし、精神的支えを失いつつある日本人をガーンディーが鼓舞してくれることが最大の望みであると訴えた。デサーイーとのこの会話に関して高良が自分の文章で全くふれていないのは、「不可触民」に関わる話をデサーイーとし、彼がそれに多大の興味を示したことである。デサーイーによれば、高良は次のような説明を彼に与えている。

我々はあなた方と同じ問題をもっていました。そして我々はそれを解決いたしました。日本にも「不可触民」がいたことはご存じですね？それらのいわゆる不可触民は外国からやって来た人々で、死んだ動物の皮を剥いだり、皮を鞣すなど、

121) 高良富子「ガンディイと日本を語る」、『女性展望』Vol.X, No.VII, 1936年7月号, pp.10-13。この文章の中ではふれられずに、後の自伝には挿入されている次のような会話がある。ガーンディーが日本の中国侵略について「いかに老いたりとは言え、文化の恩師である中国や朝鮮を侵略するとは恩知らずにもほどがある。それはあなた方、平和運動をする人々の心が不十分だから軍部を阻止できないのだ。あなた方が死んで抵抗しなければ、日本の軍部の侵略は止められない」と述べたのに対し、高良が応える。「日本にも賀川豊彦や尾崎行雄、斎藤隆夫やその他、婦人団体など、戦争に抵抗しようとするひとびともいるのですが、とても軍部の力にはおよびません。その上資本家たちまで軍部に動かされているので、ますます軍部は力を伸ばしている状況です」。するとこれにおおいかぶせるように、ガーンディーが「それを阻止するのがキリスト教平和主義者であるあなた方の仕事ではないか。あなた方、賀川や高良が死なないから軍部を止められないのだ」と言ったのを、高良は「ガンジーさんもずいぶん無理なことをおっしゃる人だなあ」と思いながらも、その怒りの表情に圧倒された(高良、前出『自伝』, p.92)。

卑しいとされる仕事をしました。彼らはユダヤ人のゲットーのような地区に住まい、彼らに対する扱いは犬に対するよりも劣るものでした。すべてこれはここインドに存すると思えるものと同じく厳然たる事実でした。しかし明治維新とともにすべてが音を立てて失くなりました。子供のころ、私はこうした「不可触民」を避けるように言われました。でも今の世代の人たちは「不可触民」がどのような人たちであるかをあなた方に話すこと最早出来ません。

続いてデサーイーの質問に答えて、彼女は水平社の運動に関する簡単な説明を加え、30年に及ぶその運動の結果、差別問題は解決されたと述べている<sup>122)</sup>。今日から見れば、日本におけるいわゆる被差別民問題をめぐる高良の基本的な考え方がいかに誤った理解や偏見に満ちたものであるかは明らかである。しかし何よりもこの問題が、特に1930年代以降ハリジャン（不可触民）解放運動に熱意とエネルギーを注いでいたガーンディーとの会見で語られずに、秘書デサーイーとの会話の中でのみふれられた理由は分からない。デサーイー自身も「清掃問題」に関してもっと彼女と議論したいと思ったが、彼女の滞在時間が十分でなくあきらめざるを得なかったと書い

ている<sup>123)</sup>。

1937年に全面的中戦争に突入し、翌年には国家総動員法が布かれるが、高良も次第にその流れに引き込まれていった。1937年に国民精神総動員東京市実行委員会経済協力科委員、1938年に非常時国民生活様式改善委員、1939年に大蔵省貯蓄奨励委員、1940年に価格取締調整の物価形成中央委員、国民精動中央本部の贅沢全廃委員として名を連ね、同年12月には大政翼賛会臨時中央協力会議に唯一の婦人議員として参加している。そうした場で高良は「祖国」の基本的な構成要素である家庭を預かる女性の立場から「婦人局」の開設を求めたりするのであるが、「彼女が唱えていた女性の苦節の論理が、戦争遂行を目的とする国家の論理にものの見事にすっぽり飲み込まれてしま」うことになってしまった<sup>124)</sup>。

その後も高良は代表的な婦人運動指導者として様々な新聞・雑誌で発言しているが、その中の一つに1942年の『讀賣報知』紙に寄せた「印度の女人群独立に燃え立つ」と題する文章がある。自らがインドで身近に接したナーラードゥ、カマラーデーヴィー(Kamaladevi Chattopadhyaya)<sup>125)</sup>およびガーンディー夫人カストウルバーらをインド女性の理想像として描いたこの文章は、次のような言葉で結ばれている。

122) M.Desai, "Dr.Kora", *Harijan*, Jan.18, 1936, p.386.

123) *ibid.*, p.387.

124) 枝植恭子「解説」(高良、前出『自伝』), p.221。

125) このカマラーデーヴィー・チャトバーディヤーはナーラードゥとともに、ガーンディーが信頼する国民會議派内の代表的女性指導者であり、1941年6月にアメリカでの講演旅行からの帰途、日本に立ち寄った。この時、日印協会に招かれて「印度の実情」と題した講演を行い、その通訳は高良が務めている。(『日印協會會報』76号、1941年9月, pp.1-12) これより前にカマラーデーヴィーは外務大臣松岡洋右を訪問しているが、その記録が『日印協會會報』に載っている。彼女が「日支間の戦争」のことを持ち出すと、松岡は「日支間には戦争はありません。…あれは飽くまで支那事変です」と応える。彼女はなおも、現実においてそれは戦争であり、「日本の帝国主義」による侵略であると強く主張した。これに対して松岡は、それが戦争であるならその原因は蒋介石の反日行動にあると強弁し、「貴女はまだ支那事変について解って居られません」と決めつけた。続けて彼が、「八紘一宇という日本の理想」について、また「エンペラでもなければキングでもない」天皇がいる「日本の國は皇御國」であることを長々と語るのを聞いた後で、彼女は「(それにもかかわらず) 何故お国には対立があるのです」と(おそらく皮肉を込めて) 尋ね返した(高岡大輔「松岡外相・カマラ・デヴィ女史会談記」、同上『日印協會會報』76号, pp.13-16)。

いま独立の闇頭に立つ印度女性に向って私は衷心から叫びたい。「印度の女性よ、東洋の精神に還りそれに徹せよ、ガンジー夫人の如く疑ふことなく日本を信ぜよ、それのみが、印度が自由を恢復し真に東洋の印度として蘇る道である」と<sup>126)</sup>。

高良の自伝に「解説」を寄せている柘植恭子によれば、「大東亜共栄圏の幻想に足をすくわれ」た高良が、その幻想から自らを解き放して行くのは1943年から44年にかけてのことであった<sup>127)</sup>。戦局が進むにつれて、大政翼賛会に対する気持は幻想から失望へとかわり、中央協力会議へも出席しなくなった。

戦後の1946年4月に行われた第1回参議院選挙に民主党から全国区で立候補し、約18万票を得て当選した。その後、平和運動に取り組むとともに、売春防止法制定など婦人運動の進展に関与し、1953年4月の日本婦人団体連合会(婦団連)の結成に参画してその初代の副会長(会長は平塚らいてう)に就任している。

## (2) キリスト教徒=賀川豊彦の活動

賀川豊彦(1888-1960)は、戦間期から大戦期の1920~40年代に平和主義者として外国で最も知られた日本人と言える。その伝記を書いたシルジエン(R. Schildgen)によれば、

物質的と精神的とを問わず、自らが蓄えるあらゆるものを与えることによって

貧しい人々に自らを捧げるという、文字通り福音書の生き方を生きようと決心した、日本および世界中で最も影響力をもつキリスト教社会改革家、宗教指導者、そしておそらく最も著名で高い尊敬をあびる日本人

であり、その賞賛者たちから「日本の聖者」「日本のガーンディー」「日本のシュヴァティア」とまで称された<sup>128)</sup>。これより前にすでに、世界に警鐘を鳴らす優れた平和主義的活動家として、ガーンディー、シュヴァティア(Albert Schweitzer, 1875-1965)と並べて賀川の名が挙げられることもあった<sup>129)</sup>。

賀川は1888年に神戸に生まれたが、15歳の時に家が破産し、アメリカの長老会派教会宣教師から財政的支援を受けて学業を続けた。1904年に洗礼を受け、翌年明治学院高等部神学予科に入学した。1907年に神戸神学校に転入したが、重い肺結核のため療養を余儀なくされた。1909年、死を予測した彼は一大決心をし、残る日々を貧しい人々に捧げるため、神戸市葺合区新川のスラム(賀川は「貧民窟」と表現している)に移り住む。1914年から約3年間プリンストン大学に留学した期間を除いて、1923年までの10年間以上を新川での活動に費やした<sup>130)</sup>。留学直前までの葺合新川での体験に基づいて執筆し、留学中の1915年に出版されたのが最初の著書『貧民心理之

126) 『讀賣報知』、1942(昭和17)年8月8日。

127) 柘植、前掲「解説」(高良、前出『自伝』), p.223。

128) Robert Schildgen, *Toyohiko Kagawa: Apostle of Love and Social Justice*, Centenary Books, Berkeley, 1988, pp.1-2.

129) 賀川豊彦の思想と活動に関する古典的な書物として、Allan A. Hunter, *Three Trumpeters Sound: Kagawa-Gandhi-Schweitzer*, Association Press, New York, 1938があるが、筆者は未見である。

130) 労働運動で一時は賀川と行動をともにした社会主义者の荒畑寒村が、その『自伝』の中で葺合新川における賀川を評して、「賀川君が往住を構えて、馬島ドクトルの診療事業とともに、キリスト教の教化に従っていた葺合の貧民窟は、案内役の賀川君がここはどうすれば良いと思うかと質問したのに対して、私は言下に焼却する外はないと答えたほど実にひどい処であった。なるほど、この貧民窟に住んで宣教に従っている賀川君を、世間の人が「葺合の聖人」と呼ぶのも故ある哉と思ったが、しかし「どうした」とと腫物だらけの子供の頭を撫でる賀川君にも、「有り難く思え、おまえなんかの頭を撫でて下さるのは先生だけだぞ」という母親にも、眞に互いの心に通う愛情や感謝の念は感ぜられなかった」と書いている(荒畑寒村『寒村自伝』上、岩波文庫、1975年, p.419)。

研究』である<sup>131)</sup>。

次いで彼は自伝的小説『死線を越えて』を執筆している。最初雑誌『改造』に連載された後、1920年に改造社から出版されたこの本は、発売後1年で210版を記録し、発行部数は百万部に達したという<sup>132)</sup>。しかも同書は、1925年1月からアメリカの雑誌『アジア』(ASIA)に木版画の挿し絵入りで翻訳連載されるなど<sup>133)</sup>、外国にも広く翻訳・紹介され、賀川の名を世界に広めることになった。賀川はその後、『死線を越えて』の続編『太陽を射るもの』、続々編『壁の声きく時』を執筆し、この3部作は『死線を越えて』のタイトルで広く普及していった<sup>134)</sup>。

1917年5月にアメリカから帰国した賀川は、貧民=労働者自身の主体的解放運動としての労働組合運動の重要性を認識するようになっていた<sup>135)</sup>。大阪や神戸で労働者の運動を指

導し、1919年8月には大日本労働総同盟友愛会の設立（従来の友愛会を改称）に関わった。その大会で賀川が起草し全会一致で採択された「宣言」は、「労働者は人格である。…我等生産者はかく宣言す。我等は決して機械ではないと、我等は個性の発達と社会の人格化の為に生産者が完全なる教養を受けうる社会組織と、生活の安定と自己の境遇に対する支配権を要求す」と高らかに謳い上げた<sup>136)</sup>。ただ彼が労働組合運動の成果として描く未来社会は「生産者議会」、すなわち労働組合を基礎とする議会主義で、第1次大戦後イギリスで発展した社会主義思想をモデルとする「ギルド社会主義」と言われるものであった<sup>137)</sup>。すでにマルクスの著書を読んでいるが、その思想に同調することはなかった。特に階級闘争に関しては否定的な評価を下し、私は、競争の必要を認め、戦争の事実

131) この研究は貧困の問題を経済的窮乏という点のみに帰着させず、精神・心理の側面から捉えようとするものであったが、書物の各所に見える差別的内容・表現に対し、当時の水平社から抗議があり、のちに賀川自身それに関する反省を記している。しかし同書は戦後に出版された『賀川豊彦全集』(全24巻、初版1962-64年、第2版1972-74年、第3版1981-83年)の第8巻にも収録されており、これが問題化された結果、出版社のキリスト新聞社は問題個所を削除し、「差別文書」を出し続けてきたことを認める社告を1985年に出すことになる。『貧民心理之研究』に見られる賀川の差別意識について論じた研究として、鳥飼慶陽『賀川豊彦と現代』、兵庫部落問題研究所、1988年、および佐治孝典『土着と挫折—近代日本キリスト教史の一断面』、新教出版社、1991年などがある。またキリスト新聞社編『資料集・『賀川豊彦全集』と部落差別—『賀川豊彦全集』第8巻の補遺として』、キリスト新聞社、1991年は、同新聞社が、『全集』初版刊行予告以降に同社の全集刊行委員会に寄せられた抗議に対する様々な段階の議論・協議や交渉を経て、『貧民心理之研究』を「差別書」とし、賀川の「差別体質」を指摘するに至る経過をまとめたものである。

賀川は、日本における部落解放運動の最初の全国組織、全国水平社（1922年設立）の創立大会に出席し、また初期の水平社運動指導者とも交流があったが、1923年ころよりこの運動から離れていたとされる。（鳥飼、前掲書、pp.123-128）前述したキリスト新聞社刊の『資料』(p.18)は、「水平社の人々との関わりから離反した以後の賀川は、農民運動、労働運動、生協運動に取り組み、あるいは、キリスト教伝道、とくに“神の国運動”を展開したが、差別に苦しむ部落に対しては、ついに具体的行動として、何ら取り組みも起こさなかった」とも述べている。

132) 『死線を越えて』の「解説」(武藤富男),『賀川豊彦全集』[以下,『賀川全集』] 第14巻,キリスト新聞社, 1964年, pp.608-609。

133) 横山春一「賀川豊彦『死線を越えて』」、エコノミスト編集部編『日本近代の名著・その人と時代』、毎日新聞社、1966年、pp.229-230。

134) この3部作は2000年現在でも、文庫本（「現代教養文庫」A-326～8、社会思想社）として発行されている。

135) 隅谷三喜男『賀川豊彦』(同時代ライブラリー245), 岩波書店, 1995年, p.47。

136) 同上, pp.69-70。

137) 同上, pp.69-70。

を認めるが、私は階級争闘は民族自滅の近道であることを思ふ。動物社会に於いて、生存競争は必ずしも進化を意味しないが如く、階級争闘は矢張り救済るべき性質を帯びる者である。…

唯物主義は何時も階級制度を生む。マルクスの社会主义の哲学は階級争闘を脱れざるものとして居る。然し、精神主義は何時でも平等を目指す<sup>138)</sup>

と記している。

当時、特に関東の労働運動は「サンデカリズムの感化を受けて革命的マルキシズムで一貫しよう」との立場が強かったが、賀川は「同じく資本主義反対でも同じ人間に対して憎悪観念を極端に持つ」ことに反対で、直接行動を排し、1920年の友愛会大会でも「私の「無抵抗による抵抗」の階級争闘否認説は罵倒と嘲笑の中に葬られた。私は1人ぼっちで嘲笑の中に階級争闘が世界を救う所以で無いことを説くことになる<sup>139)</sup>。しかし、1921年に賀川らの指導で決行され、戦前日本最大の争議と言われた神戸の三菱および川崎造船所のストライキが惨敗し、その後労働運動が急進化してゆくまでは、彼は日本における重要な労働運動指導者の1人であった。このストライキによって賀川は他の指導者たちとともに逮捕され、騒擾罪で起訴・投獄された。

そのころ賀川は、まだ初期の段階にあった農民運動に関わるようになった。都市部にあるスラムで活動していた彼は、仕事と生活の糧を求めて都会にでてくる貧しい農民に深い関心を寄せていた。1921年に国際労働機構(ILO)の第3回大会で結社の自由と権利の確認が農民にも認められたのを受けて、農民組合運動の気運が高まった。その結果同じ年に日本農民組合(日農)が結成され、賀川も

理事の一人となった。翌22年、機関紙として『土地と自由』が創刊された。1925年にはこの組織を基盤に労働農民党が発足するが、これにも賀川は執行部の一員として加わった。しかしその願望に反し、運動が次第に急進的、戦闘的になる傾向に対して、賀川はそれが労働運動同様に「倫理運動から堕落して、チャコビン主義にうつって行く…気狂ざた<sup>140)</sup>」と感じはじめ、ついには無産政党の運動から手を退く決心をする。

労働運動でも農民運動でも左翼的急進主義者と歩みをともに出来ず、しかもなお相互扶助に基づく社会の建設に情熱をもつ賀川の行き着いた先は協同組合運動であった。彼は大阪で労働運動を指導していた1919年にすでに、キリスト教会の協力の下に購買組合公益社という組織を作っている。1920年に設立された神戸消費組合は、労働者の生活の安定と労働組合活動の補強を目指す協同組合として成長した。1923年9月の関東大震災後、賀川は東京での運動に着手し、1927年の江東消費組合をはじめとし、東京学生消費組合の設立と運営にも多大な努力を注いだ。労働者・農民の運動に限界を感じ、「無産者政党」運動にも幻滅した賀川には、協同組合運動は理想社会の縮図であったとも言える<sup>141)</sup>。

これらのこととの関連で、「イエスの友会」の創設にふれておかねばならない。同会は1921年10月に開かれた日本キリスト教会の会合で、賀川が設立を主唱してきたものである。彼自らが草した綱領は、イエスにありて敬虔なること、貧しき者の友となりて労働を愛すること、世界平和のために努力すること、純潔なる生活を貴ぶこと、社会奉仕を旨とすること、の5項目を掲げた。翌年1月に発刊された機関誌『雲の柱』の編集も彼が担

138) 賀川「精神運動と社会運動」、『賀川全集』第8巻、pp.435-436。

139) 賀川「自由組合論」、『賀川全集』第11巻、pp.31-32。

140) 賀川「暗中雜記」、『雲の柱』1926年5月号(「身辺雜記」、『賀川全集』第24巻、p.57)。

141) 開谷、前掲書、pp.160-161。

い、これ以後の彼の思想と運動を世に伝える重要な手段とした。イエスの友会はある意味で、当時の日本における「唯物的な」諸運動の成長に対する日本キリスト教徒たちの危機感によって生み出されたものと言えるが、同時に新しい1つの宗教運動、すなわち日本のキリスト教会に見られた受動的な雰囲気を改革しようとする運動でもあった。「神の国運動」と呼ばれるようになるこの会の活動は、日本におけるあらゆるキリスト教宗派を統合する伝道運動へと発展していった<sup>142)</sup>。

### (3) 賀川豊彦と世界

少なくとも1920年代には、ヨーロッパにおいて日本キリスト教徒指導者・賀川豊彦の名前はある程度知られていた。例えば、ロマン・ローランは友人である詩人の尾崎喜八に宛てた1924年12月1日付の書簡で賀川に言及し、「ドイツ系スイスの雑誌」で賀川の論文を読み、「彼の道徳的個性と社会的事業とは驚嘆すべきやうに思はれ」る（尾崎訳）と述べている<sup>143)</sup>。神戸の葺合新川における彼の社会活動に関しては、ローランがこの書簡を書いた以前から、何人かのヨーロッパ人活動家の知るところであった。賀川の名を外国の人々の耳目により鮮明に伝えたのは、1925年にロンドンで署名された国際的な「強制的徴兵反対声明」（Anti-Conscription Manifesto）に彼がその名を連ねた時である。アインシュタイン(Albert Einstein), ラッセル(Bertrand A. W. Russel), ウェルズ(Herbert George Wells), ガーンディー, タゴール, ブーバー(Martin Buber)らの著名人も署名したこの声明は国際連盟に提出されたが、反対声明は当時の日本の軍国主義者にも向けられていたから、彼

は当局に目をつけられた<sup>144)</sup>。1926年には、高良の個所でふれたように、新渡戸稻造らと「国際友和会」の日本支部「日本友和会」の創設に加わっている。

1927年から翌年にかけて日本が、日本人居留民の保護を名目に中国東北部の山東へ3度にわたって軍隊を派遣し、中国との新たな戦争の勃発が危惧された（山東出兵）。この事態を受けて、賀川は社会主義者やキリスト教徒活動家とともに1928年に全国非戦同盟を結成した。政府当局はその動きを警戒して、一時彼の身柄を拘束した。日本の中国侵略に対するこうした賀川の抵抗は、当時の国際的平和運動と連携するという彼自身の姿勢を反映するとともに、中国のキリスト教会と協力して国際的な協同組合運動を組織することで世界の平和を達成したいとの思いから出たものであった。

彼らの計画に対し、中国の誠静怡が積極的に応えて、賀川を中国に招待した。このため彼は1930年と翌年の2度にわたり中国を訪れた。上海では学生たちの前で、山東出兵を念頭に置きつつ、「私は私と日本に対するあなたの方の許しを乞います。あなたの方の多くは、日本が恐ろしい国であると思っているかも知れませんが、私はあなた方に日本の過ちが軍部の過ちであるということをよくお考えいただきたい。私は軍国主義者ではありませんし、日本の多くの人々もそうではありません」という謝罪の言葉を語っている<sup>145)</sup>。

しかし1931年9月に日本の関東軍が満鉄爆破事件（柳条湖事件）引き起こし、さらに翌年1月初めには中国東北部（満州）のほとんどを日本軍支配下に置いた（「満州事変」）。これより15年間におよぶ日本による中国侵略

142) 同上, pp.168-177.

143) 米沢和一郎「ロマン・ローランが記した賀川豊彦一書簡抄訳原稿の紹介」,『賀川豊彦記念・松沢資料館ニュース』No.15, 1987年7月1日, p. 1。

144) Schildgen, *op.cit.*, pp.154-155.

145) Katsuo Takenaka, "Kagawa as a Pacifist", *The World Tomorrow*, Dec.1931 (布川弘「1930年代における賀川豊彦の平和運動」,『日本史研究』424, 1997年12月, p.59から)。

の歴史が始まるのである。同年1月末に反日運動の激しい上海にまで戦火を拡大させた日本軍部は、1932年3月に傀儡政権「満州国」の独立を宣言した。国際連盟によってこの新国家の承認を拒否された日本は、1933年3月にこの機構から脱退した。

こうした危機的な時点で、日本の知識人は少数の例外や非合法の共産党员を除いて、そのほとんどは軍部の圧力に屈し、中国侵略を支持した。日本のキリスト教徒も、全体として中国に同情しながら、国際平和推進のためにほとんど何らの努力も果さなかったが、その中にあってわずかに賀川が中国における日本軍の行動に対して批判的な見解を表明していた。1931年10月に警察は賀川の関わる雑誌をすべて没収し、出版を禁止するとともに、身柄をも拘束した。1934年にかつての著作『愛の科学』（1924年に英語版）の中国語訳が出版されることになり、それに寄せた彼自身の序文において、賀川は日本が中国で行ったことに対して次のように陳謝した。

『愛の科学』の訳本に「はじめに」の文章を頼まれたとき、私は悲しかったのです。何故ならば、我々日本人が中国に対し、愛の法則を破壊し続けてきたからです。

私は日本を愛しているのと同じように、中国を愛しています。さらに、私は中国に平和の日が早く来るよう祈り続けてきました。日本軍のあちこちでのいやがらせで、私は異常なほどに恥じました。ところが、中国の方々は日本がどんなに凶暴だったにもかかわらず、私の本を翻訳してくれました。私は中国の寛容さに驚かずにはいられませんでした。たとえ私が日本の替わりに百万回謝罪しても、

日本の罪を謝りきれないでしょう。…孔子や墨子を生み出した国民の皆様よ、お許し下さい。日本民族は鉄砲を棄て、十字架の愛の上で目覚める日は、きっといつか来るでしょう。現在私は謝罪することしかほかに何にも考えられません<sup>146)</sup>。

同年、賀川は反日感情の強い上海でも演説し、日本軍の中国侵略が自らの宗教の精神に反し、また日本国民としてそうした侵略に責任があると語って、キリスト教信徒としての連帯の重要性を説いた。このような賀川の姿勢に、欧米や中国の識者たちは強い共感を寄せたという<sup>147)</sup>。

ところが中国における日本軍の軍事行動は次第に拡大し、1937年7月の盧溝橋事件によって日中戦争は全面化することになる。その年の12月には日本軍が南京を占領し、数十万人ともいう中国人軍民や婦女子を暴行・虐殺する事件（南京大虐殺）が起った。中国におけるこの深刻な事態に直面して、賀川は次第に不安に駆られていった。

1938年9月に、彼は満州農事信用組合の招きに応ずる形で、満州でのキリスト教宣教活動に出かけた。1930年代の賀川の思想と行動を綿密に分析した布川弘の研究によると、それまで決してやらなかった中国での布教活動に加わることを決心した理由は、日本における人口問題・海外移住問題の解決策として満州開拓に関心をもつたことであるという<sup>148)</sup>。すでに彼は、1931年に発表した『十字架に就いての瞑想』の中に書いていた。すなわち、「日本が狭いといふなら、北海道に250万町歩の未開墾地がある。…樺太には75万町歩ある。経済的に植民する気なら、満州があいている。そのあいている処へ行かないのは日本人の十字架を荷ふ精神が足らないからである。

146) 米沢和一郎『賀川豊彦の欧米での評価』、神戸コープ生協研究機構、賀川豊彦研究会、1995年、p.12  
(布川、前掲論文、p.65より)。

147) 布川、前掲論文、p.66。

148) 布川、前掲論文、p.66。

もう少し我々はこの気持を高調しなければならないと思ふ」と<sup>149)</sup>。1933年には、あらゆるヨーロッパ諸国がアジアの国々を占領し、国際連盟が今や事実上ヨーロッパ諸国連盟となつたからには、日本に残された唯一の道は海外への進出であると賀川は認めていた。ここに、一方で平和主義・福音主義者として、他方で日本民族主義者としての賀川の矛盾を見ることが出来る。

1938年の満州訪問の折に賀川は、当時の満鉄総裁で2年後に第2次近衛内閣の外務大臣として日独伊三国同盟の成立に決定的な役割を果たすことになる松岡洋右の晩餐に招かれ、「しんみり、話を聞いた」。その日に記されたノートには、「實に涙が出るやうな真剣な宗教的大陸政策をきかされ、…松岡氏の言葉が今も頭の中に残っている」、「松岡氏は飽迄も、漢民族を愛してからうとしているのである。その態度には、日本魂の最も浄化された或物があると思った<sup>150)</sup>」とある。賀川には、日本の人口問題に無理解な欧米の植民地主義が日本の軍国主義を海外へ押し出したのだとする視点が強かったようであり、そこに「後の太平洋戦争と大東亜共栄圏のイデオロギーを、もちろん全面的ではないにせよ、しぶしぶながら受け入れる素地があった<sup>151)</sup>」という先述の布川の指摘は、彼の思想的な弱さを的確に言い当てたものと思われる。

ここで当時の中国における日本軍の行動がインド人にはどのように映っていたかを、ネルーを例にとってみておこう。彼は「はじめに」でふれたように、1930年10月から約3年間、政治犯として獄中にありながら娘のインディラーに世界史を解説する書簡を出し続けたが、後に1938年11月14日の日付で「補遺」(Postscript)書き、戦火の中にある各国のそ

の後の状況を綴った。中国に関しては、次のように言及している。

巨大な日本の軍事機構は中国内を侵攻し、中国人民は日本軍を悩ませるべくゲリラ作戦を採って大きな成功を収めた。日本が上海、南京を占領し、さらに廣東、漢口に接近すると、中国人はこれらの大都市に自ら火を放って、破壊した。日本軍はナポレオンのモスクワ占領のように、その焼け落ちた廃墟を占領したが、彼らは新たな苦難に出会う度により強固になる中国人の抵抗を圧殺するには程遠い状況にある<sup>152)</sup>。

日本の暴挙をインド人はこのような醒めた目で見つめていたのである。

1939年8月の独ソ不可侵条約締結後は、賀川の政治的、倫理的混乱はいっそう高まり、1939-40年ころの中国の状況に関する彼の発言は用心深いものになった。彼にとっては中国問題の解決は、日中間の戦争さえ終結すれば日本は中国を救えるという考え方の中にあったようである。賀川の伝記の中で著者シルジエンは、賀川が、「日本がアジアにおける正しい新秩序建設の責務を負うとする大東亜共栄圏思想を正当化する日本の指導者に、危険なほど近くなつた」と書いている<sup>153)</sup>。

賀川の言辞にはしばしば中国（人）に対する蔑視とも取れる表現があるが、この時期のある文章に、「資本」を物質的側面からのみでなく「社会的資本」という視点からも見るべきであると説いて、中国の例にふれた個所がある。そこでは、中国には人間的資本または社会的資本が欠如している、そのため、「支那の国ではよい株式会社は組織できない。賄賂ばかりとって、個人利益が中心であるからもう駄目だ。又儲けは儲けで社長が一人占

149) 賀川『十字架に就いての瞑想』(1931年、教文館),『賀川全集』第3巻, p.179。

150) 賀川「武藏野の野より」,『雲の柱』1938年8月号(「身辺雑記」,『賀川全集』第24巻, p.258)。

151) 布川,前掲論文, p.74。

152) Letter to Indira Nehru, Nov.14, 1938, J. Nehru, *op.cit.*, p.962.

153) Schildgen, *op.cit.*, p.216.

めてしまふ。…日本人が助けなかったならば、支那の紡績会社は絶対に経営が出来ない。…支那人には道徳的組織力がない為に、日本人の道徳的組織力を借り入れなければ、資本の運転が出来ない」と述べられている<sup>154)</sup>。

賀川は1940年に、長く主幹を務めた布教活動のための月刊誌『雲の柱』の廃刊を決めるが、その最終号の巻頭に「皇紀2600年」と題する文章を載せ、信者たちに次のように訴えた。すなわち、

人類歴史は再大発の危機に直面している。この時に際して我々は光栄ある紀元2600年を迎えた。

顧るに全能者は不思想なる摂理を日本に傾け、皇統連綿御仁慈の限りを尽して、民を愛し給うた世界に比類なき統治者を日本に与へ給うた。…

…我国は奴隸制度の蛮風なく、カスト・システムの桎梏なく、節制と互譲の精神自から起り、俠勇好学の精神自から備はり、自然を愛し、廉潔に甘んじ、国の難を見て生を賭する者幾百万、世界に珍しき醇風を生み成せるも全く、皇祖皇宗の御仁徳と、上御一人の御盛徳の然らしむる所以であると思わざるを得ない。

しかしながら…今や我々は世界歴史の再建に当って、悪魔の頭を踏みつけて阿修羅の苦闘を続けなければならない。…欧米に愛と正義が亡びるととき、我々は日本の国より世界救済の手を延して、人類再建の福音をのべ伝へるべきである。

我々は謹んで皇紀2600年を祝ひ奉ると共に、贖罪愛の原理に立って、世界再創造への新しき出発を覚悟すべきである<sup>155)</sup>。

ここに見られる天皇家への限りなき尊崇はこ

の時期、また戦後に至っても賀川の心中に深く根を下ろすものであった。

1941年12月の太平洋戦争勃発後は、以前より「危険思想の持ち主」として軍部ににらまれていた賀川のキリスト教活動への圧力がさらに強まった。右翼団体は彼を「売国奴」と宣伝し、「賀川を殺せ」というビラまで街角に貼られた。雑誌社や新聞社からの原稿の依頼もなくなった。1943年11月には、兵役を拒否した石賀修という青年が賀川の思想に影響されたと考えた憲兵隊は、連日賀川を呼び出し、厳しく尋問した。この事件以後、彼の地方での布教講演さえ完全に禁止された<sup>156)</sup>。この年の戦況に目を遣ると、2月にガダルカナル島撤退開始、4月に連合艦隊長官山本五十六がソロモン島上空で戦死、5月にアツ島の日本守備兵全滅、12月にはマキン、タワラ両島の守備隊全滅など、太平洋戦争の敗色がいよいよ濃くなる時期であった。

この時期に賀川は『天空と黒土を縫合わせて』という詩集を出版した。ラヴィー川を歌った詩集の名と同じ題の詩や、「ガンヂス河の嘆き」など、インドを題材にした詩がかなり含まれているが、注意すべきは詩集の「序」の文章である。そこには、強い感情がこもった調子で、あるいはむしろ妙に浮ついだとでも言える調子で、

ルーズベルトの国民のみが、自由を持ち、アジアの民族のみが奴隸にならねばならぬと云ふ不思議なる論理に、太陽も嘲ふ。…

血潮の竜巻は起った！真珠湾の勇士らの血潮に、ソロモン列島の忠烈烈士の熱血に、義憤の血潮は、天に向ってたぎり立った。「一大君のへにこそ死なめ、省みはせじ—」私心を打忘れ、生死を超越

154) 賀川『産業組合の本質とその進路』(1940年、協同組合新聞社)、『賀川全集』第11巻、p.253)。

155) 賀川『皇紀2600年』、『雲の柱』1940年10月号 (『賀川全集』第24巻、p.258)。

156) 河島幸夫『賀川豊彦と太平洋戦争—戦争・平和・罪責告白』、中川書店、1994年 (2刷), pp.17-18。なお高良とみもまたこの「石賀事件」との関わりをうたがわれ、憲兵隊本部で何日も尋問を受けたという (高良、前出『非戦を生きる』, pp.106-108)。

し、ただ皇国のみ（に）仕えんとするそ  
の赤心に、暁の明星も、黎明の近きを悟  
り得た。

ただ私欲のみで、血潮を天には送り得  
無い！血潮が天に達するには、深き理由  
がある。日本民族は、楠正成と播磨院長  
兵衛の血を持つ。…

嗚呼、アジアは目覚めた！印度は解放  
を呼び、中華民国は米英に向って呪いの  
声をあげた！天空と黒土を縫合せて、新  
しき歴史は綴られて行く。…

大和民族の血潮は竜巻として、天に沖  
する。されば、全能者よ、我等の血を以  
て新しき歴史を書き給え！<sup>157)</sup>

と歌われている。ここにあるのは、「聖戦」  
を呼号する軍部や「大東亜共栄圏」のイデオ  
ローグと全く同一の呼びである。11月には、  
国際戦争反対者同盟会長の G. ランズベリー  
に書簡を送り、米英の植民地支配に対抗し、  
日本がアジアの解放と独立を守ると述べて、  
同盟からの脱退を伝えた<sup>158)</sup>。

#### (4) 賀川豊彦とインド、ガーンディー

これまで賀川の様々な分野での活動について  
みてきたが、最後に本稿の主たるテーマで  
ある彼のインドに対する関心の内容、および  
ガーンディーとの出会いについてふれてみた  
い。キリスト教社会活動家、平和運動家とし  
ての賀川の存在が1920-30年代に世界の多くの  
知識人の間で好意をもって語られていたこ  
とは先に述べたが、ガーンディーの賀川に關  
する興味もそうした情報を通じて膨らんだの  
であろう。ただガーンディーの周辺で活字の  
形で賀川の名が言及されるのは、マルカーニ  
という人物が1933年10月、ガーンディー主宰  
の週刊紙『ハリジャン』に、当時よく知られ、

賀川の名を世界に知らせるのに役立ったアク  
スリング(W. Axling)の伝記に依りながら、  
その経験を紹介したのが最初かと思われる。  
マルカーニは新川における賀川の活動をかな  
り詳しく紹介し、彼を「キリスト教社会主義  
者」「勇敢な労働運動指導者」と規定しつつ、  
「賀川は学究的思索よりも、現実的な計画  
に集中する社会的活動家である。彼は共産主  
義を信じるが、それはマルクスのそれである  
より、むしろ初期キリスト教会あるいはトル  
ストイの共産主義である。マルクスの階級闘  
争に対して、賀川はトルストイの無抵抗を主  
張する。賀川におけるキリスト教信仰は彼の  
社会主義的部分を凌駕している」として、賀  
川の基本的立場を説明している<sup>159)</sup>。

一方、賀川自身のインドへの関わりはとい  
えば、早くから宗教や哲学思想への関心を  
持っていたようである。1920年に出た小説  
『死線を越えて』のほぼ冒頭の個所で、賀川  
自身と思われる主人公の新見栄一が、森陰で  
「東洋聖典シリーズ」(Sacred Books of the  
East)の中の「ウパニシャド」の巻を読んで  
いるところに友人がやってきて、2人でイン  
ド哲学や汎神論を話題にする場面がある<sup>160)</sup>。  
後の賀川の文章にもインド思想への広い関心  
を窺わせるものが多い。ただ現実のインドに  
対しては、実際にインドを訪れるまではさほ  
どの関心を示したとは見えず、わずかに機関誌  
『雲の柱』1931年7月号の「身辺雜記」欄  
に次のような記述があるのみである。

印度のガンジーは印度が独立すれば、  
凡ての宣教師に帰国を命ずると宣言した  
ので、印度の宣教師は非常にあわててい  
るらしく見える。日本に来られる筈だっ  
た、スタンレー・ジョーンズ氏も来るこ  
とを中止せられたといふことである。支

157) 賀川『天空と黒土を縫合せて』、『賀川全集』第20巻、p.129。

158) 佐治、前掲書、p.74。

159) N. R. Malkani, "Kagawa", *Harjan*, Oct.7, 1933, p.8.

160) 賀川『死線を越えて』、『賀川全集』第14巻、p. 4。

那も印度も「国民主義」が中心になっていて、世界的精神にはいるだけの余裕のないことを見て、私は同情する。印度のためにも祈らねばならぬ。しかし我々はあくまでも、クリスチヤンインタナショナリズムに立ち、万国キリストへの標語のもとに努力しなければならぬと思う<sup>161)</sup>。

ここで賀川が引いているガーンディーの発言が果して事実かどうかは確認できないが、少なくともこの時期の賀川が、インドも含めアジアの植民地諸国の民族主義（「国民主義」）運動に必ずしも深い理解を示していなかったことは確かである。ここに名前が挙げられているジョーンズ（Eli Stanley Jones）はガーンディーとも親しく、後にその伝記を著した人物である<sup>162)</sup>。

賀川が自らインドの地を訪れ、ガーンディーとも会見する機会を得るのは、1938年12月13-25日に南インド・マドラス（現在チェンナイ）の近郊タンバーラムで開催されたキリスト教徒たちの「世界宣教大会」に講演者として参加した時であった。日本代表21名とともに11月15日に門司を出立した。彼はインドへの出發に際して、「あの熱帯地方に咲いた、頗る哲学的な文化が、一体何を意味しているか」、「少しでも読んで、少しでも印度が理解したい」という思いから、インドの哲学、宗教、地理、博物に関する多くの書物を船に運び込んだ<sup>163)</sup>。この旅からの帰国直後に、後述するガーンディーとの会見記のほか、「印度宗教我観」「印度の宗教詩人カビル

に就いて」「印度の農村事情」などインドに関するいくつかの文章を『日印協會會報』や『雲の柱』に掲載したが、この時期、彼なりにインドについて様々なことを学んだことが分かる。彼が當時日本ではまだほとんど研究が行われていなかったラーマースジャ、ラーマナンダからカビールに繋がるヒンドゥー教のバクティ思想やスーアフィズム信仰に強い関心を示しているのは興味深いことである<sup>164)</sup>。

「印度の農村事情」では細かい数字統計なども挙げながら、インド農村の貧困についての彼なりの分析を行っている。中国や「南洋」も含め彼が実際に見聞したどの国を見ても、「印度ほど疲労困憊の極に達している国はない」とし、その原因は明らかに植民政策そのものにあると断じた。その際、賀川は植民政策が成功した例として、フィリピンとともに台湾、朝鮮を挙げているが<sup>165)</sup>、その立場は、例えば同じキリスト教徒の矢内原忠雄（1893-1961）のそれとは決定的に異なるものであった。矢内原は、その著書『朝鮮統治の方針』（1926年）で朝鮮民族の民主主義的権利の回復を主張していたし、また別の著書『帝国主義下の臺灣』（1929年）は「安寧秩序を妨害」するものとして、出版の翌年には台湾総督府から発禁処分を受けている。

賀川がガーンディーに会う直前の1938年12月31日と翌1月1日に、世界宣教大会を終えた各国の代表たちがワルダー（セーガー）を訪れた。南アフリカ、南ローデシアなどアフリカ諸国、中国の代表とともに M. S. 村尾の

161) 賀川「放浪の旅より」、『雲の柱』1931年7月号（『賀川全集』第24巻、pp.132-133）。

162) Eli Stanley Jones, *Mahatma Gandhi: An Interpretation*, Abindon Press, New York, 1948. (邦訳『マハトマ ガンジー』、金井為一郎訳、一古堂書店、1955年。なおこの邦訳本の末尾に、賀川が短い「あとがき」(p.251)を寄せている。)

163) 賀川「武藏野の野より」、『雲の柱』1938年12月号（『賀川全集』第24巻、pp.267-268）。

164) 当時代表的な著作であった宇井伯壽『印度哲學研究』（全6巻、1924-30年）にも、シャンカラやラーマースジャらについて全くふれられていない、日本のインド思想研究はまだこれからだと苦言を呈している（賀川「印度の宗教詩人カビルに就いて」、『雲の柱』1939年6月号、pp.9-14）。

165) 賀川「印度の農村事情」、『雲の柱』1939年9月号、pp.10-11。

名の日本人も1人いた。この会見に同席した秘書の一人ピヤーレーラール(Pyarelal Nayar)の記録によれば、この会見のかなりの部分が日中問題、特に日本軍の侵略に宗教者としてどう対応すべきかという問題に費やされたようである。ガーンディーはある中国人代表の問い合わせに答えて、1938年2月に国民會議派が決議した日本商品ボイコットを高く評価しつつも、

日本はもちろんこれまで行ってきたこと、現在やっていることで非難されるべきです。しかし、現在日本は狼のようなもので、羊を素早く片づけるとしています。狼を非難することは大して羊の役に立ちません。羊は狼の掌中に陥らないことを学ばねばなりません

と、あくまで非暴力の手段に依存するよう示唆した。しかし、別の中国代表は平和を追求するために行われた先の世界宣教大会の成果について、極めて悲観的な評価を下している。彼は日本人への憎しみではなく、その軍事組織が邪悪であると感ずるものであり、タンバーラム会議では相互の善意と平和を基礎に日中間の国際的紐帯が結ばれることを望んだが、現在達成され得ることはほとんどなく、幻滅したとガーンディーの前で語った<sup>166)</sup>。ただこうした中国代表たちの直接的な訴えから、日中関係の深刻さをガーンディーは改めて強く感じ取ったことは確かであろう。

賀川はこの後、1月14日にバールドーリー

(Bardoli)<sup>167)</sup>でガーンディーとの会見を果した。バールドーリーはグジャラート（当時はボンベイ州内）のスラト県にある小さな町だが、例えばガーンディーの指揮下にあったパテール(Vallabhbhai Jhaverbhai Patel, 1875-1950)が1928年に地税不払い運動を展開するなど、ガーンディーの運動と密接に関わる土地であった。賀川が訪れた時も議長スバーシュ・ボースのもとで会議派の最高指導機関である運営委員会(Congress Working Committee)が開かれたため、主要な指導者がここに参集していた<sup>168)</sup>。賀川がネルーやパテールに会えたのもこうした偶然によるものであった。彼はガーンディーと会う直前に彼らと食事を共にしながら会話を交わし、日本商品の廉価さや会議派による日本商品ボイコット決議のことなどを話し合った。ボイコット決議にもかかわらず、「印度全国至る処に日本品の大氾濫」が見られることを自慢するかのように、日本製品の安さや「日本の紡績会社の女工優遇法」などについて得々と話す様子が彼自身の会見記から窺える<sup>169)</sup>。

ガーンディーの「ずっと前からあなたの評判はうかがってましたよ」という言葉で会話は始まった。同席した秘書のデサーイーはこの会見の記事に、通常全部で10数ページからなる『ハリジャン』紙の5ページを充てるという異例の扱いをしており、賀川の訪問についての、

我々すべてが永らく彼の訪問あるいは

166) Pyarelal, "A World in Agony", *Harijan*, January 28, 1939, pp.440-443.

167) 賀川はこの地名をボドリと表記したため、それ以後彼とガーンディーとの会見にふれた多くの人々もこの表記に従ってしまった。

168) この少し後の1月29日に会議派議長選挙が行われ、ボースがガーンディーの推すシーターラマ・イヤー(Pattabhi Sitaramayya)を破って再任された。ガーンディーはこれを「私の敗北」と認めたが、ボースとガーンディー派との角逐は3月の会議派トリプリ大会に持ち越され、運営委員15名中12名に辞任されたボースは病身であったこともあり、最終的には辞意を表明する状況に追い込まれた。(この経緯については、内藤雅雄「インド民族運動と国民會議派の組織」、『アジア・アフリカ言語文化研究』18、東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1979年12月、pp.22-24参照)

169) 賀川「マハトマ・ガンジーの精神生活(一)」、『天の心・地の心』、実業之日本社、1955年、pp.251-252。賀川「ガンジーに会う」、『雲の柱』1939年6月号、pp.16-17。

彼とガーンディーとの会見を待ち望んでいた。もし時代が正常で、インドの状況がガーンディーの海外渡航を許すなら、彼がロマン・ローンに会いにスイスに行ったように、きっと賀川博士とその仕事を見に日本に行っていただろう<sup>170)</sup>

という記述は、ガーンディーや彼自身の賀川に対する深い関心を示している。

記事はこのあと賀川の経歴に関する詳細な紹介を行っているが、最初の話題は協同組合運動についてであった。前述したようにこの運動に情熱を傾けていた賀川は協同組合の精神に基づく「協同国家」(Co-operative State)の理想を述べ、さらに各國が国際的信用銀行のような国際協同組合機関を設立するための協同精神を發揮できれば、世界平和の達成への長い一歩となると力説した。彼からインドにおける協同組合運動の状況を問われたガーンディーの返答は、それがインドの内から発展するのではなく、イギリス政府の主導でインドにあるステレオタイプな形式で押しつけられたものだから余り成功していないとして、現時点での発展の見込みに否定的であった<sup>171)</sup>。賀川はこれに対してこの時は特に反応していないようであるが、帰国後に書いた短い記事では、「印度の貧乏のために、私は協同組合をしなければ駄目じゃないかと聞いてみた。ところが政治を変へるまでは何もやらぬ」というていたこの点はガンジーが間違っていると思った」と記している<sup>172)</sup>。しかし、ガーンディーやデサーイには、すでに1916-17年ころから当時のボンベイ州での協同組合運動に深い関わりを持っていたが、結局は政

府（インド政府）主導の運動への関心を失つていったという経験があったのである<sup>173)</sup>。こうした事情を賀川は全く知ていなかったと思われる。

デサーイによればガーンディーは協同組合運動の話題に余り関心が向かないようで、单刀直入に中国での戦争について日本人はどう感じているのかを尋ねた。賀川が「自分は日本では異端者であり、むしろあなたがもし私の立場だったらどうされるかを伺いたい」と言うと、ガーンディーはそれでは出しゃばりすぎるとながらも、

自分なら異端の説を宣言し、射たれましょう。協同組合やすべてのあなたの仕事を秤の一方、貴国の名譽をもう一方に掛け、名譽が売り捌かれようとしていると思ったら、あなたは日本に反対する自分の見解を表明し、そうすることであなたの死を通じて日本を生かせるようあなたに求めましょう。しかしこれには内なる信念が必要です。私があなたの立場にいて、今申し上げたことをすべて出来るかどうかは私にも分かりません

と答えた。賀川が「信念はあるのですが、友人たちは止めておけと言っているのです」と言うのに対し、ガーンディーはさらに「あなたの内なる友が「こうしろ」と言う時には友人の言葉に耳を傾けてはいけません。どんなに良い友人でも時には我々をうまく欺くことが出来るものです」として、これまで幾度となく友人たちの声にもかかわらず自ら獄に入ったことで「自由の輝き」を見出したことを語った<sup>174)</sup>。興味深いことに、自らの問い合わせに対するガーンディーのこの返答については、

170) M. Desai, "Dr. Kagawa's Visit", *Harijan*, January 21, 1939, p.434.

171) *ibid.*, pp.435-436.

172) 賀川「印度雑記」,『雲の柱』1939年3月号, p.35。

173) I. J. Catanach, *Rural Credit in Western India: Rural Credit and the Co-operative Movement in the Bombay Presidency, 1875-1930*, Oxford University Press, Bombay, 1970, pp.128-130, p.212. 賀川はまた別のところで、インドで協同組合の組織化が困難な根本的原因は厳しい「階級制度」, すなわちカースト制であると述べている（賀川、前出「印度の農村事情」p.12）。

174) Desai, *op.cit.* (Kagawa's Visit), p.436.

賀川自身の会見記はわずかに「そら…個人々々の良心的立場を取る外、道はないね」という表現で言及しているのみである<sup>175)</sup>。

デサーイーがここで賀川がこの議論を止めたがっていたようだと書いているように、彼は再び協同組合に話を戻そうとするが、ガーンディーはなおも執拗だった。確かに協同組合運動にせよ他のことにせよ、自分たちが学ぶべきことを日本が成し遂げたのは事実だが、

このように（日本が）中国を生きたまま飲み込むとか、毒を盛るとか、その他、パンディット・ジャワーハルラール（・ネルー）が私にくれた『戦争とは何か』（*What War Means*）という本で読んだ、多くの恐ろしいことを一体どのように理解できるでしょうか。あなた方は如何にしてこれらすべての残虐行為をなし得たのでしょうか。しかも、あなた方の偉大な詩人〔野口米次郎一引用者〕はそれを人道のための戦争、中国への祝福と呼ぶのです<sup>176)</sup>

と手厳しく追及した。賀川の帰国後の手記にはこの問い合わせに関して全く言及がないが、戦後に書いた文章には、「南京事件」の記事を読んで憤慨したガーンディーが、「「賀川さん、鉄砲で撃ち殺されてもよいから、こういう悪いことは阻止しなければいけないよ」と、日本のために心配してくれた」と記している。まるで他人事のようなふれ方であり、彼自身がこの言葉にどう対応したかは全く分からぬ<sup>177)</sup>。

実はこの会見の前にデサーイーは賀川とのやりとりで同様の質問をしている。彼が戦争、特に進行中の日中戦争について自分の考えを余り述べないことに不満を表明しつつ、賀川が国際的協同組合機関のことや日本の過剰人口を満州に送る話を悦に入りながらしたのに対し、デサーイーは独立の国家と従属した国、搾取する国とされる国との間に、国際的協同的通商などあり得るのかと尋ねた。賀川は「あなた方の問題は全く異なったものであるのは認めます」と逃げをうった<sup>178)</sup>。賀川のこのような姿勢に関してデサーイーは、日本がまだ「軍事的カーストないし軍閥に支配された」独特の「封建国家」であり、

こうした雰囲気の中で異端の理論を説くのは容易ではない。地盤が準備される前に相当の教育的宣伝が必要である。…これらの特殊な困難が賀川の立場、その態度を表明し、自分の信念の究極的論理的帰結を実現出来ない、あるいはそこまで覚悟が行かない理由をかなりの程度に説明する<sup>179)</sup>

と、極めて思いやりのある判断を下している。これに関する賀川の反応を示す文章を、彼の『全集』や機関誌『雲の柱』の中に見出すことはできない。

会話はこのあと『バガバッド・ギーター』に移っていった。ガーンディーが新約聖書やトルストイの影響で「無抵抗主義」の思想を得、インドに生まれた仏教が非暴力（アヒンサー）を説いているのに、クリシュナがアル

175) 賀川前出「マハトマ・ガンジーの精神生活（一）」, p.256。「ガンジーに会ふ」p.18。

176) Desai, *op.cit.* (Kagawa's Visit), p.436.

177) 賀川、「道徳復興なくして経済復興はない—日本は道徳的に出直す必要がある」、前出『天の心・地の心』, p.435。この文章のすぐ後で、満州での伝道の際に一夫一婦制など「純潔運動」を説いたため（当時満州の役人や在留邦人の間に「妾を囮う」例が多くあったという）警官から退去命令を受け、その時から「満州国を征服する強権が日本を支配するならば、日本は内側から亡びると思った。はたしてそのとおりになってしまった」(同上, pp.435-436)と記しているが、彼自身の満州国に関する姿勢やこれ以後の対戦争観を見ると、戦後のこうした述懐はあとから見てもを言う類の「懐旧談」であるように思われる。

178) Desai, *op.cit.* (Kagawa's Visit), p.435.

179) *ibid.*, p.436.

ジュナに戦いを奨励する『ギーター』をガーンディーが重視するのは「無理な哲理」だというのが賀川の論点であった。ガーンディーの思想を「無抵抗主義」とする点にも問題があろうが、非暴力の最上の教義が『ギーター』にあるとするガーンディーの基本的な立場との間には大きな隔たりがあった。デザイナーが高良との会話で取り上げた被差別民問題に関しては、賀川の帰国後の文章ではインドにおけるこの問題の深刻さにふれていが、ガーンディーとの会話では話題にしていない。

1938-39年ころからの賀川が次第に日本の「国策」を容認する方向に向かうことは先にふれたが、ここで見たガーンディーやデザイナーとの対話で、彼らの率直な問いかけに戸惑う彼の対応を見ると、賀川における平和主義と愛国心の間の矛盾がいかんともし難い程度に達していたことが窺える<sup>180)</sup>。それはまた、賀川もその一員であった戦前の日本のキリスト教界にもほぼ当てはまることで、「天皇制疑似宗教国家権力に対して、教会としての戦いを組むことができなかつばかりでなく、むしろ進んで国家権力に妥協し、翼賛協力してきた」責任を、教会は戦後に反省せざるを得なかつた<sup>181)</sup>。

敗戦後の賀川は、東久邇内閣の参与として加わり、様々な新国家建設のプランを発表して世間の注目を集めめた。「一億総懺悔」のスローガンを生み出したのも彼であった<sup>182)</sup>。戦後いろいろな賀川批判が出されるが、そのうち最も厳しいものの一つが、敗戦の年の12月に『シカゴ・サン』紙の特派員として来日したマーク・ゲイン(Mark Gayn, 本名 Moe Ginsbourg)の『ニッポン日記』(Japan Diary)であろう。「おそらく何百万人のアメリカ人と同様…最近まで賀川の非利己的な努力を高く評価していた」ゲインは、日本で賀川と会って、「平和」という言葉を軸として「最近の経験に対する私の質問をたくみにかつ敏捷にはぐらか」す賀川の「抜け目のなさ」に強い印象を抱く。様々な調査記録を通じて、彼は戦時中における賀川の「戦争協力の事実」を見出し、賀川に対する疑問を深め、

…多くの事実に関しては、彼は口を緘した。他の多くの自由主義者たちと同様、彼も国家主義のヒステリイのとりこになつたのだったろうか。抵抗できないほど圧迫が激しかったのだろうか。キリスト教の教義のあるものを進んで犠牲にしたほど、彼はキリスト教の指導者としての自分の立場を守るのに汲々としたの

180) 賀川に関するいくつかの著作がある河島幸夫は彼のインドでの体験にふれて、「賀川豊彦はガーンディーとの対話の中で戦争と平和に関する両者の態度を示す核心部分をほとんど公表しなかった。もし賀川が、せめて戦後に、ガーンディーの毅然とした姿勢に対する自己の精神的弱さを示す核心部分をもあえて公表していたら、そのことは、彼にとって日本と自己との戦争責任を正面から受けとめる重要な手がかりとなっていたのではないかろうか。それを彼がなしえなかつたという点は、賀川自身のためにも惜しまれてならない」(河島、前掲書, pp.52-53)と記している。

181) 佐治、前掲書, p.91。

182) 賀川が加わって提唱されたこの「一億総懺悔」のスローガンの意味について、「共同研究・転向」で横山貞子が次のように指摘していることは、賀川をはじめ、戦時期・戦後期における日本のキリスト教徒の姿勢を考える上で極めて重要であろうかと思われる。すなわち、「キリスト教の「原罪」の意識を含むこの主張[「一億総懺悔」—引用者]が国民一般に対して示されたことは、たしかに意味のあることだった。しかしキリスト教界について考えれば、「原罪」の普遍的意味を知りながら、その視点に立つて国家の侵略主義をただす方向への働きかけをなし得なかつたことについての、キリスト教者独自の自覚が、「一億総懺悔」のスローガンの下に解消して、十分にはなされなかつたといえるのではなかろうか」というものである。(横山貞子「第7節 キリスト教の人びと—プロテstantを中心に」、思想の科学研究会編『共同研究 転向』中、平凡社、2000年[改訂増補復刻版], p.366)

だったのだろうかと問いかけた<sup>183)</sup>。しかし戦後の賀川は戦中のことについては多くを語っておらず、こうした疑問への答えを得るのは難しい。

戦後に賀川は貴族院議員に勅選されたが、戦時の行動をとりあげて彼を追放処分にしようとした占領軍の介入でこの件は立ち消えになった（貴族院は1947年の新憲法施行で廃止された）。1946年には『キリスト新聞』を創刊し、それ以後「平和憲法護持、再軍備反対」などを掲げる運動に邁進した。戦後も天皇家への敬愛を棄てることがなかった賀川は、皇族を擁して平和国家の建設を図るという立場を表明した<sup>184)</sup>。1955年2月にはノーベル平和賞候補者として推薦されたが、最終的に受賞は実現しなかった。

### 結びにかえて

タゴールは、来日した翌年の1917年に出版した『民族主義』の中で、日本人への警告として次のように述べていた。

ものを見る目のある人なら、人間とは他者を打てばそれが自分にも返ってくるように、密接に結びついていることを知っている。人間のもっとも偉大な発見である道徳律とは、人が他者の中の己をよりよく認識すればするほど、より真なるものとなるという、この素晴らしい真理の発見である。この真理は主観的価値を持つのみならず、我々の人生のあらゆる局面で証明される。そして愛国主義的祭儀として飽くことなく道徳的盲目さを培う国家は、突然の暴力的な死によってその存在を終えるだろう<sup>185)</sup>。

この言葉は結局はほとんどの日本人の耳に

届かなかった。タゴールが日本に警告した国家主義は中国やその他のアジア諸国への侵略を意味し、侵略される国々の独立を求める願望と不可避的に衝突するものであった。当時の日本における多くの良心的な知識人や宗教者たちも、国家や軍部の強力な弾圧・抑圧や一般世論の圧力の前にこの「愛国主義的祭儀」から自由であることは出来なかった。

1930年代から40年代半ばに至る戦時期の日本人にとって最も重要な試金石は、その時に中国やアジアの問題にどう対面し得たかであると言っても過言ではなかろう。すでに見たように、この時期の中国問題は、植民地国インドの指導者ガーンディーにとっても極めて重大な関心事であった。イギリスへの最後通告とも言うべき「インドを立ち去れ」決議を提起する3週間前に、「すべての日本人に」というメッセージを日本に突きつけたことは本文中でふれたが、そこでも彼は書いている。「もし私が自由な身で、あなた方が私がお国へ出かけるのを許されるなら、虚弱な人間ですが、健康を、いや命を賭してでもお国に出かけ、あなた方が中国に対して、世界に対して、またそれ故にあなた方自身に対して為しつつある罪を思いとどまるようにお願いすることに咨かではありません」と<sup>186)</sup>。自分に会いにアーシュラムにやって来た日本人との対話の中で、ガーンディーは中国における事態やそこでの日本（軍）の行動について彼らがどう考えているかを熱心に知ろうとした。彼は野口米次郎や高岡大輔らに対しては大した関心を示さなかったが、一般民衆の中に自らの使命を見出している藤井日達や賀川豊彦のような宗教的信念の人たちには温かい態度で接した。中国やアジアに対する彼らの考え方を放棄させることに成功はしなかったが、

183) マーク・ゲイン『ニッポン日記』(井本威夫訳), 筑摩書房, 1963年, pp.95-97。

184) 鶴見俊輔『廃墟の中から』(「記録現代史・日本の百年⑨」), 筑摩書房, 1978年(改訂版, 初版1961年), pp.149-155。

185) Tagore, *op.cit.*, p.78.

186) Gandhi, *op.cit.* ("To Every Japanese", *Harijan*, July 26, 1942, p.240).

それでも彼らが民衆のために没我的に奉仕することへの期待を棄てる様子もなかった。そのことは、本文で引用したように、「すべての日本人に」の中でアーシュラムにいた藤井の弟子、丸山行遼に関して言及している言葉や、ガーンディーを代弁していると思われるデサーイーの賀川に関する述懐などに窺うことが出来よう。

本稿ではガーンディーに視点を置きつつ、彼の思想や行動に关心をいだいて、その言葉に接しようと会見を求めた日本人のインド観、アジア観、あるいは戦争と平和に関する考え方を照らしだそうと試みた。取り上げたほとんどの人たちが、当時の日本を覆っていた日本中心的「アジア主義」から免れず、ガーンディーの前でそれをさらけ出す結果となった。しかしその時期に、インド、中国などアジアの国々が置かれた状況や、帝国主義国日本がそこでどのような行動をとったのかを、冷静な目でみつめ、告発した日本人がいたことも忘れてはならない。すでに見た矢内原忠雄は、客観的な觀察に基づく朝鮮論、台湾論を著し、日本の戦争が進行する中で横行する様々のファシズム的な民族論を市民的立場で批判したため、1937年に東京帝国大学を追われ、翌年には著書の発禁処分を受けた。彼には1937年に出版された『帝国主義下の印度』という名著がある。インドに於ける農業・工業および貨幣制度とイギリスの植民政策の関わりを緻密にあとづけて、「印度の経済的発達に対して歴史的な意義を有すると共に、資本主義的搾取に加ふるに政策的圧迫、即ち資本主義的植民政策の圧迫を包含する」イギリス支配の本質を剥抉し、「印度国民運動」高揚の必然性を指摘した<sup>187)</sup>。この書は先にふれた他の著書、『朝鮮統治の方針』や『帝国

主義下の臺灣』とともに読むことで、その意義はいっそう重いものとなろう。

中国との関連で言えば、中国の政治・経済・社会を科学的に分析して膨大な著作を残し、最後にいわゆる「ゾルゲ事件」に連座して検挙され、処刑された尾崎秀実（1901-44）がいた。彼は、「支那問題の所在の中心点は、民族国家としての統一建設途上に邁進するものとしての支那を認識すること」という矢内原の言葉を引きつつ、日本国内にはびこる「方法論の欠如」した「粗樸なる支那論が、従来我が國の運命を決する重要性を持つ大陸政策の推進理論であったこと<sup>188)</sup>」を喝破した。その上で尾崎は、

東亜共栄圏確立の前提是東洋に於ける英米資本勢力を駆逐するのみでなく、その民族支配の旧秩序方式をも根絶せしめる事にある。支那問題と南方問題との含む基本的意義はその民族問題にある。これらの地域に於いて植民地支配に呻吟して來た諸民族の自己解放こそ、東亜新秩序の不可欠なる要素であり、支那民族の解放と自立を通じて日支両民族の正しき協同こそは、東亜共栄圏確立の根底を成す所の第一前提である。

然も尚この事は日本自身の自己革新とも直接に関連を有つことなのである。凡ゆる困難を賭しても新しき東洋を建設せんとする日本は、自己革新と結びつけることなくしては、東亜諸民族の正しき結合による新秩序創建の偉業を直ちに達成し得ない

として、植民地の解放を日本自らの自己革新と結びつけて提起した<sup>189)</sup>。自ら嘱託に任せられた第1次近衛内閣のスローガンである「東亜新秩序」建設という「ドレイの言葉」

187) 矢内原忠雄『帝国主義下の印度』、大同書院、1941年（第5版、初版は1937年）、pp.168-169。

188) 尾崎秀実『国際関係から見た支那』、『尾崎秀実著作集』（以下、『尾崎著作集』）第1巻、勁草書房、1977年、pp.222-223。

189) 尾崎「東亜共栄圏の基底に横たわる重要な問題」、『尾崎著作集』第3巻、pp.223-224。

を用いつつも、「東亜新秩序の名のもとに露骨な帝国主義的要求がむき出しに現れることを抑える必要<sup>190)</sup>」を強調する尾崎の構想は、アジア諸民族の自己解放を基盤とし、世界変革につながるものであった<sup>191)</sup>。

このように、戦時下にあって綿密なアジア研究を重ねるなか、国策や国民の大勢に同ぜず、植民地的、半植民地的状況に置かれた社会や人々の現実と将来を冷静沈着に見つめようとする人も少なくなかったのである。戦時に獄中生活を体験したマルクス主義哲学者

古在由重の「戦中日記」を読むと、極めて制限された状況の中で綜合インド研究室や回教研究所などに身を置きながら、地道にインド情勢を研究する人たちの姿があちこちに窺える<sup>192)</sup>。この稿では取り上げられなかったより多くの人々の例を通じて、侵略・戦争などの危機的時代や状況に直面した知識人の責任や存在理由を考察するという作業を設定することが出来るが、それを今後の重要な課題としたい。

190) 尾崎「東亜新秩序の現在及び将来—東亜共同体論を中心に—」、『尾崎著作集』第2巻、p.355。

191) 「尾崎秀実年譜」、『尾崎著作集』第5巻、p.402。

192) 「戦中日記」、『古在由重著作集』第6巻、勁草書房、1967年。

## ブルキナファソ・マリ・セネガルにおける学術研究体制の動向

—ワガドゥグ大学・マリ大学の学術研究機構、セネガル国立公文書

館収蔵資料、およびコートディヴォワールの政治情勢について

真 島 一 郎

(アジア・アフリカ言語文化研究所)

### **La situation actuelle du régime de recherches scientifiques au Burkina Faso (l'Université de Ouagadougou), au Mali (l'Université du Mali) et au Sénégal (Archives du Sénégal): suivie des renseignements chronologiques sur la situation politique ivoirienne après le coup du décembre 1999**

MAJIMA, Ichiro

Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

0. はじめに
1. ブルキナファソ
2. マリ共和国
3. セネガル共和国
4. コートディボワール共和国

#### 0. はじめに

2001年2月4日より同年2月21日にかけ、筆者は仏語圏西アフリカの3カ国、ブルキナファソ（2月4日～9日）、マリ共和国（9日～15日）、セネガル共和国（15日～21日）を訪れ、科研総括班業務の一環である海外学術調査体制調査を試みた。

西アフリカ地域の学術調査事情については、これまでにも本研究所・国際学術研究総括班事務局発行の『海外学術調査ニュースレター』誌上に数編の報告文がみられる（田中・重田 1989, 鈴木 1991, 真島 1993, 小川 2000）。小文では、その補足として、これまで情報の乏しかった国立ワガドゥグ大学（在ブルキナファソ）および国立マリ大学（在マリ共和国）に関する最新の学術研究機構を紹介するほか、セネガル国立公文書館の収蔵資料、およびコートディヴォワール共和国の最近の政治情勢について、若干の情報を提供する<sup>1)</sup>。

---

**Keywords:** Burkina Faso, Mali, Sénégal, régime de recherches scientifiques, Côte d'Ivoire

キーワード：ブルキナファソ、マリ、セネガル、学術研究体制、コートディヴォワール

1) 今回の訪問国には、当初セネガル共和国に代えてコートディヴォワール共和国を予定していたが、2001年1月7日深夜から翌8日未明にかけてアビジャン市内で発生したクーデタ未遂事件により、本邦外務省から「渡航延期勧告（危険度3）」が発出されたため、最終段階で渡航を断念した。

### 1. ブルキナファソ

ブルキナファソの治安情勢は比較的の安定しており、2001年6月末現在、邦人の渡航制限は発出されていない。入国査証は東京のブルキナファソ大使館で取得可能であり、入国審査時にはイエローカード（黄熱病予防接種証明書）の提示が求められる。なお、同国に日本大使館は開設されておらず、在コートディヴィオワール共和国日本大使館（TEL: 225-20212863/-20213043/-20221790）がブルキナファソの大使館業務を兼轄している。

ブルキナファソの首都ワガドゥグにある国立ワガドゥグ大学 l'Université de Ouagadougou は、1965年創設の教育養成高等研究所 Institut Supérieur de Formation Pédagogique を前身とし、74年に総合大学への改組をはたした歴史をもつ。その後、91年の組織再編では5学部制を採用したが、99年に ANEB（ワガドゥグ全国学生連合 l'Association Nationale des Etudiants de Ouagadougou）が大学改革をめざし激しい抗議運動をキャンパスで展開した結果、去る2000年10月に同国政府の手による抜本的な組織改編が実現した。1968年パリの「5月革命」にならって旧来の学部は解体され、現在はフランス式の UER（教育研究単位 Unité d'Enseignement et de Recherche）に相当する UFR（教育研究単位 Unité de Formation et de Recherche）体制が布かれている。

付表1で示すように、同大学の学術研究機構は具体的に7UFR + 1Institut 体制をとり、総数約1万1千名の学生が在籍する総合大学である。同大学との学術協力の可能性をさぐるうえでの参考資料として、各研究単位の長（旧来の学部長ポストに相当）に在任中（2001年2月現在）の教授名を以下にあげる。

法学・政治学 UFR	ジャン・ヤド・トエ Jean Yado Toé
経済学 UFR	スレイマン・スマラ Souleymane Soulama
文学・芸術・コミュニケーション UFR	ノルベール・ニキエマ Norbert Nikièma
人文科学 UFR	サミュエル・サロ Samuel Salo
精密応用科学 UFR	レグマ・ブカリ Legma Boukari
生命地球科学 UFR	ヴィクトール・カブレ Victor Kabré
保健医学 UFR	アマドゥ・サン Amadou Sanou

(以上敬称略)

学内行政機構としては、学長（正式職名は“大学区事務総長 Chancelier”）1名のもと、個別の担当業務をなう3名の副学長がおり、その下位にこれら7UFRが配置される形式をとる。とりわけ副学長のひとりは「国際学術協力」担当であり、国際学術協力の事務作業にあたる DCU（大学協力局 Direction de la Coopération Universitaire）の責任者である点を記しておく。

ただし、ワガドゥグ大学現学長のアルフレッド・トラオレ Alfred Traoré 教授（生化学専攻）から伺ったところによれば、同国の高等学術研究は、中高等教育科学研究所 Ministère des Enseignements Secondaire, Supérieur et de la Recherche Scientifique の管轄下、ワガドゥグ大学と CNRST（国立科学技術研究院 Centre National de la Recherche Scientifique et Technologique）の二部門態勢で推進されており、国外の研究者・研究機関によるブルキナファソ国内での調査許可もしくは同国学術研究諸機関との研究協力の申請は、まずもってワガドゥグ大学学長宛とするか、CNRST 所長（正式職名は“Délégué général”で現職はミシェル・サワド

ゴ Michel Sawadogo 氏) 宛とするか、いずれかの方策をとるようにとのことであった。

CNRST とは、国立農学院、国立応用技術研究所、国立保健科学研究所、国立社会科学研究所の4研究機関を行政上統轄する、同国の複合専門研究機構である。CNRST 各研究機関に所属する研究者は、ワガドゥグ大学で若干の出講業務に従事する以外、原則的には研究業務に専念している。参考までにそのうちのひとつ、国立社会科学研究所 Institut des Sciences des Sociétés の陣容を紹介するなら、同研究所スタッフは20名（現所長のバジル・ギスー Basile L. Guissou 氏は、サンカラ内閣の元外相である）、その専攻分野も言語学、歴史学、人類学、社会学、人文地理学から、政治学、音楽学にいたるまで多岐におよんでいる。

ワガドゥグ大学、CNRST それぞれの事務局連絡先は下記の通りである。

Rectorat de l'Université de Ouagadougou	03	B.P.7021	Ouagadougou	03
	TEL: 226-307664/-65			
	FAX: 226-307242			

Direction Générale du CNRST

01	B.P.7047	Ouagadougou	01
TEL: 226-324648			

## 2. マリ共和国

マリ共和国の邦人渡航については、2001年6月末現在で同国北部地域（モプチ、ガオ、キダルおよびトンブクトゥ地方）にのみ「注意喚起（危険度1）」が発出されている。入国査証は東京のマリ名誉総領事館で取得可能であり、入国審査時にはイエローカード（黄熱病予防接種証明書）の提示が求められる。なお、同国に日本大使館は開設されておらず、在セネガル共和国日本大使館（TEL: 221-8239141/-8237479）がマリ国内の大使館業務を兼轄している。

マリ共和国の首都バマコにある国立マリ大学 l'Université du Mali は、共和国独立直後の1962年に創設された高等教育諸機関が、86年の大学創設令により統合のうえ発足した総合大学である。その後、政府機関等による数度の諮問調査を経たうえ、96年に実質的な開校をむかえた。かかる経緯のゆえに、同大学の各学部は現在もバマコ市内に独自の敷地を有しており、統一キャンパスは存在しない。

付表2で示したように、同大学の学術研究機構は4学部制をとり、法制上はこれにくわえて3研究所、3学院が大学組織に包含されている。学内行政機構としては、学長 Recteur 1名、副学長 Vice Recteur 1名が学内行政を統轄する。学長は、各学部長・研究所長からなる大学部局長評議会 Conseil de l'Université の議長も兼任している。学長事務局と学部組織の中間レベルに位置する複数の事務局のうちには、「対外関係・法務局 Service des relations extérieures et des affaires juridiques」が設置されており、国際学術協力および大学間協定の締結業務を担当している。

対外関係・法務局の現局長であるディアロ・ララ・シイ Diallo Lalla Sy 教授から伺ったところによれば、日本の学術諸機関がマリ大学との学術研究協定を希望する場合、大学間協定であればマリ学長宛に、また学部間協定のレベルであれば学長宛ではなく協定希望学部の学部長 Doyen 宛に直接書状を送付するようにとのことであった。参考までに、同大学の学長事務局、および四学部それぞれの現学部長名（2001年2月現在）、所在地、連絡先を以下に紹介する（敬

称略)。

・学長事務局　所在地 113, Rue Baba Diarra, Bamako, Mali  
 現学長 ブバカル・シディキ・シセ Boubacar Sidiki Cissé  
 連絡先 Rectorat de l'Université du Mali  
 B.P. E2528, Bamako, Mali  
 TEL: 223-221933/-229302/-229252 FAX: 223-221932

・文学・言語・芸術・人文学部

学部長 ドリサ・ディアキテ Drissa Diakité (歴史学専攻)  
 所在地 Rue Soundjata Keïta, Bamako, Mali  
 連絡先 FLASH  
 B.P. 241 Bamako, Mali  
 TEL: 223-231688 FAX: 223-230461

・科学技術学部

学部長 アブドゥル・カリム・サンゴ Abdoul Karim Sanogo (数学専攻)  
 所在地 Colline de Badalabougou  
 連絡先 FAST  
 B.P. 3206 Bamako, Mali  
 TEL: 223-223244 FAX: 223-773838

・法経学部

学部長 イエイヤ・ハイダラ Yéhiya Haïdara (社会経済学専攻)  
 所在地 Avenue de la Liberté, porte 1185, Bamako, Mali  
 連絡先 FSJE  
 B.P. 276 Bamako, Mali  
 TEL: 223-222719 FAX: 223-228297

・医薬歯学部

学部長 ムサ・トラオレ Moussa Traoré (神経病学専攻)  
 所在地 Colline de l'Hôpital du Point G  
 連絡先 FMPOS  
 B.P. 1805 Bamako, Mali  
 TEL: 223-225277 FAX: 223-229658

なお、同国教育省 Ministère de l'Education の管轄下には、このマリ大学のほか、ブルキナファソと同じく CNRST が設置されている。ただしブルキナファソの場合とは異なり、マリ共和国の CNRST は複数の独立研究所 Instituts autonomes を上位から統轄する複合研究機構の管理機関とはいえない。第一に、独立研究所の管轄官庁はそれぞれ異なる。第二に、独立研究所の所長職は CNRST 所長職と同列の大統領指名ポストである。これらの理由から、CNRST の設置目的は独立研究所の統轄というより、各研究所間の連携業務にあるといえる。なお、マリ国内

の主たる独立研究所としては下記の機関が存在する。

人文科学研究所	IHS (Institut des Sciences Humaines)
農村経済学研究所	IER (Institut de l'Economie Rurale)
国立保健研究所	INRSP (Institut National de Recherche en Santé Publique)
建築・公共事業国立実験研究センター	

CNREX-BTP

(Centre National de Recherche d'Expérimentation en Bâtiments et Travaux Publics)

獣医学中央試験場 LCV (Laboratoire Central Vétérinaire)

国立太陽エネルギーセンター

CNES (Centre National d'Energie Solaire)

### 3. セネガル共和国

セネガル共和国の邦人渡航については、2001年6月末現在で同国カザマンス地方に「観光旅行延期勧告(危険度2)」が、また同地方のギニアビサウ国境付近およびセディウ、ジガンショール両県内に「渡航延期勧告(危険度3)」が発出されている。入国査証は、3カ月以内の滞在については取得が免除され、3カ月以上の滞在については東京のセネガル大使館で取得が可能である。入国審査に際して、イエローカードの提示は特に求められない。また既述のとおり、同国の首都ダカール市内には日本大使館が開設されている。

セネガル国内における調査許可証の取得方法や国立シェイク・アンタ・ディオブ大学の学術研究機構については、すでに別稿でふれたことがある(真島1993)。以下では、セネガル共和国のみならず現フランス語圏西アフリカ諸国の学術調査研究にきわめて重要な資料価値をもつと思われるセネガル国立公文書館の収蔵資料について、若干紹介することにしたい。同公文書館は、現フランス語圏西アフリカ8カ国、すなわち旧仮領西アフリカ連邦の連邦総督府が置かれていたダカール市内にあり、西アフリカ地域のフランス植民地史全般にかかる18世紀後半以来の膨大な公式文書を収蔵する施設である。同館は、1913年に仮領西アフリカ植民地連邦の公文書部 Service des Archives として発足した後、セネガル共和国独立後の77年に現在のセネガル公文書局 Direction des Archives du Sénégal として、セネガル共和国内閣官房の直轄機関となった。同館の収蔵文書は「セネガルコレクション」とよび「仮領西アフリカコレクション」に二分され、総文書量は縦並びで合計12kmの長さに達するものと推計されている。

付表3に掲げたものは、このうち「仮領西アフリカコレクション」の収蔵文書をめぐる分類区分の一覧である。全体はおおむねA,B,C…の順で22セクションに区分され、各セクション内部には、さらに通し番号を冒頭に付した下位分類が施されている。

この種の公文書館資料は、通常もっぱら政治史や経済史を主たる専門分野とする歴史学者にとっての第一次資料とみなされがちであるが、筆者自身の乏しい閲覧経験によるかぎり、そこには他分野の研究者にとってもまだ未開拓の沃野が広がっているとの印象を覚えることたびたびであった。ほんの一例をあげるなら、たとえば同館の資料分類でいうセクション3Sの気象台文書や6Sの地誌局文書はいわゆるよばず、セクションHの保健・医療関連文書は医学研究全般にとっての、セクション3Pの鉱山・地質関連文書は地質学にとっての、またセクションRの農務関連文書はそれぞれ1Rが農学、2Rが畜産学、3R、4Rが植物学・生物学にとっての

重要な資料となりうる。さらに4Qの狩猟関連文書と西アフリカ地域の生態系破壊問題とのつながりや、7Qのニジェール川開発局関連文書といわゆるサヘル地方の乾燥化問題とのつながりなどを想定するならば、西アフリカ地域をめぐるごく今日的な問題群に向きあううえで、これら過去の文書群は自然科学系の諸研究にとっても第一級の歴史データとなる可能性をひめている。同館の現館長名および連絡先は下記の通りである。開館日は平日のみで、水曜（10時～17時）をのぞく各曜日の開館時間はいずれも9時～17時である。

館長 サリウ・ンパイエ Saliou Mbayé 氏

連絡先 Archives du Sénégal, Immeuble administratif, Rez de jardin, Avenue Roume, Dakar, Sénégal TEL: 221-235072 FAX: 221-225126

なお、同公文書館には下記の場所に別館も存在する。

Archives du Sénégal Annexe, 150, Rue Moussé Diop (Ex-Rue Blanchot), Dakar, Sénégal  
TEL: 221-224048

#### 4. コートディヴォワール共和国

コートディヴォワール共和国では、1999年12月に同国政治史上初の軍事クーデタが挙行されて以来、隣国からの移民排斥問題ともかかわる深刻な政情不安が継続している（佐藤 2000a, 佐藤 2000b, 真島 2000, 真島 2001a）。そのため今回訪問したブルキナファソ、マリ、セネガルでは、学術調査体制にかかわる調査活動の一環として、首都およびその近郊の住民の方々から隣国コートディヴォワール情勢に関する予備的な聞き取り調査を試みた。付表4では小文の付録として、1999年12月末のクーデタ発生時点から2001年1月現在にいたるコートディヴォワール共和国の政治情勢に関する年譜を付すこととした。

#### 参考文献

- 小川 了. 2000. 「平成11年度海外学術調査のための派遣報告（西アフリカ）」『海外学術調査ニュースレター』43, pp.9-13.
- 佐藤 章. 2000a. 「コートディヴォワールのクーデター」『アフリカレポート』30, pp.29-34.  
———. 2000b. 「コートディヴォワールの政治危機—争点なき多党制の閉塞」『アジ研ワールド・トレンド』61, pp.34-41.
- 鈴木裕之. 1991. 「コート・ジヴォワール共和国における最近の調査事情」『海外学術調査ニュースレター』18, pp.33-34.
- 田中二郎・重田真義. 1989. 「アフリカ諸国における調査許可、査証等の取得について」『海外学術調査ニュースレター』13, pp.1-5.
- 真島一郎. 1993. 「セネガル・ギニア・コートジボアールにおける学術研究体制の動向」『海外学術調査ニュースレター』25, pp.16-26.  
———. 2000. 「「眞の国民」問う危うさ」『朝日新聞』2000年12月26日朝刊, 第6面.
- . 2001. 「2000年コートディヴォワール共和国の内乱—《国籍》と《組合》をめぐるジャコバニズムの混迷」国立民族学博物館「紛争の政治化と軍事化」研究会（松田素二 代表）における口頭発表資料, 2001年1月27日, 於：国立民族学博物館。

## 付表 1 ワガドゥグ大学の学術研究機構

*UFR = 教育研究単位 Unité de Formation et de Recherche*

法学・政治学教育研究単位 *UFR/SJP = L'UFR des Sciences Juridiques, Politiques*

法学部門 *Section Droit*

政治学部門 *Section Sciences Politiques*

犯罪学部門 *Section Criminologie*

経済学教育研究単位 *UFR/SEG = L'UFR des Sciences Economiques*

経済学部門 *Section Sciences Economiques*

経営学部門 *Section Sciences de Gestion*

文学・芸術・コミュニケーション教育研究単位 *UFR/LAC = L'UFR des Lettres, Arts et Communication*

芸術・コミュニケーション部門 *Section Arts et Communication*

芸術・コミュニケーション学科 *Département des Arts et Communication*

文学・国語・言語学部門 *Section Lettres, Langues et Linguistique*

文学科 *Département des Lettres*

人文科学教育研究単位 *UFR/SH = L'UFR des Sciences Humaines*

人文科学部門 *Section Sciences Humaines*

人文社会学科 *Département des Sciences Humaines et Sociales*

歴史=地理学・考古学部門 *Section Histoire-Géographie et d'Archéologie*

精密応用科学教育研究単位 *UFR/SEA = L'UFR des Sciences Exactes et Appliquées*

物理科学部門 *Section Sciences Physiques*

化学科 *Département de Chimie*

物理学科 *Département de Physique*

数学・情報科学部門 *Section Mathématiques et Informatique*

数学・情報科学科 *Département de Mathématiques et d'Informatique*

生命地球科学教育研究単位 *UFR/SVT = L'UFR des Sciences de la Vie et de la Terre*

生命科学部門 *Section Sciences de la vie*

生物・動物生理学科 *Département de Biologie et Physiologie animale*

生物・植物生理学科 *Département de Biologie et Physiologie végétales*

生化学・生物工学科 *Département de Biochimie et Biotechnologie*

地球科学部門 *Section Sciences de la Terre*

地質鉱物資源学科 *Département de Géologie et Ressources minières*

水理学科 *Département des Sciences de l'eau*

土壤地質学科 *Département de Pédologie et des Sciences du sol*

**保健医学教育研究単位 *UFR/SDS = L'UFR des Sciences de la Santé***

医学部門 *Section Médecine*

一般・専門医学科 *Département de Médecine Générale et de Spécialités*

外科学科 *Département de Chirurgie*

放射線学科 *Département de Radiologie*

保健学科 *Département de Santé Publique*

基礎科学科 *Département des Sciences Fondamentales*

母子関係学科 *Département Mère-Enfant*

薬学部門 *Section Pharmacie*

薬学科 *Département des Sciences Pharmaceutiques*

生医学科 *Département des Sciences Biologiques*

歯科外科学部門（口腔歯科学） *Section Chirurgie Dentaire (Odontostomatologie)*

上級衛生士部門 *Section Techniciens Supérieurs de la Santé*

---

**ブルキナファソ技術工芸研究所 *IBAM = L'Institut Burkinabé des Arts et Métiers***

土木工学部門 *Section Génie Civil*

建築都市計画部門 *Section Architecture et Urbanisme*

遠距離通信部門 *Section Télécommunication*

通商銀行部門 *Section Commerce et Banques*

統計人口部門 *Section Statistiques et Démographie*

管理経営事務部門 *Section Secrétariat de Direction et de Gestion*

---

## 付表2 マリ大学の学術研究機構

*DER = 教育研究科 Département d'Enseignement et de Recherche*

## I. 学部

文学・言語・芸術・人文学部 *FLASH = Faculté des Lettres, Langues, Arts et Sciences Humaines*

芸術教育研究科 *DER des Arts*

地理学教育研究科 *DER des Géographie*

史学考古学教育研究科 *DER d'histoire et d'archéologie*

言語教育研究科 *DER des langues*

英語部門 *Section Anglais*

ロシア語部門 *Section Russe*

ドイツ語部門 *Section Allemand*

文学教育研究科 *DER des lettres*

社会科学教育研究科 *DER des sciences sociales*

哲学部門 *Section de philosophie*

心理学部門 *Section de psychologie*

教育学部門 *Section éducation*

社会=人類学部門 *Section socio-anthropologie*

科学技術学部 *FAST = Faculté des Sciences et Techniques*

化学・生物学・地質学教育研究科 *DER: Chimie, Biologie, Géologie (CBG)*

数学・物理学・化学教育研究科 *DER: Math, Physique, Chimie (MPC)*

法経学部 *FSJE = Faculté des Sciences Juridiques et Economiques*

法学教育研究科 *DER de Droit*

経済学教育研究科 *DER Sciences Economiques*

医薬歯学部 *FMPOS = Faculté de Médecine, de Pharmacie et d'Odonto-Stomatologie*

一般医学選択分野 *Option Médecine Générale*

薬学選択分野 *Option Pharmacie*

口腔歯科学選択分野 *Option Odonto-Stomatologie*

## II. 研究所

大学経営研究所 *IUG = Institut Universitaire de Gestion*

教育応用研究理工科研究所 *IPR/IFRA = Institut Polytechnique Rural de Formation et de Recherche Appliquée*

教育応用研究高等研究所 *ISFRA = Institut Supérieur de Formation et de Recherche Appliquée*

## III. 学院

国立技師学院 *ENI = Ecole Nationale d'Ingénieurs*

高等師範学校 *ENS = Ecole Normale Supérieure*

国立行政学院 *ENA = Ecole Nationale d'Administration*

付表3 セネガル国立公文書館「仮領西アフリカ連邦総督府関連文書」の分類区分

- 
- A. 公式文書（1817-1959年）ACTES OFFICIELS（1817-1959）
- 1A. 公式文書（1817-1959年）*Actes officiels (1817-1959)*
    - ・*Arrêtés, ordres et décisions du gouverneur du Sénégal (1817-1959)*
    - ・*Arrêtés et décisions du gouverneur du Sénégal et du gouverneur général (1891-1959)*
    - ・*Circulaires du gouverneur général de l'AOF (1909-1959)*
  - 2A. ゴレ司令官、セネガル第二区司令官、およびセネガル総督の指令・決定・回状（1826-1887年）
 

*Ordres, décisions et circulaires du commandant de Gorée, du commandant du 2e arrondissement, du lieutenant-gouverneur (1826-1887)*
  - 3A. 仮領西アフリカ連邦総督の回状 *Circulaires du gouvernement général de l'A.O.F.*
  - 4A. フランス本国公文書 *Actes officiels métropolitains*
  - 5A. 仮領西アフリカ連邦総督の派遣命令 *Ordres de mission du gouverneur général de l'A.O.F.*
  - 6A. 仮領西アフリカ連邦総督の航空回状 *Circulaires avion du gouverneur général de l'A.O.F.*
- 
- B. 一般書簡 CORRESPONDANCE GENERALE
- 1B. 植民地関連閣僚のセネガル総督宛書簡（1779-1908年）
 

*Correspondance arrivée du ministre au gouverneur du Sénégal (1779-1908)*
  - 2B. セネガル総督の植民地関連閣僚宛書簡（1816-1896年）
 

*Correspondance départ du gouverneur du Sénégal au ministre (1816-1896)*
  - 3B. セネガル総督によるその他の書簡（1788-1893年）
 

*Correspondance départ du gouverneur du Sénégal à toutes personnes autres que le ministre (1788-1893)*
  - 4B. ゴレ司令官、セネガル第二区上級司令官およびダカール内陸総督・代表による書簡（1816-1896年）
 

*Correspondance départ du commandant de Gorée, du commandant supérieur du 2e arrondissement, du lieutenant-gouverneur et du délégué de l'Intérieur à Dakar (1816-1896)*
  - 5B. 植民地監査視察官および外務局長による書簡（1816-1873年）
 

*Correspondance départ du contrôleur ou inspecteur colonial et du directeur des Affaires extérieures (1816-1873)*
  - 6B. ゴレ司令官およびセネガル第二区上級司令官受領の書簡（1817-1888年）
 

*Correspondance arrivée reçue par le commandant de Gorée et le commandant supérieur du 2e arrondissement (1817-1888)*
  - 7B. 植民地監査視察官受領の書簡（1819-1859年）
 

*Correspondance reçue par le contrôleur ou inspecteur colonial (1819-1859)*
  - 8B～32B. 仮領西アフリカ連邦総督を発信者あるいは受信者とする電報（1895-1947年）
 

*Télégrammes arrivés et départ du gouverneur général de l'AOF (1895-1947)*
- 
- C. 人事 PERSONNEL
- 1C. 人事書類 *Dossiers du personnel*
  - 2C. 人事規定 *Statut du personnel*
  - 3C. 叙勲 *Distinctions honorifiques*

- D. 軍務 (1763-1959年) AFFAIRES MILITAIRES (1763-1959)
- 1D. 軍事作戦 (1823-1934年) *Opérations militaires (1823-1934)*
  - 2D. 大戦期 (1914-1948年) *Périodes de guerre (1914-1948)*
  - 3D. 軍事法廷 (1842-1945年) *Justice militaire (1842-1945)*
  - 4D. 軍関連人事 (1779-1956年) *Personnel militaire (1779-1956)*
  - 5D. 防衛および軍事機構 (1763-1956年) *Défense et organisation militaire (1763-1956)*
  - 6D. 軍事設備および施設 (1854-1956年) *Matériel et bâtiments militaires (1854-1956)*
  - 7D. 憲兵隊およびセルクル衛兵 (1933-1952年) *Gendarmerie et garde-cercles (1933-1952)*
- 

E. 評議会および議会 CONSEILS ET ASSEMBLEES

- 1E. 議会組織一般 (1820-1952年) *Généralités: Organisation des Assemblées (1820-1952)*
- 2E. ゴレ行政評議会および区評議会 (1824-1861年)  
*Conseil d'administration et Conseil d'arrondissement de Gorée (1824-1861)*
- 3E. セネガル行政評議会および民間評議会 (1819-1955年)  
*Conseil d'administration et conseil privé du Sénégal (1819-1955)*
- 4E. セネガル地方評議会 (1840-1920年), 植民地評議会 (1920-1946年), 地方評議会 (1946-1952年), 領土議会 (1952-1958年), 憲法制定立法評議会 (1959-1960年)  
*Conseil général du Sénégal (1840-1920), Conseil colonial (1920-1946), Conseil général (1946-1952), Assemblée territoriale (1952-1958), Assemblée constituante et législative (1959-1960)*
- 5E. 仏領西アフリカ争訴評議会 (1920-1958年) *Conseil du contentieux de l'AOF (1920-1958)*
- 6E. 仏領西アフリカ連邦総督府評議会常任委員会 (1905-1920年)  
*Commission permanente du conseil du gouvernement de l'AOF (1905-1920)*
- 7E. ダオメ行政評議会 (1905-1920年), モーリタニア民間評議会・行政評議会 (1921-1954年)  
*Conseil d'administration du Dahomey (1905-1920), Conseil privé et conseil d'administration de la Mauritanie (1921-1954)*
- 8E. 上セネガル＝ニジェール行政評議会 (1905-1920年) およびスーダン行政評議会・民間評議会 (1920-1956年)  
*Conseil d'administration du Haut-Sénégal-Niger (1905-1920) et conseil d'administration et conseil privé au Soudan (1920-1956)*
- 9E. ギニア行政評議会 (1902-1914年) *Conseil d'administration de la Guinée (1902-1914)*
- 10E. 象牙海岸行政評議会・民間評議会 (1904-1956年)  
*Conseil d'administration et conseil privé de la Côte d'Ivoire (1904-1956)*
- 12E. ニジェール行政評議会・民間評議会 (1922-1956年)  
*Conseil d'administration et conseil privé du Niger (1922-1956)*
- 13E. ダオメ行政評議会・民間評議会 (1920-1951年)  
*Conseil d'administration et conseil privé du Dahomey (1920-1951)*
- 14E. トーゴ行政評議会 (1936-1946年) *Conseil d'administration du Togo (1936-1946)*
- 15E. モーリタニア地方評議会・領土議会 (1948-1958年)  
*Conseil général et Assemblée territoriale de Mauritanie (1948-1958)*
- 16E. スーダン地方評議会・領土議会 (1947-1958年)  
*Conseil général et Assemblée territoriale du Soudan (1947-1958)*

- 17E. ギニア地方評議会・領土議会（1949-1958年）  
*Conseil général et Assemblée territoriale de la Guinée (1949-1958)*
- 18E. 象牙海岸地方評議会・領土議会（1948-1959年）  
*Conseil général et Assemblée territoriale de la Côte d'Ivoire (1948-1959)*
- 19E. 上ヴォルタ地方評議会・領土議会（1948-1959年）  
*Conseil général et Assemblée territoriale de la Haute-Volta (1948-1959)*
- 20E. ニジェール地方評議会・領土議会（1948-1959年）  
*Conseil général et Assemblée territoriale du Niger (1948-1959)*
- 21E. ダオメ地方評議会・領土議会（1947-1959年）  
*Conseil général et Assemblée territoriale du Dahomey (1947-1959)*
- 22E. 仏領西アフリカ大評議会（1947-1959年）*Grand conseil de l'AOF (1947-1959)*
- 

F. 外務（1809-1957年）AFFAIRES ETRANGERES（1809-1957）

- 1F. 英領ガンビア（1820-1955年）*Gambie (1820-1955)*
- 2F. ポルトガル領ギニア、ポルトガルおよびカーボベルデ諸島（1820-1955年）  
*Guinée portugaise, Portugal et Iles du Cap-Vert (1820-1955)*
- 3F. 英領ナイジェリア（1889-1957年）*Nigeria (1889-1957)*
- 4F. 英領シエラレオネ（1818-1954年）*Sierra Leone (1818-1954)*
- 5F. 英領黄金海岸（1848-1954年）*Gold Coast (1848-1954)*
- 6F. イタリア領リビア、トリポリタニア、イタリア、トルコ（1895-1953年）  
*Libye, Tripolitaine, Italie, Turquie (1895-1953)*
- 7F. リベリア共和国（1892-1954年）*Liberia (1892-1954)*
- 8F. リオ・デ・オロおよびスペイン（1900-1952年）*Rio de Oro et Espagne (1900-1952)*
- 9F. イギリス（1809-1953年）*Grande-Bretagne (1809-1953)*
- 10F. 外務一般、西アフリカ植民地非領有諸国、国際協定、国際連合（1876-1956年）  
*Généralités, affaires étrangères, pays occidentaux sans colonies en Afrique occidentale, conventions internationales, ONU (1876-1956)*
- 

G. 一般政務・行政（1782-1958年）POLITIQUE ET ADMINISTRATION GENERALE（1782-1958）

- 1G. 調査一般：調査団、記事、専門論文（1818-1947年）  
*Etudes générales: missions, notices et monographies (1818-1947)*
- 2G. 提起報告（1895-1960年）*Rapports périodiques (1895-1960)*
- 3G. 市町制（1824-1958年）*Institutions municipales (1824-1958)*
- 4G. 視察、植民地視察団（1874-1958年）*Inspection, mission d'inspection des colonies (1874-1958)*
- 5G. 黄金海岸仏領植民地および象牙海岸総督府（1808-1953年）  
*Etablissements français de la Côte d'or et gouvernement de la Côte d'Ivoire (1808-1953)*
- 6G. ガボンおよび仏領赤道アフリカ（1842-1953年）*Gabon et AEF (1842-1953)*
- 7G. ギニア：政務、行政およびイスラム事情（1831-1958年）  
*Guinée: Affaires politiques, administratives et musulmanes (1831-1958)*
- 8G. ダオメ：政務、行政およびイスラム事情（1831-1958年）  
*Dahomey: Affaires politiques, administratives et musulmanes (1831-1958)*

- 9G. モーリタニア：政務、行政およびイスラム事情（1799-1950年）  
*Mauritanie: Affaires politiques, administratives et musulmanes (1799-1950)*
- 10G. 上ヴォルタ：政務、行政およびイスラム事情（1919-1954年）  
*Haute-Volta: Affaires politiques, administratives et musulmanes (1919-1954)*
- 11G. ニジェール：政務、行政およびイスラム事情（1897-1947年）  
*Niger: Affaires politiques, administratives et musulmanes (1897-1947)*
- 12G. 北アフリカおよびサハラ（1899-1958年）*Afrique du Nord et Sahara (1899-1958)*
- 13G. セネガル：政務、行政およびイスラム事情（1782-1959年）  
*Sénégal: Affaires politiques, administratives et musulmanes (1782-1959)*
- 14G. トーゴ：政務、行政およびイスラム事情（1884-1958年）  
*Togo: Affaires politiques, administratives et musulmanes (1884-1958)*
- 15G. スーダン：政務、行政およびイスラム事情（1821-1953年）  
*Soudan: Affaires politiques, administratives et musulmanes (1821-1953)*
- 16G. カメルーン：政務、行政およびイスラム事情（1914-1952年）  
*Cameroun: Affaires politiques administratives et musulmanes (1914-1952)*
- 17G. 仮領西アフリカの政務（1895-1918年）*Affaires politiques AOF (1895-1918)*
- 18G. 仮領西アフリカの行政務（[1840]-1893-1958年）*Affaires administratives: AOF [1840]- (1893-1958)*
- 19G. 仮領西アフリカのイスラム事情（1900-1958年）*Affaires musulmanes: AOF (1900-1958)*
- 20G. 選挙（1841-1958年）*Elections (1841-1958)*
- 21G. 警察および公安（1825-1959年）*Police et sûreté (1825-1959)*
- 22G. 統計（[1779]-1818-1959年）*Statistiques [1779]- (1818-1959)*
- 23G. 民籍登録（1797-1959年）*Etat-civil (1797-1959)*
- 
- H. 仮領西アフリカの保健（1826-1959年）*SANTE EN AOF (1826-1959)*
- 1H. 保健 *Santé*
- 2H. 社会事業 *Affaires sociales*
- 
- J. 郵便・電信（1920-1951年）*POSTE ET TELECOMMUNICATIONS (1920-1951)*
- 
- K. 労働、労働力および奴隸制（1807-1958年）*TRAVAIL, MAIN-D'OEUVRE ET ESCLAVAGE (1807-1958)*
- 1K. 労働および労働力 *Travail et main-d'œuvre*
- 2K. 奴隸制および奴隸交易 *Esclavage et traite*
- 
- L. 委譲地および領地（1790-1957年）*CONCESSIONS ET DOMAINES (1790-1957)*
- 
- M. 司法裁判所（1819-1956年）*TRIBUNAUX JUDICIAIRES (1819-1956)*
- 1M. 主席検察官による書簡（1925-1954年）*Correspondance départ du procureur général (1925-1954)*
- 2M. 検事総局：主席検察官宛の書簡および訴訟事件（1916-1951年）  
*Parquet général: Correspondance adressée au procureur général et affaires en jugement (1916-1951)*
- 3M. 司法機関（1864-1947年）*Service judiciaire (1864-1947)*
- 4M. ゴレ重罪院（1875-1918年）*Cour d'assises-Gorée (1875-1918)*

5M. ゴレ＝ダカール第一審裁判所 (1832-1956年) *Tribunal de première instance Gorée-Dakar (1832-1956)*

## N. 行政裁判所 (1828-1924年), 税関 (1925-1953年)

TRIBUNAL ADMINISTRATIFS (1828-1924), DOUANES (1925-1953)

## O. 運輸および伝達 (1809-1920年), 教育: 学問および芸術 (1920年-)

TRANSPORTS ET TRANSMISSIONS (1809-1920), ENSEIGNEMENT: SCIENCES ET ARTS (1920-)

## P. 公共事業 (1821-1958年) TRAVAUX PUBLICS (1821-1958)

1P. 組織および機能 (1920-1958年) *Organisation et fonctionnement (1920-1958)*2P. 港湾および錨地 (1920-1958年) *Ports et rades (1920-1958)*3P. 鉱山および地質 (1920-1958年) *Mines et géologie (1920-1958)*

4P. 都市計画, 居住環境, 建造物, 道路 (1909-1959年)

*Urbanisme, habitat, bâtiments, voiries (1909-1959)*5P. 陸路および橋梁 (1907-1959年) *Routes et ponts (1907-1959)*6P. 鉄道 (1903-1958年) *Chemin de fer (1903-1958)*7P. 水, 電気, 下水 (1921-1958年) *Eaux et électricité, assainissement (1921-1958)*8P. 測量局 (1818-1958年) *Service topographique (1818-1958)*9P. 輸送, 航行 (1910-1958年) *Transports navigation (1910-1958)*

## Q. 経済事業 (1782-1959年) AFFAIRES ECONOMIQUES (1782-1959)

1Q. 一般 1920-1959年 *Généralités (1920-1959)*2Q. 工業, 手工業, 商業 (1919-1958年) *Industrie, artisanat, commerce (1919-1958)*3Q. 商農工会議所, 銀行 (1919-1958年) *Chambres de commerce, d'agriculture et d'industrie, banques 1919-1958*4Q. 運輸, 観光, 獣獵 (1919-1959年) *Transports, tourisme et chasse (1919-1959)*5Q. 共済組合 (1919-1958年) *Sociétés de prévoyance (1919-1958)*6Q. 展覧会, 見本市, 市場, 價格 (1919-1957年) *Expositions, foires et marchés, prix (1919-1957)*7Q. ニジェール川開発局 (1919-1956年) *Office du Niger (1919-1956)*8Q. 対外貿易, 通商協定 *Commerce extérieur, accords commerciaux*

## R. 農務 (1822-1959年) AFFAIRES AGRICOLES (1822-1959)

1R. 農業 (1822-1959年) *Agriculture (1822-1959)*2R. 畜産 (1910-1955年) *Elevage (1910-1955)*3R. 森林 (1904-1955年) *Forêts (1904-1955)*4R. 漁業 (1917-1957年) *Pêche (1917-1957)*

## S. 航海・航空 (1913-1958年) NAVIGATION MARITIME ET AERIENNE (1913-1958)

1S. 軍事船舶 (1939-1946年) *Marine de guerre (1939-1946)*2S. 商業船舶 (1920-1952年) *Marine de commerce (1920-1952)*

- 
- 3S. 気象台（1913–1958年）*Météorologie (1913-1958)*
  - 4S. 軍事飛行（1919–1945年）*Aviation militaire (1919-1945)*
  - 5S. 民間航空（1917–1957年）*Aviation civile (1917-1957)*
  - 6S. 地誌局（1924–1928年）*Service géographique (1924-1928)*
- 

- T. 財政（1803–1957年）*FINANCES (1803-1957)*
    - 1T. 予算（1919–1958年）*Budget (1919-1958)*
    - 2T. 資材（1912–1952年）*Matériel (1912-1952)*
    - 3T. 財政監査*Contrôle financier*
    - 4T. 契約（1919–1956年）*Marchés (1919-1956)*
    - 5T. 奉給および年金（1920–1950年）*Soldes et pensions (1920-1950)*
    - 6T. 税制（1920–1957年）*Fiscalité (1920-1957)*
- 

## Z. 私文書 *Archives privées*

- 1Z. 私人による私文書および公証人文書 *Archives privées des particuliers et archives des notaires*
  - 2Z. 団体文書 *Archives des associations*
  - 3Z. 企業文書 *Archives des entreprises*
- 

## Mf. マイクロフィルム *Microfilm*

---

## Fi. 図版 *Iconographie*

- 1Fi. 地図 *Cartes et plans*
  - 2Fi. ポスター *Affiches*
  - 3Fi. 写真 *Photos*
  - 4Fi. 旧版ポストカード *Cartes postales anciennes*
  - 5Fi. 新版ポストカード *Cartes postales modernes*
  - 6Fi. スライド *Diapositives*
  - 7Fi. ガラス絵 *Peintures sur verre*
  - 8Fi. 版画 *Gravures et estampes*
-

付表4 コートディヴォワールの政治情勢（1999年12月23日～2001年1月20日）

1999年

- 12.23 アビジャン *Abidjan* 市東部・アクエド *Akouedo* 国軍基地所属の下士官・兵士ら約200名が、未明に基地を出発。中央アフリカ共和国でのPKO 参加手当の未払いに抗議し、大統領との直接対話を要求。午前中からアビジャン中心街で威嚇射撃を開始。昼頃から国営ラジオ局、テレビ局を占拠。ビアンクマ *Biankouma* 県帰郷中のゲイ *Robert Gueï* 将軍が反乱兵にうながされ、夜半アビジャンに急行
- 12.24 反乱兵が未明にウフェ＝ボワニ国際空港を占拠。アビジャン中心部プラトー *Plateau* 地区に連絡する二つの橋を封鎖し、ジスカールデスタン大通りで略奪。ベディエ *Henri Konan Bédié* 大統領、午前中に反乱兵士と交渉を行うが決裂。ダンカン *Daniel Kablan Duncan* 首相、ンガッタ *Vincent Bandama N'Gatta* 国防相、コネ *Marcel Dibonan Koné* 治安相とともにフランス大使公邸へ避難。反乱兵はその後、与党 PDCI（コートディヴォワール民主党）幹事長のドナ＝フォロゴ *Laurent Dona-Fologo* 国民連帯相、ポンベ *Emile Constant Bomboké* 内相、エシイ *Amary Essy* 外相、ブルー国会議長、コナン憲兵隊参謀総長、ナンギ警察庁長官らを拘束するとともにアビジャン刑務所を占拠、野党 RDR（共和派連合）幹部4名をふくむ囚人6千5百名を解放。ゲイがテレビ放送に登場し、自らを「青年反乱兵のスポーツマン」としながら、ベディエ大統領の罷免、国会・政府・憲法裁・最高裁の解散、夜間外出禁止令の発令とともに、救国委員会 CNSP による無血クーデタを宣言。ベディエはフランス大使公邸からポール＝ブエ *Port-Bouët* 常駐のフランス第43海兵大隊敷地内に移動し、*Radio France Internationale* を通じて憲兵隊に「抵抗」を指令。カナダ政府が同日、クーデタ非難のプレスリリースを発表
- 12.25 ゲイが未明、ロット *Francis Lott* フランス大使との交渉でベディエの国外亡命に同意する一方、ベディエとの同行を希望していたダンカン首相、ンガッタ国防相の亡命を拒否。2閣僚は「フランスの保護下」で自宅軟禁措置となる。ゲイは午前、10名の将校・下士官からなる国家安全保障評議会 CNSP の樹立を発表し、ゲイ CNSP 議長による軍事政権が発足。民政移管までの暫定内閣樹立にむけ、主要政党に参加と協力を呼びかけるとともに、戒厳令を発令。憲兵隊首脳が午後、ゲイ支持を表明。コートディヴォワールの軍事同盟国フランスが夕刻、「コートディヴォワール在留自国民の救援」を理由にパラシュート旅団300名をダカールに急派、リープルヴィル駐留の兵力50がポール＝ブエに到着と発表
- 12.26 午後1時2分、ポール＝ブエのフランス軍基地内に退避していたベディエが家族や側近10数名とともにリープルヴィルから到着したフランス軍用ヘリ2機でロメに脱出。クーデタ勃発時点でリープルヴィルに滞在していた野党 FPI（イヴォワール人民戦線）党首バボ *Laurent Gbagbo* が帰国。カナダが、対コートディヴォワールの二国間援助を停止するとともに、本件に関して仏語圏首脳会議が介入するようガリ同会議事務総長に要請したとのプレスリリースを発表
- 12.27 ゲイがガリエニ *Gallieni* 基地（陸軍参謀本部の所在地）で、主要野党をはじめとする国内政治勢力と初会合を開き、48時間以内に新政府の閣僚候補者リストを提出するよう指示するとともに、自身は国防相ポストへの就任を、また内相、公安相、外相ポストを軍部側にあてるよう表明。野党系日刊紙『ル・ジュール』が、各政党責任者にむけてゲイが行った演説文全文を掲載。ダンカン、ンガッタ、コネの前3閣僚が早朝、フランス軍のヘリでロメに脱出。ベディエは亡命先のロメで3閣僚と合流後、ナイジェリアへ移動し、オバサンジョ大統領と善後策をめぐり会談。ナイジェリアは同日、クーデタ非難声明を南アと共同で発表。その後ベディエはマリに移動し、ECOWAS（西アフリカ諸国経済共同体）議長のコナレ同国大統領と会談。OAU が同日、クーデタ非難声明を発表。国内では、PDCI 事務局長フォロゴ、外相アマラ、元内相ポンベ、最高裁長官ママドゥ *Koui Mamadou* らが、テレビ放

送を通じ相次いでゲイへの忠誠を表明。ゲイは、拘留中の RDR 幹部を全員釈放し、夜間外出禁止令とアビジャン空港の閉鎖措置を解除

- 12.28 フランス、アビジャンとダカールから兵力を撤退
- 12.28 米国務省、リーカー報道官代理名でクーデタへの非難声明、および対コートディヴォワールの二国間援助停止を発表
- 12.29 ワタラ Alassane Dramane Ouattara 元首相がパリから帰国。「今回の事件はクーデタではなく、イヴォワール革命である」との談話
- 12.30 PDCI 党員のバニ氏、新政権の組閣に協力を申し出る
- 12.31 CNSP、フォロゴラ前政権の幹部 6 名を釈放

---

2000年

- 01. フォロゴ PDCI 事務局長、同党の新総裁に就任
- 01. 暫定政権が、公的・民間債務への返済約束を履行すると発表
- 01. EU 援助金の不正使用問題で暫定政権が180億 CFA を返済し、国庫がゼロにちかづく
- 01. LIDHO（イヴォワール人権同盟）およびアムネスティ・インターナショナルが、ゲイによる旧体制要人の不法拘留を非難
- 01. メル Théodore Eg Mel アビジャン市長、新政党 UDCI（コートディヴォワール民主連合）の結成を発表
- 01.01 暫定政権が、新憲法起草と新選挙法作成をめざす憲法・選挙諮問委員会 CCCE を創設
- 01.03 ベディエ、避難先のトーゴからフランスへ政治亡命
- 01.04 ゲイ、暫定内閣を組織。当初の閣僚リストは、RDR 偏重を理由にバボが FPI の政権参画拒否を表明したため廃案に。閣僚全21ポストのうち、政党諸勢力は11名のリストを提出、残る10ポストには軍首脳が就任。前与党 PDCI は、閣僚提出権を自ら辞退しゲイの選択に委ねる
- 01.05 ゲイ、旧野党第一党 FPI と第一回暫定政治会合を開催。同日、アビジャン市内で銃撃戦の噂が広まり商店等が閉鎖
- 01.12 野党第一党 FPI の 4 名が暫定政権に入閣
- 01.14 暫定内閣が一部改造をへて再発足
- 01.19 クーデタ以来拘留中の前イヴォワールラジオテレビ局長ワタラ Gonzie Ouattara 氏が釈放される
- 01.20-21 ゲイ、リベリア・ガーナ・ブルキナファソを歴訪し、各国元首と会談
- 01.21 暫定内閣の閣議が、ゲイの提案による CCCE（憲法及び選挙法諮問委員会）の設置政令案を採択
- 01.22 ゲイ、新憲法および新選挙法の承認をめぐる国民投票の 4 月実施を発表
- 01.24 ゲイ、憲法・選挙諮問委員会の会合席上で、民政移管にむけた大統領・国民議会選を10月 1 日までに実施と発表
- 02. 暫定政府、憲法承認の国民投票を監督する委員会 COSUR を設置
- 02.02 世銀・IMF 代表団が、暫定政府との間で10日間の技術調査を開始
- 02.09 政党勢力および民間人120名で構成される CCCE（憲法選挙法協議委員会）が、前憲法と同じく「共和国大統領は、生まれながらのイヴォワール人である父母から出生したイヴォワール人でなければならぬ」と規定するテクストを採択
- 02.15 前内相ポンベ、反国家的集会の組織による破壊活動容疑、および EU 援助金や国家予算80億 CFA の着服容疑で逮捕される
- 03. ボンベ釈放

- 03.10 暫定政府の要請で、ベディエ前大統領とその側近が保有するスイスの銀行口座が凍結処分となる
- 03.24 PDCI 系日刊紙『ル・ナショナル』の発行所に、兵士グループが乱入
- 03.26 ブアケ *Bouaké* 市内の酒場で兵士が男子学生 1 名に発砲し、同市内で学生による抗議デモが発生
- 03.27 ゲイ、アビジャンの病院に入院中のブアケ負傷学生を見舞う
- 03.28-29 ダロア *Daloa* 兵舎の兵士約400名が、給与引き上げを要求して反乱。アビジャンから急派された将校 1 名を射殺、弾薬庫をふくむ同兵舎を占拠。その後 4 名が逮捕されアクエド国軍基地に送致。アビジャン市内では、ゲイの護衛兵グループが単独行動を起こす
- 03.29 ブアケ事件の加害者兵士、兵籍剥奪処分
04. 4月30日に予定されていた憲法承認の国民投票が 5月末に延期される
- 04.09 PDCI 臨時党大会で、民政移管完了までは集団指導体制を布くことが決定
- 04.19 ゲイ、新憲法草案を各政党に提出し、26日開催予定の会議席上での見解発表を要請
- 04.27 ボンベ、再逮捕
05. 国外への渡航制限が発令される
05. ムロー *Jean-Michel Moulod* 元経済インフラ相、公金横領容疑で逮捕
05. 新憲法草案が官報で公表される。同草案には、RDR 指導者ワタラ氏の大統領立候補資格を否定する条項が記載されていたため、ゲイ自身の出馬が憶測される
- 05.05 ティアパニ *Albert Kakou Tiapani* 元建設相、公金横領容疑で逮捕
- 05.09 ボンベ、保釈金を支払い釈放
- 05.12 暫定政府、憲法国民投票の 7 月実施、大統領選の 9 月実施、国会議員選の10月実施を発表
- 05.16 アビジャン市内の大学キャンパスに国軍が侵入し、学生と衝突
- 05.18 暫定内閣改造。ワタラ派の閣僚が更迭され PDCI 党員 4 名が入閣
- 05.23 大統領選挙でのゲイ支持を表明する新政党 RCN が正式発足
- 05.24 新内閣のジャバテ文化相が入閣を拒否した余波で、文化省が廃省処分に
06. 暫定政府、パリ亡命中のベディエおよびンゴラン *Niamien N'goran* 元財務相の公金横領容疑をめぐる国際逮捕令状を発行
- 06.01 『ルモンド』紙、ベディエ政権期の “*Ivoirité*” ナショナリズムが憲法草案に再現されたとの論評
- 06.22 ディアバガテ *Soumahila Diabagaté* 陸軍参謀総長、国軍兵士によるテレビ局侵入の噂を否定する声明を発表。アビジャン市内を混乱させた噂の首謀者として、市内アボボ *Abobo* 地区の高校教師エレンガン *Kadjo Ellengand* 氏、CDIE 電話会社の総支配人アマニ *Hermann Kouame Amani* 氏の逮捕
07. フランス大使館前に学生数百名が集結し、フランスのワタラ支援を内政干渉として抗議
- 07.04-05 アクエド国軍基地の一部将兵が、クーデタ成功の報奨金600万 CFA を求める反乱をおこし、逮捕者51名。ゲイ、RDR 党員 4 名も逮捕するが 2 日後に釈放
- 07.20 CNI (イスラーム国民評議会) 指導者コネ *Idriss Koudouss Koné* 氏、新憲法草案を「分離主義」と形容し抗議
- 07.22 暫定政府、国民投票を翌日にひかえ非常事態宣言を発令
- 07.23-24 新憲法・新選挙法草案の可否を問う国民投票。RDR をふくめた全政党が承認をよびかける
- 07.25 86.53%の賛成（投票率約56%）を得て新憲法が承認され、第二共和政発足。大統領選は 9 月 17 日、国民議会選は10月29日の実施が決定。有権者年齢が18歳に引き下げられる
- 07.26 暫定政権、ワタラ氏の出国を禁ずる
- 07.31 大統領選の特定候補者を排除しないよう求めたジョスラン *Charles Fosselin* フランス協力相の発言を支持して、学生がアビジャン市とブアケ市でデモを同日開催するが、治安部隊に粉砕される

08. 大統領護衛隊クリバリ *Ibrahima Coulibaly* 二等軍曹、カナダ大使館軍事担当官職に左遷
- 08.03 ゲイ、ガボン訪問
- 08.04 7月4～5日の反乱事件で逮捕された将兵約45名の軍事法廷が開廷
- 08.05 PDCI フランス支部、大統領選の党擁立候補にベディエを選出
- 08.07 ゲイ、首都ヤムスクロ *Yamoussoukro* で行われた共和国独立40周年記念式典に参加
- 08.08 セネガル大統領が訪問先のカボンで、コートディヴォワールの大統領選実施プロセスに懸念を表明
- 08.10 コートディヴォワール主要4政党の党首、大統領選をめぐる政治問題を解決するために OAU などの呼びかけでゲイを交えヤムスクロ会談、選挙後の国民統一政府樹立案に合意
- 08.17 大統領選立候補者の受付。同日深夜までに19名が届出を終える
- 08.17 アビジャン市内で、選挙前のゲイ辞任を求める約3千人の学生デモ
- 08.18 ゲイ、大統領選に「超党派」で出馬する意向を正式表明
- 08.18 PDCI フランス支部、大統領選での活動にむけベディエが9月3日帰国予定と発表
- 08.19-20 PDCI 党大会がヤムスクロで開催。得票率36%のポンベが党擁立候補に決定
- 08.25 ワタラ氏の専属弁護士が、同氏にブルキナ国籍取得の過去がないとするコンパオレ大統領の見解を公表
- 08.26 大統領選選挙管理委が、9月17日予定の大統領選第一次投票を10月15日に延期するよう要請
- 08.30 9月17日予定の大統領選を、暫定政府が10月22日に延期
- 08.30 パリ亡命中のベディエ、『ルモンド』紙上で大統領選出馬の意向を示唆
- 09.01 10月22日に延期された大統領選立候補再受付
- 09.08 RDR 系日刊紙『ル・ジュール』のジャーナリスト1名が拘束され、大統領護衛兵に暴行される
- 09.16 ワタラ逮捕の噂を聞いた支持者がアビジャン市内のワタラ私邸前に集結
- 09.18 未明、アビジャン市内のゲイ私邸を大統領護衛兵の一部が襲撃。邸内のゲイは裏口から退避。現場で4名が逮捕。事件関与の疑いがある兵士3名もガーナ逃亡準備中に憲兵隊が逮捕。襲撃事件で護衛兵2名が死亡、十数名が負傷。ゲイは同日、「国軍内部の暗殺未遂事件」と発表。アビジャン市内の道路が封鎖される。軍事政権ナンバー2と3のパレンフォ国務相およびクリバリ *Abdoulaye Coulibaly* 運輸相の名が首謀者にあがり、コートディヴォワール・オリンピック委員会総裁としてシドニー滞在中のパレンフォ氏宅が家宅捜索を受ける
- 09.19 暫定政府、選挙戦開始以前のデモ活動を禁止するコミュニケ
- 09.20 元フランス国軍参謀総長が、ゲイの身辺警護強化のためにアビジャン到着
- 09.21 ゲイ、国内駐在の外交団に対し、大統領立候補資格の修正を訴えぬよう警告
- 09.22 暫定内閣改造。CNSP の3閣僚が更迭される
- 09.23 解任されたパレンフォ前国務相、ナイジェリア大使館に保護を求める
- 09.25 OAU 加盟の国家元首7名がアビジャンを訪問、ゲイと野党指導者をまじえた会議で暫定評議会の設置を提案
- 09.27 暫定内閣の一部改造
- 10.03 コートディヴォワール駐在の JICA 職員が国外退避
- 10.06 最高裁憲法部が、大統領選立候補者19名の資格審査結果を発表。ワタラ、ベディエ、ポンベ各氏をふくむ14名の候補者資格を却下し、ゲイ、バボなど5名の立候補を承認。暫定政府、6～9日までの非常事態宣言と夜間外出禁止令を発令
- 10.08 大統領候補者が選挙キャンペーンを開始
- 10.22 大統領選挙。RDR と PDCI が投票ボイコットをよびかける

- 10.23 未明, FPI が党首バボの当選を発表。国軍兵士が中央選管本部を包囲するなか, FPI 支持者によるデモが行われるが, 国軍の催涙弾で粉砕される。午後 9 時, 中央選管委員長が最終結果発表を翌日に延期。FPI は独自調査により, 開票率50%時点でのバボ得票率61.67%を発表するが, サマ *Henri-César Damalan Sama* 情報相はこれを否定
- 10.24 内務省総務局長が, 中央選管の一方的解散, および「経験不足」から開票結果の運用が不可能となり, 「特定政党の組織による大量の不正が発生した」ので国立統計研究所が不正発覚地区の開票結果を除外して得票数を計算した結果, ゲイが得票率52.72%で当選したとの政府コミュニケを発表。一方バボ氏も, 大統領選の勝利宣言。非常事態宣言が発令される
- 10.25 アビジャン市内で反大統領派の抗議デモが数万人規模に拡大。午前中に, 憲兵隊がデモ支持を表明。バボ派とゲイ派の銃撃戦で死者数名。夕刻, デモ隊がテレビ局・ラジオ局・大統領官邸に乱入, ゲイは官邸から空軍基地に逃亡し軍政崩壊。サマ情報相はバボの勝利を認め, 自らの辞任を表明。20時30分, 憲兵隊参謀総長がバボ支持を表明。21時, 中央選管が開票活動を再開
- 10.26 中央選管が大統領選の最終結果 (バボ59.36%, ゲイ32.72%) を発表し, バボが新大統領に就任。RDR 支持者が選挙の無効とやり直しを訴えるデモを展開。新政府, 24日からの騒乱による死者171名, 負傷者350名超と発表
- 10.26 アビジャン市アボボ地区の暴動鎮圧中に, 憲兵隊長 1 名が死亡
- 10.27 アビジャン市ヨプゴン *Yopougon* 地区の墓地で, ワタラ支持者とみられる男性57名の遺体が発見される
- 11.13 ゲイ, 二者会談でバボの勝利を認める
- 11.30 最高裁, 選挙法の国籍条項にもとづきワタラ氏の国会議員被選挙資格却下を決定
- 12.04-05 アボボ地区・アジャメ *Adjame* 地区を中心に, RDR 支持者と治安部隊の間で衝突が発生。死者約30名, 負傷者多数, 逮捕者千名超。バボ, 12月12日まで国内全土に非常事態宣言・夜間外出禁止令を発令。「イヴォワール人権運動」は, 国軍兵士が“外国人の響きをもつ名前”を根拠に一般住民を家族ごと検挙していると発表。一方的なバボ支持を理由に RDR から非難されていたフランス社会党が, 10日のコートディヴィオワール国民議会選挙に全政党が自由に候補者を擁立する解決法を示唆
- 12.09 セゲラ *Séguéla* 市内で, RDR 支持者と治安部隊が衝突
- 12.10 国民議会選挙。国内北部で投票をボイコットした RDR 支持者と治安部隊が衝突, 26の選挙区で投票が不履行となる
- 12.11 ワタラ氏, 前日の国民議会選は無効と発言
- 12.14 アムネスティ・インターナショナル, 過去 1 年間のコートディヴィオワール国内における人権侵害を非難
- 12.14 バボ大統領, アビジャン警察学校に拘禁中の RDR 女性支持者に対する性暴力容疑の調査を指示
- 12.14 セネガル大統領, コートディヴィオワール問題で「フランスが自らの役割を果たしていない」と発言
- 12.15 報道の自由・職業倫理監視団が, 「分離寸前のコートディヴィオワール」と題してコートディヴィオワールを分離させた地図を掲載した RDR 系新聞を非難
- 12.15 フランス語圏議員連盟事務局長のルジャンドル *Jacques Legendre* フランス上院議員が, 10日のコートディヴィオワール国民議会選の投票結果を認めないと表明
- 12.18 UE, コートディヴィオワールとの協力関係停止を示唆
- 12.19 リベリア国防相, ゲイが同国内で傭兵を徴募しているとのバボの発言を否認
- 12.20 拘禁中の RDR 支持者 1 名が獄死
- 12.20 HRW (*Human Rights Watch*) が, 大統領選後のコートディヴィオワール国内における国家的な人権

侵害を非難。くわえてヨプゴンで発見された57名の虐殺事件を憲兵隊の犯行と断定

2001年

- 
- 01.05 政府、国民議会選挙投票不履行の北部26選挙区の選挙を1月14日に実施と発表
  - 01.06 RDR青年組織が、14日の国会補選の投票ボイコットを呼びかける
  - 01.07-08 7日深夜から8日未明にかけて、反乱兵士約1000名がアビジャン市内の国営テレビ局・ラジオ局、大統領官邸、憲兵隊基地などを一時占拠するが、政府軍に鎮圧される。逮捕者31名。内相が“クーデタ未遂事件”と断定。バボは、国内内陸訪問中でアビジャンに不在
  - 01.10-11 クーデタ未遂首謀者にブルキナベを中心とした隣国人が関与していたとの政府発表。アビジャン市内で商人をターゲットにした外国人住民への暴力行為が頻発
  - 01.17 AFP特派員のジャーナリスト1名が、クーデタ未遂事件への加担容疑で逮捕される
  - 01.18 ブルキナファソ与党が、クーデタ未遂事件を非難するとともに、コートディヴォワール国内におけるブルキナベの安全への憂慮を表明
  - 01.19 シラク大統領、バボにAFPジャーナリストの釈放を要求



## **Social Conflicts, Resource Distribution and Social Justice in Nigeria**

UJOMU, Philip Ogo

University of Ibadan

This essay focuses on the problem of social conflicts, resource distribution and social justice in Nigeria. Social conflicts in Nigeria have assumed life threatening dimensions, leading to armed conflict, extensive human suffering, social instability and insecurity. These conflicts which have beset the country since its independence, have led to the vitiation of its potential for development. More importantly, the problem of social conflicts in Nigeria, which is multi-dimensional and life-threatening has on various occasions threatened to cause the total collapse of the state and the dissolution of society. This multifaceted crisis has indeed put the question of the survival of Nigeria on the center stage. The essay adopts the analytical, conceptual and empirical account procedures or methods in achieving its goal. It seeks to provide a sharper definition of the problematic and more importantly, to outline the major research perspectives available on the issue. To this effect, the work moves beyond earlier accounts in some important ways. Not only does it view the problem of social conflicts in Nigeria from a holistic perspective, but it also shows in a systematic manner the links between the various dimensions of the conflict in the country. Earlier contributions seem to have largely focused on a taxonomic and restrictive analysis of the problem, leading to the potential for a less comprehensive and systematic account of the fundamental causes and manifestations of social conflicts in Nigeria. This shortcoming has compelled a more careful theoretical analysis of the problem of social conflicts in Nigeria, with special reference to the crisis of social order and the problem of resource management in Nigeria. This essay highlights the need for fundamental social reconstruction, based on the full articulation of those crucial concepts necessary for establishing a truly humane, civil and harmonious society. Hence, it focuses on the redefinition of the meanings of social order, social justice, and national security. It examines the context of social justice in Nigeria and the paths to the reconciliation and restoration of social order and national integration. Its major contribution lies in the explicit quest for more viable and enduring rules and systems that would ensure the sustenance of human dignity, peace and harmony.

1. Introduction and Problem
  2. Goals
  3. Method
  4. Theoretical Analysis of Social Conflicts in Nigeria
  5. Resource Control and the Entrenchment of Marginalization in Nigeria:  
Myths and Realities
  6. Conflicts, Values and the Struggle for the Soul of the Nigerian Society:  
An Analysis of Two Regimes (1985-1998)
  7. National Security under Siege: Infra Structural Collapse and the Illusion  
of Personal and Regime Security in Nigeria
  8. Conflict, Politics and Instability in Nigeria: The Emergence of a Preda-  
tory State
  9. Political Corruption, Narcissism and National Decay: The Nigerian  
Experience
  10. The Nigerian Economy Undermined: Entrenching Pauperization and  
Underdevelopment in the Society
  11. Ethnic Conflicts and Elite Manipulation: The Political Economy of State  
Power and Resource Control
  12. Conflicts in Nigeria's Niger-delta: A Regional Metaphor of the Crisis of  
Social Order and the Erosion of Social Justice
  13. Redefining Social Conflicts and Envisioning the Conditions of Social  
Transformation
  14. The Conditions of Social Justice
- References

### **1. Introduction and Problem**

This research work focuses on the problem of social conflicts, resource distribution and social justice in Nigeria. It tries to show how the inability to create effective structures both for the proper management of the nation's resources and the sustenance of social justice, have led to the entrenchment of social conflicts. Nigeria confronts this problem in the form of ethnic, class, political and religious conflicts which have beset the country since its independence, vitiating its potential for development and on various occasions threatening to cause the total collapse of the state and the dissolution of society. This study departs from earlier accounts in some important ways. It attempts to view the problem of social conflicts in Nigeria from a holistic perspective, showing the links between the various dimensions of the conflict in the country. Earlier contributions seem to have largely focused on a taxonomic and restrictive analysis of the problem, thus leading to the potential for having a less comprehensive and systematic account of the fundamental causes and manifestations of social conflicts in Nigeria. This has compelled a more careful theoretical analysis of the problem of social conflicts in Nigeria.

The propensity for human differences, disputes and disagreements to degenerate into deep and enduring conflict and violence are very clear indications that all is not well within the country. It draws attention to a crisis of social order and the problem of resource management. More so, it reveals that Nigeria in the current dispensation has not fully articulated the crucial concepts necessary for establishing a truly humane, civil and harmonious society. Thus central to the problem of social conflicts is the perverted understanding of the meanings of social order, social justice, and national security. Subsequent analysis of the dimensions of social conflicts in Nigeria will demonstrate this point. Given the endemic conflicts plaguing the Nigerian society, there is a need to examine the conditions of social justice and the factors necessary for promoting genuine social reconciliation and national reconstruction.

The significance of this problem is seen not only in the fact that states have historically been concerned with issues concerning conflict management and security (Sesay 1998, p.43), but that many societies around the world today, are faced with all forms of social conflicts. Social conflicts in Africa have assumed life threatening dimensions, leading to either armed conflict, civil war or strife (Muthoni 2000, p.3). Nigeria is just one of the examples of the myriad of African nations beset or afflicted by conflicts, which have led to extensive human suffering, poverty, instability and insecurity.

## **2. Goals**

The study attempts a systematic investigation into the nature and causes of social conflicts in Nigeria. It examines the conditions for conflict management and resolution, and the reasons why previous attempts have not largely been successful. It examines the context of social justice in Nigeria and the paths to the reconciliation and restoration of social order and national integration. The study seeks to offer a holistic and concise account of the complex problem of conflict and resources in Nigeria. Its major contribution lies in the quest for more viable and enduring rules and systems that would ensure the sustenance of human dignity, peace and harmony. It analyzes the important role of ethical education and reorientation in the inculcation of values such as mutual respect, tolerance, justice and compassion among human beings within the Nigerian society. It also highlights the factors that have contributed to the vitiation of national security and stability in the society.

## **3. Method**

This work adopts the methods of field work, archival research, focused group discussions, interviews and conceptual analysis in achieving its goal. It attempts a systematic analysis and investigation into the roles of resource mismanagement, ethnicity, narcissism, inefficient institutions and corrupt public officials in the entrenchment and sustenance of social conflicts in Nigeria.

#### **4. Theoretical Analysis of Social Conflicts in Nigeria**

The problem of social conflicts in Nigeria is multi-dimensional and life-threatening. Beckett and Young (1997, p.1) say that Nigeria faces a profound and multifaceted crisis which has put the question of the survival of Nigeria on the center stage. The complex forms and patterns of conflict in Nigeria seems to be fully appreciated by a few scholars. Caroline Ifeka (2000, p.121) argues that conflict between the center and periphery has punctuated Nigeria's political development in the twentieth century. Since independence in 1960, the problem of conflicts in Nigeria have centered around the experiences of the numerous individuals and groups in the country, who have been faced with oppression, marginalisation, insecurity, and poverty in a country so richly blessed with vast human and material resources.

This situation which depicts a lack of social justice and poor resource management in the Nigerian state, have been the effects of long years of corrupt civilian rule and military dictatorship as well as the ineffectiveness of state institutions or agencies of government in the fulfilment of their constitutional roles within the social system. These factors among others, have contributed immensely to the erosion of social justice and resource management in the Nigerian nation, and therefore, to the institutionalization of social conflicts in the country. This situation has not really altered significantly, hence in a recent publication, the Committee for the Defence of Human Rights (CDHR 2000: ii) argues that the majority of the Nigerian peoples have continued to languish under situations of continued and heightened exploitation, frustration, violence and lack of progress.

Given such situations there is a need to interrogate in some detail the different dimensions of the conflict situation in Nigeria. This is necessary in order to provide a sharper definition of the problematic and more importantly, to outline the major research perspectives available on the issue. Let us start with the problem of resource control as the underlying factor in the establishment and sustenance of the conflict situation in the country.

#### **5. Resource Control and the Entrenchment of Marginalization in Nigeria: Myths and Realities**

It is correct to say that internal marginalization is the outcome of political, democratic and human development deficits or inadequacies as they prevail within a social system. According to Adedeji (1999, p.32), internal marginalization is caused by the mismanagement of the economy and the pursuit of a development paradigm that has polarized the different social and economic groups in the society. Nolutshungu (1996, p.2), argues rightly also that the state is central to this process of marginalization, because, in so far as states preside over diverse and unequal societies, they simply are not always representative of, or responsive to, all sections of their populations; neither are the interests and concerns of the state always coterminous or congruent with popular interests. More so, within the

state the ruling class is almost always central to the existence of marginalization. Hence, it is clear that the state in Nigeria in so far as it has conducted itself in a particularly insensitive, nepotic and predatorial manner, has been one of the key instruments employed in the entrenchment of marginalization in the country.

The state and its agencies are usually under the control of the ruling class or political elites. According to Fatton (1992, p.19), the existence of a ruling class implies necessarily the existence of a state whose role is to preserve and promote the economic, social and the political structures of the ruling class dominance. One of the major expressions of the role of the state as an instrument of domination and marginalization in recent times, has been seen in the varied claims made by certain individuals and groups in Nigeria that they are being marginalized. This idea of marginalization which depicts the reality that some persons have been excluded, alienated or sidelined to the fringes of social and political life in the country, has however become a somewhat politicized concept in Nigeria. Marginalization has become an idea to be employed as a weapon by groups (whether small or large) which have either been removed from, or eased out of positions of power. It has also been employed by those who seek to gain more benefits or advantages from the existing arrangements within the state or society, or even those who wish to draw increased attention to their real or perceived plight within the society.

Despite all of such contrived claims to marginalization, we must agree with Dommen (1997, p.485), that exclusion or marginalization is a reality in every society and it provides a framework for the analysis of existing policies, and if we may add, social values and economic programmes within the society. With regard to the situation in Nigeria and most other African nations, Adedeji (1999, p.23), maintains that the single most marginalizing domestic factor is poverty, worsened by civil strife and sociopolitical instability. Nolutshungu (1996: viii), maintains that marginalization makes people vulnerable and is a major expression or form of insecurity. The trend towards the marginalization of groups in the society has clearly been linked to many instances of failed nation-state project in Africa. One of the major expressions of marginalisation and insecurity is violence, and this is perpetrated by dominant populations against marginalized populations.

An important political activist Danjuma Makama (Aidokanya 1999, p.33), holds a somewhat skeptical view about the currently widespread claims by some groups in Nigeria that they are being marginalized. He says that individuals and groups in Nigeria claim that they are being marginalized when certain factors do not seem to be working in their favor. According to Makama (1999, p.33) the recent spate of complaints by some politicians in the northern Nigeria that they are marginalized is deceptive and hypocritical because it is this same people from a particular ethnic group (the Hausa-Fulani) that have occupied some of the most important positions in the nation in the last decade or two, before May 1999 when the military rulers handed over power to the civilians.

It is crucial to mention that the balance of political power in Nigeria, swayed to the south-western region of the nation in May 1999 when Obasanjo a member of the Yoruba ethnic group became the president of the nation. The issue at stake in the marginalization

controversy is therefore the fact that because the northern elites are no longer occupying top positions of power in society, they are now complaining of being marginalized. The important question that arises here is thus, what has been the frame of mind of those political and ethnic groups that have been on the fringes of political power of several decades.

Indeed, it must be observed that the claim by various nationalities that they are being marginalized and treated unjustly, has led to an almost total loss of faith and optimism in the Nigerian nation (Ogunmodede 2000, p.7). It must be noted that the issue of marginalization is not only restricted to the agitations of those excluded or sidelined in the struggle for, or control of political power. It is also an important factor in the quest by some groups and nationalities for greater regional or ethnic autonomy, greater control of the means to their communal security and the quest for greater economic control and empowerment within the nation.

More importantly, the perception, threat and reality of marginalization, such has arisen in the past decades or even in the recent times, have engendered a conflict situation in Nigeria which has facilitated feelings and expressions of mistrust, division and resentment among the different interests, groups and sectors of the Nigerian society. Some scholars have linked such divisions and resentments to the diverse cultural and religious beliefs and values of the different groups constituting the Nigerian society. Larry Diamond (1995, p.420) holds that the differences in culture, education and religion have ensured that there are enormous disparities in the economic and technological development of the northern and southern parts of Nigeria.

It should be noted that one of the most recent consequences of the long history of marginalization in Nigeria, as well as the fundamental ethno-cultural differences existing among the various groups in Nigeria, has been the increasingly unsuppressible demand for the initiation of a social and political process which will ensure the re-negotiation of the basis of, and the principles underlying human social existence in Nigeria. In short, there is a growing demand for the re-negotiation of the political entity called Nigeria. It seems that the call for the re-negotiation of the basis of Nigerian unity seems to possess some merit, because, it has been consistently argued that the only partnership that is or can be enduring, stable and viable is one in which all participants are happy, satisfied and have a sense of belonging (Africa Research Bulletin 2000, p.13946-47).

The consistent demand by some groups for the re-negotiation of the sociopolitical entity called Nigeria is anchored on their firm belief that hitherto, the prevailing structures and institutions in Nigeria have not adequately met the desires, needs and aspirations of most of the social and interest groups within the society, especially, in view of the individuals desire for happiness, peace, justice and security in the society. This point is better understood in the light of the position of Nolutshungu (1996: xii) that states are central to both the security and insecurity of peoples. In effect, the state remains critical when it intervenes in social conflicts, to create security or insecurity for some and not for others.

Thus central to the existence of social conflicts in Nigeria, is the situation in which groups possess, or have confirmed the suspicion or feeling that the state, or other sectors of

society have shortchanged or deprived them of certain key social benefits, rights and entitlement. Social conflicts in Nigeria occur in the different realms of life, but are prevalent in the political and economic realms. However, there are other areas of life which have become strategic playing fields for social conflicts.

#### **6. Conflicts, Values and the Struggle for the Soul of the Nigerian Society: an Analysis of Two Regimes (1985-1998)**

One important realm of the manifestation of social conflicts has been the generally over looked, but extremely important aspect of values. Few scholars, if any, have actually done a systematic analysis of the problem of values as a key area of the issue of social conflicts in Nigeria. It is therefore interesting to note that conflicts in Nigeria manifest in the form of competing values, beliefs and attitudes. Apparently, there has always been a deep seated struggle for the control of national integrity, identity and resources, as well as the people's human dignity and consciousness. This struggle has always existed between those whose values and conduct demonstrate their quest for the genuine enduring development of the nation, as opposed to others who feel that the nation's resources are intended to serve their selfish, wicked and myopic ends. Central to this conflict or crisis of values, is what Nzimiro (1984, p.11) refers to as the myth that those in public life are above criticism. This myth has reached such a level that men placed to guide the destiny of others think that no one can summon the courage to question their activities.

A case in point is that struggle which occurred between the Babangida regime and the pro-democracy groups in 1993 following the annulment of the June 12, 1993 presidential elections. Prior to the final stages of this conflict of values, as seen in the collapse of national life, the regime of Babangida had over the years between 1985 and 1993 demonstrated that its pronouncements ought not to be trusted or relied upon by any serious minded individual. Apart from ensuring that corruption became a way of life in the country, Babangida had broken several promises to hand over power to a civilian government and this situation came to a head when the June 12 presidential elections were annulled. According to Suberu (1997, p.285), the post election crisis that engulfed the nation in the wake of the annulled June 12 presidential election, provided a fertile basis for ethno-regional violence and national disintegration.

It was against the backdrop of this situation of political crisis and the breakdown of domestic order and national security, that both the Babangida regime and the pro-democracy groups struggled for the support and control of the citizens and national life. During the widespread crisis, violence and anarchy that followed the annulment of the presidential elections acclaimed to have been won by the popular businessman turned politician-M. K. O Abiola, the regime of Babangida lost that contest for the individual's and society's support and was shamefully and hurriedly expelled from government. This situation paved the way for the emergence of an incompetent and unviable Interim National Government (ING) headed by one of Babangida's proteges, by name Ernest

Shonekan.

Another case in point which depicts the struggle between divergent values in the Nigerian nation is that moral, political and spiritual struggle for the soul and sanctity of the Nigerian nation between 1993 and 1998. This struggle which was essentially focused on preventing the demonisation of the social system, pitched the dictatorial, and oppressive regime of Sani Abacha which had instituted a reign of terror, humiliation and tyranny on the citizens, against the coalition of trade unions, interest groups, concerned citizens, as well as the Nigerian democratic coalition. These groups strived at great cost, even to their lives and properties, to preserve the integrity of this great nation, and the humanity of its citizens, from those who wished to entrench the cult of personality and unleash a wave of unsurpassed bestiality on the lives of Nigerians.

The tyrannical regime of Abacha lost that contest in many ways. Not only was he ostracized by the world community, but he was also faced with very stiff opposition from various groups within the country. Abacha's killing, exiling and imprisonment of real and perceived internal and external opponents led to instability. The monstrous Abacha regime was ultimately distracted, and proved incapable of achieving the critical goals of national development, social organization and national reconciliation which confronted the nation during that period in its history.

The failure of Abacha and his supporters who were more interested in establishing perpetual personal rule, and ensuring the demise of his opponents, was clearly seen in the widespread jubilation and exultation that followed the announcement of Abacha's death. Indeed, Abacha's mysterious demise in 1998 paved the way for his successor Abubakar, to attempt a reconciliation and reformation of the Nigerian society, as well as put in place the machinery for a transition to civil rule programme that eventually brought about the emergence of a civilian regime in 1999. Thus, central to the occurrence of social conflicts in Nigeria has been that situation in which there existed a fundamental conflict of personal and social values among various interests and groups, with regard to the proper meaning of, and the proper approach to national security, national integration, peace and stability within the polity. This conflict of values and the various abuses and injustices arising from it, ensured that there were no clearly defined and established rules for harmonizing the diverse interests, needs and values of the different groups and sectors in the society in view of achieving the urgent task national development and the sustenance of security, peace and prosperity in the country. In short, the lack of shared beliefs, attitudes and values among the rulers and the ruled, as well as between the various segments of the Nigerian society ensured that conflicts remained endemic in the nation. It is this type of scenario that Oladipo (1996, p.42, 1998, pp.106-107), describes as a situation of moral crisis, clearly represented in the inability of the key groups within the society to forge viable patterns of humane and progressive co-existence within the community, based on the harmonious adjustment of interests and the development of bonds of mutual interaction. In such a society the presuppositions of a modern state such as common interests and values are lacking to a great extent.

From all we have discussed above, we can agree with Ifeka (2000, p.122) that the lack of trust between the rulers and the ruled in Nigeria ensured that there was an obstruction of national development at all levels of social existence. Furthermore, we can say that the absence or lack of operation of some core social values such as trust, cooperation, compassion, justice, tolerance, etc, among the different interests and segments in the society, ensured that the country achieved little or no sustainable development and that the various levels of national government could not effectively manage the nation's resources for the overall security, peace, prosperity and well being of all.

One of the major consequences of the conflict of values and attitudes in Nigeria, as we have seen, is the fact that there has been no enduring culture of social cooperation and national reconciliation. According to Emeka Ojukwu (the leader of the Biafran secession attempt in 1967 to 1970), the Nigerian nation has not confronted effectively, the critical task of national reconciliation. The nation remains in need of urgent and sincere reconciliation. There is a visible absence of peace, harmony, fraternity and security in the country. This situation of insecurity is clearly seen in the emergence and entrenchment of the ethnic militia such as Oodua Peoples Congress (OPC), Arewa Peoples Congress (APC) within the Nigerian polity. These groups and others like them are demanding for greater autonomy, benefits and recognition for their peoples or regions within the country (Ojukwu quoted in Louisa Ayonote 2000, p.25).

It is quite clear therefore, following the suggestion of Adedeji (1999, p.21), that if Nigeria is to achieve the goal of economic recovery and sustainable development then there is a need for the transformation of social and national values. To this extent, Nigerians must commit themselves to values such as human rights and dignity, respect for personal and community rights, public accountability and transparency, democratization of the development process, justice, equity and fair play. These are undoubtedly, the common national values that must be nurtured so that the confidence of the people in Nigeria as a just, humane and compassionate society can be restored. We now move on to a discussion of one area of national life in Nigeria, in which the problem of social conflicts has had tremendous consequences-national security.

## **7. National Security under Siege:**

### **Infra Structural Collapse and the Illusion of Personal and Regime Security in Nigeria**

At another important level, conflicts in the Nigerian state have manifested in the quest for national security. The continual ethnic, political, religious and socioeconomic crisis besetting the country, are clear illustrations of the almost perennial and intractable problem of insecurity in Nigeria. The prolonged periods of military dictatorship and the attendant economic decay, corruption, abuse of human rights, depreciation of human dignity and general collapse of social infrastructures arising from this situation have ensured the vitiation of Nigeria's national security. The problem of the establishment and sustenance of national security in Nigeria is seen mainly in the inability of the government and its

various agencies to ensure the adequate protection, defense, peace, survival, well-being and progress of the citizens, the state and the society at large.

One of the major reasons for this situation of insecurity and instability is that many of the previous regimes, especially the civilian regime of Shagari and the military regimes of Abacha and Babangida had myopic, perverted and unviable ideas of national security. Discussions on these regimes have been provided by scholars such as Diamond (1988&1995). With reference to the situation of national security in most African nations, Luckham (1998a, p.13) holds that national security is ideologically constructed through the play of identities and differences within the state (internal security) as well as in relation to external threats.

To this effect, most security organizations construct their own cognitive state ethnic security maps identifying which groups can be trusted and which are marginal to the state and its ruling circles. In Nigeria, the military which appeared most constitutionally and professionally suited to fulfill the task of providing security, has played a particularly negative role in the maintenance of national security as a careful study of their contributions to the history of Nigeria has demonstrated. This is what makes Ujomu (2000a, p.39), to argue that Nigeria's quest for national security cannot be guaranteed by a large body of security forces, since much of the insecurity, conflicts and crisis that happened in the country from 1960 to 2000, were due to the actions and omissions of these same security forces.

Moreover, Hutchful (1998, p.601) maintains that the fracturing of the military along ethnic, rank, ideological and generational lines has compromised the objectives of operational efficiency, institutional solidarity and stability of the military as an institution. Worse still, this situation has compounded the problem of national security in Nigeria, by allowing a pervasive trend towards misrepresenting the concept of security, and thereby, giving it a restricted meaning. It is this situation that gives rise to what Amuwo (2000, p.2) refers to as the military's overriding concern for regime and personal security. This situation has led to the inefficient functioning of the military and has entrenched its use or deployment for certain unethical and unconstitutional purposes such as coup d'etat, extra-judicial killings, human rights abuses, oppression and the extortion and harassment of the citizens.

Over the years, according to Egwu (2000, p.4), the security of the Nigerian nation-state was reduced to the personal security of the ruler and that of his immediate supporters. Thus, the country's rulers failed in their attempts to maintain security within the Nigerian society due to their ill conceived notions of security. The security calculus of the Nigerian state failed because it did not include vital aspects of social and national development such as the provision of basic social amenities. Thus, the Nigerian state could not meet the social, economic, as well as even the military conditions of national security. Let us cite a few examples to buttress our point on the failure of the state and security organs to maintain national security in the country.

According to the CDHR 1999 Annual Report on the human rights situation in Nigeria,

the inefficiency of the police force and its abysmal failure to maintain law and order and provide security for the citizens continues to create a vacuum that is being filled by auxiliary ethnic militia, vigilant groups and militant civil society vanguards (CDHR, Annual Report 2000: x). Luckham (1998b, pp.589-592), attributes the failure of the military to ensure national security to their acts of social banditry, political involvements, corruption, ethnic manipulation and professional and political indoctrination.

Moreover, incontrovertible and frightening evidence for the collapse of national security in Nigeria has been the inability of the nation's security forces and even the members of the national government to protect themselves and the citizens from the scourge of armed robbers, criminals, hoodlums, kidnappers, the ethnic militia groups, assassins, etc. between January and December 2000, several top government officials in the country were involved in serious road accidents occasioned by attacks from criminals and other sundry reasons. In the previous years, there have been confirmed cases of the convoys of government officials coming under gun fire from snipers, robbers or assassins.

To put it more directly, such a situation demonstrated that not only was the task of national security misconstrued and misdirected to imply the exclusive quest for regime security or the personal security of the rulers and their cronies, but even the attempt to maintain the personal security of the rulers, ironically, could not be realized in the light of the havoc being continuously wreaked on all and sundry in the society, by armed robbers, assassins and kidnappers, ethnic militia groups as well as, the invading rebel forces from neighboring countries.

These problems are a clear indication that the erstwhile national governments have failed to consistently and committedly maintain the core social values and physical infrastructures necessary for establishing and sustaining national security, national survival and sociopolitical well-being. Some of the values needed by the society in order to maintain the national security of the nation have been discussed in detail earlier. However, some examples of the infrastructures that have remained in a chronic or permanent state of disrepair, low performance and even stagnation, and thus constitute a severe threat to the national security of the country, include the country's airports, sea ports, oil refineries, strategic inter-state highways, rail ways, bridges, etc. Most of these infra structures have not been performing to their optimum capacity.

Hence, central to the crisis of national security in Nigeria, is the conflict between the groups seeking to establish for themselves personal security or regime security as opposed to those groups demanding the establishment of genuine national security for all individuals and groups in the country. This crisis of national security in the nation can be seen in the political and economic difficulties arising from both the struggle for state power among the national elite, as well as in the distribution of, and the management of the society's wealth and resources. It has been noted that the problem of national security in Nigeria has been aggravated by the situation of intolerance existing among the various ethno-cultural and religious groups in the country. This situation has led to the engendering of mistrust and divisive tendencies in the society. Consequently, there has been an

increase in communal and inter-tribal clashes and violence.

More recently, ethnic militia have been coopted and employed in the prosecution of these religious and ethnic clashes, thereby, threatening the fragile peace and stability in the country (Ogunmodede, 2000, p.7). Even in the year 2001, the picture of national decay and insecurity aptly painted by the officials of the Nigerian Bar Association (NBA) in December 2000, remains in existence. The economy is in a worse shape, air, sea and especially land transportation difficulties persist, very few states if any, have viable hospitals, health services and pipeborne water. There is a frightening level of insecurity of lives and properties in the country (see Okocha quoted in Nwankpa 2000, p.5).

In what is clearly a recent and further confirmation of the fact that the country's national security has been undermined, the landing lights, beacons and strobes at the International airport in the Federal Capital Abuja, went off just as the plane carrying the nation's president was about to land. In a similar vein, some key members of Nigeria's banking industry have condemned the poor state of security in the country which will definitely prevent foreign investors from coming to the country (Fagbemi 2000, p.25). We shall now examine the role of politics in the engendering of social conflicts in Nigeria.

## **8. Conflict, Politics and Instability in Nigeria: The Emergence of A Predatory State**

It is quite correct to say that without political action no form of social or economic change is possible. Indeed, without political action it is impossible to reshape social institutions and achieve social transformation in the society. According to Blondel (1966, p.123), political action cannot exist if there is no conflict. Hence, politics implies disagreement because it is about ways of resolving it. Therefore these two conditions, namely, that a conflict should exist and that it must be solved, are the only real conditions for the existence of political activities. Although one can appreciate the positive analysis of conflicts rendered by Blondel, however, it must be stated that the reality of politics in Nigeria and most other African nations is not so positive or academic in outlook. According to Sesay (1998, p.45), political conflicts in Africa are linked to the existence of dictatorial and authoritarian regimes.

Usually, in such situations of dictatorship or autocratic rule, power is concentrated in the hands of a few privileged minority in the society, while the majority are effectively disenfranchised. Worse still, African leaders tend to hold on to political power, even when they are no longer in a position to contribute meaningfully to national development, reconciliation and nation building. The roles of the political leadership and state institutions in Nigeria have compelled scholars to describe them as features of a typical predatory state. Castells (1998, pp.96-102), holds that much of the economies and societies of Africa have been destroyed by the misuse of capital which has characterized the predatory state or 'vampire state' which is essentially, a state entirely patrimonialized by political elites for their own personal profit. Such elites tend to be mercenaries, as their hold on positions of privilege and power is at the mercy of the capricious decisions of an ultimate leader.

The predatory state is characterized by both prebendalism and predation understood as political patronage, systematic government corruption, concentration of power at the top and the personalization of networks for the delegation of this power. These tendencies are prevalent in Nigerian politics. The political class in sub-Saharan Africa which typically engages in patronage and prebendalism is characterized by what Hawthorn (1993, p.336) refers to as the lack of a political base outside the state, and a precarious position within the state. They have not been politically or economically secure enough to allow competition. They have deployed their positions within what remains the directive and authoritative frames of postcolonial states.

The African state has attained this unenvied status through the age long process of the institutionalization of a decadent political culture which has led to the emergence of some of the most tyrannical and destructive patterns of political rule in the 20th century. The cases of Abacha in Nigeria, Mobutu in Zaire, Idi Amin in Uganda, Bokassa in Central African Republic, Doe in Liberia, Barre in Somalia, are illustrative here. Such decadent political regimes whether civilian or military, have laid emphasis on what Diamond (1988, pp.12-14) refers to as the abuse of power and failure to play by the rules of the political game. This trend essentially centered on the endorsement of anti-democratic values, political violence, intolerance and extremism in politics.

Such trends were able to gain ascendancy owing to the presence of both largely illiterate, apathetic and uneducated populations, as well as indigenous cultural traditions which tended to underwrite authoritarianism. One of the most destructive legacies of the numerous predatorial political systems in Africa, has been an unprecedented rate of political corruption and the consequent collapse of many African economies, Nigeria inclusive. Political corruption in Nigeria, which is the next subject for examination, has distinguished itself as a cardinal factor in the creation and sustenance of social conflicts in the country.

## **9. Political Corruption, Narcissism and National Decay: The Nigerian Experience**

Political corruption involving rulers and public officials is one of the most serious problems confronting Nigeria and most other African nations today. According to Gyekye (1997, p.193), political corruption is the illegal, unethical and unauthorized exploitation of one's political or official position for personal gain or advantage. Such activities classified under corruption will include bribery, graft, nepotism, misappropriation of public funds, etc. Goldstein (1999, p.573) holds quite emphatically that corruption has an important negative role to play in the economic development of many states and it centers on the government as the central actor in economic development.

Furthermore, Dommen (1997, p.491), argues that the height of corruption is seen in that paradigm of governance referred to as Kleptocracy, which essentially demands that whoever has the power to appropriate resources does so and keeps most, if not all, thus ensuring that the number of beneficiaries are small if at all they exist. This has been the trend of most governments in Nigeria since independence. Some of the most corrupt

governments in the history of the country's existence include, the Shagari, Babangida and Abacha regimes. Under these above mentioned regimes, corruption was institutionalized as a way of life in the nation. Iyayi (2001, p.122) says that corruption has become the means for the primitive accumulation of capital in Nigeria and the adoption of corruption has led to the accentuation of those seeking positions of state power. Essentially the control over state power grants people access to the private expropriation of large amounts of national resources. These resources would have otherwise been used to make the lives of the citizens more meaningful. Worse still, corrupt tendencies ensured that there was a collapse of the major public institutions such as education, agriculture, health and social services.

According to Oyeshile (2000, pp.54-55), corruption which has almost become a way of life in Nigeria, is the bane of development and a major cause of social conflicts. In more concrete terms, corruption has negative effects on the society and some scholars have outlined such effects. For instance, Fatton (1992, p.60) maintains that corruption erodes public trust, allows incompetence, and generally violates rules and laws of the society in which it is prevalent. Also, Hogendorn (1996, pp.64-65) states that corruption makes daily life and business transactions more cumbersome, because public servants may slow down or obstruct business in hope of a fee. Corruption delays all forms of economic intercourse, thereby boosting costs and diverting energies to the concealment of private gain. This is why Goldstein (1999, p.574) refers to corruption as a kind of privatization of politics, because it concerns the distribution of benefits from economic transactions.

One of the highest levels of the inclination towards corruption in Nigeria which has been documented, is cited in Hogendorn (1996, p.65) who states that in Nigeria a majority of new university graduates applying for federal civil service positions want to join the custom and excise department where bribes are fattest. Furthermore, corruption pervades every realm of life in the society. Oyeshile (2000, p.55) insists that corruption manifests in both the public and private realms of life in the country. The federal government, government agencies, parastatals, the police force, the universities, the companies, the home and even the churches and mosques are not exempt. Statistically, it has been estimated that over the decades at least the sum of \$98. 8 billion dollars has been illegally stolen and hidden away in foreign banks by various Nigerian rulers, their families and acolytes (Aluko 2000, p.13)

A few examples of corruption within the Nigerian society will suffice here. For instance, during the civilian regime of Shagari (1979-1983), there was general disillusionment among the populace who were confronted by acts of wanton political violence, intolerance and above all, the unending cases of corruption in the government. Diamond (1995, pp.437-438) holds that in 1983 alone the members of the Shagari government mishandled \$2.5 billion dollars in import licenses among other acts of corruption and embezzlement. The devastating effects of corruption at all levels of government drained billions of dollars from the Nigeria economy. The situation was compounded by the precipitous decline in oil revenues, which eventually led to economic depression, recession and

indebtedness.

Also, during the Gulf Crisis of 1990-91, the military regime of general Babangida (1985-1993), could not account for the sum of at least \$12 billion dollars, being the proceeds of crude oil windfall arising from the invasion of Kuwait by Iraq. Moreover, within a period of five years (1993-1995) the regime of general Abacha, comprising the dictator, his friends and his family members stole and hid about \$5 billion dollars in Swiss, German, UK, and American banks (Aluko, 2000, p.13). Corruption was also prevalent during the transitional regime of general Abubakar between June 1998 to May 1999. Almost every one of the military administrators during that regime were indicted on various corruption charges (CDHR 1999 Annual Report, 2000, p.146). Therefore, Fatton (1992, p.59) is very correct when he argues that the opportunities for corruption and embezzlement created by access to state power has further created greater conditions of inequality in the society.

Worse still, corruption has ensured that the line between state and private property has nearly been obliterated. The endemic corruption of past governments and public officials ensured that the promise of future funding for national development which the revenue from crude oil production and sales promised, was abominably squandered. Consequently, adequate plans for infra structural development such as, the provision and maintenance of good road networks, schools, pipeborne water supply, electricity, etc, were neither carefully set out, nor achieved (Simpson, 1996, p.191). Hence, the fact that the revenues from oil have not been effectively used in the development of the other realms of socioeconomic life has ensured that there is poverty in the land. More so, the unequal distribution of wealth among the people and sectors in the society, have ensured that corruption is endemic in the country (Ingham, 1990, p.65).

In concrete terms, the availability of revenues from oil products did not have positive and enduring impacts on the lives of the generality of the Nigerian peoples. Rather, as Calvocoress (1997, p.614) observes, the rich merely got richer while the poor remained poor or eventually got poorer. Indeed, evidence of the unmitigated and relentless drive of corrupt practices within the Nigerian society, can still be seen in the skeletons of unfinished or badly functioning hospitals and schools, the treacherous craters in the almost permanently ungraded and poorly maintained roads, the abandoned bulldozers and the rusting pumps beside undrilled bore holes (Diamond, 1995, p.437). This trend towards the wastage of precious national resources has continued unabated.

Even today, in the year 2001, the roads remain bad and insecurity prevails within the nation. These are the after effects of the corruption of the past regimes and the ineptitude and poor performance of the incumbent. We shall now examine the effects of corruption and the attendant social conflicts on the nation at large.

## **10. The Nigerian Economy Undermined: Entrenching Pauperization and Underdevelopment in the Society**

The failure of the Nigerian economy has been linked to the negative political and

corrupt activities of the ruling civilian and political class whose acts of gross irresponsibility, incompetence and unjustifiable mismanagement of the nation's resources over the years have ensured that the majority of the people subsist at a point far below the survival line and also, that poverty is endemic in the country. According to the CDHR 1999 annual report (2000, p.138) corruption and mismanagement of the economy led to the paralysis of every sector of nation's life, for instance, social services, manufacturing, agriculture, etc. This situation has created the fertile grounds for conflicts to prevail within the country, owing to the fact that the needs, hopes and expectations of the bulk of the citizens for security, prosperity and well-being, have not been adequately met.

Adedeji (1999, p.21) holds that the Nigerian economy has retained all the characteristics of underdevelopment such as a narrow disarticulate production base, a monocultural production structure, a degraded environment, and the predominance of subsistence and commercial activities. Furthermore, economic and development indices such as GDP, poverty index, etc, reveal that the country has nothing much to write home about, in the economic realm of life. One reason why the Nigerian economy remains retarded is because, as Calvocoress (1997, pp.615-617) says, Nigeria's economic problems arose not from lack of resources but from its over-optimistic (careless and incompetent) use of a single source of wealth (crude oil) whose value or worth had depreciated for reasons mainly beyond the country's control.

Also, Kemp (1998, pp.176-180) emphasizes that the reason for the failure of the Nigerian economy to provide a solid base for Nigeria's industrial development lies in its character as a primary-producing economy, which is largely dependent upon exports to the world. To this effect, the economy represented a type of dependent colonial capitalism dominated by the extra territorial companies that trade in the nation's products. Indeed, Nigeria's economy collapsed due to the effects of decades of neglect, lawlessness, corruption and incompetence on the part of the nation's rulers. More recently, the Nigerian economy has been deeply and adversely affected by what Adeshina (2000, p.76) refers to as the Niger Delta variant of the general trend of national discontentment which has affected all the operations of the Oil industry both in the upstream and down stream sectors. The truth therefore is that a bulk of Nigerians are and remain, in a state of extreme poverty due to the poor performance of the nation's economy for the reasons given above.

According to Adebayo Adedeji (1999, p.22), the nation is now one of the 25 poorest countries on the surface of the earth. And almost 40% of its entire population are faced with serious deprivation, as seen in the lack of ability and resources to satisfy their basic needs of food, shelter, basic health care and sanitary facilities. It is thus very clear that the survival and well-being of a majority of the Nigerian peoples is threatened. It is quite clearly a matter of critical concern, that the citizens of such a prosperous country cannot move about on rehabilitated roads or enjoy a clean environment, except when the president of the country chooses to visit some particular areas.

This is not a surprising situation because as Simpson (1996, p.195) argues, Nigeria's attempt to establish itself as a broad-based industrially secure self-sustaining nation has

failed, even as the country continues to import cement, petroleum products, fertilizers, iron and steel, consumer goods, components for assembly industries, raw materials and even food. Also, agriculture remained organizationally and technically backward in the country. The nation may not be capable of guaranteeing food security for its teeming population. The next critical factor in the problem of social conflicts in Nigeria is the issue of ethnicity, especially in its negative manifestations.

### **11. Ethnic Conflicts and Elite Manipulation: The Political Economy of State Power and Resource Control**

According to Goldstein (1999, p.213) ethnic conflict is quite possibly the most important source of conflict now occurring throughout the world. Conflicts occur among ethnic groups construed as large groups of people sharing common religious, linguistic, ancestral and cultural features which constitute the basis of their identity, when there is disagreement over who controls government, resources or territory. According to Egwu (2000, p.4), the case of Nigeria illustrates quite vividly the collapse of the nation-state project. In Nigeria the state has failed to manage effectively and imaginatively, the co-existence of multiple ethnicities in view of peaceful and progressive ends. The ruling elites have continued to employ ethnic and regional affiliations and mobilization in the struggle for state power.

Thus central to the existence of political and economic conflict in Nigeria has been the perception of some ethnic groups or social interests but they have been deprived or denied of the benefits of power and national resources. Ultimately, the outcome of this has been the intensification of conflicts within, and between groups in the Nigerian society. In almost all of its history, politics in Nigeria has been defined according to regional parties aligned along ethnic dimensions. Diamond (1988, pp.38-42) holds that since independence, politics in Nigeria has always been defined along regional lines. Political competition has thus always been characterized by ethnic prejudice and vituperative rhetoric, violence and repression, all of which have indeed vitiated the democratic character of Nigerian politics. Hence intolerance, violence and insecurity have been regular features of many elections and political regimes in Nigeria and this scenario has contributed significantly to the engendering of social conflicts in the country.

Thus, central to the occurrence of political and economic conflicts in the Nigerians society is the problem arising from the counterproductive procedures by which the national elites have managed and distributed the limited national resources and wealth. According to Hawthorn (1993, p.336), public officials in positions of power have had to appropriate and distribute portions of the state resources. Given such situation, conflicts have arisen because of the improprieties involved in the distribution and redistribution of these resources. This has been mainly because of both the scarcity that pervades daily existence, and the nepotic and clientelistic activities of the state and its officials. This situation has ensured that a disproportionate share of national resources has been generated for the political and economic ruling classes. Thus the political and economic conflicts that have

beset the Nigeria nation have been anchored on the perception nurtured by certain interests and groups that they are being deprived of their share of the state's resources.

According to Diamond (1988, pp.10-11) the phenomenon of ethnic pluralism and cleavages and the structure of centralized ethnic systems are a hindrance to social cooperation and national cohesion. This situation provides a fertile ground for ethnic conflicts and thereby poses a challenge to political stability in the country. Furthermore, the volatile conflict situations engendered by ethnic complexities in Nigeria have been worsened by the manipulation of class politics, which has aggravated the situation of conflict, insecurity and disorder in the Nigerian polity. With specific reference to the role of the Nigerian elite in engendering conflict in society, Graf (1983, p.189) says that the Nigerian dominant classes have evolved from a fractious, ethnoculturally-centered and self seeking set of groupings, into a relatively cohesive, autonomous and self confident stratum capable of regulating its potentially internecine conflict while pursuing its collective interests against the interests of other social strata.

Furthermore, Graf (1983, p.195) argues that the process of elite formation in Nigeria was contingent on their capacity to meet the demands of their various ethno-political constituencies. This situation compels the elite, and subjects them to a cross pressure to divert or channel government resources to their ethnic and kinship groups. This situation arises because the elites need the support of these ethnic groups in order to remain in power. Such diversions and clientelism within the context of scarce national resources had to be accomplished at the expense of other elites' constituencies, thus, ensuring the permanence of conflicts over appropriation, resources and position within the country. The consequence of such ethnic conflicts and chauvinism have not only been the prevalence of violence and hatred among groups in the society, but, also that there are those who are still tied to the feudal social order, a social order that is antithetical to a democratic order (Nzimiro 1984, p.11).

There is also the historical dimension to the ethnic and national conflicts in Nigeria. This problem has its roots in the precolonial era of Nigeria's history. According to Calvocoress (1997, p.612), even though the British colonialists assumed the task of mastering or moderating the conflict between the Fulani, Hausa and other ethnic groups, as a prelude to unifying all the colonial territories, yet the Nigerian federation which they created was an uneasy amalgamation of cultures and groups lacking in national consciousness and unity. This absence of national consciousness and unity in Nigeria has ensured that from time to time, there have been attempts by some groups (military or civilian) to break up the country. For example, there was the case of the Nigerian civil war (1967-1970), and also, the collapse of national life during periods in 1993, 1994 and 1995 following the annulment of the June 12 Presidential elections.

The existence of various ethnic groups in the country has basically created a fertile ground for conflict. Worse still, the age-long mistrust and intolerance existing between most of these groups has ensured that unity has remained elusive within, and among the ethnic groups in Nigeria. For example in the south western Osun State of Nigeria, the

Yoruba speaking communities of Ife and Modakeke, who are neighbors, have been locked in a bitter and violent conflict over historical and legal claims to land ownership. In the south eastern region of Nigeria, the Ikun community of Cross River state were locked in conflict with their neighbors the Okon-Ohafia community of Abia state.

Also, in the northern Gombe state, the Udawa farming community was locked in a violent conflict with the Fulani cattle rearers. In the south-south region of Nigeria, militia groups from the Eleme and Okrika communities were locked in a violent conflict over ownership of the land on which the Port Harcourt refinery, a strategic national infrastructure, is sited. In another of the numerous instances of ethnic conflicts, the Ajegunle area of the south western Lagos state of Nigeria, was chosen as a projected arena of a communal war between the Ilaje and Ijaw communities. Both communities had on earlier occasions fought their wars on their home grounds in the waterside areas of the mid western region of Nigeria. Also, within the south western city of Shagamu in Nigeria, there was a very violent clash between the Hausa settlers and Yoruba land owners. This situation led to reprisal killings against the Yoruba peoples living in the northern city of Kano and its environs (CDHR 2000, pp.209-213).

And although Calvocoress (1997, p.613) expresses the feeling that various leaders have had the delicate task of holding the country together, yet, we must state clearly that the very problems that have caused these attempts to break up of the country have not been carefully addressed up till now. Even in the year 2000, some persons are still envisioning and working towards the break up of the country. For example, Ralph Uwazuruike (2000, p.13) the leader of the Movement for the Actualisation of the Sovereign State of Biafra (MASSOB) in Nigeria, holds that there is a need for a Sovereign National Conference (SNC) where the citizens and groups will discuss the dismemberment of the political entity called Nigeria.

According to Uwazuruike, Nigeria, given its present sociopolitical form or configuration, is not existing in the interest of any other group except the Northerners, especially the Hausa-Fulani hegemony. He therefore argues that if some groups are complaining about leaving the union called Nigeria, then this is a clear and incontrovertible indication or evidence that there is no harmony, peace and justice in the society. He says also that the resources of one region are used to develop other regions to the total exclusion of the very region that produces the resources. Hence, there is no fairness or equity in such a situation. Given this situation, the central focus of the MASSOB project is to demand and pursue the realization of Igbo sovereignty from the Nigerian Republic (Asoya 2000, p.46).

Therefore, it appears that central to the endemic conflicts plaguing the Nigerian society are the numerous differences between the groups inhabiting the country, and most importantly, the numerous injustices brought about by this situation. To this effect Kemp (1998, p.179) holds that the differences in physical features and resources, ethnic compositions, historically constituted patterns of cultural life, within the country called Nigeria, has ensured that regional differences persist and continue to widen. And although Simpson (1996, p.191), has argued that some African rulers have exhibited an acute

awareness of the need both for national unity, and the regional and tribal expression of identity and participation.

However, we may observe that the vital question that arises now is, despite such awareness of the need for national reconciliation, what has been the roles of Nigeria's rulers and elites in the establishment and sustenance of enduring national cohesion and unity among the diverse ethnocultural-cultural groups in the country? It seems that the Nigerian rulers have so far been unable to reconcile the different ethnic groups. Instead they have aggravated the conflicts between these ethnic groups. One important way by which these rulers have engendered conflicts in the society, is in the undermining of the values of genuine national and ethical education.

Seton-Watson (1977, p.348) holds that Nigeria was an artificial creation of British colonial rule. This large country contained many people, languages and religions. There were three main languages. In the North, Hausa was widely spoken, Yoruba was spoken in the south-west, Igbo was spoken in the east. The West and the East both had a much higher level of education and modern skills than the North, and both were largely Christian, while the North was mostly Muslim. This situation was to provide a fertile ground for the endemic conflicts that would plague post independence Nigeria. The cultural and religious factors that have given rise to the differences in educational status, values and attainment among the various ethnic groups in Nigeria has been emphasized by Helen Kitchin (1962, pp.364-365) who informs us that education has progressed much more rapidly in the South than in the Moslem North mainly because the missions which were the pioneer schools in Nigeria, were restricted to the pagan sectors of the country. For many years the only children who received any education in the North were those who attended the koranic schools.

Indeed, this generally lop-sided situation of education among the Nigerian ethnic groups has not really changed significantly since the nation's independence. Rather it has worsened due to the perversion, over politicization and under funding of the Nigerian educational system prevailing over the years, with the northern parts of the country being the worse off for this. It must be stated here that a bulk of those who have occupied significant positions from which they could have effectively and positively influenced the education policies of the country (but did otherwise), were themselves from the northern ethnic groups which were the most backward in the issue of education. The failures of the educational system in Nigeria has been clearly seen in the large hordes of uneducated social miscreants either known as 'Area Boys' in the south western Nigeria and the 'Almajiris' in the Northern Nigeria. These delinquent and destitute youths are easily induced, co-opted and employed to foment anarchy and chaos in the society. Such youth play particularly destructive roles during political, religious or tribal conflicts in the Nigerian society.

More recently, the hordes of frustrated, unemployed, deprived and alienated youth inhabiting the Niger-Delta region of Nigeria have become the nucleus of a recent and so-

cially threatening phenomenon known as the ethnic militia. These militia groups are armed with sophisticated machine guns and dangerous charms. They employ violence in getting the attention of society, in pressing home their demands for justice, autonomy and better social opportunities as well as in settling scores with their opponents (these could be federal troops or other ethnic communities or even other militia groups).

Thus, we see that the existence of differences in education, languages, culture and religion among the ethnic groups have been at the center of social conflicts in Nigeria. These differences eventually became the ingredients for a deep protracted and life-threatening spate of conflicts which have severally led to a civil war and the emergence of a chain of despotic, oppressive and nepotic military dictators who capitalized on such differences to institute a reign of terror, injustice and oppression on the citizens of the country. The preoccupation of these military rulers has been the entrenchment of an insecure social atmosphere through the abuse of peoples human rights, killing and exiling of citizens and widespread mismanagement of the diverse human and material resources of the country.

Such experiences were to become the key factors instrumental to the entrenchment of social conflicts, and thus, social disorder and national insecurity in the Nigerian society. Hence, central to the social conflicts in Nigeria was the situation of injustice and oppression arising from the unbridled quest and struggle for the control of the limited political and economic resources of the Nigerian nation, among the different competing ethnic and elite interests. It is in the light of this, that this writer has on occasion recommended that only the ethical and technical education and development of Nigeria's human resources can provide the way out of the serious problems of insecurity, tyranny and conflict bedeviling the country over the ages (Ujomu, 1999, p.3 & 2000, p.38). It is clear therefore that the problem of ethnicity has had a great impact on the unity, security and progress of the Nigerian nation and we shall now examine a particular variant of the problem of the marginalization of some ethnic groups, namely, the peoples of the Niger Delta region.

## **12. Conflicts in Nigeria's Niger-Delta:**

### **A Regional Metaphor of the Crisis of Social Order and the Erosion of Social Justice**

Social conflicts in Nigeria have recently assumed a much more dangerous form. The current problems arising from the crisis between the Federal government, oil companies and indigenous communities of the Niger-Delta region of Nigeria is instructive. Egwu (2000, p.1) has rightly noted that in a very significant sense, the Niger Delta has become a metaphor for the Nigerian state. For him, this crisis vividly illustrates the inability of the Nigerian state to properly manage crucial ethnic and nationality questions and to meet the challenges of development and nation-building. According to Awolalu (2000, p.8) the problems of environmental degradation, pauperization of the people and resource control remain at the core of the issues confronting the Niger Delta.

To express it more clearly, what is central to the conflicts in the Niger-Delta is that

situation in which the indigenous communities of the oil producing areas confront the government and the oil exploration/services companies. The indigenous communities maintain that after several decades of crude oil exploration and exploitation, and the consequent devastation of their lands, farmlands, fishing areas, etc, they have not felt the positive impact of the benefits of the extensive oil exploration project being executed on their land. They anchor their agitations on the lack of social infrastructures, employment and other conditions necessary for a life of well being and opportunities for their people (Ofiebor 1999, pp.20-21).

Central to the situation of conflict in the Niger-Delta is the fact that the minority groups inhabiting this region have been subjected to untold pain and suffering and have become marginalized from power and voiceless in the determination of those critical issues affecting them (CDHR publication Boiling Point 2000: ii). The demand of the different ethnic groups and communities in the Niger Delta region are essentially for those socio-political conditions which will guarantee them better living conditions, equitable revenue derivation formula and the provision of facilities, that will make their lives more meaningful (Onwuemeodo 2000, p.3). Furthermore, given the fact that the conflict situation arising from the Niger-Delta crisis has not been properly tackled, the conflict has degenerated to a stage in which ethnic militia groups have regularly engaged federal troops in armed combat. The case of the destruction of Odi town in Bayelsa state of Nigeria is illustrative. A reasonably accurate account of this incident has been analyzed by some individuals such as Nwajah (1999, pp.15-22).

In order to arouse the attention of key national and international interests or players in their current situation, the ethnic militia groups operating in the Niger-Delta have engaged in the continual destruction of oil pipelines and installations, killing and abducting of oil workers and security personnel. They also take hostages, hijack vehicles, helicopters and ships (Onwuemeodo 2000, p.3). From the above, one can see the point of Caroline Ifeka (2000, p.116) who argues that youth (constituted into militia groups) in the oil producing areas increasingly rely on violence to pursue their demands and goals. She insists that this may in fact be an outcome or reflection of the repressive, anti-democratic practices of erstwhile military regimes.

Given the character and dimensions of the crisis in the Niger Delta we may agree with Awolalu that peace, which should be a central focus of any attempt to maintain the stability of the region, and the national security of the country, must be based on justice and equity. The various concerned actors will need to be involved in this quest for peace. It is therefore against this backdrop, that this work emphasizes the importance of the issues of resource distribution and social justice, in the search for a more humane, secure and civil existence for those in the society. We seek to find out the roles that human beings and social institutions play in engendering or promoting conflicts in society, and above all, how to deal with these conflicts.

One of the most effective ways to tackle this problem is to attempt a careful analysis of the idea of conflicts. This discussion is inevitable, in view of the need to fight for the

freedom of Nigeria so that generations born and unborn would inherit a nation free from exploitation of many by the few; a nation committed to a common destiny (Nzimiro 1984: 9). According to Anyaoku (2000, p.32) all these trends discussed indicate that there is a need to recognize and face the challenge of managing the country's plural character, if the desire for a strong, stable and united nation is to be achieved. It is a strong contention of this work that the clarification of the conditions and advantages of social justice can go a long way to ameliorate the problem of social conflicts in Nigeria.

### **13. Redefining Social Conflicts and Envisioning the Conditions of Social Transformation**

Against the background of the above analysis of the Nigerian situation, there is a need to re-examine the nature of social conflicts. Most scholars have emphasized the regularity and perhaps inevitability of conflicts among individuals and groups in the society. For instance, Northedge (1976, pp.299-300) and Nzimiro (1984, p.18) hold that conflict is an endemic feature of human history and that it is built into all systems of human relations. More over, not only does conflict lead to violence and wars but it also prevents the efficient functioning of a social system. It ensures that resources are diverted to nonproductive uses and that there is a waste of human abilities and energies. The end result of conflict is the eventual decimation of the society. Although, conflict is built into every human system, yet there exist different types of conflicts and a particular type of conflict that exists in one society, may not exist in another.

Miliband (1977, p.18) discusses some major types of conflict from a Marxist point of view. He says that Marxism recognizes other kinds of conflict within societies. For instance, there are ethnic, religious, national conflicts which according to Marxism derive from class conflicts. However, Goldstein (1999, p.198) argues that we can have ethnic, religious and ideological conflicts but he does not tell us that these conflicts derive from class antagonisms. One can argue that it may not be the case that every conflict derives from class antagonisms. In Nigeria for instance, the current character of political and social conflicts have mainly been associated with ethnic and elite based conflicts over the generation and distribution of the economy as the mainstay of national wealth and resources. This conflict arising from the distribution of national wealth has transcended the much touted and dichotomised struggles between the rulers and ruled, the oppressors and the oppressed, as posited by certain scholars.

Our point is supported by Spiegelberg (1974, p.208) who argues that those who affirm the necessity of class struggle as the basic reality of our society, and therefore make a distinction between the exploited and the exploiters have not really given us a choice. Such a rigid or dogmatic historical materialist categorization suggests that the history of conflicts moves along unalterable lines and that the dimensions and forms of conflict cannot change. Any view that suggests rigidity ought to be rejected, as restrictive. And with regard to the objective of this work, which is the clarification and redefinition of conflicts, the belief that

social conflicts are rigidly configured will not be acceptable.

For example, there exists a situation in which conflict within the ruling class in Nigeria has assumed a life-threatening dimension. A good example of this can be seen in the spate of inter elite conflicts which occurred during the Abacha regime of 1993-1998 and which eventually led to the killing, imprisonment and exiling of many ethnic, political and military leaders and officials. Also, we notice the existence of conflicts among the various oppressed groups which were presumably united against the institutionalized deprivation, oppression, and marginalisation perpetrated by the Nigerian state and the ruling elite. More specifically, in the Niger-Delta area of Nigeria, where we have had the most intense expression of conflict in the recent years, there seems to be no consensus among the oppressed ethnic minorities as to the exact method which will be employed in confronting an oppressive state, and perhaps, in sharing the dividends of a successful struggle.

Furthermore, while some groups believe in the employment of discussion as a means to conflict resolution and the pressing home of their demands, others believe that terrorism and violence against their oppressors, is the most suitable means of addressing injustices perceived to have been done against them. Some others even believe that receiving temporary relief packages and palliatives, in the form of cash gifts, community projects, etc, from the Oil companies or national government, is the solution to the conflict. It must be noted that whatever the form conflict assumes, and whatever the solution we propose for it, they are essentially social in nature. Such conflicts possess what Raphael (1979, p.171) refers to as a social reference. This means, that such conflicts focus on the relationships between individuals and groups of persons in the context of some form of organized human social existence. It is this type of conflict that this work focuses upon.

It should be emphasized that conflicts, whatever form they assume, are a clear sign that all is not well within the society. Miliband (1977, p.17) and Carroll (1990, p.650) hold that conflict, a threat of conflict or a suggestion of conflict is a bad sign of problems. Conflicts can lead to problematic situations because they can generate or lead to violence, disharmony, war and crisis. Thus for Aseka (1996, p.21), crisis constitutes a relatively intense and politically contested moment of fundamental decision-making. The crisis created by conflicts can lead to hostilities, which according to Northedge (1976, p.306), often arise either out of the mutual dislikes of individuals, or out of the state of relations between these individuals.

Social conflicts arise out of clashes of interests or problems arising from the incompatibility of interests. (See F. S Northedge 1976, p.229, R. Appelbaum et al 1995, p.166, E. Gellner 1974, p.169, B. Wisner 1988, p.49, P. French 1995, p.137, S. Hall et al 1992, p.157, J. M. Elegido 1996, p.316, J. Goldstein 1999, p.208). According to Goldstein (1999, p.198), conflict essentially derives from the quest for power and status as the basis of rivalries within and among states. Conflicts usually derive from clashes either over material interests or ideas. Blondel (1966, p.124) holds that conflicts may be about personalities or ideas or both. Sesay (1998, p.43) holds that conflicts arise when there are disagreements and disputes over interests and goals. Goldstein (1999, p.198), holds that conflicts can

occur over territories, control of governments, economic and natural resources. Other sources of conflict can include human initiated disruptions such as man-made and natural disasters, etc. (Guest, 1995, p.163).

With special reference to West Africa of which Nigeria is a major geopolitical factor, Adu-Amankwah (2000, p.8) contends that conflicts tend to surface along ethnic and religious lines. Beyond that, social inequalities and injustices arising from unequal distribution of natural resources, marginalisation of minority groups, as well as the existence of undemocratic regimes are some of the underlying causes of conflict in the sub-region. Appelbaum et al, insist that conflicts arise basically because, different groups in the society, for instance, the ruling groups and other segments of society, have divergent and conflicting interests. In the case of Nigeria, the conflict between the ruling groups (whether these are military rulers or politicians) and other interest groups, have always centered around the question of resource management and distribution. While the nation's rulers have most often exhibited greed, lack of foresight and planning in the appropriation and management of national resources, some other members of the society have insisted on greater equity, prudence, fairness and justice in the management and distribution of social goods.

Ernest Gellner argues that even the mere presence of social differentiation can lead to conflict in the society. Gellner's point is clearly supported by Northedge (1976, pp.300-301) who identifies at least three fairly self-evident factors in social relations which are sufficient to account for conflict. According to him, the different values or moral preferences of human groups can give rise to conflict. Secondly, certain inherited cultural values and practices can give rise to conflicts. Thirdly, human conflict can occur because individuals and groups have different goals, intentions, wants plans, desires and fears. The three factors outline by Northedge are crucial to the proper understanding of conflict.

According to Peter French (1995, p.137), social conflicts construed as conflict of interests arise due to clashes between personal interests. However, Elegido (1996, p.316) suggests that conflicts of interest can occur due to the conflicts or tension between personal interests and official responsibility. In the case of Nigeria, conflicts among elites, as well as between elites and the other segments of society have been particularly vicious when personal interests have tended to overshadow the common interest and the dictates of official responsibility. This situation has always led to strife, which is seen in the prevalence of violence.

In his examination of violence in the colonial and postcolonial African setting, Fanon (1967, pp.73-74) an avowed advocate of revolutionary action, holds that for the colonized people, violence invests their characters with positive and creative qualities. During the colonial period the people were called upon to fight against oppression. Whereas, after national liberation they are called upon to fight against under-development, and by proxy, its various agents. Most especially, one realizes that the people are required to fight against those oppressors who seek to keep them in a state of perpetual deprivation and subjection. Thus, Fanon holds that the people realize that life is an unending struggle or

contest. In concrete terms this struggle is what Ochoche (1998, p.121), calls a struggle by the African people against dictatorship, social injustice, underdevelopment and an exploitative and undemocratic ruling group. Fanon's emphasis on struggle or conflict is further clarified and supported by Adele Jinadu (1980, p.78) who says that conflict in Fanon's view necessitates struggle. In this sense, the oppressed person must struggle by his own efforts to wrestle his freedom from the oppressor in whatever guise he may appear; the oppressed must work very hard in order to attain his redemption, emancipation and freedom from the oppressor.

Miliband (1977, pp.17-19) also expresses a view similar to that held by Fanon and Jinadu. For Miliband, conflict embodies a state of domination and subjection arising from the determination of the dominant classes or groups to extract as much work as possible from the subject classes or groups. In a much more recent work, Callinicos (1999, pp.175-295) contends that the modern state is necessarily based on domination and coercion. In a society, there are the dominated classes and the dominant classes. Human beings are fated to be prisoners of the structures of domination. Although, such a portrayal of the modern society could be seen as concise and real, yet, Wisner (1988, p.49) expresses a wish that is often upheld by people, which is that conflicts should not be violent. However, it is unfortunate that a pessimistic view seems more probable, and this is that conflicts will more often than not be violent.

This is because in a conflict situation there exists a competition for power, resources or prestige among contending interests, values and needs. According to French (1995, p.113) competition often gives rise to conflict because, it is undeniably alienating and it often produces dissociative behavior which estranges a person (or group) from others. According to Hall et al (1992, p.329), conflict is seen in the tension arising between two or more contending approaches. However, the important point that arises from the above is that given that individuals in a society are faced with conflict situations leading to tension and contention then there is a need for a more systematic approach to the resolution of conflict. Thus, we must agree with Aseka (1996, p.21) who holds that in the bid to cope with crisis, the political system has to adopt more drastic crisis oriented measures. However, as we shall see not every strategy for resolving conflicts needs to be drastic. It is enough that the approach be systematic and sustainable.

The proper understanding of conflict and the various ways of ameliorating it, necessitates the realization that conflict embodies very significantly, the struggle for human dignity and justice. The struggle for human dignity and justice always requires the adoption of different patterns of self-preservation. According to Hall (1992, p.323) conflict necessitates the evolution of different strategies of physical and moral survival. Those conflicts borne out of a struggle for human dignity represent a resistance to certain injustices deriving from factors such as social inequalities (Appelbaum 1995, p.358), ethnic consciousness (Luard 1968, p.9), differences in culture and ethnicity (Wisner 1988, p.50) and exclusion in society (Dommen 1997, p.486). Thus, the quest for human dignity and more often the conflict arising thereof, requires that individuals and groups must con-

sciously and consistently resist and confront those obstacles, be they human or institutional, which seek to gain undue advantage over them, thereby by making them poor, vulnerable, and marginalised. It is thus clear that the quest for human dignity represents a demand for justice and a confirmation of man's desire for a more humane and stable form of social existence.

According to Bertsch et al (1991, p.18) human dignity refers to the idea that each human being is considered as an end in himself or herself and does not merely constitute an instrument to enhance the values of some higher entity; a state, a party, or a dictator. Bertsch et al (1991, pp.16-17) insist that certain issues are crucial to the attainment of human dignity. Firstly, there is the issue of how governments can acquire enough power to become viable and to solve the problems that confront their people. Secondly, there is the issue of how to ensure that the government and individuals in the society communicate, work together and understand one another. This is because, without a strong sense of political community, a political system or society will face excessive conflict or turmoil.

Thirdly, there is the issue of how government can expand the economy and how the society can allow individuals greater opportunities to expand their incomes and improve their well-being. Fourthly, there is the issue of how individuals can attain enlightenment, either through formal education our other agents of socialization. Education is clearly an important means of overcoming economic deficiencies because it enhances human potential. Education also retains potentials for conflict resolution and the recognition of the need for justice. This, one must say is a very optimistic view of education if we go by the fact that education in Nigeria may not have removed the existing prejudices, hatred and ill-feelings which most ethnic and religious groups bear towards one another.

However, we may agree with Igbuzor (2000, p.8) that the issues of struggles for legitimate rights, reactions to oppression and injustice, dissatisfaction with deplorable conditions, marginalization, poverty and insensitivity of government remain at the center of social conflicts in Nigeria. This in our view justifies the inquiry concerning the conditions of social justice in the society. It is correct to say that even in the year 2001 and under the auspices of a civilian government, Nigeria has failed to meet the crucial challenges of good governance, rule of law, equity and fairness and rapid development in all areas of national life. It has been suggested that so far the Nigerian citizens have nothing to cheer about because the correct solutions to the various social conflicts have not been adopted (CDHR Newsletter 1999, p.1). The truth of the matter as Anyaoku (2000, p.32) rightly holds is that there is a need for a medium or process through which all major sections of the society can arrive at some consensus in order to reconcile their separate interests with their collective interests.

#### **14. The Conditions of Social Justice**

The clarification of the issues of human dignity and justice are vital for the resolution of social conflicts. This is because as Mitchell (1996, p.x-1) maintains, a conflict at any

level in society usually involves a struggle for justice. Conflict implies that peaceable coexistence and the principles of justice are not being effectively applied, if they actually exist in the society. According to Nielsen (1996, p.81) the question of justice is the question of what is a proper social order which can guarantee human flourishing. Indeed, a just social order cannot allow a society of slaves where for some people, resources external to them are properly subject entirely to communal control, such that they, having no control or very little control of the means of life have their autonomy undermined. Given the above situation, Pojman (1997, pp.549-558), is right when he insists that justice is a constant and perpetual will to give every man his due. And a society that has a commitment to rewarding those who contribute to its well being and punishing those who purposefully undermine it will survive and prosper better than a society that lacks these practices.

For Hospers (1976, p.616) a just society needs to define and recognize individual rights and to embed these rights in the constitutional structure, so that no would-be-tyrant can take them away. Thus, it is crucial to note that justice in its fuller conceptualization has a largely social character. To this effect, its true and proper manifestations are found only where the acts and the claims of several persons meet. More importantly, it should be noted that the specific function of justice is to establish between these claims, their due limits and harmonious proportions (Johann 1966, p.41). Hence, we can rightly say that justice refers to the respect that a person shows for the freedom of the other, the chance he offers the other to be what he is, and to develop his possibilities in this world (Peperzak 1971, p.354). And in a sophisticated phrasing of the essence of justice, David Ingram in his work "The subject of Justice in Post Modern Discourse: Aesthetic Judgement and Political Rationality" argues that justice consists in 'permitting all persons to participate freely and equally in conversations aimed at reaching consensus on norms regulating their conduct'.

Against this backdrop, we can better appreciate the view of Pazhayampallil (1995, p.876) that justice is the fundamental principle of the existence and the coexistence of man as well as of human communities, societies and peoples. Also, Adaramola (1998, p.262) holds that justice arouses the need to reexamine our attitude toward the very existence and basis of the human person and his interpersonal relationships with others. Some scholars have offered important reasons to justify the need for justice in the society. For example, Haring (1979, p.470) holds that justice needs to be upheld in order to ensure that there is peace, order and stability in the society. The consistency and commitment with which a society seeks peace will determine the extent to which it will guarantee the survival well-being of the people.

Conflicts in society have profound consequences for the attainment of human well being survival and progress in society. Thus, there is an urgent need to investigate some of the central means of conflict resolution. Northedge (1976, p.304) holds that in order to resolve conflicts, we need to establish certain legal and political machinery; the courts, law enforcement agencies, political parties, national arbitration panels or commissions. The central aim of conflict resolution is to establish enduring peace and justice for those con-

cerned. Apart from some of the institutionalized means of resolving conflicts, some factors that are important for conflict resolution include values, endowments and abilities.

Other key factors necessary for the resolution of conflict include, trust, knowledge, skills, resources, etc., (Wisner 1988, p.232). It should be noted that the fundamental challenge posed by conflict resolution in an African society is the imperative of developing those processes, institutions, values and attitudes which can mediate socioeconomic interaction and political competition in a peaceful manner so that the society does not degenerate into anarchy, lawlessness and violence (Djacksam 1996, p.938). A similar point is made by Aseka (1996, p.21) who says that the way in which we manage conflicts will affect the stability and progress of society.

The core issues embedded in conflict resolution are aptly captured by a philosopher Glenn Morrow (1974, p.166) who argues that in construing conflict as dispute, we are affirming the need for a process of resolution. Conflict resolution can be based on certain authoritative traditional or moral principles accepted by all. Such a principle can be a long standing custom or a principle of law. Conflict resolution can also be based on formal or procedural approaches in which case, arbitration is achieved by a competent third party, an umpire or even a majority vote. Furthermore, conflict resolution can be based on principles of negotiation, reconciliation and consensus. To this effect, conflict can be resolved through the establishment of a compromise between disputing parties. It is our conviction that one of the most effective ways to achieve conflict resolution in the society is by establishing an effective system of social justice.

The establishment and sustenance of a system of social justice seems to be a more enduring approach to the resolution of conflicts. Scholars have emphasized the importance of social justice for the management of social conflicts. According to Kai Nielsen (1996, p.85), social justice deals with how social institutions are to be arranged, as well as, how just social institutions can be established. Nielsen argues that an understanding of the meaning of a just society facilitates the understanding of the interconnection between individual responsibilities and mutual expectations. Iris Young (1990, pp.15-16) maintains that the central concern of social justice is to eliminate institutionalized domination and oppression.

To this extent, the idea of social justice encapsulates every aspect of institutional rules and relations which are subject to potential collective decision. In the light of the prevalence of social conflicts, questions about social justice will continue to be relevant, in so far as there is domination and oppression in society. It is obvious therefore that social justice emphasizes the well being and welfare of every individual in society. Thus, it aims at the achievement of the good of the society at large, as well as the good of every individual in society. Social justice is therefore, a fundamental framework for the total development of the human person in his or her physical, social and spiritual life.

## References

- Adaramola, Funso. 1998. "On Justice" in J. O. Oguejiofor (ed). *Africa: Philosophy and Public Affairs*, Enugu: Delta Publishers.
- Adedeji, Adebayo. 1999. "Cleansing the Augean stables". *Africa Today* Volume 5 (May).
- Adeshina, Olutayo. 2000. "Oil, The Economy and the Nation". *RECALL: A chronicle of Nigerian events* (number 1 January).
- Adu-Amankwah, Stella. 2000. "Conflict in West Africa and women's efforts towards peace building". *GAP MATTERS* (no. 8 October-December).
- Aidokanya, Ben. 1999. "Interview with Danjuma Makama-the Secretary-General of the National Patriotic Movement" in *The News Magazine* (September).
- Aluko, Bolaji. 2000. "Our debt, Their Loot". *The NEWS* (June).
- Amuwo, Kunle. 2000. "The Discourse Of Political Elites on Higher Education in Nigeria" in Y. Lebeau et al (ed). *The Dilemma of Postcolonial Universities*, Ibadan IFRA: African Book Builders.
- Anyaoku, Emeka. 2000. "Keys to Nigeria's political stability". *NATIONAL INTEREST* volume 1, no. 32, 24 December.
- Appelbaum, Richard et al. 1995. *Sociology*. New York: Harper Collins.
- Aseka, Eric. 1996. "On Mamdani's State Power and Political Identity in Precolonial and Colonial Rwanda" in *CODESRIA Bulletin* no. 4, Dakar, Senegal.
- Asoya, Sylvester. 2000. "Panic Over Biafra" in *The News Magazine* (June).
- Awolalu, Tosin. 2000. "The Rape of the Niger Delta". *CDD News*, vol. 1, no. 1, July-September.
- Ayonote, Louisa et al. 2000. "Inside Ojukwu's Biafra". *TELL Magazine* no. 38, (September).
- Barry, Norman. 1981. *An Introduction to Modern Political Theory*. London: Macmillan Publishers.
- Beckett, Paul & Crawford, Young (eds). 1997. *Dilemmas of Democracy*. Rochester University of Rochester Press.
- Bertsch, Gary et al. 1991. *Comparing Political Systems: Power and Policy in Three Worlds*. New York: Macmillan.
- Blondel, Jean. 1966. "Government" in N. Mackenzie, (ed). *A Guide to the Social Sciences*. London Weidenfeld & Nicolson.
- Callinicos, Alex. 1999. *Social Theory: A Historical Introduction*. Cambridge: Polity Press.
- Calvocoress, Peter. 1997. *World Politics*. 7th edition. London: Longman group.
- Carroll, Raymonde. 1990. *Cultural Misunderstanding: The French-American Experience*. Translated by Carol Volk. Chicago: University of Chicago Press.
- Castells, Manuel. 1998. *The Information Age: Economy, Society and Culture Volume III End of Millennium*. Oxford Blackwell.
- Committee For The Defence Of Human Rights [CDHR]. 1999. *VICTIMS Newsletter* vol. 10, no. 33, June.
- \_\_\_\_\_. 2000. *Annual Report on the human rights situation in Nigeria 1999*. Lagos: CDHR publications.
- \_\_\_\_\_. 2000. *Boiling Point: The Crisis In The Oil Producing Communities In Nigeria*. Lagos: CDHR Publications.
- \_\_\_\_\_. 2000. *Ken Saro-Wiwa and the crisis of the Nigerian State*. Lagos: CDHR publication.
- Diamond, Larry. 1988. "Introduction: Roots of Failure, Seeds of Hope" in Diamond et al (ed). *Democracy in Developing countries: Africa*, volume 2. Colorado: Lynne Rienner.
- \_\_\_\_\_. 1988. "Nigeria: Pluralism, Statism and The Struggle for Democracy" in Diamond et al (ed). *Democracy in Developing countries: Africa*, volume 2. Boulder-Colorado: Lynne Rienner.
- \_\_\_\_\_. 1995. "Nigeria: The Uncivic Society and the Descent into Praetorianism" in Diamond et al (ed). *Politics in Developing Countries: Comparing Experiences with Democracy*, 2nd edition. Boulder: Lynne Rienner.
- \_\_\_\_\_. 1997. "Introduction: The Politics of Transition without End" in Diamond et al (ed). *Transition without End: Nigerian Politics and Civil Society Under Babangida*. London: Lynne Rienner.
- Djackson, Themon. 1996. "Conflicts in Africa". *WEST AFRICA*. No.4104, June.
- Dommen, Edward. 1997. "Paradigms of exclusion and governance". *The Journal of Modern African Studies*. Volume 35, no. 3.
- Editors, (2000) "Nigeria". *Africa Research Bulletin*. April.
- Egwu, Samuel. 2000. "The Origin, Nature and Politics of The Niger-Delta Crisis: The consequences of violence on the future of Youths". A paper presented at a *Workshop on the reorientation of Youths/Students for the Cause of Peace and Democratic Stability in the Niger-Delta*. Akwa-Ibom Uyo, May.

- Elegido, J M.1996. *Fundamentals of Business Ethics: A Developing Country Perspective*. Ibadan: Spectrum Books.
- Fagbemi, Abiodun. 2000. "Bankers want more attention to security". *THE GUARDIAN* Thursday 21, December.
- Fanon, Frantz. 1967. *The Wretched of the Earth*. New York: Penguin books.
- Fatton Robert Jr. 1992. *Predatory Rule State and Civil Society in Africa*. Boulder-Colorado: Lynne Rienner.
- French, Peter. 1995. *Corporate Ethics*. Florida: Harcourt and Brace.
- Gardner, Clinton. 1968. "Justice and Love" in M. Marty (ed). *Social Ethics: Issues in Ethics and Society*. New York: Harper Forum.
- Gellner, Ernest. 1974. *Contemporary Thought and Politics*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Guest, Anne. 1995. "Conflict and Cooperation in a context of change: A case study of the Senegal River Basin" in Macmillan et al (ed). *Boundaries in Question: New directions in international relations*. London: Pinter.
- Gyekye, Kwame. 1997. *Tradition and Modernity: Philosophical reflections on the African experience*. New York: Oxford University Press.
- Goldstein, Joshua. 1999. *International Relations*. New York: Longman.
- Graf, William. 1983. "African Elite Theories and the Nigerian Elite Consolidation: A Political Economy Analysis" in Y. Barongo (ed). *Political Science in Africa*. London: Zed Press.
- Hall, Stuart et al. 1992. *Modernity and its Futures*. Cambridge: Polity Press.
- Haring, Bernard. 1979. *Free and Faithful in Christ*, volume 2. Middlegreen: St. Paul Publications.
- Hawthorn, Geoffrey. 1993. "Sub-Saharan Africa" in D. Held (ed). *Prospects for Democracy*. Cambridge: Polity Press.
- Hogendorn, Jan. 1996. *Economic Development*. New York: Harper Collins.
- Honderich, Ted. 1995. *The Oxford Companion to Philosophy*. Oxford: Oxford University Press.
- Hospers, John. 1976. *An Introduction to Philosophical Analysis*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Hutchful, Ebene. 1998. "Military issues in the transition to democracy" in Bathily et al (ed). *The Military and Militarism in Africa*. Senegal: CODESRIA.
- Igbuzor, Otive. 2000. "Needs and assessment of youth training in Niger Delta". *CDD News Quarterly journal of the Center for Democracy and Development*. vol. 1, no. 2, December.
- Ifeka, Caroline. 2000. "Conflict, Complicity and Confusion: Unraveling Empowerment Struggles in Nigeria After the Return to Democracy" in *Review of African Political Economy*, no. 83.
- Ingham, Kenneth. 1990. "Nigeria: Federation by consensus" in *Politics in Modern Africa: The Uneven Tribal Dimension*. London: Routledge.
- Iyayi, Festus. 2001. "Human rights practices in tertiary institutions: Reality, prospects and obstacles" in *CDHR Nigeria's Tertiary Institutions and Human Rights*. Lagos: Committee for the Defence of Human Rights publication.
- Jinadu, Adele. 1980. *Fanon: In Search of The African Revolution*. Enugu: Fourth Dimension.
- Johann, Robert. 1966. "Love and Justice" in De George (ed). *Ethics and Society*. New York: Anchor.
- Kaufman, Walter. 1969. "The Origin of Justice". *The Review of Metaphysics*. vol xxiii, no. 2, December.
- Kemp, Tom. 1998. "Nigerian Industrialization: African Variant" in *Industrialization in the Non-Western World*, 2nd edition (England: Longman group).
- Kitchen, Helen. 1962. "Nigeria" in *The educated African: A Country by Country Survey of Educational Development in Africa*. New York: Frederick A. Praeger.
- Luard, Evan. 1968. *Conflict and Peace in the Modern International System*. Boston: Little, Brown and company.
- Luckham, Robin. 1998a. "The military, militarization and democratization in Africa: a survey of literature and issues" in Ebene Hutchful et al (ed). *The Military and Militarism in Africa*. Senegal: CODESRIA.
- . 1998b. "Taming the monster: democratization and demilitarization" in E. Hutchful et al (ed). *The Military and Militarism in Africa*. Senegal: CODESRIA.
- Merton, Robert. 1968. *Social Theory and Social Structure*. London: Collier Macmillan.
- Miliband, Ralph. 1977. *Marxism and Politics*. London: Oxford University Press.
- Mitchell, Christopher et al. 1996. *Handbook of conflict Resolution: The Analytical Problem Solving Approach*. London: Pinter Cassell.
- Montefiore, Alan. 1973. *Philosophy and Personal Relations* (ed). London: Routledge and Kegan Paul.
- Morrow, Glenn. 1974. "Reason and Commitment" in Bertocci (ed). *Mid-Twentieth Century American Philosophy: Personal Statements*. New York: Humanities Press.

- Muthoni, Nish. 2000. "What does GAP stand for?". *GAP MATTERS Gender and Policy Matters*. no 8, October-December.
- Nolutshungu, Sam. 1996. *Margins Of Insecurity: Minorities and International Security* (ed). New York University of Rochester press.
- Nielsen, Kai. 1996. "Conceptions of Justice" in M. Hawkesworth (ed). *Encyclopedia of Government and Politics*. volume 1. London: Routledge.
- Northedge, F. S. 1976. *The International Political System*. London: Faber & Faber.
- Nwajah, Osita. 1999. "Obasanjo Blunders: Odi The Story of a Massacre" in *The News Magazine* vol. 13 no. 23, December.
- Nwankpa, Emeka. 2000. "NBA deplores national decay, insecurity". *THE GUARDIAN* Thursday 21, December.
- Nzimiro, Ikenna. 1984. *Nigerian Civil War: A study in class conflict*. Enugu: Frontline publishers.
- Ochoche, Sunday. 1998. "The Military and National Security in Africa" in E. Hutchful (ed). *The Military and Militarism in Africa*. Senegal: CODESRIA.
- Ofiebor, Okafor. 1999. "Interview with Bello Orubebe-Coordinator of the Niger Delta Volunteer Force (NDVF)". *The News Magazine*, December.
- Ogunmnode, Bunmi. 2000. "Gowon, Anyim preach tolerance for national security" in *The Comet* vol. 2, no. 540, Friday 22. December.
- Oladipo, Olusegun. 1996. *Philosophy and The African Experience*. Ibadan: Hope.
- \_\_\_\_\_. 1998. "Modernisation and the Search for Community in Africa: Crisis and conditions of Change" in O. Oladipo (ed). *Remaking Africa: Challenges of the Twenty-First Century*. Ibadan: Hope.
- Onwuemeodo, Sam. 2000. "We'll not give up this fight-Niger Delta leaders". *Weekend Vanguard*, January.
- Oyeshile, Olatunji. 2000. "Corruption and underdevelopment in Nigeria". *RECALL: A chronicle of Nigerian events*. number 1, January.
- Pazhayampallil, Thomas. 1995. "Justice" in *Pastoral Guide*, volume 1. Bangalore: Kristu Jyoti Publishers.
- Peperzak, Adrian. 1971. "Freedom" in *International Philosophical Quarterly*, vol. xi, no. 3, September.
- Pojman, Louis. 1997. "Equality and Desert" in *Philosophy*. vol. 72, no. 282, October.
- Raphael, D. D. 1979. *Problems of Political Philosophy*. London: Macmillan.
- Sesay, Amadu. 1998. "Regional and sub-regional conflict management efforts" in Akinrinade et al (ed). *Africa in the post cold war international system*. London: Cassell Pinter.
- Simpson, E. S. 1996. *The Developing world*. 2nd edition. London: Longman.
- Spiegelbert, Herbert. 1974. "Ethics for fellows in the fate of existence" in Bertocci (ed). *Mid-Twentieth Century American Philosophy*. New York: Humanities press.
- Suberu, Rotimi. 1997. "Crisis and Collapse: June-November 1993" in L. Diamond et al (ed). *Transition Without End: Nigerian Politics and Civil Society under Babangida*. London: Lynne Rienner.
- Ujomu, Philip Ogo. 1999. "National Security in an African Nation-State: The significance of human resources development". *International conference of Philosophy and Development in the next millennium*. Ogun State University, Ago-Iwoye, Nigeria, August.
- \_\_\_\_\_. 2000a. "Ethics and National Security in Nigeria: Critical issues in the search for sustainable development". *THE VOICE millennial edition*, no. 39. SS Peter&Paul Seminary Ibadan, May.
- \_\_\_\_\_. 2000b. "National Security, Social Order and the consolidation of Democracy in Nigeria and the USA: New approaches to civilian participation in security". *7th Annual conference of the American studies association of Nigeria*. Benin-City, Nigeria, October.
- Watson, Hugh Seton. 1977. *Nations and States*. London: Methuen.
- Wisner, Ben. 1988. *Power and Need in Africa: Basic Human Needs and Development Policies*. London: Earthscan Publications.
- Young, Iris Marion. 1990. *Justice and The Politics of Difference*. New Jersey: Princeton University Press.

## クリア語動詞アクセント試論

湯川恭敏  
(熊本大学)

### A Tentative Tonal Analysis of Kuria Verbs

YUKAWA, Yasutoshi  
Kumamoto University

The Kuria language (*igikúriá*) is a Bantu language spoken in the southwestern part of Kenya. The present author's research on this language was conducted in Kenya in 2000.

The tonal figures of the verbs in this language are as shown below in the case of the infinitive, which has *oko-* as the prefix, when the object or reflexive prefix does not appear.

okohá 'to give', okobóha 'to bind', ogosóhíá 'to wear',  
okobéréka 'to bear on one's back', ugutírmíkíá 'to console',  
ukubígísínia 'to search', ukuíburúrúkéra 'to jump onto',  
ogokáraangá 'to fry', ogotégeeréra 'to listen to', ukurúúsíá 'to remove',  
ugutúúrífíá 'to assist', ugusítáfáka 'to accuse', uguíkúndíríria 'to grasp',  
ugusítáákéra 'to accuse for', ugutúúng'únúúchíria 'to suspend',  
ugutúúng'únúúchíria 'to suspend (sth.) for (sb.)'.

The tonal figure can be represented by:

okoCVCVXCa (If X=Ø, Ca becomes Cá. If X=Ø, Ca can be Ø. If Ca is Ø, CV immediately before X can also be Ø, and the second CÍ becomes CV unless it is C+i/e/o/u+V. If CV immediately before X is Ø, the second CÍ can also be Ø.) /  
okoCVCVVXCa (If X=Ø, Ca becomes Cá.) /

okoCÍCVXCa (If X=Ø, Ca becomes Cá. If X=Ø, Ca can be Ø.)

where X stands for a string of phonemes of any length.

This language has many indicative forms (such as Past, Hodiernal Past, Present, Future, etc.) including negative ones. The tonal figures of various indicative forms as well as those of the imperatives, subjunctives, etc. including forms where the object or reflexive prefix appears, are given together with the author's tonal analysis for each verbal form in the way as shown above for the infinitive.

---

**Keywords:** Kuria, verb, tone, Kenya, Bantu

キーワード：クリア語, 動詞, アクセント, ケニア, バントウ諸語

はじめに	§ 5. 連体修飾形
§ 1. 不定形	§ 6. その他の形
§ 2. 直説法形	§ 7. 若干の補遺
§ 3. 命令・禁止形	おわりに
§ 4. 接続法形	参考文献

## はじめに

クリア語 (igikúrfá) というのは、ケニアの西南部から北部タンザニアの国境の両側に話されるバントゥ諸語の一つである。その北側に話されるグシイ語に類似するとともに、さらにその北方に話されるルヤ諸語とも類似している。<sup>1)</sup>

本論文でこの言語の表記に用いる子音字とその概略的音価は次の如くである。

b ([b]～[b]), ch ([tʃ]), d ([d]), g ([ɣ]～[g]), h ([h]), k ([k]), m ([m]), n ([n]), ng' ([ŋ]), ny ([ɲ]), r ([r]), s ([s]), t ([t]), w ([w]), y ([j]), m/n (子音前鼻音)<sup>2)</sup>  
この言語には、(h を除く) 無声子音の、母音 (+子音前鼻音) をはさんで直前にある k は g となる、という一種の異化現象がある。ただ、この法則は、少なくともインフォーマントの方言においては、崩れつつあるようで、k でなく g が予想されるのに、k であらわれることがある。本論文では、この法則に沿った形あげる。

母音字は、次の通りである。

i ([i]), e ([e]), ɛ ([ɛ]), a ([a]), ɔ ([ɔ]), o ([o]), u ([u]).

このうち、e と ɛ, ɔ と o はかなり近く、時として識別が困難なことがある。また、(子音+) i/u もしくは子音+i から変化した子音 (ny/ch/y) や子音+u から変化した子音+w の直前の接辞の母音 e/o は、i/u となるという母音調和がある。また、r+母音+r は、rr と発音される。本論文では、r+母音+r で表記する。ただし、その母音は推定上のものである。

アクセントは、母音上の'で「高」を、無印で「低」をあらわす。

この言語における人称主格・対格接辞<sup>3)</sup>の形は、次の通りである。

	主格	対格		主格	対格
単数1人称	N	N <sup>4)</sup>	複数1人称	to	to
2人称	o	ko	2人称	mo	ba
3人称	a	mo	3人称	ba	ba

- 
- 1) この言語の調査は、東京外大 AA 研加賀谷良平教授を研究代表者とする文部省科学研究費補助金国際学術研究（学術調査）によるヴィクトリア湖周辺バントゥ諸語調査の一環として、2000年8月～9月にケニアで行った。この言語のインフォーマントは、1965年にMigoriの近くのMaeta Villageに生まれた Mr. Hezron Mosamba Mbagi である。両親はともにクリア族である。
  - 2) 子音前鼻音は、次の子音と同じ位置で閉鎖や狭めを形成する鼻音で、同一音素と考えるべきであるが、唇子音の前で m, その他で n で表記する。その直前に母音があり、その前に何かがあると、その母音は長くなる（と解釈される）。
  - 3) 動詞のあらわす行為の主体たる人称もしくは主体をあらわす名詞のクラスに呼応して音形交替する部分を主格接辞、行為の対象たる人称もしくは対象をあらわす名詞のクラスに呼応して音形交替する部分を対格接辞と呼ぶことにする。人称主格・対格接辞とクラス主格・対格接辞を分けてあげているが、本質的には同種のものである。
  - 4) N は子音前鼻音。この主格接辞・対格接辞は、条件によって変異を示す。§ 7-1参照。

クラス<sup>5)</sup>主格接辞・対格接辞は、次の通りである。クラスは、名詞例で示す。ハイフンは、(冒頭母音つきの)接頭辞と語幹の境界を示す。I~IX は単数名詞のクラス、X~XIV は複数名詞のクラスである。

I.	omo-ónto <sup>6)</sup> 「人」	a	mo
II.	omo-té 「木」, umu-nyúá <sup>7)</sup> 「口」	go	go
III.	iri-tóónyí 「禿鷲」, irii-gúha 「骨」	re	re
IV.	ege-tóócho <sup>8)</sup> 「兎」, iki-bíra 「小指」	ke	ke
V.	en-góha 「ダニ」, im-búúsu 「踝」, e-seésé 「犬」	e	ge
VI.	oro-báru 「肋骨」, uru-gíki 「眉」	ro	ro
VII.	aka-nyúnyi 「小鳥」, aga-chóóka 「手斧」	ka	ka
VIII.	obo-tá 「弓」, ubu-kíma 「ウガリ (主食)」	bo	bo
IX.	oko-bóko 「腕」, ugu-túí 「耳」	ko	ko
X.	aba-ánto 「人」 cf. I.	ba	ba
XI.	eme-té 「木」, imi-nyúá 「口」 cf. II.	ge	ge
XII.	ama-tóónyí 「禿鷲」, ama-gúha 「骨」, ama-tá 「弓」, ama-kíma 「ウガリ」, ama-bóko 「腕」, ama-túí 「耳」 cf. III/VIII/IX.	ga	ga
XIII.	ibi-tóócho 「兎」, ibi-bíra 「小指」, ibi-nyúnyi 「小鳥」, ibi-chóóka 「手斧」 cf. IV/VII.	bi	bi
XIV.	ichiin-góha 「ダニ」, ichiim-búúsu 「踝」, ichi-seésé 「犬」, ichiim-báru 「肋骨」, ichiin-gíki 「眉」 cf. V/VI.	chi	chi

この他に、対格接辞の一種として再帰接辞<sup>i)</sup>がある。

主格接辞を S であらわすが、単複 1・2 人称のそれとその他のそれで、アクセントの差異があらわれることがあり、そういう場合には、前者を S<sub>1</sub>、後者を S<sub>2</sub>であらわす。対格接辞を O であらわし、再帰接辞は、アクセント表示では実際の音形であらわす。この言語の動詞自体においては、元来のアクセントの型の対立（筆者の他のバントゥ系言語を記述したものでは A 型 B 型と呼んでいるもの）が消滅している。なお、記述の便宜上、原則として語幹が子音ではじまる動詞のみを扱い、語幹が母音ではじまる動詞についてはあとで触ることにする。

この言語の動詞アクセントを扱ったものに Odden (1987), (1999) があるが、比較的詳しく扱った前者も、この言語の動詞のアクセントの全体を提示したものではなく、一部の現象とその解釈にとどまっている<sup>10)</sup>。

- 5) 「クラス」というのは、印欧語等に見られる「性」に似た名詞の下位範疇であるが、名詞のあらわすものの自然的性には関係がなく、かつ、「性」よりずっと数が多い。
- 6) 慣用的正書法では、omonto (語幹は-nto) と表記するが、注 2) に見たような理由でこう表記する。
- 7) 接頭辞は、元来は omo であるが、母音調和により umu となっている。また、この言語では、i/e/o/u は、少なくとも語末音節においては、半母音としての役割を果たしうるようである。
- 8) 接頭辞は、元来は eke であるが、異化現象により ege となっている。
- 9) 行為の主体が何であっても、形は不变である。
- 10) 筆者がこの言語の調査を行った時点では、Odden (1987) は見てなかった。そのため、そこに出ているデータを追跡調査しうる条件はなかった。本論文執筆時には参照することができたので、気がついた彼と筆者のデータ上の差異や解釈の違いの主なものについては、注で示すことにする。

この言語の（あるいは、筆者のインフォーマントの）アクセントにはかなりブレが認められ、アクセントが複雑なために、言語自体（つまり、母語話者自体）が部分的に混乱をおこしているのではないかと思われるほどである。本論文における記述も、不確かな箇所を含んでいる。

### § 1. 不定形

この言語の動詞にも、不定形と呼んでよい形がある。

不定形（「～すること」の意）は、

*oko* + (対格接辞+)語幹+a (o-は冒頭母音)

という構造を有し、アクセントは次のように表示しうる。C は（子音前鼻音+）子音を、V は母音をあらわし、X は、任意の音素列を示す。語末に立つ場合の CV (当然 Ca も) は、C+i/e/o/u +V を含む。以下、同様である。+I は、調整規則 I<sup>11)</sup>を付け加える必要がある、の意である。

*okoCVCVXCa* (X=Ø なら、Ca は Cáとなる。X=Ø なら、Ca も Ø でありうる。Ca が Ø なら、X の直前の CV も Ø でありうるが、その前の ĆV は C+i/e/o/u+V でなければ CV となる。X の直前の CV が Ø なら、その前の ĆV も Ø でありうる。「調整規則 I」と呼ぶ) /

*okoCVVCVXCa* (X=Ø なら、Ca は Cáとなる。「調整規則 II」と呼ぶ) /

*okoCVCVXCa* (X=Ø なら、Ca は Cáとなる。X=Ø なら、Ca も Ø でありうる。「調整規則 III」と呼ぶ) ;

*okoÓCVVXCa* (X=YCVV (Y≠Ø) なら、YCVV は YĆVV となり、X=ZCVVCV (Z≠Ø) なら、ZĆVV は ZĆVV となる。(これを、これ以降 α であらわす。) X=Ø なら、Ca は Cáとなる。X=Ø なら、Ca も Ø でありうる。Ca が Ø なら、X の直前の CV も Ø でありうる。「調整規則 IV」と呼ぶ) /

*okoÓCVVXCa* (α. X=Ø なら、Ca は Cáとなる。「調整規則 V」と呼ぶ) ;

*okoíCVVXCa* (+IV) / *okoíCVVXCa* (+V).

*okohá* 「与える」, *okobóha* 「縛る」, *ogosohíá* 「着る」<sup>12)</sup>, *okobéréka* 「おぶう」<sup>13)</sup>,

*ugutírimiká* 「なぐさめる」, *ukubfgísiínia* 「身体検査する」,

*ukuíbúrurukéra* 「～にとびかかる」, *okokáraangá* 「油である」<sup>14)</sup>, *ogotégeeréra* 「聞く」,

*ogotégeerérána* 「互いに聞く」, *ukurúusíá* 「取り除く」, *ugutúúrífíá* 「手伝う」,

*ugusítááka* 「訴える」, *ugukúúndíríria* 「握る」, *ugusítáákéra* 「～のために訴える」,

*okohééméérérána* 「いいあう」, *ugutúúng'únúúchíia* 「ぶら下げる」,

*ugutúúng'únúúchíria* 「～のためにぶら下げてやる」<sup>15)</sup>;

11) 「調整規則」というのは、アクセントを統一的に表示した場合に、主として語形が短い時に調整的言明が必要になることがあるが、それをさす。本論文では、本質的に同じ規則と考えられるものであっても、語幹+語尾のアクセントまたは語尾が異なれば、調整規則にも別の番号を与える。

12) こういう構造の動詞不定形の例も、*okobóha* のような構造のものとのアクセント上の差異についても、Odden (1987) は触れていない。

13) Odden (1987) は、こういう構造の動詞不定形では、末尾が中位の高さとなるか上昇調になると記述している (p.312) が、筆者のデータに関する限り、末尾は、中位の高さでも上昇調でもなく、低い。

14) Odden (1987) は、この動詞の不定形では、ここに記したような発音の他に、*raanga* が中位の高さであらわれる発音があると記述している (p.312) が、筆者のデータに関する限り、そんなことは認められない。

okomóhá 「彼に与える」, okomóbóha 「彼を縛る」,  
 okogésóhia 「それ(クラス IV)を着る」, okomóbéreká, ukumútírimíkia,  
 ukumúbígisínia, okogékaraánga, okomótégeérera, ugukíruusíá, ukumútuuríria,  
 ukumúsiitááka, ukugíkuundíríria, ukumúsiitáákéra, ukugítuung'únúuchia,  
 ukumútuung'únúuchiria ;  
 ukuíhá 「自分に与える」, ukuíbóha, uguítírimíkia, ukuíbígisínia, uguítégeérera,  
 uguítuuríria, uguísíitááka, uguísíitáákéra, uguítuung'únúuchia, uguítuung'únúuchiria.  
 これを見て分かるように、対格接辞があらわれると、対格接辞+語幹+語尾のアクセントは、  
 その対格接辞があたかも語幹冒頭の CV を形成するような語幹+語尾のアクセントに ( $\alpha$  の有無を除いて) 等しいことが目をひく。これに類することは以降に見る活用形についても概ね認められ、この言語の動詞アクセントの特徴の一つに数えることができる。<sup>16)</sup>

## § 2. 直説法形

直説法形に用いられる語尾としては, a/ere/e がある。なお、複合形は、あとでまとめて扱う。

### § 2-1 語尾 a を用いる形

#### § 2-1-1 完了形

既に行われた行為をあらわす形は,

主格接辞+a+(対格接辞+)語幹+a

という構造を有する。主格接辞+a の形は,

15) この 2 つの動詞は、Odden (1999) を参照の上、調査した。ただし、Odden は、筆者が ng' で表記している部分を、ng で表記している。筆者のデータに関する限り、ng と ng' は異なる (Odden は、前者も ng で表記している)。

16) Odden (1987) は、筆者が  $okoC\acute{V}CV\acute{X}Ca$ ,  $oko\acute{O}C\acute{V}CV\acute{X}Ca$  でアクセント表示しているものについて、語幹第 1 音節と第 4 音節 (対格接辞があらわれるとそれから数える) が高く、そのあとが高いのは Doubling という規則が働くからだ、と仮定している (p.313)。そう仮定すべき理由は、特に述べていない。Odden を含めてアメリカの学者は、英語などのアクセントの知識の影響からか、目立つ部分 (バントゥ諸語の場合は通常「高」) が複数続くことに違和感を感じるようである。しかし、筆者のようにとらえようが、語幹第 1 音節と第 4 音節が高いととらえようが、一般的な常識からいってやや奇妙に感じるのは同じであって、Odden のように仮定しなければならない理由はない。特に理由がない限り、実際の発音とは異なるものを basic な形などとしてはならないというのが、筆者の主張である。なお、Odden は、この言語の動詞アクセントを「説明」するのに、この Doubling 以外にもいくつもの規則を仮定しているが、そんなにいくつもの仮定をすることが許されるなら、basic なものとして実際の発音と異なる形をどう仮定しても「説明」できることになるのではないか。もっとも、筆者も、Odden のすべての仮定が理由のないものであると主張しているわけではない。たとえば  $okoC\acute{V}CV\acute{X}Ca$  と  $oko\acute{O}C\acute{V}CV\acute{X}Ca$  の違いなどは、何らかの規則を仮定できそうである。ただし、そういう規則を仮定するにも、この言語の動詞のアクセントをすべて観察し、矛盾が決して生じないように仮定しなければならない。本論文では、動詞のアクセントを全体として提示することに重点を置いているので、そういう考察は別の機会に譲る。

なお、Odden (1987) は、不定形語幹第 1 音節が高いのは冒頭母音 o- の存在によるとしているが、§ 2-1-7 の形、§ 2-4-2 のあとのはうの形に見るように、冒頭母音 o- がなくとも語幹第 1 音節が高いものがある。

単数1人称 naa, 2人称 waa, 3人称 (= クラス I) aa,  
 複数1人称 too, 2人称 moo, 3人称 (= クラス X) baa,  
 クラス II goo, III ree, IV kee, V ee, VI roo, VII kaa, VIII boo,  
 IX koo, XI gee, XII gaa, XIII bii, XIV chii

である。主格接辞+a+iの形は nai, wei, ai, toi, moi, bai, etc. となる。Siで表わす。アクセントは次の如く表示しうる。

SaCV(C)V̄Ca ( $\alpha.$  X=Øなら, CaはCáとなる。X=Øなら, CaもØでありうる。CaがØなら, (C)VもØでありうる。「調整規則VI」と呼ぶ);  
 SaOCV̄Ca ( $\alpha.$  X=Øなら, CaはCáとなる。X=Øなら, CaもØでありうる。「調整規則VII」と呼ぶ),  
 SiCV̄Ca (+VII).

naaha「私は与えた」, naabqha, naasohia, naabéreká, naatirimíkia, naabigisínia, naakaraánga, naatégeéréra, naaruusíá, naatuuríria, naasiitááka, naakuundíríria, naasiitáákéra, naatuung'únúuchia, naatuung'únúuchiria;  
 naamoha「私は彼に与えた」, naamobqhá, naagesohíá, naamoberéká, naamutirímíkia, naamubigísínia, naagekaráánga, naamotegééréra, naakiruúsia, naamutuúríria, naamusiitáaka, naagikuúndíríria, naamusiitáakera, naagituúng'únúuchia, naamutuúng'únúuchiria;  
 naiha「私は自分に与えた」, naibqhá, naitirímíkia, naibigísínia, naitegééréra, naituúríria, naisiitáaka, naisiitáakera, naituúng'únúuchia, naituúng'únúuchiria;  
 waaha, aaha, tooha, mooha, baaha, etc.

### § 2-1-2 現在進行形

現在行われている行為をあらわす形<sup>17)</sup>は,

主格接辞+ra+(対格接辞+)語幹+a

という構造を有し, アクセントは次のように表示しうる。

SıraCV(C)V(C)V̄Ca (X=Øなら, CaはCáとなる。X=Øなら, CaもØでありうる。CaがØなら, Xの直前の(C)VもØでありうる。Xの直前の(C)VがØならその前の(C)VもØでありうる。「調整規則VIII」と呼ぶ),  
 SıraOCV(C)V̄Ca ( $\alpha.$  X=Øなら CaはCáとなる。X=Øなら CaもØでありうる。CaがØなら, Xの直前の(C)VもØでありうる。「調整規則IX」と呼ぶ),  
 SıraiCV(C)V̄Ca (+IX);  
 SıraCVCV̄Ca (+I) / SıraCVCVV̄Ca (+II) / SıraCVCV̄Ca (+III);  
 SıraOCVCV̄Ca (+IV) / SıraOCVV̄Ca (+V);  
 SıraiCVCV̄Ca (+IV) / SıraiCVV̄Ca (+V).

17) この活用形の意味は, 若干不確かである。Odden (1987) はhortativeと呼び, let me ~とか, you should ~とか let him ~といった訳を与えていた(p.324)が, 筆者はインフォーマントの報告に基づき, 一応こう記述する。文例としては,  
 arawéésá ~「彼は~できる」, ~ arafbiirá 「彼が泳いでいるのを~」  
 といったものがある。Odden自身も, ndatuna ~ (N+ra+tuna) 「私は~したい」という例を同じページの別のところであげている。

toraha 「私たちは与えている」, torab<sub>0</sub>ha, torasohia, torabéreká, toratirimiká, torabigisiínia, torakaraangá, torategeeréra, toraruusia, toratuuriríá, torasiitaáká, torakuundiríria, torasiitaákéra, toratuung'únúuchia, toratuung'únúuchíria ; toramoha 「私たちは彼に与えている」, toramob<sub>0</sub>ha, toragesohia, toramobéreká, toramutirimíkia, toramubigisiínia, torquekaraángá, toramotegéeréra, torakiruuusá, toramutuuríria, toramusiitááká, toragikuundírlíria, toramusiitáákéra, toragituung'únúuchia, toramutuung'únúuchiria ; toraiha 「私たちは自分に与えている」, toraib<sub>0</sub>ha, toraitirimíkia, toraibigisiínia, toraitegeeréra, toraituuríria, toraisiitááká, toraituung'únúuchia, toraituung'únúuchiria ; barahá 「彼らは与えている」, barab<sub>0</sub>ha, barasohíá, barabéreká, baratírmiká, barabígisiínia, barakáraangá, baratégeeréra, bararúúsíá, baratúúrlíria, barasíitááká, barakúúndírlíria, barasíitáákéra, baratúung'únúuchia, baratúung'únúuchíria ; baramohá 「彼らは彼に与えている」, baramób<sub>0</sub>ha, baragésohia, baramóbéreká, baramútirimíkia, baramúbígisiínia, baragékáraángá, baramótégeeréra, barakíruusá, baramutuuríria, baramusiitááká, baragíkuundírlíria, baramusiitáákéra, baragítuung'únúuchia, baramutuung'únúuchiria ; barahá 「彼らは自分に与えている」, baraib<sub>0</sub>ha, baraitirimíkia, barabígisiínia, baraitégeeréra, baraituuríria, baraisiitááká, baraituung'únúuchia, baraituung'únúuchiria ; ndaha, oraha, arahá, etc.

### § 2-1-3 未来形 (1)

翌日あるいはそれ以降に行われる行為をあらわす形は,

N + 主格接辞 + re + (対格接辞 +) 語幹 + a

という構造を有する。N + 主格接辞の形は、単数1～3人称で (nee)N, noo, naa である。アクセントは次の如く表示しうる。

NSreCV(C)VXCa (X=Ø なら Ca は Cá となる。X=Ø なら Ca も Ø でありうる。Ca が Ø なら、X の直前の(C)V も Ø でありうる。「調整規則 X」と呼ぶ),  
NSreOCVXCa (+VII), NSriiCVXCa (+VII).

ntoreha 「私たちは与える」, ntorebhá, ntonesohia, ntoreberéka, nturitirimíkia, nturibigisiínia, ntorekaraángá, ntoretegeeréra, nturiruuusíá, nturituuríria, nturisiitááká, nturikuundírlíria, nturisiitáákéra, nturituung'únúuchia, nturituung'únúuchíria ; ntoremoha 「私たちは彼に与える」, ntremob<sub>0</sub>há, ntoregesohíá, ntremobéreká, nturimutirimíkia, nturimubigisiínia, ntoregekaráángá, ntremotegéeréra, nturikiruuusá, nturimusiitáaka, nturigikuundírlíria, nturimusiitáakera, nturigituung'únúuchia, nturimutuung'únúuchiria ; nturiha 「私たちは自分に与える」, nturiib<sub>0</sub>há, nturiitirimíkia, nturiibigisiínia, nturiitegeeréra, nturiituuríria, nturiisiitáaka, nturiisiitáakera, nturiituung'únúuchia, nturiituung'únúuchiria ; (nee)ndeha, nooreha, naareha, etc.

### § 2-1-4 未来形（2）

§ 2-1-3の形とほぼ同じ意味をあらわす形<sup>18)</sup>は、

主格接辞 + a + re + (対格接辞 + )語幹 + a

という構造を有する。アクセントは、次のように表示しうる。<sup>19)</sup>

S<sub>i</sub>areCV(C)V<sub>X</sub>Ca (+X), S<sub>i</sub>areOCV<sub>X</sub>Ca (+VII), S<sub>i</sub>ariiCV<sub>X</sub>Ca (+VII) ;

S<sub>i</sub>aréC<sub>V</sub>CV<sub>X</sub>Ca (X=Øなら, CaはCáとなる。X=Øなら, CaもØでありうる。CaがØなら, Xの直前のCVもØでありうる。「調整規則 XI」と呼ぶ) /

S<sub>i</sub>aréCVV<sub>X</sub>Ca (X=Øなら, CaはCáとなる。「調整規則 XII」と呼ぶ),

S<sub>i</sub>aréÓCV<sub>X</sub>Ca (α. X=Øなら CaはCáとなる。X=Øなら CaもØでありうる。「調整規則 XIII」と呼ぶ),

S<sub>i</sub>ariiCV<sub>X</sub>Ca (+XIII)<sup>20)</sup>.

naareha 「私は与える」, naareb<sub>o</sub>ha, naaresohia, naareb<sub>e</sub>reká, naaritirimíkia,

naaribigisínia, naarekaraánga, naaretegeérera, naariruusíá, naarituiríria,

naarisítááka, naarikuundíríria, naarisítáákéra, naarituung'únúúchia,

naarituung'únúúchíria ;

naaremoha 「私は彼に与える」, naaremob<sub>o</sub>há, naaregesohíá, naaremoberéka,

naarimutirimíkia, naarimubigisínia, naaregekaráánga, naaremotegeérera,

naarikiruúsia, naarimutuúríria, naarimusítáaka, naarigikuúndíríria,

naarimusítáakera, naariguutung'únúúchia, naarimutuutung'únúúchiria ;

naariiha 「私は自分に与える」, naariib<sub>o</sub>há, naariitirimíkia, naariibigisínia,

naariitegeérera, naariituúríria, naariisítáaka, naariisítáakera, naariituung'únúúchia,

naariituung'únúúchiria ;

baaréhá 「彼らは与える」, baaréb<sub>o</sub>ha, baarésöhia, baaréb<sub>e</sub>reká, baarítirimíkia,

baaribigisínia, baarékáraánga, baarétegeérera, baariruusíá, baarituiríria, baarisítááka,

baarikuundíríria, baarisítáákéra, baarituung'únúúchia, baarituung'únúúchíria ;

baarémóha 「彼らは彼に与える」, baarémób<sub>o</sub>há, baarégésöhíá, baarémóberéka,

baarímútirimíkia, baarímúbigisínia, baarégékaráánga, baarémótegeérera,

baaríkruúsia, baarimutuúríria, baarímusítáaka, baarígikuúndíríria,

baarímusítáakera, baarígutuung'únúúchia, baarímútutung'únúúchiria ;

baaríiha 「彼らは自分に与える」, baaríib<sub>o</sub>há, baaríitirimíkia, baaríbigisínia,

baaríitegeérera, baaríituúríria, baaríisítáaka, baaríisítáakera, baaríituung'únúúchia,

baaríituung'únúúchiria.

### § 2-1-5 未然形

「まだ～していない」ということをあらわす形は、

te + 主格接辞 + raa + (対格接辞 + )語幹 + a

18) 意味の違いは未詳である。丁寧さの問題かも知れない。

19) この形と § 2-1-3の形は、主格接辞によっては紛らわしくなるため、非常に苦労した。

20) こうであるはずであると考えられるが、一部に, baarífhá, baaríkáraángéra といった,

S<sub>i</sub>aríCV<sub>X</sub>Ca (+XI) のようなアクセントの発音が録音されている。

という構造を有する。通常、後方に *hai* があらわれる。ここでは、*hai* が直接続かない場合のアクセントを示す。なお、単数1～3人称の *te+主格接辞*の形は、*teeN*, *too*, *taa*である。

*teŚraaCVCVXCa (+I)* / *teŚraaCVVVXCa (+II)* / *teŚraaCVCVXCa (+III)*,  
*teŚraaÓCVXCa* (*X=Ø*なら、*Ca*は *Cá*となる。*X=Ø*なら、*Ca*も *Ø*でありうる。*Ca*が *Ø*なら、*X*の直前の *CV*も *Ø*でありうる。「調整規則 XIV」と呼ぶ) /  
*teŚraaÓCVVXCa* (*X=Ø*なら、*Ca*は *Cá*となる。「調整規則 XV」と呼ぶ),  
*teŚraiXCa* (*X≤CV(C)V*なら、*Ca*は *Cá*となる。「調整規則 XVI」と呼ぶ)。

*tetóraahá*「私たちはまだ与えてない」, *tetóraabóha*, *tetóraasóhíá*, *tetóraabéréka*,  
*tetóraatírmikíá*, *tetóraabígísiínia*, *tetóraakáraangá*, *tetóraatégeéréra*, *tetóraarúúsíá*,  
*tetóraatúúrírá*, *tetóraasíítááka*, *tetóraakúúndíríria*, *tetóraasíítáákéra*,  
*tetóraatúúng'únúúchíia*, *tetóraatúúng'únúúchíria* ;  
*tetóraamóhá*「私たちはまだ彼に与えてない」, *tetóraamóbóha*, *tetóraagésóhia*,  
*tetóraamóbéréka*, *tetóraamútírimíkia*, *tetóraamúbígísiínia*, *tetóraagékáraángá*,  
*tetóraamótégeéréra*, *tetóraakíruusíá*, *tetóraamútúuríria*, *tetóraamúsiítááka*,  
*tetóraagíkuundíríria*, *tetóraamúsiítáákéra*, *tetóraagítuung'únúúchíia*,  
*tetóraamútutuung'únúúchíria* ;

*tetóraihá*「私たちはまだ自分に与えてない」, *tetóraibóhá*, *tetóraibéréka*, *tetóraitírimíkia*,  
*tetóraibígísiínia*, *tetóraitégééréra*, *tetóraitúúríria*, *tetóraisíítááka*, *tetóraisíítáákéra*,  
*tetóraitúúng'únúúchíia*, *tetóraitúúng'únúúchíria* ;

*teéndaahá*「私はまだ与えてない」, *toóraahá*, *taáraahá*, etc.

なお、この形に限らず、否定形のアクセントは、～XCVという形をとるが、これがそのままあらわれる場合、末尾の *CV*は、低く発音されるより下降調であらわれることのほうが多い。ここに下降調の存在を認める考え方もあるが、「低」の音声的変異である可能性もあるので、この点まだ結論が得られていないことを述べた上で、「低」と扱うことにする。以下同様である。

### § 2-1-6 完了否定形 (1)

§ 2-1-1の形に対応する否定形は、

*te+主格接辞+a+(対格接辞+)語幹+a*

という構造を有する。通常、後方に *hai* があらわれる。ここでは、*hai* が直接続かない場合のアクセントを示す。*te+主格接辞+a*の形は、*tenaa*, *tewaa*, *taa*, *tetoo*, *temoo*, *tebaa*, etc. であり、*te+主格接辞+a+再帰接辞*の形は、*tenai*, *tewai*, *tai*, *tetoi*, *temoi*, *tebai*, etc. である。後者を *teSi* であらわす。*taa/tai* は'Sa / 'Si であらわす。

*teŚaXCa* (*X=Ø*なら、*Ca*は *Cá*となる。「調整規則 XVII」と呼ぶ),

*teŚaÓXCa*, *teŚiXCa (+XVII)* ;

'SaXCa (+XVII), 'SaÓXCa, 'SiXCa (+XVII).

*tenáahá*「私は与えてない」, *tenáabóhá*, *tenásóhia*, *tenáabéréka*, *tenáatírimíkia*,  
*tenáabígísiínia*, *tenáakáráángá*, *tenáatégeéréra*, *tenáarúúsíá*, *tenáatúúríria*, *tenáasíítááka*,  
*tenáakúúndíríria*, *tenáasíítáákéra*, *tenáatúúng'únúúchíia*, *tenáatúúng'únúúchíria* ;  
*tenáamóhá*「私は彼に与えてない」, *tenáamóbóhá*, *tenágésóhia*, *tenáamóbéréka*,  
*tenáamútírimíkia*, *tenáamúbígísiínia*, *tenáagékáráángá*, *tenáamótégeéréra*,

tenáakírúúsia, tenáamútúúríria, tenáamúsítááka, tenáagíkúúndíríria,  
 tenáamúsítáákéra, tenáagítúung'únúúchia, tenáamútúung'únúúchíria ;  
 tenáihá「私は自分に与えてない」, tenáibóha, tenáitfrímíkia, tenáibígísínia,  
 tenáitégééréra, tenáitúúríria, tenáisítááka, tenáisítáákéra, tenáitúung'únúúchia,  
 tenáitúung'únúúchíria ;  
 taahá ; taamóha ; taihá ; etc.

### § 2-1-7 現在否定形

ある行為を行わない, もしくは, 行っていないことをあらわす形は,

te + 主格接辞 + V + ko + (対格接辞+)語幹 + a

という構造を有する。te + 主格接辞 + V は, 単数 1 ~ 3 人称で teeN, too, taa である。これを teS であらわす。通常, 後方に hai があらわれる。ここでは, hai が直接続かない場合のアクセントを示す。

teSkóCVCVXCa (+ I) / teSkóCVCVXCa (+ II) / teSkóCVCVXCa (+ III),  
 teSkóÓCVXCa (+ XIV) / teSkóÓCVXCa (+ XV),

teSkóiCVCVXCa (+ XIV) / teSkóiCVVXCa (+ XV) ;

teS̄koCVCVXCa (+ I) / teS̄koCVCVXCa (+ II) / teS̄koCVCVXCa (+ III),

teS̄koÓCVXCa (+ XIV) / teS̄koÓCVXCa (+ XV),

teS̄koíCVCVXCa (+ XIV) / teS̄koíCVVXCa (+ XV).

teenkóhá「私は与え(てい)ない」, teenkóbóha, teengósöhíá, teenkóbéréka,

tiingútírimikíá, tiinkúbígísínia, teengókáraangá, teengótégeéréra, tiinkurúúsiá,

tiingútúúrírá, tiingúsítááka, tiingukúúndíríria, tiingúsítáákéra, tiingútúung'únúúchia,  
 tiingútúung'únúúchíria ;

teenkómohá「私は彼に与え(てい)ない」, teenkómóbóha, teenkógésöhíá,

teenkómóbéreká, tiinkumútírimíkia, tiinkumúbígísínia, teenkogékáraángá,

teenkómótégeéréra, tiingukíruusíá, tiinkumútuuríria, tiinkumúsiitááka,

tiinkúgíkuundíríria, tiinkumúsiitáákéra, tiinkúgítuung'únúúchia,

tiinkumútuung'únúúchíria ;

tiinkúlhá「私は自分に与え(てい)ない」, tiinkúlbóha, tiingútírimíkia, tiinkúlbígísínia,

tiingúítégeéréra, tiingúítuuríria, tiingúsiitááka, tiingúsiitáákéra,

tiingúituung'únúúchia, tiingúituung'únúúchíria ;

tookóhá, taakóhá, etc. ;

tetoókohá「私たちは与え(てい)ない」, tetoókobóha, tetoógosöhíá, tetoókobéréka,

tituúgutírimikíá, tituúkubígísínia, tetoógokáraangá, tetoógotégeéréra, tituúkurúúsiá,

tituúgutúúrírá, tituúgusítááka, tituúgukúúndíríria, tituúgusítáákéra,

tituúgutúung'únúúchia, tituúgutúung'únúúchíria ;

tetoókomohá「私たちは彼に与え(てい)ない」, tetoókomóbóha, tetoókogésöhíá,

tetoókomóbéreká, tituúkumútírimíkia, tituúkumúbígísínia, tetoókogékáraángá,

tetoókomótégeéréra, tituúgukíruusíá, tituúkumútuuríria, tituúkumúsiitááka,

tituúkugíkuundíríria, tituúkumúsiitáákéra, tituúkugítuung'únúúchia,

tituúkumútuung'únúúchíria ;

tituúkuíhá 「私たちは自分に与え(てい)ない」, tituúkuíbóha, tituúguítirimikia, tituúkuíbígisiínia, tituúguítégeérera, tituúguítuuríria, tituúguísíitaáka, tituúguísíitáákéra, tituúguítuung'únúúchíria, tituúguítuung'únúúchíria ;  
temoókohá, tebaákohá, etc.

### § 2-1-8 現在進行否定形

§ 2-1-2の形に対応する否定形は,

te + 主格接辞 + ra + (対格接辞+)語幹 + a

という構造を有する。通常、後方に *hai* があらわれる。ここでは、*hai* が直接続かない場合のアクセントを示す。

teSráCÝ(C)ÝCVXCa (X=Øなら, CaはCáとなる。X=Øなら, CaもØでありうる。CaがØなら, Xの直前のCVもØでありうるが, (C)Ýは(C)Vとなる。Xの直前のCVがØなら, (C)ÝもØでありうるが, 最初のCÝはCVとなる。「調整規則 XVIII」と呼ぶ) /

teSráCÝCVVXCa (+II),

teSráÓCÝCVXCa (X=Øなら, CaはCáとなる。X=Øなら, CaもØでありうる。CaがØなら, Xの直前のCVもØでありうるが, その前のCÝはCVとなる。「調整規則 XIX」と呼ぶ) /

teSráÓCVVXCa (+XV),

teSráiCÝCVXCa (+XIX) / teSráiCVVXCa (+XV).

tetoráhá「私たちは与えていない」, tetorábóha, tetorásóhia, tetorábéréka, tetorátírimikia, tetorábígisiínia, tetorákáraangá, tetorátégeérera, tetorárúusia<sup>21)</sup>, tetorátúúriríá, tetorásíitaáka, tetorákúúndiríria, tetorásíitaákéra, tetorátúúng'unúúchíria, tetorátúúng'unúúchíria ;

tetorámóhá「私たちは彼に与えていない」, tetorámóbóha, tetorágésóhia, tetorámóbéréka, tetorámútírimikia, tetorámúbígisiínia, tetorágékáraángá, tetorámótégeérera, tetorákíruusíá, tetorámútuaríria, tetorámúsíitaáka, tetorágíkuundíria, tetorámúsíitaákéra, tetorágítuung'unúúchíria, tetorámútutung'unúúchíria ;

tetoráíhá「私たちは自分に与えていない」, tetoráíbóha, tetoráítírimikia, tetoráíbígisiínia, tetoráítégeérera, tetoráítuaríria, tetoráísíitaáka, tetoráísíitaákéra, tetoráítuung'unúúchíria, tetoráítuung'unúúchíria ;

teedáha, tooráha, taaráha, etc.

### § 2-1-9 未来否定形

§ 2-1-3/4の形に対応する否定形は,

te + 主格接辞 + re + (対格接辞+)語幹 + a

という構造を有する。通常、後方に *hai* があらわれる。ここでは、*hai* が直接続かない場合のアクセントを示す。

teŠréCÝCVXCa (+XIX) / teŠréCVVXCa (+XII),

21) tetorárúusia という発音をすることもあったが、確認した結果、こうであると一応結論した。

teŠréÓCVXCa ( $X = \emptyset$  なら, Ca は Cáとなる。 $X = \emptyset$  なら, Ca も  $\emptyset$  でありうる。「調整規則 XX」と呼ぶ),

teŠrifCVXCa (+XX).

tetóréha 「私たちは与えない」, tetórébóha, tetórésöhia, tetórébéká, titúritírimíkia, titúrbígisiínia, tetórekáraánga, tetórétégéérera, titúriuuusíá, titúrituuríria, titúrisiitááka, titúrkuundífríria, titúrisiitáákéra, titúrituung'únúuchchia, titúrituung'únúuchíria ;  
 tetómóha 「私たちは彼に与えない」, tetómóbhá, tetóregésohíá, tetómóberéká, titúrimútirímkia, titúrimúbigisiínia, tetóregékaráánga, tetómótegéérera, titúrkíruúsia, titúrimútuúríria, titúrimúsiitááka, titúrigkuundífríria, titúrimúsiitáákéra, titúrigituung'únúuchchia, titúrimútuung'únúuchíria ;  
 titúriha 「私たちは自分に与えない」, titúribóhá, titúritírimíkia, titúribígisiínia, titúritegéérera, titúrituúríria, titúrisiitááka, titúrituung'únúuchchia, titúrituung'únúuchíria ;  
 teéndéha, toóréha, taáréha, etc.

### § 2-1-10 繼続過去形

「そして」という意味の na につづいて「～した」という意味をあらわす形があり,

主格接辞 + ka + (対格接辞 +) 語幹 + a

という構造を有し、アクセントは次のように表示しうる。

SkaCV(C)V(C)VXCa (+VIII), SkaOCV(C)VXCa (+IX), SkaiCV(C)VXCa (+IX).

nkaha 「私は与えた」, nkabóha, ngasohia, nkabéreká, ngatirimikíá, nkabigisiínia, ngakaraangá, ngategeérera, nkaruusia, ngatuuríria, ngasiitaáka, ngakuundífríria, ngasiitaákéra, ngatuung'únúuchchia, ngatuung'únúuchíria ;

nkamoha 「私は彼に与えた」, nkamobóha, nkagesohia, nkamobereká, nkamutirimíkia, nkamubigisiínia, nkagekaraánga, nkamotegéérera, ngakiruuusíá, nkamutuuríria, nkamusiitááka, nkagikuundífríria, nkamusiitáákéra, nkagituung'únúuchchia, nkamutuung'únúuchiria ;

nkaiha 「私は自分に与えた」, nkaibóha, ngaitirimíkia, nkaibigisiínia, ngaitegeérera, ngaituuríria, ngaisiitááka, ngaisiitáákéra, ngaituung'únúuchchia, ngaituung'únúuchiria.  
 物語においては, na を前に置くことなく、過去の行為をあらわすのに用いられる。

### § 2-2 語尾 ere を用いる形

語幹 + ere の形は、語幹が i で終わる使役動詞の場合, i がとれて iri がつく。また、語幹が o で終わる受身動詞の場合, o がとれて ero がつくようである。語幹が er によって延長されている場合, er がとれて eeye がつく。その他、個別的事例がある。以下に、ここで用いる動詞例の語幹 + ere の形をあげる。アクセント表示は省略する。

okohá : haaye, okobóha : bohere, ogosóhíá : sohiri, okobéreká : bérékere, ugutírimíkíá : tirimikiri, ugubígisiínia : bigisiimiri, ogokáraangá : karaangere, ogotégeérera : tegeéreeeye, ukurúússíá : ruusiri, ugutúúrífá : tuuririiyi, ugusítááka : siitaakere.

### § 2-2-1 過去形

前日もしくはそれ以前に行われた行為をあらわす形は、

N + 主格接辞 + a + (対格接辞+)語幹 + ere

という構造を有する。N + 主格接辞 + a の形は、

単数1人称 naa, 2人称 waa, 3人称 (=クラス I) naa.

複数1人称 ntoo, 2人称 mmoo, 3人称 (=クラス X) mbaa,

クラス II ngoo, III ndee, IV nkee, V yaa, VI ndoo, VII ncaa, VIII mboo,

IX nkoo, XI ngee, XII ngaa, XIII mbia, XIV nchaa

である。アクセントは次のように表示しうる。末尾の母音が e でないこともあるが、e で代表させる。

NSa $\bar{X}$ Ce ( $\alpha$ . 「調整規則 XXI」と呼ぶ),

NSa $\bar{O}\bar{X}$ Ce (X = YCVV なら、 $\bar{Y}C\bar{V}\bar{V}$  は  $\bar{Y}C\bar{V}V$  となる。X = ZCVVCV なら、 $\bar{Z}C\bar{V}VC\bar{V}$  は  $\bar{Z}C\bar{V}VCV$  となる。(これ以降、 $\beta$  であらわす。) 「調整規則 XXII」と呼ぶ),

NSi $\bar{X}$ Ce (+XXI).

naaháaye 「私は与えた」, naabóhére, naasohíri, naabérékére, naatírimíkíri,

naabígísíiniri<sup>22)</sup>, naakáráangere, naatégeéréeye, naaruúsíri, naatúúrífíyi, naasítáakere ;

naamóháaye 「私は彼に与えた」, naamóbóhére, naagésóhíri, naamóbérékére,

naamútírimíkíri, naamúbígísíiniri, naagékáráangere, naamótégeéréeye,

naakíruúsíri, naamútúúrífíyi, naamúsítáakere ;

<sup>23)</sup>

naiháaye 「私は自分に与えた」, naibóhére, naibérékére, naitírimíkíri, naibígísíiniri, naitégééréeye, naitúúrífíyi, naisítáakere.

### § 2-2-2 今日の過去形 (1)

その日に行われた行為をあらわす形は、

N + 主格接辞 + (対格接辞+)語幹 + ere

という構造を有し、アクセントは次のように表示しうる。

NSCV(C)V $\bar{X}$ Ce ( $\alpha$ . X =  $\emptyset$  なら、Ce は Cé となる。「調整規則 XXIII」と呼ぶ),

NSOCV $\bar{X}$ Ce ( $\alpha$ . 「調整規則 XXIV」と呼ぶ),

NSiCV $\bar{X}$ Ce (+XXIV).

naahaayé 「彼は与えた」, naabóheré, naasohíri, naabérékére, naatírimíkíri, naabígísíiníri,

naákaraángére, naatégeéréeye, naaruúsíri, naatuurífíyi, naasiitáákére, naakuundírfíyi ;

naamohaáye 「彼は彼(別人)に与えた」, naamobóhére, naagesohíri, naamobérékére,

naamutírimíkíri, naamubígísíiniri<sup>24)</sup>, naagekaráangére, naamotégééréeye, naakíruúsíri,

22) naabígísíiniri と発音することが多いが、次の naakáráangere の発音と矛盾する。

23) ここにあげてない例であるが、naagúsífkere 「私はそれ(クラス II)を閉めた」とか naabátáángátere 「私は彼らを導いた」という発音が録音されている。前注のこととも考慮すると、~ $\bar{X}$ Ce とならんで~ $\bar{X}(C)V$ Ce のようなアクセントが混在しているのかも知れない。 $\bar{X}(C)V$ CV といったアクセントは、語尾が e の場合に存在する。§ 2-3-1 参照。語尾が ere の場合にも存在する(§ 5-1-14)が、問題のアクセントとは少し異なる。なお、§ 6-1-1 参照されたい。

また、 $\beta$  が Y/Z が  $\emptyset$  でも適用されるものであることに注意されたい。

24) naamubígísíiniri という発音もある。前々注、前注参照。

naamutuúríríyi, naamusítáakere, naagikuúndíríríyi ;  
 naihaáye 「彼は自分に与えた」, naibohére, naibérékére, naitirimíkíri, naibigísíniri,  
 naitegééréeye, naituúríríyi, naisiítáakere.

### § 2-2-3 今日の過去形 (2)

§ 2-2-2の形と同様の意味をあらわす形<sup>25)</sup>は、

主格接辞+ (対格接辞+) 語幹 + ere

という構造を有し、アクセントは次のように表示しうる。

S<sub>1</sub>CV(C)V<sup>X</sup>Ce ( $\alpha$ . X=Øなら, Ce は Céとなる。X=Øなら, Ce も Øでありうる。

「調整規則 XXV」と呼ぶ) /

S<sub>1</sub>CVCV<sup>X</sup>Ce ( $\beta$ . 「調整規則 XXVI」と呼ぶ)<sup>26)</sup>,

S<sub>1</sub>OCV(C)V<sup>X</sup>Ce (+XXIII), S<sub>1</sub>iCV(C)V<sup>X</sup>Ce (+XXIII) ;

S<sub>2</sub>C<sup>V</sup>CV<sup>X</sup>Ce ( $\alpha$ . X=Øなら, Ce は Céとなる。X=Øなら, Ce も Øでありうる。

「調整規則 XXVII」と呼ぶ) /

S<sub>2</sub>C<sup>V</sup>CVV<sup>X</sup>Ce ( $\alpha$ . 「調整規則 XXVIII」と呼ぶ) /

S<sub>2</sub>C<sup>V</sup>C<sup>V</sup><sup>X</sup>Ce ( $\alpha$ . X=Øなら, Ce は Céとなる。X=Øなら, Ce も Øでありうる。「調整規則 XXIX」と呼ぶ),

S<sub>2</sub>ÓC<sup>V</sup>CV<sup>X</sup>Ce ( $\alpha$ . X=Øなら, Ce は Céとなる。「調整規則 XXX」と呼ぶ) /

S<sub>2</sub>ÓCVV<sup>X</sup>Ce ( $\alpha$ . X=Øなら, Ce は Céとなる。「調整規則 XXXI」と呼ぶ),

S<sub>2</sub>iC<sup>V</sup>(C)V<sup>X</sup>Ce ( $\alpha$ . X=Øなら, Ce は Céとなる。「調整規則 XXXII」と呼ぶ).

tohaaye<sup>27)</sup> 「私たちは与えた」, tobóhere, tosohiri, tobérékére, tutirimíkíri, tubigisiíníri, tokaraángére, totegééréeye, turuusíri, tutuuríríyi, tusiitaákére ;

tomohaayé 「私たちは彼に与えた」, tomoboheré, togesohirí, tomobérékére, tumutirimíkíri, tumubigisiíníri, togekaraángére, tomotegééréeye, tukiruuusíri, tumutuuríríyi, tumusiitáákére ;

tuihaayé 「私たちは自分に与えた」, tuibóheré, tuibérékére, tuitirimíkíri,

tuibigisiíníri, tuitegééréeye, tuituuríríyi, tuisiitaákére ;

baháayé 「彼らは与えた」, babóhére, basóhíri, babérékére, batírimíkíri, babígisiíníri<sup>28)</sup>,

bakáraangére, batégéeréeye, barúúsíri, batúúríríyi, basítáákére ;

bamóhaayé 「彼らは彼に与えた」, bamóbóheré, bagésóhirí, bamóbérékére,

bamútírimíkíri, bamúbígisiíníri, bagékáraángére, bamótégééréeye, bakíruusíri,

bamútuuríríyi, bamusiitáákére ;

25) § 2-2-2の形との意味の違いについては、§ 2-2-3の形のほうがたった今の出来事をあらわすとか、§ 2-2-2の形は何か聞かれた時に答えるのに用いるが、§ 2-2-3の形のほうは自分からいう場合に用いるとかの報告があったが、確かなことは未詳である。多分、前者の内省報告が事実に近いのではないか。

26) S<sub>1</sub>CVCV<sup>X</sup>Ce が予想されるのに、どういうわけかこうである。

27) Odden (1987) は、この構造のものは、語幹プラス語尾の全体が中位の高さになるか、全体は低いが末尾が上昇調になるとしている (pp.312/323) が、筆者のデータに関する限り、そんなことはなく、全体が低い。

28) この形とその前の形のアクセントは、こういう録音もあるが、語幹第2音節が低い発音も録音されている。後者は、極めて不可解である。

baiháayé 「彼らは自分に与えた」, baibóhéré, baibérékére, baitírimíkíri, baibígíssíníri, baitégrééeye, baitúúríríyi, baisíitáákére.

#### § 2-2-4 過去否定形

§ 2-2-1の形に対応する否定形は,

te + 主格接辞 + a + (対格接辞 + )語幹 + ere

という構造を有する。通常、後方に hai があらわれる。ここでは、hai が直接続かない形をあげる。アクセントは、次のように表示しうる。

teŚaẊCe, teŚaÓẊCe, teŚiẊCe ; 'SaẊCe, 'SiẊCe.

tenáahááye 「私は与えなかった」, tenáabóhéré, tenáasóhíri, tenáabérékére, tenáatírimíkíri, tenáabígíssíníri, tenáakáráángére, tenáatégrééeye, tenáarúúsíri, tenáatúúríríyi, tenáasíitáákére, tenáakúúndíríríyi ;

tenáamóhááye 「私は彼に与えなかった」, tenáamóbóhéré, tenáagésóhíri, tenáamóbérékére, tenáamútírimíkíri, tenáamúbígíssíníri, tenáagékáráángére, tenáamótégrééeye, tenáakíruúsíri, tenáamútúúríríyi, tenáamúsíitáákére, tenáamukúúndíríríyi ;

tenáihááye 「私は自分に与えなかった」, tenáibóhéré, tenáibérékére, tenáitírimíkíri, tenáibígíssíníri, tenáítégrééeye, tenáitúúríríyi, tenáisíitáákére, tenáikúúndíríríyi ; taahááye 「彼は与えなかった」, etc. ;

taamóhááye, etc. ;

taihááye, etc.

#### § 2-2-5 今日の過去否定形

§ 2-2-2/3の形に対応する否定形は,

te + 主格接辞 + (対格接辞 + )語幹 + ere

という構造を有する。通常、後方に hai があらわれる。ここでは、hai が直接続かない形をあげる。アクセントは、次のように表示しうる。

teŚCVXẊCe (X=Øなら, Ce は Céとなる。「調整規則 XXXIII」と呼ぶ) /

teŚCVVẊCe (X=Øなら, Ce は Céとなる。「調整規則 XXXIV」と呼ぶ),

teŚOCVẊCe, teŚiCVẊCe ;

'SCV(C)VẊCe (X=Øなら, Ce は Céとなる。「調整規則 XXXV」と呼ぶ),

'SÓCVẊCe, 'SiẊCe.

tebáhaayé 「彼らは与えなかった」, tebábóhéré, tebásóhíri, tebábérékére, tebátírimíkíri, tebábígíssíníri, tebákáráángére, tebátégrééeye, tebáruusíri, tebátuuríríyi, tebásiitáákére, tebákuundíríríyi ;

tebámohaáye 「彼らは彼に与えなかった」, tebámobóhéré, tebágésohíri,

tebámoberékére, tebámutírimíkíri, tebámubígíssíníri, tebágékaráángére,

tebámotégrééeye, tebákiruúsíri, tebámutoúríríyi, tebámusiitáákére,

tebámukuúndíríríyi ;

tebáhaáye 「彼らは自分に与えなかった」, tebáibóhéré, tebáiberékére, tebáitírimíkíri,

tebáibígíssíníri, tebáitegrééeye, tebáituúríríyi, tebáisiitáákére, tebáikuúndíríríyi ;

taháayé 「彼は与えなかった」, tabóheré, tasóhirí, tabérekére, tatírimíkíri, tabígisíñíri, takáraángére, tatégeéréeye, tarúusíri, tatúurírífíyi, tasiítáákére, takúundírífíyi ; tamóhaáye 「彼は彼に与えなかった」, tamóbóhére, tagésohíri, tamóberékére, tamútirímíkíri, tamúbigísíñíri, tagékaráángére, tamótégééréeye, takíruúsíri, tamútuúrífíyi, tamúsiítáákére, tamúkuúndírífíyi ; taihááye 「彼は自分に与えなかった」, taibóhére, taibérékére, taitírimíkíri, taibígisíñíri, taitégééréeye, taitúúrífíyi, taisiítáákére, taikúúndírífíyi.

### § 2-2-6 完了否定形（2）

§ 2-1-1の形に対応する否定形が、§ 2-1-6の形以外にもう一つあり、

te + 主格接辞 + a + ka + (対格接辞+)語幹 + ere

という構造を有する。通常、後方に *hai* があらわれる。ここでは、*hai* が直接続かない形をあげる。アクセントは、次のように表示しうる。

teŠakáXCe, teŠakáÓXCe, teŠakáÍXCe ; 'SakáXCe, 'SakáÓXCe, 'SakáÍXCe.  
 tenáakáhááye 「私は与えてない」, tenáakábóhére, tenáagásóhíri, tenáakábérékére,  
 tenáagátírimíkíri, tenáakábígísíñíri, tenáagákáráángére, tenáagátégééréeye,  
 tenáakárúusíri, tenáagátúúrífíyi, tenáagásíítáákére, tenáagákúúndírífíyi ;  
 tenáakámóhááye 「私は彼に与えてない」, tenáakámóbóhére, tenáakágésóhíri,  
 tenáakámóbérékére, tenáakámútírimíkíri, tenáakámúbígísíñíri, tenáakágékáráángére,  
 tenáakámótégééréeye, tenáagákíruúsíri, tenáakámútúúrífíyi, tenáakámúsiítáákére,  
 tenáakámukúúndírífíyi ;  
 tenáakáhááye 「私は自分に与えてない」, tenáakábóhére, tenáakábérékére,  
 tenáagáitírimíkíri, tenáakábígísíñíri, tenáagáitégééréeye, tenáagáitúúrífíyi,  
 tenáagáisíítáákére, tenáagáíkúúndírífíyi ;  
 taakáhááye 「彼は与えてない」, etc. ;  
 taakámóhááye 「彼は彼に与えてない」, etc. ;  
 taakáhááye 「彼は自分に与えてない」, etc.

### § 2-2-7 今日の過去進行形

その日のある時点において行われつつあった行為をあらわす形は、

N + 主格接辞 + a + ka + (対格接辞+)語幹 + ere<sup>29)</sup>

という構造を有し、アクセントは次のように表示しうる。

NSakaCVXCe (+ XXIV), NSakaÓXCe (+ XXI), NSakaiXCe (+ XXI).  
 naakahaáye 「私は与えていた」, naakabóhére, naagashohíri, naakaberékére,  
 naagatirímíkíri, naakabigísíñíri, naagakáráángére, naagatégééréeye, naakuúrífíyi,  
 naagatuúrífíyi, naagasiítáakere, naagakuúndírífíyi ;  
 naakamohááye 「私は彼に与えていた」, naakamobóhére, naakagesóhíri,

29) Odden (1987) はこの形を recent past tense と呼んであげているが、ka の部分をすべて ga で表記している (p.325) が、筆者のデータに関する限り、「はじめに」で述べた異化現象によって k が g になるのであって、異化現象が働く場合に ga であらわれることはない。

naakamobérékére, naakamutírimíkíri, naakamubígíssíniri, naakagekáráangere,  
 naakamotégééréeye, naagakirúúsíri, naakamutúúrífíyi, naakamusítáakere,  
 naakamukúúndírfíyi ;  
 naakaiháaye 「私は自分に与えていた」, naakaibóhére, naakaibérékére, naagaitírimíkíri,  
 naakaibígíssíniri, naagaitégééréeye, naagaitúúrífíyi, naagaisítáakere,  
 naagaikúúndírfíyi.

30)

### § 2-2-8 今日の過去進行否定形

§ 2-2-7 の形に対応する否定形は,

te + 主格接辞 + a + ka + (対格接辞 + )語幹 + ere

という構造を有する。通常、後方に hai があらわれる。ここでは、hai が直接続かない形をあげる。アクセントは次のように表示しうる。

teSákáCVXCe, teSákáOXCe, teSákaiXCe ; 'SákáCVXCe, 'SákáOXCe, 'SákaiXCe.  
 tenáákáhaáye 「私は与えていなかった」, tenáákábóhére, tenáágásöhíri,  
 tenáákáberékére, tenáágátirírimíkíri, tenáákábigíssíniri, tenáágákáráangére,  
 tenáágátegééréeye, tenáákáruúsíri, tenáágátuúrífíyi, tenáágásiítáakére,  
 tenáágákuúndírfíyi ;  
 tenáákámoháaye 「私は彼に与えていなかった」, tenáákámobóhére, tenáákágesöhíri,  
 tenáákámobérékére, tenáákámutírimíkíri, tenáákamubígíssíniri, tenáákágekáráangére,  
 tenáákámotégééréeye, tenáágákirúúsíri, tenáákámutúúrífíyi, tenáákamusítáakére,  
 tenáákámukúúndírfíyi ;  
 tenáákaiháaye 「私は自分に与えていなかった」, tenáákaibóhére, tenáákaibérékére,  
 tenáágaitírimíkíri, tenáákaibígíssíniri, tenáágaitégééréeye, tenáágaitúúrífíyi,  
 tenáágaisítáakére, tenáágaikúúndírfíyi ;  
 taákáhaáye 「彼は与えていなかった」, etc. ;  
 taákámoháaye 「彼は彼に与えていなかった」, etc. ;  
 taákaiháaye 「彼は自分に与えていなかった」, etc.

### § 2-3 語尾 e を用いる形

語幹 + e の形は、語幹が i で終わる使役動詞の場合、i がとれて i がつく。

#### § 2-3-1 今日の未来形

その日に行われる行為をあらわす<sup>31)</sup>形は,

(N+)主格接辞 + raa + (対格接辞 + )語幹 + e<sup>32)</sup>

という構造を有し、アクセントは次のように表示しうる。末尾の母音が e でないこともある

30) naakabígíssíniri, naagaisítáakere, naakamubígíssíniri, naakamusítáakere といった発音も録音されている。注23) 参照。

31) こういう報告であったが、本当にその日に行われることしかあらわしえないので、疑問がある。本論文では省略しているが、uguúcha 「来る」のこの形に § 4-1 に見る接続法形を続けて、その日に限らず、未来の行為をあらわす形がある。

32) N があらわれるのは年上の人に対する場合だ、という報告があった。

が、eで代表させる。

(N) SraáX(C)VCe ( $X = \emptyset$ なら、(C)Vは(C)Vとなる。 $X = \emptyset$ なら(C)VもØでありうる。

「調整規則 XXXVI」と呼ぶ),

(N) SraáÓX(C)VCe (+XXXVI), (N) SraíX(C)VCe (+XXXVI).<sup>33)</sup>

ntoraáhe「私たちは与える」, ntoraa**bóhe**, ntoraa**sóhi**, ntoraa**béreke**, ntoraa**tírimíki**, ntoraa**bígísíni**, ntoraa**káraange**, ntoraa**tégeerere**, ntoraa**ráuusi**, ntoraa**túuriri**, ntoraa**síítake**, ntoraa**kúundíriri**;

ntoraámóhe「私たちは彼に与える」, ntoraa**móbóhe**, ntoraa**ágésóhi**, ntoraa**móbéreke**, ntoraa**mútírimíki**, ntoraa**múbígísíni**, ntoraa**ágékáraange**, ntoraa**mótégeerere**, ntoraa**kíruusi**, ntoraa**mútúuriri**, ntoraa**músíítake**, ntoraa**mukúundíriri**;

ntoraíhe「私たちは自分に与える」, ntoraa**bóhe**, ntoraa**béreke**, ntoraa**tírimíki**, ntoraa**bígísíni**, ntoraa**tégeerere**, ntoraa**ítúuriri**, ntoraa**síítake**, ntoraa**kúundíriri**; toraáhe, etc.

### § 2-3-2 今日の未来否定形

§ 2-3-1の形に対応する否定形は,

te + 主格接辞 + raa + (対格接辞+)語幹 + e

という構造を有する。通常、後方に hai があらわれる。ここでは、hai が直接続かない形をあげる。アクセントは次のように表示しうる。

teŚrááXCe, teŚrááÓXCe, teŚráíXCe.

tetóráahe「私たちは与えない」, tetóráabóhe, tetóráásóhi, tetóráabéreke, tetóráatírimíki, tetóráabígísíni, tetóráákáraange, tetóráatégeerere, tetóráárusi, tetóráatúuriri, tetóráasíítake, tetóráákúundíriri;

tetóráámóhe「私たちは彼に与えない」, tetóráámóbóhe, tetóráágésóhi, tetóráámóbéreke, tetóráámútírimíki, tetóráámúbígísíni, tetóráágékáraange, tetóráámótégeerere, tetóráákfrusi, tetóráámútúuriri, tetóráámúsíítake, tetóráámukúundíriri;

tetóráihe「私たちは自分に与えない」, tetóráibóhe, tetóráibéreke, tetóráitírimíki, tetóráibígísíni, tetóráítégeerere, tetóráítúuriri, tetóráisíítake, tetóráikúundíriri.

### § 2-4 複合形

この言語では、複合形にかなり重要なものがある。

#### § 2-4-1 過去進行形

前日もしくはそれ以前の時点で行われつつあった行為をあらわす形は,

N + 主格接辞 + a + re + ko + (対格接辞+)語幹 + a

という構造を有する。前半部分は、コピュラの過去形である。アクセントは、次のように表示しうる。

NSáre kóCVXCa ( $X \leq (C)V(C)V$ なら、CaはCáとなる。 $X = \emptyset$ なら、CVもØでありう

33) 語幹 + eといいうのは、§ 4-1に見る接続法形に同じはずなのに、アクセントが異なるのは、少し不思議である。

るが、CaはCáとはならない。「調整規則 XXXVII」と呼ぶ),  
 NSáré kóŌCa (+XVI), NSáré koīCa (+XVI)  
 naáré kóha「私は与えていた」, naáré kóboghá, naáré gósohiá, naáré kóberéká,  
 naáré gútirímíkiá, naáré kúbigísínia, naáré gókaráangá, naáré gótegééréra,  
 naáré kúruúsíá, naáré gútúríriá, naáré gúsiítááka, naáré gúkuúndíríria;  
 naáré kómohá「私は彼に与えていた」, naáré kómobóhá, naáré kógesohiá,  
 naáré kómobéréká, naáré kúmutírimíkiá, naáré kúmubígísínia, naáré kógekáráangá,  
 naáré kómotégééréra, naáré gúkirúúsíá, naáré kúmutúúríria, naáré kúmusítááka,  
 naáré kúgikúúndíríria;  
 naáré kuihá「私は自分に与えていた」, naáré kuibóhá, naáré kuiberéká, naáré guitírimíkiá,  
 naáré kuibígísínia, naáré guitégééréra, naáré guitúúríria, naáré guisítááka,  
 naáré guikúúndíríria.

### § 2-4-2 現在進行形

§ 2-1-2の形と同様の意味をあらわす形は,

N + ko + (対格接辞+)語幹+a + 主格接辞+re

という構造を有する。後半部分は、コピュラの現在形である。アクセントは、次のように表示しうる。

NkoCVX Šre, NkoŌ Šre, Nkoī Šre.

nkoha tére「私たちは与えている」, nkoboghá tére, ngosohiá tére, nkoberéká tére,  
 ngutirímíkiá tére, nkubígísíniá tére, ngokaráangá tére, ngotegéérérá tére,  
 nkuruúsíá tére, ngotúríriá tére, ngusiítááka tére, ngukuúndíríriá tére;  
 nkomohá tére「私たちは彼に与えている」, nkomobóhá tére, nkogesohiá tére,  
 nkomobéréká tére, nkumutírimíkiá tére, nkumubígísíniá tére, nkogekáráangá tére,  
 nkómotégéérérá tére, ngukirúúsíá tére, nkumutúúríriá tére, nkumusítááka tére,  
 nkumukúúndíríriá tére;  
 nkuihá tére「私たちは自分に与えている」, nkuiibóhá tére, nkuiberéká tére,  
 nguitírimíkiá tére, nkuibígísíniá tére, nguitégéérérá tére, nguitúúríriá tére,  
 nguisítááka tére, nguikúúndíríriá tére.

なお、目的語を伴う場合、N+目的語が先行し、

主格接辞+V+ko+(対格接辞+)語幹+a

が後続する形が可能である。主格接辞+Vの形は、単数1人称:N, 2人称:o, 3人称:aa,  
 複数1人称:too, 2人称:moo, 3人称:baaである。この場合の後者のアクセントは、次のように表示しうる。単数1・2人称の場合の主格接辞+VはSであらわす。ko以降のアクセントは、§ 1のそれに等しい。

SkoCVCVXCa (+I) / SkoCVVVXCa (+II) / SkoCVCVXCa (+III),

SkoÓCVXCa (+IV) / SkoÓCVVXCa (+V),

SkoíCVXCa (+IV) / SkoíCVVXCa (+V);

SVkoCVCVXCa (+I) / SVkoCVVVXCa (+II) / SVkoCVCVXCa (+III),

SVkoÓCVXCa (+IV) / SVkoÓCVVXCa (+V),

SVkoiCVXCa (+IV) / SVkoiCVVXCa (+V).

noomoóna nkohá 「私は子供(omoóna)に与えている」, ~ nkobóha, ~ nkobéréka,  
 ~ ngutírimikíá, ~ nkubígísínia,  
 ~ ngokáraangéra (<ogokáraangéra 「～に油であげてやる」), ~ ngotégeeréra,  
 ~ ngutúúrírá, ~ ngusíitáákéra ;  
 noomoóna nkomóbóherá 「私は彼のために子供を縛っている」  
 (<okobóherá 「～のために縛る」),  
 ~ nkomóbérekéra 「私は彼のために子供をおぶっている」  
 (<okobérékerá 「～のためにおぶう」),  
 ~ nkumúsiitáákéra ;  
 noomoóna nkuíbóherá 「私は自分のために子供を縛っている」, ~ nkuíbérékéra,  
 ~ nguíkáraángéra, ~ nguísiitáákéra.  
 noomoóna tookohá 「私たちは子供に与えている」, ~ tookobóha, ~ tookobéréka,  
 ~ tuugutírimikíá, ~ tuukubígísínia, ~ toogokáraangéra,  
 ~ toogotégeeréra, ~ tuugutúúrírá, ~ tuugusíitáákéra ;  
 noomoóna tookomóbóherá 「私たちは彼のために子供を縛っている」,  
 ~ tookomóbérekéra, ~ tuukumúsiitáákéra ;  
 noomoóna tuukuíbóherá 「私たちは自分のために子供を縛っている」,  
 ~ tuukuíbérékéra, ~ tuuguísiitáákéra.

### § 2-4-3 過去進行否定形

§ 2-4-1の形に対応する否定形は,

te + 主格接辞 + a + re + ko + (対格接辞+)語幹 + a

という構造を有する。通常、後方に *hai* があらわれる。ここでは、*hai* が直接続かない形をあげる。アクセントは、次のように表示しうる。

teSáré kóCVXCa (+XXXVII), teSáré kóOXCa (+XVI), teSáré koiXCa (+XVI).

tenaáré kóha 「私は与えていなかった」, tenaáré kóbohá, tenaáré gósohiá,

tenaáré kóbéréka, tenaáré gútírimikíá, tenaáré kúbigísínia, tenaáré gókaráángá,

tenaáré gótegééréra, tenaáré kúruúsiá, tenaáré gótuúrírá, tenaáré gúsiitááka,

tenaáré gúkuúndíríria ;

tenaáré kómohá 「私は彼に与えていなかった」, tenaáré kómobóhá, tenaáré kógesóhiá,

tenaáré kómobéréka, tenaáré kúmutírmíkia, tenaáré kúmubígísínia, tenaáré kógekáráángá,

tenaáré kómotégééréra, tenaáré gúkirúúsiá, tenaáré kúmutúúríria, tenaáré kúmusíitááka,

tenaáré kúmukúúndíríria ;

tenaáré kuihá 「私は自分に与えていなかった」, tenaáré kuibóhá, tenaáré kuibéréka,

tenaáré guítírimíkia, tenaáré kuibígísínia, tenaáré guítégeéréra, tenaáré guítúúríria,

tenaáré guisíitááka, tenaáré guikúúndíríria.

### § 2-4-4 過去完了形

前日もしくはそれ以前の時点で既に行われていた行為をあらわす形は,

N + 主格接辞 + a + re + 主格接辞 + (対格接辞+)語幹 + ere

という構造を有し、アクセントは、次のように表示しうる。

NSáré ŠCVCVXCe (+XXX) / NSáré ŠCVVXCe (+XXXI),

NSáré ŠÓCVXCe (+XXIV), NSáré ŠíCVXCe (+XXIV).

ntoóré tóhaayé 「私たちは既に与えていた」, ntoóré tóbóheré, ntoóré tósóhirí,

ntoóré tóbérekére, ntoóré tútírimíkíri, ntoóré túbígisíñíri, ntoóré tókáraángére,

ntoóré tótégeéréeye, ntoóré túruusíri, ntoóré tútuuríriyi, ntoóré túsiitáákére,

ntoóré túkuundíríiyi ;

ntoóré tómohaaye 「私たちは既に彼に与えていた」, ntoóré tómóbhére,

ntoóré tógésohíri, ntoóré tómóberékére, ntoóré túmútirímíkíri, ntoóré túmúbigísíñíri<sup>34)</sup>,

ntoóré tógékaráángére, ntoóré tómótegeéréeye, ntoóré tükíruúsíri, ntoóré túmuúríriyi,

ntoóré túmúsiitáakere, ntoóré túmúkuúndíríiyi ;

ntoóré túíhaaye 「私たちは既に自分に与えていた」, ntoóré túíbhére, ntoóré túíberékére,

ntoóré tútírimíkíri, ntoóré túbigísíñíri, ntoóré tútegeéréeye, ntoóré tútuúríriyi,

ntoóré túsiitáakere, ntoóré túkuúndíríiyi.

#### § 2-4-5 過去完了否定形

§ 2-4-4の形に対応する否定形は,

te + 主格接辞 + a + re + 主格接辞 + (対格接辞 + )語幹 + ere

という構造を有する。通常、後方に *hai* があらわれる。ここでは、*hai* が直接続かない形をあげる。アクセントは、次のように表示しうる。

teSáré ŠCVCVXCe (X=Øなら, Ce は Céとなる。「調整規則 XXXVIII」と呼ぶ) /

teSáré ŠCVVXCe (X=Øなら, Ce は Céとなる。「調整規則 XXXIX」と呼ぶ),

teSáré ŠÓCVXCe, teSáré ŠíCVXCe.

tetoóré tóhaayé 「私たちはまだ与えていなかった」, tetoóré tóbóheré, tetoóré tósóhirí, tetoóré tóbérekére, tetoóré tútírimíkíri, tetoóré túbígisíñíri, tetoóré tókáraángére, tetoóré tótégeéréeye, tetoóré túruusíri, tetoóré tútuuríriyi, tetoóré túsiitáákére, tetoóré túkuundíríiyi ;

tetoóré tómohaaye 「私たちはまだ彼に与えていなかった」, tetoóré tómóbhére,

tetoóré tógésohíri, tetoóré tómóberékére, tetoóré túmútirímíkíri, tetoóré túmúbigísíñíri,

tetoóré tógékaráángére, tetoóré tómótegeéréeye, tetoóré tékíruúsíri ;

tetoóré túíhaaye 「私たちはまだ自分に与えていなかった」, tetoóré túíbhére,

tetoóré túíberékére, tetoóré tútírimíkíri, tetoóré túbigísíñíri, tetoóré tútegeéréeye,

tetoóré tútuúríriyi, tetoóré túsiitáákére, tetoóré túkuúndíríiyi.

#### § 2-4-6 現在継続形

「まだ～している」ということをあらわす形は,

N + ko + (対格接辞 + )語幹 + a + 主格接辞 + ke + re

という構造を有する。アクセントは、次のように表示しうる。

NkoCVX Škére, NkoOX Škére, NkoiX Škére.

34) ntoóré túmúbigísíñíri という発音も録音されている。注23) 参照。

nkoha tókére 「私たちはまだ与えている」, nkobóhá tókére, ngosohiá tókére, nkobéréká tókére, ngutirímíkíá tókére, nkubigísíniá tókére, ngokaráángá tókére, ngotegéérérá tókére, nkuruúsíá tókére, ngotuúririá tókére, ngusiítááká tókére, ngukuúndírírá tókére ;  
 nkomohá tókére 「私たちはまだ彼に与えている」, nkomobóhá tókére, nkogesohiá tókére, nkomobéréká tókére, nkumutírimíkíá tókére, nkumubígísíniá tókére, nkogekáráángá tókére, nkomotégéérérá tókére, ngukirúúsíá tókére, nkumutúúririá tókére, nkumusíítááká tókére, nkumukúúndírírá tókére ;  
 nkuihá tókére 「私たちはまだ自分に与えている」, nkuibóhá tókére, nkuibéréká tókére, nguitírimíkíá tókére, nkuibígísíniá tókére, nguitégéérérá tókére, nguitúúririá tókére, nguisíítááká tókére, nguikúúndírírá tókére.

### § 2-5 否定形の hai が続く場合

これまで、否定形のアクセントを *hai* が直接続かない形で示してきたが、ここでは、*hai* が直接続く場合を見る。

(1) *hai* が続かない否定形は、すべて～XCV というアクセントを有するが、調整規則が適用されず、従って末尾の音節が低く終わっている場合は、*hai* が直接続くと、その CV が高くなり *hai* が低くなる。左側に *hai* の続かない形、右に続く形を示す。

tituúkubígísínia	vs.	tituúkubígísíniá <i>hai</i>	(§ 2-1-7)
tetorásíitáákéra	vs.	tetorásíitáákérá <i>hai</i>	(§ 2-1-8)
titúrítírimíkia	vs.	titúrítírimíkíá <i>hai</i>	(§ 2-1-9)
tenáahááye	vs.	tenáahááyé <i>hai</i>	(§ 2-2-4)

(2) 調整規則によって末尾の CV が高くあらわれている場合は、*hai* は高くあらわれる。

tituúgutírimíká	vs.	tituúgutírimíkíá <i>hái</i>	(§ 2-1-7)
tetorátúúririá	vs.	tetorátúúririá <i>hái</i>	(§ 2-1-8)
tetórébéréká	vs.	tetórébéréká <i>hái</i>	(§ 2-1-9)

調整規則の他の部分が働いて末尾が低くあらわれている場合について、次に具体的に見る。ここでは、そこにどういう規則が働いているのかの考察は省略する。この言語のすべての場合を尽くしている保証がないからである。

#### § 2-1-5 未然形

対格接辞等があらわれない場合、*hai* が続かなければ次のようないき方である。

teŚraaCVCVXCa (+I) / teŚraaCVCVXCa (+II) / teŚraaCVCVXCa (+III).

このうち、問題となるのは、teŚraaCVCVXCa (+I) が適用される場合で、次の例のような場合である。

tetóraabóha	vs.	tetóraabóhá <i>hai</i>	
tetóraabéréká	vs.	tetóraabéréká <i>hái</i>	

対格接辞等があらわれる場合、*hai* が続かなければ次のようないき方である。

teŚraaÓCVCVXCa (+XIV) / teŚraaÓCVVXCa (+XV), teŚraiXCa (+XVI).

このうち、問題となるのは、teŚraaÓCVCVXCa (+XIV) が適用される場合で、次の例のような場合である。

tetóraamóbóha	vs.	tetóraamóbóhá <i>hái</i>	
---------------	-----	--------------------------	--

### § 2-1-6 完了否定形

すべて、(1) (2) で説明できる。

### § 2-1-7 現在否定形

対格接辞等があらわれない場合、hai が続かなければ次のようなアクセントである。

*teSkó/teS̄ko-CVCVXCa (+I) / teSkó/teS̄ko-CVVXCa (+II) /  
teSkó/teS̄ko-CVCVXCa (+III).*

このうち、問題となるのは、*teSkó/teS̄ko-CVCVXCa (+I)* が適用される場合で、次の例のような場合である。

*tetoókobóha vs. tetoókobóhá hai  
tetoókobéréka vs. tetoókobéréka háí*

対格接辞等があらわれた場合、hai が続かなければ次のようなアクセントである。

*teSkó/teS̄ko-ÓCVXCa (+XIV) / teSkó/teS̄ko-ÓVVXCa (+XV),  
teSkó/teS̄ko-íCVXCa (+XIV) / teSkó/teS̄ko-íVVXCa (+XV).*

このうち、問題となるのは、*teSkó/teS̄ko-ÓCVXCa (+XIV)*, *teSkó/teS̄ko-íCVXCa (+XIV)* が適用される場合で、次の例のような場合である。

*tetoókomóbóha vs. tetoókomóbóhá háí  
tituúkuíbóha vs. tituúkuíbóhá háí*

### § 2-1-8 現在進行否定形

対格接辞等があらわれない場合、hai が続かなければ次のようなアクセントである。

*teSráCVCVXCa (+XVIII) / teSráCVVVXCa.*

このうち、問題となるのは、*teSráCVCVXCa (+XVIII)* が適用される場合で、次の例のような場合である。

*tetoráha vs. tetoráhá hai  
tetorábóha vs. tetorábóhá hai  
tetorábéréka vs. tetorábéréka háí  
tetorárúusia vs. tetorárúusia háí*

対格接辞等があらわれた場合、hai が続かなければ次のようなアクセントである。

*teSráÓCVXCa (+XIV) / teSráÓVVXCa (+XV),  
teSráiCVCVXCa (+XIV) / teSráiCVVVXCa (+XV).*

このうち、問題となるのは、*teSráÓCVXCa (+XIV)* が適用される場合で、次の例のような場合である。

*tetorámóha vs. tetorámóhá háí  
tetorámóbóha vs. tetorámóbóhá háí*

### § 2-1-9 未来否定形

対格接辞等があらわれない場合、hai が続かなければ次のようなアクセントである。

*teSréCVCVXCa (+XIX) / teSréCVVVXCa (+XII).*

このうち、問題となるのは、*teSréCVCVXCa (+XIX)* が適用される場合で、次の例のような場合である。

*tetóréha vs. tetóréhá háí  
tetórébóha vs. tetórébóhá háí*

対格接辞等があらわれた場合、hai が続かなければ次のようなアクセントである。

teSréÓCVXCa (+XX), teSríCVXCa (+XX),  
このうち、問題となるのは、次の例のような場合である。

tetórémóha vs. tetórémóha háí

#### § 2-2-4 過去否定形

すべて、(1)で説明できる。

#### § 2-2-5 今日の過去否定形

すべて、(1)で説明できる。

#### § 2-2-6 完了否定形

すべて、(1)で説明できる。

#### § 2-3-2 今日の未来否定形

すべて、(1)で説明できる。

#### § 2-4-3 過去進行否定形

対格接辞等があらわれない場合、haiが続かなければ次のようなアクセントである。

teSáré kóCVXCa (+XXXVII).

このうち、問題となるのは、次の例のような場合である。

tenaáré kóha vs. tenaáré kóha háí

対格接辞等があらわれる場合、haiが続かなければ次のようなアクセントである。

teSáré kóOXCa (+XVI), teSáré koiXCa (+XVI).

このうち、問題となるのは、次の例のような場合である。

tenaáré kómobóha vs. tenaáré kómobóhá háí

#### § 2-4-5 過去完了否定形

すべて、(1)(2)で説明できる。

### § 3. 命令・禁止形

#### § 3-1 命令形

##### § 3-1-1 対単数命令形

相手が1人の場合の命令形は、

ta + (対格接辞+)語幹+a

という構造を有し、アクセントは、次のように表示しうる。

taC<sup>V</sup>(<sup>V</sup>)X (X=Caなら、(<sup>V</sup>)は(V)となる。X=Øなら、( )内の<sup>V</sup>はあらわれず、C<sup>V</sup>は

CVとなり、taはtáとなる。「調整規則 XL」と呼ぶ)、

taÓX, taÍX.

táha<sup>35)</sup>「与えよ」, tabóha, tasóhia, tabérēka, tatírimikia, tabígisiinia, takáraanga,

tatégeerera, tarúusia, tatúúririria, tasíítaaka, takúúndiriria;

tamóha「彼に与えよ」, tamóbóha, tagésohia, tamóbérēka, tamútirimikia, tamúbigisiinia,

tagékaraanga, tamótégeerera, takíruusia, tamútuuriria, tamúsiitaaka, tagíkuundiriria;

35) 実際の発音は、haが下降調である。これをどう解釈するかまだ結論が出ないが、一応「低」の変異と考えておく。

taíha 「自分に与えよ」, taíboha, taíbéréka, taítirimikia, taíbigisiinia, taítegeerera, taítuuriria, taísitaaka.

### § 3-1-2 対複数命令形

相手が複数の場合の命令形は、

複数 2 人称主格接辞 + ta + (対格接辞 + )語幹 + a

という構造を有し、アクセントは、次のように表示しうる。

StáX, StáOX<sup>36)</sup>, StafX.

motáha 「(君たち)与えよ」, motábøha, motásohia, motábéréka, motátirimikia, motábigisiinia, motákaraanga, motátegeerera, motáruusia, motáuuriria, motásiitaaka, motákuundiriria ;

motámoha 「彼に与えよ」, motámobøha, motágésohia, motámobéréka, motámutirimikia, motámubigisiinia, motágékaraanga, motámotégeerera, motákiruusia, motámutuuriria, motámuuttaaka, motágikuundiriria ;

motaíha 「自分に与えよ」, motaíboha, motaíbéréka, motaítirimikia, motaíbigisiinia, motaítegeerera, motaítuuriria, motaísitaaka.

### § 3-2 禁止形 (1)

相手に禁止する場合の形の一つは、

主格接辞 + aang + e + ko + (対格接辞 + )語幹 + a

という構造を有し、主格接辞は、もちろん、2 人称のそれである。-aang- は「～しない」という動詞の語幹(不定形は、okoóonga)である。アクセントは次のように表示しうる。

Saange kóXCa (X≤CV(C)V(C)V なら, Ca は Cá となる。「調整規則 XLI」と呼ぶ。), Saange kóÓXCa (+ XVI), Saange kófXCa (+ XVI).

waange kóhá 「与えるな」, waange kóböhá, waange gósóhíá, waange kóbéréka, waange gútírimíkíá, waange kúbígísínia, waange gókáráángá, waange gótlégééréra, waange kúrúúsíá, waange gútúúrírá, waange gúsítááka, waange gúkúúndíríria ;

waange kómöhá 「彼に与えるな」, waange kómóböhá, waange kógesohíá, waange kómóbéréka, waange kúmútríímíkia, waange kúnúbígísínia, waange kógláráángá, waange kómótégééréra, waange gúkírááka,

waange kúmútúúríria, waange kúmúsítááka, waange kúglkúúndíríria ; waange kúlhá 「自分に与えるな」, waange kúlböhá, waange kúlbéréka, waange gútírimíkia, waange kúbígísínia, waange gótlégééréra, waange gúltúúríria, waange gúisítááka ;<sup>37)</sup>

moqonge kóhá 「(君たち)与えるな」, etc.

36) O が単数 1 人称の場合には, motaámboha の如くになる。再帰接辞があらわれる場合と同様である。

37) データでは、異化現象によって kui の代わりに gui があらわれるべきところ、しばしば kui であらわれている。

### § 3-3 禁止形 (2)

相手に禁止する場合のもう一つの形は、

主格接辞 + ta + kaa + (対格接辞+)語幹 + a

という構造を有し、主格接辞は、もちろん、2人称のそれである。アクセントは、次のように表示しうる。

StakaaCVCVXCa (+I) / StakaaCVVVXCa (+II) / StakaaCVCVXCa (+III),

StakaaÓCVCVXCa (+IV) / StakaaÓCVVXCa (+V), StakaiXCa (+XVI).

otakaahá「与えるな」, otakaabóha, otagaasohíá, otakaabéréká, otagaatírimikíá, otakaabígísiínia, otagaakáraangá, otagaatégeérera, otakaarúusíá, otakaatúríriá, otagaasítááka, otagaakúndíríria, otagaatúung'únúuchia ;

otakaamóhá「彼に与えるな」, otakaamóbóha, otakaagésöhia, otakaamóbéréká, otakaamútírimíkia, otakaamúbígísiínia, otakaagékáraángia, otakaamótégeérera, otagaakíruusíá, otakaamútuuríria, otakaamúsíitááka, otakaagíkuundíríria, otakaagítuung'únúuchia ;

otakaihá「自分に与えるな」, otakaibóhá, otakaibéréká, otagaitírimíkia, otakaibígísiínia, otagaitégeérera, otagaitúúríria, otagaisítááka, otagaitúung'únúuchíria ;<sup>38)</sup> motakaahá「(君たち)与えるな」, etc.

## § 4. 接続法形

「～が～するように」と訳すと何となく意味の通じる形があり、「接続法」と呼ばれることが多い。ここでは、その形とそれに対応する否定形を見る。

### § 4-1 接続法形

接続法肯定形は、

主格接辞 + (対格接辞+)語幹 + e

という構造を有し、アクセントは、次のように表示しうる。末尾が e でない場合も e で代表される。

ŚCVCVXCe ( $\alpha$ . X = Ø なら, Ce は Cé となる。X = Ø なら, Ce も Ø でありうる。Ce が Ø なら、直前の CV も Ø でありうるが、その前の CÍ は CV となる。「調整規則 XLII」と呼ぶ) /

ŚCVVVXCe ( $\alpha$ . X = Ø なら, Ce は Cé となる。「調整規則 XLIII」と呼ぶ),

ŚÓCVXCe ( $\alpha$ . X = Ø なら, CV は CÍ となる。X = Ø なら, Ce も Ø でありうるが、CV は CÍ とはならない。「調整規則 XLIV」と呼ぶ),

ŚíCVXCe (+XLIV).

tóhe 「私たちが与えるように、与えよう」, tóbóhe, tósóhi, tóbéréké, tútírimíki, túbígísiíní, tókáraángé, tótégeéreré, túruusí, tútuuríri, túsiitááke, túkuundíríri, tútuung'únúuchiri ;

38) データでは、異化現象によって kai の代わりに gai があらわれるべきところ、しばしば kai であらわれている。また、対格接辞があらわれる場合に比べて、 $\alpha$ が適用されないらしいのは変である。

tómóhę 「私たちが彼に与えるように、与えよう」, tómóbóhę, tógésóhi, tómóbérékę, túmútirímíki, túmúbigísíni, tógekaráángę, tómótegéérerę, túkíruúsi, túmútuúríri, túmúsiítáakę, túgíkuúndíríri, túmútuúng'únúuchiri ;  
 túlhę 「自分に与えよ」, túlbóhę, túlberékę, tútirímíki, túlbigísíni, túltegéérerę, túltuúríri, túlsiítáakę, túltuúng'únúuchiri.

#### § 4-2 接続法否定形

否定の接続法形は、§ 3-2および§ 3-3に見た形である。もちろん、禁止形としてでなく用いられる場合には、主格接辞は2人称に限られない。

baange kóhá 「彼らが与えないように」, etc.

batakaahá 「彼らが与えないように」, etc.

### § 5. 連体修飾形

次に、動詞がうしろから名詞を修飾する時の形のうちの主要なものを見る。連体修飾においては、被修飾名詞のあとに、関係代名詞として被修飾名詞のクラスに呼応してつぎのようなものが続くのが普通である。アクセント表示は省略する。

I ono, II gono, III reno, IV kenę, V eno, VI ronę, VII kano,  
 VIII bonę, IX kono, X bano, XI geno, XII bino, XIII chino,  
 XIV gano.

#### § 5-1 直接修飾形

動詞のあらわす行為の主体が被修飾名詞のあらわすものと一致する場合（「直接修飾」と呼ぼう）をまず見る。一部のアクセント記述は、未確認のものを含む。

##### § 5-1-1 過去形

§ 2-2-1の形に対応する直接修飾形は、§ 2-2-1の形から N を除いた

主格接辞 + a + (対格接辞 + )語幹 + ere

という構造を有する。アクセントは、次のように表示しうる。cf. § 2-2-1.<sup>39)</sup>

SaÓCe (+XXI), SaÓXCe (+XXII), SiXCe (+XXI).

omoóntó ónq aabóhéré 「縛った人」;

omoóntó ónq aamóbóhéré 「彼を縛った人」;

omoóntó ónq aibóhéré 「自分を縛った人」.

##### § 5-1-2 過去進行形

§ 2-4-1の形に対応する直接修飾形は、

主格接辞 + a + re + ko + (対格接辞 + )語幹 + a

という構造を有する。アクセントは、次のように表示しうる。cf. § 2-4-1.

Sáré kóCVXCa (+XXXVII), Sáré kóOXCa (+XVI),

39) この形の場合も、注22) 23) に見たようなことがある。

Sáré koiꝩCa (+XVI).

omoóntó ónq aáré kóbóhá 「縛っていた人」；

omoóntó ónq aáré kómobóhá 「彼を縛っていた人」；

omoóntó ónq aáré kuibóhá 「自分を縛っていた人」。

### § 5-1-3 今日の過去形

§ 2-2-2/3の形に対応する直接修飾形は、§ 2-2-3の形と同様、

主格接辞 + (対格接辞 + )語幹 + ere

という構造を有する。アクセントは、次のように表示しうる。

ŚCVCVꝩCe (+XXX) / ŚCVVꝩCe (+XXXI), ŚÓCVꝩCe (+XXIV),

SiCVꝩCe (+XIV)<sup>40)</sup>.

omoóntó ónq ábóheré 「縛った人」；

omoóntó ónq ámóbóhére 「彼を縛った人」；

omoóntó ónq aibóhére 「自分を縛った人」。

### § 5-1-4 今日の過去進行形

§ 2-2-7の形に対応する直接修飾形は、

主格接辞 + a + ka + (対格接辞 + )語幹 + ere

という構造を有する。アクセントは、次のように表示しうる。cf. § 2-2-7.

SakaCVꝩCe (+XXIV), SakaOꝩCe (+XXI), SakaiꝩCe (+XXI).

omoóntó ónq aakabóhére 「縛っていた人」；

omoóntó ónq aakamobóhére 「彼を縛っていた人」；

omoóntó ónq aakaibóhére 「自分を縛っていた人」。

### § 5-1-5 完了形

§ 2-1-1の形に対応する直接修飾形は、§ 2-1-1の形と同様、

主格接辞 + a + (対格接辞 + )語幹 + a

という構造を有する。アクセントは、次のように表示しうる。

SaꝩCa (α. X=Øなら、Ca は Cáとなる。「調整規則 XLV」と呼ぶ)，

SaÓꝩCa (β. X=Øなら、Ca は Cáとなる。「調整規則 XLVI」と呼ぶ)，

SiꝩCa (+XLV).

omoóntó ónqaabóha 「縛った人」，～～aarúusia, ～～aasíítáaka；

omoóntó ónq aamóbóha 「彼を縛った人」，～～aakírúusia，

～～aamúsíítáaka；

omoóntó ónq aibóha 「自分を縛った人」，～～aisíítáaka.

### § 5-1-6 現在形

§ 2-1-2および§ 2-4-2の形に対応する直接修飾形は、

主格接辞 + V + ko + (対格接辞 + )語幹 + a

40) Si が低いのが不可解であるが、録音はこうなっている。

という構造を有する。アクセントは、次のように表示しうる。cf. § 2-4-2.

SVkoCVCVXCa (+I) / SVkoCVVXCa (+II) / SVkoCVVCVXCa (+III),

SVkoÓCVXCa (+IV) / SVkoÓCVVXCa (+V),

SVkoiCVXCa (+IV) / SVkoiCVVXCa (+V).

omoóntó ónq aakobóha 「縛(つけて)る人」；

omoóntó ónq aakomóbóha 「彼を縛(つけて)る人」；

omoóntó ónq aakuíbóha 「自分を縛(つけて)る人」。

### § 5-1-7 今日の未来形

§ 2-3-1の形に対応する直接修飾形は、

主格接辞 + raa + (対格接辞 + )語幹 + e

という構造を有する。アクセントは、次のように表示しうる。cf. § 2-3-1.

SraáX(C)Vce (+XXXVI), SraáÓX(C)Vce (+XXXVI),

SrafX(C)Vce (+XXXVI).

omoóntó ónq araábóhe 「縛る人」；

omoóntó ónq araámóbóhe 「彼を縛る人」；

omoóntó ónq arafbóhe 「自分を縛る人」。

### § 5-1-8 未来形

§ 2-1-3/4の形に対応する直接修飾形は、

主格接辞 + a + re + (対格接辞 + )語幹 + a

という構造を有する。アクセントは、次のように表示しうる。cf. § 2-1-4.

SaréCVCVXCa (+XI) / SaréCVVXCa (+XII), SaréÓCVXCa (+XIII),

SarííCVXCa (+XIII).

omoóntó ónq aarébóha 「縛る人」, ~ ~ aaríruusíá, ~ ~ aarísiitááka ;

omoóntó ónq aarémóbóhá 「彼を縛る人」, ~ ~ aaríkíruúisia,

~ ~ aarímúsíítáaka ;

omoóntó ónq aarífbóhá 「自分を縛る人」, ~ ~ aarísiítáaka.

### § 5-1-9 過去否定形

§ 2-2-4の形に対応する直接修飾形は、

主格接辞 + ta + a + (対格接辞 + )語幹 + ere

という構造を有する。アクセントは、次のように表示しうる。cf. § 2-4-4.

StááCVCVXCe (+XXX) / StááCVVXCe (+XXXI), StááÓCVXCe (+XXIV),

StááCVXCe (+XXIV).

omoóntó ónq atáábóheré 「縛らなかつた人」；

omoóntó ónq atáámóbóhére 「彼を縛らなかつた人」；

omoóntó ónq atáibóhére 「自分を縛らなかつた人」。

### § 5-1-10 過去進行否定形

§ 2-4-3の形に対応する直接修飾形は、

主格接辞 + ta + a + re + ko + (対格接辞 +) 語幹 + a  
 という構造を有する。アクセントは、次のように表示しうる。

Staare kóCÝ(C)VXCa ( $X=\emptyset$  なら, Ca は Cá となる。 $X=\emptyset$  なら, Ca も Ø でありうるが, ( ) 内の C があらわれなければ, そのあとに V は V となる。Ca が Ø なら, X の直前の CV も Ø でありうるが, (C)V は (C)V となる。X の直前の CV が Ø なら, (C)V も Ø でありうるが, 最初の CÝ は CV となる。「調整規則 XLVII」と呼ぶ) /  
 Staare kóCÝCVVXCa (+ II),  
 Staare kóCÝCVXCa ( $\alpha. X=\emptyset$  なら, Ca は Cá となる。 $X=\emptyset$  なら, Ca も Ø でありうる。Ca が Ø なら, X の直前の CV も Ø でありうるが, 最初の CÝ は CV となる。「調整規則 XLVIII」と呼ぶ) /  
 Staare kóCVVXCa (+ V),  
 Staare kóíCÝCVXCa (+ XLVIII) / Staare kóíCVVXCa (+ V)<sup>41)</sup>.  
 omoóntó ónq̄ ataare kóha 「与えていなかった人」, ~ ~ ataare kóbóha,  
 ~ ~ ataare gósóhia, ~ ~ ataare kóbéréka, ~ ~ ataare gútírímiká,  
 ~ ~ ataare kubígísiínia, ~ ~ ataare gókáraangá,  
 ~ ~ ataare gótégeéréra, ~ ~ ataare kúrúusia,  
 ~ ~ ataare gútúúriríá, ~ ~ ataare gúsíitaáka,  
 ~ ~ ataare gúkúúndiríria, ~ ~ ataare gútúúng'unúúchia ;  
 omoóntó ónq̄ ataare kómóha 「彼に与えていなかった人」,  
 ~ ~ ataare kómóbóha, ~ ~ ataare kógesóhia, ~ ~ ataare kómóbéreká,  
 ~ ~ ataare kúmútímíkia, ~ ~ ataare kúmúbígísiínia,  
 ~ ~ ataare kógekáraángá, ~ ~ ataare kómótégeéréra,  
 ~ ~ ataare gúkíruusiá, ~ ~ ataare kúmútuuríria,  
 ~ ~ ataare kúmúsiitááka, ~ ~ ataare kúmúkundíríria,  
 ~ ~ ataare kúgítuung'unúuchia ;  
 omoóntó ónq̄ ataare kúfha 「自分に与えていなかった人」,  
 ~ ~ ataare kúlbóha, ~ ~ ataare gútírimíkia,  
 ~ ~ ataare kúbígísiínia, ~ ~ ataare gútégeéréra,  
 ~ ~ ataare gútuuríria, ~ ~ ataare gúsiitááka,  
 ~ ~ ataare gútuung'unúuchiria.

### § 5-1-11 今日の過去否定形

§ 2-2-5 の形に対応する直接修飾形は,

主格接辞 + ta + (対格接辞 +) 語幹 + ere

という構造を有する。アクセントは、次のように表示しうる。cf. § 2-4-4.

StáCÝCVXCe (+ XXX) / StáCVVXCe (+ XXXI), StáÓCVXCe (+ XXIV),  
 StaiCVXCe (+ XXIV).

omoóntó ónq̄ atábóheré 「縛らなかった人」;

omoóntó ónq̄ atámóbóhére 「彼を縛らなかった人」;

41) 推定である。

omoóntó ónq̥ ataiþohére 「自分を縛らなかった人」。

#### § 5-1-12 今日の過去進行否定形

§ 2-2-8の形に対応する直接修飾形は、

主格接辞 + ta + a + ka + (対格接辞 + )語幹 + ere

という構造を有する。アクセントは、次のように表示しうる。

StáákáCVXCe (+XXIV), StáákáOXCe (+XXI), StáákaiXCe (+XXI).

omoóntó ónq̥ atáákáþohére 「縛っていなかった人」；

omoóntó ónq̥ atáákámobóhéra 「彼を縛っていなかった人」；

omoóntó ónq̥ atáákaibóhéra 「自分を縛っていなかった人」。

#### § 5-1-13 完了否定形（1）

§ 2-1-6の形に対応する直接修飾形は、

主格接辞 + ta + a + (対格接辞 + )語幹 + a

という構造を有する。アクセントは、次のように表示しうる。cf. § 5-1-5.

StaaXCa (+XLV), StaaÓXCa (+XLVI), StaiXCa (+XLV).

omoóntó ónq̥ ataabóha 「縛っていない人」；

omoóntó ónq̥ ataamóbóha 「彼を縛っていない人」；

omoóntó ónq̥ ataiþóha 「自分を縛っていない人」。

#### § 5-1-14 完了否定形（2）

§ 2-2-6の形に対応する直接修飾形は、

主格接辞 + ta + a + ka + (対格接辞 + )語幹 + ere

という構造を有する。アクセントは、次のように表示しうる。

StaakáX(C)VCe (( ) 内の C があらわれ、X=YCVV なら、ÝCÝV は ÝCÝV となる。「調整規則 XLIX」と呼ぶ)，

StaakáÓX(C)VCe (+XLIX), StaakáiX(C)VCV (+XLIX).

omoóntó ónq̥ ataaákáháaye 「与えてない人」，～～ataakábóhere，

～～ataakábérékere，～～ataagátírimíkiri，～～ataagákáráangere，

～～ataagátégééréeye，～～ataakárúusiri，～～ataagásíítákere；

omoóntó ónq̥ ataaákámóháaye 「彼に与えてない人」，etc.；

omoóntó ónq̥ ataaákáháaye 「自分に与えてない人」，etc.

#### § 5-1-15 未然形

§ 2-1-5の形に対応する直接修飾形は、

主格接辞 + ta + raa + (対格接辞 + )語幹 + a

という構造を有する。アクセントは、次のように表示しうる。

StáraaCÝCVXCa (+I) / StáraaCÝCVVXCa (+II) / StáraaCÝVCÝXCa (+III)，

StáraaÓCÝCVXCa (+IV) / StáraaÓCVVXCa (+V)；

StáraiꝝCa (α. 「調整規則 L」と呼ぶ)<sup>42)</sup>.  
omoóntó ónꝝ atáraabóha 「縛ってない人」;  
omoóntó ónꝝ atáramóbóha 「彼を縛ってない人」;  
omoóntó ónꝝ atáraibóha 「自分を縛ってない人」.

### § 5-1-16 現在否定形

§ 2-1-5の形に対応する直接修飾形は、

主格接辞 + ta + a + ko + (対格接辞+)語幹 + a

という構造を有する。アクセントは、次のように表示しうる。cf. § 2-1.

StaakoCÝCVXCa (+I) / StaakoCÝCVVXCa (+II) / StaakoCÝVCÝXCa (+III),  
StaakoÓCÝCVXCa (+IV) / StaakoÓCVVXCa (+V),  
StaakoiCÝCVXCa (+IV) / StaakoiCVVXCa (+V).  
omoóntó ónꝝ ataakobóha 「縛らない、縛っていない人」;  
omoóntó ónꝝ ataakomóbóha 「彼を縛らない、縛っていない人」;  
omoóntó ónꝝ ataakuíbóha 「自分を縛らない、縛っていない人」.

### § 5-1-17 今日の未来否定形

§ 2-3-2の形に対応する直接修飾形は、

主格接辞 + ta + a + (対格接辞+)語幹 + e

という構造を有する。アクセントは、次のように表示しうる。

StaaꝝCe (α. X = Øなら、CeはCéとなる。「調整規則 LI」と呼ぶ),  
StaaÓX(C)VCe (+XXXVI), StaiꝝCe (+LI).  
omoóntó ónꝝ ataabóhe 「縛らない人」, ~ ~ ataabéréke,  
~ ~ ataabígísíni;  
omoóntó ónꝝ ataamóbóhe 「彼を縛らない人」, ~ ~ ataamóbéréke;  
omoóntó ónꝝ ataibóhe 「自分を縛らない人」, ~ ~ ataibígísíni.

### § 5-1-18 未来否定形

§ 2-1-8の形に対応する直接修飾形は、

主格接辞 + ta + re + (対格接辞+)語幹 + a

という構造を有する。アクセントは、次のように表示しうる。cf. § 2-1-4.

StáréCÝCVXCa (+XI) / StáréCVVXCa (+XII), StáréÓCVXCa (+XIII),  
StáríiCVXCa (+XIII).  
omoóntó ónꝝ atárébóha 「縛らない人」;  
omoóntó ónꝝ atárémóbóhá 「彼を縛らない人」;  
omoóntó ónꝝ atáríibóhá 「自分を縛らない人」.

## § 5-2 間接修飾形

次に、動詞のあらわす行為の主体が被修飾名詞のあらわすものと一致しない場合（「間接修

42) あげてある例以外のこととは、推定である。

飾」と呼ぼう)を見る。当然のことだが、動詞間接修飾形の主格接辞の場合は、被修飾名詞に呼応するのでなくて行為の主体に対応する。

動詞間接修飾形は、構造もアクセントも、直接修飾形に等しい。

omoóntó ónō naabóhēre 「私が縛った人」。 cf. § 5-1-1.

## § 6. その他の形

データ上はやや断片的であるが、その他にいくつかの活用形が採取されているので、そのうち若干のものをあげる。

### § 6-1 可能形

「～できる」ということをあらわす形は、

N + 主格接辞 + kaa + (対格接辞 + )語幹 + a

という構造を有し、アクセントは次のように表示しうる。cf. § 1.

NSkaaCÝCVXCa (+ I) / NSkaaCÝCVVXCa (+ II) / NSkaaCÝVCÝXCa (+ III),

NSkaaÓX(C)VCa (X=YCVV なら、ÝCVVはÝCÝVとなる。X=CVで( )内のCがあらわれると、(C)Vは(C)Ýとなる。X=Øなら、(C)Vは(C)Ýとなる。X=Øなら、(C)VもØでありうる。「調整規則 LII」と呼ぶ)。<sup>43)</sup>

neenkaahá 「私は与えられる」, etc. cf. § 1. ;

neenkaamóha 「私は彼に与えられる」, neenkaamóbóha, neenkaamóbéréka,

neenkaamútírmikia, neenkaamúbígísínia, neenkaagékáráanga, neenkaamótégéérera, neengaakírusia, neenkaamúsítáaka, neenkaamúkúndíríria, neenkaabátúung'únúuchiria.

### § 6-2 可能否定形

§ 6-1の形に対応する否定形は、

te + 主格接辞 + kaa + (対格接辞 + )語幹 + a

という構造を有し、通常、後方に hai があらわれる。ここでは、hai が直接続かない形で示す。

アクセントは次のように表示しうる。

teŠkaaXCa (X=CVVY で Y≤CV なら、Ca は Cáとなる。X=Ø なら、Ca は Cáとなる。「調整規則 LIII」と呼ぶ),

teSkaaÓXCa.<sup>44)</sup>

tetókaahá 「私たちは与えられない」, tetókaabóha, tetógaasóhia, tetókaabéréka, tetógaatírmikia, tetókaabígísínia, tetógaakáráanga, tetógaatégéérera, tetókaarúúsíá, tetógaatúúrírá, tetógaasítáaka, tetógaakúúndíríria ;

tetókaamóha 「私たちは彼に与えられない」, tetókaamóbóha, tetókaagésohia,

tetókaamóbéréka, tetókaamútírmikia, tetókaamúbígísínia, tetókaagékáráanga,

tetókaamótégéérera, tetógaakírusia, tetókaamútúúríria, tetókaamúsítáaka,

tetókaagíkúúndíríria.

43) 再帰接辞があらわれる形については、調査もれである。

44) 再帰接辞があらわれる形については、調査もれである。

## § 7. 若干の補遺

### § 7-1 単数1人称主格・対格接辞

単数1人称主格・対格接辞は、子音前鼻音であるが、hもしくは鼻音の前ではゼロとなり、前の母音（あって短ければ）が長くなる。（もっとも、V+NのVはそうでなくとも長いと解釈される。）ただし、対格接辞は、okohá「与える」においては、N+hがng'となり、前の母音（あって短ければ）が長くなる。N+rは、ndとなる。母音の前では、主格接辞はnとなり、あの母音が長くなり、前に短母音があっても長くならず、対格接辞はnyとなり、前の母音（あって短ければ）が長くなる。

haaye (N+haaye) 「私は与えた」

moberékére (N+mo+berékére) 「私は彼をおぶった」 cf. § 2-2-3.

okoóng'á (oko+Ń+há) 「私に与える」 cf. § 1.

teéndaabóha (te+Ń+raa+bóha) 「私はまだ縛っていない」 cf. § 2-1-5.

tenáhááye (te+Ń+a+hááye) 「私は与えなかった」 cf. § 2-2-4.

ukuúnyéga (oko+Ń+éga) 「私を真似る」 cf. § 1.

### § 7-2 母音はじまり語幹動詞

これまで語幹が子音ではじまる動詞のみを扱ったが、ここでは、語幹が母音ではじまる動詞について見る。

接頭辞がCVの場合、Vの位置にあらわれるのは、i/e/a/oであるが、iは母音の前でもiであらわれる。その他の母音の場合、次のような変化がおこるようである。未確認のものもある。

Ce + i/e/e/a/q/o/u > Cii/Cie/Cie/Cee/Ciq/Cio/Ciu

Ca + i/e/e/a/q/o/u > Cai/Cie/Caa/Coo/Coo/Cau

Co + i/e/e/a/q/o/u > Cui/Cue/Cue/Coo/Coo/Cui

不定形接頭辞が母音はじまり動詞語幹の直前に立つと、そのアクセントは、koに当たるものは低く、kからCVVではじまる語幹であるかのように扱われるが、末尾は、語幹がV+C+i/e/o/uの時を除いて、高くなることはない。

okoónékéra (<oko+ánékerá) 「干す」

ukuéga (<oko+éga) 「真似する」 cf. okoógíá 「洗う」.

okoóóngá (<oko+áangá) 「拒否する」

対格接辞が母音はじまり動詞の前に立つと、そのアクセントは、対角接辞からCVVではじまる語幹であるかのように扱われるが、末尾が高くなることはない。

ukubíéga (<oko+bá+éga) 「彼を真似する」

okogáánékéra (<oko+gá+ánékéra) 「それ（クラス XII）を干す」

なお、再帰接辞と母音の間にはyがはいる。

ukuíyéga (oko+í+éga) 「自分の真似をする」 (以上、§ 1 参照)

次に、時をあらわすらしいaが主格接辞に続き、それが母音はじまり動詞の前に立つ場合を見る。未確認のものもある。

Caa + i/e/e/a/q/o/u > Cai/Cee/Cie/Caa/Coo/Coo/Cau

ただし、単数1人称の場合で+eなら、nieとなり、単数2人称の場合で+iなら、weiとなる。

例：naigóoye (<naa+ígóoye) 「私(彼)は開けた」 cf. ukuígóra 「開ける」.

noogíri (<naa + ógíri) 「私(彼)は洗った」 cf. okoógiá 「洗う」.

niegré (<naa + égré) 「私は真似した」

cf. neegré (<naa + égré) 「彼は真似した」

weigóoye (<waa + ígóoye) 「あなたは開けた」 cf. ukuígóra 「開ける」.

Coo + i/e/é/a/o/u > Coi/Cue/Cue/Coo/Coo/Cou

例：ntoigóoye (<ntoo + ígóoye) 「私たちは開けた」

ntuegré (<ntoo + égré) 「私たちは真似した」

ntoogíri (<ntoo + ógíri) 「私たちは洗った」

(以上, § 2-2-1参照)

主格接辞+a が Cee となる場合については調査もれである。なお、アクセントは、CVV+V から生じた CVV が主格接辞+a に該当するかのようなアクセントとなる。上例を § 2-2-1 の記述と比較せよ。

### § 7-3 二重対格接辞

この言語では、対格接辞が 2 つあらわれることが可能であり、その場合、前の対格接辞が直接働きかける対象を、後の対格接辞がその対象が向かう方向のようなものをあらわすことが多いが、常にそうでもないようである。

naarékoháaye 「私はそれ(クラス III)をあなたに与えた」 ≈ naakóréháaye

ただし、1 人称対格接辞は前の位置には立ちにくく、特に単数1人称対格接辞は決して立たない。そのことと関連があるようであるが、対格接辞が 2 つあらわれ 1 人称対格接辞が直接働きかける対象をあらわすということはない。次の例では、\*のついた形のアクセントは表記しない。

mbaaréeng'áaye 「彼らはそれ(クラス III)を私に与えた」 cf. \*mbaandehaaye

\*naatobabóheeeye (<okobéhéra 「～のために縛る」) (以上, § 2-2-1参照)

「彼は私たちを彼らのために縛った」という内容は、二重対格接辞の文ではあらわせない。

アクセントは、前の対格接辞からはじまる音素連続が、対格接辞があらわれず CVCV ではじまる語幹+語尾のアクセントに等しい。

arétóhaáye 「彼はそれを私たちに与えた」

cf. atóhaayé, ahááyé, atírimikíri 「彼はなぐさめた」. (§ 2-2-3参照)

### おわりに

以上の分析は、今回の調査で収集したデータに基づく、できる限りの分析である。いくつかの点で不確実さが残るが、この言語の動詞のアクセントの全体的検討に対する橋頭堡は築けたと思う。

こうした動詞各活用形のアクセントがどのように決定されているか、その決定のされ方がどの程度に規則的であるかといった検討は、後の機会に譲らざるをえない。

しかし、次のようなことはいえる。すなわち、個々の活用形だけを見るだけなら、アクセントの決定のされ方が、語幹冒頭の音節構造によって複雑な様相を呈するものの、§ 1 の最後に述べたことを含めて、かなり規則的のようにも思われるが、全体を通じて一貫した規則があるかというと、とてもそうは思えない。直説法形に用いられる語幹+a のアクセントだけ見ても、かなりの数のものを認めねばならず、前方の接辞のアクセントの影響で一つのアクセントから

他のすべてが生み出されるという解釈が妥当性のあるものとしては困難である。この点だけからいっても、この言語の動詞アクセントは完全に規則的には決定されていないといえる。<sup>45)</sup>

## 参考文献

- Odden, David. 1987. Predicting tone in Kikuria.  
in D. Odden, ed., *Current Approaches to African Linguistics*, vol. 4,  
Foris Publications, Dordrecht / Providence, 311-326.
- . 1999. Typological issues in tone and stress in Bantu.  
in S. Kaji, ed., *Proceedings of the Symposium Cross-Linguistic Studies of Tonal Phenomena Tonogenesis, Typology and Related Topics*, ILCAA, 187-215.

---

45) どうしてそういうことでよいのかという問題であるが、言語としては、単語にはほぼ該当するもののアクセントは一定の規則にかなり沿ったものでなければならないが、単語のアクセントがそれを構成するもののアクセントから完全に規則的に形成されていることが必要というわけではないことによる。ここでは、「単語にはほぼ該当するもの」というのは動詞活用形にあたり、「それを構成するもの」というのは、主格接辞とか、時称接辞、対格接辞、語幹、語尾、否定接辞等々のことである。このことは、次のように考えると分かりやすい。動詞の活用形は、決してそのすべてが同時に形成されるわけではない。従って、ある活用形が形成された時に機能していたアクセント規則と、別の活用形が形成された時に機能していたアクセント規則が同じものであると常にいえるわけではないのである。

なお、同じ時期に形成される複数の活用形に働くアクセント規則が必ず同じものであるということも、証明されているわけではない。この言語のように、共時論的に見て、その活用形のアクセントの決定にそれがどの活用形であるかということ自体が関わっている、いいかえれば、語幹+語尾にいくつかのアクセントがあって、それぞれの活用形がある程度恣意的にそこから選択しているように見える言語においては、そういう印象が強く感じられる。

【資料・研究ノート】

## アラビア語エジプト方言の未完了形の用法

榮 谷 溫 子

(アジア・アフリカ言語文化研究所)

### Imperfect Form in Egyptian Colloquial Arabic

SAKAEDANI, Haruko

Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

The purpose of this paper is to consider the meaning and usage of the imperfect form without a prefix in Egyptian Colloquial Arabic. Mainly based on examples found in an Egyptian play, *Kumidiya 'Udib: w-inta (i)lli 'atalt il-wahš*, this study compares the unmarked imperfect form with the *bi*-imperfect form and the active participle form, which are also deeply related to the present tense.

First, in contrast with the *bi*-imperfect form which expresses concrete actions and states, the unmarked imperfect forms like *yimūt*, *yimši*, *nirūh*, *tišrab*, basically shows irrealis. Several usages derive from this:

( i ) showing something universal and not dependent on time per se,

ex. *il- 'insān yimūt*. (Man should die.)

( ii ) denoting some abstract action/state,

ex. *bi-yimši* = he walks; *yimši* = it proceeds,

( iii ) used just like infinitives,

ex. *sa'ab nirūh hināk*. (It is difficult for us to go there.) and

( iv ) telling something uncertain, which relates to some modal usages and future tense.

ex. *tišrab 'ēh ?* (What would you like to drink?)

Second, the active participle form suggests that the result of a certain action remains until the present, that is, its expression is indirect. Thus it sometimes has a slightly vague or abstract meaning and its actuality is also lower than the *bi*-imperfect form. However, it never expresses non-actuality as the unmarked imperfect form does.

But this paper does not deal with conditional sentences. The perfect form and the *ha*-imperfect form are not explained enough, either. We must consider

---

**Keywords:** Arabic, Egyptian Dialect, Imperfect, Subjunctive, Active Participle

キーワード：アラビア語、エジプト方言、未完了形、接続法、能動分詞

about the verb *kān* ‘to be’ as it forms compound tenses together with other forms of the verbs, and the verb *ba'a* which seems to have an important function, too.

1 はじめに	3.3 「実現していないこと」からの派生的用法
2 先行研究	
2.1 動詞の形式と各々の用法	3.3.1 不確実性を表す用法
2.2 動詞の分類	3.3.2 具体性の少ない事柄を示す用法
3 無標的未完了形, bi-未完了形, 能動分詞の用法の比較	3.3.3 未来, そしてムードを表す用法
3.1 無標的未完了形と bi-未完了形のアクチュアル性	3.3.4 無標的未完了形のいわゆる不定詞的な用法
3.2 時を示す従属節内の無標的未完了形	3.4 能動分詞との関わり
3.2.1 時を示す従属節内の完了形と未完了形	3.4.1 結果を表す能動分詞形
3.2.2 <i>lamma</i> 節内の完了形と未完了形	3.4.2 能動分詞形の婉曲性, そしてアクチュアル性の低さ
	4 おわりに

## 1 はじめに

アラビア語エジプト方言には、動詞の形式として、完了形・未完了形・分詞形・命令形がある。さらに未完了形は、単独で用いられるだけでなく、*bi*-<sup>1)</sup>や*ha*-という接頭辞が付される場合がある。

本稿は、それらのうち無標の未完了形<sup>2)</sup>に焦点を絞り、それを特に接頭辞 *bi*-を伴う未完了形と能動分詞形と比較しつつ、現在時制と深く関わるそれらの共通点や相違点とともに、互いの関連性を明らかにしようとするものである。

一般的には、接頭辞 *bi*-を伴う未完了形が習慣や現在進行を、接頭辞 *ha*-を伴う未完了形が未来を示すのに対して、無標の未完了形の用法については接続法に準じた性質が指摘され、非時制的な用法やムード的用法などがあげられている。能動分詞形については、動詞の種類によって、現在進行、近未来、あるいは結果を示す用法などがある。

これらの形式を分析するにあたり、実際の用例を、*Kumidiya 'Udib: W-inta (I)lli 'Atalt il-Wahš*『喜劇エディブス：あなたが怪物を退治した人だ』の脚本から収集した。これを書いた ‘Ali Salim の知名度や、1970年に実際に上演されていることから、一般に受け入れられる自然な口語アラビ

1) 本稿で用いた転写方法等については Appendix を参照。なお、他の文献から例文等を引用する場合には、転写法を本稿のものに変更して表記する。

2) 本稿では、形式上、接頭辞をともなわない未完了形を一律に「無標的な未完了形」としてまとめて扱ったが、査読委員より、標識の全くつかない未完了形と、ゼロをともなう未完了形とを区別すべきではないかとのコメントをいただいた。例えば、後述する *mumkin* (can), *'ayiz* (want to) などムードを示す語のあとにくる未完了形は、決して他の接頭辞をとることができず、これはゼロを伴った未完了形と考えられるが、他方、一般的な事実を表す用例などでは、接頭辞を伴った形も容認される場合があり、こちらは狭義の無標的未完了形である。しかし、本稿では、双方をまとめて *bi*-を伴う未完了形や能動分詞と対比させ、ゼロ接頭辞と狭義の無標とを区別せずに、見かけ上、接頭辞を伴っていない未完了形全体を統一的に記述してみた。

ア語で書かれている<sup>3)</sup>と判断される。

## 2 先行研究

### 2.1 動詞の形式と各々の用法

まず、アラビア語エジプト方言における動詞の形式を、*katab*（書く）の3人称男性単数形（ただし命令形は2人称男性単数形。また分詞形には人称の区別がない）を例に、整理しておく。

<i>katab</i> （書いた）	完了形
<i>yiktib</i> （書くべきだ、等）	無標の未完了形
<i>bi-yiktib</i> （書く、書いている）	<i>bi-</i> の付いた未完了形
<i>ha-yiktib</i> （書くだろう）	<i>ha-</i> の付いた未完了形
<i>kātib</i> （書いてしまった、或いは 書記、作家）	能動分詞形
<i>maktūb</i> （書かれた）	受動分詞形
<i>iktib</i> （書け）	命令形

以上のうち、本稿で扱う *bi-* の付いた未完了形、無標の未完了形、能動分詞形の意味・用法については、従来おおよそ次のように説明されてきた (Ahmed, 1981; Eisele 1999; Salib 1981; Al-Tonsi et al 1986a, 1986b; El-Tonsi 1982)。

#### [1] *bi-* の付いた未完了形

(a) 進行中の行為を表す。

例文 1) *Hasan bi- yil'ab tinis dilwa'ti.*  
 ハサン プレイする 3男单・未完 テニス 今

ハサンは今テニスをしている。(Salib 1981, p.63)

(b) 反復的に、あるいは周期的に、あるいは習慣的に起こる行為。乃至、職業として通常行われる行為。

例文 2) *Hasan bi- yil'ab tinis kulli yōm.*  
 ハサン プレイする 3男单・未完 テニス 毎 日

ハサンは毎日テニスをしている。(ibid.)

例文 3) *'Ahmad bi- yiṣṭaγal suhafi.*  
 アフマド 働く 3男单・未完 記者

アフマドは記者として働いている。(ibid.)

3) 演説の場面などで、正則アラビア語が用いられている場面もあるが、本稿で扱うのは口語の部分のみである。

(c) 永続的あるいは一般的な事実。

例文 4) *Nabil bi- yi'raf Layla kuwayyis.*

ナビル 知る 3男单・未完 ライラ 良く

ナビルはライラを良く知っている。(ibid.)

## [2] 無標の未完了形

(a) 主節の主動詞として用いられる場合：

i. テンス的用法：

A. 直前の動詞と同じ時制をあらわす。動詞の未完了形が連続した場合に、接頭辞の *bi-* や *ha-* が 2 番目以降の動詞で省かれたもの。

B. 一般的事実 (Eisele 1999 の言う「不特定な現在」) を表す。

例文 5) *yiktab gawāb l- abū -h kulli yōm.*

書く 3男单・未完 手紙 ～に 父 -3男单 每 日

彼は自分の父に毎日手紙を書いている。(Eisele 1999, p.82)

例文 6) *dayman yiṣha badri.*

いつも 目覚める 3男单・未完 早く

彼はいつも早起きする。(Al-Tonsi et al 1986a, p.187)<sup>4)</sup>

ii. ムード的用法：欲求、可能、依頼、示唆、間接的な命令、誓い、祈願などを表す。

例文 7) *tiṣrab 'ēh ?*

飲む 2男单・未完 何？

何をお飲みになりますか？(What would you like to drink?) (Al-Tonsi et al 1986a, p.171)

例文 8) *'āgi 'imta ?*

来る 1单・未完 いつ？

私はいつ来るべきでしょうか？(ibid.)

例文 9) *'Allāh yixallī -k.*

アッラー 保つ 3单男・未完 -2男单

アッラーがあなたを守られますように。(Eisele 1999, p.86)

iii. なお、これに準じた用法として、*kān* (was, were) と共に用いて複合過去形を作り、過去の習慣（上記のテンス的用法から来る）や過去の義務（同じくムード的用法から来る）を示す用法が挙げられる。(Eisele 1999, p.86)

(b) 従属節で用いられる場合：

i. アスペクトやムードを示す主節に従属する場合：

例文 10) *lāzim tirga' bi- sur'a.*

必須である 帰る 2男单・未完 ～で 速度

あなたが速く帰ることが必須である

= あなたは急いで帰らなければならない。(Al-Tonsi et al 1986a, p.178)

4) *dayman* (いつも) が動詞よりあとに来た場合には、*bi-yiṣha badri dayman.* のように、動詞に接頭辞 *bi-* が付く。(Al-Tonsi et al 1986a, p.187)

例文11) *'awzīn nīšūf il-film da.*

欲する 能分・男複 見る 1複・未完 (限定辞) 映画 この

私たちがこの映画を観ることを、欲する

=私たちはこの映画が観たい。(Al-Tonsi et al 1986a, p.179)

例文12) *'ēh rāy -ak nīsma' musīqa ?*

何? 意見 -2男單 聞く 1複・未完 音楽

私たちが音楽を聞くことについての、あなたの意見は何ですか?

=音楽を聴きませんか? (Al-Tonsi et al 1986a, p.187)

ii. 時を示す接続詞 (*lamma* “～するとき”, *'abli ma* “～する前”, *ba'di ma* “～した後”, *li-γāyit ma* “～するまで”, *li-haddi ma* “～するまで”, *wa'ti ma* “～するとき”, *'awwal ma* “～するやいなや”) に導かれた従属節で用いられる場合。 Al-Tonsi et al (1986a, p.188) ではこれを「未来形 (接頭辞 *ha-*を伴う未完了形) の代わりに用いられている」と説明している):

例文13) *'abli ma tīgī l-faṣl, lāzim ti'ra d-dars.*

～する前に 来る 2男單・未完 (限定辞) クラス 必須である 読む 2男單・未完 (限定辞) 課

授業に来る前に、あなたはレッスンを読んでおかねばならない。(Al-Tonsi et al 1986a, p.187)

例文14) *'awwal ma yitxarrag ha- ysāfir.*

～するや否や 卒業する 3男單・未完 旅する 3男單・未完

彼は卒業したらすぐに旅に出ることだろう。(Al-Tonsi et al 1986a, p.188)

iii. 目的や理由を表す場合:

例文15) *ruhna nīšūf -u.*

行く 1複・完了 見る 1複・未完 -3男單

私たちは彼に会いに行った。(Eisele 1999, p.88)

例文16) *lāzim tišrab id-dawa 'ašān tib'a kuwayyis.*

必須である 飲む 2男單・未完 (限定辞) 薬 ～ために なる 2男單・未完 良い

あなたが回復するために、あなたは薬を飲まなければならない。(Al-Tonsi et al 1986a, p.187)

iv. その他 (アスペクト的でもムード的でもない用法、いわゆる不定詞的な用法):

例文17) *sa'bi nrūh hināk.*

難しい 行く 1複・未完 そこ

私たちがそこへ行くことは難しい。(Eisele 1999, p.88)

例文18) *xaragit min γēr ma tifṭar.*

出かける 3女單・完了 ～することなしに 朝食を摂る 3女單・未完

彼女は朝食を食べずに出かけた。(Al-Tonsi et al 1986a, p.188)<sup>5)</sup>

なお、Eisele (1999, p.89) は、無標の未完了形の特徴として「絶対に、特定の時間の指示 (specific time reference) とは共起しない」ことを指摘している。もちろんテンス的用法で挙げた、接頭辞の *bi-*や *ha-*が2番目以降の動詞で省かれた場合は、無標の未完了形というより、実質的には接頭辞の *bi-*や *ha-*を伴った未完了形であるから除かれる。

5) 類例として、*badal ma* “～するかわりに”が挙げられる。(Al-Tonsi et al 1986a, p.188)

### [3] 能動分詞形

(a) ある行為の完了を示す。

*nām* (寝る) の能動分詞 *nāyim* が、「眠りに落ちてしまった」の意味になったり, *kal* (食べる) の能動分詞 *wākil* が「食べてしまった, その結果まだおなかが一杯である」の意味になる, 等。(Al-Tonsi et al 1986b, p.90, p.107)

(b) 起動動詞 (Inceptive Verbs) の能動分詞は, その動作の結果継続を表す。

*libis* (着る) の能動分詞 *lābis* は, 「着ている」という意味 (着つつあるのではなく, 着終わって身につけている状態) である。(Al-Tonsi et al 1986b, pp.90-91)

(c) 移動を表す動詞の能動分詞は, 未来形 (*ha-*を伴う未完了形) よりも確実な未来を表す。

例えば, *sāfir* (旅する) の能動分詞 *misāfir* は「(今, あるいは後で) 旅に出るところだ」という意味になる。(Al-Tonsi et al 1986b, p.90)

(d) 移動を表す動詞以外でも, 計画されたことや, 規則的に繰り返される行為や出来事を述べる場合には, 能動分詞が未来を表すことがある。

例文19) *kulli l- mahallāt 'afla ba'di bukra 'ašān il- 'id.*  
全て (限定辞) 店 複 閉まる 能分・女单 あさって ~のため (限定辞) 祭日

明後日は祭日のため, 全ての店が閉店する。(Al-Tonsi et al 1986b, p.114)

(e) 状態や知覚を表す動詞の能動分詞は, 習慣ではなく, 現在進行している状態を表す。

例えば, *fihim* (理解する) の能動分詞 *fāhim* は「今, 理解している」という意味であるが, これに対して *bi-*の付いた未完了形は:

例文20) *'ana b- afham bi- sur'a.*  
1 単 <bi- 理解する 1 单・未完 ~で 速度

私は (普通, 通常) すばやく理解する。

のように, 習慣相を表す。(Al-Tonsi et al 1986b, p.100)

(f) ただし, 特に感嘆文などでは, ある行為が繰り返され習慣的になっているさまを, 能動分詞で表現することもある。

例文21) *miš ma'ūl kida kulli yōm rāgi' nusṣ il- lēl.*  
(否定) 道理にかなう このような 毎 日 帰る 能分・男单 半ば (限定辞) 夜

毎日こんなふうに深夜に帰ってくるなんて, むちゃくちゃだ。(Al-Tonsi et al 1986b, p.115)

## 2.2 動詞の分類

Woidich (1975) は, Al-Tonsi et al (1986b, pp.90-91) や El-Tonsi (1982, pp.33-46) で「起動動詞」とされた動詞<sup>6)</sup>の能動分詞について, それらの表すところは進行相ではなく, 「その他全ての動詞」の能動分詞と同じく結果を表すと考えた。例えば *rikib* (乗る) の能動分詞 *rākib* は, 過去に何かに「乗った」結果として, 現在まで「乗っている」という状態が継続しているという解釈である。

そのうえで Woidich (1975) は, アラビア語エジプト方言の動詞を,

[A 類] 能動分詞が結果を表す。

6) ただし例えば, El-Tonsi が起動動詞に分類した *nām* (眠る) が状態を表す動詞に分類されているなどの相違点はある。

[B類] 移動、状態、知覚、心身の現実（‘irif “知る”， ‘az\* “欲する”）を示す動詞で、能動分詞が現在進行を表す。

\* 実際には「欲する」の完了形は用いられず、「欲した」と言う場合には、*kān* (to be) の完了形と能動分詞形を組み合わせて *kān 'ayyiz* の形が用いられる。

の2種類に分類した。さらにB類の動詞では、*bi*-未完了形は「今～している」という現在時制を表すことができず、例えば *bi-yrūh* 「(いつも) 行っている」、*bi-yi'rāf* 「(恒常に) 知っている」のように、習慣や一般論を表す。

A類の動詞に典型的に見られるように、能動分詞が基本的に結果相を表すことは、Woidich (1975) だけではなく、Wild (1964), Eisele (1990), Eisele (1999) などでも指摘されている。

ただ、Eisele (1999, p.21) は Woidich (1975) の分類について、まず、*rikib* (乗る、上る) の能動分詞 *rākib* や *libis* (着る) の能動分詞 *lābis* は、第1次的には現在の状態を表すと説明される方がふさわしく感じられ、これらの動詞と A類に分類された他の動詞との区別が必要であると述べている。にもかかわらず、Woidich (1975) がその区別をしなかったのは、A類の動詞について、*bi*-未完了形の吟味を怠ったためであると指摘する。

さらに Eisele (1999, p.21) の考えでは、Woidich (1975) の指摘した A類と B類の違いは、それぞれに属する動詞の語彙アスペクトの違いによるもので、B類の動詞の意味するところは、一点的 (punctual) あるいは起動的 (ingressive) であるので、現在を指示できない<sup>7)</sup>。そのため、それらの能動分詞は、A類のそれと同じく、やはり結果を表す。すべての能動分詞は「結果としての状態の未完了的アスペクト」として機能すると言える。

他方、起動動詞を除く A類の動詞は、*bi*-未完了形によって習慣・一般論とともに、*bi-yiktib* 「今書いている」 <*katab* (書く)>、*bi-yitkallim* 「今話している」 <*itkallim* (話す)> などの現在時制をも表せる。

これに対して El-Tonsi (1982, pp.33-46) は、*bi*-の付いた未完了形と能動分詞の意味双方に着目して、動詞を分類した。次の表は、彼の分類を要約したものである：

動詞の種類	例	<i>bi</i> -未完了形の意味	能動分詞形の意味
状態、態度、知覚を表す動詞	‘irif (知る) fihim (わかる) simi* (聞こえる)	習慣、一般的な叙述	現在の状態 (現在時制)
移動動詞	xarag (出る) miši (歩く、去る) rāh (行く)	習慣	進行、継続, <i>ha</i> -未完了形より確実な未来
起動動詞	rikib (乗る、上る) libis (着る) nām (眠る)	習慣	進行、継続
その他全ての動詞	kal (食べる) γ asal (洗う) 'ara (読む)	進行、習慣	過去の出来事、動作の結果たる現在の状況 ※否定辞 <i>mis</i> で否定された場合は未来の否定となる。

7) なお、一点的 (punctual) あるいは起動的 (ingressive) な動詞が現在を指示できない点についての Eisele (1999, pp.23-24) の説明は以下のとおりである。すなわち、現在は “ego” と “now” という心理的な基準で定義される。つまり心理的な現在は「私」の意識する「今」であるので、現在の「私」は、ついさっきまでの「私」とこの直後の「私」の連続の中で捉えられており、物理的な現在のようないくつかの瞬間や点としては捉えられない。「私」の意識する心理的な現在は点ではなく、時間的な幅を持つ。

「その他全ての動詞」の能動分詞形の意味として述べられている「過去の出来事、動作の結果たる現在の状況」とは、例えば上述のように、*kal*（食べる）の能動分詞 *wākil* が、食べてしまった、その結果まだおなかが一杯である、或いは今は何も食べたくない、という意味合いを持つなどのように、結果が現在に及んで何らかの状態が継続しているさまである。

しかし、Eisele (1999, p.22) が述べているように、いずれにせよ、語彙アスペクトをもとに、動詞を分類していることにかわりはない。Brustad (2000, pp.165-166) は、語彙アスペクトは、形式アスペクトと異なり、一時的か持続的か、限界の有無、静的か動的かなど、個々の動詞における固有の意味的な要素を指すもので、未完了態や分詞の文脈的な意味の解釈は、動詞の語彙的な素性による場合もあるとは言え、「語彙アスペクトそのものは、統語論的カテゴリーとはならない (p.166)」と述べている。

アスペクトという、言語形式が意味するものを考察の対象としている以上、論を進める上で、それぞれの動詞の語彙アスペクトを完全に排除することはできないだろう。だからといって、それを基準にして動詞を分類するのみで事足りりとするのでは不十分である。

### 3 無標的未完了形、bi-未完了形、能動分詞の用法の比較

本節では、未完了形や能動分詞の実際の用例を踏まえて、それらの用法や意味の共通点や相違点を明らかにする。最初に、無標的未完了形を *bi*-未完了形との比較を通して、無標的未完了形の特徴を明らかにし、次に能動分詞の用法との比較あわせて、現在時制と関わりの深いこれらの形式の相互関係や相違点を検討する。

#### 3.1 無標的未完了形と *bi*-未完了形のアクチュアル性

先行研究によれば、上述のように、*bi*-未完了形の用法は、進行中の行為、あるいは反復的・周期的・習慣的な行為、永続的・一般的な事実を表すのに対し、無標的未完了形は、主節の主動詞として用いられた場合、一般的な事実や欲求・可能・依頼その他のムードを表すのであった。

まず、両者のアクチュアル性の差に着目したい。アクチュアル性とは、工藤 (1995) の表現である。工藤 (1995, p.26) は、以下のような対応が示され、「アクチュアル」を、時間的に個別的具体のこととし、脱時間的なポテンシャルと対比させている。

広義モダリティ アクチュアル——アクチュアル・ポテンシャル——ポテンシャル

時間的限定性 個別具体的 ————— 抽象的 ————— 一般的(脱時間)

これを踏まえて、両者のアクチュアル性について見てみると、*bi*-未完了形の方が、無標的未完了形よりアクチュアル性の高い表現となる。例えば、無標的未完了形の例を挙げると：

例文22) *'ēh iš- šē' illi yimši -s- subh 'ala 'arba'a wi -d- duhr*  
 何 (限定辞) もの 閑代 歩く 3男单・未完 (限定辞) 朝 ~の上 4 そして (限定辞) 昼  
*'ala tnēn... wi -l- may rib 'ala talāta..*  
 ~の上 2 そして (限定辞) 日没 ~の上 3

朝は4本足、昼は2本足、夕方は3本足で歩くものは何？ (Sālim, p.81)

この *yimši* (歩く 3男单・未完) は、今現在、トコトコと歩いているという意味ではなく、そのものの非常に一般的な性質としての「歩く」である。

例文23) *fir'ōn yimūt, yinti'il li -l- 'ālam il- 'āxar.. yuhkum hināk..*

ファラオ 死ぬ 3男单・未完 移る 3男单・未完 ～に (限定辞) 世界 (限定辞) 別の 統治する 3单男・未完 そこ

ファラオは死に、別の世界に移り、そこで統治するのだ。(Sālim, p.99)

ここでは、ファラオは人間なのだから死ぬ運命にある、という意味合いで、*yimūt* (死ぬ 3单男・未完), *yinti'il* (移る 3单男・未完), *yuhkum* (統治する 3单男・未完) という無標的未完了形が用いられている。

これに対し、「死ぬ」を *bi*-未完了形で用いると、以下のように「誰かが今、死につつある」という現在進行中の事柄を示すことになる：

例文24) *Haruku bi- tmūt.*

ハルコ

死ぬ 3单女・未完

ハルコが死につつある。<sup>8)</sup>

「人間は死ぬものだ」という一般的・超時的な事実が無標的未完了形で表され、「特定の人間が今死につつある」という具体的な事実が *bi*-未完了形で表されている。他方、次の *bi*-未完了形の例のように、特定の人が死につつあるというほどには具体的ではないが、「人間誰でも必ずいつかは死ぬものだ」という一般論ではない、両者の中間的な、反復的あるいは習慣的な事実を述べる場合もある：

例文25) *in- nās kitīr bi- ymūtu fi Falastīn.*

(限定辞) 人々 たくさん 死ぬ 3複・未完 ～で パレスチナ

パレスチナで人々が沢山死んでいる。

また前節で述べたように「一点的」または「起動的」な動詞は現在の一点を指示できない (Eisele 1999, pp.21-24) ので、その *bi*-未完了形は、「今～している、しつつある」という現在の具体的な事象ではなく、「いつも～している、～である」という習慣相、あるいは一般的叙述を表すことになる。

しかし、どこからが反復的・習慣的な行為なのか、どの程度の繰り返しがあれば習慣といえるのかは時に不明瞭である。例えば、演説に野次を飛ばしたあとテレジアスの台詞：

例文26) *'inta 'ārif 'in -ni b- aśtim marra wahda kulli mīt sana..*

2男单・主格 知る 能分・男单 ～こと 1单・斜格 ののしる 1单・未完 回 1女单 每～ 百 年

お前も知ってのとおり、わしは百年に一度、罵るのじゃ。(Sālim, p.93)

あとでテレジアスがとても長生きであることが述べられる(例文31参照)ものの、百年に一

8) 作例。今後、特に出典の断りのないものはすべて作例(筆者が作ってインフォーマントに了解されたものや、インフォーマントが挙げた文)である。

度の出来事は、通常の寿命であれば一生に一度あるかないかのこと、とても反復できるものではないし、恐らくテレジアス自身も、生涯でただ一度の怒り、すなわちそれだけ激しい怒りであるという意味を込めて言った言葉であろうが、形式上は、百年毎に一回の反復的行為として述べられている。

さらに、先行研究でも、無標的未完了形と *bi*-未完了形の双方が一般的な事実を表すことが述べられていたが、これは両者の境界の曖昧さを示している。例えば、次のような例では、*bi*-未完了形を無標的未完了形に変えても、意味の違いはほとんど出て来ない：

例文27) *il- sahh bi- yib'a sahh li'ann -u sahh.*

(限定辞) 事実 なる 3 単男・未完 事実 何故なら 3 単男・斜格 事実

事実は、それが事実であるから事実となり、

*il- ha'i'a bi- tib'a ha'i'a li'anna -ha ha'i'a.*

(限定辞) 真実 なる 3 単女・未完 真実 何故なら 3 単女・斜格 真実

真実は、それが真実であるから真実となるのです。

*law kulli ša'b Tiba wi'if w- 'al in-nil miš mawgūd.. yib'a*

もし 全ての 人民 テーベ 立つ 3複・完 そして 言う 3複・完 ナイル (否定辞) 在る 男单 なる 3 単男・未完

*miš mawgūd ?*

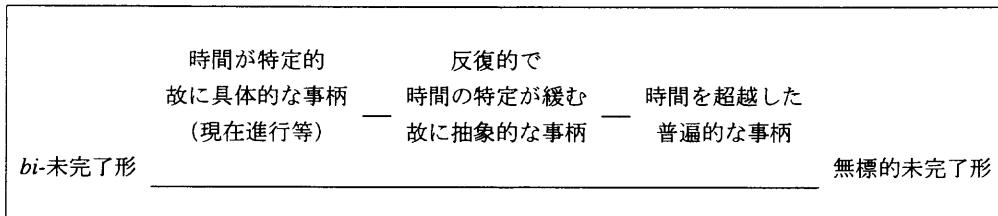
(否定辞) 在る 男单

もしテーベの全ての民が立ち上がり「ナイルはない」と叫んだとて、それ(ナイル)がなくなったりするでしょうか？(Sālim, p.48)

ナイル川があるという事実が「ナイルは無い」という虚言に負けることがないように、私たちの生きる世界では常に「事実は事実となり」「真実は真実となる」ことが繰り返されていると考えれば、アクチュアルな現実を示す *bi*-未完了形が使われるのも肯けるが、「事実は事実となり」「真実は真実となる」ことを普遍的な真理と考えれば、非アクチュアルな抽象的な事柄を述べる無標的未完了形に置換えることも自然となる。これはアクチュアルな事柄の無数の反復であり、時間に無関係な非アクチュアルの状態に限りなく近い、アクチュアル・非アクチュアルの境界線上にある例と言える<sup>9)</sup>。そのため、*bi*-未完了形を無標的未完了形に変えても、意味の違いがはっきり出て来ない。

9) ただし、工藤(1995, p.26, p.149)は、日本語の「スル」形の動詞について、時間的な限定性という点から〈具体的〉1回性・〈抽象的〉反復性・〈一般的(超時)〉特性という3段階を設定し、これら、特に「〈反復性〉と〈特性〉は連続的である」(p.150)としながらも「が、基本的には量(複数性)から質規定への飛躍を起す」(p.150)「経験の記述性から規定性(経験の一般化)への飛躍が起こる」(p.27)とも述べている。

このように、*bi*-未完了形と無標的未完了形は、分裂した範疇ではなく、下図のように連続的である。



### 3.2 時を示す従属節内の無標的未完了形

#### 3.2.1 時を示す従属節内の完了形と未完了形

次に、時を示す接続詞 (*lamma* “～するとき”, *'abli ma* “～する前”など、前節2.1の〔2〕無標の未完了形 (b) 従属節で用いられる場合の ii. 参照) に導かれた従属節内で用いられる無標的未完了形を見てみよう。上述のように、Al-Tonsi et al (1986a, p.188) ではこれを「未来形（接頭辞 *ha-*を伴う未完了形）の代わりに用いられている」と説明しているが、これは必ずしも正しくない<sup>10)</sup>。もちろん、主節の動詞そのものが未来時制 (*ha*-未完了形) である場合は、未来に起こるであろうことを示す。例えば、

例文28) *lamma (a)mūt 'ana ha- ti'milu 'ēh..?*

～とき 死ぬ 1单・未完 私 する 2複・未完 何

私が死んだら、お前達はどうするつもりだ？ (Sālim, p.98)

例文29) *lamma tit'addim šuwayya ha- tifham.. wi- ha- ti'awwid..*

～とき 進歩する 2男單・未完 少々 (未来) 理解する 2男單・未完 そして (未来) 慣れる 2男單・未完

お前もちょっと進歩すれば、わかるだろうし、慣れるだろうよ。 (Sālim, p.69)

などである。(ただし後述するように、これも単純に未来形の代用であるとは言えないだろう。)

未来形のかわりという説明が妥当でないのは、次のような場合である。エディップス王が、警察署長のアワーリフが人々を拷問していることをテレジアスから知らされ、「そんなこととは知らなかった」と言い訳する場面の台詞で：

例文30) *'Awālih kān mawgiūd 'abli 'ana ma (a) b'a malik.*

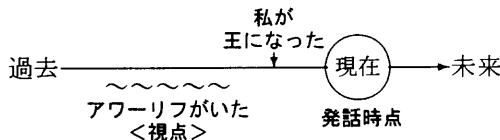
アワーリフ ～である 3男單・完了 見出される=“居る”男單・受分 ～の前 1单・主格 ～こと なる 1单・未完 王

私が王になる前に、アワーリフは居たのだよ。 (Sālim, p.106)

この台詞を口にしているとき、エディップスはすでに王位に就いているのだから、「王になる」

10) これに関連して、査読委員から次のような説もあるとのご指摘をいただいた。*lamma* <*la + ma* (not yet) で、正則アラビア語の *lam* (未完了形希求法を伴って、完了の否定を表す) に準ずるものと考え、さらに、*lam* が未完了形希求法という、*sa-* (正則アラビア語で未来を表す接頭辞) などを付けることのできない未完了形とのみ結びつくことからの類推によって、*lamma* に後続する未完了形も、接頭辞をとることができない、という説である。

ということは既に過去の時点で実現しており、未来ではあり得ない。過去に「アワーリフが居た」時点では、まだ実現していなかったということで、この '*abli ma* (~する前に) の節内の無標的未完了形は、それが実現する前に、何かの事象が起きたということを示しているのであって、決して発話時点から見た未来を示すのではない。言いかえれば、現実の世界においては発話時点から見て過去に実現してしまったことでも、語られている事象が起きた時点の世界でまだ実現されていなければ、無標的未完了形が用いられ得るのである。



同じような例として：

- 例文31) *šaxṣ 2: 'abū -ya 'āl l -i*  
 人 父 1单・斜格 言う 3男单・完了 ~に 1单・斜格  
 人物 2：私の父が、私に言った。

'inn -u kān mawgūd 'abli ma yitwiliid..  
 ～と 3男单・斜格 ～である 3男单・完了 見出される="居る" 男单・受分 ~する前に 生まれる 3男单・未完  
 彼 (=テレジアス) は彼 (=私の父) が生まれる前に既にいたのだと。

- šaxṣ 3: *giddi giddi gidd -i, simi' min giddi giddi gidd -u..*  
 人 祖父 祖父 祖父 1单・斜格 聞く 3男单・完了 ~から 祖父 祖父 祖父 3男单・斜格  
 人物 3：私のひいひい爺さんが、そのひいひい爺さんから聞いた。

'inn -u kān mawgūd 'abli ma yitwiliid..  
 ～と 3男单・斜格 ～である 3男单・完了 見出される="居る" 男单・受分 ~する前に 生まれる 3男单・未完  
 彼は彼 (=ひいひい爺さんのひいひい爺さん) が生まれる前に既にいたのだと。(Sālim, p.55)

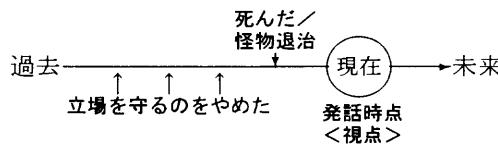
が挙げられる。

これらの例から、事象の起きた時点に視点を据えると、それより後に起こる出来事は無標的未完了形で示されることがわかる。

ただし、次のような例もある：

- 例文32) *lēh fih nās kitīr ma- wi'fit -š fi makan -ha li-haddi ma*  
 何故 いる 人々 沢山 (否定) 立つ 3女单・完了 (否定) ~に 場所 3女单・斜格 ~まで  
*mātit 'aw li-haddi ma 'adēna 'a -l- waḥš..*  
 死ぬ 3女单・完了 あるいは ~まで やっつける 1複・完了 (前置詞) (限定辞) 怪物  
 何故、自分が死んだときまで、あるいは私たちが怪物を退治したときまで、自分の立場を守らなかった人々がたくさんいるのでしょうか。(Sālim, p.104)

怪物の退治は既に終わっているが、時間的な前後関係としては、従属節内の出来事（自分が死ぬ、あるいは怪物が退治される）が実現する方が、自分の立場を守ることをやめるのよりも後に来る。しかしこの場合は、前の例と異なり、従属節内でも完了形が使われている。主節と従属節との時間的な前後関係は、例文30), 31) の場合と同様なのである。



この場合は、先程の例と異なり、視点を発話時点に置いて、「人々が死ぬ」「人々が怪物退治をする」ということと、「人々が立場を守らなかった」ということとを共に過去のこととして語っていると言える。

### 3.2.2 *lamma* 節内の完了形と未完了形

ここで *lamma* の例にしほって見てみると、下表のように、Sālim で *lamma* 節内で無標的未完了形が用いられていたのは14例であったのに対し、完了形の例と *bi*-未完了形の例はそれぞれ2つずつであった。ただし、1例、無標的未完了形の用いられている *lamma* 節が、さらに別の従属節内に存在する例があった (Sālim, p.47) のだが、これは後述する不定詞的用法に関わってくるので、問題を煩雑にしないために本節では扱わない。なお、*ha*-未完了形の例は見られなかった。

表 Sālim における *lamma* の用例 (節内の動詞の形式による分類) :

<i>lamma</i> 節内の動詞	無標的未完了形					完了形	<i>bi</i> -未完了形	<i>ha</i> -未完了形
例文の数	14					2	2	0
主節内の動詞	無標的未完	<i>ha</i> -未完	否定命令	<i>bi</i> -未完	不定詞的	完了形	<i>bi</i> -未完	無標的未完
例文の数	6	4	2	1	1 (考察外)	2	1	1

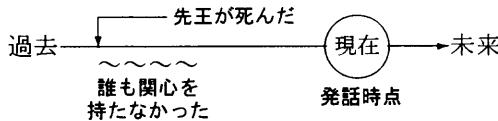
まず、完了形の例：

例文33) *wi-lzālik lamma māt ma'tūl ma-haddi -š iħtamm*  
 そして だから ~とき 死ぬ 3男单・完了 殺される 男单・受分 (否定) 一人 (否定) 関心を持つ 3男单・完了  
*'inn -u yi'rāf mīn illi 'atal -u.. miš kida ya rayis*  
 ~こと 3男单・斜格 知る 3男单・未完 誰 関代 殺す 3男单・完了 3男单・斜格 ~ない そのような ~よ 長  
*iš- šurṭa?*  
 (限定辞) 警察

そして、だから、彼 (=先王) が殺されて死んだとき、誰が彼を殺したのか知ることに関心を持った者は誰もいなかった。そうであろう、警察署長よ？ (Sālim, p.55)

ここでは、上の例と同じく、発話時点に視点を置いたとも考えられる。さらに、仮に誰が彼を殺したのかに関心を持たないという、主節で表された過去の時点に視点を置いたとしても、

従属節で表された、彼が殺されたという出来事は、同時あるいは既に起こったあとであり、主節よりもさらに過去のこととなっている。この従属節を無標的未完了形に書きかえることはできない。



完了形が使われている、もうひとつの例は：

例文34) *al-'ahālī: ..'inta lli 'atalt il- wahš..*

人々 2男單・主格 関代 殺す 2男單・完了(限定辞) 怪物

人々：…あなたが怪物を退治した人だ…。

'*Udib: 'intu(m) lli 'ultu(m) kida.. 'ana lamma gēt ma-*  
エディブス 2複・主格 関代 言う 2複・完了 そのように 1单・主格 ~とき 来る 1单・完了 (否定)

'*ulti -š kida..*  
言う 1单・完了 (否定) そのように

エディブス：そう言ったのはあなたたちだ。私は帰ってきたとき、そうは言わなかった。  
(Sālim, p.112)

この例でも、例文33)と主節と従属節の時間的関係は同じであり、やはり従属節は未完了形と取り替えることができない。

これら2例は、特定の時を指示して具体的な出来事を示す文だが、*lamma* 節に無標的未完了形が使われている13例（本節で扱わない1例は除く）のうち、4例は主節に*ha*-未完了形が用いられて、未来のやはり特定の時についての具体的な表現であった。また2例は、*lamma* 節に無標的未完了形で、主節は禁止命令となっていた：

例文35) *ma- titkallim -š 'illā lamma (a)'ul l- ak.*

(否定辞) 話す 2男單・未完 (否定辞) ~以外 ~とき 言う 1单・未完 ~に 2男單・斜格

私があなたに（喋っても良いと）言うときでなければ、喋るな。(Sālim, p.91)

例文36) *ma- haddi -š yi'ul hāga 'illā lamma yi'ul ism -u.*

(否定辞) 誰か一人 (否定辞) 言う 3男單・未完 何か ~以外 ~とき 言う 3男單・未完 名前 3男單・斜格

自分の名を名乗ってからでなければ、誰も何も言ってはいけない。(Sālim, p.93)

これは、「私があなたに言ったとき」「自分の名を名乗ったとき」というある未来の時点を指示しているとも解釈できるが、今後一切かくあるべし、という発話時点からあと全てを指示する、ある程度抽象的な例文でもある。これらは、特定の時を指示して具体的な出来事を示す文と、次のような、時間を特定しない抽象的あるいは普遍的な事柄を表す文との中間的な例文である。

例文37) **lamma talāta 'arba'a yit'arradū li- mu'amla miš.. (略) zarīfa..**  
 ～とき 3 4 歯向かう 3複・未完 ～に 扱い 女单 (否定) 愉快な 女单  
**ma- yibā -ś ma'na kida 'inni 'ahāli Tiba kullu -hum**  
 (否定辞) なる 3男单・未完 (否定辞) 意味 そのような ～こと 人々 テーベ 皆 3複・斜格  
**yit'assaru.**  
 影響される 3複・未完

3～4人が不愉快な扱いに抵抗しても、それは、テーベの人々全員がそれに影響されるとか、そういう意味にはなりません。(Sālim, p.108)

lamma 節に無標的未完了形が使われている例の残り7例のうち6例は、この例文36)のように、主節もまた無標的未完了形が用いられて、抽象的・普遍的な事柄を表すものであった。

ここで、Sālim で bi-未完了形が用いられている2例を見ると：

例文38) **lamma bi- tkūn fih wazāyif mihtāga li- 'u'āl kibīra..**  
 ～とき ～である 3女单・未完 ある 仕事 複 必要である 能分・女单 ～を 頭脳 複 大きな 女单  
**kullu -ku(m) tit'addimu..**  
 皆 2複・斜格 進み出る 2複・未完

大きな頭脳を必要とする仕事があるとき、あなたたちは皆、進み出る。

**lamma yikūn fih musība.. kullu -ku(m) ti'milu 'ay biya..**  
 ～とき ～である 3男单・未完 ある 不運 皆 2複・斜格 する 2複・未完 馬鹿 複  
 不運があると、あなたたちは皆、馬鹿をやるのよ。(Sālim, p.40)

例文39) **lamma -l xōf bi- yissallil li- 'alb 'insān, bi- yixtilit bi-**  
 ～とき (限定辞) 恐怖 浸透する 3女单・未完 ～に 心 人間 混ざる 3男单・未完 ～に  
**damm -u wi- 'a'l -u wi- 'ahlām -u..**  
 血 3单・斜格 と 理性 3单・斜格 と 夢 複 3单・斜格  
 恐怖が人間の心に染み込むと、それはその人間の血と理性と夢に混じります。(Sālim, p.106)

主節は前者が無標的未完了形、後者が bi-未完了形となっているが、いずれも一般的な事実を示している。ここで、例文38) で、bi-tkūn—すなわち、*kān* (to be) の未完了形に bi-の付いた形—が用いられている。しかし通常、直説の現在時制では *kān* (to be) は用いられない。「仕事がある」のような、現在の存在を表すには、*fih wazāyif* (*fih* : 直訳 in him/it) や、*hināk wazāyif* (*hināk*: there) のような表現が用いられる。

*bi-thkūn* という、この原則破りの表現は、一般的な事実を表す無標的未完了形 *t(i)kūn* との意味の近さを示す効果があるものと思われる。

以上のような抽象的な叙述は、前項と同じく、bi-未完了形と無標的未完了形との境目に位置するものと言え、前節で述べた両者の用法と並行する図式である。

lamma 節に無標的未完了形の用いられる例の最後は、主節で bi-未完了形が用いられているものである。高官たちがエディップスを神に仕立てようとするのに対し、エディップスは「何故、お前たちがそうしなければならないのか、その必然性がわからない」と訴える。それに答えたテー

べの町議会の議長の台詞：

例文40)	<i>in-</i>	<i>nās</i>	<i>bi-</i>	<i>tihtirim</i>	<i>-na</i>	<i>'aktar</i>	<b>lamma</b>	<i>ti'raf</i>	<i>'inni</i>	<i>rayis</i>
	(限定辞)	人々		尊敬する	3 女单・未完	1 複・斜格	より多く	～とき	知る	2 女单・未完
	<i>-na</i>	<i>'ilāh..</i>								～こと
	1 複・斜格	神								長

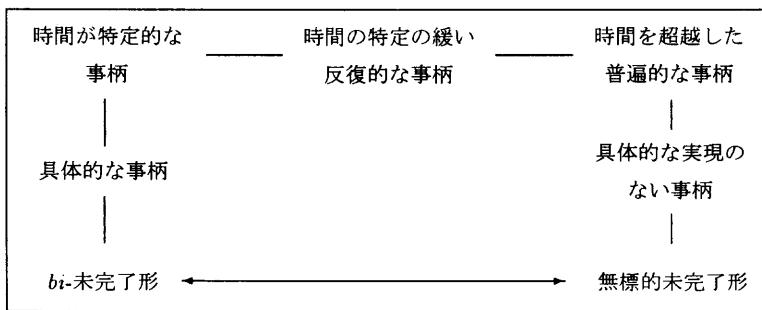
人々の長が神であると知るとき、人々は我々をもっと敬うのです。(Sālim, p.106)

この場合は、*lamma* 節では、まだ実現されていないことを表す無標的未完了形が用いられているが、人々が「我々の長が神であると知る」未来の時点を想定した文ではなく、主節で、*bi*-未完了形によって抽象的な事柄を表しており、*lamma* 節と主節がずれた関係になっている。人々はまだエディプスが神であるとは知らず、これは実現されていない事柄だが、いったんそつと知れば、確実に尊敬の念を抱くことが、一般的な事実として定着するのだという意味合いが、このような形式上のずれを生んでいる。

以上のように、まず特定的な時を指示する場合、視点の置き方や主節との時間関係によって、既に起こったものと見なされる場合は、*lamma* 節内であっても無標的未完了形にはならない。すなわち、無標的未完了形は、いつの時点から見たにせよ、「まだ実現していないこと」を表している。これには、実際に実現したことだが、視点を置いた時点から見るとまだ実現していないことと、死のように必ず実現するか、あるいは実現が確実に見込まれることだが、発話時点から見てまだ実現にいたらいいことの、双方を包括しており、いずれも現実世界で具体的な形で生じていないことである。そして無標的未完了形の普遍的な事柄を示す用法も、このような具体性のなさの延長上にある。すなわち、一般的なことがらを述べ、特定の時間に起こる具体的な個別の事柄を表すのではない、脱時間・脱具体性という性質と、まだ実現していない事柄を表す非具体的な性質とは連続している。

先程の例文28) *lamma (a)mūt 'ana ha-ti'milu 'eh..?* (私が死んだら、お前達はどうするつもりだ?) や、例文29) *lamma tit'addim šuwayya ha-tifham.. wi-ha-tit'awwid..* (お前もちょっと進歩すれば、わかるだろうし、慣れるだろうよ。) の例で、(a)*mūt* (私が死ぬ) や *tit'addim* (お前が進歩する) を、単純に未来形の代用とは考えられないのではないか、と述べたのもこのためである。発話時点に視点を置いたと考えれば、確かにどちらも未来であるが、「何らかの時点で、まだ実現していないこと」を表すと解釈した方が、過去について語っている例文30), 31) の例まで包括して考え、かつそれらと普遍的な非アクチュアル的用法との連続性を視野にいれた場合、より合理的である。因みに、*lamma* 以外の時を示す接続詞に導かれた節でも、未来時制を示す *ha*-未完了形は全く見られなかった。無標的未完了形そのものが未実現を表すのだから、それにさらに *ha*- を付ける必要はないのだとも言えるだろう。

無標的未完了形の以上のような、一般的な事柄を表す非アクチュアルな概念的な側面と、現実世界で具体的な形で生じていないことを示す側面との連続性については、次項でも触れていくたい。ともあれ、時を示す從属節内の未完了形の用法まで含めると、*bi*-未完了形と無標的未完了形の関連は、次のようにまとめておく：



ただし、条件文では事情が異なり、*law* や *'iza* で導かれる条件節内では、完了形のみが用いられている。Sālim で唯一、完了形以外の形式の用いられていた例は以下の1例のみである：

- 例文41) *kān*      *mumkin*      *yihill*      *il-*      *fazzūra..*      **law**      **huwwa**      **rāyih**  
 ~である 3男单・完了 ~できる 解く 3男单・未完 (限定辞) なぞなぞ もし 3男单・主格 行く 能分・男单  
 'ašān      *yihill*      *il-*      *fazzūra..*  
 ~するため 解く 3男单・未完 (限定辞) なぞなぞ

彼はなぞなぞを解くことができたろうよ、もし彼がなぞなぞを解くために行ったのであつたらね。(Sālim, p.26)

ここでは、*huwwa* (彼が) という代名詞が、*kān* (~である 3男单・完了) の代わりを務めているような印象が持たれ、完了形が用いられなくとも、不自然な感じはしないようである。この条件節を、動詞の完了形を用いて以下のように書き換えて、意味は変わらないようである：

- 例文42) **law**      **rāh**      'ašān      *yihill*      *il-*      *fazzūra..*  
 もし 行く 3男单・完了 ~するため 解く 3男单・未完 (限定辞) なぞなぞ

- 例文43) **law**      **kān**      **rāyih**      'ašān      *yihill*      *il-*      *fazzūra..*  
 もし ~である 3男单・完了 行く 能分・男单 ~するため 解く 3男单・未完 (限定辞) なぞなぞ

- 例文44) **law**      **kān**      **rāh**      'ašān      *yihill*      *il-*      *fazzūra..*  
 もし ~である 3男单・完了 行く 能分・男单 ~するため 解く 3男单・未完 (限定辞) なぞなぞ

なお、例文41) は、怪物退治（怪物の出すなぞなぞを解く）に行った男が、なぞなぞを解けずに怪物に殺されてしまったことを言っている台詞だが、このことばに対して「では、彼はピクニックに行ったとでも言うのですか？」と質問が飛ぶ。その答では：

- 例文45) 'abādan.      **rāyih**      *wi-*      *bi-*      *yfakkar*      *fi*      *-g-*      *gayza..*  
 決して 行く能分・男单 そして 考える 3男单・未完 ~について (限定辞) 賞  
 決して (そうではない)。彼は褒美のことを考えながら行ったのだ。(Sālim, p.26)

と、やはり完了形 *rāh*ではなく、能動分詞の *rāyih*が用いられているが、インフォーマントに

よれば、全く自然だそうである。(能動分詞については、また次節で吟味したい。)

他方、条件文に順ずる構文で、条件節にあたる部分が *law* や *iza* 以外で導かれる場合には、未完了形が用いられている：

例文46) 'ayy garīma bi- **tiħṣal** rayīs iš- šurṭa bi- yfakkar fi  
 どんな～ 犯罪 起こる 3 女单・未完 長 (限定辞) 警察 考える 3 男单・未完 ～について  
 -ha wi- b- zaka' -u yi'raf mīn il- mugrim..  
 3 单女・斜格 そして ～によって 賢さ 3 男单・斜格 知る 3 男单・未完 誰 (限定辞) 犯人  
 どんな犯罪でも起これば、警察署長がそれについて考え、彼の知恵によって誰が犯人かが判明するのだ。(Sālim, p.30)

例文47) 'ayy wāhid yi'mil hāga diddi Tība hadritak mas'ūl 'inn  
 どんな～ 一人 する 3 男单・未完 こと ～に対抗して テーベ あなた 男单 責任を負った 受分・男单 ～こと  
 -ak tiwa"af -u 'andi hadd -u..  
 2 男单・斜格 止める 2 男单・未完 3 单男・斜格 ～のもので 限界 3 单男・斜格  
 誰でもテーベに楯突くことをした者は、あなたに、その者を押し留める責任があります。  
 (Sālim, p.54)

条件文については、また稿を改めて考察したいと思う。

### 3.3 「実現していないこと」からの派生的用法

#### 3.3.1 不確実性を表す用法

現実世界で具体的な形で生じていないことを示す無標的未完了形の用法は、時を示す従属節以外でも見られ、具体性のある bi-未完了形と対比的に用いられている。

例文48) lāzim ni'raf **ḥagm** -u 'add 'ēh .. sumk gild -u..  
 必要だ 知る 1 複・未完 大きさ 3 单男・斜格 どのくらい 厚さ 皮 3 单男・斜格  
 我々は知らねばならぬ。そいつ (=怪物) の大きさはどのくらいかを。そいつの皮膚の厚さを。  
 'en -u **bi-** tṣūf li- mada 'add 'ēh ?  
 眼・女 3 单男・斜格 見る 3 单女・未完 ～に 度合い どのくらい  
 そいつの目がどのくらい見えるのかを。

fi 'ayy makān min gism -u d- darba tikūn mu'assira  
 ～において どの 場所 ～のうちの 体 3 单男・斜格 (限定辞) 殴打 ～である 3 单女・未完 影響のある 单女・受分  
 そいつの体のどの場所を打てば効果があるのかを。  
 bi- yitharrak izzāy.. sur'it -u 'add 'ēh .. bi- ynām 'imta.. w-  
 動く 3 单男・未完 どのように 速度 3 单男・斜格 どのくらい 眠る 3 单男・未完 いつ そして  
 kam sā'a ?  
 幾つ 時間  
 どう動くのかを。速度はどのくらいかを。いつ、そして何時間眠るのかを。(Sālim, p.95)

怪物は現実に存在するので、怪物の大きさや皮の厚さも現実に存在する。また生物であるから、見たり動いたり眠ったりということも当然ありうる、と話者は考え、これらは全てコピュラ無し名詞文<sup>11)</sup>や *bi*-未完了形によって表されている。しかし、急所を殴るということに関しては、怪物に急所があるのか、あるとしたらそれはどこか、という不確実な話で、怪物のどこかを殴ると影響が出るということは、現実かどうかわからない。そのため、この件に関してだけ無標的未完了形 *tikūn* (“to be” 3 単女・未完) が用いられている。似たような例として：

例文49) *il- wuhūš ha- t'ul 'alγaz lēh..?*

(限定辞) 怪物 複 (未来) 言う 3 単女・未完 なぞなぞ 複 何故

怪物たちが、なぞなぞを言うだろうとは、何故だ？

*il- wuhūš tisti'mil 'a'l -ha lēh..?*

(限定辞) 怪物 複 使う 3 単女・未完 頭脳 3 単女・斜格 何故

怪物たちが、頭脳を使うだろうとは、何故だ？

*il- wuhūš bi- tisti'mil 'adalat -ha wi- nyab -ha.*

(限定辞) 怪物 複 使う 3 単女・未完 腕力 3 単女・斜格 ～と 牙 3 単女・斜格

怪物たちは、その腕力と牙を使うのだ。

*il- wuhūš bi- tisti'mil maxālib -ha w- dawāfir -ha..*

(限定辞) 怪物 複 使う 3 単女・未完 鉤爪 3 単女・斜格 ～と 平爪 3 単女・斜格

怪物たちは、その爪を使うのだ。(Sālim, p.34)

ここで、*tisti'mil* (使う 3 単女・未完) は、その前の *ha-t'ul* (未来-言う 3 単女・未完) との繋がりで、*ha-tisti'mil* (未来-使う 3 単女・未完) と解釈するのが妥当であろうし、実際これを *ha-tisti'mil* と置換えても自然である。しかし、これを *bi-tisti'mil* (現在-使う 3 単女・未完) と置換えると、「腕力と牙と爪で勝負する怪物たちが、頭を使うなんてことがあるか?」というニュアンスが消えて、「怪物たちは、なぜ頭脳を使うのだろうか」と、実際に怪物が頭脳を使っていることを認めるような表現になり、後の文と趣旨が一貫せず不適切である。

さらに、次の例では、カリヨンが *bi*-未完了形を用いているのにも関わらず、エディップスが無標的未完了形を用いて対応している：

例文50) *Karyūn: (略) lākin is- silāh miš bi- yhārib li-wahd -u..*

カリヨン しかし (限定辞) 武器 (否定辞) 戰う 3 男單・未完 ひとりで 3 男單・斜格

カリヨン：しかし、武器はそれ自身で戦うのではありません。

*is- silāh bi- yhārib bi -h rāgil..*

(限定辞) 武器 戰う 3 男單・未完 ～で 3 男單・斜格 男

武器は、男がそれを持って戦うものなのです。

11) 現在時制の直説法で「A は B である」と述べる場合、A と B の間にはコピュラを入れない。この例では、*hagm-u 'add 'ēh* や *sur'it-u 'add 'ēh* がこれに当たる。前項の例文38) の説明も参照。

*mīn illi bi- ydarrab      ir- rāgil.. ?*  
 誰 閣代 訓練する 3 単男・未完 (限定辞) 男  
 誰がその男を訓練するのでしょうか?

*'Udib: yidarrab      -u      'ala      'ēh.. ?*  
 エディブス 訓練する 3 単男・未完 3 男単・斜格 ~について 何  
 エディブス: その男に何の訓練をするのだ? (Sālim, p.104)

カリヨンが、具体的に存在するものとして *bi*-未完了形で言い表した訓練であるが、ここでエディブスが無標的未完了形を用いたことにより、エディブスは訓練の存在そのものを知らなかつたことが表現される。これを *bi-ydarrab* と置きかえたり、また例えば、意志的なムードを表す *nāwi* (~するつもり) を用いて、*nāwi ydarrab-u 'ala 'ēh.. ?* (何の訓練をするつもりなのか?) などのように言うと、訓練のあることは知っていたが、何の訓練かは知らなかつたという意味合いに変化してしまう。

具体性を表す *bi*-未完了形の例として:

例文51) *il- muxtara'āt di kulla -ha ha- tithawwil li- dahab.. wi -d- dahab*  
 (限定辞) 発明品 複 この 女単 全て 3 女単・斜格 (未来) 変わる 3 女単・完了 ~に 黄金 そして (限定辞) 黄金  
*fi -l- 'āxir bi- yṣubb fi maglis il- madīna wi -l- ḛurfa -t- tigariyya..*  
 ~に (限定辞) 最後 注ぐ 3 男単・未完 ~に 議会 (限定辞) 町 と (限定辞) 部屋 (限定辞) 商業の 女単  
 この発明品はすべて、黄金に変わるでしょう。そしてその黄金は、最後に、町議会と商工  
 会議所に流れ込むのです。(Sālim, p.73)

発明品が黄金に変わるのが未来のことであるから、その黄金が流れ込んでくるのは、さらに先の未来になるはずなのだが、現在時制を示すとされる *bi*-未完了形が用いられている。この *bi*-は外しても、文脈と矛盾はしないが、*bi-yṣubb* だと、確実に黄金が流れ込んでくるという意味合いが含まれ、エディブスに発明をするよう促すこの場面にはより相応しい。

次の、アワーリフのエディブスに対する台詞でも:

例文52) *it- taharriyāt wi -t- ta'rīr illi gat l -i bi- tisbit*  
 (限定辞) 報告書 複 と (限定辞) レポート 複 閣代 来る 3 女単・完了 ~に 1 単・斜格 証明する 3 女単・未完  
*ya mawlā -y, 'inn -ak bi- tinhidir ra'san min ṣulbi 'āliha..*  
 ~よ 主人 1 単・斜格 ~こと 2 男単・斜格 下る 2 男単・未完 直接 ~から 子孫 神々  
 私に届いた報告書やレポートは、ご主人様、あなたが直接神々から下ってきてていることを  
 証明しているのです。(Sālim, p.53)

報告書が書かれたのも、エディブスが (もしかすると神の血統を受け継いで) 生まれてきたのも、過去の話であるが、現在時制を示すとされる *bi*-未完了形を用いて表現されている。完了形で「証明した」「下ってきた」と言ってしまえば、過去にそうしたことがあったという記述に終わってしまう。しかし、*bi*-未完了形を用いた場合は、報告書が書かれたりエディブスが生まれてきたことの結果の、現在に至るまでの継続およびそれによる効果の現在に至るまでの持続を示していると考えられる。

### 3.3.2 具体性の少ない事柄を示す用法

現実世界で具体的な形で生じていないことを示す無標的未完了形の機能として、具体性の少ない、すなわち抽象的な意味を表す用法もある。例えば次の例で、*timši* という無標的未完了形は「歩く」という具体的な意味ではなく、抽象的、またはある種比喩的な「進む、進展する」のような意味合いを持たされている：

例文53)	<i>'inta</i>	<i>bi-</i>	<i>sifat -ak</i>	<i>rayīs il-</i>	<i>γ urfa -t-</i>	<i>tigariyya yihimm</i>					
	2男單・主格	～によって	性質	2單男・斜格 長	(限定辞)	室	(限定辞)	商業	関心を持たせる	3男單・未完	
-ak		<i>'inn</i>	<i>it-</i>	<i>tigāra</i>	<b>timši</b>		<i>wi-</i>	<i>xazayn -ak</i>	<b>titmili</b>		
<i>tāni.</i>											
	2单男・斜格	～こと	(限定辞)	商業の 女單	歩く、進む	3女單・未完	そして	金庫	2单男・斜格	満ちる	3女單・未完
											再び
											あなたは、商工会議所所長として、商業が進み、あなたの金庫が再び満ちることに関心があるのだ。(Sālim, p.27)

ここで、*it-tigāra timši*（商業が進み）と無標的未完了形を使うと、商業が順調に進んでいるさまが表されるが、これを、*\*it-tigāra bi-timši* のように、*bi*-未完了形にしてしまうと、具体的な「歩く」という動作、つまり一歩ずつ歩いているようなイメージとなり、商業の状況を述べるのに使うのはおかしい。また、*xazayn-ak titmili*（あなたの金庫が再び満ちる）で、*\*xazayin-ak bi-titmili* のように *bi*-未完了形を用いることはできないし、もし使ったとすると、「歩く」の例と同様に、金庫の中にちびちびと貯まっていくような言い回しになり、「金庫が満ちる」という意味合いは失われる。ただし、後述するように、能動分詞で置換えた場合には原義は損なわれない。

また、完了形と並行して用いられている例では：

例文54)	<i>māt</i>	<i>il-</i>	<i>malik, 'āš</i>	<i>il-</i>	<i>malik.. yirūḥ</i>	<i>Ahmus</i>					
	死ぬ	3男單・完了	(限定辞) 王	生きる	3男單・完了	(限定辞)	王	行く	3男單・未完	アモス	
	<b>yīgi</b>	Ramsīs..	<b>yirūḥ</b>	Mīnā	<b>yīgi</b>	Tuhutmus..					
	来る	3男單・未完	ラムセス	行く	3男單・未完	メナ	来る	3男單・未完	トトメス		
											王が死に、王が生きた。アモスが行き、ラムセスが来て、メナが行き、トトメスが来て‥
											(Sālim, p.71)

これを *rāḥ Ahmus, gēh Ramsīs* などのように完了形にすると、単純に、*māt il-malik, 'āš il-malik* に準じる事実を列挙しているだけの文になるが、原文のように無標的未完了形を用いた場合は、王が来ては逝くその歴史の繰り返されるさまを表現する、やや抽象度の高い言い回しとなっている。

逆に、語られたイベントそのものが現実世界のものでなくとも、語られているイベントの起きた別の世界の中で実現されているものは、*bi*-未完了形で示される。これは特に“*wi*-主格の代名詞”で導かれる状態を示す従属節内で見られる：

例文55) 'aṣīm 'awi 'inn il- wāhid yi'ābil ik- kawāris wi- huwwa  
 すごい とても ~こと (限定辞) 人 会う 3男单・未完 (限定辞) 災い 複 そして 3男单・主格  
**bi- yidhak ..**

笑う 3男单・未完

人が、笑いながら災いに会うなんて、とてもすごいことだ。(Sālim, p.32)

「笑う」という行為は、後述する「いわゆる不定詞的な用法」にあたり、実際に誰かが笑いながら災いにあったわけではなく、もしそういう事態が実現したとしたら、とてもすごいことだ、ということである。しかし、誰かが笑いながら災いに会うという仮定の世界の中では、「彼が笑う」というのは「彼が災いに会う」ことが仮定された世界の中では実現している。さらに、ここでは「普通は災いに会うときに笑ってなどいられないはずだが」という含みがあり、「笑いながら」は単に付隨的な出来事ではなく、災いに会うことと対等な重さを持っている。

完了形で表される過去に既に起こった出来事と同時進行でなされた行為も、*bi*-未完了形で表される：

例文56) imbārih bi -l- lēl w- ana b- adawwar fi wasāyi' 'Amūn wi-  
 昨日 ~に (限定辞) 夜 そして 1单・主格 ~を探す 1单・未完 書類 複 アモン と  
 Ra' il- mahfūza 'andi -na fi 'arṣif il- ma'bad lahazt 'inn  
 ラー (限定辞) 保管する 受分・女单 ~のもとに 1单・斜格 ~に 棚 複 (限定辞) 礼拝所 見つける 1单・完了 ~こと  
 ism 'Udib taraddad fi sab' wasāyi' bardī..  
 名 エディブス 繰り返す 3男单・完了 ~に 7 書類 複 バビルスの  
 昨晩、我々のところ、礼拝所の棚に保管してあるアモンとラーの書類を探していたとき、  
 私は、エディブスの名がパピルスの書類7部に繰り返し現れているのを見つけました。  
 (Sālim, p.51)

*b-adawwar*（私が探している）は、昨晩、書類を *lahazt*（見つけた）その時点で、私が行なっていた行為であり、過去の出来事ではあっても、主動詞 *lahazt*（見つけた）が実現した世界では現実に進行していた、かつ見つけたと言う結果に直結した行為で、それが *bi*-未完了形で表されている。

逆に、前項3.2.2 *lamma* 節内の完了形と未完了形で「*lamma* 節がさらに別の従属節内に存在する例」として除外した例：

例文57) il- wahš il- 'abīt illi bi- yxalli -ku(m) tistannu dayman  
 (限定辞) 怪物 (限定辞) 馬鹿な 関代 ~させる 3男单・未完 2複・斜格 待つ 2複・未完 常に  
*lamma* yīgi hadd yihilli l- ku(m) mašākil -ku(m) wi-  
 ~とき、まで 来る 3男单・未完 誰か 解く 3男单・未完 ~ために 2複・斜格 問題 複 2複・斜格 そして  
 tiddū l -u 'ayy hāga..  
 与える 2複・未完 ~に 3单男・斜格 どれ、どんな 物  
 馬鹿な怪物が、お前たちを、いつも誰か自分たちの問題を解決してくれる人が来るまで待ち、その人にどんな物でも与えてしまうようにさせているのだ。(Sālim, p.47)

この例でも *tistannu*（お前たちが待つ）は、怪物が待つようにさせたわけで、後述する不定

詞的用法である。もちろん実際に“お前たち”が待っているという事実があるのだが、この文は、*tistannu*（お前たちが待つ）ということを想定して、怪物が人々をそのような状態にさせている、という表現であり、その結果として現実世界で“お前たちが待つ”ことが実現するのとは別である。そして、その想定された*tistannu*（お前たちが待つ）の世界で、*yigi hadd yihilli l-ku mašākil-ku*（誰か自分たちの問題を解決してくれる人が来る）ということが不確実であるから、ここでは無標的未完了形 *yigi* が用いられている。

このような、*bi*-未完了形の具体性を表す機能により、臨場感の感じられる表現がなされる。例えば：

例文58) 'amma (a)šūf                  'ana                  b- ašśitim                  'izzāy..  
 ～まで      見る 1单・未完      1单・主格      騙られる 1单・未完      どのように  
 私が、自分がどんな風に罵られているか知るまでは。(Sālim, p.92)

において、*b-ašśitim*（罵られている）と、*bi*-未完了形を用いることで、今、現に罵られているという緊迫感が生まれるが、これを *ašśitim* と無標的未完了形にすると、罵られるという事実があります、といった事実の記述になってしまい、臨場感も失われる。

また、野次を飛ばされた演説者が怒って吐く台詞：

例文59) mīn illi bi- yitkallim..      illi bi- yitkallim      yi'ūm      yi'af..      (ト書き省略)  
 誰      関代      話す 3男单・未完      関代      話す 3男单・未完      立つ 3男单・未完      立つ、止まる 3男单・未完  
 嘿っているのは誰だ？      嘿っている奴は立て。

illi bi- yitkallim      yi'ūm      yi'af..      (ト書き省略)      illi bi- yitkallim  
 関代      話す 3男单・未完      立つ 3男单・未完      立つ、止まる 3男单・未完      関代      話す 3男单・未完  
 xāyif      leh.. ?  
 恐れる 能分・男单 何故  
 嘿っている奴は立て。嘿っている奴は何故こわがっている？

yi'ūl      ism -u      'ašān nisbit      -u      fi mahdar ig-galsa.. (ト書き省略)  
 言う 3男单・未完 名前 3男单・斜格 ～ため 書きとめる 1複・未完 3男单・斜格 ～に 議事録（限定辞）会議  
 自分の名前をと言え、我々がそれを議事録に記録するために。

mīn illi bi- yitkallim ..?.. iṣ- sōt gāy      min in- naḥya di..  
 誰      関代      話す 3男单・未完      (限定辞)      声      来る 能分・男单      ~から (限定辞)      則      これ 女单  
 嘴っているのは誰だ？声はこっちの方から来ているな。

min illi itkallam ..illi 'āyiz      yitkallim      yirfa'      'id -u  
 誰      関代      話す 3男单・完了      関代      ～したい 能分・男单      話す 3男单・未完      上げる 3男单・未完      手      3男单・斜格  
 wi- yuṭlub      ik- kilma  
 そして 求める 3男单・未完 (限定辞) 言葉  
 嘴ったのは誰だ。喋りたい者は、手を挙げて、発言権を求める、

*wi- y'ūl                  ism -u..*  
 そして 言う 3男单・未完 名前 3男单・斜格  
 自分の名前を言いなさい。(Sālim, p.91)

野次を飛ばされた直後からえんえんと話し続け、かなり時間がたっても *bi*-未完了形である *bi-yitkallim* (喋っている) を使い続け、その後でやっと完了形 *itkallam* (喋った) に切り替わっている。完了形に切り替わったことにより、話が一段落した、言いたいことを言い終わったという印象が生み出されている。飛んできた野次に対して目下の出来事として怒りをぶつけているのが *bi*-完了形の使用段階で、言いたいことを言い終わって、野次が飛んできたのを過去の出来事と見なしたのが、完了形の使い始めであるといえる。このように目下の出来事として、物事を臨場感を持って伝える *bi*-未完了形の機能は、無標的未完了形のそれと対照的である。

逆に、無標的未完了形を別の動詞に添えて用いると、その行為の目的等を表すことになる。

例文60) *Karyūn rāyih                  yi'ābil                  il-                  wahš li-wahd -u..*  
 カリヨン 行く 能分・男单 会う 3男单・未完 (限定辞) 怪物 ひとりで 3单男・斜格  
 カリヨンが、怪物に会うために一人で行ってしまう。(Sālim, p.115)

また、次のように同時に起こっていても、主たる行為に対して付隨的でしかない場合には、無標的未完了形が用いられる：

例文61) *sā'it ma tili't                  tigrī                  tihill                  il-                  luyz..*  
 ~とき 登る 2男单・完了 走る 2男单・未完 解く 2男单・未完 (限定辞) なぞなぞ  
 あなたがなぞなぞを解くために、走って登っていったとき (Sālim, p.57)

例文62) *'intu(m) fi'lan 'a'dīn                  ti'aayyātu.. bi- tulṭumu                  kamān...*  
 2複・主格 実に 座る 能分・男複 泣く 2男複・未完 両頬を叩く 2男单・未完 ～もまた  
 ほんとうにあなたたちは、泣きながら座っている。両頬を叩いて (注：悲しみを表すしぐさ) もいる。(Sālim, p.32)

### 3.3.3 未来、そしてムードを表す用法

現実世界で具体的な形で生じていないことを示す無標的未完了形の用法のもうひとつの形として、未来を示す用法がある。3.2.1 時を示す従属節内の無標的未完了形でも見たように、ある時点から見て、まだ実現されていないことを無標的未完了形で示すという用法があったが、時を示す従属節以外でも、類例が見られる。

例文63) *il- 'adīyya -l- 'asasīyya ya sayyid Tīrīzyas 'an fiḥ                  luyz.. wi-*  
 (限定辞) 問題 (限定辞) 基本的な 女单 ～よ ～様 テレジアス ～こと ある、存在する なぞなぞ そして  
*maylūb wāhid yihill il- luyz..*  
 求める 受分・男单 誰か 解く 3男单・未完 (限定辞) なぞなぞ  
 基本的な問題は、テレジアス様、なぞなぞがあるということなのです。そして、誰かそのなぞなぞを解く人が求められているのです。(Sālim, p.33)

現実にあるなぞなぞについては, *fih* という「(現在) ある」という表現が用いられているが, なぞなぞを解く人については, *yihill* という無標的未完了形が用いられている。なぞなぞを解くことは, これから先のこととして願われ望まれていることであるが, *ha-yhill* と未来形を用いると, 解いてくれるべき, といった近い将来への期待のようなものが感じられない。

あるいは, 次の例 (例文53と重複している部分がある) :

例文64) *huwwa da lli yhimm -ak.. 'inta bi- sifat*  
 3男单・主格 これ 男单 関代 関心を持たせる 3男单・未完 2男单・斜格 2男单・主格 ~によって 性質  
*-ak rayis il- γurfa -t- tigariyya yihimm -ak 'inn it-*  
 2单男・斜格 長 (限定辞) 室 (限定辞) 商業の 単女 関心を持たせる 3男单・未完 2单男・斜格 ~こと (限定辞)

*tigāra timši wi- xazayn -ak titmili tāni.*  
 商業 歩く、進む 3女单・未完 そして 金庫 2单男・斜格 満ちる 3女单・未完 再び

これが, あなたの関心事なのだね。あなたは, 商工会議所所長として, 商業が進み, あなたの金庫が再び満ちることに関心があるのだ。(Sālim, p.27)

ここで, *bi-yhimm-ak* と *bi*-未完了形を使うと, 目下のところの, 言い換えれば一時的な関心事という意味合いになるが, 原文のように *yihimm-ak* と無標的未完了形にすれば, 今だけではなく今後もという継続的な意味が出る。

例文65) *'Udib: (略) lamma (a)mūt 'ana ha- ti'milu 'ēh .. ?*  
 エディップス ~とき 死ぬ 1单・未完 私 する 2複・未完 何  
 エディップス: 私が死んだら, お前達はどうするつもりだ‥?

*il-ahāli: timūt .. ? 'Udib yimūt .. ?*  
 人々 死ぬ 2单男・未完 エディップス 死ぬ 3单男・未完  
 人々: あなたが死ぬ?‥ エディップスが死ぬのですか‥?

*'Udib: 'aywa.. 'Udib yimūt ..*  
 エディップス はい エディップス 死ぬ 3单男・未完  
 エディップス: そうだ。エディップスは死ぬのだ‥。

*il-ahāli: 'Udib 'ilāh..*  
 人々 エディップス 神  
 人々: エディップスは神です‥。

*'Udib: la'.. 'Udib 'insān..*  
 エディップス いいえ エディップス 人間  
 エディップス: いいや。エディップスは人間だ。(Sālim, p.98)

ここでは, エディップスは神ではなく人間なのだからいはずれは死ななければならない, 死ぬ運命にある, という意味合いで, *timūt* (死ぬ 2单男・未完) *yimūt* (同 3单男・未完) という無標的未完了形が用いられている。これらを, *ha-tmūt*, *ha-ymūt* という未来形で置き換えてしま

うと、単に個別的に、エディップスは将来死ぬであろうというだけの意味になってしまい、人間として必然的な運命としての死を述べる台詞ではなくなってしまう。

このような現在とつながりのある未来を示す無標的未完了形の用法は、未来への願望やこれから先のことに対する意志を示す、ムード的な用法につながっていく。例えば、次のような意志を示す用法：

例文66) **'adahħī bi-kull it-ta'ālid il-mi'addasa.. wi-'aktar min zālik...**  
 ～を犠牲に捧げる 1单・未完 全～ (限定辞) 伝統 様 (限定辞) 聖なる 女單 そして より多く ～より それ 男單  
 私は聖なる伝統の全てを犠牲にいたしましょう。そしてそれ以上のものを。

**'adahħī bi-nafs -i min'agl 'inqāz Tiba..**  
 ～を犠牲に捧げる 1单・未完 自身 1单・斜格 ～ため 救済 テーベ  
 私はテーベを救うために、私自身を犠牲に捧げましょう。(Sālim, p.46)

そして願望文：

例文67) **Allāh yirħam -u..**  
 アッラー 哀れむ 3男單・未完 3男單・斜格  
 アッラーが彼を哀れれますように。(Sālim, p.28)

例文68) **Allāh yixrib bēt -ak ya šēx..**  
 アッラー 破壊する 3男單・未完 家 2男單・斜格 ～よ 老人、師  
 シェイフよ、アッラーがあなたの家を破壊なさいますように。(Sālim, p.69)

また、命令・義務を表す用法<sup>12)</sup>：

例文69) **'ulti l -u 'alif marra miš ayy hāga tit'āl fi**  
 言う 1单・完了 ～に 3男單・斜格 千 回 (否定辞) どんな こと 言われる 3女單・未完 ～で  
**-t- tiliżon..**  
 (限定辞) 電話  
 私は彼に、電話では何も言うな（直訳：何も言わるべきではない）と1000回も言ったのに。(Sālim, p.61)

12) 59) *min illi bi-yitkallim.. illi bi-yitkallim yi'um yi'af..* (以下略)

喋っているのは誰だ？ 嘆っている奴は立て。

で、命令文のように訳した *yi'um* (立つ 3男單・未完), *yi'af* (立つ, 止まる 3男單・未完) も「(喋っている者は) 立たなければならない」3人称に対する義務を表している。

あるいは、以下のような遂行動詞における用法：

例文70) **'a'lin** *rāfd -i 'inni 'ayy 'ustāz mi(n i)g-* *gam'a yirūh*  
 宣言する 1 単・未完 拒絶 1 単・斜格 ～こと どの 教授 ～から (限定期) 大学 行く 3 男單・未完  
**yihill** *il- fazzūra..*  
 解く 3 男單・未完 (限定期) なぞなぞ

私は、どの大学教授がなぞなぞを解きに行くことを拒否することを宣言する。(Sālim, p.27)

例文71) **wi- lzālik 'ana 'atlub** *min il- maglis 'inn -u yismah*  
 そして だから 1 単・主格 求める 1 単・未完 ～から (限定期) 議会 ～こと 3 男單・斜格 許可する 3 男單・主格  
**l- i 'a'bud 'alē -h..**  
 ～に 1 単・斜格 ～を逮捕する 1 単・未完 3 男單・斜格  
 だから私は、議会に、彼を逮捕する許可を求める。(Sālim, p.36)

例文72) **'arfud** *'inni wāhid yit'ibid 'alē -h bi- sabab 'arā'i -h.*  
 拒絶する 1 単・未完 ～こと 誰か 逮捕される 3 男單・主格 ～に 3 男單・斜格 ～で 理由 意見 複 3 男單・斜格  
 私は、人がその信条を理由に逮捕されることを拒否する。(Sālim, p.27)

ただし、以下のような場合は、*bi-*未完了形が用いられている：

例文73) **gāwib.. 'ana b- āmur -ak** *'inn -ak tigāwib..*  
 答える 2 男單・命令 1 単・主格 命令する 1 単・主格 2 男單・斜格 ～こと 2 男單・斜格 答える 2 男單・未完  
 答えなさい。私はあなたに答えるようにと命令しているのですよ。(Sālim, p.27)

これは、上の3例と異なり、自分の意志そのものを表すのではなく、意志を示すという行為を今しているのですよ、という文脈である。つまり、上記3例の「宣言する」「求める」「拒否する」という動詞は、それによってその行為自体を述べているだけではなく、そう述べることによって、その行為を行なっている遂行動詞である。それに対して例文73)は、はっきりと答を言わない臣下に対して、女王が、「私は命令しているのですよ。これは命令なのですよ」と、現時点で自分自身が命令するという行為をしていることを描写するものである。

もしこれを、無標的未完了形に置きかえると、

例文74) **'ana āmur -ak** *'inn -ak tigāwib.*  
 1 単・主格 命令する 1 単・主格 2 男單・斜格 ～こと 2 男單・斜格 答える 2 男單・未完  
 私はあなたに答えるようにと命令します。

のように、「命令します」と言うことによって実際に命令するという行為を行なっていることになり、実質的に「答えなさい」という命令文の働きをすることになる。

未来と絡むこうしたムード的な表現について、亀井他(1996, p.636)も、時制の説明中で「大体、未来の事は常に不確実であるから、常にたかだか蓋然的でしかない。その蓋然性の表示から可能性の叙述に移り、主観的には意志や願望を表わすことになって、法(mood)と交錯するようになる。」と未来の表現とムードとの関連の一般性に言及している。

また、亀井他（1996, p.833）では、ラテン語の主節における接続法の3つの意味、すなわち「意志」「願望」「可能性」についての解説において、「3つに共通する意味的な特徴は、話し手が文を発話している時点における世界において、文の表示する事態が真ではないということである。しかし、真でないからといって、偽であると主張しているわけでもない。すなわち、発話時点における、話し手が属しているのとは異なる、ある別の世界においては真であるのだと主張しているのである。接続法のこの根本的意味に、語用論的な状況を適用した結果派生してくるのが「意志」等の個別的な意味である、と考えられる。」と述べ、「発話時点における話し手が属する世界において、文の表示する事態が真ではない」とことを、意志等のムードの共通項として挙げ、そこから派生してきたのが「意志」「願望」「可能性」といったそれぞれの意味だとしている。

これは、アラビア語エジプト方言の無標的未完了形が、現実世界で具体的な形で生じていないことを示す機能を持ち、そこから派生して上記のようなムード的意味合いが生まれてくる様とも一致している。

### 3.3.4 無標的未完了形のいわゆる不定詞的な用法

現実世界で具体的な形で生じていないことを示す無標的未完了形の用法の最たるもののが、無標的未完了形のいわゆる不定詞的な用法（2.1の2. 無標の未完了形（b）従属節で用いられる場合の iv.；未完了相と人称・性・数が表されているのだから正確には不定詞ではないが、英語の不定詞の用法と共通点が多いことで「いわゆる不定詞的な」と説明されることが多い。本稿でも「いわゆる」をつけておく。）である。

例文75) ‘ēb    ti’ūl              hāga    zayy        kida       li-    wāhid      ’addi      wald   -ak.  
      悪、恥 言う 2男单・未完 こと ~のような そのような ~に 誰か、一人 ~のような 父      2男单・斜格

あなたの父のような人に向かって、そのようなことを言ってはいけません。（Sālim, p.77）

この例は、「あなたの父のような人に向かって、あなたがそのようなことを言うこと」という意味で、無標的未完了形が用いられ、それが罪である、という構文になっている。また、前に出てきた例で：

例文57) il-wahš il-’abīt illi bi-yxalli-ku(m) tistannu dayman lamma yīgi hadd yihilli l-ku(m)  
mašākil-ku(m) wi-tiddū l-u ’ayy hāga..

馬鹿な怪物が、お前たちを、いつも誰か自分たちの問題を解決してくれる人が来るまで待ち、その人にどんな物でも与えてしまうようにさせているのだ。（Sālim, p.47）

は、無標的未完了形の句が、「お前たちが、いつも誰か自分たちの問題を解決してくれる人が来るまで待ち、その人にどんな物でも与えてしまうこと」という意味を持ち、「馬鹿な怪物が、そのことを、お前たちに対して保っている」という構文である。

この不定詞的な用法の無標的未完了形は、しばしば、’āwiz “～したい”， nāwi “～するつもり”， ’arif “～できる”（以上は主語の性・数により変化）や mumkin “～できる”， yumkin “～かもしれない”， lāzim， darūri， mafrūd “～しなければならない”（以上、不変化）のようなムードを表す語とともに用いられる：

例文76) 'āwiz            tikassar            it-        tilifziyūn    wi-        tkassar            ir-        rādiyu..  
           ~したい 能分・男单 壊す 2男单・未完 (限定辞) テレビ        そして 壊す 2男单・未完 (限定辞) ラジオ  
  wi-        tkassar            it-        tilifōn..  
           そして 壊す 2男单・未完 (限定辞)        電話  
           (あなたは) テレビを壊し, ラジオを壊し, 電話を壊したいのね。 (Sālim, p.64)

例文77) yib'a            nāwi            tikdib..  
           なる 3男单・未完 ~するつもり 能分・男单 嘘をつく 2男单・未完  
           すると, お前は嘘をつくつもりだな。 (Sālim, p.76)

これらは, それぞれ「壊すことを欲する」「嘘をつくことを意図する」というのが原義である。ただし, このような用法の中には, 無標的未完了形そのものがムードを表す場合と区別の難しいものがある:

例文78) nitfarrag 'a(la) -t- tilifziyūn 'ahsan.  
           ~を見る 1複・未完 (限定辞) テレビ        より良い  
           テレビを見よう。その方が良い。 (Sālim, p.63)

*nitfarrag 'a(la)-t-tilifziyūn* “私たちがテレビを見ること”が主語で, それが '*ahsan* “より良い”, すなわち「私たちはテレビを見た方が良い」という文で, 通常は,

例文79) 'ahsan    nitfarrag 'a(la) -t- tilifziyūn.  
           より良い    ~を見る 1複・未完 (限定辞) テレビ  
           テレビを見る方が良い。

と, 他のムードを表す語と同じく, '*ahsan* が無標的未完了形の句の前に来る語順となるが, これが例文78例文のように倒置された結果, 無標的未完了形 *nitfarrag* “私たちが見る”が勧誘の意味合いを持ち, '*ahsan* “より良い”の主語としての不定詞的動詞句の役割と, 勧誘のムードをあらわす働きとを, 兼ね備えた状態になっている。

付け加えれば, 3.1 で挙げた, 超時間的な普遍的事実を表す用法も, ムード的な用法と区別しがたいであろう。例えば,

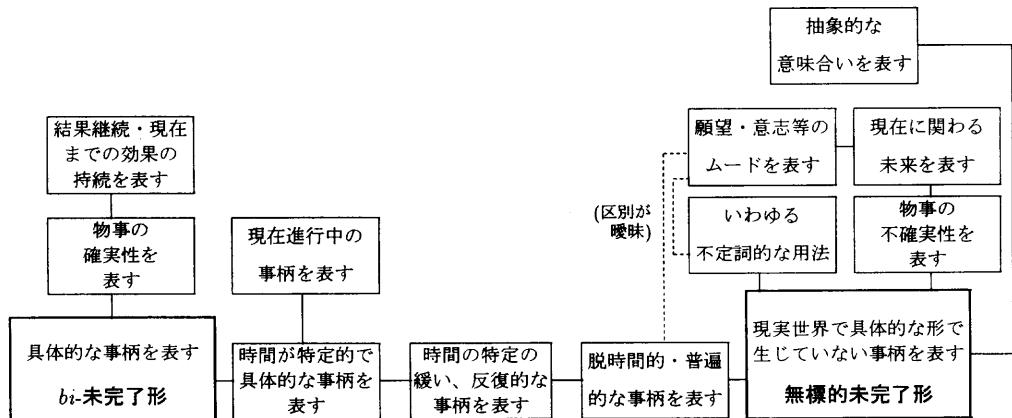
例文80) il-        'insān    yimūt.  
           (限定辞) 人間        死ぬ 3男单・未完  
           人は死ぬ。

は, 述べているのが普遍的事実であるがゆえに, 「人は死ななければならない」「人は死ぬものである」という主観的な意味合いを含んでいるからである。

以上の分析から, 無標的未完了形はまず, 現実世界で具体的な形で生じていない事柄を表すという基本的性質から, 次のような働きを持つことが明らかとなった:

- (1) 脱時間的・普遍的な事柄を表す働き
- (2) 物事の不確実性を表す働き
- (3) 抽象的な意味合いを表す働き
- (4) 現在に関わる未来を表す働き
- (5) 願望・意志等のムードを表す働き
- (6) いわゆる不定詞的な働き

こうした無標的未完了形の用法は、*bi*-未完了形との対比を通して見ると、下図のようにまとめられる：



### 3.4 能動分詞との関わり

#### 3.4.1 結果を表す能動分詞形

2.2で述べたように、能動分詞形は、基本的に結果を表すことが指摘されている (Wild 1964, Woidich 1975, Eisele 1990, 1999)。例えば、El-Tonsi (1982, pp.33-46) に挙げられた能動分詞の意味のうち、最後にある、過去の出来事・動作の結果たる現在の状況（その他の動詞）はこれであるし、その他の意味：現在の状態（状態・態度・知覚を表す動詞）、進行・継続（移動動詞・起動動詞）、確実な未来（移動動詞）も、結果の用法からの派生として説明ができる。

例えば、状態・態度・知覚を表す動詞、例えば ‘irif (知る) の能動分詞 ‘arif が、現在の状態 “知っている” を表すのは、何かを「知った」結果が持続して、今「知っている」のであるし、rāh (行く) のような移動動詞や libis (着る) のような起動動詞の能動分詞が、それぞれ rāyih “行きつつある” や labis “着ている” という進行・継続の意味になるのは、行ってどこかを目指し始めた結果、行きつつあるのであり、何か服を着た結果、今着ているのである。

移動動詞の能動分詞が未来を示すのは、この進行・継続の用法から拡大したものと考えればわかりやすく、rāyih の「行きつつあるがまだ目的地に到達していない」という状態について、「目的地に到達していない」という部分に重点を置けば、出発前つまり行くという動作を始めた前の状態も、この rāyih という能動分詞によって表すことが可能となる。

先行研究で指摘されている、移動動詞以外で、能動分詞が未来（計画されたことや規則的に繰り返される行為や出来事）を表すという用法（例文19 *kulli-l-mahallat 'afla ba'di bukra 'ašān il-'id.* “明後日は祭日のため、全ての店が閉店する” Al-Tonsi et al 1986b, p.114）は、能動分詞の現在進行・継続的な意味合いに加え、移動動詞の未来を表す働きが広がって用いられたものであろうし、感嘆文などで、ある行為が繰り返され習慣的になっているさまを、能動分詞で表

現する（例文21 *miš ma'ūl kida kulli yōm rāgi‘ nuṣṣ il-lēl!* “毎日こんなふうに深夜に帰ってくるなんて、むちゃくちゃだ” Al-Tonsi et al 1986b, p.115）も、能動分詞の持つ継続的な意味合いが拡大した用法と解釈されよう。

無標的未完了形にも未来を示す用法があったが、それは無標的未完了形の「現実世界で具体的な形で生じていない事柄を表す」という性質から派生したもので、既に述べたようにムード的な意味合いのあることが多く、移動動詞の能動分詞が、その結果を表す性質ゆえに持つ、確実な未来を示す用法とは性格が異なる。

逆に、移動動詞の能動分詞形であっても、次のように、既に完了している行為を示すことがある：

例文81) *bal w- aktar hadāra min il- balad illi 'inta gāy min -ha.*  
 しかし そして より多く 文明 ~から (限定辞) 国 関代 2 単男・主格 来る 能分・男单 ~から 3 単女・斜格  
 いや、あなたがそこから来たところの国の文明よりも、むしろ（我々の国の文明は）最も進歩した文明なのだ。（Sālim, pp.39-40）

さらにこの *gāy*（来る 能分・男单）は、来たことが完了したばかりであるとか、来た結果として“あなた”がまだその国に滞在しているとかいう必要はなく、たとえ来たのが十年前であっても、“あなた”がよその国に出国してしまったあとであっても、変わりなく使える表現で、完了形の *gēt*（来る 2 男单・完了）と置き換えるても、意味の違いは感じられない。

ただこの場合，“あなた”すなわちエディップスがこの国にやって来て、さまざまな発明品によってこの国の文明を一気に進歩させたという文脈があり、そうした因果関係が、能動分詞形の選ばれた背景にあるかもしれないと予想する余地はあると思う。

例えば、次の例：

例文82) *'ana gaybā -ku(m) 'aśān tifakkaru wi- txallaṣu*  
 1 単・主格 連れて来る 能分・女单 2 複・斜格 ～ため 考える 2 複・未完 そして 終わらせる 2 複・未完  
*-n- nās mi(n i)l- muṣiba lli hiyya fi -ha,* (以下略)  
 (限定辞) 人々 ～から (限定辞) 災い 関代 3 単女・主格 ～の中に 3 単女・斜格  
 あなたたちが考え、人々がその中にいるところの災いから人々を解放するために、私はあなたたちを連れてきたのです。（Sālim, p.28）

ここでも、*gaybā-ku*（あなたたちを連れて来る）は、この前連れて來たばかりであるとか、連れて來た結果、その人たちがまだここに滞在しているとか、そうした含みはなく、やはり完了形の *gibt*（連れて来る 1 単・完了）と置き換えるても意味合いは変わらない。ただ、能動分詞形の方が、連れて來た目的などがはっきりしている感じがするということで、やはり「連れて來た」ことで期待される結果を考慮に入れた表現であると思われる。

ただしいずれにせよ、これらの能動分詞は、完了形と置き換えるても著しいニュアンスの変化は感じられず、結果を表す用法でありつつも、完了形の用法にかなり近づいたものだといえる。3.2.2 で取り上げた例で：

例文45) **rāyih wi-bi-yfakkar fi-g-gayza..**

彼は褒美のことを考えながら行ったのだ。(Sālim, p.26)

この例では、もちろん、行った結果、怪物のなぞなぞに答えられずに殺されてしまったと言う結果の含みもあるかもしれないが、*rāyih*（行く 能分・男单）の前に *kān*（～である 3男单・完了）が省略されているというわけでもなく、このままで「行った」という、さっき終わってしまった過去の出来事を表す言い回しとなっている<sup>13)</sup>。

もう少し、結果に重点の置かれた用例としては：

例文83) *iṣ-*      *ṣōt*      **gāy**      *min*      *in-*      *nahya*      *di..*  
 (限定辞) 声 来る 能分・男单 ～から (限定辞) 側 これ 女单

声はこっちの方から来ているな。(Sālim, p.91；例文59の一部と重複)

これは、声が聞こえてから多少時間が経過してから発せられた台詞であり、今、声がこちらに届きつつある状態ではない。しかし、単純に「こちらの方向から声が聞こえた」というだけではなく、声の方角に関する状況が維持されていて、声の主の居場所特定に役立つという状況である。

### 3.4.2 能動分詞形の婉曲性、そしてアクチュアル性の低さ

能動分詞の結果を表すという働きは、すなわち、何かの結果を受け手に察してもらうという表現方法である。例えば、*wākil*（食べる 能分・男单）は「食べた」と言って、その結果である「おなかが一杯だ」とか「今はまだ食べたくない」という状況を聞き手に察してもらうわけである。このような性格上、能動分詞の表す意味合いは、婉曲的だったり具体性にかけたりすることが予想される<sup>14)</sup>。

例えば、3.3.2 の例文53) で用いられている無標的未完了形 *timši*（歩く、進む 3女单・未完）を、能動分詞形 *mašya*（歩く、進む 能分・女单）に替えて：

例文84) *inta*      *bi*      *sifat*      *-ak*      *rayīs*      *il-*      *γ urfa*      *-t-*      *tigariyya*      *yihimm*  
 2男单・主格 ～によって 性質 2单男・斜格 長 (限定辞) 室 (限定辞) 商業の 女单 関心を持たせる 3男单・未完  
*-ak*      *'inn*      *it-*      *tigāra*      **mašya**.  
 2单男・斜格 ～こと (限定辞) 商業 歩く、進む 能分・女单

あなたは、商工会議所所長として、商業が進展することに関心があるのだ。

これを、\**it-tigāra bi-timši* のように、*bi*-未完了形にしてしまうと、ゆっくり一歩ずつ歩いてい

13) 同様の例として、

A : 'alō, mumkin 'atkallim ma'a X? (もしもし、Xさんはいらっしゃいますか?)

B : *huwwa msāfir*. (彼は旅行に出ました。)

における *msāfir*（旅に出る、能分・男单）は、インフォーマントによれば、「今、旅行している」ではなく「旅に出てしまった」すなわち完了形の意味に近い。

14) フェズ（モロッコ）方言における能動分詞の同様の効果については、榮谷（1998）でも述べた。

るようなイメージとなってしまうなど、奇妙な表現になることは既に述べたとおりである。しかし、上のように能動分詞で置換えた場合には全く自然な文となる。

また、次の例でも：

例文85) <i>il-'ahāli -n-naharda kāniit</i>	<i>bi-tirkā'</i>	<i>l -i wi</i>
(限定辞) 入々 今日 ~である 3女单・完了	お辞儀する 3女单・未完 ~に 1单・斜格 そして	
<i>-l- markib il- fir'ōni māši..</i>	<i>il-'ahāli -n-naharda sagadū</i>	
(限定辞) 船 (限定辞) ファラオの 男单 歩く、進む 能分・男单 (限定辞) 入々 今日 平伏す 3複・完了		
<i>l -i w- ana b- aşalli..</i>		
~に 1单・斜格 そして 1单・主格 祈る 1单・未完		

人々は今日、ファラオの船（注：エディップスが乗っていた船）が走っていると、私（注：エディップス）にお辞儀をしていた。人々は今日、私が祈っていると、私に平伏した。（Sālim, p.75）

この *māši* を、\**bi-yimši* のように、*bi*-未完了形にしてしまうと、動物が歩いているようなニュアンスとなって、船が進む様を表すには不適切となる。能動分詞にも、無標的未完了形に見られたような、やや抽象的な意味合いを表す性質があるといえる。

その一方で、この文末の *b-aşalli*（私が祈っている）、そのとき祈っていたという具体的な行為を表す *bi*-未完了形（3.3.2で述べた、*bi*-未完了形が、別の出来事と現実に同時進行していた行為を表す用法である）を、能動分詞形 *mişalli*（祈る 能分・男单）と取り替えることはできない。*mişalli* というと、イマーム（祈りの導師）などのような、いつも祈っている人を意味することになる。つまり、ある特定的な時に実際に祈るという具体的な行為の表現ではなくなって、時間的な特定が緩んで反復的・習慣的な事柄を表すのである。

別の例を見てみよう：

例文86) <i>kull il- li'ab fi -s- sū' kida..</i>
全て (限定辞) おもちゃ 複 ～に (限定辞) 市場 このような

市場にあるおもちゃは、全部こうなのよ。

<i>wahš rākib biskilitta wi- 'Udib bi- ymawwit -u..</i>
怪物 乗る 能分・男单 自転車 そして エディップス 殺す 3男单・未完 3男单・斜格

自転車に乗っている怪物、そしてエディップスがそれを殺しているところ。

<i>wahš rākib tayyāra wi- 'Udib bi- ymawwit -u..</i>
怪物 乗る 能分・男单 飛行機 そして エディップス 殺す 3男单・未完 3男单・斜格

飛行機に乗っている怪物、そしてエディップスがそれを殺しているところ。

<i>wahš bi- yil'ab kōra wi- 'Udib bi- ymawwit -u..</i>
怪物 遊ぶ 3男单・未完 球 そして エディップス 殺す 3男单・未完 3男单・斜格

サッカーをしている怪物、そしてエディップスがそれを殺しているところ。（Sālim, p.62）

怪物退治をするエディップスをかたどったおもちゃの描写で、怪物は何かに乗りっぱなし（あ

るいはサッカーをしっぱなし) で、それをエディップスが殺しつつあるという場面である。

*bi-yirkab* (*bi*-乗る 3男单・未完) は、通常、「習慣的に乗っている、いつも乗っている（例えれば、通勤のために毎朝バスに"乗る"、などの場合）」という意味になるが、上の例で *rākib* (乗る 能分・男单) を *bi-yirkab* (*bi*-乗る 3男单・未完) に取り替えると、習慣を表すのではなく、「今、乗りこみつつある、よっこいしょと乗ろうとしている」という意味に変化してしまう：

例文87) *wahš bi- yirkab biskilitta wi- 'Udib bi- ymawwit -u..*  
 怪物 乗る 3男单・未完 自転車 そして エディップス 殺す 3男单・未完 3男单・斜格  
 自転車に乗りつつある怪物、そしてエディップスがそれを殺しているところ。

*wahš bi- yirkab tayyāra wi- 'Udib bi- ymawwit -u..*  
 怪物 乗る 3男单・未完 飛行機 そして エディップス 殺す 3男单・未完 3男单・斜格  
 飛行機に乗りつつある怪物、そしてエディップスがそれを殺しているところ。

*bi-ymawwit* (殺しつつある) に引かれ、それに連動して、時間的に特定的で具体的な「乗りつつある」という解釈となつたのであろう。

逆に *bi-ymawwit* (殺しつつある) を能動分詞形にして、*mimawwit* (殺す 能分・男单) に変えてしまうと、これは今、実際に殺しつつあるという意味ではなく、殺し屋や殺人犯のような意味合いを持ってくるので、この文脈では使うことができない。付け加えれば、上記の例文の最後の部分で、*bi-yil'ab kōra* (サッカーをしている) を能動分詞形に変えて *lā'ib kōra* というと、やはり「サッカー選手」の意味になつてしまつ。

このように、同じ文脈に *bi*-未完了形と能動分詞形とを置いた場合、能動分詞形の方が1) 抽象的な意味合いになる、あるいは2) 時間の特定が緩んでアクチュアル性が下がる。逆にいえば、*bi*-未完了形の方が、より具体的な意味を持つ。

しかしながら、何かの結果を表すという能動分詞形の性格上、無標的未完了形のように、完全に非アクチュアル的な用いられ方（例えは、不定詞的用法など）はないし、能動分詞形と無標的未完了形を比較してみると、やはり能動分詞形の方が、特定の時間に結びつきやすい傾向がうかがわれる。例えは、怪物の前で頭を抱える大学教授を遠くから眺めながらのエディップスの台詞：

例文88) *ma yi'rāf -š yifakkar 'illa 'iza misik*  
 (否定辞) 知る、できる 3男单・未完 (否定辞) 考える 3男单・未完 ~以外 もし 摑む、抱える 3男单・完了  
*dimār -u.. ?*  
 頭 3男单・斜格  
 彼は、頭を抱えなければ、考えられないのか？ (Sālim, p.24)

これは、彼の性質として、頭を抱えないと考へることができないのか？という一般的な話であり、怪物を目の前にした今に限定しての話ではない。

次の2例を比較すると：

- 例文89) *Haruku ma ti'raf -š timši f midān Ramsīs.*  
 ハルコ (否定辞) 知る、できる 3女单・未完 (否定辞) 歩く 3女单・未完 ~で 広場 ラムセス  
 ハルコはラムセス広場を歩くことができない。(ラムセス広場を良く知らない)

- 例文90) *Haruku miš 'arfa timši f midān Ramsīs.*  
 ハルコ (否定辞) 知る、できる 能分・女单 歩く 3女单・未完 ~で 広場 ラムセス  
 ハルコはラムセス広場を歩くことができない。(今、ラムセス広場で迷子になっている)

のように、下の能動分詞形の例の方が、今現在という特定的な時間に起きた出来事を述べる言い回しになっている。また、次の例で：

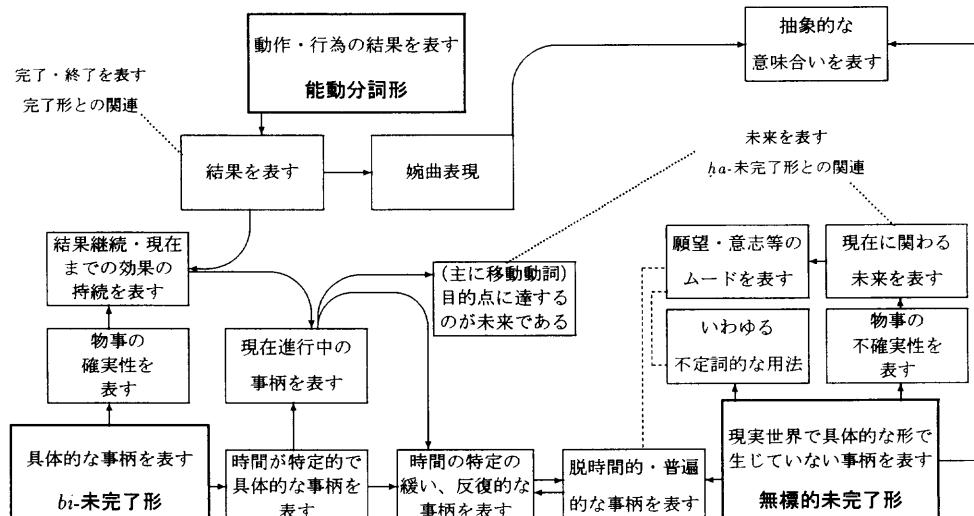
- 例文91) *Haruku ti'raf midān Ramsīs.*  
 ハルコ 知る 3女单・未完 広場 ラムセス  
 ハルコはラムセス広場を知っている。

- 例文92) *Haruku 'arfa midān Ramsīs.*  
 ハルコ 知る 能分・女单 広場 ラムセス  
 ハルコはラムセス広場を知っている。

例文91) のように、無標的未完了形を用いると、ラムセス広場がどこにあるかを知っている程度の感じだが、例文92) のように能動分詞を使った場合には、広場の隅々まで良く知っているという意味合いになり、無標的未完了形より知っている度合いが高くなる。

このように、能動分詞形は、具体的な実現のないことを表す無標的未完了形よりも、具体的・確信的な意味合いを持っている一方で、結果を表すという性質上、その結果を察してもらうという婉曲な言い方になったり、現在の状態を言い表すにも、何かの結果が継続しているという捉え方をしているため、bi-未完了形よりアクチュアル性の低い言い回しになったりする。

以上の分析を踏まえて、最後に動詞の各形式の相互関係を図に表すと、次のようなになる：



※意味の派生する方向を矢印で表した。

#### 4 おわりに

本稿においては、*Kumidiya 'Udib: w-inta (i)lli 'atalt il-wahš*『喜劇エディブス：あなたが怪物を退治した人だ』の用例を検討しながら、アラビア語エジプト方言の、*bi*-未完了形や能動分詞形の用法との比較を通して、主に無標的未完了形に焦点を当ててその機能や文脈における効果を明らかにした。

まず、具体的な事柄を示す *bi*-未完了形と対照的に、無標的未完了形は、現実世界で具体的な形で生じていないことを示すのが特色である。そこから次のような用法が派生する：

- (1) 時間を超越した普遍的な事柄を示す用法。
- (2) 抽象的な意味合いを表す用法。
- (3) いわゆる不定詞的な用法。
- (4) 不確実性を表す用法。これは現在に関わる未来を表す用法やムード的用法に繋がる。

また、何かの結果を表す能動分詞形と比較すると、能動分詞形は、結果を察してもらうという形の婉曲表現や抽象的な表現、あるいは現在の状態を言い表すにも、何かの結果が継続しているという言い方になるので、*bi*-未完了形よりアクチュアル性が下がりがちである。この点で、具体性のない、無標的未完了形に近い性質を持つ。しかし、何かの結果として何らかの形で実現したことを述べるのが能動分詞形の働きであるから、無標的未完了形のような、完全な非アクチュアル性を表現することはない。

ただし、次のような問題点が残っている。まず、本稿においては条件文における動詞の各形式の用法等の問題には言及できなかった。3.2.1 でも述べたように、*law* や *iza* で導かれる条件節内では、完了形が用いられ、未完了形の使われている例がなかったが、今回は完全に考察の対象外としてしまった。

さらに、本論では、無標的未完了形と *bi*-未完了形・能動分詞形との関係を論じたが、同時に完了形と *ha*-未完了形とそれとの関係を提示するにあたり、完了形と *ha*-未完了形の十分な吟味を行なっていない。この点も、今後補強されるべきである。

また、*kān* “to be”, *ba'a* “to become” という動詞の用法に関しても、本稿では触れていない。強いて言えば、3.2.1の例文38) で、通常使われないはずの現在時制における *kān* “to be”について多少触れた程度で、*ba'a* “to become” についてはまったく言及しないままであった。特に *kān* は、他の動詞形式と結びついて複合時制を形成する働きを持つ。これらの動詞の用法についても、インフォーマント調査等を行ない、その特性を明らかにしたい。

#### Appendix

本稿で用いた転写記号（IPA 以外の記号を用いたもの）：

’ [?] ; j [ʒ]	; h [h] ; x [χ] ;
γ [ɣ] ; š [ʃ]	; s [s] ; d [d] ;
t [t̪] ; z [z̪]	; ‘ [f̪] ; y [j]

本稿で用いた略号：

1 = 1人称	2 = 2人称	3 = 3人称
男 = 男性	女 = 女性	单 = 单数
完了 = 完了形	未完 = 未完了形	能分 = 能動分詞
関代 = 関係代名詞		受分 = 受動分詞

※本稿執筆にあたり、筆者の退屈な質問に忍耐強く付き合ってくださった Māgid Anwar さん, Muḥammad Xayrī さん、また多くの有益な助言をくださった『アジア・アフリカ言語文化研究』の査読委員の先生方に、この場をお借りして御礼申し上げる。ただし、本文中の誤謬その他全ての責は筆者にある。なお、本稿の一部は、「アラビア語エジプト方言の bi-を伴う未完了形と無標的未完了形」として、日本言語学会第123回研究大会（2001年11月18日、九州大学）で発表した。

### 参考文献

- Ahmed, M. 1981. *Lehrbuch des Ägyptisch-Arabischen*, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Brustad, K. 2000. *The syntax of spoken Arabic: a comparative study of Moroccan, Egyptian, Syrian, and Kuwaiti dialects*, Georgetown University Press, Washington, D.C.
- Eisele, J.C. 1990. Time reference, tense, and formal aspect in Cairene Arabic. In Eid, M. (ed.) *Perspectives on Arabic Linguistics I. (Current Issues in Linguistic Theory)*, 63. pp.173-212. John Benjamins Publishing Company, Amsterdam/Philadelphia.
- . 1999. *Arabic Verbs in Time: Tense and Aspect in Cairene Arabic*, Harrassowitz, Wiesbaden.
- 龟井孝, 河野六郎, 千野栄一(編著) 1996.『言語学大辞典 第6巻 術語編』三省堂, 東京。
- 工藤真由美 1995.『アスペクト・テンス体系とテクスト: 現代日本語の時間の表現』ひつじ書房, 東京。
- 篠谷温子 1998.「アラビア語フェズ方言における *bṛya* (～したい) と *xəṣṣ* (～しなければならない)」『アジア・アフリカ言語文化研究』(東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所) 55号, pp.255-278.
- Salib, M.B. 1981. *Spoken Arabic of Cairo*. The American University in Cairo Press, Cairo.
- Sālim, 'A. 1986. *Kumidiya 'Udib: W-inta (I)lli 'Attal il-Wahṣ*, Maktabat Madbūli, Cairo. (初演は1970年)
- Al-Tonsi, A., Al-Sawi, L. and Massoud, S. 1986a. *An Intensive Course in Egyptian Colloquial Arabic: Part I*, American University in Cairo, Cairo.
- . 1986b. *An Intensive Course in Egyptian Colloquial Arabic: Part II*, American University in Cairo, Cairo.
- El-Tonsi, A. 1982. *Egyptian Colloquial Arabic: A Structure Review 2*, American University in Cairo (Arabic Language Institute), Cairo. (筆者が参照したのは1992年の第5版)
- Wild, S. 1964. Die resultative Funktion des aktiven Partizeps in den syrisch-palästinischen dialekten des Arabischen. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen*, 114, pp.239-254.
- Woidich, M. 1975. Zur Funktion des aktiven Partizeps im Kairenischen- Arabischen. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen*, 125, pp.273-293.



## 池端雪浦教授 — 略歴・研究業績

### Professor Setsuho IKEHATA: A Record and a List of Academic Works

#### 略 歴

1939年7月2日、朝鮮ソウルに生まれる。

議員

#### I 学歴

1958年3月 長崎県立長崎西高等学校卒業  
1963年3月 東京大学文学部東洋史学科卒業  
1966年3月 東京大学人文科学研究科東洋史  
学専攻修士課程修了  
1990年11月 文学博士（東京大学）  
1998年8月 人文学名誉博士（フィリピン大  
学）

2000年4月～2001年8月 東京外国语大学附  
属図書館長

2001年9月～現在 東京外国语大学長

#### III 主な学会活動

東南アジア史学会会長（1998.1～1999.12）  
アジア政経学会理事（1987～現在）  
東方学会理事（1997～1999）  
史学会理事（1990～現在）  
Association for Asian Studies 会員  
(1975～現在)

#### II 職歴

1966年4月～1973年12月 東京大学東洋文化  
研究所助手  
1974年4月 財團法人東洋文庫研究員  
1975年4月 愛知大学文学部専任講師  
1976年4月 愛知大学文学部助教授  
1981年4月 東京外国语大学アジア・アフリ  
カ言語文化研究所助教授  
1989年7月 東京外国语大学アジア・アフリ  
カ言語文化研究所教授  
1995年4月～1997年3月 東京外国语大学ア  
ジア・アフリカ言語文化研究所  
長  
1995年4月～1997年3月 東京外国语大学評  
議員  
1997年4月～1999年3月 東京外国语大学ア  
ジア・アフリカ言語文化研究所  
附属性情報資源利用研究センター  
長  
1998年4月～2001年8月 東京外国语大学評

IV その他 主な学術活動・社会活動  
ユネスコ東アジア文化研究センター運営委員  
(1994～現在)  
日本学術会議東洋学研究連絡委員会委員  
(1994.10～現在)  
日本ユネスコ国内委員会委員（1996～1998）  
学術審議会委員（1997.2～2000.12）  
国立国語研究所評議会評議員（1998.2～  
2001.1）  
宗教法人審議会委員（1999.4～現在）  
ユネスコ・アジア文化センター評議員（1999.4  
～2001.4）  
日本学術振興会科学研究費委員会委員  
(1999.12～現在)  
電気通信大学運営諮問会議委員（2000.4～現  
在）  
科学技術・学術審議会委員（2001.1～現在）

## 研究業績

### I 単行本

- 『東南アジア現代史Ⅱ フィリピン・マレーシア・シンガポール』(生田滋と共に著), 山川出版社, 1977.
- レナト・コンスタンティーノ著, 『フィリピン民衆の歴史Ⅰ』(永野善子と共に訳), 井村文化事業社, 1978.
- 『概説東洋史』(共著), 有斐閣, 1979.
- 『ピリピノ語読本』(言語研修ピリピノ語テキスト2), (単著), 1984.
- 『東南アジアを知る事典』(共同監修), 平凡社, 1986.
- 『フィリピン革命とカトリシズム』(単著), 効草書房, 1987.
- 『世紀転換期における日本・フィリピン関係』(共著), 東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1989.
- 『アジアの曙—人物にみる近代一』(共著), 亜細亜大学アジア研究所, 1989.
- Reading Southeast Asia*, (共著), Ithaca, New York: Cornell University, 1990.
- 『アジア史からの問い』(共著), 山川出版社, 1991.
- The Japanese Military Administration in the Philippines and the Tragedy of General Artemio Ricarte*, (Papers in Japanese Studies No.14), 35pp., Department of Japanese Studies, National University of Singapore, 1991.8.
- 『東南アジア史の歴史的位相』(共著), 東京大学出版会, 1992.
- Millenarianism in Asian History*, (共著), 東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1993.
- 『異彩の長崎文化—新世紀への舵取り』(共著), 住友商事株式会社, 1993.
- 『ペラルデ文庫目録』(編集), 財団法人東洋文庫, 1993.
- 『変わる東南アジア史像』(編著), 山川出版

社, 1994.

『インタビュー記録 日本のフィリピン占領』(共著), 龍溪書舎, 1994.

『日本占領下のフィリピン』(編著), 岩波書店, 1996.

『東南アジア史Ⅱ 島嶼部』(編著), 山川出版社, 1999.

*The Philippines under Japan: Occupation Policy and Reaction*, (共編著), Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 1999.

### II 論文

「フィリピン民族史の主体的構成」『アジア研究』14巻3号, pp.31-55, 1967.

“José Rizal: The Development of National View of History and National Consciousness of the Philippines”, *Developing Economies* V1-2, pp.176-192, 1968.

「フィリピンにおけるモノカルチュア経済成立の史的考察」『アジア経済』11巻4号, pp.70-89, 1970.

「香料への道—ポルトガル、スペインの進出と東南アジア」『日本と世界の歴史』13巻, 学習研究社, pp.292-297, 1970.

「東南アジア基層社会の一形態—フィリピンのバランガイ社会について」『東洋文化研究所紀要』54冊, pp.86-168, 1971.

「19世紀の東南アジア社会—フィリピン社会の経済変化と革命」『岩波講座世界歴史』21巻, pp.81-114, 1971.

“The Last Days of General Artemio Ricarte y Vibora”, 25pp., The Graduate School, University of the Philippines, Mimeo-graphed Paper, 1973.

「フィリピンにおける日本軍政の一考察—リカルド将軍の役割をめぐって」『アジア研究』22巻2号, pp.44-74, 1975.

「フィリピンの基層文化」『アジア文化』12巻3号, pp.60-72, 1975.

- “A Preliminary Bibliography for the Study of Customary Laws of Southeast Asia and Taiwan: The Philippines”, 『国立民族学博物館研究報告』3卷4号, pp.793-799, 1978.
- 「フィリピン革命のリーダーシップに関する研究(1896年8月～1898年4月)」『東洋文化研究所紀要』第80冊, pp.41-194, 1980.
- 「フィリピン革命とプロパガンダ運動」『山本達郎博士古希記念 東南アジア・インドの社会と文化 上』, pp.119-147, 山川出版社, 1980.
- 「フィリピン民族思想の創出とプロパガンダ運動」永積昭編『東南アジアの留学生と民族主義運動』, pp.143-196, 厳南堂, 1981.
- 「サン=ホセ信徒団の反乱—19世紀フィリピンにおけるコムニタス運動」鈴木中正編『千年王国的民衆運動の研究—中国・東南アジアにおける—』, pp.441-490, 東京大学出版会, 1982.
- 「〈東南アジア〉IV フィリピン」『アジア歴史研究入門5』, pp.309-331, 同朋舎, 1984.
- “The Process of the Formation of the Cofradía de San José”, 『鹿児島大学教養部史録』第18号, pp.1-11, 1985.
- 「19世紀フィリピンの民衆カトリシズム—ヨセフ兄弟会の活動を中心にして—」『アジア・アフリカ言語文化研究』30号, pp.1-77, 1985.
- 「フィリピン史におけるヘスクリストの反乱」『東南アジア—歴史と文化—』第16号, pp.3-36, 1987.
- 「ホセ=リサールとその時代」『アジアの曙光—人物にみる近代史—』(亜細亜大学, アジア研究所叢書), pp.117-152, 1989.
- “The Propaganda Movement Reconsidered”, *Solidarity* No.122 (April-June 1989), pp.78-99, 1989. (trans. by Elpidio R. Sta. Romana)
- 「フィリピン革命と日本の関与」「世纪転換期における日本・フィリピン関係», pp.1-36, 東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1989.
- “Popular Catholicism in the Nineteenth-Century Philippines: The Case of the Cofradía de San José”, *Reading Southeast Asia*, pp.109-188, Ithaca, New York: Cornell University, 1990.
- 「聖ヨセフ兄弟会とタガログ社会」「シリーズ世界史への問い8 歴史のなかの地域», pp.279-308, 岩波書店, 1990.
- 「フィリピンにおける植民地支配とカトリシズム」「講座東南アジア学4 東南アジアの歴史», pp.217-242, 弘文堂, 1991.
- 「フィリピンの国民統合と宗教—南部ムスリムの分離独立運動をめぐって」史学会編『アジア史からの問い』pp.19-49, 山川出版社, 1991.
- 「フィリピンにおける現地人官僚制度の変容—スペイン体制後期を中心にして—」石井米雄他編『東南アジア世界の歴史的位相』, pp.176-199, 東京大学出版会, 1992.
- 「地域別解説：フィリピン」矢野暢監修『東南アジア学入門 別冊』, pp.177-187, 弘文堂, 1992.
- “Uprisings of Hesukristos in the Philippines”, ISHII Yoneo (ed.), *Millenarianism in Asian History*, pp.143-174, アジア・アフリカ言語文化研究所, 1993.
- 「日本軍政下フィリピンの華人社会」「東南アジア・南アジア史研究資料の基礎的研究—平成3-4年度科学研究費補助金一般研究(A)研究成果報告書», pp.1-24, 1993.
- 「フィリピン国民国家の原風景—ホセ・リサールの祖国觀と国民觀—」「アジア・アフリカ言語文化研究』46・47合併号, pp.43-78, 1993.
- 「東南アジア史へのアプローチ」池端雪浦編『変わる東南アジア史像』, pp.3-22, 山

- 川出版社, 1994.
- 「フィリピン国民国家の創出」池端雪浦編『変わる東南アジア史像』, pp.306-327, 山川出版社, 1994.
- 「フィリピンの国民形成とカトリシズム」慶應義塾大学地域研究センター編『民族・宗教・国家—現代アジアの社会変動—』, pp.177-204, 慶應通信, 1995.
- 「第13回国際アジア歴史家会議から.コロキアム：東南アジアにおける東南アジア史研究」『東南アジア—歴史と文化—』24, pp.126-135, 1995.
- “La participación de Japon en la Revolución Filipina de 1896”, *Revista Española del Pacífico* 5, pp.127-135, 1995. (trans. by C. A. Caranci)
- 「フィリピン現代史のなかの日本占領期」池端雪浦編『日本占領下のフィリピン』, pp.1-21, 岩波書店, 1996.
- 「鉱山開発と現地社会の抵抗」池端雪浦編『日本占領下のフィリピン』, pp.145-183, 岩波書店, 1996.
- 「フィリピン革命から百年—英雄像をめぐる論争—」『上智アジア学』16号, pp.109-122, 1998.
- “Japanese Occupation Period in Philippine History”, Ikehata Setsuho and Ricardo Trota Jose (ed.), *The Philippines under Japan: Occupation Policy and Reaction*, pp.1-20, 323-324, Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 1999.
- “Mining Industry Development and Local Anti-Japanese Resistance”, Ikehata Setsuho and Ricardo Trota Jose (ed.), *The Philippines under Japan: Occupation Policy and Reaction*, pp.127-161, 338-342, Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 1999.
- 「フィリピン革命—单一国家と連邦制のせめぎ合い—」『岩波講座世界歴史20』, pp.245-268, 岩波書店, 1999.
- 「明治期日本におけるフィリピンへの関心」『アジア・アフリカ言語文化研究』61号, pp.203-230, 2001.
- 「レイナルド・C・イレート」『20世紀の歴史家たち(4)』, pp.401-414, 刀水書房, 2001.
- ### III 口頭発表
- “General Artemio Ricarte and the Japanese Military Administration in the Philippines”, at the 30<sup>th</sup> International Congress of Human Sciences in Asia and North Africa, August 3-8, Mexico City, 1976.
- 「サン=ホセ信徒団反乱の意味世界—フィリピン革命の思想的源流をめぐる—考察」(昭和55年度東洋史研究会大会報告), 1980.11.
- 「サン=ホセ信徒団の反乱—フィリピン・カソリック社会におけるコムニタム運動」(アジア・アフリカ言語文化研究所内研究会報告), 1981.6.3.
- 「フィリピン民族主義の創出とプロパガンダ運動」(第25回国際東南アジア史学会研究大会報告), 1981.6.7. 要旨は『東南アジア史学会会報』No.35所収.
- 「初期カティプーナンの表現様式と革命観」(東方学会報告), 1981.11.2.
- 「フィリピン人の思考様式」(ICU アジア文化研究所主催講演会), 1981.11.17.
- “The Uprising of the Cofradía de San José: A Millenarian Movement in the 19<sup>th</sup> Century Philippines”, at the 31<sup>st</sup> International Congress of Human Sciences in Asia and North Africa, Section 18, Tokyo, 1983.9.2. 要旨は YAMAMOTO Tatsuro (ed.), *Proceedings of the Thirty-First International Congress of Human Sciences in Asia and North Africa*, pp.868-869, Tokyo: The Toho Gakkai, 1984. 所収.
- “The Process of the Formation of the Cofradía de San José”, at the 9<sup>th</sup> Conference of the International Association

- of Historians of Asia (IAHA), November 21-25, Manila, 1983.
- 「東南アジア現代史におけるリーダーシップ」(東南アジア史学会研究大会シンポジウム報告), 1984.6.10. 要旨は『東南アジア史学会会報』No.41所収。
- 「フィリピン=カトリック社会の歴史的形成過程をめぐって」(鹿児島大学南方海域研究センター主催シンポジウム「フィリピンの宗教と社会」報告), 1988.2.13.
- 「現代フィリピン政治におけるカトリシズム」(アジア・アフリカ言語文化研究所内研究会報告), 1988.2.17.
- 「ホセ・リサールとフィリピンの覚醒」(亜細亜大学アジア研究所公開講座「アジアの曙—人物にみる近代史ー」), 1988.6.11.
- “Some New Insights on the Cofradía de San José”, at the 3<sup>rd</sup> International Philippine Studies Conference, July 13-17, Quezon City, 1989.
- 「長崎と東南アジアの歴史的交流」(第5回長崎学県民講座, 長崎新聞文化ホール), 1992.8.20. 講演録『第5回長崎学県民講座』, pp.108-136, 長崎県教育委員会, 1993.
- 「国民国家への挑戦—フィリピンのキリスト教とイスラームー」(『平成4年度春期東洋学講座: 東南アジアの民族・国家・宗教』), 1992.6.2. 要旨は『東洋学報』74(1・2), pp.119-121所収。
- “Japan and the Philippine Revolution of 1896”, at the 13<sup>th</sup> Conference of International Association of Historians of Asia, September 5-9, Sophia University, Tokyo, 1994.
- 「フィリピンの国民形成とカトリシズム」(慶應義塾大学地域研究センター講演), 1994.12.6.
- 「日本占領下のフィリピン—資源開発と抗日運動を中心にして—」(東南アジア史学会中部例会100回記念講演), 1995.9.9.
- “The Ideology of the Propaganda Movement: Focus on Its Ideas of Country, Nation and National Consciousness”, at the International Conference on the Centenary of the Philippine Revolution and the First Asian Republic, Jakarta, 1997.8.29.
- 「フィリピン革命期の連邦主義—カントナリスモ・流刑・留学・マロロス議会—」(アジア・アフリカ言語文化研究所シンポジウム「東南アジアにおける人の移動と文化の創造」報告), 1997.12.13.
- 「1998年のフィリピン」(共同研究「米西戦争百周年: 米国の霸権主義とラテンアメリカ」における講演), 上智大学イベロアメリカ研究所, 1998.3.19.
- “Some Preliminary Remarks on the Japanese Associations Related to Asian Studies”, at the Workshop: Asian Studies in Asia, Hua Hin, Thailand, 1998.4.21.
- “Japanese-Philippine Relations in the Time of Philippine Revolution of 1896”, at the Seminar of Research Forum for Philippine-Japan Relations, Ateneo de Manila University, Quezon, 1998.8.22.
- “The Current State of Philippine-Japanese Relations: A Research Perspective”, at the Conferment Ceremony for Doctor of Humanities Degree Honoris Causa, University of the Philippines, Diliman, Quezon City, 1998.8.28.
- “The Philippine Revolution: Viewpoints of the Japanese Government, Military and Major Newspapers in 1896 to 1898”, at the Videoconference on The Philippine Revolutions: Catalyst of Revolutions in Asia, UP Open University, Quezon, 1998.11.19.
- “Progress Paper on Philippine-Japanese Relations During the Era of the Philippine Revolution: 1896-1902”, at the

- Workshop of Research Forum for Philippine-Japan Relations, EDSA Shangri-La Hotel, Manila, 1998.11.21.
- “Philippine-Japan Cross-Cultural Understanding: A Viewpoint of a Japanese Historian of the Philippines”, at the Philippines-Japan Cross-Cultural Forum: Toward Closer Ties between the Philippines and Japan, Manila, 1999.3. 23.
- 「フィリピン革命 日本の新聞報道と観戦武官の語り」(アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト「東南アジアにとって20世紀とは何か—20世紀アジアの思想状況」報告), 1999.12.10.
- テーカー」『東南アジア—歴史と文化—』第8号, pp.155-157, 1979.4.
- 「1983年の歴史学界—回顧と展望—, 東南アジア」『史学雑誌』第93編第5号, pp.269-275, 1984.
- 書評「浅野幸穂, 福島光丘編『アキノのフィリピン—混乱から再生へ』アジア経済研究所」, 東京新聞, 1988.9.19.
- 書評「土屋健治著『カルティニの風景』」『アジア研究』第40巻1号, pp.154-164.
- 「座談会: 21世紀のアジア研究を展望して」(岡部達味他5名による座談会)『アジア研究』第47巻1号, pp.1-28, 2001.1.

#### IV 書評・学会展望等

- 書評「テオドロ A. アゴンシリョ著: 民衆の反乱—ボニファシオとカティブーナンの物語」『東洋学報』47巻1号, pp.109-115, 1966.
- 注釈『モルガフィリピン諸島誌』(大航海時代叢書Ⅴ), 岩波書店, 1966.
- 「1966年の歴史学界—回顧と展望—, 東南アジア」『史学雑誌』第76編5号, pp.265-270, 1967.
- 「東南アジア研究をとりまく現状に思うこと」『東洋文化』45号, pp.83-89, 1968.3.
- 書評「John N. Schumacher, S. J., *The Propaganda Movement: 1880-1895. The Creators of a Filipino Consciousness, The Makers of Revolution*, Manila: Solidaridad Publishing House, 1973, 320pp.」『南島史学』4号, pp.62-68, 1974.
- 「1974年の歴史学界—回顧と展望—, 東南アジア」『史学雑誌』84編5号, pp.251-256.
- 書評「Renato Constantino, *The Philippines: A Past Revisited*, Quezon City, Tala Publishing Services, 1975.」『東南アジア—歴史と文化—』No.5, pp.153-157, 1975.
- 「スペインの国立歴史文書館と二つのエメロ
- 「英語からピリビノへ」『東京新聞』(夕刊), 1974.3.30.
- 「フィリピン人の対日観—ある銅版画の物語るもの」『中日新聞』(夕刊), 1974.8.16.
- 「世界史のなかのフィリピン革命」『世界史のしおり』(帝国書院), 74(3), 1974.
- 「フィリピン解放運動の歴史(1), (2), (3)」「フィリピナス», No.1-3, 1975.
- 「フィリピン回教徒反乱の背景(上, 下)」『東京新聞』(夕刊), 1975.10.20-21.
- 「太平洋にかけたスペインの夢—ガレオン貿易の世界(上, 下)」『東京新聞』(夕刊), 1976.10.19-20.
- 「生氣のない首都マニラ」『月刊百科』No.192, p.2, 1978.9.
- 「マルコス大統領の民族史」『世界』, p.287, 1978.11.
- 『東南アジア関係基本図書ウォント・リスト B. フィリピン』国立国会図書館蔵書構成審議会(アジア・アフリカ分科会)(館内資料: 高瀬弘一郎と共に著), 1980.3.
- 「研究ノート: キリスト受難物語と農民反乱」朝日新聞(夕刊), 1984.2.13.
- 「バクラランの聖母」『通信』(アジア・アフリカ言語文化研究所) 56号, p.24, 1986.
- 「日本研究の新しい波: フィリピン」『無限大』

- No.71, pp.47-51, 1986.
- 講演記録「最近のフィリピンの政治変革について」『愛知大学国際問題研究所紀要』83, pp.167-175, 1986.
- 「永積昭先生のご逝去を悼む」『アジア研究』34巻3号, pp.188-189, 1988.
- 「ホセ・リサールの生涯」(途上国の英雄像2)『国際協力』, pp.34-35, 1989.9.
- 「民族の独立のために—ホセ・リサール(1861-1896)」『41人の英雄たち』, pp.74-79, 国際開発ジャーナル社, 1993.
- 「ボヘミアの熱いまなざし」『中央公論』, pp.23-25, 1996.1.2.
- 「土屋さんのあとを歩いて」土屋健治追悼集刊行会『時間の束をひもといて—追悼土屋健治』, pp.504-507, 非売品, 1996.
- 「フィリピン革命とアジア初共和国百周年記念ジャカルタ会議」『東南アジア史学会会報』67号, pp.15-17, 1997.
- 「ペリンダ・アンチエータ・アキノ教授」『通信』(アジア・アフリカ言語文化研究所)92号, p.27, 1997.
- 「若手研究者への手紙 人文・社会科学分野の共同研究」『学術月報』53 (1), p.92, 2000.1.
- 「プロフィール：レイナルド・クレメニヤ・イレート教授」『通信』(アジア・アフリカ言語文化研究所)101号, p.30, 2001.1.7.
- 「山本達郎先生のご業績を偲んで」『歴史と地理』544号, pp.48-49, 山川出版社, 2001.5.



## 家島彦一教授 — 略年譜と主な研究業績

### Professor Hikoichi YAJIMA: A Record and Academic Works

#### (1) 略 年 譜

1939年10月	東京に生まれる	カ言語文化研究所助教授昇任
1962年3月	慶應義塾大学文学部史学科卒業	1987年2月 東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授昇任
1964年3月	慶應義塾大学大学院文学研究科 史学専攻修士課程修了	2002年3月 東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所定年退官
1966年3月	慶應義塾大学大学院文学研究科 史学専攻博士課程2年修了後中 退	
1966年4月	東京外国语大学アジア・アフリ カ言語文化研究所助手として入 所	
1974年9月	文学博士号取得(慶應義塾大学)	
1975年1月	東京外国语大学アジア・アフリ	

#### 他大学等への併任・兼任

青山学院大学、茨城大学、宇都宮大学(併任),  
大阪大学、大阪外国语大学、九州大学、京都  
大学、慶應義塾大学、中央大学、上智大学,  
東京大学、東京大学駒場、早稲田大学

#### (2) 主な研究業績

##### 1964年（昭和39年）

「宋代の毗唃耶国と地中海の珊瑚」『オリエン  
ト』No.7-1, pp.51-62, 日本オリエント  
学会, 1964, 3.

日本書院, 1967, 6.

「Ibn Faḍlān のヴォルガ・ブルガール旅行記  
について」『史学』No.40-2/3, pp.331-350,  
慶應義塾大学三田史学会, 1967, 11.

##### 1965年（昭和40年）

「南アラビアの東方貿易港について—賈耽の  
道里記にみるインド洋西岸航路—」『東方  
学』No.31, pp.133-149, 東方学会, 1965,  
11.

##### 1968年（昭和43年）

「イスラーム史料による鄭和の遠征」『アジ  
ア・アフリカ言語文化研究』No.1,  
pp.126-131, アジア・アフリカ言語文化  
研究所, 1968, 2.

「イスラム商人の活躍」『イスラム世界』(世  
界歴史シリーズ9) pp.102-110, 世界文  
化社, 1968, 10.

##### 1966年（昭和41年）

「イスラーム史料中にみる鄭和遠征記事につ  
いて」『史学』No.38-4, pp.95-101, 慶  
應義塾大学三田史学会, 1966, 4.

##### 1967年（昭和42年）

「唐末期における中国・大食間のインド洋通  
商路」『歴史教育』No.15-5/6, pp.56-62,

##### 1969年（昭和44年）

『イブン・ファドラーのヴォルガ・ブル  
ガール旅行記・訳注』(アジア・アフリ  
カ言語文化叢書2) xii+91pp., アジア・  
アフリカ言語文化研究所, 1969, 3.

「インド洋通商史に関する一考察—12世紀の  
舶商 Rāmasht について—」『オリエント』  
No.10-1/2, pp.193-212, 日本オリエント  
学会, 1969, 6.

**1971年（昭和46年）**  
「海外研究雑感—アラブ諸国を旅して—」『通  
信』No.14, pp.8-13, アジア・アフリカ  
言語文化研究所, 1971, 12.

**1972年（昭和47年）**  
「インド洋通商とイエメン—南アラビアの  
Sirāf 居留地—」『アジア・アフリカ言語  
文化研究』No.5, pp.119-144, アジア・  
アフリカ言語文化研究所, 1972, 8.

**1974年（昭和49年）**  
「イエメン・ラスール朝史に関する新写本」  
『アジア・アフリカ言語文化研究』No.7,  
pp.165-182, アジア・アフリカ言語文化  
研究所, 1974, 1.

「15世紀におけるインド洋通商史の一齣—鄭  
和遠征分隊のイエメン訪問について—」  
『アジア・アフリカ言語文化研究』No.8,  
pp.137-155, アジア・アフリカ言語文化  
研究所, 1974, 9.

『イエメン・ラスール朝史に関する新写本と  
その史料価値の分析』博士論文（慶應義  
塾大学提出受理), 1974, 9.

「イエメン・ラスール朝史に関する新写本・  
補遺」『アジア・アフリカ言語文化研究』  
No.8, pp.157-160, アジア・アフリカ言  
語文化研究所, 1974, 9.

*A Chronicle of the Rasūlid Dynasty of Yemen,  
Arabic text, notes & indices*, アジア・  
アフリカ言語文化研究所, 1974, 9.

**1975年（昭和50年）**  
「イエメン・ラスール朝時代の商人の一類  
型—qādi Amin al-Din Muflīh al-Turkīの  
場合—」『史学』No.46-3, pp.81-98, 慶

応義塾大学三田史学会, 1975, 2.

**1976年（昭和51年）**  
*The Arab Dhow Trade in the Indian Ocean,  
Studia Culturae Islamicae*, No. 3, 77pp.,  
アジア・アフリカ言語文化研究所, 1976,  
3.

「モンゴル帝国時代のインド洋貿易—特に  
Kish 商人の貿易活動をめぐって—」『東  
洋学報』No.57-3/4, pp.1-40, 財団法人  
東洋文庫, 1976, 3.

「東西交渉よりみた紅海とバーバルマンデ  
ーとくに15世紀前半の情勢を中心として  
の考察—」『アラビア研究論叢—民族と  
文化—』 pp.225-252, 日本サウディアラ  
ビア協会, 日本クウェイト協会編, 1976,  
4.

**1977年（昭和52年）**  
“The Arab Gulf in the 11th and 12th Cen-  
turies”, *Al-Khalij al-'Arabi (The Arab Gulf,  
An Academic Journal dealing with Affaires of  
the Arab Gulf and the Arabian Peninsula)*,  
No.8, pp.9-21, University of Basra, Basra,  
1977, 2.

「アラブ古代型縫合船 Sanbūk Zafārīについ  
て」『アジア・アフリカ言語文化研究』  
No.13, pp.181-204, アジア・アフリカ  
言語文化研究所, 1977, 3.

「書評：藤本勝次訳注『シナ・インド物語』」  
『史学雑誌』第86編第7号, pp.106-108,  
史學會, 1977, 7.

「クウェイト史の謎—砂漠民から海上民への  
転換—」*Kuwait-Japan Society, Bulletin*,  
No.71, pp.1-3, 日本クウェイト協会,  
1977, 8.

“Maritime Activities of the Arab Gulf People  
and the Indian Ocean World in the 11th  
and 12th Centuries”『アジア・アフリカ  
言語文化研究』No.14, pp.195-208, ア  
ジア・アフリカ言語文化研究所, 1977, 12.

**1978年（昭和53年）**

「イスラム勃興期のアラビア半島をめぐる国際情勢」『月刊シルクロード』No.4-7, pp.55, 株式会社シルクロード, 1978, 8.

**1979年（昭和54年）**

「インド洋世界とダウ」『季刊民族学』No.7, pp.18-23, 国立民族学博物館監修, 民族学振興会, 1979, 1.

『インド洋西海域における地域間交流の構造と機能—ダウ調査報告2—』(Studia Culturae Islamicae, No.9), 250pp., アジア・アフリカ言語文化研究所, 1979, 3.

「イスラム史の展開と海洋」『月刊シルクロード』No.5-7, pp.61-67, 株式会社シルクロード, 1979, 8.

**1980年（昭和55年）**

「マムルーク朝の対外貿易政策の諸相—セイロン王 Bhūvanaikabāhu I とマムルーク朝スルタン al-Manṣūr との通商関係をめぐって—」『アジア・アフリカ言語文化研究』No.20, pp.1-105, アジア・アフリカ言語文化研究所, 1980, 12.

「東西交渉上のアル・フスタート」『アル・フスタート』(中近東文化センター研究会報1), pp.79-104, 中近東文化センター, 1980, 12.

**1981年（昭和56年）**

「インド航路の鍵を与えたのは誰か—ポルトガル来航前後のインド洋—」Kuwait-Japan Society, Bulletin, No.95, pp.9-12, 日本クウェイト協会, 1981, 8.

**1982年（昭和57年）**

*Hasan Tāj al-Dīn's The Islamic History of the Maldives Islands, Vol. 1: Arabic text (Studia Culturae Islamicae, No. 16)*, 265pp., アジア・アフリカ言語文化研究所, 1982, 3.  
「国際商業ルートの支配と推移」『シンポジウム東西交渉史におけるムスリム商業』(中近東文化センター研究会報告3), pp.25-39, 中近東文化センター, 1982, 7.

**1983年（昭和58年）**

「書評：ジャン・ルージエ著、坂井傳六訳『古代の船と航海』」「東西交渉」, 第2巻第1号, pp.46-47, 井草出版, 1983, 3.

「紅海とイエメン地域—その経済・文化交流上の位置と歴史的役割をめぐって—」『南北イエメンを中心とする紅海情勢の研究』pp.4-21, 中東調査会, 1983, 3.

「マグリブ人によるメッカ巡礼記 *al-Rihla* の史料性格をめぐって」『アジア・アフリカ言語文化研究』No.25, pp.194-216, アジア・アフリカ言語文化研究所, 1983, 3.

「イエメン・ラスール朝の崩壊とスルタン・マスウードのインド亡命」『内陸アジア・西アジアの社会と文化』pp.601-620, 山川出版社, 1983, 6.

「前嶋信次先生を悼む」『東西交渉』, 第2巻第2号, pp.29-31, 井草出版, 1983, 8.

「第31回国際アジア・北アフリカ人文科学会議第7部会報告：『海上ルート』における問題提起と今後の研究課題」『通信』No.49, pp.35-38, アジア・アフリカ言語文化研究所, 1983, 11.

**1984年（昭和59年）**

*Hasan Tāj al-Dīn's The Islamic History of the Maldives Islands, Vol. 2: Annotations & Indices (Studia Culturae Islamicae, No. 22)*, 204pp., アジア・アフリカ言語文化研究所, 1984, 3.

「米の道」『海外学術調査コロキヤム「米」の起源』pp.45-48, アジア・アフリカ言語文化研究所, 1984, 3.

“Subsection Report: East-West Cultural & Economic Relations”, *Proceedings of the 31th International Congress of Human Sciences in Asia and North Africa (CHISHAAN)*,

- Vol.1, pp.393-395, Tokyo, 1984, 8.  
 "An Arabic Manuscript on the History of Maldives Islands", *Proceedings of the 31th International Congress of Human Sciences in Asia and North Africa (CHISHAAN)*, Vol.1, pp.421-422, Tokyo, 1984, 8.  
 「チュニジア・ガーベス湾をめぐる漁撈文化—地中海史の視点から—」『イスラム世界の人びと—海上民』編著, pp.201-240, 東洋経済新報社, 1984, 10.

#### 1985年（昭和60年）

- 「Ibn Baṭṭūṭa のマルディイヴ群島訪問記事をめぐって」『三上次男博士喜寿記念論文集（歴史編）』pp.390-404, 平凡社, 1985, 3.  
 「マルディイヴ群島海民のメッカ巡礼」『西と東と—前嶋信次先生追悼論文集』pp.211-230, 汲古書院, 1985, 6.  
 「民族学のタテヨコ：舟—西アジア」『季刊民族学』No.33, pp.55-56, 国立民族学博物館監修, 民族学振興会, 1985, 8.  
 「史料としてのアラビアンナイト」『アラビアンナイト』第13巻, pp.391-393, 平凡社, 1985, 8.

#### 1986年（昭和61年）

- 「モンスーン航海の道—インド洋をかける木造帆船ダウの歴史—」『Sumisho News, 住商ニュース』pp.47-53, 住友商事株式会社, 1986, 1.  
 「ナイル渓谷と紅海を結ぶ国際貿易ルート—とくに Qūṣ ~ 'Aydhāb ルートをめぐって—」『イスラム世界』Nos.25/26, pp.1-25, 日本イスラム協会, 1986, 2.  
 『アルワード島—シリア海岸の海上文化—』（*Studia Culturae Islamicae*, No. 31), 75pp., アジア・アフリカ言語文化研究所, 1986, 2.

#### 1987年（昭和62年）

- 「インド洋におけるシーラーフ系商人の交易

- ネットワークと物品の流通」『深井晋司博士追悼：シルクロード美術論集』pp.199-224, 吉川弘文館, 1987, 2.  
 「一握りのホンムス豆」（民族の心）, 『通信』No.60, p.7, アジア・アフリカ言語文化研究所, 1987, 7.

#### 1988年（昭和63年）

- 「座談会：海のシルクロード①ロマンと冒險の交易船を追う」『目の眼』No.136, pp.10-28, 里文出版, 1988, 1.  
 『イラン・ザグロス山脈越えのキャラバン・ルート』（*Studia Culturae Islamicae*, No. 36), 199pp., アジア・アフリカ言語文化研究所, 1988, 3.  
 「日本中東学会第3回大会：学会消息」『通信』No.63, pp.36-39, アジア・アフリカ言語文化研究所, 1988, 8.  
 「都市のネットワーク論をめぐって—インド洋西海域におけるダウ船調査に基づく—」科学研究費補助金『重点領域研究：イスラムの都市性』研究報告編第8号, 1988, 11.  
 "An Arabic Manuscript on the History of Maldives Islands", *Cultural and Economic Relations between East and West — Sea Routes* —, pp.71-81, Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1988, 12.

#### 1989年（平成元年）

- 「インド洋海上史論の試み」pp.97-143, 『地域研究と第三世界』慶應義塾大学地域研究センター編, 1989, 3.  
 「法隆寺伝来の刻銘入り香木をめぐる問題—沈香と白檀の産地と7・8世紀のインド洋貿易」『アジア・アフリカ言語文化研究』No.37, pp.123-142, アジア・アフリカ言語文化研究所, 1989, 3.  
 「市場（sūq/bāzār）研究の展望と方法論的提言」『イスラム圏における異文化接触のメカニズム—市との比較研究—』No.1,

- pp.1-19, アジア・アフリカ言語文化研究  
所, 1989, 3.
- 「ピレンヌ・テーゼ再考—ムスリム勢力の地  
中海進出とその影響—」坂口昂吉編著『地  
中海世界と宗教』pp.97-117, 慶應義塾大  
学地域研究センター編, 1989, 3.
- 「港市シーラーフ:ペルシャ湾の中継貿易港」  
『海の交易路』(週刊朝日百科:世界の歴  
史 No.39), pp.228-231, 朝日新聞社, 1989,  
8.
- 「紅海の交易都市サワーキン」『海の交易路』  
(週刊朝日百科:世界の歴史 No.39),  
pp.240-241, 朝日新聞社, 1989, 8.
- 「紅海の国際貿易港 'Aydhāb の廃港年次を  
めぐって」『東西海上交流史研究』No.1,  
pp.167-197, 中近東文化センター, 1989,  
12.
- 1990年（平成2年）**
- 「ダウ船とインド洋海域世界」『生活の技術・  
生産の技術』(シリーズ世界史への問い  
2) pp.105-128, 岩波書店, 1990, 2.
- 「南海産香木・薬物類が運ばれた道」『文明の  
クロスロード Museum Kyushu』No.34,  
pp.3-8, 九州歴史資料館, 太宰府市, 1990,  
6.
- 1991年（平成3年）**
- 「東アフリカ・スワヒリ文化圏の形成過程に  
関する諸問題」『アジア・アフリカ言語文  
化研究』No.41, pp.101-124, アジア・  
アフリカ言語文化研究所, 1991, 3.
- 『イスラム世界の成立と国際商業—国際商  
業ネットワークの変動を中心に』pp.xvi  
+ 443 + 10, 岩波書店, 1991, 4.
- 「インド洋世界とダウ船」『都市文明イスラー  
ム世界:シルクロードから民族紛争まで』  
pp.58-69, 第5回「大学と科学」公開シ  
ンポジウム組織委員会編, 1991, 9.
- 1992年（平成4年）**
- 「インド洋海域の交易都市ネットワーク」『學  
術月報』No.565, vol.45/1, pp.40-47,  
日本学術振興会, 1992, 1.
- 「広域旅行記都市情報」板垣雄三・後藤明編  
『事典イスラームの都市性』pp.65-67,  
亜紀書房, 1992, 5.
- 「鄭和大遠征とインド洋世界」pp.208-210,  
板垣雄三・後藤明編『事典イスラームの  
都市性』pp.65-67, 亜紀書房, 1992, 5.
- 「西アジア海上交易（中国～地中海・アフリ  
カ）」pp.227-232, 板垣雄三・後藤明編『事  
典イスラームの都市性』pp.65-67, 亜紀  
書房, 1992, 5.
- 「ムスリム海民による航海安全の信仰—とく  
にIbn Battūtaにみえるヒズルとイリヤー  
スの信仰—」『アジア・アフリカ言語文化  
研究』No.42, pp.117-135, アジア・ア  
フリカ言語文化研究所, 1992, 9.
- 「チュニジアの定期市」『チュニジア通信』  
pp.1-9, 日本チュニジア協会, 1992, 12.
- 1993年（平成5年）**
- 『海が創る文明—インド洋海域世界の歴  
史—』461pp. + 43pp., 朝日新聞社, 1993,  
3.
- 「インド洋海域の交易都市ネットワーク」板  
垣雄三・後藤明編『イスラームの都市性』  
(学術新書16), pp.96-112, 日本学術振  
興会, 1993, 6.
- 「国際交易ネットワーク」鈴木董編著『パク  
ス・イスラミカの世紀』(講談社現代新  
書:イスラームの世界史), pp.227-259,  
講談社, 1993, 10.
- 1994年（平成6年）**
- 「イブン・バットゥータ『メッカ巡礼記』の  
諸写本について」『東西海上交流史研究  
(Journal of East-West Relations)』, No.3,  
pp.115-139, 中近東文化センター, 1994,  
1.

- 「インド洋貿易」川北稔編『歴史学事典』第1巻（交換と消費），pp.37-44，弘文堂，1994，3。
- 「人間動態と情報に関する総合的研究—問題提起」「イスラム圏における異文化接触のメカニズム」No.3, pp.3-10, アジア・アフリカ言語文化研究所, 1994, 3.
- 「チュニジアの定期市サークル」「イスラム圏における異文化接触のメカニズム」No.3, pp.201-223, アジア・アフリカ言語文化研究所, 1994, 3.
- 「国家・港市・海域世界—イエメン・ラスール朝スルタン・ムザッファルによるズファール遠征の事例から—」「アジア・アフリカ言語文化研究」Nos.46-47, pp.383-407, アジア・アフリカ言語文化研究所, 1994, 3.
- 「島の魅力—地域連関の視点から—」「重点領域研究」No.6, pp.14-16, 京都大学東南アジア研究センター, 1994, 9.
- 「インド洋世界」「クロニック世界全史」pp.374-375, 講談社, 1994, 11.

### 1995年（平成7年）

- 「アラビア海を結ぶ三角帆の木造船ダウ」小西正捷・宮本久義編『インド・道の文化誌』pp.205-212, 春秋社, 1995, 1.
- 「イブン・バットゥータの世界」堀川徹編著『世界に広がるイスラーム』（講座イスラーム世界, 第3巻), pp.193-230, 栄光教育研究所, 悠思社, 1995, 1.
- 「インド洋海域における港の成立とその形態をめぐって」「歴史の中の港・港町I—その成立と形態をめぐって」(中近東文化センター研究会報告11), pp.65-99, 中近東文化センター, 1995, 3.
- 「インド洋海域の文化史とアジアの概念を見直す」「通信」No.84, pp.1-9, アジア・アフリカ言語文化研究所, 1995, 7.
- 「人と物の交流した海のシルクロード：モンスーン航海の道」「季刊アジアフォーラム」No.77, pp.38-43, 財団法人アジアクラブ, 1995, 8.

### 1996年（平成8年）

- 「インド洋海域世界の観点から」「海からの歴史—プローデル「地中海」を読む—」pp.125-142, 藤原書店, 1996, 3.
- 「旅と出会い—地域間研究の原点を求めて—」「総合的地域研究」No.12, pp.6-9, 京都大学東南アジア研究センター, 1996, 3.
- 「都市とネットワーク」「東南アジアと中東—地域間研究の視点から—」(重点領域研究「総合的地域研究」成果報告書シリーズ) No.16, pp.15-26, 重点領域研究総括班, 京都大学東南アジア研究センター, 1996, 4.
- 『イブン・バットゥータ：大旅行記・訳注』第1巻, 418pp., 平凡社, 1996, 6.
- 「中東地域の歴史的広がりとイスラーム世界意識の形成」「中東研究」No.418, pp.2-12, 中東調査会, 1996, 9.
- 「地域間コミュニケーション」「イスラーム研究ハンドブック」pp.192-199, 栄光教育研究所, 悠思社, 1996, 10.
- "Some Problems on the Formation of the Swahili World and the Indian Ocean Maritime World", *Essays in Northeast African Studies* (Senri Ethnological Studies, No.43), Shun Sato & Eisei Kurimoto (eds.), pp.319-354, Osaka, 1996, 12.

### 1997年（平成9年）

- 「アラブ商人」東南アジア研究センター編『東南アジアの生態・環境・風土』pp.89-90, 弘文堂, 1997, 1.
- 『イブン・バットゥータ：大旅行記・訳注』第2巻, 445pp., 平凡社, 1997, 4.
- 「旅の原点を考える」「通信」No.90, pp.3-9, アジア・アフリカ言語文化研究所, 1997, 7.

**1998年（平成10年）**

- 「イスラームは国民国家を超えるか」『大航海』No.20, pp.70-77, 新書館, 1998, 1.
- 「メッカ巡礼の道—ヒト・モノ・文化情報の交流」松本宣郎・山田勝芳編著『移動の世界史』(地域の世界史5), pp.328-366, 山川出版社, 1998, 3.
- 『イブン・バットゥータ：大旅行記・訳注』第3巻, 456pp., 平凡社, 1998, 3.
- 「イスラーム世界史の叙述に向けて」『中東研究』No.436, pp.33-36, 中東調査会, 1998, 3.
- 「国家と海峡支配」秋道智彌編著『海人の世界』pp.169-193, 同文館, 1998, 3.
- 「インド洋海域のアラブ人」大塚和夫編著『アラブ』pp.253-261, 河出書房新社, 1998, 4.

**1999年（平成11年）**

- 「都市とネットワーク」高谷好一編著『〈地域間研究〉の試み』(上巻), pp.141-158, 京都大学出版会, 1999, 1.
- 「インド洋海域世界の歴史—海域ネットワークの成立と変遷—」『FRONT：特集海の道再発見』No.126 (No.11-6), pp.13-16, 財団法人リバーフロント整備センター, 1999, 2.
- 「海域史に関する試論—地中海からインド洋まで—」『アジア・アフリカ言語文化研究』No.57, pp.281-300, アジア・アフリカ言語文化研究所, 1999, 3.
- 『イブン・バットゥータ：大旅行記・訳注』第4巻, 475pp., 平凡社, 1999, 9.
- 「イブン・バットゥータ研究の新視点」『史学雑誌』No.108-12, pp.92-94, 史學會, 1999, 12.

**2000年（平成12年）**

- 「インド洋海域世界における交易と移動」『サ

イアス』No.5-2, p.84, 朝日新聞社, 2000,

1.

- 「ズブルク・ブン・シャフリヤール『インド奇談集』に関する新写本』『アジア・アフリカ言語文化研究』No.59, pp.1-30, アジア・アフリカ言語文化研究所, 2000, 3.
- 『イブン・バットゥータ：大旅行記・訳注』第5巻, 449pp., 平凡社, 2000, 8.

- 「イブン・バットゥータ旅行記」権山紘一編『世界史の旅行記101』pp.37-38, 新書館, 2000, 10.

- 「西から見たアジアの海」浜下武志他編著『海のアジア』第1巻 (海のパラダイム), pp.75-102, 岩波書店, 2000, 11.

- 「モンスーン文化圏という世界」家島彦一編著『海のアジア』第2巻 (モンスーン文化圏)序論 pp.iii-xvi, 岩波書店, 2000, 12.

**2001年（平成13年）**

- 『海外調査報告：イスラム圏における交通システムの歴史的変容に関する総合的研究』「はしがき」「調査の目的・方法・成果について」「ナイル川渓谷と紅海を結ぶルート調査」「南イラン・ザグロス山脈越えのキャラバン・ルート」「交通システムを解明するための基本史料—ヒジュラ暦682年（1283年）、カイロに到着したセイロン王の使節団が通過したペルシャ湾ルートに関するアラビア語史料」pp.1-174, 2001, 4.

- 『イブン・バットゥータ：大旅行記・訳注』第6巻, 493pp., 平凡社, 2001, 7.

- 「イスラーム・ネットワークの展開」岩波講座『東南アジア史』3, pp.17-43, 岩波書店, 2001, 8.

- 「イスラム世界全域を旅した男」『週刊朝日百科世界の文学』No.118, pp.236-237, 朝日新聞社, 2001, 10.



## 森 幹男助教授 — 略歴と作品リスト

### Assistant Professor Mikio MORI: A Record and Publications

#### 略 歴

1939年11月、東京都神田に生まれる。

湘南学園小・中等学部、都立小石川高校を経て、1959年、東京外国語大学タイ語学科に入学し、1963年に卒業。

以後、東京外国語大学副手、教務補佐員、巣鴨高校英語講師（非常勤）等を兼務。

1966年、海外技術協力事業団の派遣により、サイゴン大学文学部（日本語、日本文化担当）に赴任。任期2年を了えて帰国。

1968年、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所に入所。

現在に至る。

#### 作 品 リ スト

##### 1965年

「古代タイ人の宇宙観」『民族学研究』30卷2号、1965. 9.

##### 1966年

(書評) 「タイ民話集成」『民族学研究』31卷2号、1966. 9.

##### 1967年

「タイ国における国王概念の変遷—特にトゥーナム誓忠式を中心として」『民族学研究』31卷4号、1967. 3.

##### 1968年

(資料紹介) 「ベトナム思想」『アジア・アフリカ言語文化研究』1号、アジア・アフリカ言語文化研究所、1968. 3.

「メコン・デルタ」『通信』4号、アジア・アフリカ言語文化研究所、1968. 3.

『南ベトナムの文化状況について』(コロンボ・プラン専門家帰国報告書) 海外技術協力事業団、1968. 5.

##### 1969年

「南ベトナムにおける民族文化建設の諸問題」『アジア・アフリカ言語文化研究』2号、アジア・アフリカ言語文化研究所、1969. 3.

(資料紹介) 「ベトナムの主題」『アジア・アフリカ言語文化研究』2号、アジア・アフリカ言語文化研究所、1969. 3.

「Phya Anuman Rajadhon 博士を追悼する」『通信』8号、アジア・アフリカ言語文化研究所、1969. 12.

##### 1970年

「タイの学問社会」『通信』9号、アジア・アフリカ言語文化研究所、1970. 3.

(資料紹介) 「Phya Anuman Rajadhon 著：タイ固有習俗集成、並びに、Essays on Thai Folklore について」『民族学研究』34卷、3号、1970.

「現代ベトナムの思想状況（1）」『アジア・アフリカ言語文化研究』3号、1970. 6.  
「南ベトナムにおける国家建設の諸問題」『アジア・アフリカ言語文化研究』3号、1970. 3.

- (資料紹介) プラヤー・アスマンラーチャトーン著: Fun Khwam Lang (我が来しかた)『アジア・アフリカ言語文化研究』3号, 1970. 6.
- 『タイ語講読テキスト (上級)』アジア経済研究所, 1970. 7.
- 「タイ民謡の世界」『朝日アジア・レビュー』3号, 朝日新聞社, 1970. 9.
- 『タイ仏教の特質と問題点』(研究報告書) アジア経済研究所, 1970. 10.

### 1971年

- 「アジアの現代文学 (1) —南・北ヴェトナム」『朝日アジア・レビュー』7号, 朝日新聞社, 1971. 6.
- 「ヴェトナム南部村落調査記録: 序説」『アジア・アフリカ言語文化研究』4号, 1971. 9.

### 1972年

- 「ベトナム抵抗文学の系譜」(上・下) 読売新聞, 7月10, 11日付夕刊 (文化欄), 1972. 7.
- 「メコン・デルタ—ベトナム番外地—」(上・下), 読売新聞, 9月11, 12日付夕刊 (文化欄), 1972. 9.
- 「反日運動の底辺を考える—“日いづる国”との戦い—」読売新聞, 12月1日付夕刊 (文化欄), 1972. 12.
- 「ベトナム南部仏教の成立と展開—民族解放運動との関連において」『アジア・アフリカの宗教運動』第2集, アジア・アフリカ言語文化研究所, 1972. 12.

### 1973年

- (翻訳・解説) 「ベトナムの文学と詩」『朝日アジア・レビュー』13号, 1973. 3.
- 「現代ベトナムの文学動向」『朝日アジア・レビュー』13号, 1973. 3.
- 「神々の降臨」(民族のこころ), 『通信』19号, 1973. 8.

(編・共訳) 「タイ文学特集」『朝日アジア・レビュー』15号, 1973. 9.

「北ベトナム—その民族と文学—」公明新聞, 10月11日付, 1973. 10.

「タイの王権—国民の〈直訴〉と国王の〈審判〉—」読売新聞, 11月7日付夕刊 (文化欄), 1973. 11.

「タイ国の〈国礎神〉信仰」『通信』20号, 1973. 12.

(研究報告) 「タイ国中央平野部のチャオ・ポー信仰—平均値的全体像の提示」『通信』20号, 1973. 12.

「アジアの宗教運動—南ベトナムの“危機の宗教”：道人信仰の系譜」『朝日アジア・レビュー』16号, 1973. 12.

### 1974年

「タイ国中央平野部のチャオ・ポー信仰—第一次予察」『アジア・アフリカ言語文化研究』7号, 1974. 1.

「東南アジアにおける反日と反米」公明新聞, 1月30日付, 1974. 1.

「メコン民族の祭典」読売新聞, 3月12日付夕刊 (文化欄), 1974. 3.

(編訳・解説) 「タイ国10月革命詩選」『朝日アジア・レビュー』17号, 1974. 3.

「東南アジアの王権と政権—タイ国における直訴と審判—」『朝日アジア・レビュー』18号, 1974. 6.

(編訳) 「東南アジア少数民族詩選—タイ・ベトナム—」『朝日アジア・レビュー』19号, 1974. 9.

「タイ国チャオ・ポー信仰に関する若干の知見」『アジア・アフリカ言語文化研究』9号, 1974. 12.

「都市の中の呪術—その現代的機能：タイ国におけるチャオ・ポーの呪的世界」『朝日アジア・レビュー』20号, 1974. 12.

「都市の中の呪術—サイゴンにみる継承と展開」『朝日アジア・レビュー』20号, 1974. 12.

(編訳)「ラオス文学特集」『朝日アジア・レビュー』20号, 1974. 12.

### 1975年

「タイ国の歴史と文化—宗教文化的側面から」『民族文化』10巻. 4号, アジア民族協会, 1975. 3.

「都市化と宗教—チャオ・ポー信仰の提起するもの」『タイ事情』(中村孝志編) 天理教東南アジア研究会, 天理大学, 1975. 4.

『タイ語文法便覧』アジア・アフリカ言語文化研究所, 1975. 6.

「東南アジアの民間遊戯(2):ベトナム=自然との融和」『朝日アジア・レビュー』22号, 1975. 6.

「タイ仏教と共産主義」『朝日アジア・レビュー』23号, 1975. 9.

(編訳)「アジア文学特集—ベトナム解放文学」『文芸展望』11月号, 筑摩書房, 1975. 10.

「ベトナム解放文学のゆくえ」『文芸展望』11月号, 1975. 10.

「ピヤ・アヌマンラーチャトーン—タイ文化社会の良心」『文芸展望』11月号, 1975. 12.

「都市化と呪術性信仰—タイ国におけるチャオ・ポー信仰事象をめぐって—」『タイ国—その精神的風土』日本YMCA同盟, アジア問題研究所, 1975. 12.

「東南アジアの生活慣行(3):ベトナム=外来と土着の拮抗」『朝日アジア・レビュー』24号, 1975. 12.

(翻訳)「妖怪変化考」(Phraya Anuman Rajadhon; Phi Sang Thewada)『朝日アジア・レビュー』24号, 1975. 12.

「ピヤ・アヌマン・ラーチャトーン博士一人と業績」『朝日アジア・レビュー』24号, 1975. 12.

### 1976年

「タイ国における華僑社会の現地対応—宗教文化的側面から—」(特定研究)『国際環

境に関する基礎的研究』東京外国语大学, 1976. 3.

「タイ国華人の宗教行動—第一次予察」(特定研究)『東南アジアの国際環境における中国と日本; 華僑社会の分析を中心にして』東京外国语大学, 1976. 3.

「アジアの歌謡(3)ベトナム=民族的感性の源流と南進」『朝日アジア・レビュー』26号, 1976. 6.

(編訳)「南ベトナム反戦歌謡集成」『朝日アジア・レビュー』26号, 1976. 6.

「ベトナム庶民の反米小唄」『朝日アジア・レビュー』26号, 1976. 6.

(隨想)「神々の道化師たち」『世界』岩波書店, 1976. 9.

(隨想)「聖者の群像」『世界』岩波書店, 1976. 12.

「都市の思想(2)バンコク=仏教王と王城の守護神」『朝日アジア・レビュー』28号, 1976. 12.

### 1977年

“Imperative Mood in Thai” *Asian and African Linguistics*, No.5, アジア・アフリカ言語文化研究所, 1977. 1.

「聖者の“言挙げ”—反戦の思想と行動」『朝日アジア・レビュー』29号, 1977. 3.

(隨想)「タイ国の性民俗」『世界』岩波書店, 1977. 5.

「タイ国の〈性〉民俗と精霊の文化—土俗の探求」『朝日アジア・レビュー』30号, 1977. 6.

(研究報告)「タイ国華人の宗教行動」『通信』30号, 1977. 7.

「タイ国サラブリ県の〈柱立て〉祭事」『通信』30号, 1977. 7.

(隨想)「〈妊婦生埋め〉伝説をめぐって」『世界』岩波書店, 1977. 9.

(隨想)「タイ国〈仙人〉考」『世界』岩波書店, 1977. 11.

「アジアを見つめる—文学の中のアジア」

『PHP インターナショナル』 P.H.P研究所, 1977. 12.

### 1978年

“Interrogative Sentences in Thai” *Asian and African Linguistics*, No.9, アジア・アフリカ言語文化研究所, 1978. 2.

(随想) 「タイ国〈S・M〉考」『世界』, 岩波書店, 1978. 3.

(随想) 「国境の町」『世界』岩波書店, 1978. 4.

「タイ国チャオ・ポー信仰における儀礼と慣行（1）」『アジア・アフリカ言語文化研究』15号, 1978. 4.

(随想) 「聖母の丘」『世界』岩波書店, 1978. 5.

(著書) 『東南アジア—土俗の探究』平文社, 1978. 6.

(執筆参加) 『東南アジア社会文化事典』1978. 9, 東京堂出版. (執筆項目) ピー, ピヤ・アヌマン・ラーチャトン, 大乗仏教, 上座部仏教, シヴァ神, ヴィシュヌ神, バラモン教, その他

(編訳) 「タイ国語教科書」『紀要』29号, 比較教育文化研究施設, 九州大学教育学部, 1978. 10.

「ベトナム戦争への証言（6）：メコン・デルタベトナムのもうひとつの顔」『アジア』アジア評論社, 1978. 10.

「タイ国チャオ・ポー信仰における儀礼と慣行（2）」『アジア・アフリカ言語文化研究』16号, 1978. 12.

### 1979年

(編訳書) プラヤー・アヌマンラーーチャトン『タイ民衆生活誌（1）—祭りと信仰—』(原著 *Phraya Anuman Rajadhon: Chut Prapheni Thai*), 井村文化事業社, 1979. 5.

「私の訳した本」『翻訳の世界』9月号, 1979. 8.

### 1980年

「ククリット・プラモートの人間像と『王朝四代記』の背景」(『王朝四代記』第一巻所収) 井村文化事業社, 1980. 2.

(編著) 『東南アジア関係基本図書ウォント・リスト』国立国会図書館アジア・アフリカ分科会, 1980. 3.

(編訳書) 『タイ民話集—ものぐさ成功記』筑摩書房, 1980. 3.

「メコン・デルターヴィンテー村雑感」『東亜』1月号, 霞山会, 1980. 12.

### 1981年

“The Ethnological Essays of Phraya Anuman Rajadhon”, The Toyota Foundation Occasional Report (No.1), The Toyota Foundation, 1981. 8.

(訳書) プラヤー・アヌマンラーーチャトン『回想のタイ 回想の生涯』上巻 (原著 *Phraya Anuman Rajadhon: Fun Khwam Lang*), 井村文化事業社, 1981. 11.

### 1982年

(分担執筆) 「タイの芸術と文学」『もっと知りたいタイ』(初版) (綾部恒雄・永積昭共編) 弘文堂, 1982. 9.

(編訳書) 『東南アジアの伝説と民話』『仏教説話体系』第15巻, すずき出版, 1982. 11.

### 1983年

(分担執筆) 『東南アジア』(世界の国シリーズ, No.14) 講談社, 1983. 4.

(訳書) プラヤー・アヌマンラーーチャトン『回想のタイ 回想の生涯』中巻, (原著 *Phraya Anuman Rajadhon: Fun Khwam Lang*), 井村文化事業社, 1983. 10.

### 1984年

『タイ民衆生活誌』全2巻完結, (第1巻「祭りと信仰」1979, 第2巻「誕生・結婚・死」1984), 原著: プラヤー・アヌマンラー

- チャトン, 『タイ固有習俗集成』(Chut Prapheni Thai), 井村文化事業社, 1984.
12.  
(執筆参加)『平凡社大百科事典』1984-1985,  
平凡社. (執筆項目) アスマンラー・チャトン,  
ピー, ベトナム人, ベトナムの住民  
と社会, ホアハオ教, カオダイ教, 他.

**1986年**

- (訳書)『回想のタイ 回想の生涯』全3巻完結,(上巻1981, 中巻1983, 下巻1986),  
原著: プラヤー・アスマンラー・チャトン  
『回想録』(Fun Khwam Lang), 井村文化事業社, 1986. 3.

- (執筆参加)『東南アジアを知る事典』1986. 7,  
平凡社. (執筆項目)『平凡社大百科事典』  
に同じ).

- 「インドシナ諸国語の中の漢字文化—“はざ  
ま”の構図を観る—」『翻訳の世界』1986.  
12.

**1987年**

- 『タイ語読本』(アジア・アフリカ言語文化研究所), 1987. 7.  
『タイ語文法』(アジア・アフリカ言語文化研究所), 1987. 7.  
「タイ語」(昭和62年度A.A研言語研修報告)  
『通信』61号, 1987. 11.

**1989年**

- (構成, 解説, 翻訳)「三界経にみるタイ仏教  
の宇宙觀」(サティエンポン・ワンナボック著), 「タイ王朝の儀式にみる宇宙觀」  
(ソン・シマートラン著), タイ上座部仏

- 教の宇宙觀と建築物」(アヌウィット・  
チャルンスパクン著)『アジアの宇宙觀』  
所収(講談社), 1989. 1.

- 「タイ系諸族の〈クニの柱〉祭祀をめぐって  
(1) —タイ系文化理解の一視角—」『ア  
ジア・アフリカ言語文化研究』38号, 1989.  
9.

**1991年**

- 「タイ系諸族の〈クニの柱〉祭祀をめぐって  
(2) —タイ系文化理解の一視角—」『ア  
ジア・アフリカ言語文化研究』41号, 1991.  
3.

**1992年**

- 「タイ系諸族の〈クニの柱〉祭祀をめぐって  
(3) —タイ系文化理解の一視角—」『ア  
ジア・アフリカ言語文化研究』43号, 1992.  
3.

**1993年**

- (執筆参加)『タイの事典』1993. 3, 同朋舎.  
(執筆項目) アスマンラー・チャトン, プ  
ラヤー, 占い, 守護神, 他.

**1995年**

- 「〈インドラ神の柱〉をめぐって (1) —タイ  
系文化理解の一視角—」『アジア・アフリ  
カ言語文化研究』50号, 1995. 9.

**1996年**

- 「〈インドラ神の柱〉をめぐって (2) —タイ  
系文化理解の一視角—」『アジア・アフリ  
カ言語文化研究』52号, 1996. 9.



## 内藤雅雄教授 — 略歴と発表一覧

### Professor Masao NAITO: A Record and Publication

#### 略歴

1940年12月24日 福井県武生市にて出生  
(父:孝作, 仏師)

#### 学歴および職歴

1953年3月 武生市立東小学校を卒業  
1956年3月 武生市立第一中学校を卒業  
1959年3月 福井県立武生高等学校を卒業  
1960年4月 東京外国语大学インド・パーキ  
　　スタン科(ヒンディー語専攻)に  
　　入学(主任教授:土井久彌氏)  
1964年3月 同科を卒業(学士論文「近代イ  
　　ンドのヴェーダーンタ思想」)  
1964年4月 東京大学大学院人文科学研究所  
　　(印度哲学専攻)修士課程に入学(指  
　　導教授:玉城康四郎氏)  
1967年3月 同科を終了(修士論文「近代イ  
　　ンド思想史上のティラク」)  
1967年4月より1969年8月まで、鈴木学術財  
　　団(鈴木大拙創立)にて「梵和辞典」  
　　(財団法人鈴木学術財団編, 1978年  
　　完成)の原稿作成作業  
1967年4月～1968年3月 私立明法学院(高  
　　校)非常勤講師(「倫理」を担当)  
1967年4月～1971年3月 東京外国语大学外  
　　国部学部非常勤講師(インド史)  
1968年4月～1970年3月 拓殖大学文学部非  
　　常勤講師(ヒンディー語)  
1969年9月 東京外国语大学アジア・アフリ  
　　カ言語文化研究所に助手として入所  
1984年4月 同上, 助教授となる  
1992年4月～2002年3月 東京外国语大学大  
　　学院地域文化研究科博士後期課程兼  
　　担(インド歴史社会論演習, アジア

歴史文化論)

1994年4月 上記アジア・アフリカ言語文化  
　　研究所, 教授となる  
1995年4月～2002年3月 東京外国语大学大  
　　学院地域文化研究科博士前期課程兼  
　　担(アジア第三文化特殊研究)  
2002年3月 東京外国语大学アジア・アフリ  
　　カ言語文化研究所退職  
2002年4月 専修大学文学部教授(史学科)  
　　に就任

#### 参加研究プロジェクト

■ アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究  
　　プロジェクト  
1969年9月～1971年4月  
　　「現代インドの民族統合と政治的課題」(主  
　　査:中村平治氏)  
1969年9月～1971年4月  
　　「インド・パーキスタン現代文学」(主査:  
　　奈良毅氏)  
1975年4月～1979年3月  
　　「インド・パーキスタン分離独立の史的研  
　　究」(主査:中村平治氏)  
1977年7月～8月  
　　アジア・アフリカ言語文化研究所言語研修実  
　　施(マラーティー語)  
1984年4月～1986年3月  
　　「アジアの民族運動とその国際関係」(主査:  
　　中村平治氏)  
1987年4月～1989年3月  
　　「南アジアにおける社会集団形成過程に関す  
　　る比較研究」(主査:内藤)  
1987年4月～1989年3月

「第三世界と日本」(主査:中村平治氏)  
1989年4月～1991年3月  
 「現代世界の地域統合とエスニシティ」(主査:中村平治氏)  
1990年4月～1995年3月  
 「南アジア系移民社会の研究」(主査:内藤)  
1998年4月～2000年3月  
 「独立インドの政治とカースト」(主査:内藤)  
2001年4月～  
 「アジア・アフリカにおける政治文化の動態」(主査:栗原浩英氏)

■文部(科学)省科学研究費

1979年4月～1982年3月  
 「南アジアの大河流域における農村社会の研究」(代表:原忠彦氏)  
1983年4月～1985年3月  
 「環カリブ海地域における複合文化の比較研究」(代表:山口昌男氏)  
1988年4月～1990年3月  
 「イギリス連邦諸国におけるインド系移民社会の研究」(代表:古賀正則氏)  
1990年4月～2001年3月  
 「国際学術研究に関する総合調査研究」(代表:石井溥氏)  
1998年4月～2001年3月  
 「南アジア世界の構造変動とネットワーク」([文部科学省科学研究費・特定領域研究A]代表:長崎暢子氏)  
2001年4月～2002年3月  
 「アジア・アフリカにおける多言語状況と生活文化の動態」([文部科学省科学研究費・基盤研究A]代表:梶茂樹氏)  
2001年4月～2002年3月  
 「アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成」([文部科学省科学研究費・COE形成基礎研究費]代表:ペーリ・バースカラーオ氏)

海外調査

1971年5月～1973年5月

インド:「未開発言語・文化習得のための現地派遣」(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)  
1976年12月～1977年2月  
 インド:「非常事態下のインド」調査  
1979年9月～1980年3月  
 インド:「南アジアの大河流域における農村社会の研究」(文部省科学研究費海外調査)  
1981年9月～1982年3月  
 インド:「南アジアの大河流域における農村社会の研究」(文部省科学研究費海外調査)  
1983年1月～3月  
 シンガポール、ビルマ(ミャンマー)、インド、スリーランカ:総理府派遣「青年の船」インストラクターとして  
1983年12月～1984年3月  
 アメリカ合衆国、トリニダード・トバゴ:「環カリブ海地域における複合文化の比較研究」(文部省科学研究費海外調査)  
1987年9月～12月  
 インド、連合王国:文部省在外研究  
1988年7月～9月  
 インド:「イギリス連邦諸国におけるインド系移民社会の研究」(文部省科学研究費海外調査)  
1989年7月～9月  
 カナダ、連合王国、インド:「イギリス連邦諸国におけるインド系移民社会の研究」(文部省科学研究費海外調査)  
1990年6月  
 韓国:「韓国におけるインド研究およびヒンディー語学習に関する調査」  
1994年2月～3月  
 アメリカ合衆国、トリニダード・トバゴ、ガイアナ、ジャマイカ:「カリブ海地域の学術研究体制の調査」(国際学術研究総括班)  
1998年7月～9月  
 インド、連合王国、アメリカ合衆国:「近現代南アジア研究基本資料調査」(文部省科学研究費特定領域研究「南アジア世界の構

造変動とネットワーク』)	1999年8月 日本大學生産工学部（集中講義：アジア近現代史）
1998年12月～1999年2月 連合王国、インド：文部省在外研究	2000年4月～2002年3月 明治大学文学部（南アジア史）
1999年7月～8月 パキスタン、インド：「近現代南アジア研究基本資料調査」（文部省科学研究費特定領域研究「南アジア世界の構造変動とネットワーク」）	2000年9月～2002年3月 日本大学文理学部（南アジア史）
	2000年12月 専修大学（集中講義：インド近現代史）
<b>非常勤講師</b>	<b>所外委員・共同研究員</b>
1975年4月～2001年3月 東京外国语大学外国部学部（南アジア社会論）	1998年4月～2000年3月 国立民族学博物館地域研究企画協力センター共同研究員
1976年4月～1997年3月 アジア・アフリカ語学院（インド社会論）	1998年4月～2000年3月 国立民族学博物館編集委員会委員
1992年8月 信州大学人文学部（集中講義：インド近現代史）	
1993年9月～1994年3月 東京大学教養学部（南アジア社会論）	<b>所 属 学 会</b>
1994年4月～1995年3月 一橋大学社会学部（南アジア社会論）	歴史学研究会（委員1982年5月～1983年4月） 日本南アジア学会（常務理事1990年10月～1998年9月；理事2000年10月～）

## 発 表 一 覧

（学会やセミナーなどの報告は材料が不完全なので省略し、  
活字になったものだけをここに挙げる。）

### I. 単著・編著・共編著

*Asian and African Grammatical Manual: Marathi*, Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 1976.

『環カリブ海地域における複合文化の比較研究』（山口昌男・内藤雅雄共編），東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所，1985年（執筆：「西インドの東インド人—トリニダード・インド人移民の歴史を中心に」，129-174ページ）

*Comparative Studies on the Plural Societies in the Caribbean*, Vol.2, co-editing with M. Yamaguchi [Naito, "A Historical Overview of the East Indians in Trinidad 1845-1947", pp.79-113],

Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 1987.

『ガンディーをめぐる青年群像』，三省堂，253ページ，1987年

『もっと知りたいインド』I（佐藤宏・内藤雅雄・柳沢悠共編），弘文堂，1989年（執筆：「ヒンドゥー・コミュナリズムと RSS」，119-140ページ）

『南アジア系移民社会の歴史と現状—イギリス連邦諸国を中心に』（内藤編），東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所，1991年（執筆：「南アジア系移民の諸類型」，1-7ページ）

『近現代南アジアの社会集団と社会運動』

(内藤編), 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1991年(執筆:「マハール・ワタン廃止と B. R. アーンベードカル」, 201-254ページ)

*South Asians in the U.K., Tanzania and Canada: Statistical Data from the Surveys*, co-editing with M. Koga and T. Hamaguchi, Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 1993.

『解放の思想と運動』(内藤編, 叢書「カースト制度と被差別民」第3巻), 明石書店, 1994年(執筆:「マハーラーシュトラにおける不可触民解放の思想と運動」152-210ページ)

『現代インドの展望』(古賀正則・内藤雅雄・中村平治共編), 岩波書店, 1998年(執筆:「インドの民主主義とヒンドゥー原理主義」, 49-73ページ)

*Towards Understanding Each Other: Fifty Years' History of India-Japan Mutual Studies*, co-editing with C. Nakane, Committee for Japan-India Academic Exchange, Tokyo, 2000.

『移民から市民へ—世界のインド系コミュニティ』[アジア・アフリカ言語文化叢書34]

(古賀正則・内藤雅雄・浜口恒夫共編), 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2000年3月(2000年5月に東京大学出版会より市販本として出版。執筆:「カリブ海地域における「東インド人社会」—特にトリニダードを中心に」27-43ページ, 「インド系南アフリカ人の苦難—その抵抗と妥協」114-130ページ, 「パーティーダール(パテール)一グジャラートの農村から世界へ」283-293ページ)

## II. 論 文

「インド・コミュニズムの歴史的展開—宗教と政治, その一断面—」, 『宗教と社会』7, 10-19ページ, 〈宗教と社会〉研究会(東京大学印度哲学専門課程), 1965年

「近代インド経済思想試論—資本主義の形成とナショナリズムの歴史的検討—」, 『鈴木

学術財団研究年報』4, 66-80ページ, 鈴木学術財団, 1968年3月

「日本におけるガンディー研究の考察」, 『インド文化』9, 23-40ページ, 日印文化協会, 1969年10月

「インド分離独立と言語問題—ラーフルの所説を中心に」, 山口博一編『現代インドの研究』245-263ページ, アジア経済研究所, 1972年3月

「現代インドの国家建設と思想としての社会主义」, 岡倉古志郎・江口朴郎編『苦悩するアジアの民族』(「70年代のアジア」5), 63-99ページ, 時事通信社, 1973年10月

「サータラーの“プラティ・サルカール”農民運動—第二次大戦期インド民族運動の一考察」, 『アジア・アフリカ言語文化研究』9, 1-23ページ, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1974年11月

「20世紀初頭のインドの植民地支配と反帝国主義思想—カーズン, モーリー・ミントー体制と B. G. ティラク」, 『アジア・アフリカ言語文化研究』12, 59-121ページ, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1976年11月

「現代インドの歴史研究とその課題」, 『歴史学研究』441, 27-35ページ, 歴史学研究会, 1977年2月

「G. パルレーカル『ひとが目覚める時』—あるアーディワーシー解放闘争について」, 『アジア・アフリカ言語文化研究』16, 163-177ページ, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1978年12月

「インド民族運動と国民会議派の組織」, 『アジア・アフリカ言語文化研究』18, 12-55ページ, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1979年12月

「近代インドにおける反カースト運動の一系譜—J. G. プレーの思想をめぐって」, 『東京外国語大学八十周年記念論集』, 445-465ページ, 東京外国語大学, 1980年3月

「インドにおける歴史研究と歴史教育」, 『歴

史評論』No.373, 45-51ページ, 歴史教育者協議会, 1981年5月

「イギリス帝国とインドの位置づけ—第一次大戦期・戦後期を中心に」, 中村平治編『アジア政治の展開と国際関係』, 83-96ページ, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1986年3月

「ボンベイのシヴ・セナー運動—「地域主義」の問題をめぐってー」, 佐藤宏編『南アジア現代史と国民統合』, 141-169ページ, アジア経済研究所, 1988年2月

「インドの民族解放運動と不可触民解放の課題」, 歴史学研究会編『必死の代案—期待と危機の20年』(講座「世界史」6), 367-379ページ, 東京大学出版会, 1995年

「東アフリカにおける“インド人問題”—1920年代のケニアを中心に」, 『アジア・アフリカ言語文化研究』48-49, 111-135ページ, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1995年10月

"Circumstances Surrounding and Problems Underlying Liberation Movement of the Depressed Castes", "Anti-Untouchability Ideologies and Movements in Maharashtra from the Late Nineteenth Century to the 1930s", H. Kotani ed., *Caste System, Untouchability and the Depressed*, pp.133-137, pp.169-220, Manohar, New Delhi, 1997.

"Recent Political Tendency in an Indian Metropolis: A case of the Shiv Sena in Bombay", F. Oshikawa ed., *South Asia under the Economic Reforms*, pp.235-245, The Japan Center of Area Studies, National Museum of Ethnology, 1999.

「独立インドの政治」, 『海外事情』, 12-25ページ, 拓殖大学海外事情研究所, 1999年7-8月

「インド洋に広がるインド系社会」, 家島彦一編『海のアジア②モンスーン編』, 211-236ページ, 岩波書店, 2000年

「インド社会とヒンドゥー教」, 『経済』79-92

ページ, 2002年3月

「M. K. ガーンディーと日本人」, 『アジア・アフリカ言語文化研究』63, 125-174ページ, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2002年3月

### III. 小 論

「シャーストリー首相」(インド小百科3), 『インド文化』6, 53-56ページ, 日印文化協会, 1966年7月

「B. G. ティラク研究の動向—近年におけるアメリカとソ連での研究を中心にー」, 『インド文化』8, 85-96ページ, 日印文化協会, 1968年4月

「ガンディー主義と現代インド」, 『国際文化』181, 6ページ, 国際文化振興会, 1969年7月

「ゴーカレー政治経済研究所と故ガードギール教授」, 『通信』16, 5-8ページ, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1972年8月

「インド国民会議派の成長」, 『日本と世界の歴史』19, 262-267ページ, 学習研究社, 1971年1月

「インド民族運動とガンディー」, 『日本と世界の歴史』20, 286-293ページ, 学習研究社, 1971年4月

「インド独立とハリジャン(旧不可触民)」, 『歴史学研究』393, 59-63ページ, 歴史学研究会, 1973年2月

「近代マハーラーシュトラ研究ノート」(未開発言語・文化習得のための現地派遣報告5), 『通信』19, 10-15ページ, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1973年8月

「近代インド思想史研究の課題」, 『春秋』No.147, 8-11ページ, 春秋社, 1973年8-9月

「ゴア雑感」, 『サルボダヤ』15-4・5, 31-35ページ, 日印サルボダヤ交友会, 1975年4・5月

「インドから見た明治末期の日本」, 『歴史公論』114-120ページ, 雄山閣, 1976年9月

- 「マラーティー語研修について」,『通信』31, 19-23ページ, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1977年1月
- 「第一次大戦後のインド政治と民族運動」,『歴史公論』61-63ページ, 雄山閣, 1977年7月
- 「インドの分離独立とガンディー暗殺」,『サルボダヤ』18-1, 13-18ページ, 日印サルボダヤ交友会, 1978年1月
- 「近代日本の形成と英領インド」, 大形孝平編『日本とインド』, 28-38ページ, 57-66ページ, 三省堂, 1978年5月 (山崎利男・高橋満編『日本とインド・交流の歴史』, 30-41ページ, 59-68ページ, 三省堂, 1993年2月に再録)
- 「近代マハーラーシュトラの思想家(一) — ロークヒタワーディー」,『マハーラーシュトラ』1, 65-76ページ, マハーラーシュトラ研究会, 1978年10月
- 「ガンディー首相の暗殺とインド政治」,『アジア・アフリカ』1984年12月1号
- 「近代インドの歴史と民衆」, 近藤治編『インド世界—歴史と文化』44-63ページ, 世界思想社, 1984年11月
- 「地域文化の誕生と発展—西部インド(南北文化のかけはし)」, 辛島昇編『インド世界の歴史像』(民族の世界史7), 206-224ページ, 山川出版社, 1985年1月
- 「インド国民軍の崩壊」「アジア諸民族連帯への模索」, 中村平治・桐山昇編『アジア1945年—「大東亜共栄圏」潰滅の時』96-105, 158-180ページ, 青木書店, 1985年8月
- 「ガンディーの非暴力・不服従運動は効果があったのか」,『歴史地理教育』No.410, 102-103ページ, 歴史教育者協議会, 1987年3月
- 「インド政治の偉大な長老, ダーダーバイー・ナオロージー」, 上山英昭編『話題源歴史』, 205ページ, 東京法令出版, 1988年
- 「ガンディー・インドのカリスマ政治家」,『歴史読本ワールド』17, 34-20 (20世紀の政治家たち), 80-87ページ, 新人物往来社, 1989

年10月

「藩王たちの栄華の日々」,『インプレッショն』10・11月号, 20-37ページ, アメリカン・エクスプレス・インターナショナル・ジャパン, 1989年10月6日

「インド史とコミュニズム」,『会報』4, 1-2ページ, 世界史年表編集委員会事務局, 1991年

「インドとパキスタンはどうして分かれたか」,『歴史地理教育』No.470, 80-81ページ, 歴史教育者協議会, 1991年3月

「ヒンディー語・インドの国民統合と公用語問題」(世界のことば10),『地理月報』No.390, 7-8ページ, 二宮書店, 1991年7月

「ポンベイの政治」「ゴア」, 坂田貞二・内藤雅雄・臼田雅之・高橋孝信共編『都市の顔・インドの顔』, 74-79ページ, 110-116ページ, 春秋社, 1991年

「多様な民族社会に統一性を持つ宗教と言語(インド基礎講座・文化)」,『財界』, 139-141ページ, 1995年12月

「西インドにおける“東インド人”」,『アジアワールド・トレンド』8, 48-49ページ, アジア経済研究所, 1996年1月

「インドのスワデーシー運動と明治日本」,『国際協力』3月号, 28-29ページ, 国際協力事業団, 1997年3月

「アジアの言語事情・インド」,『言語』Vol.26-No.11, 74-77ページ, 大修館書店, 1997年10月

「宗教的原理主義運動による国民的政治統合のゆくえ—とくにインドのヒンドゥー原理主義運動について」,『21世紀にひきつぐ課題(地歴科・公民科)』, 1-7ページ, 三省堂, 1998年7月

「第一次世界大戦とインド民族運動」,『歴史地理教育』No.591, 28-33ページ, 歴史教育者協議会, 1999年3月

「トリニダード・トバゴにおける南アジア系移民史」, 大石高志編『南アジア系移民一年表および時期区分』, 243-255ページ, 文部省

科学研究費・特定領域研究（A）「南アジア世界の構造変動とネットワーク」（東京大学東洋文化研究所），1999年8月

「宗主国イギリスが‘輸出’したインド人」，『サイアス』朝日新聞社，2000年2月号，82-83ページ（東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所公開講座「アジア・アフリカの21世紀を読み解くために—人が動く、未来を開く」，1999年12月11日の講演）

#### IV. 教科書・テキスト

『マラーティー語テキスト』（3冊，1977年言語研修用）東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所，1977年

『世界史B』（高校用世界史教科書，12名にて共同執筆，東南アジア・南アジアの部分を執筆），三省堂，1994年（1998年改訂，現在再改訂中）

「南アジアにおける民族主義と民主主義—インドの国民統合問題をめぐって」，『世界史B』（指導資料），34-36ページ，三省堂，1994年

#### V. 研究・学会動向

「回顧と展望（南アジア近現代）—1968年」，『史学雑誌』252-257ページ，史学会，1968年5月

「インド史研究のための文献案内」，『東書高校通信・世界史』No.23，4-5ページ，東京書籍株式会社，1972年5月

「南アジア合宿研究会」，『通信』22，24-25ページ，東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所，1974年10月

「第16回南アジア研究集会」，『通信』49，28-29ページ，東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所，1983年11月

「D. N. ダナーガレー教授について」（プロフィル），『通信』52，28ページ，東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所，1984年11月

「回顧と展望（南アジア近現代）—1986年」，

『史学雑誌』96-5，267-272ページ，史学会，1987年5月

「国際学術研究に関する総合調査研究」研究連絡会報告（南アジア），『海外学術調査ニュースレター』15，2-3ページ，国際学術研究総括班，1990年3月

「カリブ海地域の学術研究体制調査報告」，『海外学術調査ニュースレター』28，4-7ページ，国際学術研究総括班，1994年12月

「インド近現代」，三浦・東長・黒木編『イスラーム研究ハンドブック』（講座イスラーム世界別巻），175-180ページ，栄光教育文化研究所，1995年10月

「国際学術研究に関する総合調査研究」研究連絡会報告（南アジア），『海外学術調査ニュースレター』32，3-4ページ，国際学術研究総括班，1996年3月

“The Japanese Association for South Asian Studies”，*JCAS News*, No.2, p.6, The Japan Center for Area Studies, August 1996

「スディール・チャンドラ博士」（プロフィル），『通信』89，23ページ，東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所，1997年3月

「国際学術研究に関する総合調査研究」研究連絡会報告（南アジア），『海外学術調査ニュースレター』35，3-4ページ，国際学術研究総括班，1997年3月

「日本南アジア学会」，『アジア経済』，57-61ページ，アジア経済研究所，1997年4月

「国際学術研究に関する総合調査研究」研究連絡会報告（南アジア），『海外学術調査ニュースレター』38，3-4ページ，国際学術研究総括班，1998年3月

「資料収集・公開班：購入予定資料と資料所蔵状況」，『南アジア：構造・変動・ネットワーク 季刊』1巻1号，6-14ページ，文部省科学研究費・特定研究A「南アジア世界の構造変動とネットワーク」総括班，1998年7月

「資料収集・公開班報告」，『南アジア：構

造・変動・ネットワーク 季刊』1巻2号, 73-79ページ, 文部省科学研究費・特定研究A 「南アジア世界の構造変動とネットワーク」総括班, 1998年11月

## VI. 翻 訳

J. D. セーティ「似非インド人」,『通信』11, 12-17ページ, 東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1970年12月

D. D. コーサンビー「バガヴァッド・ギーターの社会的・経済的諸側面」,『通信』22(9-19ページ)・23(20-29ページ), 東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1974年10月・1975年3月

V. G. ハタルカル「インド民族運動史の新動向—マハーラーシュトラ」,『通信』39, 12-20ページ, 東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1980年7月

N. ラーム「第三世界の知識人—その現実と将来の役割」, 岩波書店編集部編『現代世界の危機と未来への展望』, 149-182ページ, 岩波書店, 1984年

J. P. ヘイスコックス著『インドの共産主義と民族主義—M. N. ロイとコミニテルン』(中村平治・内藤雅雄共訳), 岩波書店, 1985年

「ディエゴ・ガルシアのイロイ人」「インドの指定カースト」「インドのアーディワシー」,マイノリティ・ライツ・グループ編『世界のマイノリティ事典』, 637-639ページ, 736-742ページ・794-802ページ, 明石書店, 1995年

G. パルレーカル著『インド先住民解放の道—ワールリーの戦いの記録』, 明石書店, 325ページ, 1997年

## VII. 書評, 座談会, 映画評

山折哲雄『アジア・イデオロギーの発掘』(勁草書房),『中外日報』, 1968年6月23・25・26・27日 (木村清孝氏と共に評)

『ガンジー』(ルイス・フィッシャー著, 古賀勝郎訳, 紀伊国屋書店),『図書新聞』, 1969

年2月24日

『インド「緑の革命」と「赤い革命」』(ラッセ・ベルグ／リサ・ベルグ著, 森谷文昭訳, 朝日新聞社),『週刊読書人』, 1973年6月25日

Sumit Sarkar, *The Swadeshi Movement 1902-1908*, New Delhi, 1973, 『アジア経済』16-7, 96-99ページ, アジア経済研究所, 1975年7月

『わがふるさとの「インド」』(P. モハンティ著, 小西正捷訳, 平凡社),『朝日ジャーナル』, 74-76ページ, 朝日新聞社, 1976年3月12日

K. C. Yadav, *The Revolt of 1857 in Haryana*, Delhi, 1977, 『歴史学研究』459, 64ページ, 歴史学研究会, 1978年8月

K. C. Yadav, *The Revolt of 1857 in Haryana*, Delhi, 1977, *Journal of Haryana Studies*, Vol.X (II), 1978

『インド民族運動史』(山田晋著, 教育社),『赤旗』, 1981年2月2日

「映画“Gandhi”を観て」,『インド通信』51, 6-7ページ, 1983年1月1日

「映画ガンジー」,『赤旗』, 1983年5月14日

「ベネガルの熱い思い (ベネガル監督「芽生え」)」,『インド映画祭』, 6ページ, インド映画祭実行委員会, 1983年9月

『インド国民軍』(丸山静雄著),『赤旗』, 1985年12月9日

『インド独立—逆行の中のチャンドラ・ボース』(長崎暢子著),『歴史学研究』610, 52-55ページ, 歴史学研究会, 1991年1月

[対談]「ミーラー・ナール監督作品『ミシッピー・マサラをめぐって』」(上)(下) (松岡環氏と),『しにか』Vol.3-Nos.6-7, 110-115ページ, 112-117ページ, 大修館書店, 1992年6・7月

## VIII. 随 想

「海外便り—インドより」,『通信』14, 36ページ, 東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1971年12月

「海外便り—Prohibition」,『通信』15, 23

ページ, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1972年3月

「苦い砂糖」(『民族のこころ』24), 『通信』21, 23ページ, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1974年3月

「インドの酒のこと」(『民族のこころ』47), 『通信』40, 35ページ, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1980年11月

「インド反帝思想の一断面」, 『赤旗』, 1982年10月23日

「海外インド人」(『民族のこころ』66), 『通信』57, 17ページ, (『異文化との出会い』, 205-207ページ, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1994年3月に再録) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1986年8月

「パーティーダール・ホスピタリティーグジャラート調査で会った人々」, 『通信』64, 5-6, 46ページ, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1986年12月

「南インドのマラーター語」, 蒲生禮一先生記念論集刊行会編『蒲生禮一先生記念論集』, 255-263ページ, 蒲生禮一先生記念論集刊行会, 1987年

「世界のことば13(マラティー語)」, 『朝日ジャーナル』Vol.31, No.14, 50ページ, 朝日新聞社, 1989年3月31日

「ウガンダ・パーク」, 『会報』1, 27-29ページ, 印パ語学科卒業生の会(東京外国語大学), 1989年5月

「マラティー語」, 朝日ジャーナル編『世界のことば』, 26-27ページ, 朝日新聞社, 1991年10月

「フレー, シャーフー, そして今」, 『春秋』337, 25-27ページ, 春秋社, 1992年4月

「インド史・一冊の本」, 『アジア・アフリカ図書館報』5, 4ページ, アジア・アフリカ図書館, 1997年4月

## IX. 事典・辞典, コラム

「アーリヤ・サマージ」「アムリットサル事

件」「G. N. カーソン」「C. J. カニング」「M. K. ガンディー」「G. K. ゴーカレー」「サティヤーグラハ」「スワラージ」「R. タゴール」「ビベーカーナンダ」「プラフモ・サマージ」「A. ベザント」「S. C. ポース」「モープラーの反乱」「モーリー・ミントー改革」「ラージパト・ラーアイ」, 『万有百科大事典』9 (世界歴史), 小学館, 1975年

「アンラングゼーブ」「アクバル」「アヒンサー」「アフガン戦争」「アムリットサル事件」「アリーガル運動」「イギリス・インド円卓会議」「インド史」「インド国民軍」「インド帝国」「カースト」「ガッファル・ハーン」「D. R. ガードギール」「キラーファット運動」「G. K. ゴーカレー」「(インド) 国民会議派」「D. D. コーサンビー」「コミュナリズム」「M. A. ジンナー」「セポイの反乱(インド大反乱)」「J. ネルー」「S. バネルジー」「サルダール V. J. パテール」「ペーシュワー」「ベンガル分割」「マラーター王国」「マラーター戦争」「マラティー文学」「ムスリム連盟」「ランジート・シング」「ローラット法」, 『国民百科事典』(本文全14巻), 凡出版社, 1979年

「インド民族運動の歴史」「独立後のインド」, 『原色図解大事典・世界の歴史』(下), 168-169ページ, 204-205ページ, 小学館, 1980年

「アーガー・ハーン」「A. K. アーザード」「アユーブ・ハーン」「アールエスエス」「M. イクバール」「イルバート法案」「A. ガッファル・ハーン」「M. K. ガンディー」「共産党運動」「クリップス使節団」「ケーサリー」「ゴーヴィンド・シンフ」「G. K. ゴーカレー」「国民会議派」「コミュナリズム」「サイモン委員会」「シヴ・セーナ」「シク戦争」「社会主義」「ジュニヤーネシュワル」「M. A. ジンナー」「スワデーシー」「スワラージ」「ターンティア・トーピー」「チットパーソン」「チャルカー」「B. G. ティラク」「テーランガナー闘争」「トゥカラーム」「D. ナオロジー」「ナクサライト」「ナーナー・サーヒブ」「ナームデーウ」「J. ネルー」「ハイドラーバード藩王国」「V. J. パテール」

「S. N. バネルジー」「藩王国」「ヒラーファト運動」「ペーシュワー」「マウントバッテン」「マラーター」「マラーター戦争」「マラーター同盟」「マラーティー語」「マラーティー文学」「ミントー」「V. K. K. メノン」「モーリー・ミントー改革」「モンタギュー・チエルムズフォード報告」「ラージパット・ラーイ」「C. ラージャゴーパーラーチャーリア」「ラーティーチャージ」「ランジート・シンフ」「ローラット法」「ワールカリー派」、『平凡社大百科事典』(全15巻), 平凡社, 1984-85年(のちに), 『南アジアを知る事典』, 平凡社, 1992年に再録)

「カースト」、高崎直道編『早島鏡正博士還暦記念 仏教・インド思想史辞典』, 57-59ページ, 春秋社, 1987年

「コーンクニー語」、亀井・河野・千野編『言語学大辞典』第1巻上, 1795-1797ページ, 三省堂, 1988年

「インド共和国」「スリランカ民主社会主义共和国」「バングラデシュ人民共和国」「パキスタン・イスラム共和国」「アフガニスタン共和国」「ネパール王国」「モルディブ共和国」「ブータン王国」、「現代用語の基礎知識」編集部編『世界ニュース歴史地図』(『現代用語の基礎知識』1991年版別冊付録), 89-92ページ, 自由国民社, 1991年1月

「価値の基準を故国インドに求めるカリブ移民」「茶色のヨーロッパ人」と揶揄されたゴア人」、『朝日ジャーナル』Vol.33, No.40, 86, 114ページ, 朝日新聞社, 1991年10月1日

「ガンディー自叙伝」「ネルー自叙伝」「アンベードカル伝」、『世界をつくった人々の伝記・自叙伝の名著総解説』, 18-20ページ, 35-37ページ, 42-43ページ, 自由国民社, 1992年

「ボンベイ・インド海軍の反乱」、板垣雄三・後藤明編『事典 イスラームの都市性』, 508-509ページ, 亜紀書房, 1992年

「マラーティー語」、亀井・河野・千野編『言語学大辞典』第4巻下-2, 44-46ページ, 三省堂, 1992年

「インド」「スリランカ民主社会主义共和国」「バングラデシュ人民共和国」「パキスタン・イスラム共和国」「アフガニスタン共和国」「ネパール王国」「モルディブ共和国」「ブータン王国」、「現代用語の基礎知識」編集部編『世界ニュース・ダイジェスト』(『現代用語の基礎知識』1993年版別冊付録), 100-104ページ, 自由国民社, 1993年1月

「マラーティー語」、柴田武編『世界のことば小事典』, 438-441ページ, 大修館書店, 1993年

「インド」「スリランカ民主社会主义共和国」「バングラデシュ人民共和国」「パキスタン・イスラム共和国」「アフガニスタン共和国」「ネパール王国」「モルディブ共和国」「ブータン王国」、「現代用語の基礎知識」編集部編『世界各国現代史ダイジェスト』, 153-159ページ, 自由国民社, 1995年1月

「カーザン」「ガンディー」「ジンナー」「ネルー」、佐藤次高編『人物世界史』4, 38-41ページ・42-45ページ, 46-49ページ, 50-53ページ, 山川出版社, 1995年

「最近のインドにおける地名等の呼称の変更」、『日本南アジア学会ニュース』No.9, 5ページ, 日本南アジア学会, 1996年7月31日

「映画王国インド」「五十音図とインド」「仏教の衰退」「ターター財閥と日本」「ガンディーの理想・ラームラージ」「植民地インド人のイギリス議会での活躍」「インドの民法」「インドの国民車・マールティ」「世界の中のインド人」、歴史教育者協議会編『知っておきたいインド・南アジア』, 31ページ, 62ページ, 88ページ, 116ページ, 121ページ, 126ページ, 154ページ, 172ページ, 200ページ, 青木書店, 1997年

「新佛教徒」「チトパーソン」「マーッピラ」「マハール」「マラーター」「不可触民問題」、綾部恒雄監修『世界民族事典』, 328ページ, 393ページ, 639ページ, 644-645ページ, 650ページ, 844ページ, 弘文堂, 2000年

「アーガー・ハーン」「A. K. アーザード」「アムリトサル事件」「アユーブ・ハーン」「インド人民党」「英印円卓会議」「カルカッタ」「ケーサリー」「ゴア」「G. K. ゴーカレー」「V. D. サーヴァルカル」「シヴァ・セーナー」「シムラ」「L. B. シャーストリー」「ジャン・サンギ」「スワデーシー」「スワラージ」「スワラージ党」「R. タゴール」「C. R. ダース」「ダリト」「ダリト・パンサー」「B. G. ティラク」「デカン」「M. R. デーサーイー」「D. ナオロジー」「パキスタン決議」「S. パネルジー」「ハルタール」「パンチャヤット」「ピンダーリー戦争」「ヒンドゥー復古主義」「ブーダーン」「ブネー」「プールナ・スワラージ」「J. G. フレー」「A. ベザント」「S. C. ボース」「ボンベイ」「ボンベイの海軍反乱」「M. M. マーラヴィーヤ」「民族奉仕団」「モーリー・ミントー改革」「モンタギュー・チャルムズフォード改革」「ヤング・インディア」「M. G. ラーナダー」「R. M. ローイ」「ローラット法」「ワルダー」「ワリーウッラー」、西川正雄ほか編『角川世界史辞典』、角川書店、2001年

## X. 時事動向

「ラーム寺院問題とインド人民党 (BJP)」、『インド季報』23-3, 27-34ページ、日印調査委員会、1991年12月

「インド、南アジアの行方を探る」、『アジア・アフリカ・ラテンアメリカ』381, 2-3ページ、日本アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会、1992年2月1日

「パンジャーブ州の選挙」、『インド季報』23-4, 28-32ページ、日印調査委員会、1992年3月

「インド人民党 (BJP) の動向」、『インド季報』24-1, 28-33ページ、日印調査委員会、1992年6月

「インド人民党 (BJP) とアヨーディヤ問題」、『インド季報』24-2, 30-35ページ、日印調査委員会、1992年9月

「アヨーディヤ問題の衝撃」、『インド季報』24-3, 16-22ページ、日印調査委員会、1992

年12月

「揺れるインド—コミュナリズムの危険な台頭」、『アジア・アフリカ・ラテンアメリカ』394, 2-3ページ、日本アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会、1993年3月1日

「ヒンドゥー・コミュナル勢力の動き」、『インド季報』24-4, 32-37ページ、日印調査委員会、1993年3月

「インド人民党 (BJP) をめぐる状況とラーム寺院建設問題」、『インド季報』25-1, 16-22ページ、日印調査委員会、1993年6月

「対南アジア関係」、『中国総覧』(1994年版), 211-218ページ、霞山会、1994年

「インド人民党の動向」、『インド季報』26-1, 24-23ページ、日印調査委員会、1994年6月

「マハーラーシュトラの政治と‘カイルナル現象’」、『インド季報』26-2, 23-25ページ、日印調査委員会、1994年9月

「マハーラーシュトラ—シュリークリシュナ調査委員会報告、バングラデシュ人追放」、『インド季報』30-2, 25-27ページ、日印調査委員会、1994年9月

「州政治の新展開—マハーラーシュトラ」、『インド季報』27-1, 22-25ページ、日印調査委員会、1995年6月

「エンロン・プロジェクトをめぐる問題」、『インド季報』27-2, 14-18ページ、日印調査委員会、1995年9月

「野党の動き」、『インド季報』27-3, 21-25ページ、日印調査委員会、1995年12月

「総選挙後のインド人民党 (BJP)」、『インド季報』28-1, 23-25ページ、日印調査委員会、1996年6月

「グジャラートにおけるインド人民党 (BJP) 分裂劇とその波紋」、『インド季報』28-2, 31-33ページ、日印調査委員会、1996年9月

「第11代インド大統領選挙」、『インド季報』29-1, 29-31ページ、日印調査委員会、1997年6月

「ナーラーヤナン大統領の就任と副大統領

- 選挙」,『インド季報』29-2, 31-33ページ, 日印調査委員会, 1997年9月  
「ヒンドゥー原理主義勢力による襲撃事件」,『インド季報』30-4, 24-28ページ, 日印調査委員会, 1999年3月  
「各州の政治状況—州政府の交代と州議会選挙」,『インド季報』31-2, 32-36ページ, 日印調査委員会, 1999年9月  
「ローマ法王の訪印とインド政治」,『インド季報』31-3, 29-30ページ, 日印調査委員会, 1999年12月  
「カシミール問題」,『インド季報』32-1, 34-35ページ, 日印調査委員会, 2000年6月  
「州政治の動向—マハーラーシュトラ」,『インド季報』32-2, 41-43ページ, 日印調査委員会, 2000年9月  
「会議派の動向」,『インド季報』32-4, 31-32ページ, 日印調査委員会, 2001年3月

## ***Journal of Asian and African Studies***

Published by the Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

The Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, a national government research institution affiliated with the Tokyo University of Foreign Studies (TUFS), has worked to implement and stimulate research on the languages, linguistics, history, cultural anthropology and ethnology of Asia and Africa since its foundation in 1964. It was the first Inter-University Institution to be designated in the Humanities and social sciences in Japan, and has been engaged in the computerization of data in Asian and African languages and cultures since the 1970s. This area of speciality has been strengthened further by the establishment of the Information Resources Center in 1997, the main purpose of which is to process information resources pertaining to the languages and cultures of Asia and Africa.

The ***Journal of Asian and African Studies*** welcomes contributions in Japanese, English, French, German and Chinese that fall within the following three categories; Articles, Source Materials and Remarks, and Reviews. Articles should be based on original research, those devoted to new interpretations and new questions are particularly encouraged as are substantial review articles on particular areas of scholarship. For more details on our publishing requirements see Guidelines for Authors.

**Manuscript Review Procedure:** All articles, contributions received are sent to referees. Favorably evaluated submissions are generally published six to twelve months after the final manuscript has been received.

### **Guidelines for Authors**

To submit a manuscript for consideration, send one copy to: The Editorial Committee, Journal of Asian and African Studies, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 3 chome, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo, 183-8534, Japan. Articles are selected by peer review. Authors sending manuscripts to the journal should not simultaneously submit them to another journal, nor should manuscripts have been published elsewhere in substantially similar form or with substantially similar content.

Manuscripts must be either printed or typewritten, on standard A4 size paper, on one side only with wide margins all around. Double space everything, including block quotations, footnotes, Bibliography and figure captions. Those who write with computers or word processors are encouraged to send a disk version together with the manuscript (disk format is given below). Authors should clearly indicate on the first page of the manuscript to which category their submission is intended, by writing in red ink one of the following, Article, Source Materials and Remarks, or Reviews. For manuscripts indicated as Articles and Source Materials, contributors should supply a table of contents to go before the text. The title of the submission, author's name and institution of affiliation should be given only on a separate title page, and should not appear anywhere else. **Footnotes:** Footnotes should be numbered consecutively throughout the manuscript, and printed or typewritten on separate sheets from the main text. They should be indicated by raised numbers in the text. Citations to publications should be placed in the footnotes as follows:

Taylor 1976, pp.189-190.

Full references should be given in a separate bibliography which follows the text. Entries should be made as shown below:

Taylor, Robert H. 1976. "Politics in Late Colonial Burma: The Case of U Saw." *Modern Asian Studies*, 10, pp.161-193.

**Abstracts:** Authors of manuscripts designated as Articles and Source Materials and Remarks must supply an abstract in English of not more than 500 words. All manuscripts, no matter to which category they belong or which language they are written (except Japanese), must include a list of five keywords in English.

**Tables and Figures:** Authors should indicate the sizes of tables and figures with clear instructions to show where they are to appear in the text. Captions for all tables and figures should also be provided.

**Special Scripts:** Any special linguistic or other scripts/signs should be listed on separate sheets.

**Reviews:** Full data of books or articles to be reviewed should be indicated in the following style:

Benedict Anderson: *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* (Revised Edition). London: Verso, 1991, 224pp.

**Disk Format:** We only accept disks that contain plain text-files of the manuscript. The file should not contain any private/corporate defined characters. Characters that cannot be represented by the standardized character sets should be so marked, or simply left blank. Software-dependent file formats such as MS Word or TeX sources are not accepted. Disks should be in IBM 9 sector format (2HD 1.44MB[High Density], 2DD 720KB [Double Density]), or Macintosh Format (2HD 1.44MB, 2DD 800KB).

**Proofs:** Authors are requested to read the first proofs. Corrections should be limited to typographical errors only.

Any manuscript that does not conform to these guidelines may be rejected. As a rule, manuscripts submitted will not be returned to the authors. Also, the Editorial Committee reserves the right to reproduce and transmit by electronic and other means (e.g. on www pages) all contributions that are published in the ***Journal of Asian and African Studies***. The ***Journal of Asian and African Studies*** (ISSN 0387-2807), is published twice a year in March and September by the Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 3 chome, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo, 183-8534, Japan.

**Back Issues:** Information about availability of back issues may be obtained from the Editorial Committee (address below).

Address changes, manuscripts for publication, inquiries, and all other communications should be sent to the following address: The Editorial Committee, Journal of Asian and African Studies, Research Institute for Languages and

Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 3 chome, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo, 183-8534, Japan

FACSIMILE: 81-42-330-5610

URL: <http://www.aa.tufs.ac.jp>

TELEPHONE: 81-42-330-5617

E-mail: [editcom@aa.tufs.ac.jp](mailto:editcom@aa.tufs.ac.jp)

## 執筆要領

1. 原稿には、「ジャーナル原稿」と朱書きし、論文、資料・研究ノート、書評・紹介の区別をしるす。
2. 原稿はプリントアウトしたものを正本とする。用紙はA4を用いる。  
日本語（中国語）の場合、手書きによる投稿も認める。その場合、横書き原稿用紙（20字×20行）を用いること。
3. 投稿にあたっては、パソコンのフロッピーディスクを同封することが望ましい。
- \*ディスクを送る場合は、IBM 9 sector format の 2HD 1.44MB (High Density), 2DD 720 KB (Double Density) または Macintosh Format (2HD 1.44MB, 2DD 800KB) にし、ディスクのラベルに「IBM format」あるいは「Mac Format」と明記する。
- \*文書はテキストファイル (plain text file, ASCII file) を原則とし、MS Word や TeX ソースは認めない。
4. 欧文の場合、タイプライターによる投稿も認める。その場合、ダブルスペースでタイプし、イタリック体の箇所には下線をほどこすこと。
5. 表題、執筆者名及びその所属は、別紙に一枚にまとめる。その他の箇所には、執筆者名及び所属を記載しないこと。日本語及び中国語の原稿については、表題の下に欧文訳を必ず添えた上、執筆者名及びその所属を日（または中）欧両文で明記する。
6. 写真、図表などにはキャプションを添え、希望の挿入場所、大きさを指定すること。
7. 特殊字母・符号使用の原稿については、特殊字母・符号の一覧表を別に添えること。
8. 日本語の論文、資料・研究ノートには、500語以内の外国语（英語、フランス語、ドイツ語、中国語）のレジュメを附して、同時提出すること。日本語以外の言語を用いた場合は、500語以内の英文レジュメを附すること。
9. 日本語の論文、資料・研究ノートには、キーワード（日本語と英語それぞれ5語）を附して同時提出のこと。日本語以外（英語、フランス語、ドイツ語、中国語）の場合には、英語5語のキーワードを附すること。
10. 論文、資料・研究ノートの場合、章、節などの目次を本文冒頭にしるす。
11. 注は通し番号にし、番号順にまとめて別冊にする。注の番号は一字分の肩にn)の形で入れる。
12. 他著作を引用・言及する場合、注には下の〔例〕のように著者名、年数、ページ数のみをしるす。  
〔例〕 Sapir 1925, pp.40-41.  
今西 1972, p.25

\*同一著者の著作物が1年に2点以上ある場合  
1975a, 1975bのようにa, bで区別する。

13. 文献名は稿末にまとめて参考文献の一覧をつける。その場合、著者の姓のアルファベット順に列記するか、または文献を言語別に分けてわかりやすく並べる。記載方法は、下記の〔例〕にしたがう。

〔例〕 単行本

Bloomfield, Leonard. 1933. *Language*. New York:  
Henry Holt & Co.

〔例〕 雑誌

前嶋信次 1966 「テリアカ考—文化交流史上から見た一薬品の伝播について」『史学』38-4, pp.1-39.

Sapir, Edward. 1925. "Sound Pattern in Language." *Language*, 1, pp.37-51.

〔例〕 論文集掲載論文

Polanyi, Karl. 1957. "The Economy as Instituted Process." *Trade and Market in the Early Empires* (K. Polanyi, C.W. Arensberg and H.W. Pearson, eds.), pp.243-270, Chicago: The Free Press.

白鳥庫吉 1944 「拂菻問題の新解釈」『白鳥博士記念論文集(東洋学報29-3・4)』pp.407-500, 東洋協会学術調査部

\*同一論文集中の論文を多数引用している場合、その論文集自体を単行本の扱いで見出しとして出し、各論文には次のような要領で論文集を示す方式を取ってもよい。

Polanyi, Karl. 1957. "The Economy as Instituted Process." *Trade and Market in the Early Empires* (K. Polanyi et al. eds.), pp.243-270.

14. 書評・紹介の場合は、本文冒頭に本、論文についてのデータをなるべく詳しくあげる。

〔例〕

Joseph H. Greenberg: *Anthropological Linguistics: An Introduction* (Random House Studies in Anthropology, AS8). New York: Random House, 1968, 212pp., US\$ 3.95.

Muhammad 'Abd al-Qādil: *Ta'rikh al-Yaman al-Qadim* [古代イエメン史], Beirut: al-Mu'assasat al-'Arabiyya li'l-Dirāsāt wa'l-Nashr. 1973, 291 pp., Lira 8.

西田龍雄『緬甸館譯語の研究—ビルマ言語學序説』(華夷譯語研究叢書II)京都松香堂 1972, 394pp. 6,000円

15. 校正は最低限、初校を著者校正とする。なお校正時の手直しは、誤植及び字句の修正にとどめること。

# JOURNAL OF ASIAN AND AFRICAN STUDIES

No.63

## CONTENTS

### Articles

- Traditional Typology Revisited: From the Viewpoint of Isolating Languages ..... MINEGISHI, Makoto 1

- On Endoclitics: Some Facts from Degema ..... KARI, Ethelbert E. 37

- A New Perspective on the Layout of the Taj Mahal  
and the Eschatological Symbolism of the Ahmad Yasawi Shrine ..... YAMADA, Atsumi 55

- The "Alexandria Massacre" Reconsidered ..... KATSUNUMA, Satoshi 81

### Source Materials and Remarks

- M. K. Gandhi, the Japanese and the Sino-Japanese War ..... NARITA, Masao 125

- La situation actuelle du régime de recherches scientifiques au Burkina Faso  
(l'Université de Ouagadougou), au Mali (l'Université du Mali) et au Sénégal  
(Archives du Sénégal): suivie des renseignements chronologiques sur la situation  
politique ivoirienne après le coup du décembre 1999 ..... MAJIMA, Ichiro 175

- Social Conflicts, Resource Distribution and Social Justice in Nigeria ..... UJOMU, Philip Ogo 197

- A Tentative Tonal Analysis of Kuria Verbs ..... YUKAWA, Yasutoshi 229

- Imperfect Form in Egyptian Colloquial Arabic ..... SAKAEDANI, Haruko 265

- 
- Professor Setsuho Ikehata: A Record and a List of Academic Works ..... 303

- Professor Hikoichi Yajima: A Record and Academic Works ..... 311

- Assistant Professor Mikio Mori: A Record and Publications ..... 319

- Professor Masao Narita: A Record and Publication ..... 325
- 

RESEARCH INSTITUTE FOR LANGUAGES  
AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA (ILCAA)



## 投 稿 規 定

1. 原稿の内容は、アジア・アフリカの言語文化研究に学術的に寄与しうるものとします。投稿にあたっては、論文、資料・研究ノート、書評・紹介の区別をしてください。但し、この区分についての最終的な判断は、当編集出版委員会の責任で行います。
2. 投稿された原稿は、レフェリー制度を通じて審査の上、当編集出版委員会が最終的な採否の決定をします。また採否にかかわらず、原則として原稿（フロッピー、図表を含む）は返却しません。
3. 投稿者の資格は、特に制限しません。
4. 原稿の分量は制限しませんが、未発表のものに限りません。
5. 使用言語は、日本語、英語、フランス語、ドイツ語、中国語のいずれかとします。
6. 稿料の支払い、掲載料の徴収は行いません。  
なお、著者に抜刷を50部贈呈します。それ以外にも、あらかじめ注文があれば、実費で作成します。
7. 締切期限は、9月30日（3月31日発行）及び3月31日（9月30日発行）とします。
8. 本誌に発表されたものを転載する場合は、あらかじめ当編集出版委員会にご一報の上、出版物を一部ご寄贈ください。
9. 編集出版委員会は本誌に掲載された全ての原稿を電子化媒体によって複製、公開し、公衆に送信することができるものとします。
10. 連絡先：東京外国语大学  
アジア・アフリカ言語文化研究所  
編集出版委員会  
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1  
電話：042-330-5617  
FAX：042-330-5610  
URL：[http://www\\_aa.tufs.ac.jp](http://www_aa.tufs.ac.jp)  
E-mail：[editcom@aa.tufs.ac.jp](mailto:editcom@aa.tufs.ac.jp)

## アジア・アフリカ言語文化研究 63号

2002年3月31日 印刷発行

発行者：東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所  
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1(電話042-330-5617)

編集者：(編集出版委員会)

内堀基光、小川 了、C. ダニエルス（委員長）、陶安んど、  
高知尾仁（副委員長）、床呂郁哉、豊島正之、永原陽子、羽田  
亨一、星 一泉、三尾裕子、森 幹男、家島彦一（五十音順）

印 刷：株式会社美功社  
〒760-0063香川県高松市多賀町1-8-10

(表紙の題字：津田貞子)